東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

—成田地区—

1985

日本道路公団東京第一建設局
財団法人　千葉県文化財センター

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ

—成田地区—

1985

日本道路公団東京第一建設局
財団法人　千葉県文化財センター

序　　文

下総国は，北方を利根川が東流し，また，台地上からは幾筋かの河川が発達する等，自然環境に恵まれているため，その河川の流域には多くの遺跡が所在しており，古代房総の解明に欠くことの出来ない重要な地域であります。

東関東自動車道（市川～潮来間）は全国的な高速自動車国道網整備の一環として計画されたもので，すでに市川，成田間は新東京国際空港関連区間として供用されております。

ところで，同自動車道は成田，潮来間（30.2 km）の延伸が計画されたため，千葉県教育委員会では，同事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて日本道路公団をはじめ関係機関と協議を重ねた結果，路線の変更等でできるだけ保存の方向をとりましたが，止むを得ず路線内にはいりました遺跡については発掘調査による記録保存の措置をとることで協議が整い，その結果，昭和53年４月より当財千葉県文化財センターが発掘調査を実施することになりました。

調査は年次をおって計画的に実施してまいりましたが，このたび，成田市に所在する７遺跡の調査及び整理作業が終了し，「東関東自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅰ」として報告書を刊行する運びとなりました。

本書に収載した遺跡のうち，妙福寺裏遺跡では，６世紀から９世紀にかけての集落跡や中世砦跡が発見され，円妙寺遺跡では数多くの墨書土器が出土しました。また，推出し古墳では６世紀の前方後円墳，野毛平古墳群では円墳３基，四本木遺跡では縄文時代早期の撚糸文系土器群，稲荷峯遺跡では，縄文時代早期の条痕文系土器群及び住居跡群が調査されました。

本書が学術資料としてはもとより，歴史に対する理解を深める資料として広く活用されることを望む次第です。

最後に，発掘調査から報告書刊行まで，いろいろ御指導いただいた，千葉県教育委員会をはじめ，日本道路公団東京第一建設局，地元関係諸機関各位の御協力にお礼申し上げるとともに，酷暑酷寒の中，調査に協力された多くの調査補助員の皆様に心から謝意を表します。

昭和60年３月

財団法人　千葉県文化財センター

理事長　今　井　　正

凡　　例

1．本書は，日本道路公団東京第一建設局による東関東自動車道建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査報告書である。

2．発掘調査から報告書作成に至る業務は，日本道路公団東京第一建設局の委託を受け文化庁および千葉県教育委員会の指導を受けて，財団法人千葉県文化財センターが行なった。

3．本書に収載された遺跡は，東関東自動車道成田工事区内に所在する，妙福寺裏遺跡，円妙寺遺跡，推出し古墳，野毛平古墳群，瓜生池遺跡，四本木遺跡，稲荷峯遺跡の7遺跡である。

4．整理作業及び報告書の作成作業は，調査部長鈴木道之助，部長補佐根本　弘の指導のもとに，斎木　勝，高橋博文，栗田則久，矢野紀子が行なった。

5．本書の編集は，斎木　勝が担当した。

6．本書の執筆は別記のとおりである。

7．本書に使用した航空写真は，日本道路公団東京第一建設局佐原工事事務所より提供されたものである。

8．第2・3・4図の遺跡位置図は国土地理院発行の5万分の1成田・佐原・潮来を使用した。

9．発掘調査から報告書刊行にいたるまで，千葉県教育委員会をはじめ，日本道路公団東京第一建設局，同佐原工事事務所，成田市教育委員会，日本考古学研究所，また，地元関係諸機関等多くの方々から御指導，助言をいただいた。

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ
―成田地区―

序　文
凡　例
目　次

序　編
第1章　建設計画と遺跡の分布……（斎　木）……1
第1節　建設計画の概要……1
第2節　遺跡の分布……2
第2章　調査の概要……（斎　木）……10
第1節　発掘調査計画と経過の概要……10
第2節　発掘調査組織と体制……16
第3節　調査の方法……18
本　編
成田地区地形概観……（斎　木）……19

妙福寺裏遺跡（No.1）……23
第1章　調査概要……（斎　木）……27
第2章　遺　構……（高　橋）……29
第1節　住居跡……29
第2節　土　坑……80
第3節　掘立柱建物跡……93
第4節　溝状遺構……95
第5節　堀……95
第6節　塚……95
第3章　遺　物……（斎　木）……100
第1節　住居跡出土遺物……100
第2節　土坑出土遺物……133
第3節　溝状遺構出土遺物……133
第4節　堀出土遺物……133

第５節　塚出土遺物……135
第６節　その他の遺物……135
第４章　遺跡総論……140
第１節　集落営為の年代……（斎　木）…140
第２節　集落の構造……（斎　木）…143
第３節　城郭遺構の構造……（高　橋）…149

円妙寺遺跡（№２）……153
第１章　調査概要……（斎　木）…157
第２章　遺　　構……（矢　野）…159
第１節　先土器時代……159
第２節　住居跡……160
第３節　土　坑……177
第４節　溝状遺構……183
第３章　遺　　物……（矢　野）…185
第１節　先土器時代遺物……185
第２節　住居跡出土遺物……188
第３節　土坑出土遺物……209
第４節　グリッド出土遺物……211
第４章　小　　結……（栗　田）…213

推出し古墳（№２－１）……215
第１章　調査概要……（斎　木）…219
第２章　遺　　構……221
第１節　前方後円墳……（栗　田）…221
第２節　先土器時代……（矢　野）…227
第３節　住居跡……（矢　野）…228
第４節　方形周溝遺構……（矢　野）…229
第３章　遺　　物……231
第１節　前方後円墳出土遺物……（栗　田）…231
第２節　先土器時代遺物……（矢　野）…234
第３節　住居跡出土遺物……（矢　野）…234
第４節　方形周溝遺構出土遺物……（矢　野）…236

第5節　包含地出土遺物……（矢　野）……236
第4章　小　　結……（栗　田）……237

野毛平古墳群（No.3）……239
第1章　調査概要……（斎　木）……243
第2章　遺　　構……（斎　木）……245
第1節　古　墳……245
第2節　溝状遺構……247
第3章　遺　　物……253
第1節　古墳出土遺物……（栗　田）……253
第2節　溝状遺構出土遺物……（斎　木）……253
第3節　包含地出土遺物……（斎　木）……253

瓜生池遺跡（No.4）……259
第1章　調査概要……（斎　木）……263
第2章　遺　　構……（斎　木）……265
第1節　先土器時代……265
第2節　溝状遺構……265
第3章　遺　　物……（斎　木）……272

四本木遺跡（No.5）……273
第1章　調査概要……（斎　木）……277
第2章　遺　　構……（斎　木）……279
第1節　先土器時代……279
第2節　縄文時代……279
第3節　歴史時代……282
第3章　遺　　物……（斎　木）……285
第1節　先土器時代遺物……285
第2節　縄文時代遺物……292
第3節　住居跡出土遺物……297

稲荷峯遺跡（No.6）……299
第1章　調査概要……（斎　木）……304

第2章　遺　　構……（斎　木）……307
第1節　住居跡……307
第2節　縄文時代遺物包含層……316
第3章　遺　　物……（斎　木）……319
第1節　住居跡出土遺物……319
第2節　縄文時代遺物……325

結　　語……（斎　木）……335

挿 図 目 次

第 1 図　東関東自動車道路線図 …… 1
第 2 図　遺跡位置図（遺跡No.1～No.12） …… 3
第 3 図　遺跡位置図（遺跡No.13～No.32） …… 4
第 4 図　遺跡位置図（遺跡No.33～No.52） …… 5
第 5 図　路線縦断面図 …… 6
第 6 図　遺跡周辺図（1/20,000） …… 20
第 7 図　遺跡周辺図（1/20,000） …… 21
第 8 図　妙福寺裏遺跡周辺地形図（1/3,000） …… 25
第 9 図　妙福寺裏遺跡地形図（1/1,500） …… 26
第 10 図　妙福寺裏遺跡調査グリット設定図 …… 27
第 11 図　妙福寺裏遺跡遺構分布状況図（1/800） …… 28
第 12 図　002号，003号住居跡実測図 …… 29
第 13 図　004A・B号住居跡実測図 …… 31
第 14 図　005号，006号住居跡実測図 …… 32
第 15 図　007A・B・C・D・E号住居跡実測図 …… 34
第 16 図　008号，009号住居跡実測図 …… 35
第 17 図　010号住居跡実測図 …… 37
第 18 図　011号，012号住居跡実測図 …… 38
第 19 図　013号住居跡実測図 …… 39
第 20 図　014号，015号，016号住居跡実測図 …… 41
第 21 図　014号住居跡遺物出土状況 …… 42
第 22 図　017A・B・C号住居跡実測図 …… 44
第 23 図　018号，019号，020号，021A・B号住居跡実測図 …… 45
第 24 図　022A・B・C号住居跡実測図 …… 47
第 25 図　023A・B号，024号，025号，026号住居跡実測図 …… 49
第 26 図　027号，028号，029号住居跡実測図 …… 51
第 27 図　031号，032号，033号住居跡実測図 …… 53
第 28 図　034A・B号住居跡実測図 …… 54
第 29 図　034A号住居跡遺物出土状況 …… 55
第 30 図　034C号，035A号住居跡実測図 …… 57

第 31 図　036号，037号，038号住居跡実測図……58
第 32 図　039号住居跡実測図……60
第 33 図　040号，041号住居跡実測図 ……61
第 34 図　042号，043号，044号住居跡実測図……63
第 35 図　043号カマド，045号住居跡実測図 ……64
第 36 図　046号，047号住居跡実測図 ……66
第 37 図　046号住居跡遺物出土状況（1）……67
第 38 図　046号住居跡遺物出土状況（2）……68
第 39 図　048号，049号住居跡実測図 ……69
第 40 図　050号住居跡実測図……70
第 41 図　051号住居跡実測図……71
第 42 図　052A・B号住居跡実測図……73
第 43 図　053A・B号住居跡実測図……74
第 44 図　054A・B・C号住居跡実測図……76
第 45 図　055号，056号，057号住居跡実測図……77
第 46 図　201号，202号，203号，204号，205号土坑実測図……81
第 47 図　206号，207号，208号，209号，210号，211号，212号土坑実測図……82
第 48 図　213号，214号，215号，221号，222号土坑実測図……84
第 49 図　216号，217号，218号，219号，220号，234号，236号土坑実測図……85
第 50 図　224号，225号，226号土坑実測図……86
第 51 図　227号，230号，231号，233号土坑実測図 ……88
第 52 図　223号，229号，232号土坑実測図……89
第 53 図　237号，238号，239号，240号，241号土坑実測図……90
第 54 図　242号，243号，244号土坑実測図……91
第 55 図　245号，246号土坑実測図 ……92
第 56 図　301号，302号，303号，304号，305号掘立柱建物跡実測図……94
第 57 図　001号，030号遺構実測図 ……96
第 58 図　堀実測図 ……97
第 59 図　堀断面図 ……98
第 60 図　塚実測図，断面図 ……99
第 61 図　002号，004A・B号，005号，006号住居跡出土遺物実測図 ……101
第 62 図　007A・B・C・D・E号住居跡出土遺物実測図……103
第 63 図　008号，009号，010号，011号，013号住居跡出土遺物実測図……104

第 64 図　014号住居跡出土遺物実測図……106
第 65 図　015号，016号住居跡出土遺物実測図 ……107
第 66 図　017Ａ号住居跡出土遺物実測図（１）……108
第 67 図　017Ａ号住居跡出土遺物実測図（２）……109
第 68 図　018号，019号，021Ｂ号，022Ａ号住居跡出土遺物実測図 ……110
第 69 図　022Ｂ号，026号，027号，028号住居跡出土遺物実測図 ……112
第 70 図　029号，032号，033号住居跡出土遺物実測図……113
第 71 図　034Ａ号住居跡出土遺物実測図（１）……114
第 72 図　034Ａ号住居跡出土遺物実測図（２）……115
第 73 図　034Ｂ号住居跡出土遺物実測図……116
第 74 図　034Ｃ号，035Ａ号住居跡出土遺物実測図 ……117
第 75 図　035Ｂ号，036号，039号，040号住居跡出土遺物実測図 ……119
第 76 図　042号，043号住居跡出土遺物実測図 ……120
第 77 図　044号，045号住居跡出土遺物実測図 ……122
第 78 図　046号住居跡出土遺物実測図（１）……123
第 79 図　046号住居跡出土遺物実測図（２）……124
第 80 図　046号住居跡出土遺物実測図（３）……125
第 81 図　046号住居跡出土遺物実測図（４）……126
第 82 図　047号，048号，049号住居跡出土遺物実測図……128
第 83 図　051号，052Ａ・Ｂ号住居跡出土遺物実測図 ……129
第 84 図　053Ａ号，054Ａ号住居跡出土遺物実測図 ……130
第 85 図　054Ｂ・Ｃ号，055号，056号，057号住居跡出土遺物実測図 ……132
第 86 図　土坑，溝状遺構，堀，塚出土遺物実測図 ……134
第 87 図　石器実測図 ……136
第 88 図　支脚実測図 ……137
第 89 図　石造物実測図 ……138
第 90 図　古銭拓影図 ……139
第 91 図　グリット出土，表採遺物実測図 ……139
第 92 図　妙福寺裏遺跡集落変遷図（前期）（１/1,600）……146
第 93 図　妙福寺裏遺跡集落変遷図（後期）（１/1,600）……147
第 94 図　妙福寺裏遺跡住居変遷図 ……148
第 95 図　小菅城跡遺構関連図（１/2,000）……151
第 96 図　円妙寺遺跡周辺地形図（１/3,000）……155

第 97 図　円妙寺遺跡地形図（1 /1,500）……156
第98 図　円妙寺遺跡グリット設定図 ……157
第 99 図　円妙寺遺跡遺構分布状況図（1 /800）……158
第100図　先土器時代石器出土状況図 ……159
第101図　001号住居跡実測図……161
第102図　002号住居跡実測図……162
第103図　003号，004号住居跡実測図 ……164
第104図　005号，006号，007号住居跡実測図……166
第105図　008号，009号住居跡実測図 ……168
第106図　010号住居跡実測図……170
第107図　011号，012号住居跡実測図 ……172
第108図　013号，014号住居跡実測図 ……174
第109図　015号，016号住居跡実測図 ……176
第110図　101号～106号土坑実測図 ……178
第111図　107号～111号土坑実測図 ……180
第112図　112号～119号土坑実測図 ……182
第113図　溝1，2実測図 ……184
第114図　石器実測図（1） ……186
第115図　石器実測図（2） ……187
第116図　001号住居跡出土遺物実測図……189
第117図　002号住居跡出土遺物実測図……191
第118図　002号，003号住居跡出土遺物実測図 ……192
第119図　004号，005号，006号住居跡出土遺物実測図……194
第120図　007号，008号，009号住居跡出土遺物実測図……196
第121図　010号住居跡出土遺物実測図……199
第122図　010号住居跡出土遺物実測図……200
第123図　010号住居跡出土遺物実測図……201
第124図　010号，011号住居跡出土遺物実測図 ……202
第125図　012号，013号住居跡出土遺物実測図 ……203
第126図　014号，015号，016号住居跡出土遺物実測図……205
第127図　住居跡出土土製品実測図 ……207
第128図　住居跡出土銅製品，鉄製品，石製品実測図 ……208
第129図　102号，104号，105号，106号，111号土坑出土遺物実測図……210

第130図　グリット出土遺物実測図 ……211
第131図　推出し古墳周辺地形図（1/1,500） ……217
第132図　推出し古墳地形図（1/800） ……218
第133図　推出し古墳遺構分布状況図（1/400） ……220
第134図　推出し1号墳墳丘実測図 ……223
第135図　推出し1号墳墳丘断面図 ……224
第136図　推出し1号墳墳丘（表土除去後）周溝実測図 ……225
第137図　推出し1号墳主体部実測図 ……226
第138図　先土器時代石器出土状況図 ……227
第139図　002号，003号住居跡実測図 ……229
第140図　001号跡（方形周溝遺構）実測図……230
第141図　推出じ1号墳主体部出土遺物実測図 ……231
第142図　推出し1号墳墳丘，周溝出土遺物実測図 ……233
第143図　出土石器実測図 ……234
第144図　001号跡（方形周溝遺構），002号，003号住居跡，包含地出土遺物実測図 ……235
第145図　野毛平古墳群周辺地形図（1/3,000） ……241
第146図　野毛平古墳群地形図（1/1,500） ……242
第147図　野毛平古墳群遺構分布図（1/800） ……243
第148図　地形測量図（1/400） ……244
第149図　001号墳実測図……246
第150図　001号墳遺物出土平面図（1/160） ……247
第151図　002号，003号墳実測図（1/200） ……248
第152図　002号，003号墳土層断面図（1/160） ……249
第153図　002号，003号墳遺物出土平面図（1/160） ……250
第154図　004号跡平面図（1）（1/160） ……251
第155図　004号跡平面図（2）（1/160） ……252
第156図　古墳出土遺物実測図 ……254
第157図　溝状遺構出土遺物実測図 ……255
第158図　出土遺物実測図 ……255
第159図　出土遺物実測図，拓影図 ……256
第160図　瓜生池遺跡周辺地形図（1/3,000） ……261
第161図　瓜生池遺跡地形図（1/1,500） ……262
第162図　瓜生池遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図 ……264

第163図　先土器時代遺物出土平面図 ……265
第164図　溝状遺構群実測図 ……267
第165図　001号，002号溝状遺構実測図 ……268
第166図　003号，004号溝状遺構実測図 ……269
第167図　005号，006号溝状遺構実測図 ……270
第168図　007号，008号溝状遺構実測図 ……271
第169図　石器実測図 ……272
第170図　出土遺物実測図 ……272
第171図　四本木遺跡周辺地形図（1/3,000） ……275
第172図　四本木遺跡地形図（1/1,500） ……276
第173図　四本木遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図 ……278
第174図　先土器時代遺物出土平面図 ……279
第175図　先土器時代遺物出土平面図 ……280
第176図　先土器時代遺物出土平面図 ……281
第177図　遺物出土平面図 ……282
第178図　撚糸文系土器群出土平面図 ……283
第179図　001号住居跡実測図 ……284
第180図　先土器時代遺物実測図 ……285
第181図　先土器時代遺物実測図 ……286
第182図　先土器時代遺物実測図 ……287
第183図　先土器時代遺物実測図 ……288
第184図　先土器時代遺物実測図 ……289
第185図　先土器時代遺物実測図 ……290
第186図　先土器時代遺物実測図 ……291
第187図　出土遺物実測図 ……292
第188図　縄文土器拓影図 ……293
第189図　縄文土器拓影図，石器実測図 ……295
第190図　001号住居跡出土遺物実測図 ……297
第191図　稲荷峯遺跡周辺地形図（1/3,000） ……301
第192図　稲荷峯遺跡地形図（1）（1/1,500） ……302
第193図　稲荷峯遺跡地形図（2）（1/1,500） ……303
第194図　稲荷峯遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図（1） ……305
第195図　稲荷峯遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図（2） ……306

第196図　001号，002号，003号住居跡実測図……308
第197図　004号，005号，006号住居跡実測図……310
第198図　007号，008号，009号，011号，012号，013号住居跡実測図……313
第199図　014号，015号，016号住居跡実測図……315
第200図　縄文時代遺物出土平面図……317
第201図　縄文時代遺物出土平面図……318
第202図　住居跡出土縄文土器実測図，拓影図……319
第203図　住居跡出土縄文土器拓影図……321
第204図　住居跡出土石器実測図……322
第205図　住居跡出土石器実測図……323
第206図　グリット出土縄文土器拓影図（1）……326
第207図　グリット出土縄文土器拓影図（2）……327
第208図　グリット出土縄文土器拓影図（3）……328
第209図　グリット出土縄文土器拓影図（4）……330
第210図　縄文土器実測図，拓影図……332
第211図　石器実測図……333

表　目　次

第1表　遺跡の立地と水系……6
第2表　遺跡調査表……7
第3表　妙福寺裏遺跡住居跡調査表……78
第4表　円妙寺遺跡住居跡調査表……175
第5表　石器計測表……188
第6表　縄文石器計測表……257
第7表　瓜生池遺跡遺構調査表……266
第8表　先土器時代，他・石器計測表……295
第9表　稲荷峯遺跡住居跡調査表……316
第10表　住居跡出土縄文石器計測表……324
第11表　縄文石器計測表……332

図 版 目 次

図版 1　妙福寺裏遺跡
遺跡航空写真
図版 2　妙福寺裏遺跡
1．遺跡遠景
2．遺跡近景
図版 3　妙福寺裏遺跡
1．確認トレンチ
2．グリット層位
図版 4　妙福寺裏遺跡
1．002号住居跡
2．003号住居跡
図版 5　妙福寺裏遺跡
1．004A・B号住居跡
2．005号住居跡
図版 6　妙福寺裏遺跡
1．006号住居跡
2．007A・B・C・D・E号住居跡
図版 7　妙福寺裏遺跡
1．008号住居跡
2．010号住居跡
図版 8　妙福寺裏遺跡
1．011号住居跡
2．013号住居跡
図版 9　妙福寺裏遺跡
1．014号住居跡
2．015号住居跡
図版10　妙福寺裏遺跡
1．016，017A・B・C号住居跡
2．018号住居跡
図版11　妙福寺裏遺跡
1．019号住居跡
2．020号住居跡
図版12　妙福寺裏遺跡
1．021A・B住居跡
2．022A号住居跡
図版13　妙福寺裏遺跡
1．022B・C号住居跡
2．022B号住居跡遺物出土状況
図版14　妙福寺裏遺跡
1．023A・B号住居跡
2．024号住居跡
図版15　妙福寺裏遺跡
1．025号住居跡
2．026号住居跡
図版16　妙福寺裏遺跡
1．027号住居跡
2．028号住居跡
図版17　妙福寺裏遺跡
1．029号住居跡
2．031号住居跡
図版18　妙福寺裏遺跡
1．032号住居跡
2．033号住居跡
図版19　妙福寺裏遺跡
1．034A号住居跡
2．034A号住居跡遺物出土状況
図版20　妙福寺裏遺跡
1．034B・C号住居跡
2．035A号住居跡
図版21　妙福寺裏遺跡

1．036号住居跡
2．037号住居跡
図版22　妙福寺裏遺跡
1．038号住居跡
2．039号住居跡
図版23　妙福寺裏遺跡
1．040号住居跡
2．041号住居跡
図版24　妙福寺裏遺跡
1．042，043，044号住居跡遺物出土状況
2．042，043，044号住居跡
図版25　妙福寺裏遺跡
1．045，046，047号住居跡
2．046号住居跡遺物出土状況
図版26　妙福寺裏遺跡
1．048，049号住居跡
2．049号住居跡遺物出土状況
図版27　妙福寺裏遺跡
1．050号住居跡
2．051号住居跡
図版28　妙福寺裏遺跡
1．052A・B号住居跡
2．053A・B号住居跡
図版29　妙福寺裏遺跡
1．054A・B号住居跡
2．054B・C号住居跡
図版30　妙福寺裏遺跡
1．055号住居跡
2．056号住居跡
図版31　妙福寺裏遺跡
1．057号住居跡
2．201号土坑
図版32　妙福寺裏遺跡
1．205号土坑
2．206～214号土坑
図版33　妙福寺裏遺跡
1．233号土坑
2．土坑群（221～231）
3．堀断面（A～B）
4．堀断面（C～D）
図版34　妙福寺裏遺跡
1．001号遺構
2．030号遺構
図版35　妙福寺裏遺跡
1．堀，北西側
2．堀，南側
図版36　妙福寺裏遺跡
1．堀，中央
2．堀，北側
図版37　妙福寺裏遺跡
1．塚近景
2．塚断面
図版38　妙福寺裏遺跡
カマド状況（004B・007A・011・013・014・015・017A・021B号住居跡）
図版39　妙福寺裏遺跡
カマド状況（022A・022B・025・034A・034B・039・040・041号住居跡）
図版40　妙福寺裏遺跡
カマド状況，遺物出土状況（043・046・049・052A・004・006・007D・017A（貯蔵穴）号住居跡）
図版41　妙福寺裏遺跡
遺物出土状況（022B・023D・033・056号住居跡）（216・217・218・225号土坑）
図版42　妙福寺裏遺跡

出土遺物（002・004B・005号住居跡）
図版43　妙福寺裏遺跡
出土遺物（007A・007D・007E・011・014号住居跡）
図版44　妙福寺裏遺跡
出土遺物（015・017A・018・019・021・022A号住居跡）
図版45　妙福寺裏遺跡
出土遺物（022A・022B・026・027・028号住居跡）
図版46　妙福寺裏遺跡
出土遺物（028・029・032・033号住居跡）
図版47　妙福寺裏遺跡
出土遺物（034A・034B号住居跡）
図版48　妙福寺裏遺跡
出土遺物（034C・035B・036・039・040・042号住居跡）
図版49　妙福寺裏遺跡
出土遺物（044・045・046号住居跡）
図版50　妙福寺裏遺跡
出土遺物（046号住居跡）
図版51　妙福寺裏遺跡
出土遺物（046号住居跡）
図版52　妙福寺裏遺跡
出土遺物（047・048・049号住居跡）
図版53　妙福寺裏遺跡
出土遺物（051・052A・053A・054A号住居跡）
図版54　妙福寺裏遺跡
出土遺物（054A・054B・054C・056・057号住居跡）
図版55　妙福寺裏遺跡
1．鉄製品
2．紡錘車・土玉
図版56　妙福寺裏遺跡
石製品・支脚
図版57　妙福寺裏遺跡
1．石造物
2．古銭
図版58　円妙寺遺跡
1．遺跡遠景
2．遺跡近景
図版59　円妙寺遺跡
1．層序（G5－10）
2．石器出土状況
図版60　円妙寺遺跡
1．001号住居跡
2．002号住居跡
図版61　円妙寺遺跡
1．003号住居跡
2．004号住居跡
図版62　円妙寺遺跡
1．005号住居跡
2．006号住居跡
図版63　円妙寺遺跡
1．007号住居跡
2．008号住居跡遺物出土状況
図版64　円妙寺遺跡
1．008号住居跡
2．009号住居跡
図版65　円妙寺遺跡
1．010号住居跡遺物出土状況
2．010号住居跡
図版66　円妙寺遺跡
1．011号住居跡
2．012号住居跡

図版67　円妙寺遺跡
1．013号住居跡
2．014号住居跡
図版68　円妙寺遺跡
1．015号住居跡
2．016号住居跡
図版69　円妙寺遺跡
カマド状況（001・002・003・004・005号住居跡），（遺物出土状況（001・002・003号住居跡）
図版70　円妙寺遺跡
カマド状況（007・009・010・012・013号住居跡），遺物出土状況（010号住居跡）
図版71　円妙寺遺跡
カマド状況（013・014・015号住居跡）
遺物出土状況（013・016号住居跡）
図版72　円妙寺遺跡
土坑（101・102・103・104・105・106・107・108号土坑）
図版73　円妙寺遺跡
土坑（109・110・111・113・114・115・116・117号土坑）
図版74　円妙寺遺跡
石器
図版75　円妙寺遺跡
出土土器（001・002・003・005号住居跡）
図版76　円妙寺遺跡
出土土器（003・007・008・009・010号住居跡）
図版77　円妙寺遺跡
出土土器（010号住居跡）
図版78　円妙寺遺跡
出土土器（010・013号住居跡）
図版79　円妙寺遺跡
出土土器（013・014・015・016号住居跡，106・111号土坑）
図版80　円妙寺遺跡
住居跡出土墨書土器
図版81　円妙寺遺跡
住居跡・グリット出土墨書土器
図版82　円妙寺遺跡
土製品
図版83　円妙寺遺跡
1．銅製品，鉄製品
2．石製品
図版84　推出し古墳
1．遺跡遠景
2．遺跡近景
図版85　推出し古墳
1．表土除去後全景
2．調査終了後全景
図版86　推出し古墳
1．主体部確認状況
2．主体部全景
図版87　推出し古墳
1．主体部遺物出土状況
2．主体部掘り方全景
3～8．墳丘断面
図版88　推出し古墳
1．002号住居跡
2．003号住居跡
図版89　推出し古墳
カマド状況（002・003号住居跡）
遺物出土状況（002号住居跡）
001号跡（方形周溝遺構）
図版90　推出し古墳

1．主体部出土鉄製品
2．墳丘・周溝出土土器
図版91　推出し古墳
1．2．住居跡出土土器（002・003号住居跡）
3．方形周溝遺構出土土器
4．出土石器
図版92　野毛平古墳群
1．遺跡近景
2．002号墳近景
図版93　野毛平古墳群
1．トレンチ設定状況
2．完掘状況
図版94　野毛平古墳群
1．E 3 区断面
2．001号墳
図版95　野毛平古墳群
002号墳遺物出土状況
図版96　野毛平古墳群
1．002号墳北側周溝
2．002号，003号墳周溝
図版97　野毛平古墳群
1．002号，003号墳発掘状況
2．002号，003号墳全景
図版98　野毛平古墳群
溝状遺構
図版99　野毛平古墳群
溝状遺構西側斜面
図版100　野毛平古墳群
出土遺物（001・002・003号墳，004号跡）
図版101　野毛平古墳群
1．石器群，他
2．土器
図版102　瓜生池遺跡
1．遺跡近景
2．E 4 区断面
図版103　瓜生池遺跡
1．D 6 区先土器時代遺物出土状況
2．溝状遺構近景
図版104　瓜生池遺跡
1．001号部分
2．002号部分
図版105　瓜生池遺跡
1．002号Aポイント寄り断面
2．002号断面
図版106　瓜生池遺跡
1．003号断面
2．004号，E・F断面
図版107　瓜生池遺跡
1．004号部分
2．005号部分
図版108　瓜生池遺跡
005号断面
図版109　瓜生池遺跡
006号断面
図版110　瓜生池遺跡
007号断面
図版111　瓜生池遺跡
1．008号断面
2．008号C・D断面
3．出土遺物
図版112　四本木遺跡
1．遺跡遠景
2．確認トレンチ
図版113　四本木遺跡
1．E 2－32グリット断面

2．E 2 区先土器時代遺物出土状況
図版114　四本木遺跡
B 3 区先土器時代遺物出土状況
図版115　四本木遺跡
1．B 3 区先土器時代遺物出土状況
2．E 2 区先土器時代遺物出土状況
図版116　四本木遺跡
1．001号住居跡
2．001号住居跡炭化材検出状況
図版117　四本木遺跡
先土器時代出土石器
図版118　四本木遺跡
先土器時代・グリット出土石器
図版119　四本木遺跡
先土器時代出土石器
図版120　四本木遺跡
グリット出土縄文土器
図版121　稲荷峯遺跡
1．遺跡近景
2．C 3 区断面
図版122　稲荷峯遺跡
1．D 3 区住居跡群（001～005）
2．D 3 区住居跡群（001～005，008）
図版123　稲荷峯遺跡
1．001A 号住居跡
2．001A・B号住居跡
図版124　稲荷峯遺跡
1．002号住居跡
2．003号住居跡
図版125　荷峯遺跡
1．004号住居跡
2．005号住居跡
図版126　稲荷峯遺跡
1．005号住居跡断面
2．006号住居跡
図版127　稲荷峯遺跡
1．007号住居跡
2．008号住居跡
図版128　稲荷峯遺跡
1．009号住居跡
2．011号住居跡
図版129　稲荷峯遺跡
1．012号住居跡
2．013号住居跡
図版130　稲荷峯遺跡
1．014号住居跡
2．015号住居跡
図版131　稲荷峯遺跡
1．016号住居跡
2．J 3—02グリット遺物出土状況
図版132　稲荷峯遺跡
1．I 4区遺物出土状況
2．M 1，M 2 区遺物出土状況
図版133　稲荷峯遺跡
出土土器（004号住居跡）
図版134　稲荷峯遺跡
出土土器（005号住居跡）
図版135　稲荷峯遺跡
出土石器（003・004・012・015・016号住居跡）
図版136　稲荷峯遺跡
グリット出土土器
図版137　稲荷峯遺跡
グリット出土土器
図版138　稲荷峯遺跡
グリット出土土器

図版139　稲荷峯遺跡
　グリット出土土器
図版140　稲荷峯遺跡
　グリット出土土器
　石器群（住居跡，グリット）
図版141　稲荷峯遺跡
　グリット出土石器

序　　編

第1章　建設計画と遺跡の分布

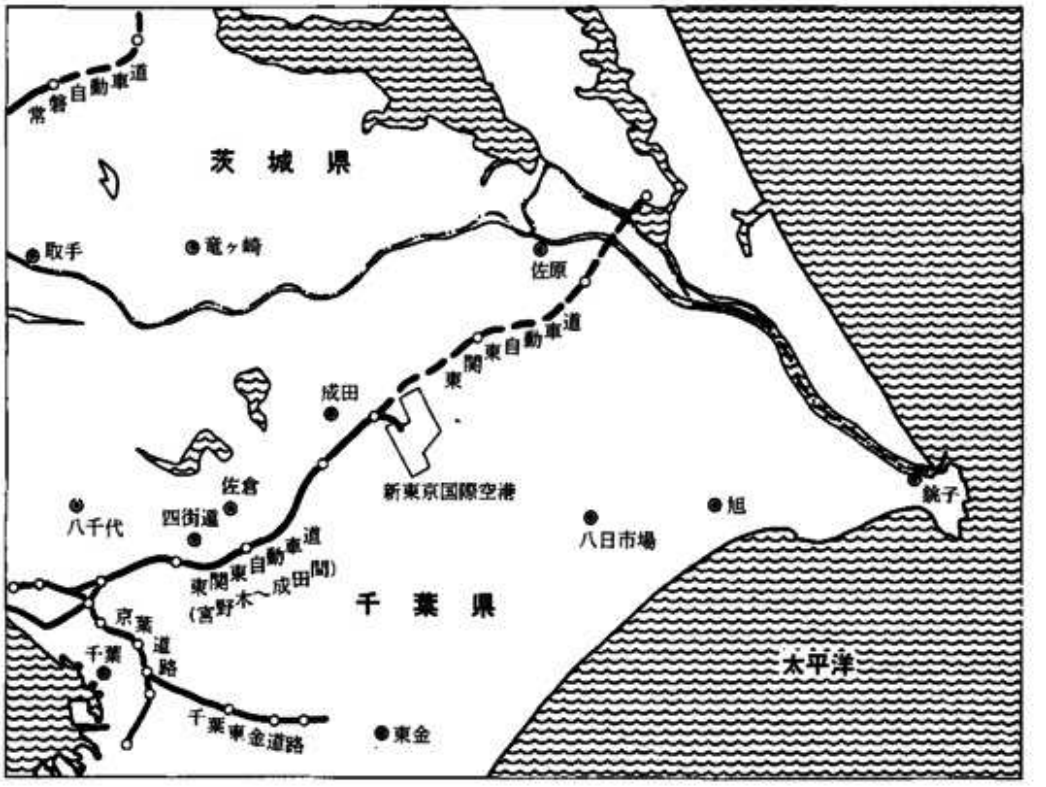
第1節　建設計画の概要

東関東自動車道（市川・潮来線）（第1図）

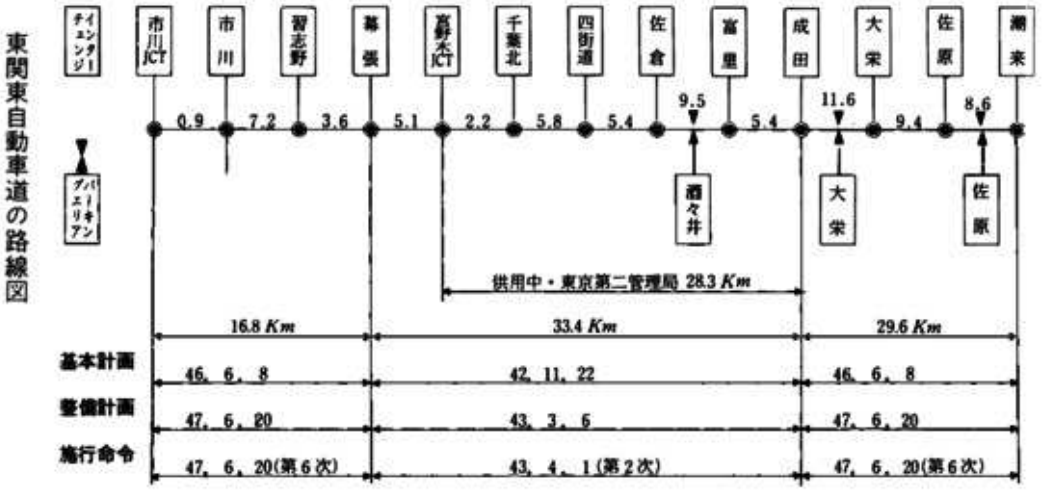
東関東自動車道は「国土開発幹線自動車道建設法」に基づく 7600 km の高速自動車国道網の一環として建設されるものであり，市川ジャンクション（千葉県市川市）を起点とし，潮来インターチェンジ（茨城県潮来町）に至る延長 75 km の高速自動車道である。

当道路は昭和46年6月8日に市川～千葉間 16.8 km，成田～潮来間 30.2 km の基本計画が告示され，つづいて翌年6月20日に整備計画が決定と同時に日本道路公団へ施行命令が発せられた。なお，宮野木ジャンクション（千葉県千葉市）から成田ジャンクション（千葉県成田市）までの 28.3 km については，新空港関連区間でもあり，すでに昭和47年8月から供用されている。

今回，埋蔵文化財調査の対象とする区間はすでに供用中の新東京国際空港線の分岐点成田インターチェンジから，潮来インターチェンジまでの 30.2 km 間である。



第1図　東関東自動車道路線図



施工区間

（自）千葉県成田市大字山ノ作字供養塚から，（至）茨城県行方郡潮来町大字延方まで，

総延長　30.2 km

土工	22.8 km
橋梁	7.4 km

通過市町村

千葉県成田市	5.7 km
香取郡大栄町	7.7 km
佐原市	14.4 km
茨城県行方郡潮来町	2.3 km

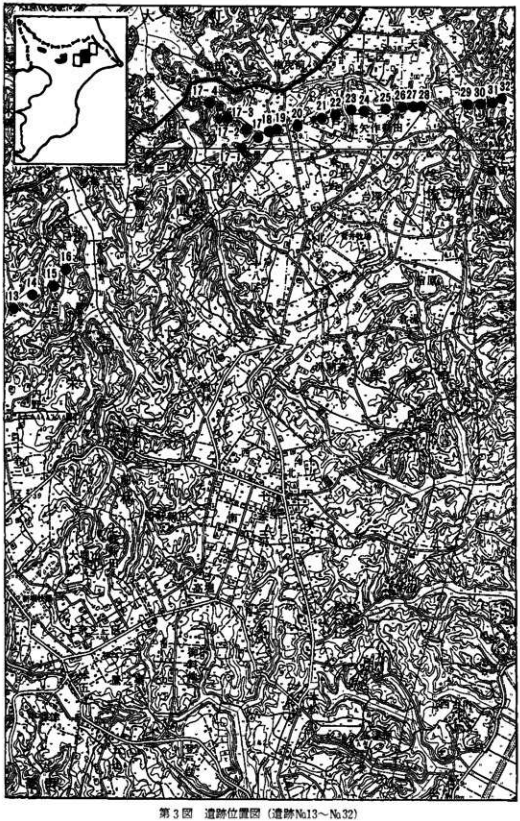
第2節　遺跡の分布（第2，3，4図）

東関東自動車道の千葉県側の建設予定地 27.3 km のあいだには，踏査の結果，57遺跡が確認され，調査対象面積は342.069m²に及んだ。その多くは，縄文土器，土師器を含んだ包含地であったが，古墳8基，塚7基，馬土手2ケ所（340m）も確認された。

行政区画上でみると，成田市は7遺跡，調査対象面積48,060m²，古墳3基，塚1基，香取郡大栄町は20遺跡，140,595m²，塚3基，佐原市は30遺跡，153,414m²，古墳5基，塚3基が分布している。

樹枝状に開析された北総台地は，水系の面からいくつかの群に分けられる。東関東自動車道の建設予定地に限ってみれば，まず成田地区には利根川に流入する根木名川水系がある。根木名川は成田市の中央を北流し，市域のかなりな面積を流域としている。この右岸には北より尾羽根川，荒海川，取香川がそれぞれ支谷を刻んでいる。

第2図　遺跡位置図(遺跡No.1～No.12)

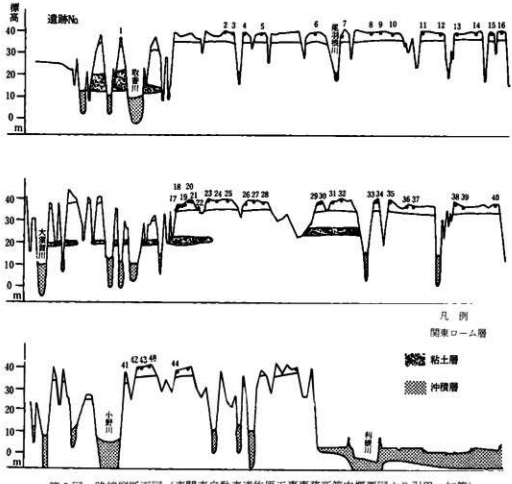


第３図　遺跡位置図（遺跡№13～№32）

第４図　遺跡位置図（遺跡No.33～No.52）

第1表　遺跡の立地と水系

水　　系	支　　谷	遺　跡　番　号　No.
根木名川水系	取香川支谷	1，2，2－1
	荒海川支谷	3，4，5
	尾羽根川支谷	6，7，8，9
大須賀川水系	大須賀川支谷	10, 11, 12, 13, 14, 15, 16
	下田川支谷	17, 17－1，2，3，4，18, 19
栗山川水系	栗山川支谷	20, 21, 22, 23, 24, 25, 26, 27, 28, 29, 30, 31, 32
小野川水系	小野川支谷	33～43，53
根本川水系	根本川支谷	44, 45, 48～52
利根川水系		46, 47



第5図　路線縦断面図（東関東自動車道佐原工事事務所管内概要図より引用，加筆）

大栄地区は大須賀川水系がある。大栄町の前林地区を水源にして北流し佐原市街で利根川に流入する。大栄町の１部と佐原市矢作地区が太平洋九十九里浜に流下する栗山川水系に属する。

佐原市は利根川岸に発達した商業都市であり，河川から多くの恩恵を受けた都市である。佐原地区は，その市域の大部分が小野川水系にはいる。小野川は他に比べ長さは短かいが多くの支谷が発達しており，その流域面積は多く，豊かな沖積地を形成している。

佐原市の香取地区は台地が発達しており，根本川という小河川が利根川に流入しており，そこには小支谷が発達している。

第２表　遺　跡　調　査　表

事業番号	遺跡名	遺跡コード	所在地	調査対象	調査年月日	調査担当者	時代
No 1	妙福寺裏遺跡	211-019	成田市 大山字天神台92他	塚１基 6,400㎡	56.7.1～ 56.12.25	高橋傳，岸本 羽二生，萩原， 石井	古墳時代後期・ 平安・中世
2	円妙寺遺跡	020	成田市 十余三字円妙寺30-１他	8,900㎡のうち 2,000㎡	57.12.16～ 58.2.15	羽二生，岡田	縄文中期・平安 時代
2	円妙寺遺跡 （二次）	020	成田市 十余三字円妙寺30-１他	8,900㎡のうちのこり6,900㎡	59.1.4～ 59.3.31	栗田，矢野	縄文中期・平安 時代
2-1	円妙寺遺跡 （推出し古墳）	031	成田市 野毛平字推出し917-１他	古墳１基 1,000㎡	58.11.1～ 58.12.24	栗田，矢野	古墳時代後期・ 平安
3	野毛平古墳群	010	成田市 十余三字瓜生池	古墳３基 2,000㎡	53.7.24～ 53.10.31	高橋傳，斎木	古墳時代後期
4	瓜生池遺跡	012	成田市 十余三字瓜生池59-85他	9,900㎡のうち 19,80㎡(20%)	55.4.1～ 55.6.27	斎木，奥田	先土器・近代？
5	四本木遺跡	009	成田市 十余三字四本木	5,160㎡	53.5.10～ 53.7.20	高橋傳， 斎木	古墳時代後期
6	稲荷峯遺跡	013	成田市 十余三字稲荷峯115-１他	15,700㎡	55.6.30～ 55.9.30	斎木，奥田	縄文早期・中 期・中世
7	大安場遺跡	343-011	香取郡大栄町 吉岡字大安場1321-1他	4,730㎡のうち 946㎡(20%)	57.1.7～ 57.1.30	斎木，岸本	縄文
8	来光台第１遺跡	012	香取郡大栄町 吉岡字来光台1171-１他	6,210㎡のうち 1,250㎡(20%)	56.11.16～ 56.12.16	池田，岸本	縄文
9	来光台第２遺跡	013	香取郡大栄町 吉岡字来光台1148-１他	6,900㎡のうち 1,380㎡(20%)	56.11.19～ 56.12.16	池田，岸本	縄文
10	来光台第３遺跡	014	香取郡大栄町 吉岡字来光台1119-１他	6,800㎡のうち 1,360㎡(20%)	56.9.16～ 56.10.16	鈴木，池田， 岸本	縄文
11	新堀第１遺跡	006	香取郡大栄町 吉岡字新堀559-１他	6,610㎡のうち 1,322㎡(20%)	55.8.1～ 55.9.15	高橋傳， 岸本	先土器
12	新堀第２遺跡	007	香取郡大栄町 吉岡字新堀557-６他	4,600㎡のうち 920㎡(20%)	55.9.13～ 55.11.28	高橋傳， 岸本	先土器
13	新林大富遺跡	008	香取郡大栄町 吉岡字新林大富328-１他	14,300㎡のうち 2,860㎡(20%)	55.12.2～ 56.2.28	高橋傳， 岸本	縄文早期・中期
14	花立台遺跡	009	香取郡大栄町 臼作字花立台520-66他	17,600㎡のうち 3,520㎡(20%)	56.2.2～ 56.3.31	高橋傳， 岸本	縄文
15	新山台遺跡	010	香取郡大栄町 臼作字新山台117-12他	4,900㎡	55.10.1～ 56.2.10	斎木，奥田， 岸本	先土器・縄文前 期・中期・平安
16	ウツギサク遺跡	015	香取郡大栄町 臼作字ウツギサク505-1他	7,500㎡のうち 1,500㎡ (20%)	56.4.1～ 56.5.23	池田，羽二生	縄文
17	多々羅堂遺跡 （一次）	002	香取郡大栄町 南敷字多々羅堂432他	10,000㎡ 1,000㎡(10%)	54.8.29～ 55.1.31	高橋傳， 斎木，岸本	弥生・平安
	多々羅堂遺跡 （二次）	002	香取郡大栄町南敷字多々羅堂432他	10,000㎡のうち 1,000㎡ (10%)	55.6.16～ 55.7.31	高橋傳， 斎木，岸本	弥生・平安

事業番号	遺跡名	遺跡コード	所在地	調査対象	調査年月日	調査担当者	時代
17-1	弥右エ門遺跡	003	香取郡大栄町 馬乗里字孫弥エ門570-8他	8,000㎡のうち 1,600㎡ (20%)	54.8.29～55.1.31	高橋(健), 斎木	先土器・縄文・平安
17-2	庚塚遺跡	004	香取郡大栄町 南敷字庚塚410-1他	塚1, 3,000㎡	55.2.1～55.3.31	高橋(健), 斎木	縄文早期・平安・中世
17-3	松木下遺跡	005	香取郡大栄町 南敷字松木下293他	2,500㎡	55.4.1～55.6.15	高橋(健), 岸本	平安時代
17-4	南敷砦跡	020	香取郡大栄町 南敷字高野126他	1,900㎡	58.4.1～58.5.31	栗田, 矢野	中世
18	六ツ塚遺跡	016	香取郡大栄町 南敷字六ツ塚461-2他	13,200㎡のうち 2,640㎡(20%)	56.6.1～56.9.22	鈴木, 池田, 岸本	先土器・中世
19	六ツ塚塚群	017	香取郡大栄町 南敷字六ツ塚461-2他	塚2基	56.6.1～56.8.31	鈴木, 池田, 岸本	中世？
20	平窪遺跡	001	香取郡大栄町 堀籠字平クボ1097-19他	7,075㎡のうち 1,415㎡(20%)	54.6.1～54.8.31	高橋(健), 斎木	先土器
21	中峯遺跡	019	香取郡大栄町 桜田字中峯1168	9,200㎡のうち 920㎡(10%)	57.10.12～57.10.31	羽二生	縄文
22	小六遺跡	018	香取郡大栄町 南敷字小六765-1他	3,200㎡のうち 640㎡(20%) 馬土手	56.5.25～56.7.4	高橋(健), 羽二生	先土器・縄文・近世
23	深沢遺跡(二次)	209-003	佐原市 本矢作深沢1286-192他	1,604㎡のうち 320㎡(20%)	54.5.2～54.5.31	高橋(健), 斎木	縄文早期
23	深沢遺跡(二次)	209-003	佐原市 本矢作深沢1286-192他	2,500㎡のうち 250㎡(10%)	57.6.15～57.6.30	羽二生	縄文早期
24	深沢第1遺跡	004	佐原市 本矢作深沢1286	4,500㎡のうち 1,200㎡(26%)	56.4.1～56.5.23	高橋(健), 岸本	先土器・縄文
25	深沢第2遺跡	011	佐原市 本矢作深沢1286-187他	5,170㎡のうち 517㎡(10%)	57.7.1～57.7.31	池田, 岡田	不明
26	小六谷台遺跡	012	佐原市 本矢作小六谷台1415-159他	3,760㎡	57.8.1～57.11.30	高橋(健), 岡田	古墳時代中期～後期
27	小六谷台第1遺跡	016	佐原市 本矢作小六谷台1415-162他	6,340㎡のうち 634㎡(10%)	57.11.1～57.11.30	池田, 岡田	縄文
28	小六谷台第2遺跡	017	佐原市 本矢作小六谷台1415-156他	1,920㎡のうち 192㎡(10%)	57.11.1～57.11.15	池田, 岡田	縄文中期・弥生・古墳
28	小六谷台第2遺跡 (本調査)	017	佐原市 本矢作 小六谷台1415-156他	728㎡	58.2.16～58.2.28	池田, 岡田	縄文中期・弥生・古墳
29	山王遺跡	019	佐原市 福田字山王454他	5,950㎡のうち 595㎡(10%)	57.12.1～57.12.28	高橋(健), 岡田	縄文早期
30	中山遺跡	005	佐原市 福田字中山394他	4,560㎡	57.1.7～57.3.31	高橋(健), 羽二生	先土器・平安時代
31	馬場遺跡	006	佐原市 福田字馬場258-2他	5,000㎡のうち 1,000㎡(20%)	57.2.1～57.2.27	池田, 岸本	奈良時代
31	馬場遺跡	006	佐原市 福田字馬場258-2他	3,000㎡	57.5.1～57.6.30	池田, 岸本, 岡田	先土器・奈良時代
32	天王宮遺跡	007	佐原市 矢作字天王宮509-1他	5,500㎡のうち 1,100㎡(20%)	57.3.1～57.3.31	池田, 岸本	近世？
33	ソウナ遺跡	009	佐原市 本矢作字ソウナ85-6他	170m	57.4.1～57.5.31	斎木, 羽二生	近世
34	東野遺跡	010	佐原市 本矢作字東野40-2他	3,660㎡	57.5.1～57.8.26	斎木, 羽二生	縄文・平安時代
35	鳥ケ丘第1遺跡	013	佐原市 九美上鳥ケ丘12-120他	4,410㎡のうち 441㎡(10%)	57.8.17～57.8.31	斎木, 羽二生	縄文
36	鳥ケ丘第2遺跡	014	佐原市 九美上鳥ケ丘11-40他	6,000㎡のうち 600㎡(10%)	57.9.16～57.9.30	斎木, 羽二生	縄文
37	鳥ケ丘第3遺跡	008	佐原市 大根字庚塚1787-2他	170m	57.4.1～57.5.31	池田, 岡田	近世

事業番号	遺跡名	遺跡コード	所在地	調査対象	調査年月日	調査担当者	時代
38	大稲塚遺跡	015	佐原市 大根字大稲塚1999他	10,520㎡のうち 1,052㎡(10%)	57.11.1～ 57.12.28	斎木，羽二生	縄文早期
38-1	大稲塚遺跡	015	佐原市 大根字大稲塚1999他	3,000㎡のうち300㎡(10%)，1,000㎡	58.4.1～ 58.5.31	池田，澤野	縄文早期
39	棒木台遺跡	018	佐原市 大根字棒木台617他	4,010㎡のうち 401㎡(10%)	57.12.1～ 57.12.28	斎木，羽二生	縄文
40	毛内遺跡	020	佐原市 返田字毛内267-2他	10,660㎡のうち 1,066㎡(10%)	58.6.1～ 58.11.22	池田，澤野	縄文前期
41	綱原遺跡	002	佐原市 多田字綱原1386他	古墳5基 2,000㎡	53.11.1～ 54.3.31	高橋㈱，斎木	縄文早期・古墳時代後期
41	綱原遺跡	002	佐原市 多田字綱原1386他	古墳1基	58.6.1～ 58.7.30	栗田，矢野	古墳時代後期
42	綱原屋敷跡	023	佐原市 多田字綱原1415他	5,610㎡	58.1.5～ 58.6.30	高橋㈱，羽二生，岡田	平安時代・中世
43	多田綱原遺跡	024	佐原市 多田字綱原1421-5他	5,830㎡のうち 583㎡(10%)	58.3.1～ 58.3.31	高橋㈱，羽二生，岡田	先土器
44	出口遺跡	025	佐原市 吉原字出口459-1	2,640㎡	58.7.1～ 58.10.8	岡田	先土器
45	吉原三王遺跡	021	佐原市 大字丁子字天ノ宮1312他	8,850㎡のうち 4,000㎡	58.11.24～ 59.3.31	池田，栗田，岡田	古墳時代後期～平安
45	吉原三王遺跡	021	佐原市 大字丁子字天ノ宮1312他	のこり 4,850㎡	59.4.1～ 59.10.31	栗田，岡田	古墳時代後期～平安
45-1	吉原三王遺跡	021	佐原市 大字丁子字天ノ宮1312他	2,000㎡	59.4.1～ 59.10.31	栗田，岡田	中世
45-2	吉原三王遺跡	021	佐原市 大字丁子字天ノ宮1312他	6,000㎡のうち600㎡，750㎡	59.4.1～ 59.10.31	栗田，岡田	平安時代
46	藤株台遺跡	022	佐原市 大字大倉字側高213-1	7,830㎡のうち 783㎡	59.12.1～ 60.1.14	鈴木(文)，山田	
47	側高遺跡	028	佐原市 大字大倉字側高207-2	塚1基 7,500㎡	59.10.15～	栗田，岡田	
48	六ノ台遺跡	026	佐原市 多田字六ノ台2193	塚1基	58.7.1～ 58.7.30	栗田，矢野	近世
49	大塚遺跡	027	佐原市 多田字大塚2313	塚1基11,110㎡のうち塚1，1,111㎡(10%)	58.7.1～ 58.10.8	栗田，矢野	縄文・中世
50	多田遺跡	029	佐原市 多田字六ノ台2210-2	15,980㎡のうち 1,598㎡(10%)	59.4.1～ 59.4.21	澤野，山田，鈴木(文)	縄文中期
50	多田遺跡	029	佐原市 多田字六ノ台22210-2	11,475㎡	59.5.24～ 60.3.31	鈴木(文)，山田	縄文中期
51	欠番						
52	角ノ谷遺跡	030	佐原市香取字角ノ谷2049	塚1基	59.4.23～ 59.5.23	澤野	中世
53	下小野遺跡	023	佐原市下小野字貝谷1819他	窯1基，125㎡	61.2.1～ 60.2.14	栗田	縄文・近世

第2章　調 査 の 概 要

第1節　発掘調査計画と経過の概要

昭和53年度

本年度は，四本木遺跡（以下事業番号№5）包含地5,160㎡，野毛平古墳群（№3）古墳3基及び包含地2,000㎡，網原古墳群（№41）古墳4基，包含地2,000㎡の調査を行なった。

新事業のため，事務所用地の確保及び事務所の設置，運営，調査補助員の確保及び調査補助員移送用車両，公用車の運転手の確保，調査用具，事務用品の購入などで1ヶ月以上がこれらのために費された。

調査は昭和53年5月10日に，四本木遺跡から着手された。遺跡は成田市北方の尾羽根川支谷に面する標高約38.0mを測る台地上に立地する。総面積の約20％を確認調査し，遺構，遺物などの検出を行ない，拡張により全形を捉えていった。遺構は住居跡が1軒，第Ⅲ層のソフトローム下面，及びハードローム上面から，先土器時代のフレイクなどが1部集積して出土し，また，同じ層中で縄文早期撚系文系土器群が確認された。7月20日には調査を終了している。

野毛平古墳群は，成田市北方の荒海川支谷に面する台地に立地し，標高約39.0mを測る。調査対象は古墳3基，包含地2,000㎡であったが，古墳は耕作によりすでに墳丘自体がかなり低く，若干の高まりとして確認された。7月7日に鎮魂祭を行ない，7月24日から調査を着手した。遺跡全体の約20％を確認調査し，周溝・遺構の検出を行なった。古墳の規模は，周溝を含めた径が18m，または20.5mを各々測る円墳であった。主体部は確認されず，周溝内より若干の遺物が出土している。他の遺構では，溝状遺構が2条確認されている。昭和53年10月31日に調査は終了している。

その後，調査遺跡の変更が生じ，東関道事業番号№41の網原古墳群を調査することになった。遺跡は佐原市南東の小野川沖積地を望む台地縁辺に立地し，標高約44mを測り，沖積地との比高は38mで，急峻な地形を示す。踏査によると古墳群はすべて円墳で，10数基が確認された。調査対象は古墳4基，包含地2,000㎡であった。市道より約800mも奥まった，うっそうと森林が茂った地点であり，狭い小道を，発掘器材，撮影器材，飲料水を肩にして約15分もあるいた。10月30日に鎮魂祭を行ない，11月1日より調査に着手した。まず，001号墳，002号墳から調査に着手し，003号墳，004号墳，包含地と調査を進めた。検出した遺構はファイヤーピット3基，住居跡2軒，骨蔵器2ヶ所，古墳4基である。昭和54年3月31日に調査は終了している。

昭和54年度

本年度は，深沢遺跡（以下事業番号№23）包含地1,604㎡，平窪遺跡（№20）包含地6,430㎡，多々羅堂遺跡（№17）包含地10,000㎡，弥右ェ門遺跡（№17－1）包含地8,000㎡，庚塚遺跡（№17－2）包含地3,000㎡，塚1基の調査を行なった。

調査はまず，深沢遺跡から着手された。遺跡は九十九里浜に流下する栗山川支谷に面する標高38.0mの斜面上に立地する。確認調査の結果，ファイヤーピット1基が確認され，5月31日に調査は終了した。

平窪遺跡は，6月1日から調査が着手された。栗山川の最奥部の支谷に面した標高40.0mの台地平坦面上に立地し，約20％の確認調査の結果，

先土器時代のユニット２ケ所が確認された。ただその１ケ所は，遺物出土面が攪乱され，出土面，出土レベルなどが記録できなくなってしまった。８月31日にすべて終了している。

多々羅堂遺跡は８月29日から着手された。利根川に流入する大須賀川の一河川，下田川の小支谷に面する標高約39.0mの台地に立地し，西側の水田面との比高は33.0mを測り，急峻な地形を示す。確認調査の結果，住居跡22軒が確認され，農道をはさんだ谷側の山林にも遺構の存在が予測された。この未掘地点の取扱いについては，教育庁文化課，日本道路公団，文化財センターで協議され，明年度に本調査を行なうということになった。調査は昭和55年１月31日に終了している。

弥右ェ門遺跡は多々羅堂遺跡と並行して調査され，55年１月31日に終了している。多々羅堂遺跡に近接して位置し，住居跡１軒と，先土器時代のユニット１ケ所が確認されている。

庚塚遺跡は，昭和55年２月１日に着手された。利根川に流入する大須賀川の一河川，下田川の小支谷に面する標高約38.5mの台地上に位置し，遺跡は，基部の幅約100m，長さ80m前後の舌状に突き出た台地上に立地している。確認調査の結果，住居跡４軒，溝状遺構２条，土坑１基，近世塚１基が，また，縄文時代早期末の遺物包含層が確認された。近世の塚の墳形は方形で，浅い周溝を設けて築造，旧地表面に燈明皿を埋置し，また，「神奉」の墨書銘を有する坏形土器も出土した。昭和55年３月31日終了している。

昭和55年度

本年度は，松木下遺跡（以下事業番号№17―３）包含地9,900㎡，多々羅堂遺跡（№17）包含地1,000㎡，稲荷峯遺跡（№６）包含地15,700㎡，新堀第１遺跡（№11）包含地6,500㎡，新堀第２遺跡（№12）包含地4,600㎡，新山台遺跡（№15）包含地4,900㎡，新林大富遺跡（№13）包含地14,300㎡，花立台遺跡（№14）包含地17,600㎡の調査を行なった。

松木下遺跡は，４月１日より調査が着手された。利根川に流入する大須賀川の一河川である，下田川の小支谷に舌状に突出した台地上に位置する。遺構は住居跡９軒，溝状遺構４条が検出された。６月21日に調査は終了している。

瓜生池遺跡は，４月１日より調査が着手された。尾羽根川に開析された小支谷が複雑に入り込む標高約40mの台地上に位置し，遺構は，同様な規模をもつ溝状遺構が８条確認された。６月27日に調査は終了している。

多々羅堂遺跡は，昨年度の未掘部1,000㎡を調査した。６月16日から開始され，住居跡14軒を検出した。７月31日に終了している。

稲荷峯遺跡は，６月30日から着手された。尾羽根川から西側へ直接的に開析された小支谷の奥部西岸台地上に位置し，調査対象地は国道51号線により２分されている。遺構は，縄文早期末に該当すると思われる住居跡16軒，歴史時代の住居跡１軒が確認された。９月30日をもって調査が終了した。

新堀第１遺跡は，８月１日に着手された。大須賀川に開析された小支谷に面する標高約40.0mの平坦な台地上に位置している。遺構は検出されず，フレイクが数点出土したのみであった。９月15日に調査は終了している。

新堀第２遺跡は，９月13日から着手され，地形は新堀第１遺跡と類似している。遺構は溝状遺構が１条確認されている。遺跡にはうるしが一部繁茂しており，調査に困難をきたした。11月28日に調査終了している。

新山台遺跡は，10月１日に着手された。遺構は縄文時代住居跡４軒，土坑約23基，古墳時代住居跡１軒を確認した。特に縄文中期の加曽利

E式土器が膨大に出土し，住居跡からも石器の良好なセットが検出された。調査は56年2月10日で終了している。

新林大富遺跡は，12月2日から行なわれた。大須賀川の一支谷に面した左岸台地上に位置している。遺構は住居跡1軒のみで，56年2月28日に終了している。

花立台遺跡は，昭和56年2月2日より着手された。利根川に流入する大須賀川の左岸台地の西端部に位置し，新山台遺跡と谷をはさんで対峙する。遺構は検出されず，数点の遺物が確認されただけで，3月31日にて終了している。

昭和56年度

調査遺跡数13ケ所，包含地81,860m²，塚3基が予定され，調査研究員も増員された。

本年度は，ウツギサク遺跡（以下事業番号№16）包含地7,500m²，深沢第1遺跡（№24）包含地4,500m²，小六遺跡（№22）包含地3,200m²，六ツ塚遺跡（№18）包含地13,200m²，六ツ塚塚群（№19）塚2基，妙福寺裏遺跡（№1）包含地6,400m²，塚1基，来光台第3遺跡（№10）包含地6,800m²，来光台第2遺跡（№9）包含地6,900m²，来光台第1遺跡（№8）包含地6,210m²，大安場遺跡（№7）包含地4,730m²，中山遺跡（№30）包含地4,560m²，馬場遺跡（№31）包含地5,000m²，天王宮遺跡（№32）包含地5,500m²の調査を行なった。

調査は4月1日より，ウツギサク遺跡，深沢第1遺跡から着手された。

ウツギサク遺跡は，利根川に流入する大須賀川沖積地を望む標高42.0mの台地上に立地している。確認調査の結果，土坑2基を検出した。5月30日にて終了している。

深沢第1遺跡は栗山川の最奥部にあたり，標高40.0mの台地上に立地する。確認された遺構は土坑2基であり，他の地点より先土器時代のフレイクが若干出土している。5月23日に終了している。

小六遺跡は5月25日に着手した。位置的には，深沢遺跡と谷をはさんで対峙する。ほぼ東西に馬土手状の土塁が確認され，包含地と土塁の調査を行なった。遺構は土坑1基の検出であった。7月4日に終了している。

六ツ塚遺跡は，その調査対象範囲内に六ツ塚塚群のうち2基が位置する包含地で，6月1日より調査に着手した。位置的には，九十九里浜に流下する栗山川と，利根川に流入する大須賀川の分水嶺にあたり標高39.0mを測る。遺構は円形周溝1基，土坑4基，先土器時代ブロック1ケ所を確認している。9月22日をもって終了している。

六ツ塚塚群は一辺が13～14.5m，高さ2mを測る方形の塚である。両塚とも方形に周溝がまわり，一辺に土橋状の遺構を伴う。

東関道の基点側に妙福寺裏遺跡があり，7月1日に調査が着手された。遺跡は北側に取香川沖積地を望む，樹枝状に支谷が発達した台地の上面である。標高は最高位で39.0mを測り，沖積面との比高は約30.0mを示す。上空が，新東京国際空港利用の旅客機の進入路にあたり，騒音等がひどい所であった。検出された遺構は，住居跡71軒，土坑24基，溝4条，掘立柱建物跡2棟，塚1基であり，遺跡全域が中世城郭の形態をとっていた。調査は12月25日に終了した。

来光台第3遺跡は9月16日に着手された。遺跡は大須賀川の上流部の台地上に位置し，標高39.5m前後を測る。遺構は土坑が1基確認されたのみであった。10月16日に終了している。

来光台第2遺跡は来光台第3遺跡に近接してあり，溝状遺構2条，土坑1基を検出して，12月16日に終了している。

来光台第1遺跡は，11月16日に着手された。

大須賀川と尾羽根川の分水嶺に位置し，標高40.0mを測る台地平坦面上である。遺構は土坑2基が確認されている。12月16日に調査は終了している。

大安場遺跡は，昭和57年1月7日に着手された。尾羽根川支谷を望む，標高38.5mから40.0mを測る緩斜面上であったが，溝状遺構1条のみの検出であった。1月30日に終了している。

中山遺跡は昭和57年1月7日に着手された。本遺跡は，利根川に流入する取香川，尾羽根川，大須賀川支谷に面する遺跡と異なり，九十九里浜に流下する栗山川支谷に面する，はじめての大規模な遺跡であった。検出された遺構は，住居跡12軒，掘立柱建物跡1棟，土坑11基，貝ピット1基，先土器時代ユニット5ケ所である。特に墨書土器には注目されるものが多く，「車智」，「成」などが確認された。3月31日に調査は終了している。

馬場遺跡は2月1日に着手された。遺跡は中山遺跡と谷をはさんで対峙する地点で，標高39～40.0mを測る台地上であった。包含地5,000m²のうち，1,000m²の確認調査で，住居跡4軒，土坑4基と，縄文時代早期，後期の包含層を確認した。調査対象のうち，3,000m²が明年57年度に本調査を行うことになり，2月27日確認調査は終了している。

天王宮遺跡は，3月1日に着手された。馬場遺跡と道路をはさんだ反対側で，利根川に流入する小野川支谷と栗山川支谷の分水嶺に位置している。確認調査の結果，土坑13基，溝状遺構2条が検出された。3月31日に終了している。

昭和57年度

調査遺跡数18ケ所，包含地77,270m²，馬土手2ケ所が予定された。

本年度は鳥ケ丘第3遺跡(以下事業番号№37)馬土手170m，ソウナ遺跡（№33）馬土手170m，馬場遺跡(№31)包含地3,000m²，東野遺跡(№34)包含地3,660m²，深沢遺跡（№23）包含地2,500m²，深沢第2遺跡（№25）包含地5,170m²，小六谷台遺跡（№26）包含地3,760m²，鳥ケ丘第1遺跡(№35)包含地4,410m²，鳥ケ丘第2遺跡(№36)包含地6,000m²，中峯遺跡（№21）包含地9,200m²，小六谷台第1遺跡（№27）包含地6,340m²，小六谷台第2遺跡（№28）包含地1,920m²，大稲塚遺跡(№38)包含地10,520m²，山王遺跡(№29)包含地5,950m²，円妙寺遺跡(№2)包含地2,000m²，綱原屋敷跡（№42）包含地3,000m²，南敷砦跡（№17－4）測量調査1,900m²，棒木台遺跡（№39）包含地4,010m²，多田綱原遺跡（№43）包含地5,830m²の調査を行なった。

鳥ケ丘第3遺跡は，4月1日より調査が着手された。小野川支谷に面した台地肩部に位置し，約170mの馬土手である。5月31日に終了した。

ソウナ遺跡は，同じく4月1日より着手された。東野遺跡の谷側にある約170mを測る馬土手である。5月31日に終了している。

馬場遺跡は5月1日より調査が着手された。前年度の確認調査の成果を得て，谷側3,000m²を本調査範囲とした。住居跡4軒，土坑7基，先土器時代ブロック1ケ所を調査し，6月30日終了している。

東野遺跡は5月1日より調査が着手された。利根川に流入する小野川の小支谷に面した台地上に位置する。遺構は住居跡10軒，土坑6基が検出された。住居跡より奈良三彩や墨書土器が確認された。8月26日に調査は終了している。

深沢遺跡は6月15日より調査が着手された。昭和54年に調査した隣接地で，炉穴が2基確認された。6月30日に調査は終了している。

深沢第2遺跡は，7月1日より調査が着手された。九十九里浜に注ぐ栗山川の最上流地域で，標高約40mの台地平坦部に位置する。遺構は土

坑6基が検出され，7月31日に調査は終了している。

小六谷台遺跡は，8月1日より調査が着手された。九十九里浜に注ぐ栗山川の沖積地に面する標高29mの千葉段丘上にある。台地全体は幅70m，長さ120mを測る舌状台地である。遺構は住居跡13軒，土坑2基，柵列状遺構2列を確認している。11月30日に調査は終了している。

鳥ケ丘第1遺跡は，8月16日より調査が着手された。利根川に注ぐ小野川の沖積地に面する台地上に位置し，近世の溝1条が確認された。8月31日に調査は終了している。

鳥ケ丘第2遺跡は，9月16日より調査が着手された。利根川に注ぐ小野川によって開析された支谷に面した台地上に位置する。遺構は土坑1基を確認している。10月2日に調査は終了している。

中峯遺跡は，10月12日より調査が着手された。九十九里浜に注ぐ栗山川の最上流地域の標高39mの台地平坦面上に立地する。遺構は土坑2基が検出された。10月31日に調査は終了している。

小六谷台第1遺跡は11月1日より調査が着手された。九十九里浜に注ぐ栗山川の沖積地に面し，標高30mを測る千葉段丘上に位置している。遺構は確認されず，若干の遺物が検出された。11月30日に調査は終了している。

小六谷台第2遺跡は，11月1日より調査が着手された。九十九里浜に注ぐ栗山川の沖積地に面し，標高30m～37mを測る緩斜面上に位置する。遺構は住居跡3軒，土坑3基，円形周溝状遺構1基，溝1条が検出された。確認調査は11月12日に終了し，その成果を得て昭和58年2月17日より3月4日まで本調査している。

大稲塚遺跡は，11月1日より調査が着手された。利根川に注ぐ小野川によって開析された支谷に面した台地上に位置している。遺構は炉穴7基，土坑3基，石器製作跡1ケ所が検出された。12月28日に調査は終了している。なお，谷寄りに遺跡の広がりが確認されたため，明年度に隣接地の3,000㎡を調査することになった。

山王遺跡は，12月1日より調査が着手された。栗山川により開析された小支谷にはさまれた標高40mの台地上に位置する。遺構は土坑2基が検出された。12月28日に調査は終了している。

円妙寺遺跡は，12月15日より調査が着手された。利根川に注ぐ取香川支谷に面した台地上に位置する。遺構は住居跡12軒，土坑8基，溝1条が検出された。遺物は二彩片，灰釉陶器などが確認され，また，「信」，「仲」，「万」，「法」などの墨書を記した土師器，土製紡錘車に線刻で「永」を刻んだものも確認された。調査は2月16日終了している。

綱原屋敷跡は，1月4日より調査が着手された。利根川に注ぐ小野川によって開析された支谷に面した台地平坦面上に位置している。遺構は土塁が方形状に数区画ずつ連なり，溝は土塁に沿うように構築されている。残る2,610㎡は58年度調査予定である。調査は3月31日に終了している。

南敷砦跡は，1月20日より調査が着手された。利根川に注ぐ大須賀川の沖積地を臨む標高40mの台地北端に位置している。調査は地形測量を行ない，1月31日に終了している。

棒木台遺跡は，12月1日より調査が着手された。遺構は確認されず，若干の遺物を検出した。調査は12月28日に終了している。

多田綱原遺跡は，3月1日より調査が着手された。利根川に注ぐ小野川によって開析された小支谷に面した台地平坦面上に位置している。遺構は先土器時代ブロック2ケ所，土坑1基，溝1条が検出された。調査は3月31日に終了している。

昭和58年度

調査遺跡数11ケ所，包含地43,820m²，古墳２基，塚２基が予定された。

本年は南敷砦跡（以下事業番号№17－４）砦跡1,900m²，大稲塚遺跡(№38－１)包含地3,000m²，綱原屋敷跡（№42）包含地2,610m²，毛内遺跡（№40）包含地10,660m²，綱原遺跡（№41）古墳１基，出口遺跡（№44）包含地2,640m²，六ノ台遺跡（№48）塚１基，大塚遺跡（№49）包含地11,110m²，塚１基，推出し古墳(№２－１)包含地1,000m²，古墳１基，吉原三王遺跡(№45)包含地4,000m²，円妙寺遺跡(№２)包含地6,900m²の調査を行なった。

南敷砦跡は，４月１日より調査が着手された。前年度の測量調査を踏まえて，全面調査した。堀は１条廻り，土坑５基，ピット３基，溝状遺構２条を検出した。堀内より石造塔が数点確認された。調査は５月31日に終了している。

大稲塚遺跡は，４月１日より調査が着手された。前年度調査した隣接地で，遺構の広がりが確認された。調査は５月31日に終了している。

綱原屋敷跡は，４月１日より調査が着手された。遺構は住居跡２軒，土坑26基，方形土坑15基，溝６条，竪穴状遺構２基，ピット群２基，地下式土坑２基などを検出した。調査は６月30日に終了している。

毛内遺跡は，６月１日より調査が着手された。利根川に流入する小野川の小支谷に面した台地上に位置する。遺構は住居跡14軒，土坑28基，落し穴１基，炉穴８基，溝１条が検出された。調査は11月22日に終了している。

綱原遺跡は，６月１日より調査が着手された。昭和53年度に調査された遺跡であるが，古墳１基が未調査であったので今回調査した。主体部２基を有する円墳で，直径23m，高さ2.1mを測る。調査は７月31日に終了している。

出口遺跡は，７月１日より調査が着手された。利根川に流入する小野川の小支谷に面した標高39mを測る台地上に位置している。遺構は，溝状遺構４条，土坑１基，礫群１ケ所，先土器時代ユニット３ケ所が検出された。調査は10月８日終了している。

六ノ台遺跡は，７月１日に調査が着手された。利根川に流入する小野川の小支谷に面した標高40mを測る台地上に位置している。塚はすでに削平されており，石塔を利用した石組が検出された。調査は７月30日に終了している。

大塚遺跡は，７月１日に調査が着手された。立地は標高41mを測る台地平坦面上である。塚は方形で遺物は検出されなかった。住居跡１軒，土坑１基が確認された。調査は11月22日終了している。

推出し古墳は，11月１日に調査が着手された。利根川に流下する取香川支谷に面した台地上に立地する。長軸35m，後円部高さ２mを測る前方後円墳１基，住居跡２軒，方形周溝遺構１基，土坑１基が検出された。古墳は主体部に著しい盗掘を受けており，良好な遺物は出土しなかった。主体部は明確ではないが，裏込めに粘土，雲母片岩を使用していたと推定される。調査は12月24日に終了している。

吉原三王遺跡は，11月24日より調査が着手された。小支谷が入り込んだ台地上に立地している。調査対象範囲は10,850m²あり，今年度は4,000m²が対象であった。遺構は住居跡27軒，土坑２基，土坑群３ケ所，地下式坑２基，溝10条が検出された。調査は昭和59年度に継続された。

円妙寺遺跡は，前年度調査した隣接地の調査を１月４日より行なった。遺構は住居跡４軒，土坑11基，溝１条を検出した。一次調査分を加えた平安時代の集落は，比較的多くの墨書土器を出土しており，集落の性格を考えるうえで良

好な資料である。さらに調査区南東隅で検出した石器群は，先土器時代の所産で興味深いものである。調査は3月31日に終了している。

昭和59年度

調査遺跡数7ケ所，包含地44,160㎡，塚2基が予定された。

本年度は，吉原三王遺跡(以下事業番号№45)包含地4,850㎡，同（№45－1）包含地2,000㎡，同(№45－2)包含地6,000㎡，藤株台遺跡(№46)包含地7,830㎡，側高遺跡（№47）包含地7,500㎡，塚1基，多田遺跡（№50）包含地15,980㎡，角ノ谷遺跡（№52）塚1基の調査を行いつつある。

吉原三王遺跡は，前年度より継続されて調査され，遺跡範囲の拡大に伴い，№45－1（南側），№45－2（北側谷部）があわせて調査着手された。遺構は数多く確認され，また，墨書土器など特徴あるものが出土した。主なものをあげると，墨書土器では「□香取郡大杯郷中臣人成女之替承□」，「□占部罡足」，「真髪」，「真髪，伊加万」，「吉原仲家」，「吉原大畠」，また，和鏡，青白磁合子，短刀，毛抜などの一括資料の出土もみた。

多田遺跡は4月1日より着手された。約10%の確認調査の結果，膨大な量の縄文土器が確認され，ほぼ全域が本調査の対象となった。本調査の結果縄文時代中期末葉の大集落跡で約26軒前後の住居跡及び土坑180基が確認されている。

角ノ谷遺跡は4月23日より着手された。現在も信仰の対象となっている塚であるため，鎮魂祭を行なったのち，墳丘測量を実施した。墳丘自体は小規模のものであり，また，中央部に大きな御神木が繁っていたので，墳丘自体の調査は測量調査のみになってしまった。墳丘下には，一部プリッヂのある方形周溝が検出され，隣接した同規模の方形周溝が確認されたことにより，塚は2基あったものと思われる。5月23日に終了している。

他の諸遺跡群については現在調査中である。

第2節　発掘調査組織と体制

調査組織

53年度

調査部

調査部長	西野　元
班長	種田斉吾
調査研究員	高橋賢一
	斎木　勝

54年度

調査部

調査部長	白石竹雄
部長補佐	山田友治
班長	古内　茂
調査研究員	高橋賢一
	斎木　勝

55年度

調査部

調査部長	白石竹雄
部長補佐	栗本佳弘
班長	古内　茂
調査研究員	高橋賢一
	斎木　勝
	奥田正彦（1/31まで）
	岸本雅人

56年度

調査部

調査部長	白石竹雄
部長補佐	中山吉秀
〃	天野　努
班長	斎木　勝
主住調査研究員	鈴木定明（7/1～9/30）
調査研究員	池田大助
	高橋博文
	岸本雅人
	羽二生保
	萩原恭一（7/1～9/30）
	石井ひろみ（7/1～9/30）

57年度

調査部

調査部長	白石竹雄
部長補佐	岡川宏道
〃	天野　努
班長	斎木　勝
調査研究員	池田大助
	高橋博文
	羽二生保
	岡田光広

58年度

調査部

調査部長	白石竹雄
部長補佐	根本　弘
〃	岡川宏道
班長	斎木　勝
主任調査研究員	池田大助
調査研究員	高橋博文
	栗田則久
	沢野　弘
	岡田光広
	矢野紀子

59年度

調査部

調査部長	鈴木道之助
部長補佐	根本　弘
〃	岡川宏道
班長	斎木　勝（9/30まで）
	石田広美（10/1から）
調査研究員	栗田則久
	沢野　弘（9/30まで）
	岡田光広
	鈴木文雄（10/1～1/31）
	山田貴久
	矢野紀子

第３節　調査の方法

確認調査の方法

昭和53年事業発足時，調査担当者の間で調査方法について話し合われた。基本的にはグリットによる確認調査を行なったのち，検出された遺構の拡張を行ない，全面調査に移行することであった。

まず発掘区の設定であるが，東関道の建設予定地の幅が略々60mなので，40m単位より20m単位のほうが調査上利点があるので，20mの単位を１区とした。その際の基本軸は，第９座標系のＸ・Ｙの整数値を用いることとした。それは，面的な調査の場合，遺跡の占地等考慮した発掘区も設定できるが，東関道のような線的な調査の場合は，調査対象地外の遺跡との相関関係を記録しておかなければならないためである。

発掘区の呼称の仕方は，東西にアルファベット，南北に数字を１区単位とし，区の呼称は，北西端から00～04，以下10，20，30，40，南東端を44とし，25分割した。

確認調査は，昭和53年度から56年度は全発掘対象面積の約20％，先土器時代遺物包含層の確認面積は８～10％であった。昭和57年度から，遺物散布の粗密を考慮にいれて，全発掘対象面積の約10％，先土器時代遺物包含層の確認面積は５～６％にした。

確認調査の発掘区の設定方法は，調査の進展に伴い，当初の設定方法を昭和56年度途中で変更している。

昭和53，54，55年度の発掘区の設定方法は１区あたり幅２mのトレンチを52m設けたもので，基本杭（20m間隔），補助杭（4m間隔）より１m離れて設定し，未掘部は最大5m間隔におさえたものであった。

昭和56年度半ばから行なわれた発掘区の設定方法は，従前の１区あたり４×４mのグリット設定を尊重し，そのグリットを１グリットおきに発掘する方法であった。未掘部は最大４m間隔におさえたものであった。これにより，調査対象地内の遺構確認の面的均質化が十分になり，グリット内出土遺物もグリット単位で取り上げられるようになった。

昭和57年度から行なわれた発掘区の設定方法は，遺跡全体の遺物散布状態の粗密を考えながら，従来の４×４mグリット発掘から，４×４mグリットを南北に２分し，４×２mを発掘することにした。これにより未掘部は最大６mを測ることになった。

本　　編

成田地区地形概観

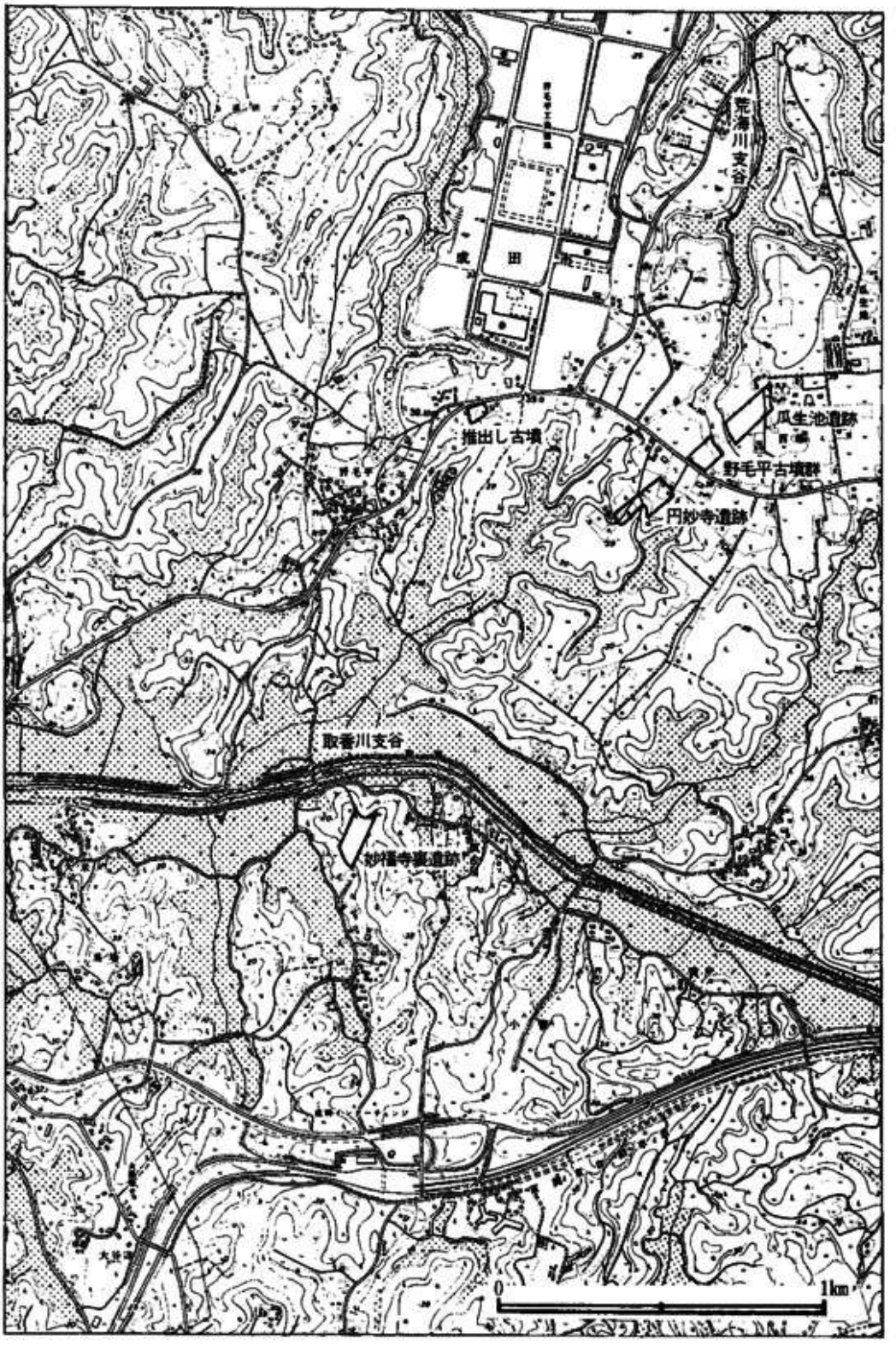
下総台地は，西は江戸川から東は銚子までの千葉県北部地帯をしめ，また，特に東側については北総台地という呼称もされている。標高は，30m以下が広く，とくに本地区を含める北総地域は最高40m前後である。下総台地は基本的には隆起した海岸平部であり，下未吉期の海進により，台地の平坦面が形成されその後の海面の低下で台地化したものである。

成田地域の下総台地は，成田層の発達が著しく，また部分的に木下貝層を包含している。その上面には関東ローム層が推積している。この台地を樹枝状に侵食して，小河川が発達している。大きくみると成田市域の中央を南から北に根木名川が流下し，東方北より尾羽根川，荒海川，取香川が流入している。

この根木名川と取香川に挟まれて小菅台があり，川栗支台，吉倉支台，山ノ作支台，法華塚支台，駒井野支台に分化している。妙福寺裏遺跡は法華塚支台に位置している。

取香川と荒海川に挟まれて和泉台があり，先端には新妻支台，和田支台が発達している。円妙寺遺跡，野毛平古墳群，瓜生池遺跡，四本木遺跡はこの和泉台上に位置している。

尾羽根川と荒海川に挟まれて荒海台が発達している。稲荷峯遺跡は，この尾羽根川水系と尾羽根川によって発達した支谷に挟まれて位置している。

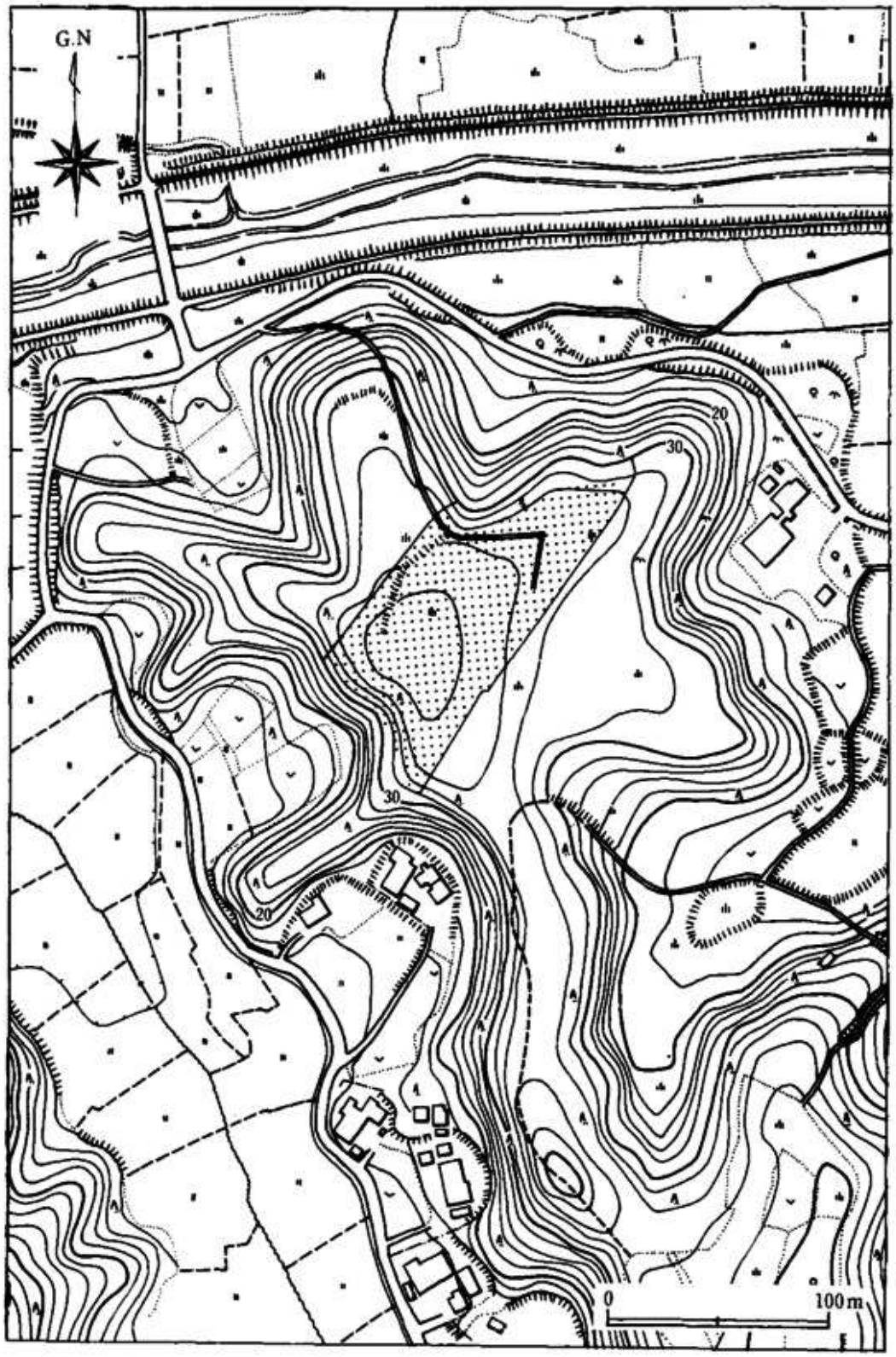


第6図　遺跡周辺図（1/20,000）

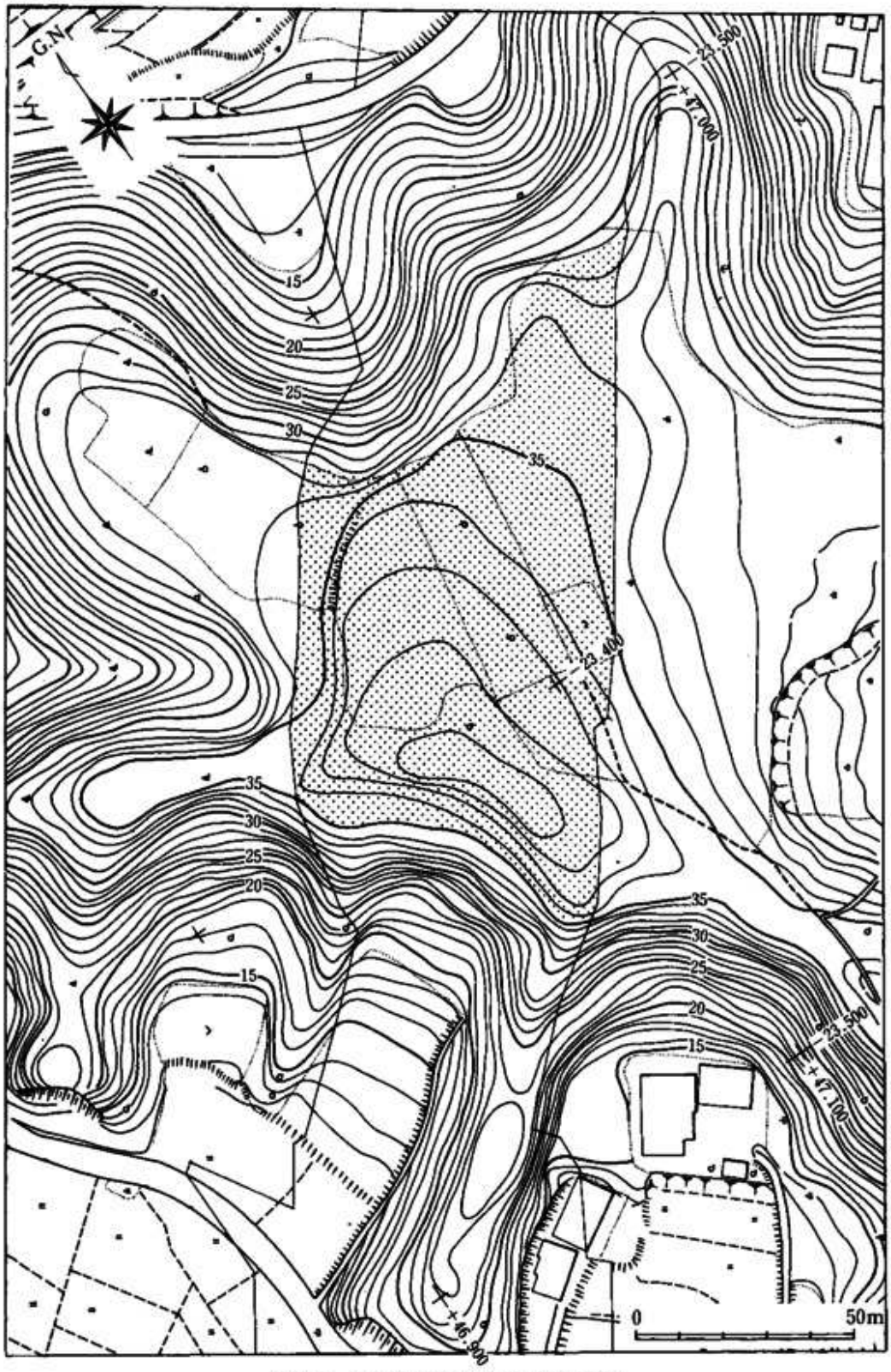
第7図　遺跡周辺図（1/20,000）

妙福寺裏遺跡（No.1）

(211—019)



第8図　妙福寺裏遺跡周辺地形図（1/3,000）



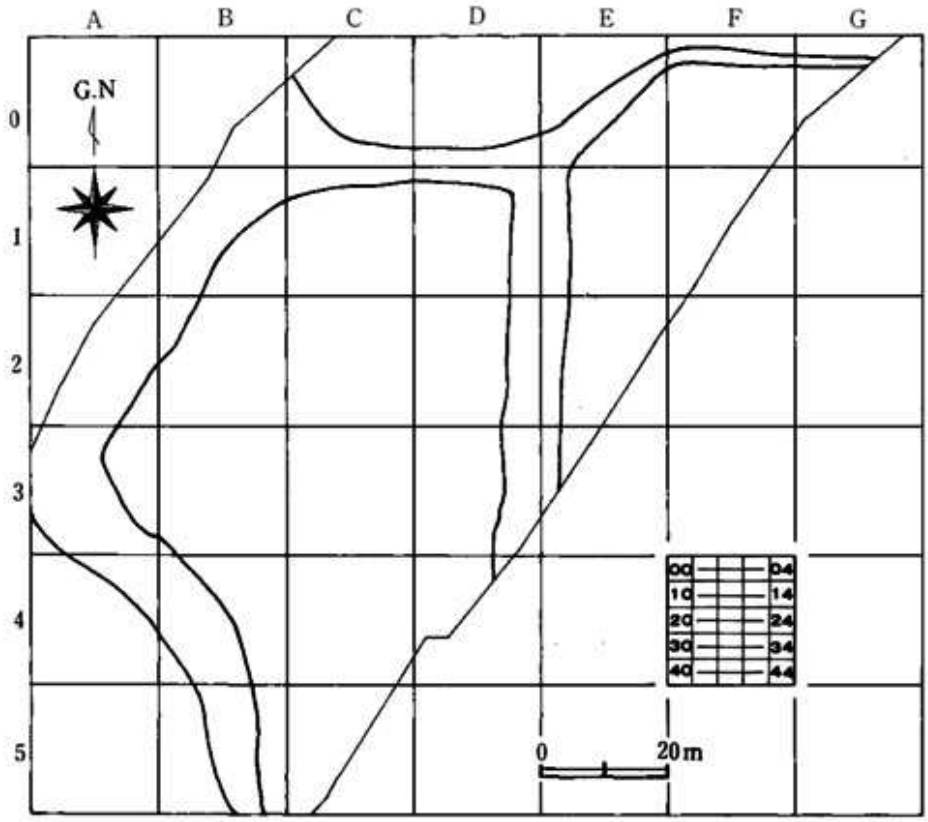
第9図　妙福寺裏遺跡地形図（1/1,500）

第1章　調　査　概　要

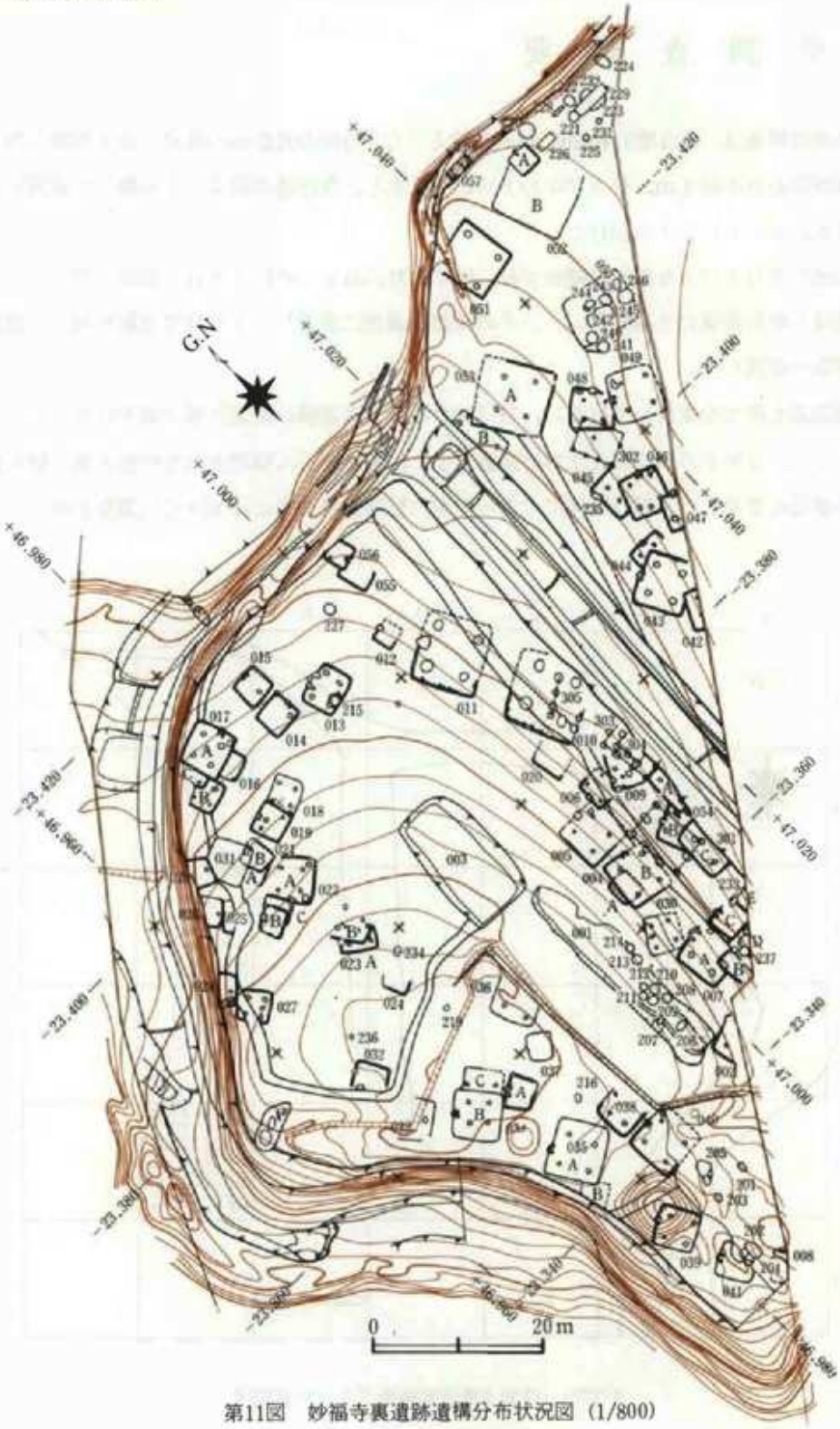
遺跡調査対象は，包含地6,400㎡，塚１基であった。当初の発掘区の設定方法を踏襲し20×20mの調査区あたり幅２m，長さ10mのトレンチ２本と，各区基本線より１m離して直角に設定した長さ32mのトレンチを設けた。

昭和56年７月１日より調査は開始され，同年12月25日までの約６ケ月の期間を要した。まず，環境整備と地形測量に２週間費した。その後確認調査に着手し，１ケ月で遺跡全域の土層状態と遺構数を確認した。

遺構調査と排土を並行して行ない，11月30日には上部遺構の調査と塚の調査は終了した。12月に入ると，カマドの調査と先土器の調査，また，遺跡周辺に確認された中世の堀と思われる遺構の調査に着手した。堀は大規模であったが，12月25日までにはすべての調査を終了した。



第10図　妙福寺裏遺跡調査グリット設定図



第11図　妙福寺裏遺跡遺構分布状況図（1/800）

第2章　遺　　構

第1節　住　居　跡

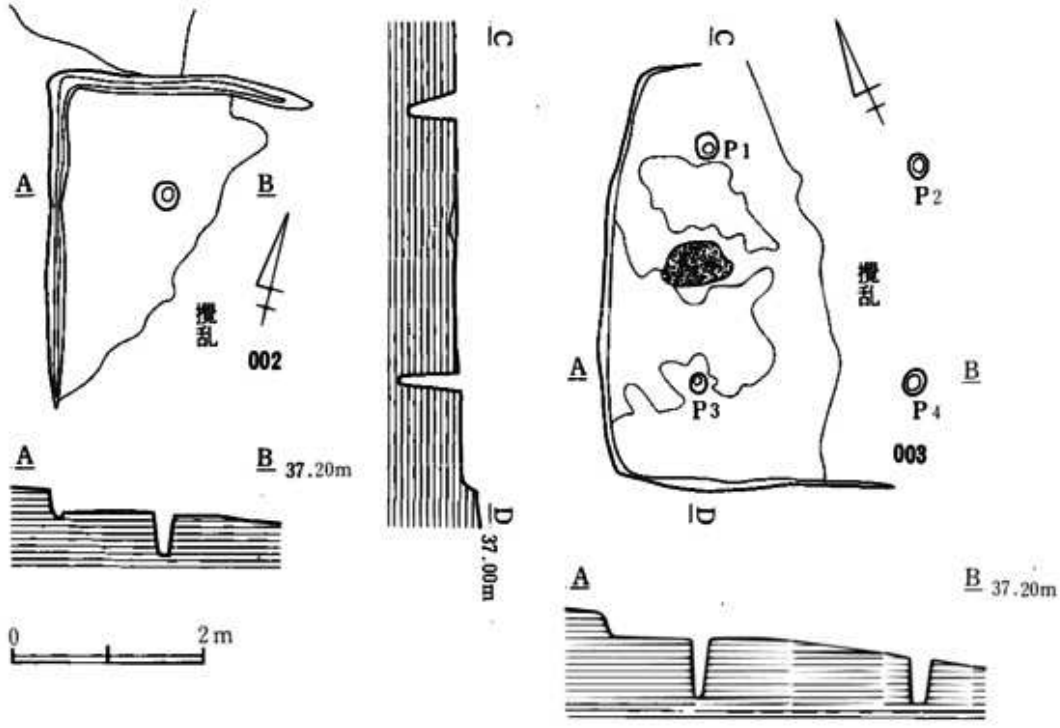
002号住居跡（第12図，図版4－1）

C 4区東側に位置する。北西隅を除く¾は調査区外にあり調査できなかった。確認された部分は削平により壊されている。カマドは検出されなかった。ロームへの掘り込みは1.1mを測る。床面の状態は，一部分だけの検出であったが比較的良好であった。周溝は検出された範囲では確認された。柱穴は主柱穴と思われる1本（42 cm）が検出されたのみである。

遺物は，若干の土師器の破片が出土したにとどまる。また，炭化材が壁近くの床面に見られた。

003号住居跡（第12図，図版4－2）

D 4区北西隅に位置する。東側半分が削平により壊され，柱穴を残すのみであった。1辺4mの方形と考えられる。カマドは検出されなかった。しかし西壁の中央近くにロームが焼けて赤く変色した部分があり，位置からカマドの火床部とも考えられる。ロームへの掘り込みは23 cmを測る。床面は硬くしまっている部分があり良好な状態であった。周溝はない。柱穴は主柱



第12図　002号，003号住居跡実測図

穴の4本（P1，47cm，P2，29cm，P3，63cm，P4，48cm）が検出された。

遺物の出土は比較的少なかった。

004A号住居跡（第13図，図版5－1）

D3区西側に位置する。004B号住居跡と重複する。1辺3mの方形と考えられる。覆土は1層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），2層：褐色土層（焼土粒を多く含む）である。カマドは004B号住居跡の覆土上に認められたが，原形をとどめていない。袖の一部のみ残存していた。ロームへの掘り込みは17cmを測る。床面は硬くしまっている。また004B号住居跡の覆土中に貼り床が残っていた。柱穴は検出できなかった。

遺物の出土は少なかった。

004B号住居跡（第13図，図版5－1）

D3区西側に位置する。東側は削平により壊されている。柱穴のみ検出された。また西側で004A号住居跡と重複する。1辺6mの方形を呈すると考えられる。覆土は3層：ロームブロック層，4層：黄褐色土層（ローム粒を多く含む），5層：暗褐色土層（ローム粒を多く，ロームブロック，焼土粒を少し含む），6層：黄褐色土層（ローム粒を多く含む）である。カマドは北壁の中央に設けられ，袖部のみの残存である。ロームへの掘り込みは50cmを測る。中央附近の床面は硬くしまっているが，周囲は少し軟かい。周溝は検出された範囲には全周する。柱穴は主柱穴の4本（P1，58cm，P2，45cm，P3，68cm，P4，65cm）と内側に4本の柱穴（P5，44cm，P6，30cm，P7，61cm，P8，48cm）が検出された。

遺物は，カマドの脇から大形土器が出土したほかはそれほど多く検出されなかった。

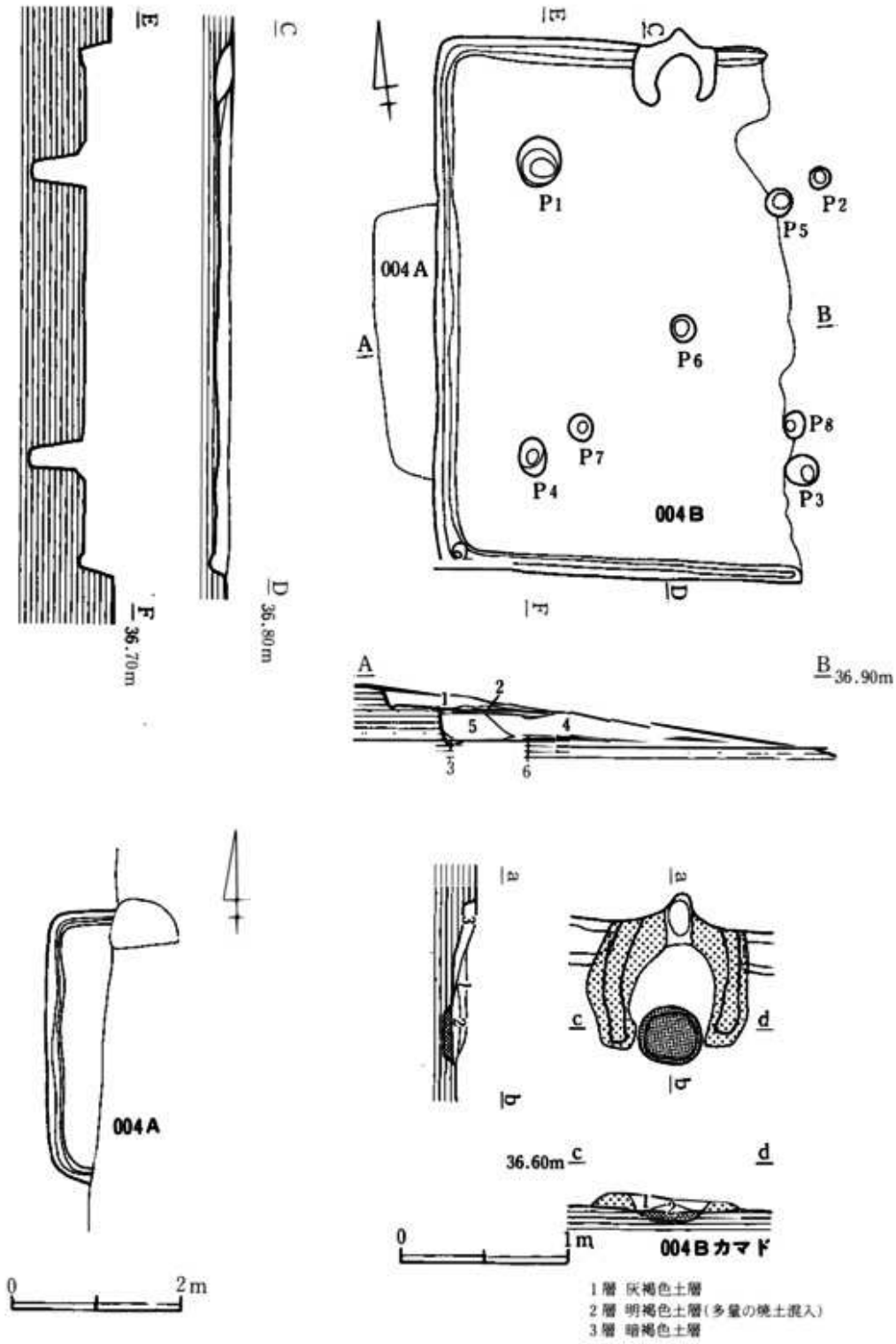
005号住居跡（第14図，図版5－2）

D3区に位置する。004B号住居跡の北に隣接する。東側半分は削平により壊されている。1辺5.5mの方形を呈すると考えられる。覆土は1層：茶褐色土層（ローム粒を多く含む），2層：暗褐色土層，3層：褐色土層，4層：暗褐色土層（ロームブロックを含む）である。カマドは検出されなかったが，北壁中央の床面に焼土が若干見られ，火床部と考えられる。ロームへの掘り込みは27cmを測る。住居の中央附近の床面は硬くしまっている。周溝は南側と西側の一部に見られる。柱穴は主柱穴の4本（P1，56cm，P2，37cm，P3，56cm，P4，41cm）が検出された。また北東隅と考えられる位置に，深さ37cmの長方形を呈する貯蔵穴が検出された。

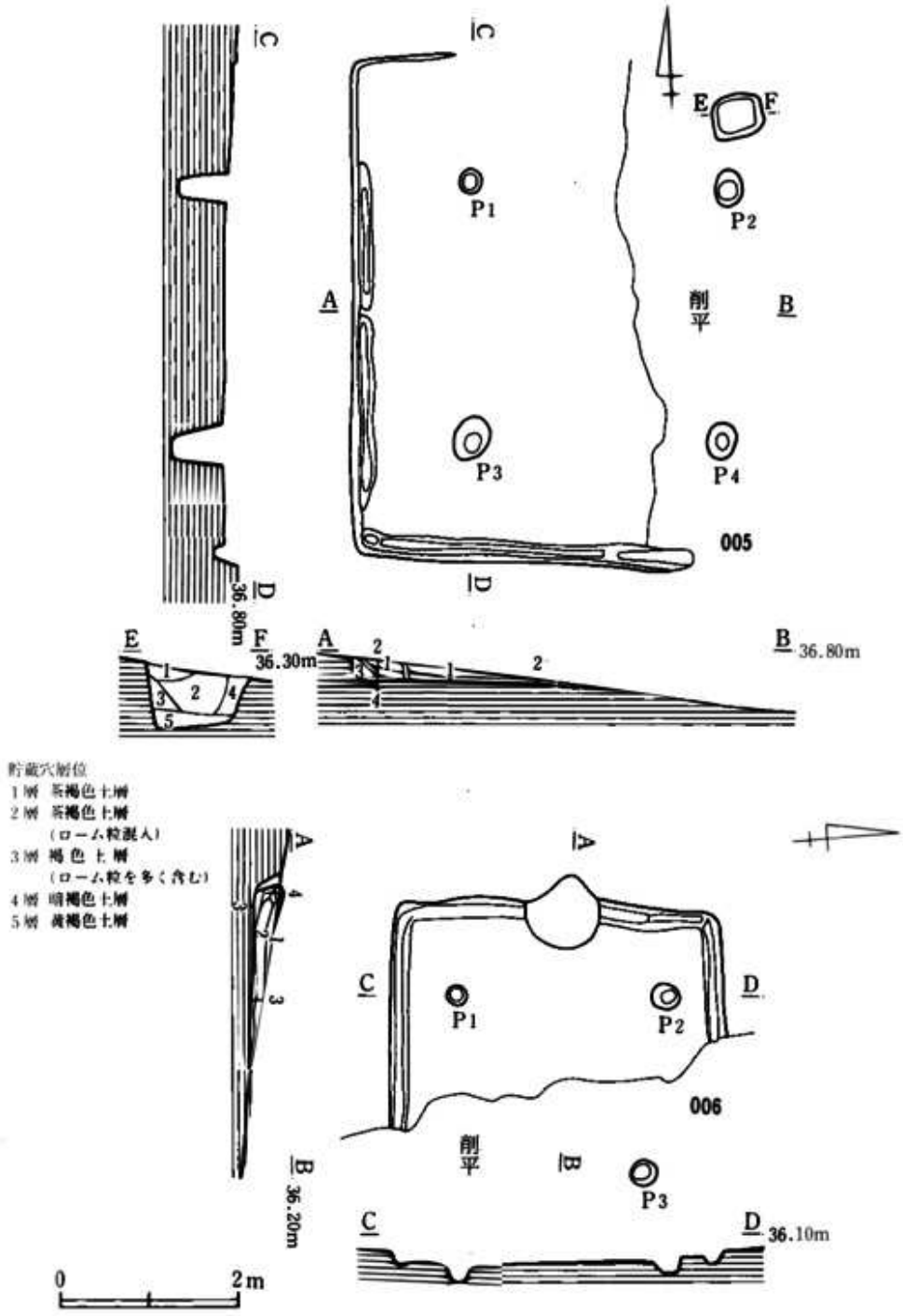
遺物の出土は少ない。貯蔵穴内から坏が一点出土している。

006号住居跡（第14図，図版6－1）

D3区に位置する。住居跡の東側半分を溝と削平により壊されている。また西側で005号住居跡と，東側で009号住居跡と重複する。1辺4mの方形と考えられる。覆土は，1層：暗褐色土



第13図　004A・B号住居跡実測図



第14図　005号，006号住居跡実測図

層，2層：茶褐色土層（ローム粒を多く含む），3層：暗褐色土層（ロームブロックを含む），4層：暗褐色土層（山砂，焼土粒，ローム粒を含む）である。カマドは西壁の中央に設けられており，袖の一部のみが検出された。ロームへの掘り込みは 28 cm を測る。床面は少し軟かい。周溝は検出された範囲では全周する。柱穴は主柱穴のうち3本（P1，24 cm，P2，15 cm，P3，16 cm）が検出された。

遺物の出土はそれほど多くはなかったが，カマドの北側床面直上から鉄鏃，南側から土玉が出土している。

007A号住居跡（第15図，図版6－2）

D4区に位置する。東側を溝と007B号，007C号住居跡と重複する。1辺6mの方形を呈すると考えられる。覆土は，1層：黒褐色土層，2層：褐色土層(焼土粒を含む)，3層：暗褐色土層，4層：黒褐色土層（ロームブロックを含む），5層：黄褐色土層（ローム粒を多く含む），6層：山砂である。カマドは北壁に位置し，袖部のみ残存している。ロームへの掘り込みは 53 cm と深い。床面の中央部は硬くしまっているが，周囲は軟かい。周溝は残存する範囲では全周する。柱穴は主柱穴の4本（P1，44 cm，P2，35 cm，P3，32 cm，P4，39 cm）が検出された。

遺物は多くはない。

007B号住居跡（第15図，図版6－2）

D4区に位置する。南東の半分は調査区外になり，確認された部分も溝により壊されている。北側では007A号，東側で007D号住居跡と重複する。規模，形態の詳細は不明である。カマドは認められなかったが，西側の北寄りに焼土が検出されている。ロームへの掘り込みは 50 cm と深い。床面は一部硬い部分もあるが，大半は軟かい。周溝は検出された壁下には見られた。柱穴は検出されなかった。

遺物の出土は少ない。

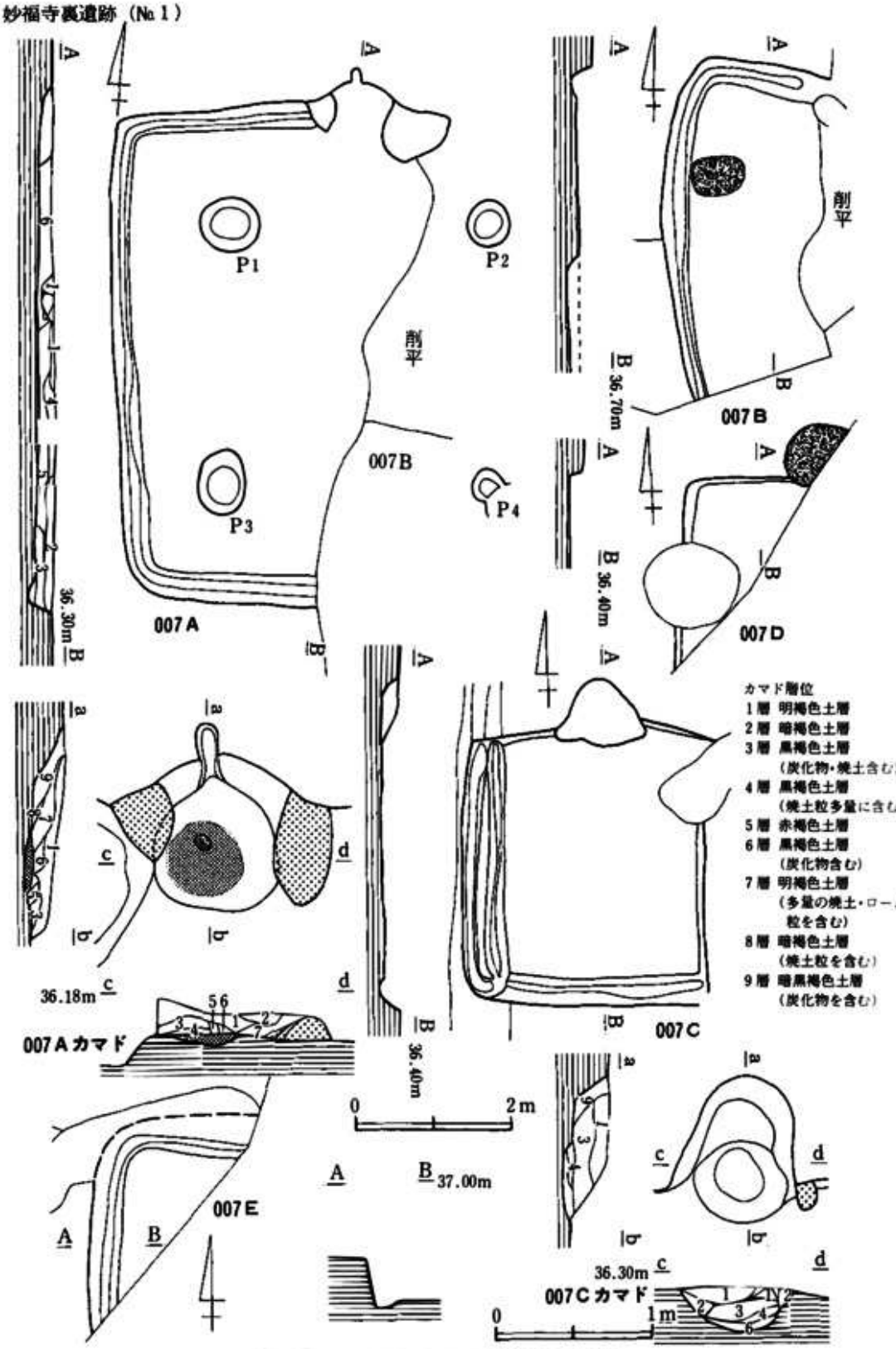
007C号住居跡（第15図，図版6－2）

D4区に位置する。007A号住居跡の東側に隣接する。3×3.5mの長方形を呈すると考えられる。カマドは北壁の中央にあり，攪乱により袖部の一部が残存する。ロームへの掘り込みは 10 cm を測る。床面は軟弱であった。周溝は西側に見られとくに西壁下は2重になっている。柱穴は検出されなかった。

遺物の出土は少ない。

007D号住居跡（第15図，図版6－2）

D4区に位置する。住居跡の大部分は調査区外にあり，北西隅の部分のみ検出された。007C号住居の南に隣接し，237号土坑と重複する。また北側には焼土が重複する。規模，形態は不明



第15図　007A・B・C・D・E号住居跡実測図

である。ロームへの掘り込みは 14 cm を測る。床面はやや軟かい。周溝，柱穴は認められなかった。

遺物は，完形に近い甕を出土したほかは少なかった。

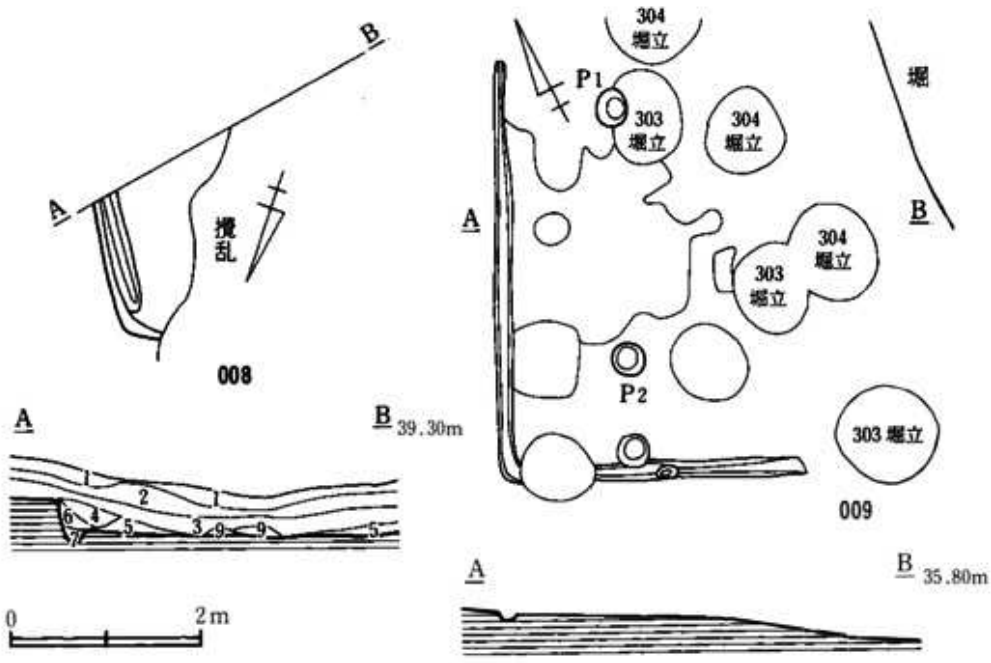
007 E 号住居跡（第15図，図版 6 － 2）

D 4 区に位置する。北西隅の一部を残し，ほかの大部分は調査区外にあり調査できなかった。規模，形態の詳細は不明である。カマドは認められなかった。ロームへの掘り込みは，54 cm と深い。床面は硬くしまっていた。周溝は検出された壁下では見られる。柱穴は検出できなかった。

遺物は少ない。

008号住居跡（第16図，図版 7 － 1）

C 5 区南側に位置する。住居の西側は壊され，東側は調査区外にあり，遺構の一部を検出したにすぎない。規模，形態の詳細は不明である。覆土は，1 層：表土，2 層：黄褐色土層，3 層：暗褐色土層，4 層：黒褐色土層（粘性あり），5 層：黄褐色土層（ロームブロックを多く含む），6 層：暗褐色土層（小さいロームブロックを含む），7 層：黄褐色土層，8 層：灰褐色土層（山砂を含む），9 層：焼土層である。カマドは認められなかった。ロームへの掘り込みは 19 cm を測る。床面の状況は不明である。周溝は検出された壁下では見られた。柱穴は認められな



第16図　008号，009号住居跡実測図

かった。

遺物は非常に少なかったが，滑石製の紡錘車が1点出土している。

009号住居跡（第16図）

D3区に位置する。削平により床面近くまで削られていた。東側は大溝により壊され，また，西側では006号住居跡，そして掘立柱建物跡と重複している。方形を呈すると考えられるが，規模は不明である。カマドは検出されなかった。床面は，残存部では硬くしまっていた。周溝は西と南側に見られる。柱穴は主柱穴の2本（P1，50 cm，P2，25 cm）と，南壁際に深さ10 cm のピットがある。

遺物の出土はほとんどない。

010号住居跡（第17図，図版7－2）

D2区に位置する。削平と溝との重複により住居の大部分が確認できなかった。1辺8.5mの方形を呈すると考えられる。カマドは検出されなかった。ロームへの掘り込みは 19 cm を測る。床面は一部だけ残存していたが，比較的良好な状態であった。周溝は検出された壁下には見られた。柱穴は主柱穴の4本（P1，58 cm，P2，86 cm，P3，66 cm，P4，51 cm）と壁柱穴が22本検出された。

遺物は若干出土したにすぎない。

011号住居跡（第18図，図版8－1）

D1・2区に位置する。住居の東側半分以上を削平と溝により壊されている。1辺8mの方形を呈すると考えられる。カマドは北壁の中央にあり，袖の基部のみが残存する。ロームへの掘り込みは 34 cm を測る。床は比較的良好な状態であった。周溝は検出された壁下には認められた。柱穴は主柱穴の4本（P1，71 cm，P2，68 cm，P3，36 cm，P4，78 cm）と壁柱穴が8本検出されている。

遺物の出土は土師器片が少し出土したにすぎない。

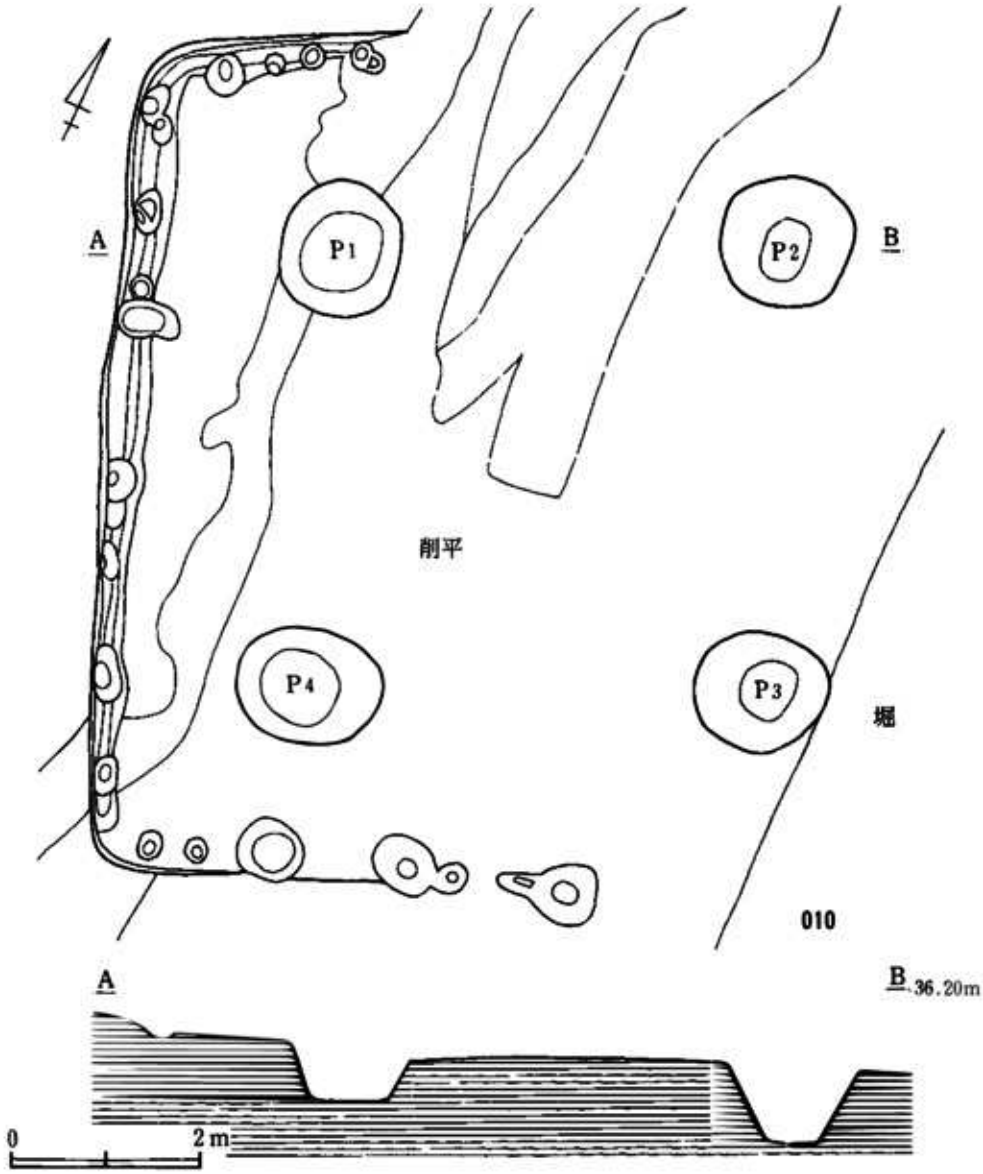
012号住居跡（第18図）

D1区に位置する。削平により床面近くまで削られ，東側半分は壊されている。1辺3mの方形を呈すると考えられる。カマドは北壁に設けられており，火床部の焼土だけが残っている。床面は非常に硬くしまっている。周溝は検出された壁下では見られた。柱穴は認められなかった。

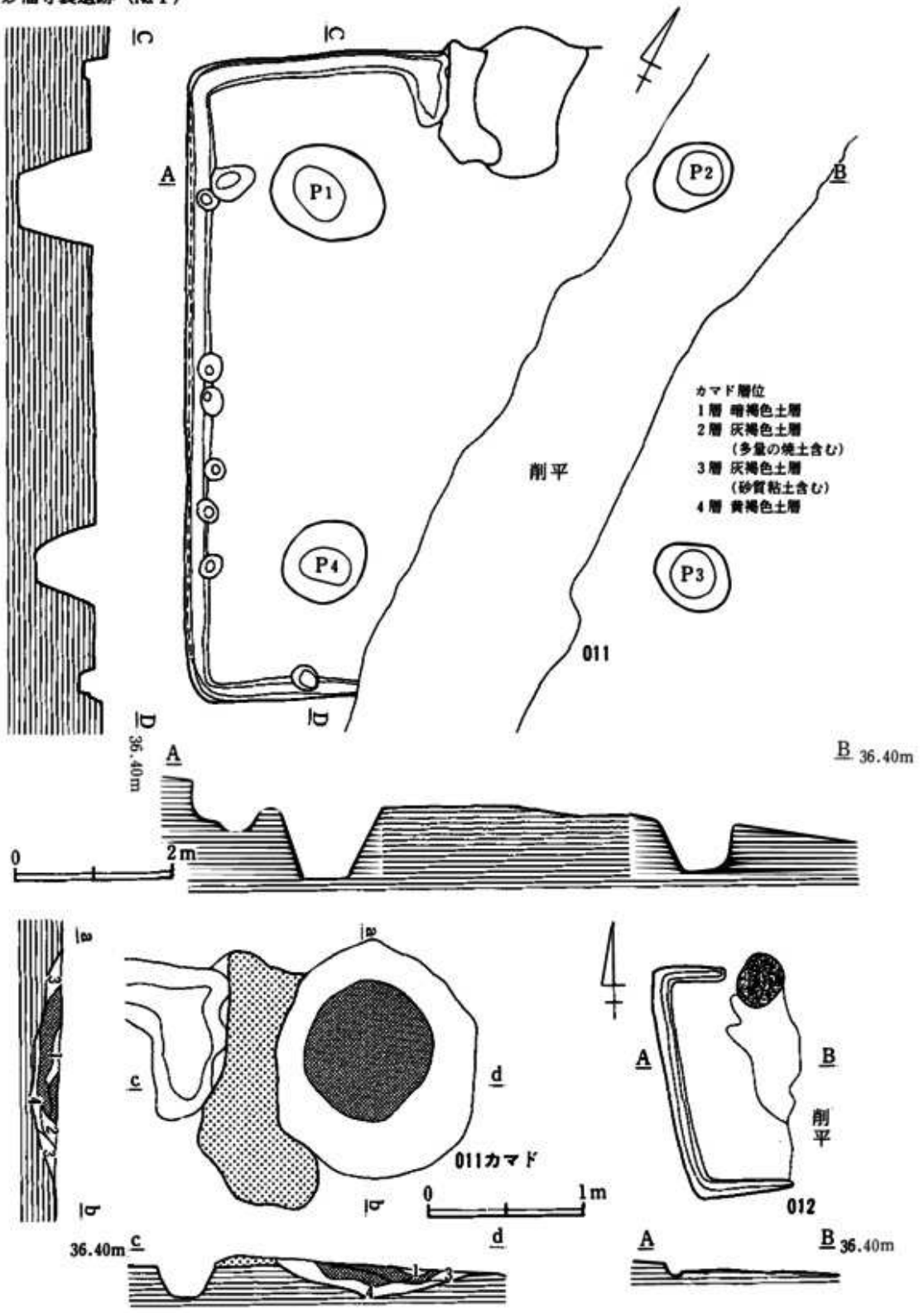
遺物は若干土器片が出土しただけである。

013号住居跡（第19図，図版8－2）

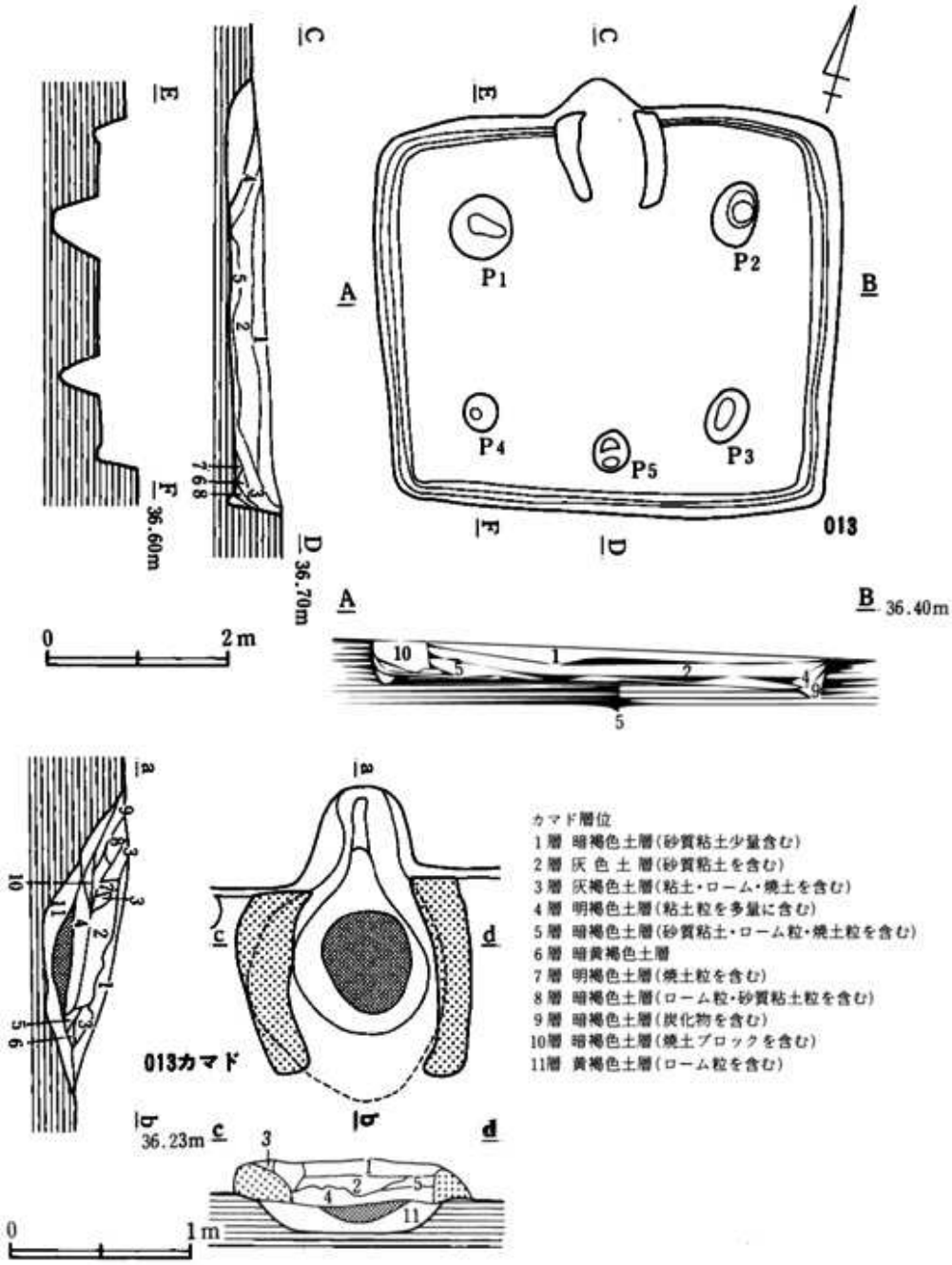
C1区に位置する。215号土坑と重複する。4×5mの長方形を呈する。覆土は，1層：黒褐色土層，2層：黒褐色土層（焼土粒，炭化物粒を含む），3層：黒褐色土層，4層：灰褐色土層



第17図　010号住居跡実測図



第18図　011号，012号住居跡実測図



第19図　013号住居跡実測図

（山砂を多く含む），5層：黒褐色土層，6層：黒褐色土層（炭化物粒を多く含む），7層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），8層：黄褐色土層（ローム粒を多く含む），9層：暗褐色土層，10層：黒褐色土層（ローム粒，焼土粒を多く含む）である。カマドは北壁の中央に設けられており，袖部だけ残存する。ロームへの掘り込みは40cmを測る。床面は，中央附近は硬くしまっているが四隅は非常に軟かい。周溝はカマド部分を除いて全周する。柱穴は主柱穴の4本（P1，50cm，P2，51cm，P3，53cm，P4，44cm）と，P3，P4の中間のやや壁寄りに深さ35cmのピットが検出されている。

遺物は比較的多く出土している。

014号住居跡（第20，21図，図版9－1）

C1区に位置する。013号住居跡の北西にある。3.5×3.5mの方形を呈する。覆土は，1層：黒褐色土層，2層：黒褐色土層（焼土粒子を多く含む），3層：焼土層，4層：褐色土層（ローム粒，ロームブロックを多く含む），5層：黒色土層，6層：褐色土層，7層：茶褐色土層，8層：暗褐色土層である。カマドは東壁の中央よりやや南寄りに設けられており，煙道部はあまり掘り込まれていない。袖部のみ残存する。ロームへの掘り込みは53cmと深い。床面は中央は硬くしまっているが，周辺は軟かい。周溝はカマド部分を除き全周する。柱穴は認められなかった。カマドの南側に，深さ53cmの長方形の貯蔵穴が掘られている。遺物はそれほど多く出土しなかった。

015号住居跡（第20図，図版9－2）

C1区に位置する。014号住居跡の北側に隣接する。1辺3.3mの方形を呈する。覆土は，1層：暗褐色土層，2層：黒褐色土層（焼土粒を多く含む），3層：黒褐色土層，4層：暗褐色土層，5層：暗褐色土層（ローム粒を含む）である。カマドは北壁の中央に設けられており，袖部のみ残存する。ロームへの掘り込みは42cmを測る。周溝は，カマド部分と北東隅を除き全周する。柱穴は認められなかった。南側周溝近くに深さ20cmのピットが検出されている。

遺物の出土はそれほど多くない。

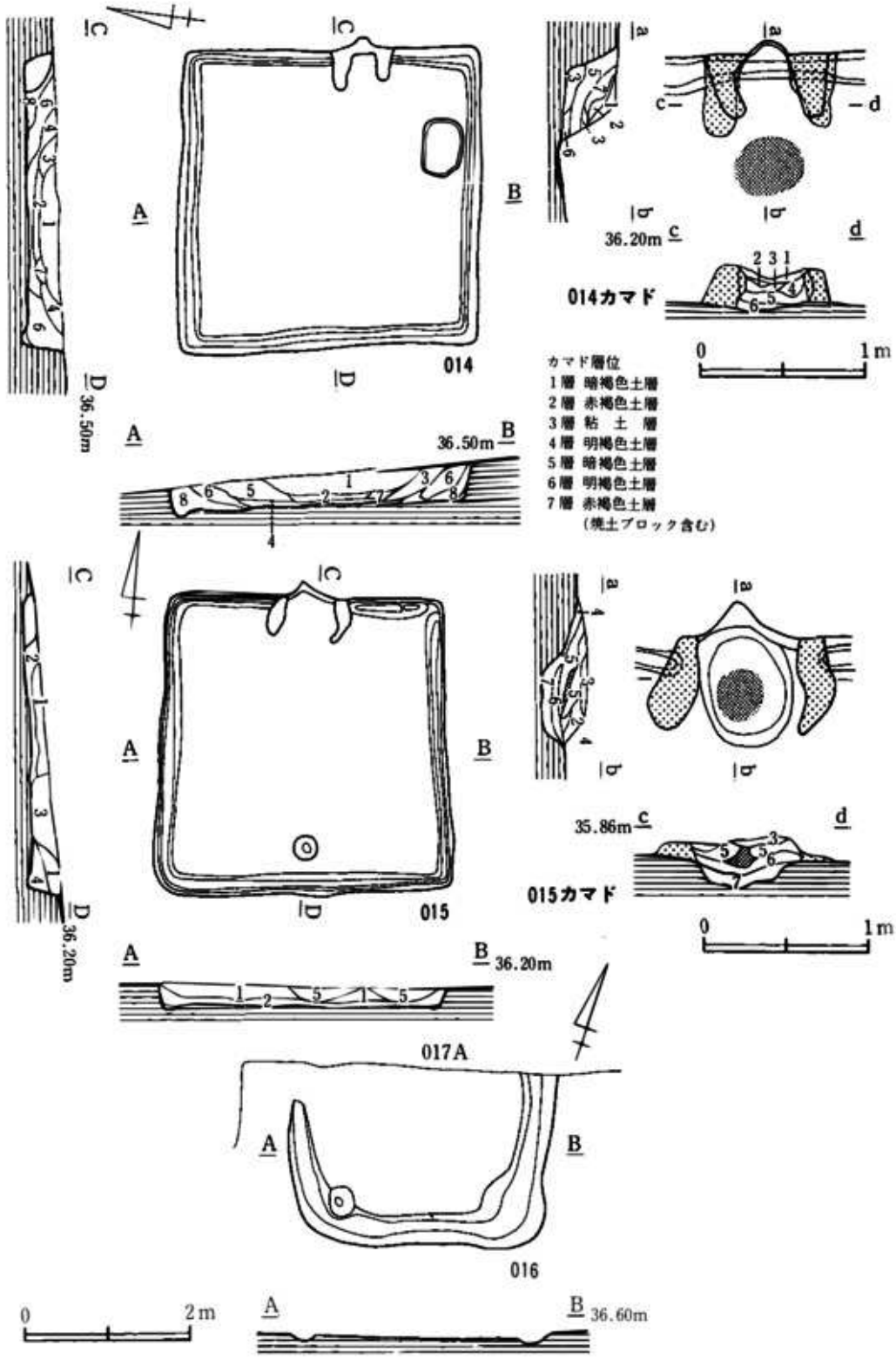
016号住居跡（第20図，図版10－1）

B・C1区に位置する。北側で017号住居跡と重複する。削平により床面近くまで削られてしまっている。1辺4mの方形を呈すると考えられる。カマドは検出されなかった。床面は軟弱であった。周溝は検出された壁下ではほぼ見られる。主柱穴と思われる柱穴はなかった。住居南西隅の周溝内に深さ28cmのピットが検出された。

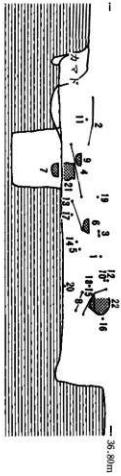
遺物の出土はほとんどなかった。

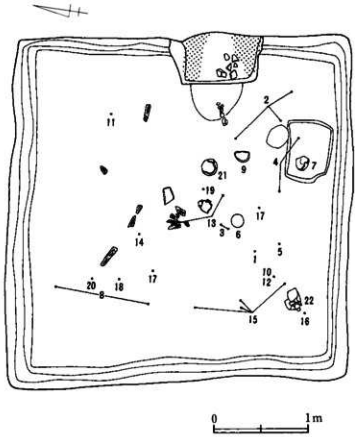
017A号住居跡（第22図，図版10－1）

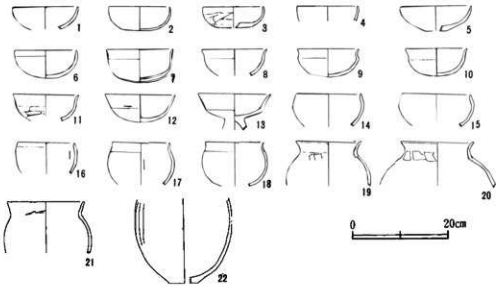
B・C1区に位置する。南側で016号，西側で017B・C号住居跡と重複する。5×5.4mの長



第20図　014号，015号，016号住居跡実測図







第21図　014号住居跡遺物出土状況

方形を呈する。覆土は，1層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），2層：暗褐色土層，3層：黄褐色土層（ロームブロックを含む），4層：黒褐色土層（ロームブロックを多く含む），5層：灰褐色土層（砂粒，粘土，ロームブロックを含む）である。カマドは北壁に袖部分が残っていた。ロームへの掘り込みは73cmと深い。床面は非常に良好な状態であった。周溝は，カマド部分を除き全周する。柱穴は主柱穴の4本（P1，64cm，P2，80cm，P3，61cm，P4，61cm）が検出された。またカマドの東側には深さ38cmの長方形を呈する貯蔵穴が検出された。

遺物は比較的多く出土している。

017B号住居跡（第22図，図版10－1）

B1区に位置する。東側で017A・C号住居跡と重複する。また北側は台地整形により壊されている。1辺3.7mの方形を呈すると考える。覆土は，1層：暗褐色土層，2層：黄褐色土層（ロームブロックを多く含む），3層：褐色土層である。カマドは検出されなかった。攪乱が多いが，残存部分の床面は良好な状態であった。周溝は検出された壁下には見られた。柱穴は主柱穴の4本（P1，41cm，P2，35cm，P3，51cm，P4，57cm）と，そのほかに重複する2本（P5，14cm，P6，25cm）の柱穴が検出された。

遺物の出土はそれほど多くなかった。

017C号住居跡（第22図，図版10－1）

B1区に位置する。東側に017A号住居跡，西側で017B号住居跡と重複し，北側を台地整形により壊され，残存するのは一部分である。規模，形態の詳細は不明である。カマドは，その痕跡の焼土と支脚が出土しただけで形態等は不明である。周溝は検出された壁下では見られた。主柱穴と思われる柱穴は検出されなかったが，南西隅に深さ13cmのピットが検出された。

遺物はわずかに出土している。

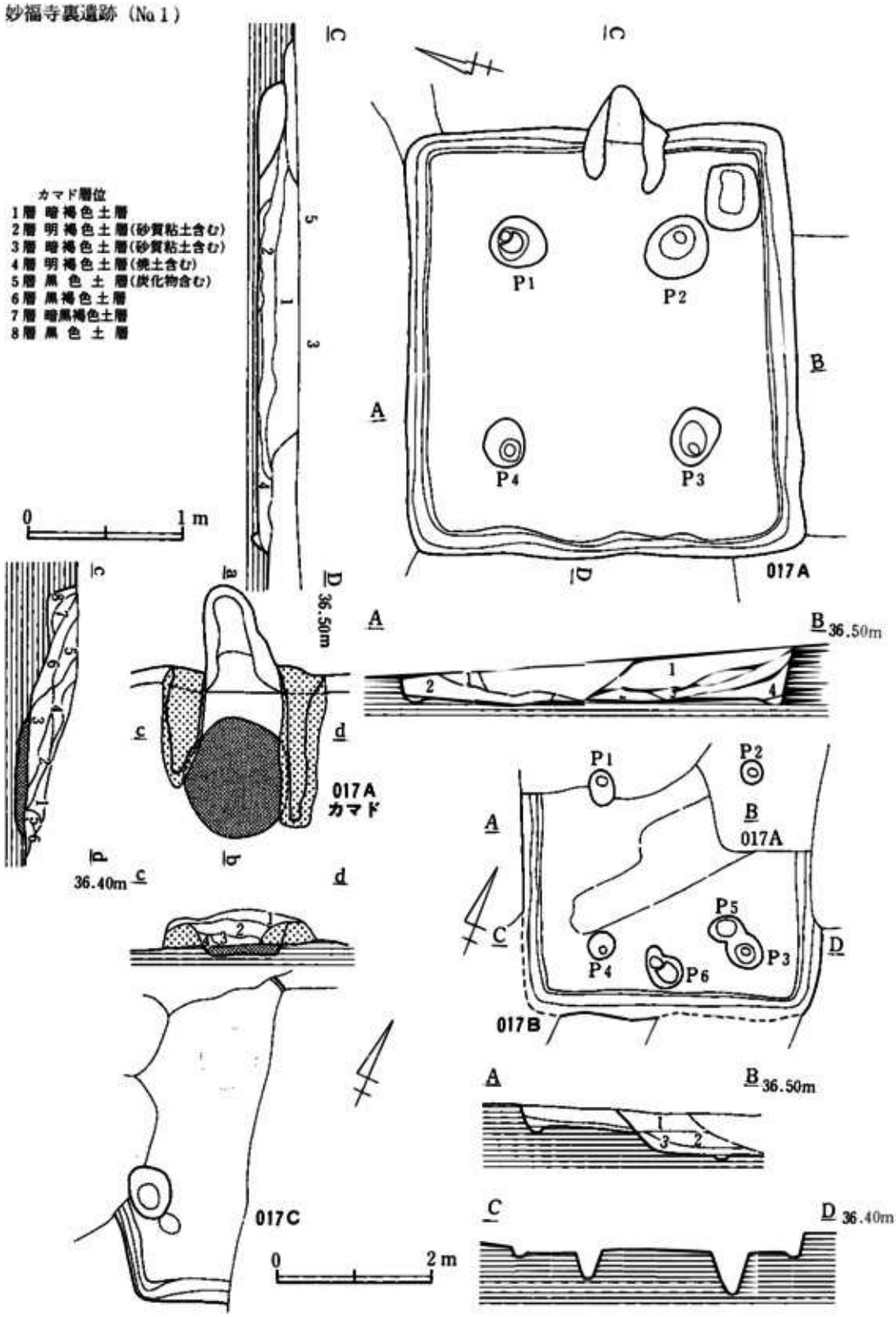
018号住居跡（第23図，図版10－2）

C1・2区に位置する。西側で019号住居跡と重複する。3.6×4.0mの長方形を呈すると考えられる。カマドは検出されなかった。ロームへの掘り込みは3cmと非常に浅い。床面は少し軟かく，あまり良い状態ではなかった。周溝は認められなかった。柱穴は主柱穴の4本（P1，58cm，P2，59cm，P3，58cm，P4，65cm）である。南隅には深さ10cmのピットが検出されている。

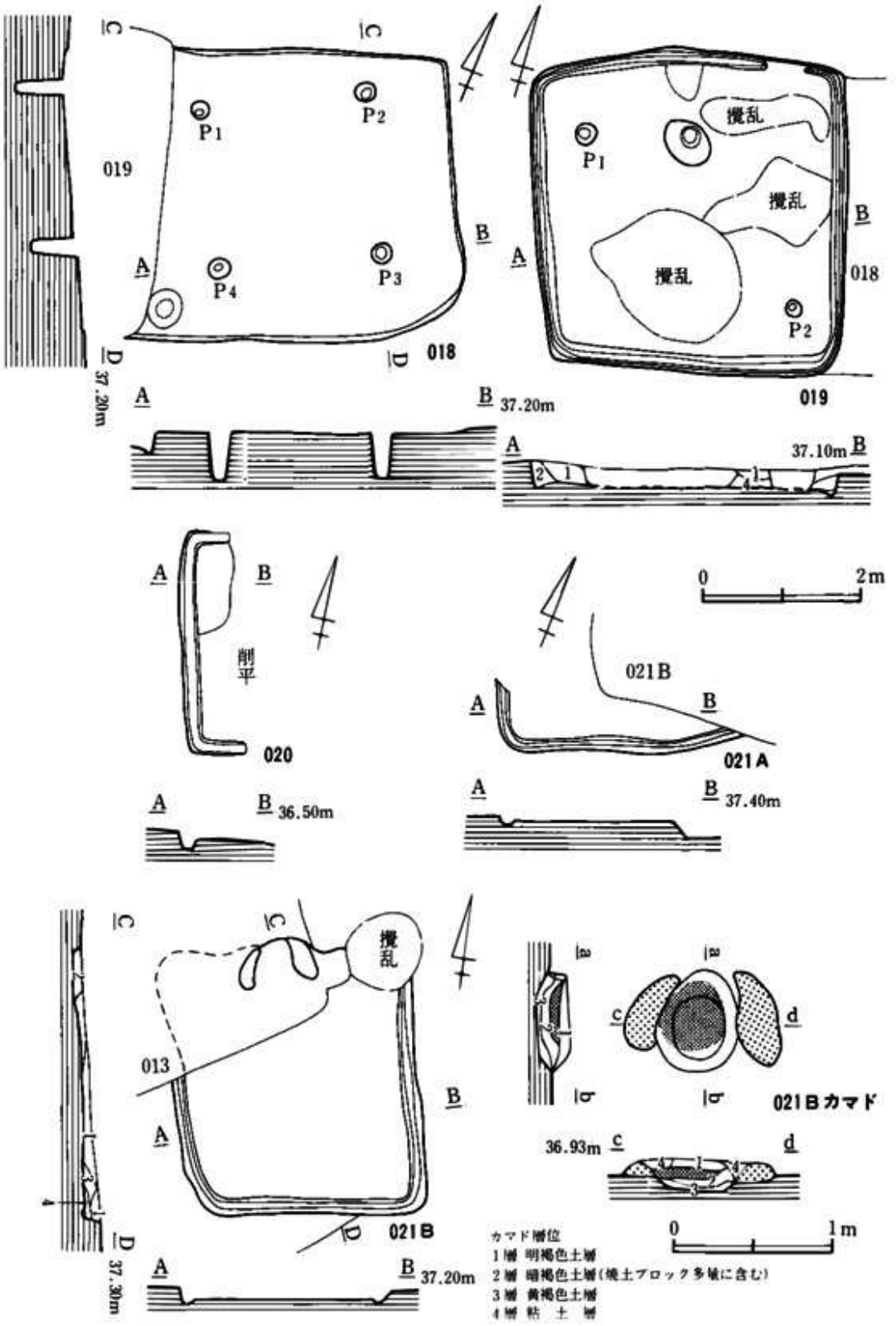
遺物の出土はそれほど多くはないが，高坏が1点出土している。

019号住居跡（第23図，図版11－1）

B1・2区に位置する。東側で018号住居跡と重複する。1辺4mの方形を呈する。覆土は，1層：黄褐色土層，2層：暗褐色土層，3層：褐色土層（ローム粒を多く含む），4層：黒褐色



第22図　017A・B・C号住居跡実測図



第23図　018号，019号，020号，021A・B号住居跡実測図

土層（ロームブロックを少し含む）である。カマドは北壁の中央にその痕跡が認められた。ロームへの掘り込みは27cmを測る。床面は一部が残るだけであるが，比較的良好な状態であった。周溝は北東の一部を除き検出された。柱穴は主柱穴と思われる2本（P1，20cm，P2，32cm）が検出された。また，中央カマド寄りに，深さ33cmのピットが検出されている。

遺物の出土はそれほど多くなかった。

020号住居跡（第23図，図版11－2）

D2・3区に位置する。010号住居跡の西側に隣接する。削平により西側の一部しか検出されなかった。1辺2.7mの方形を呈すると考えられる。カマドは検出されなかった。床面は軟弱である。周溝は検出された壁下には見られた。柱穴は検出されなかった。

遺物の出土はわずかである。

021A号住居跡（第23図，図版12－1）

B2区に位置し，削平により大半が消滅しており，東側で021B号住居跡と重複する。規模は不明，プランは隅丸方形と考えられる。カマドは確認できなかった。ロームへの掘り込みは10cmと浅い。床面の状態は悪い。周溝は確認された壁下に全周している。柱穴は検出されなかった。

遺物は破片がごくわずかである。

021B号住居跡（第23図，図版12－1）

B2区に位置し，東側で021A号住居跡，南側で031号住居跡と重複する。2.9×3.2mの長方形を呈する。覆土は，1層：黒褐色土層（ローム粒を含む），2層：褐色土層（ロームブロックを含む），3層：暗褐色土層（ロームブロックを含む），4層：黒褐色土層である。カマドは北壁のほぼ中央に位置し，袖部のみ残存する。ロームへの掘り込みは20cmである。床面はあまり良い状態ではなかった。周溝は全周すると考えられる。柱穴は検出されなかった。

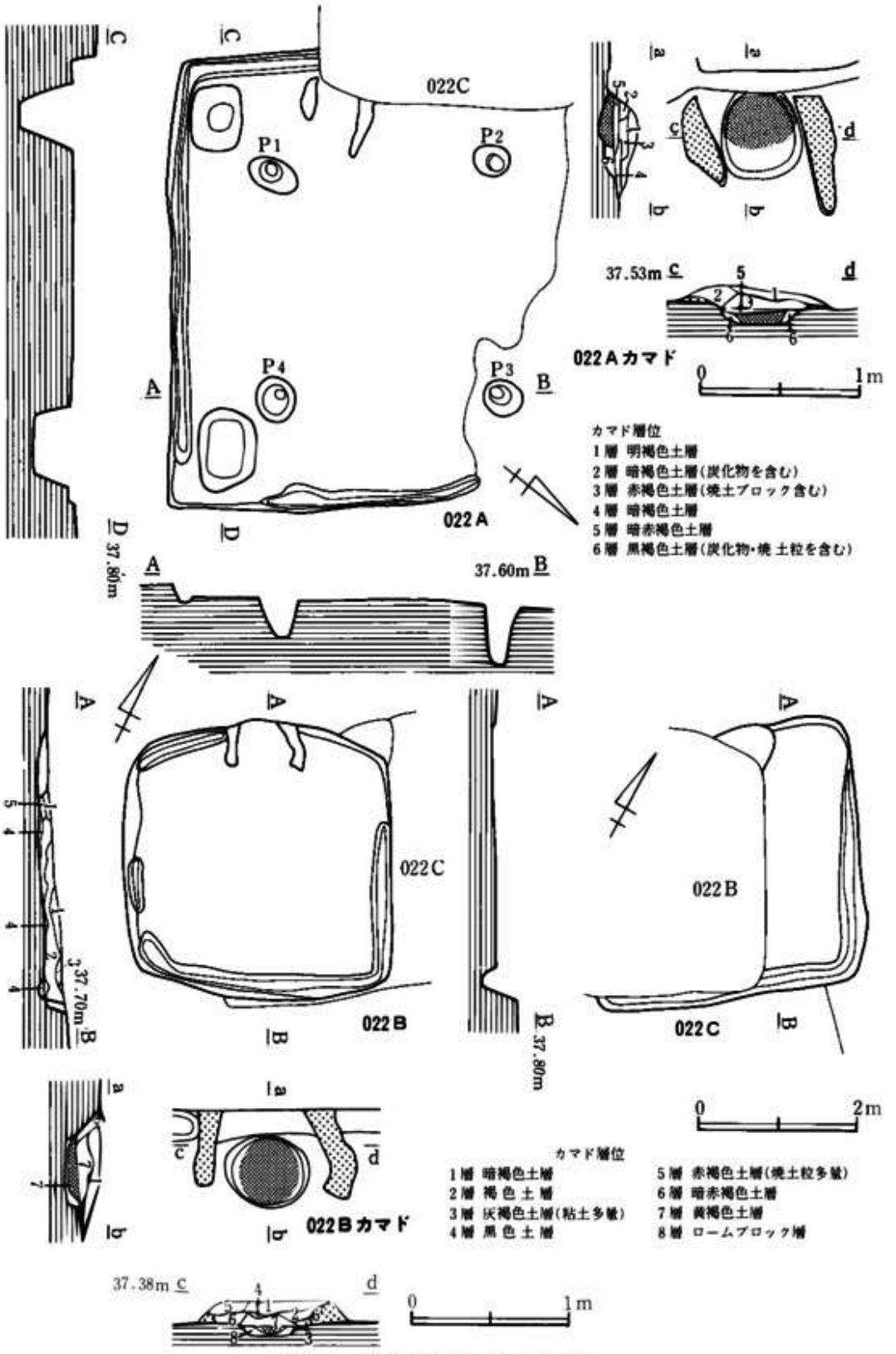
遺物はほとんど認められなかった。

022A号住居跡（第24図，図版12－2）

B2区に位置し，021A・B号住居跡の南に隣接する。西側で022C住居跡と重複する。北側は削平のために消滅している。1辺5.8mの方形を呈するとみられる。カマドは西壁の南寄りに位置し，022C号住居跡により一部壊されていて，袖部のみ残存する。ロームへの掘り込みは21cmと浅い。床面は良好な状況であった。周溝は東隅で切れるが，ほぼ全周すると考えられる。柱穴は，主柱穴が4本見られ，P1，70cm，P2，58cm，P3，85cm，P4，42cmを測る。またカマド南側と東隅にそれぞれ深さ33cm，26cmを測る貯蔵穴がある。

遺物は坏を中心に出土している。

022B号住居跡（第24図，図版13）



第24図　022A・B・C号住居跡実測図

Ｂ２区に位置し，022Ａ号住居跡の西側，022Ｃ住居跡と重複する。一辺3.4mの方形であるが，北壁がやや張り出す。覆土は，１層：黒褐色土層，２層：暗褐色土層，３層：黄褐色土層，４層：暗黄褐色土層，５層：褐色土層である。カマドは北壁のほぼ中央に位置し，袖部のみ残存している。ロームへの掘り込みは 30 cm とやや深い。床面は良好な状態であった。周溝は，住居の南東側に検出された。主柱穴は検出できなかった。

遺物は完形の坏，甑が出土したほかは破片が少しである。

022Ｃ号住居跡（第24図，図版13－１）

022Ａ・Ｂ号住居跡に挟まれた状態で，大部分が022Ｂ号住居跡によって壊されている。１辺3.4mの方形を呈すると考えられる。カマドは北壁に位置し，大半が022Ｂ号住居跡により壊されている。ロームへの掘り込みは 20 cm である。床面は少し軟弱であった。周溝は南と東の壁下にのみ認められる。主柱穴は検出できなかった。

遺物は破片が少し出土したにすぎない。

022Ａ・Ｂ・Ｃ号住居跡の新旧関係は，Ａ・Ｃ・Ｂの順に新しくなる。

023Ａ号住居跡（第25図，図版14－１）

Ｂ２区南に位置する。023Ｂ号住居跡と重複する。削平により周溝と柱穴のみの検出にとどまる。規模は，１辺４m前後の方形と考えられる。カマドはその痕跡も認められなかった。床面は，削平，攪乱によりほとんどない。周溝は幅 15 cm，深さ 3 cm を測る。おそらく全周すると考えられる。柱穴は主柱穴と考えられる４本（Ｐ１，52 cm，Ｐ２，25 cm，Ｐ３，47 cm，Ｐ４，70 cm）で，Ｐ３とＰ４の中間周溝寄りに深さ 34 cm のピットがある。また南隅には深さ 46 cm の貯蔵穴がある。

遺物の出土はほとんどなかった。

023Ｂ号住居跡（第25図，図版14－１）

Ｂ２区南，023Ａ号住居跡と重複する。Ａと同様に周溝の一部と柱穴のみの検出であった。カマドは認められなかった。周溝は一部のみ検出された。主柱穴は４本（Ｐ１，46 cm，Ｐ２，50 cm，Ｐ３，52 cm，Ｐ４，56 cm）であると考えられる。

遺物の出土はほとんどない。

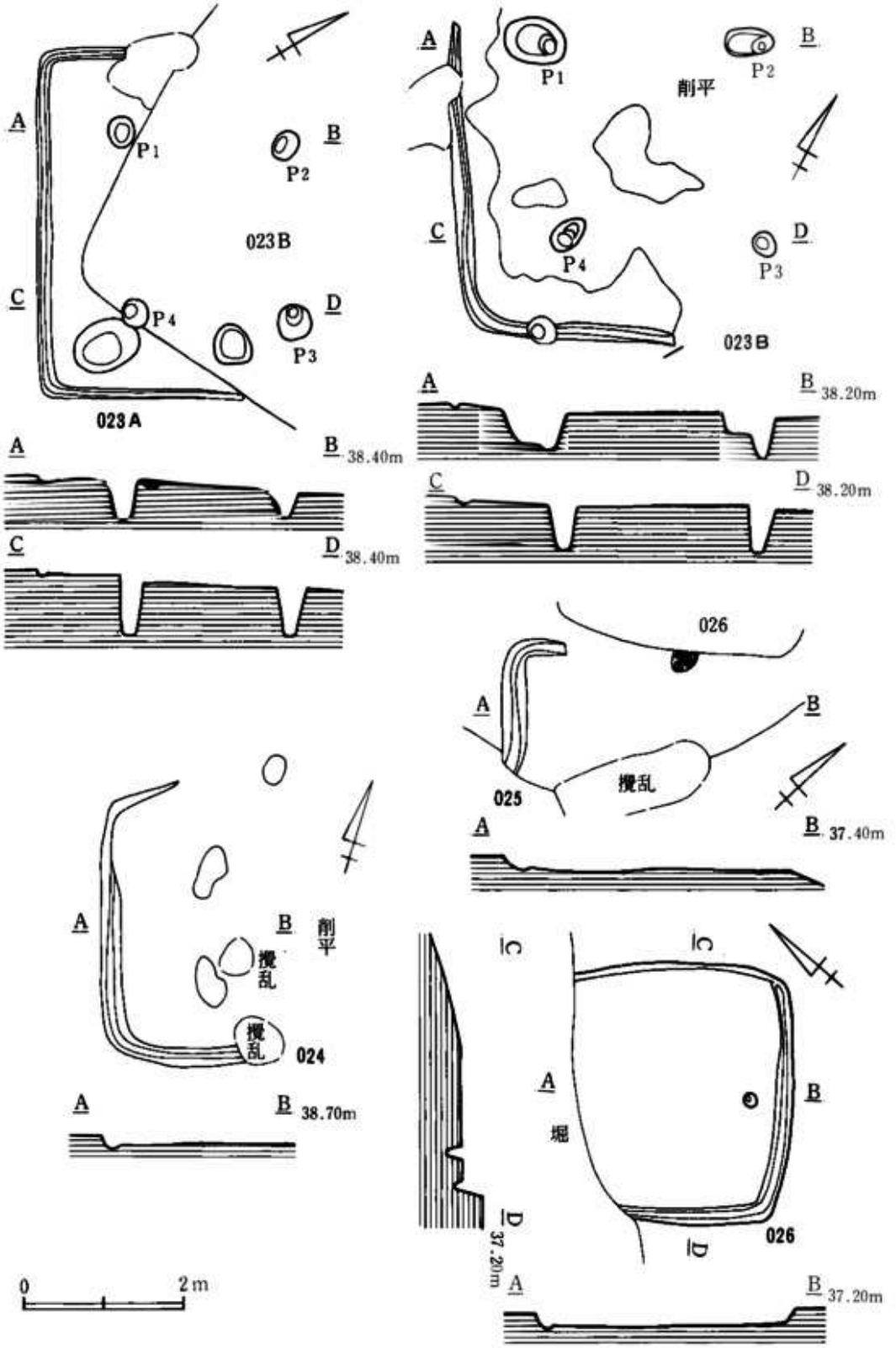
024号住居跡（第25図，図版14－２）

Ｂ３区の北に位置する。削平と攪乱により周溝の一部のみの検出であった。カマドは痕跡も認められなかった。周溝は南と東の一部のみの検出であった。柱穴は確認できなかった。

遺物の出土はなかった。

025号住居跡（第25図，図版15－１）

Ｂ２区北側026号住居跡の南側で一部重複する。南側は溝により壊されており，規模，形態と



第25図　023A・B号，024号，025号，026号住居跡実測図

も詳細は不明である。カマドは認められなかったが，北側で026号住居跡と重複する地点に焼土があり，カマドと考えられる。ロームへの掘り込みは22cmを測る。床面は残っていない。周溝は西壁の一部のみ検出された。柱穴は確認できなかった。

遺物の出土はほとんどない。

026号住居跡（第25図，図版15－2）

B2区北側025号の北側に接して位置する。北側は台地整形のため消滅しており，南側の半分が残るのみである。1辺4mの方形を呈すると考えられる。カマドは認められなかった。ロームへの掘り込みは30cmとやや深い。床面は比較的良好な状態であった。周溝は認められなかった。柱穴は認められなかったが南壁際に深さ19cmのピットが存在する。

遺物は破片が少し出土したにとどまる。

027号住居跡（第26図，図版16－1）

B2区の西側に位置する。北側に028号住居跡が隣接する。一部が溝によって壊されている。規模は3.7×3.6mのほぼ方形を呈する。覆土は1層：暗褐色土層（ローム粒，焼土粒を少し含む），2層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む）の2層である。カマドは確認できなかった。ロームへの掘り込みは47cmと深い。床面は良好な状態であった。周溝は一周すると考えられる。柱穴は主柱穴と考えられる4本（P1，32cm，P2，55cm，P3，64cm，P4，46cm）とピット（深さ20cm）が，P3，P4の中間に位置している。

遺物の出土は少ない。

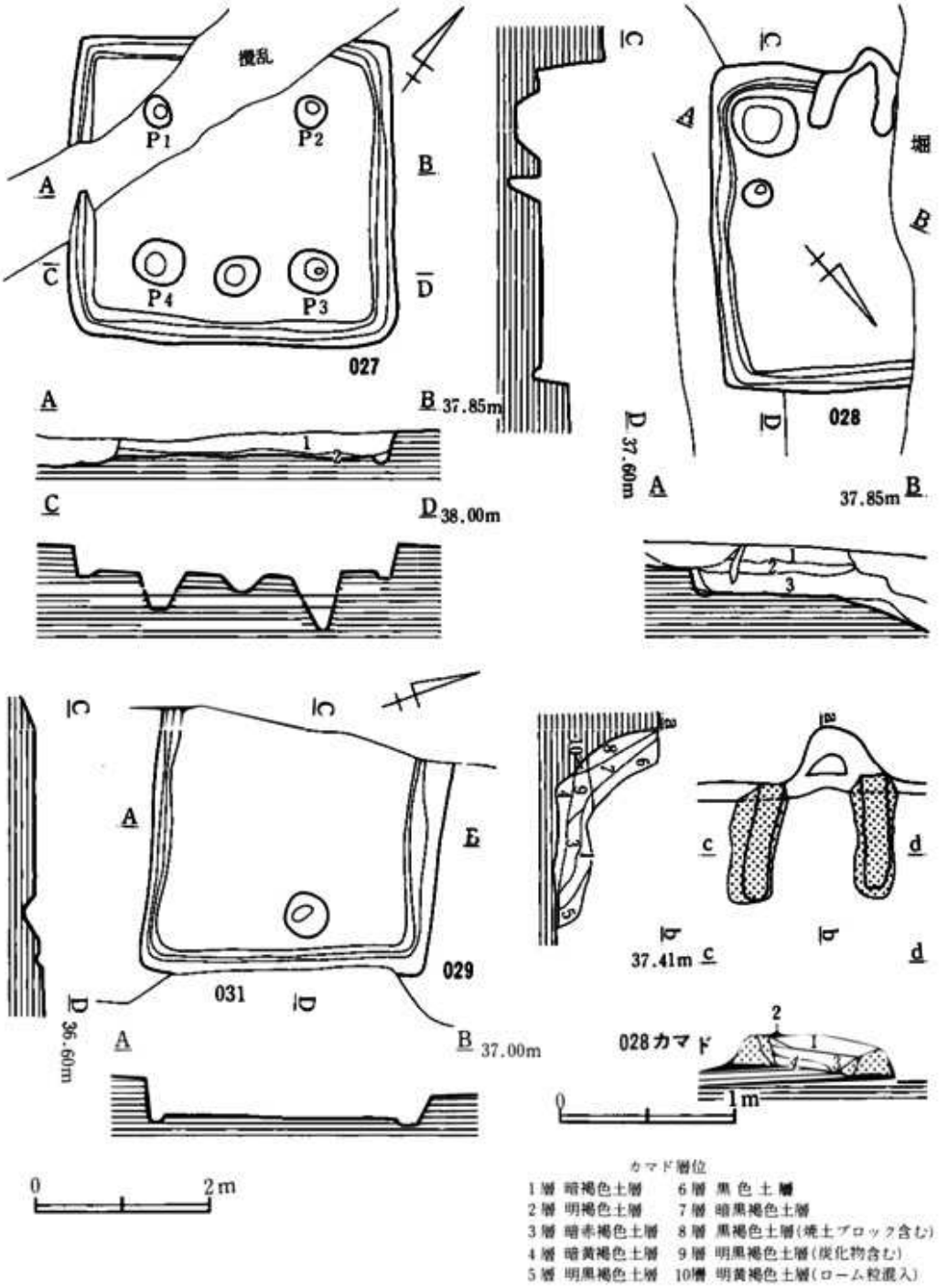
028号住居跡（第26図，図版16－2）

B2区西側，027号住居跡の北側に隣接して位置する。北側は台地整形により削られ，消滅しており，南側半分が残存するだけである。規模は1辺3.7mの方形と考えられる。覆土は1層：暗褐色土層，2層：褐色土層（ローム粒を多く含む），3層：黒褐色土層（粘性あり），4層：褐色土層である。カマドは西壁の南寄りに位置し，上部は壊されている。ロームへの掘り込みは50cmと深い。床面は良好な状態であった。周溝は検出された壁下では全周する。主柱穴と思われるものは確認できなかった。西壁に深さ36cmのピットがある。また，カマド南側に深さ32cmの方形をした貯蔵穴が検出された。

遺物は完形の甕などが出土している。点数はそれほど多くはない。

029号住居跡（第26図，図版17－1）

B1・2区に位置し，東側で031号住居跡と重複する。西側は台地整形により消滅している。1辺3.4mの方形と考えられる。カマドは検出されなかったが，西壁に位置していたと考えられる。ロームへの掘り込みは50cmと深い。床面は良好な状態であった。周溝は残存部の3辺に見られるので一周したものと考えられる。主柱穴と考えられるピットはない。東壁際に深さ14



第26図　027号・028号・029号住居跡実測図

cm と浅いピットがある。

遺物はそれほど多くはない。

031号住居跡（第27図，図版17－2）

Ｂ１・２区に位置する。西北側で029号住居跡と，南側で021Ａ・Ｂ号住居跡と重複する。また南北に溝とも重複する。１辺4.7mの方形を呈すると考えられる。覆土はロームブロックと褐色土が混在する。ロームへの掘り込みは 61 cm と深い。床面は硬くしまっている。周溝と柱穴は検出されない。

遺物の出土はない。

本遺構は構築中だったのか，住居跡のように日常的に使われていたとは考えられない。

032号住居跡（第27図，図版18－１）

Ｂ３区に位置する。西側は削平と溝のために消滅している。１辺４mの方形と考えられる。カマドは確認できなかった。ロームへの掘り込みは 4 cm と非常に浅い。床面は攪乱のためにほとんど残っていない。周溝は３辺にみられるが，１周すると考えられる。主柱穴と思われるピットはない。西側溝に接して深さ 15 cm の貯蔵穴と思われるピットがある。

遺物はほとんどない。

033号住居跡（第27図，図版18－２）

Ｂ３区南側に位置する。削平により北側の半分近くは消滅している。１辺５mの方形を呈すると考えられる。カマドは確認できない。掘り込みは 6 cm と非常に浅い。床面はほとんど残っていない。周溝はない。柱穴は主柱穴と思われるものはない。中央やや南寄りに深さ 60 cm の深いピットがある。また東隅に深さ70 cmの楕円を呈するピットがある。貯蔵穴であろうか。

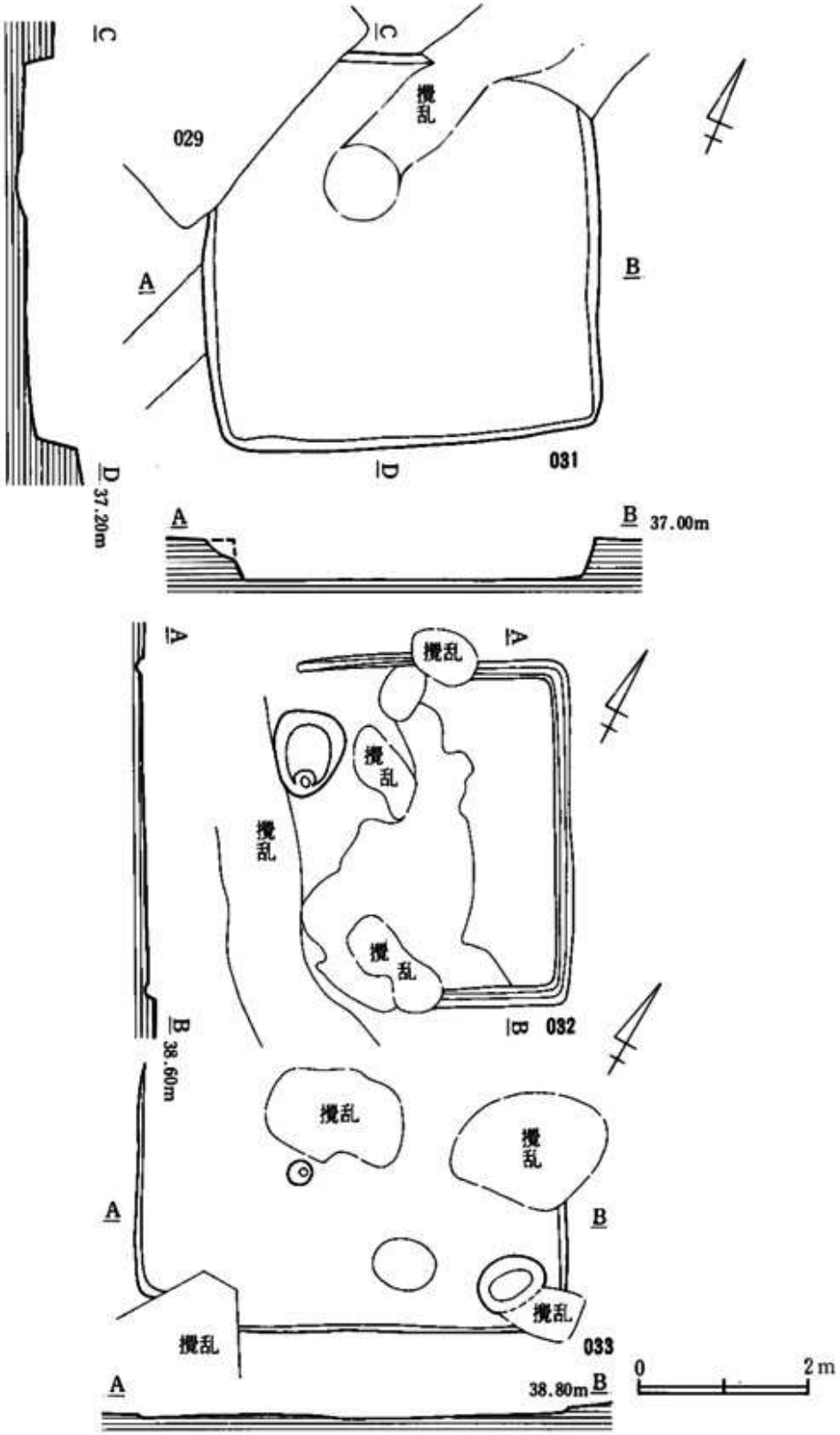
遺物は破片を出土するのみである。

034Ａ号住居跡（第28・29図，図版19）

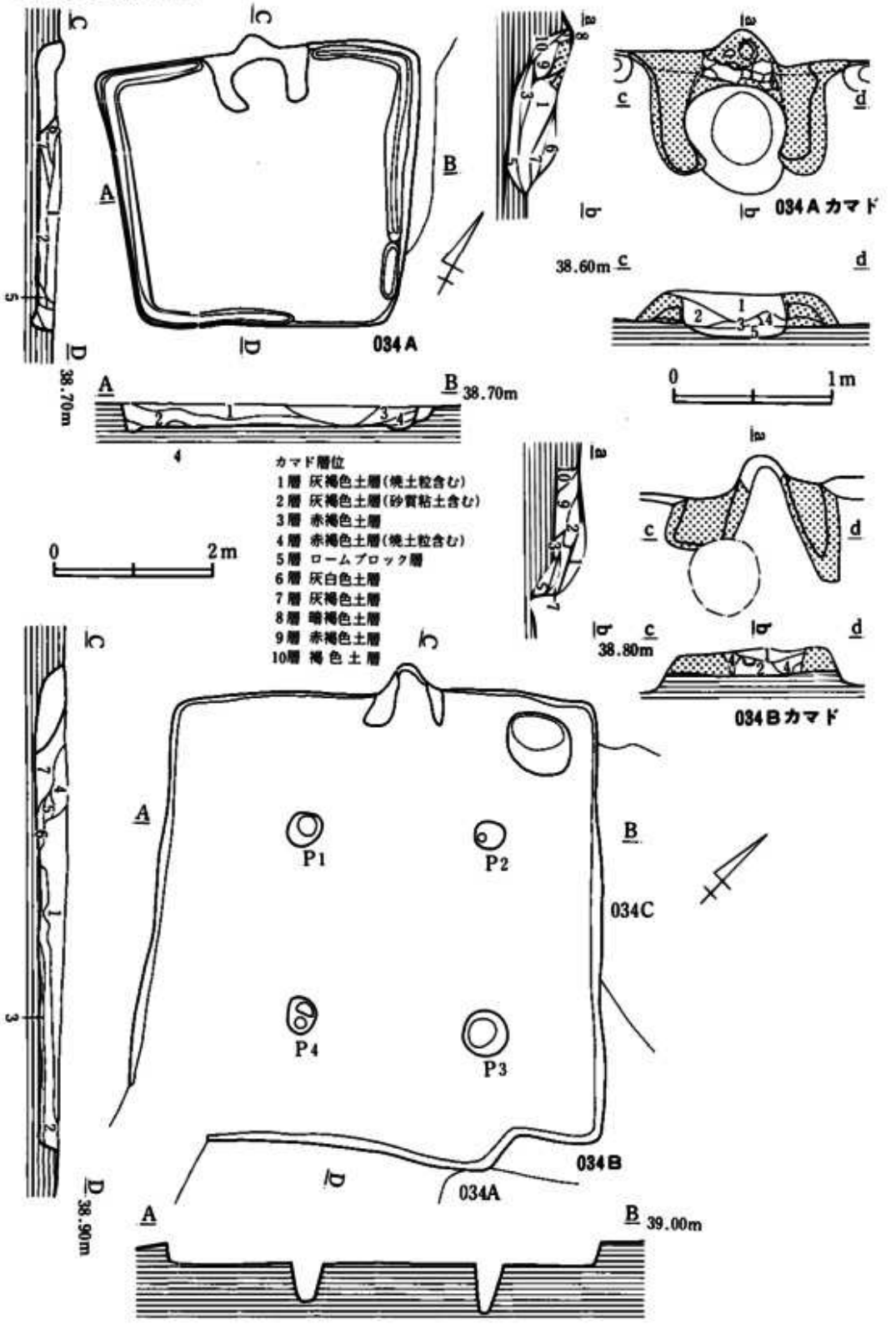
Ｂ４区北東隅に位置する。北側で034Ｂ・Ｃ号住居跡と接する。台形を呈し，長辺４m，短辺3.1m，他の２辺3.1mを測る。覆土は１層：褐色土層(ローム粒を多く含む)，２層：褐色土層（ロームブロックを多く含む），３層：暗褐色土層，４層：暗褐色土層(ロームブロックを少し含む)。５層：黒色土層（炭化物粒，灰を多く含む），６層：暗褐色土層（山砂を少し含む）。７層：灰褐色土層（焼土粒を少し含む）である。カマドは北壁の中央に位置する。カマドの残りはよかった。煙道部近くに土器（甕形土器）２個体分が壁を作るように埋められていた。ロームへの掘り込みは 30 cm を測る。床面はそれと分かるが，少し軟弱である。周溝はカマド部分と東隅の一部を除き一周する。柱穴はない。

遺物は甕形土器が多く出土し，土器が倒立した状態で出土したものもある。

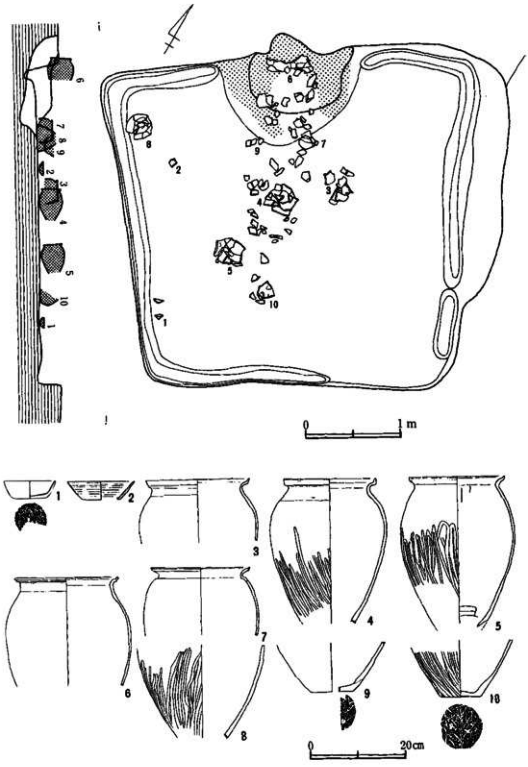
034Ｂ号住居跡（第28図，図版20－１）



第27図　031号，032号，033号住居跡実測図



第28図　034A・B号住居跡実測図



第29図　034A号住居跡遺物出土状況

B3・4区に位置する。東側で034C号住居跡と南で034A号住居跡と重複する。また南隅は攪乱を受けている。1辺5.5mの方形を呈すると考えられる。覆土は，1層：黒褐色土層，2層：暗褐色土層，3層：褐色土層(ロームブロックを少し含む)，4層：黄褐色土層，5層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），6層：暗褐色土層（ロームブロックを多く含む），7層：暗褐色土層（ローム粒，焼土粒を少し含む）である。カマドは北壁のほぼ中央に位置し，袖部だけの残存である。ロームへの掘り込みは20cmを測る。床面は溝等の構築により残存は少なく，軟弱である。周溝はない。主柱穴は4本(P1，47cm，P2，59cm，P3，50cm，P4，41cm)が中央に寄って位置する。またカマド西側に深さ57cmの方形に近い貯蔵穴がある。

遺物はカマド内をはじめ坏が出土している。点数はそれほど多くない。

034C号住居跡（第30図，図版20－1）

B3・4区に位置する。西側半分以上を034B号住居跡と重複している。規模，形態は重複と攪乱がはげしいので詳細は不明である。ロームへの掘り込みは12cmと浅い。床面は攪乱がはげしくほとんど残っていない。周溝はない。ピットは3ヶ所ある（P1，36cm，P2，54cm，P3，68cm)。

遺物の出土は少ない。底部に「大家」と書かれた墨書土器を確認した。

035A号住居跡（第30図，図版20－2）

B4区，034A号住居跡の南側約4mに位置する。1辺6mの方形を呈すると考えられる。覆土は1層：褐色土層（ローム粒，ロームブロックを多く含む），2層：明褐色土層（ロームブロックを多く含む），3層：褐色土層(ロームブロックを多く含み，また炭化物粒，焼土粒を少し含む)，4層：茶褐色土層である。カマドは北壁のほぼ中央に位置しているが，大半は攪乱により壊されている。ロームへの掘り込みは8cmと非常に浅い。床は少し軟弱である。周溝はない。主柱穴は4本（P1，48cm，P2，58cm，P3，54cm，P4，51cm）である。

遺物の出土はそれほど多くはなかった。

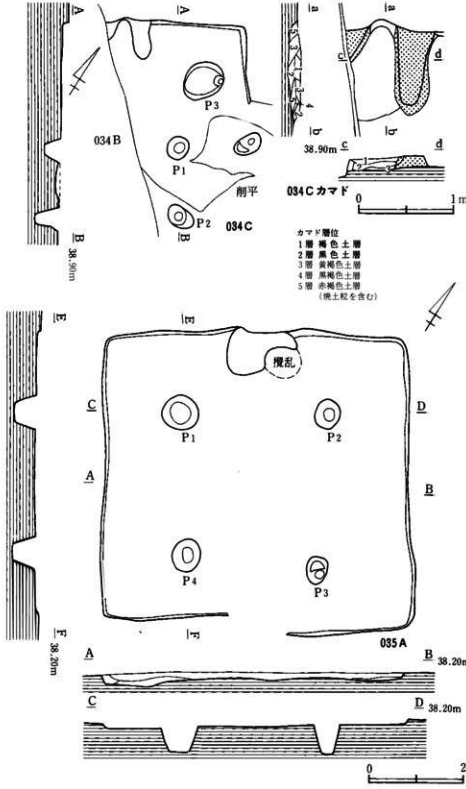
035B号住居跡

035A号住居跡の南西側に重複する住居跡である。住居跡が斜面部に位置していること，また立木が遺構の中にあり，規模，形態など詳細は不明である。

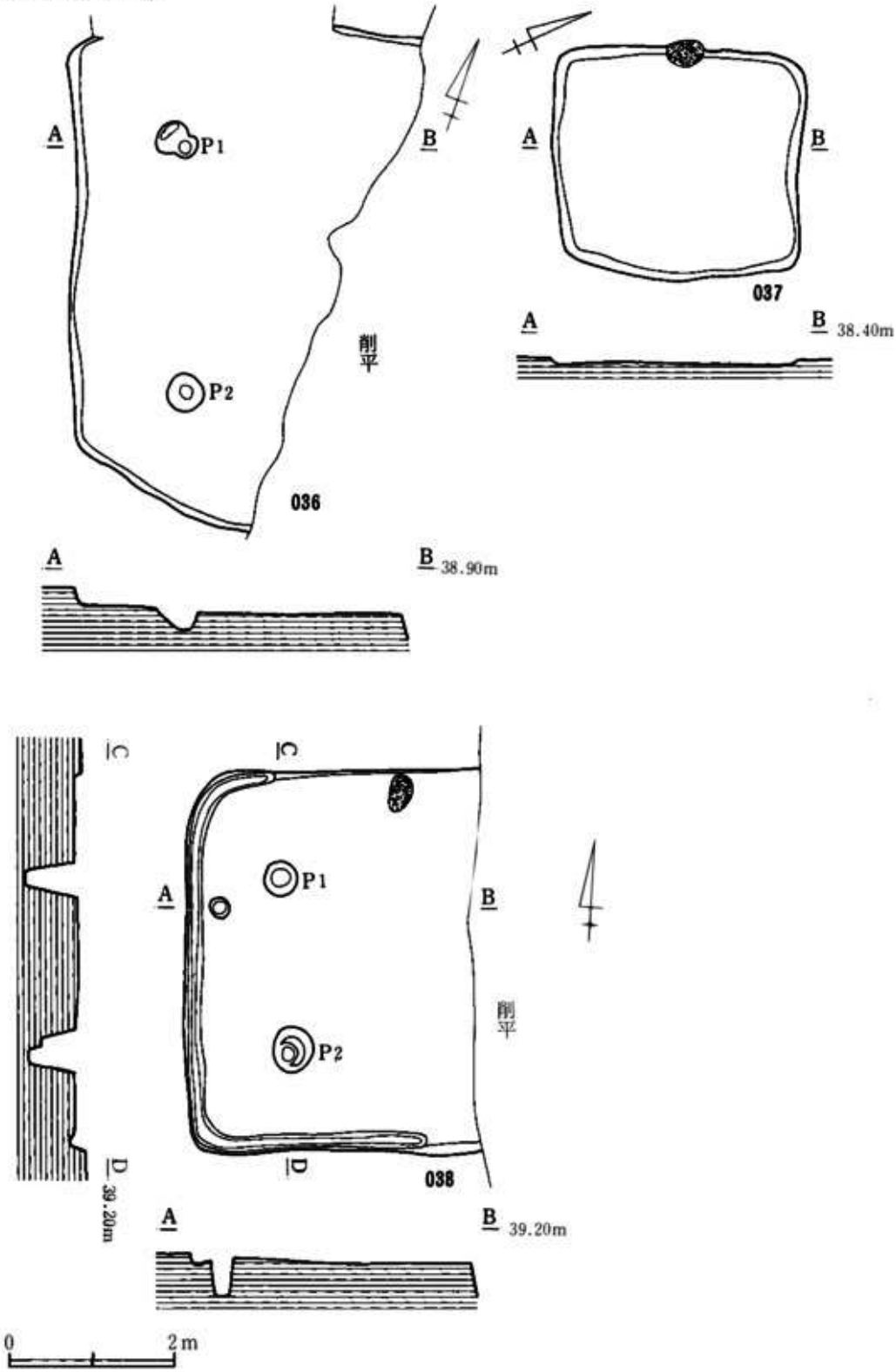
036号住居跡（第31図，図版21－1）

C3区南側に位置する。西側半分は台地整形により削られてしまっている。また北側は攪乱により壁が一部壊されている。1辺5mの方形を呈すると考えられる。カマドは確認できなかった。ロームへの掘り込みは16cmである。床面は比較的良い状態であった。周溝はない。柱穴は主柱穴と思われる2本（P1，20cm，P2，43cm）が検出されたにすぎない。

遺物の出土は少ない。



第30図　034C号，035A号住居跡実測図



第31図　036号，037号，038号住居跡実測図

037号住居跡（第31図，図版21－2）

C 3・4区に位置する。036号住居跡の南側に隣接している。1辺3mの方形を呈する。カマドは削平により消滅しているが焼土が北壁のほぼ中央に見える。ロームへの掘り込みは 8cm と浅い。床面は攪乱による凹凸がはげしく，非常に遺存が悪い状態である。周溝はない。柱穴も確認できなかった。

遺物の出土はほとんどなかった。

038号住居跡（第31図，図版22－1）

C 4区に位置する。住居の東側半分は，台地整形のために削られてなくなっている。1辺4.5mの方形と考えられる。カマドは確認できなかったが，北壁の際に焼土があり，カマドの痕跡と考えられる。ロームへの掘り込みは 8cm と浅い。床面は非常に軟弱である。周溝は西壁と北，南壁の一部に検出された。柱穴は主柱穴と思われる2本（P 1，60cm，P 2，55cm）と西側壁際に深さ 41cm のピットがある。

遺物の出土は少ない。

039号住居跡（第32図，図版22－2）

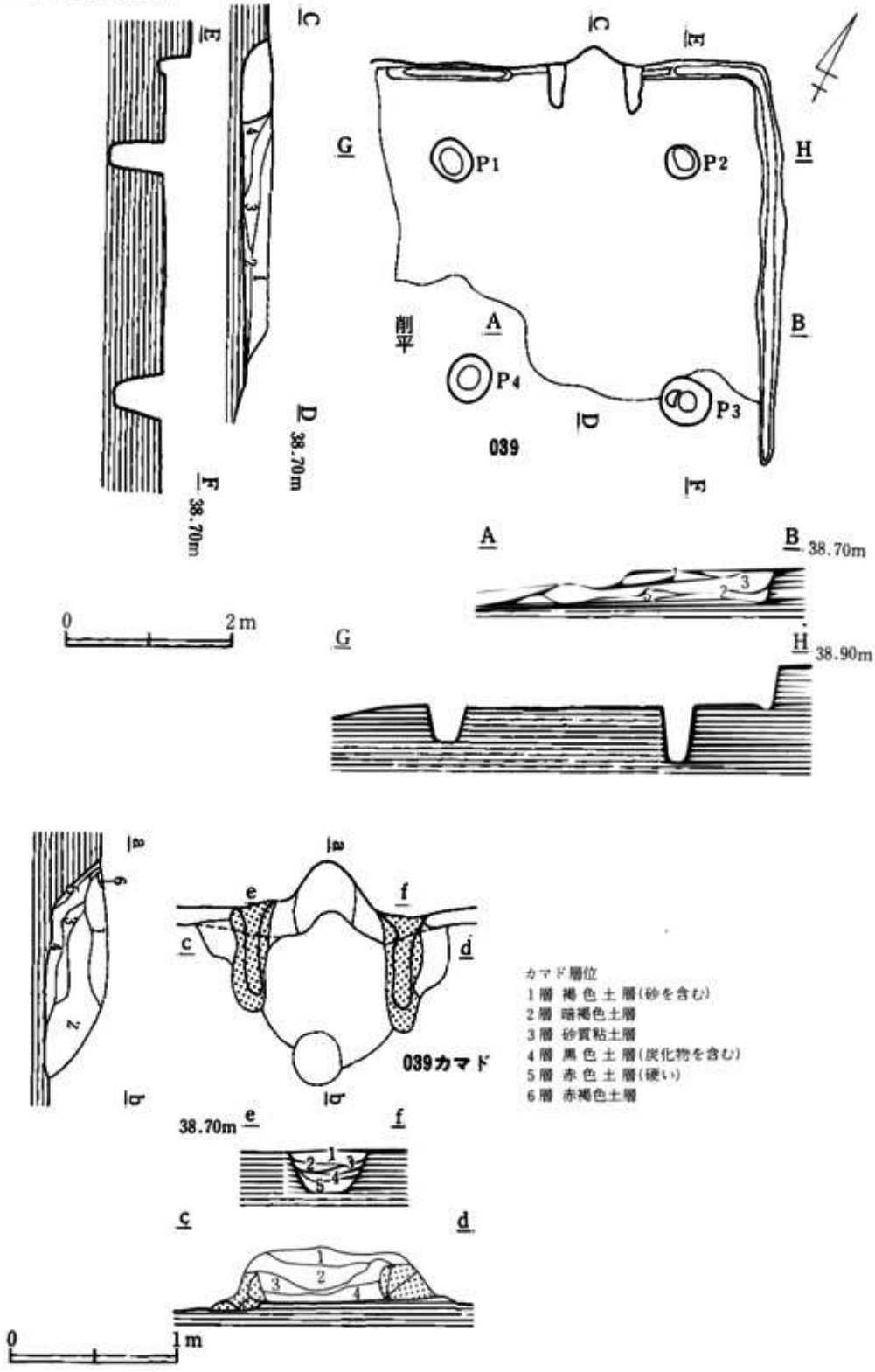
B・C 5区に位置する。本住居跡の上には塚が造られ，そのために西側と南側の壁，床が壊されてしまっている。1辺5mの方形と考えられる。覆土は，1層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），2層：褐色土層(ローム粒を多く含む)，3層：褐色土層(山砂を多く含む)，4層：灰褐色土層(ロームブロック，ローム粒を多く含む)，5層：褐色土層，6層：焼土である。カマドは北壁のほぼ中央に設けられている。上部は無く，袖部のみ残存する。ロームへの掘り込みは 31cm を測る。床面は軟弱な部分もあるが，比較的良好であった。周溝は北壁と東壁に残るのみである。柱穴は主柱穴の4本(P 1，38cm，P 2，63cm，P 3，56cm，P 4，39cm)が検出された。

遺物はそれほど多くなかった。

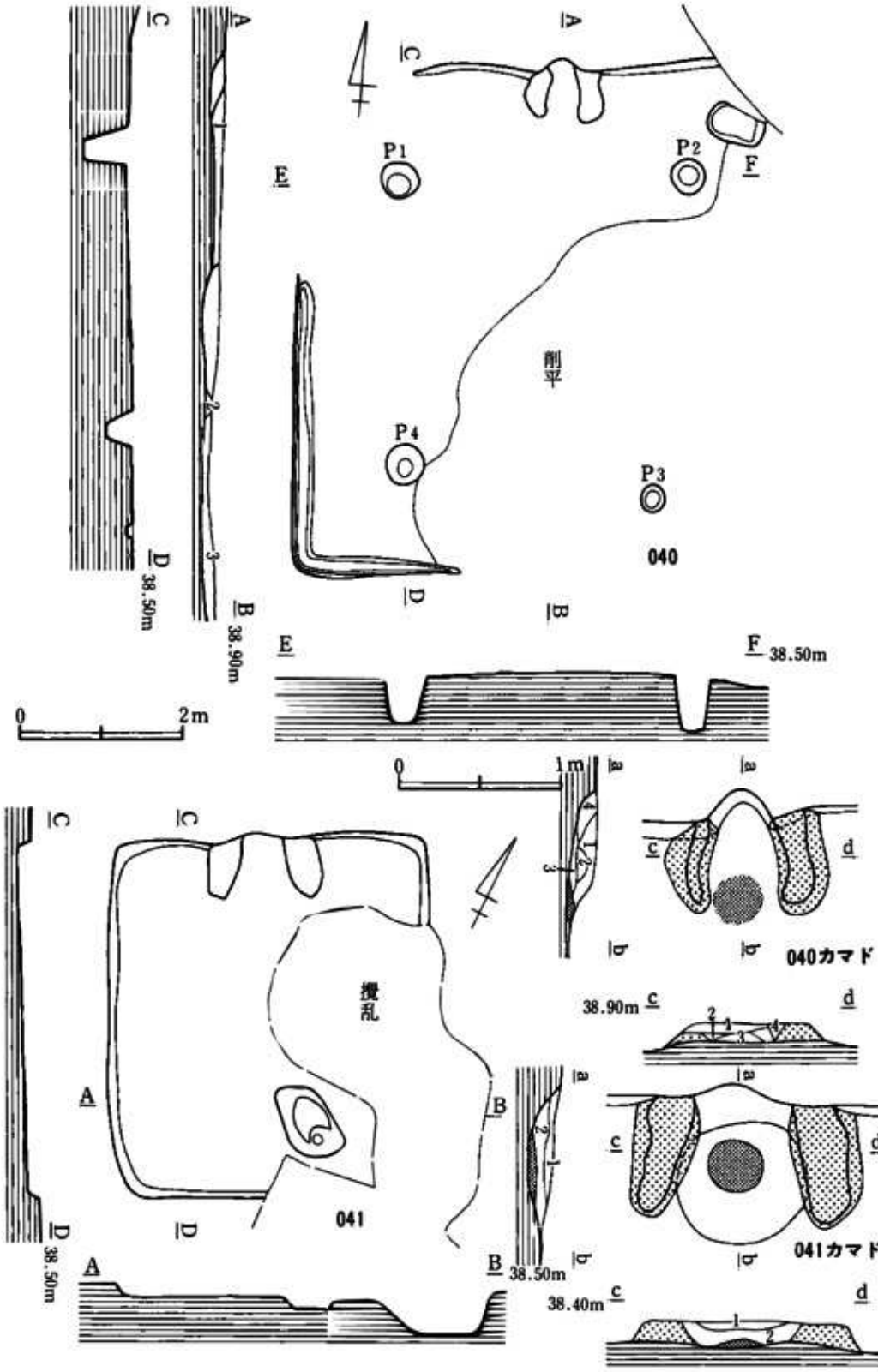
040号住居跡（第33図，図版23－1）

C 4・5区に位置する。北側で038号住居跡と隣接する。住居の北西部と南東部は，台地整形のため削られてしまっている。1辺6mの方形と考えられる。覆土は，1層：褐色土層，2層：明褐色土層(ロームブロックを含む)，3層：暗褐色土層である。カマドは北壁に設けられており，袖部の一部が残っているにすぎない。ロームへの掘り込みは 4cm と浅い。床面は攪乱等により軟弱であった。周溝は西壁と南壁の一部にみられるだけで，一周するかは不明である。柱穴は主柱穴と思われる4本（P 1，57cm，P 2，65cm，P 3，51cm，P 4，72cm）が検出された。またカマド東側には深さ 39cm の長方形を呈する貯蔵穴がある。

遺物の出土はほとんどない。



第32図　039号住居跡実測図



第33図　040号・041号住居跡実測図

カマド層位

1層：暗褐色土層（ローム粒を少し含む），2層：黒色土層（炭化物粒を含む），3層：暗褐色土層（ローム粒を含む），4層：暗褐色土層

041号住居跡（第33図，図版23－2）

B5区に位置する。039号住居跡の南4mに位置する。東側は攪乱を受けている。1辺4mの方形と考えられる。カマドは北壁中央に位置する。袖部の基部が残るのみである。ロームへの掘り込みは16cmを測る。床面は少し軟弱である。周溝および柱穴は無い。

遺物の出土はわずかであった。

カマド層位

1層：灰褐色土層（粘土粒を含む），2層：黒色土層

042号住居跡（第34図，図版24）

E2・3区に位置する。西側⅔は調査区外で調査できなかった。また，北側で043号住居跡と重複する。1辺4.8mの方形と考えられる。カマドは確認されなかった。ロームへの掘り込みは60cmと深い。床面は硬く良好な状態であった。柱穴は主柱穴と思われる2本（P1，54cm，P2，59cm）と壁柱穴が3本（P3，20cm，P4，20cm，P5，14cm）検出された。

遺物は比較的多く出土した。

043号住居跡（第34・35図，図版24）

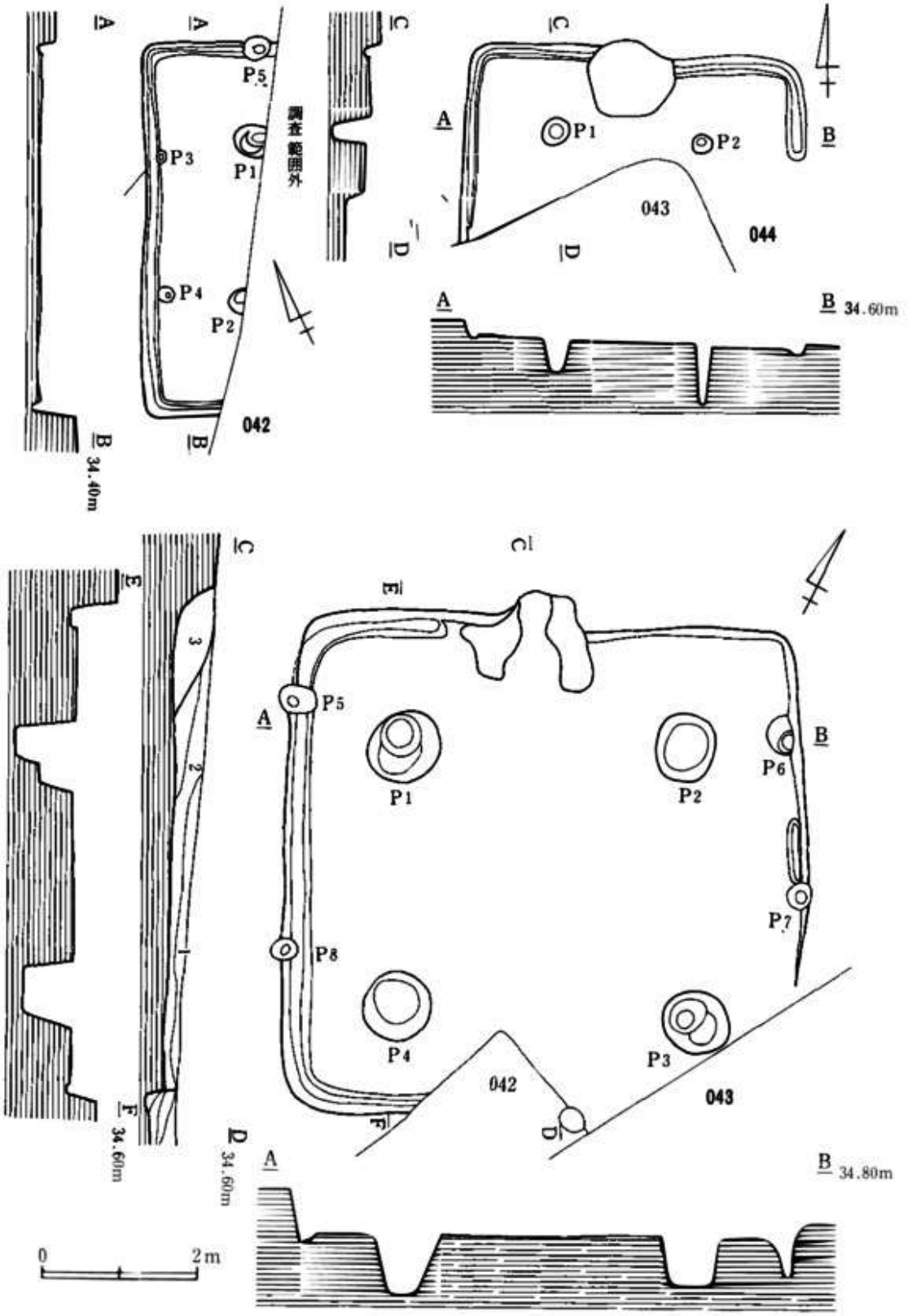
E2区に位置する。042号住居跡と南側で一部重複する。また南東部が削平と発掘調査区域外にかかるため詳細は不明。1辺6.4mの方形と考えられる。覆土は1層：暗褐色土層（炭化物粒，焼土粒を含む），2層：褐色土層，3層：暗褐色土層（焼土粒，粘土粒を少し含む）である。カマドは北壁の中央やや西寄りに位置する。袖部だけの検出であった。ロームへの掘り込みは53cmを測る。床面はやや硬くなっており，良好といえる状態であった。周溝は北壁の一部と西・南壁に検出された。柱穴は主柱穴の4本（P1，77cm，P2，63cm，P3，67cm，P4，69cm）と東・西壁に2本ずつ壁柱穴が検出された（P5，45cm，P6，43cm，P7，40cm，P8，44cm）。

遺物はそれほど多く出土しなかった。

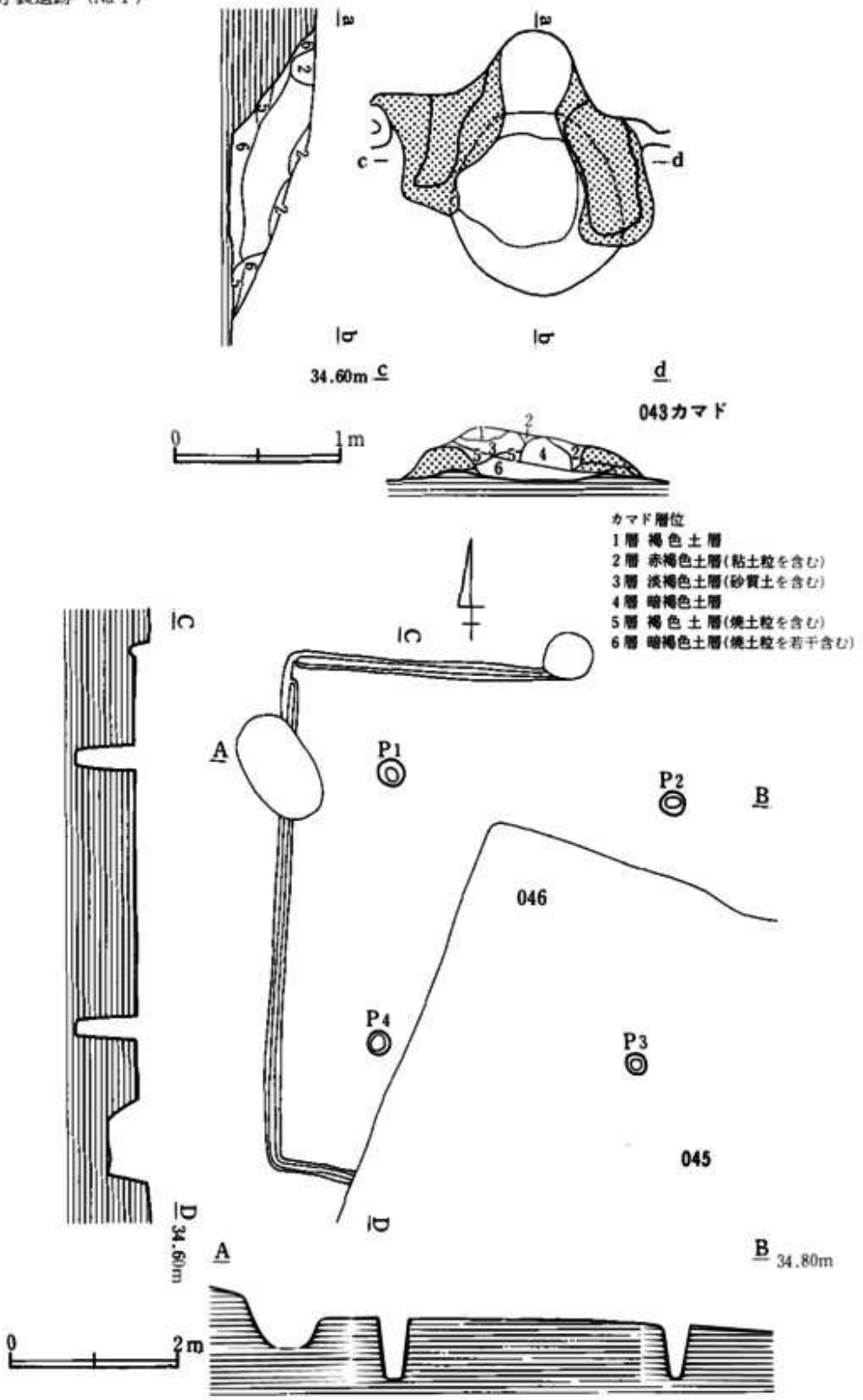
044号住居跡（第34図，図版24）

E2区に位置する。043号住居跡の北側と重複する。重複と削平のために⅓ほどが残っている。1辺3.5mの方形と考える。カマドは北壁のほぼ中央に位置し，削平が著しい。ロームへの掘り込みは16cmを測る。床面は少し軟弱であった。周溝は3辺にみられる。柱穴は主柱穴2本（P1，42cm，P2，73cm）のみであった。

遺物の出土はそれほど多くない。



第34図　042号，043号，044号住居跡実測図



第35図　043号カマド，045号住居跡実測図

045号住居跡（第35図，図版25―１）

Ｅ２区北側に位置する。削平と046号住居跡との重複で半分以上が壊されている。１辺6.2mの方形と考えられる。カマドは確認されなかった。ロームへの掘り込みは25cmを測る。床面は攪乱等により壊されており，全体的に軟弱である。周溝は北壁の一部と西壁にみられる。柱穴は主柱穴と思われる４本が検出された（Ｐ１，72cm，Ｐ２，64cm，Ｐ３，54cm，Ｐ４，73cm）。

遺物の出土はそれほど多くはない。

046号住居跡（第36，37，38図，図版25）

Ｅ２区北側に位置する。北東側で045号住居跡と，南で047号住居跡と重複する。5.2m×5.0mの方形に近い形状を呈する。覆土は１層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），２層：暗褐色土層，３層：黒褐色土層，４層：茶褐色土層（焼土粒，ローム粒を含む），５層：暗褐色土層（ロームブロックを含む），６層：暗褐色土層である。カマドは北壁の中央に位置し，袖部のみ残存する。ロームへの掘り込みは32cmを測る。床面は比較的良好であった。周溝は南東部を除き全周する。柱穴は主柱穴と考える４本（Ｐ１，74cm，Ｐ２，71cm，Ｐ３，73cm，Ｐ４，63cm）と南壁寄り，Ｐ３とＰ４の中間に深さ7cmの浅いピットがある。またカマドの東側にＰ２に接して深さ43cmの楕円形を呈する貯蔵穴がある。

遺物は当遺跡の遺構の中では最も多く出土した。坏の完形品が多く，甕形土器，甑形土器も多く出土している。

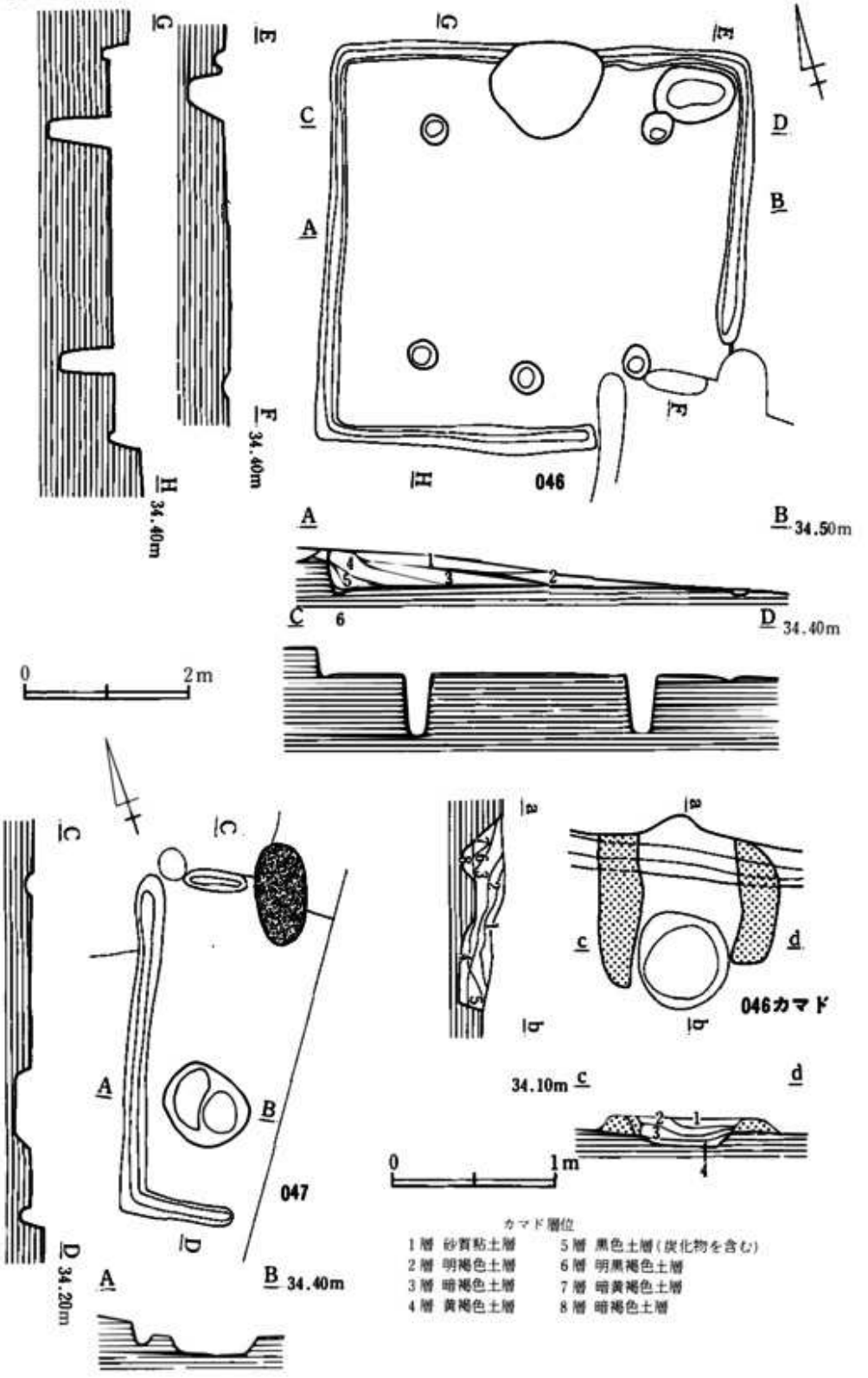
047号住居跡（第36図，図版25―１）

Ｅ２区に位置する。北側で046号住居跡と重複する。また東側半分以上が発掘調査区域外になるため調査できなかった。１辺4.2mの方形と考える。カマドは認められなかったが，焼土が北壁に在る。ロームへの掘り込みは15cmを測る。床面は硬く良好であった。周溝は連続しておらず西側を中心に設けられている。柱穴は南側に深さ14.2cmと25cmの２段になったピットがあるのみである。

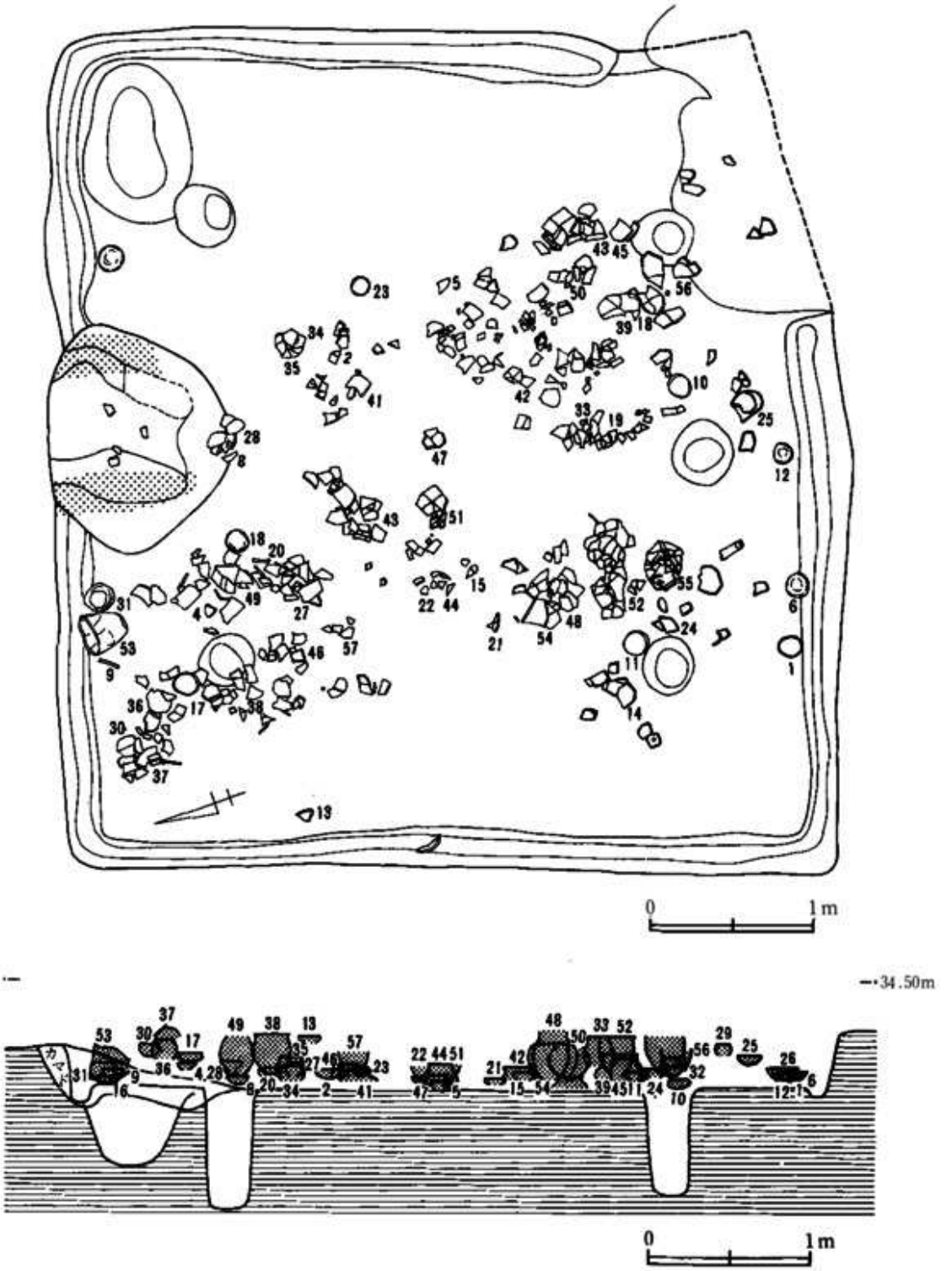
遺物の出土は少ない。

048号住居跡（第39図，図版26―１）

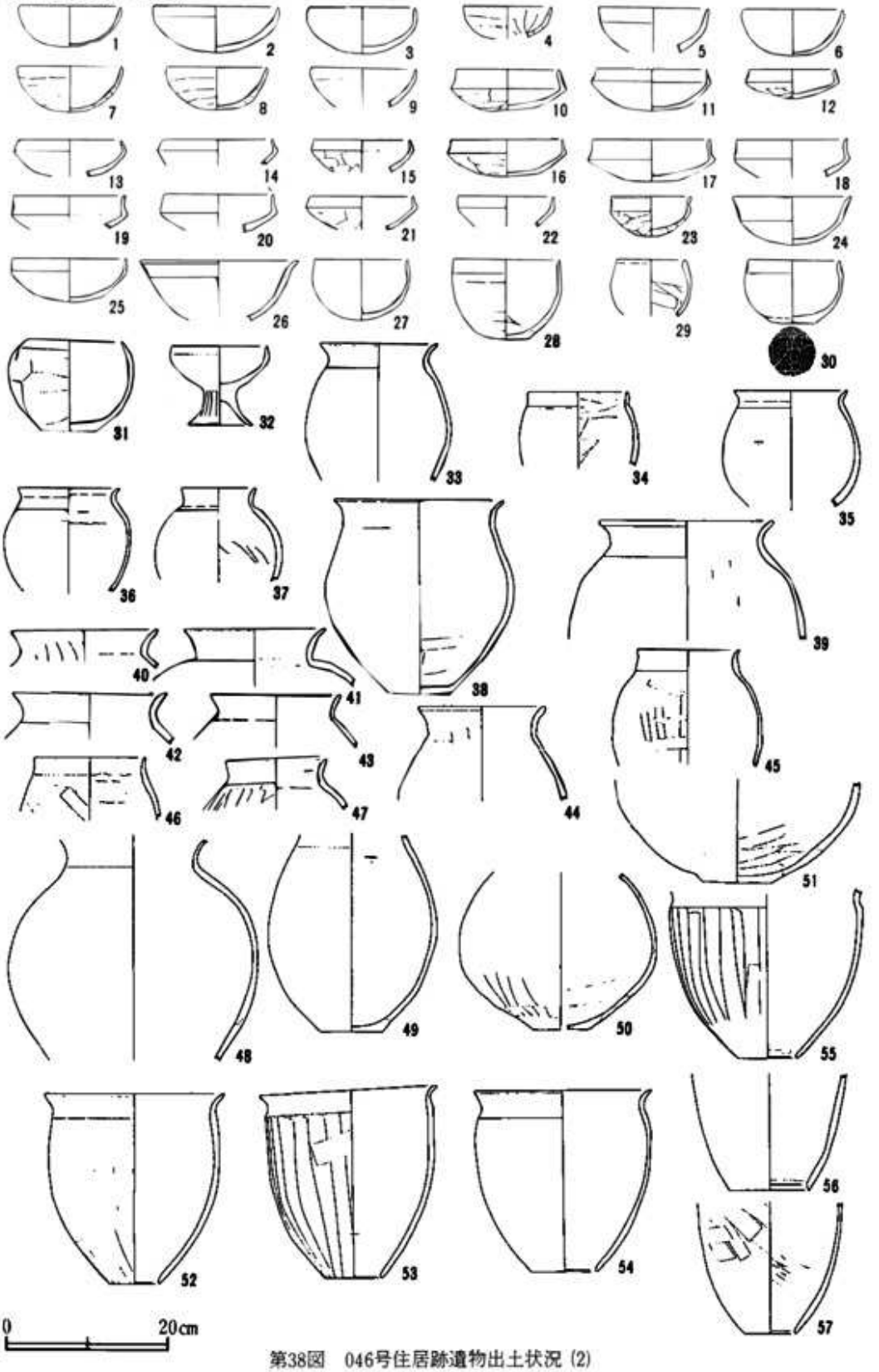
Ｅ１区東側に位置する。西側で049号住居跡と重複する。平面形は台形を呈する。３辺は５mを測り，南側は3.4mを測る。ロームへの掘り込みは11cmと浅い。床面は少し軟弱である。周溝は東隅で切れる他はほぼ全周する。柱穴は主柱穴と考えられる４本（Ｐ１，38cm，Ｐ２，57cm，Ｐ３，38cm，Ｐ４，60cm）が検出された。またカマドの北西側に深さ40cmの楕円形を呈する貯蔵穴がある。遺物の出土はそれほど多くはなかった。



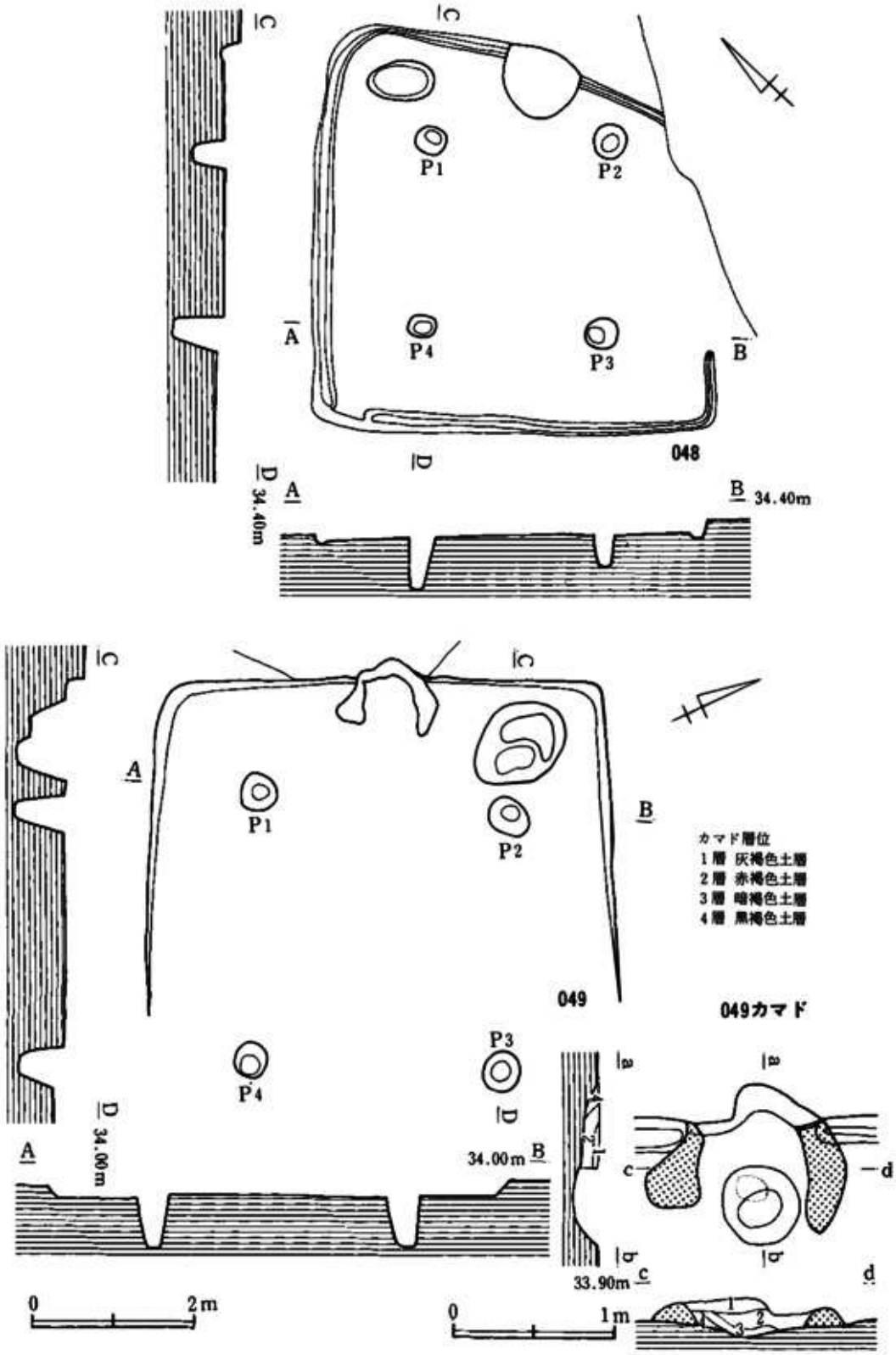
第36図　046号，047号住居跡実測図



第37図　046号住居跡遺物出土状況 (1)



第38図　046号住居跡遺物出土状況（2）



第39図　048号，049号住居跡実測図

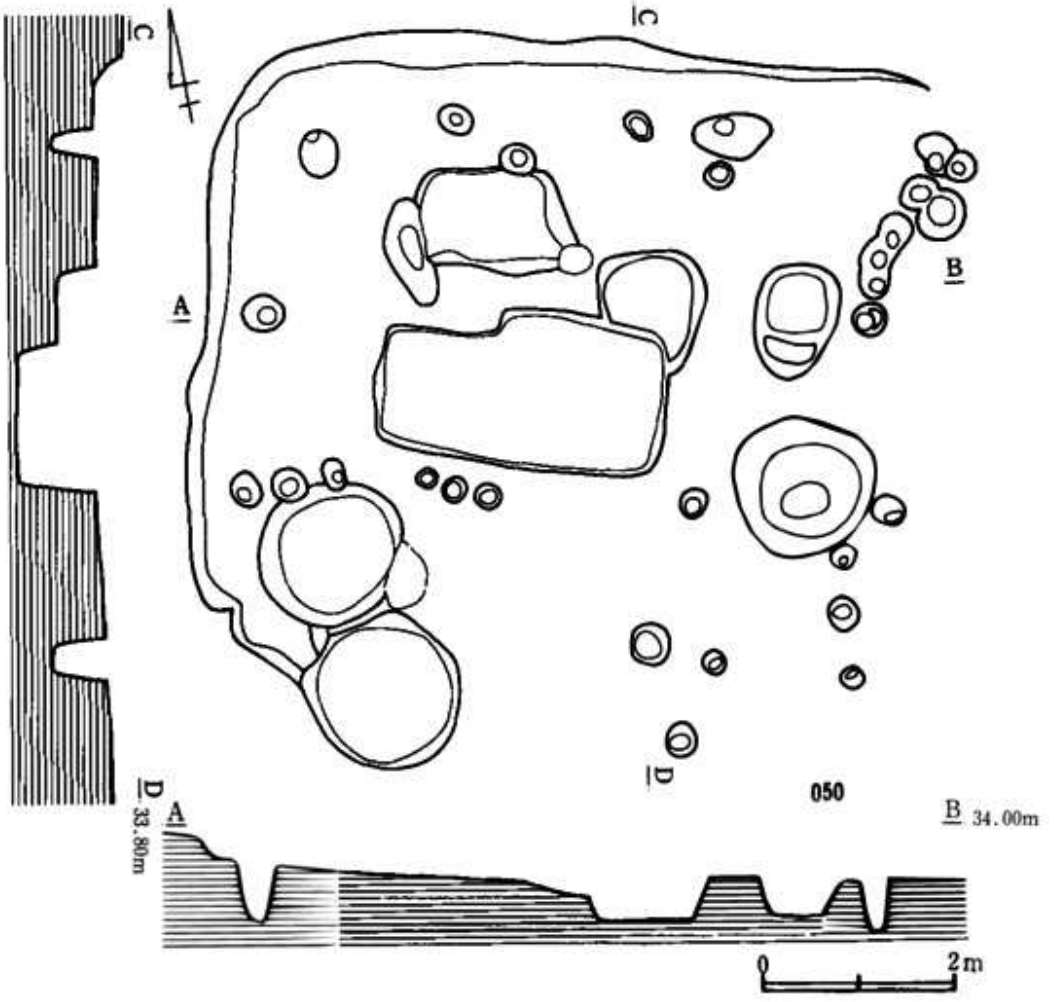
049号住居跡（第39図，図版26）

E・F1区に位置する。048号住居跡の東側に重複する。削平により東側は壊される。1辺5.8mの方形と考えられる。カマドは西壁の048号住居跡と重複する所に位置し，袖部のみ残っている。ロームへの掘り込みは18cmを測る。床面はそれほど良い状態ではなかった。周溝は認められなかった。柱穴は主柱穴の4本（P1，60cm，P2，59cm，P3，52cm，P4，46cm）が検出された。またカマド北側に深さ46cmと62cmの2段になる貯蔵穴が検出されている。

遺物の出土はそれほど多くはなかった。

050号住居跡（第40図，図版27－1）

F1区に位置する。多数の土坑と小ピットの重複により原形をとどめない。7.6m×6mの長方形と考えられる。カマドの痕跡もない。ロームへの掘り込みは21cmを測る。床面は破壊が



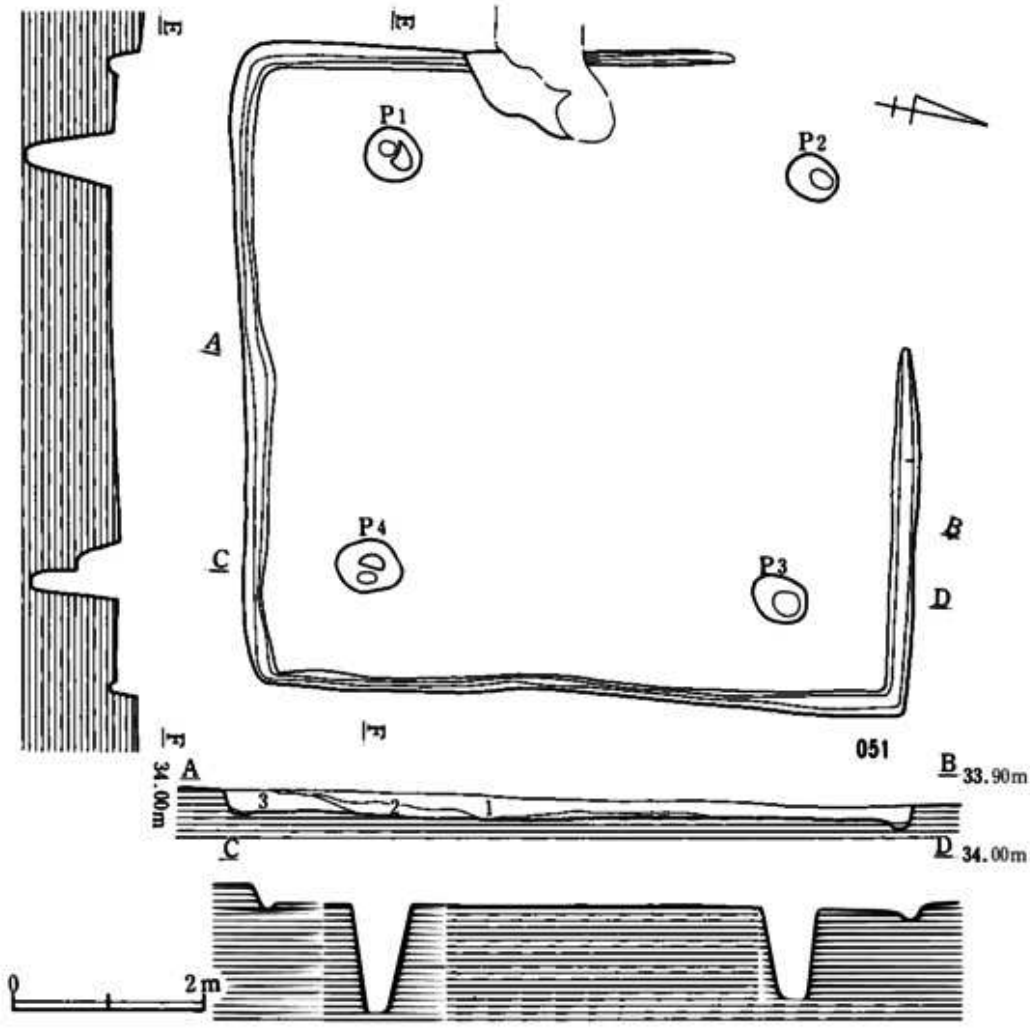
第40図　050号住居跡実測図

はげしく状態は悪い。周溝は認められない。柱穴は多数の小ピットはあるものの主柱穴と思われるものは確認できなかった。

遺物はほとんど出土しない。

051号住居跡（第41図，図版27－2）

E・F0区に位置する。北西部は台地整形のため壊されている。7.1m×6.6mの長方形を呈する。覆土は1層：暗褐色土層(ローム粒，焼土粒を含む)，2層：褐色土層，3層：褐色土層（ロームブロックを含む）である。カマドは西壁の中央やや南寄りに位置するが，攪乱を受け，袖の一部を残すだけである。ロームへの掘り込みは41cmを測る。床面の状態はそれほど良くない。周溝は破壊された部分を除き全周する。柱穴は主柱穴4本（P1，90cm，P2，82



第41図　051号住居跡実測図

cm，P3，90 cm，P4，88 cm）が検出された。

遺物の出土はそれほど多くはなかった。

052A号住居跡（第42図，図版28－1）

F0区に位置する。052B住居跡と重複する。3m×3mの方形を呈する。覆土は1層：黒褐色土層，2層：暗褐色土層（ロームブロック，焼土粒を含む），3層：暗褐色土層である。

052B号住居跡（第42図，図版28－1）

F0区に位置する。051号住居跡の東側4m，北東部で052A号住居跡と重複する。また削平や攪乱がはげしく，住居のほとんどの地点が壊されている。1辺9mの方形を呈す大きな住居跡である。覆土は1層：黒褐色土層，2層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），3層：黄褐色土層，4層：褐色土層，5層：黄褐色土層（ロームブロックを多く含む），6層：暗黄褐色土層（ローム粒を含む）である。カマドは確認できなかった。ロームへの掘り込みは19cmを測る。床面は攪乱がはげしく残存部は少ない。周溝，柱穴は確認できなかった。

遺物はそれほど多くはない。

053A号住居跡（第43図，図版28－2）

E1区に位置する。溝等により攪乱がはげしく原形をとどめない。西側で053B号住居跡と重複する。8.8m×5.9mの長方形を呈すると考えられる。カマドは確認できなかった。床面は攪乱がはげしくほとんど残っていない。周溝は西壁を除き3辺にみられる。柱穴は主柱穴の4本（P1，76cm，P2，70cm，P3，76cm，P4，86cm）と小ピットが6ケ所検出された。

遺物の出土はほとんどない。

053B住居跡（第43図，図版28－2）

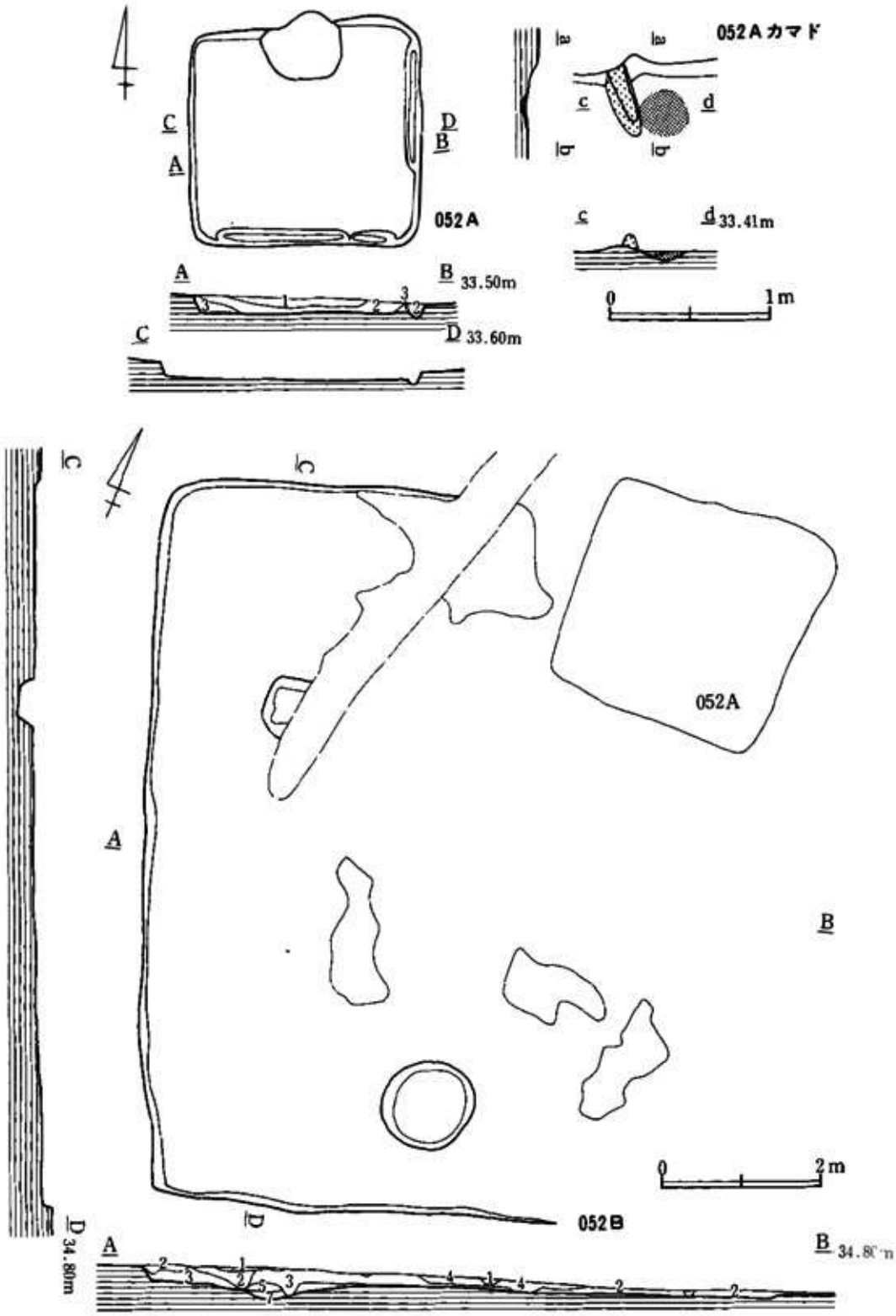
E1区に位置する。西側は大溝により壊され，残存する部分も攪乱をうけている。また東側では053A号住居跡と重複する。カマドは確認できなかった。ロームへの掘り込みは12cmである。床面と壁は南側の一部を残すのみである。状態はあまり良くない。周溝は確認できなかった。柱穴は主柱穴と思われる2本（P1，68cm，P2，63cm）が検出された。

遺物はほとんど出土していない。

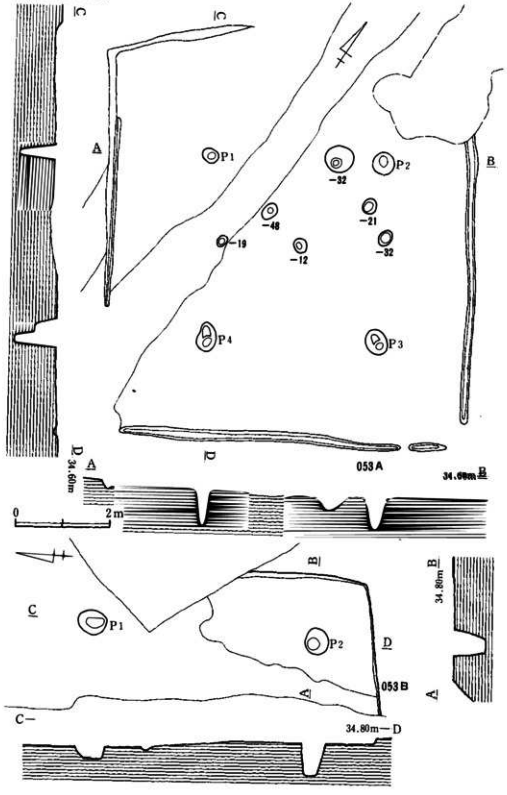
054A号住居跡（第44図，図版29－1）

D3区に位置する。東側⅔は大溝により壊され，南側では054B住居跡と重複する。北西隅は掘立柱建物跡とも重複する。1辺5.8mの方形と考えられる。覆土は1層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），2層：茶褐色土層である。カマドは壊され検出できなかった。ロームへの掘り込みは45cmである。床面は比較的良好な状態であった。周溝は検出した範囲では全周する。柱穴は主柱穴と思われる2本（P1，68cm，P2，62cm）が検出された。

遺物は比較的多く出土した。



第42図　052A・B号住居跡実測図



第43図　053A・B号住居跡実測図

054B号住居跡（第44図，図版29）

D３区に位置する。東側で054A号住居跡と南側では054C号住居跡と重複する。また東側は大溝によっても壊されている。方形を呈すると考えられる。覆土は１層：黒褐色土層（ローム粒，炭化物粒を含む），２層：黒褐色土層（山砂，焼土粒を含む），３層：灰褐色土層（砂粒を含む），４層：黒褐色土層（砂ブロック，焼土を含む）である。カマドは北壁に設けられている。また西壁にはカマドの煙道部が残っており，今回検出されたカマドは新しく作られたものと考えられる。ロームへの掘り込みは51 cmを測る。床面は比較的良好であった。周溝は西側のみ検出された。柱穴は２本の主柱穴（Ｐ１，42 cm，Ｐ２，24 cm－054C号住居跡の床面から）と４本の小ピット（Ｐ３，27 cm，Ｐ４，37 cm，Ｐ５，28 cm，Ｐ６，21 cm）が検出されている。

遺物の出土はそれほど多くはなかった。

054C号住居跡（第44図，図版29－２）

D３・４区に位置する。東側は大溝で壊され，北側は054B号住居跡と重複する。１辺6.6mの方形と考えられる。覆土は１層：黒褐色土層（ローム粒，焼土粒を多く含む），２層：黒褐色土層，３層：暗褐色土層，４層：黒褐色土層（ロームブロックを含む），５層：褐色土層（粘土を少し含む）である。カマドは検出されなかった。ロームへの掘り込みは41 cmを測る。周溝は検出された壁下では全周する。柱穴は主柱穴の２本（Ｐ１，57 cm，Ｐ２，60 cm）と深さ16 cmを示すピットがある。

遺物の出土はそれほど多くはなかった。

055号住居跡（第45図，図版30－１）

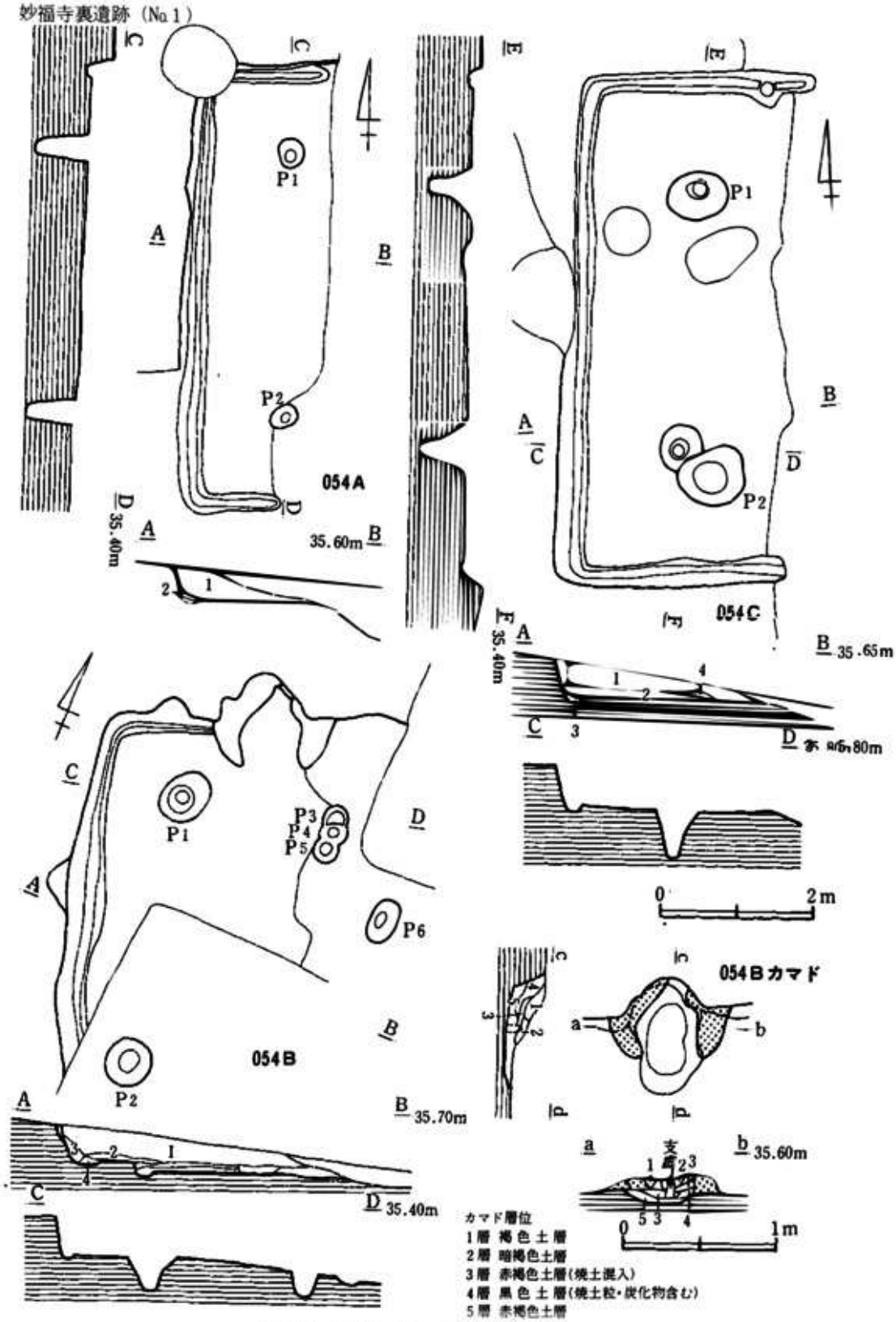
D０区に位置する。削平により住居の東側半分は消滅している。また北側では056号住居跡と重複する。１辺3.8mの方形を呈すると思われる。カマドは北壁に設けられ，袖部分が一部残るだけである。ロームへの掘り込みは19 cmを測る。床面は比較的軟弱である。周溝は検出された壁下を全周する。柱穴は検出されなかった。

遺物の出土はほとんどなかった。

056号住居跡（第45図，図版30－２）

D０区に位置する。北側は台地整形のために壊されている。また南側は055号住居跡と重複する。3.0m×2.9mの方形を呈する。覆土は１層：暗褐色土層（ローム粒を多く含む），２層：暗褐色土層（ロームブロックを多く含む），３層：褐色土層である。カマドは壊されており，火床部の焼土が残っているのみである。ロームへの掘り込みは37 cmを測る。床面は硬くしまっている。周溝は検出された壁下を全周する。柱穴は主柱穴と考えられるものはない。

遺物の出土はそれほど多くはなかった。

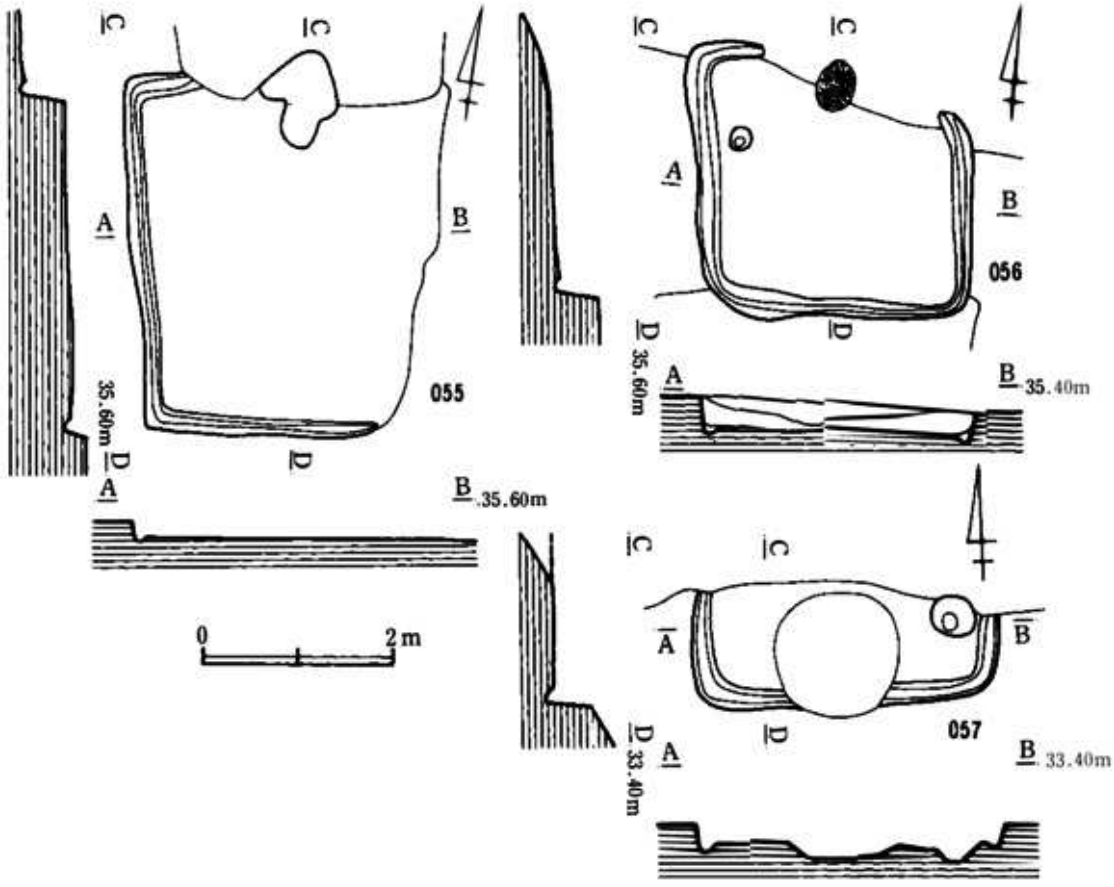


第44図　054A・B・C号住居跡実測図

057号住居跡（第45図，図版31－1）

Ｆ０区北側に位置する。台地整形により住居の北側は削られてしまっている。また237号土坑が重複する。カマドは壊されており検出されていない。ロームへの掘り込みは 44 cm を測る。床面は軟弱な状態であった。周溝は検出された壁下を全周する。柱穴は東壁際に深さ 18 cm のピットがあるのみで，主柱穴と思われるものは検出できなかった。

遺物は少なく，須恵器の坏以外はすべて破片であった。



第45図　055号，056号，057号住居跡実測図

第3表　妙福寺裏遺跡住居跡調査表

住居跡番号	平面形	床面積(㎡)	柱穴	周溝	貯蔵穴	カマド	床面高さ(m)	土器以外の遺物	備考
002	方形	—	(1)	有	—	—	−0.77		残存15%
003	〃	(16.8)	4	—	—	—	−0.84		〃 50%
004A	〃	(84.0)	0	有	—	北	−0.95		004A＞004B
B	〃	29.6	5	有	—	北	−1.32		
005	〃	(26.5)	4	有	有(北東隅)	—	−1.05		貯蔵穴より遺物
006	〃	(10.89)	(4)	有	—	西	−1.74	鉄鏃1	009と重複
007A	〃	(30.8)	4	有	—	北	−15.0		007A＞007B＞007D
B	〃	—	—	有		不明	−1.82		
C	〃	(9.0)	—	有	—	北	−2.16		007A＞007C
D	〃	—	—	—	—	—	−2.15		
E	〃	—	—	—	—	—	−2.99		
008	—	—	—	—	—	—	0.99	紡錘車1	
009	方形	—	—	有	—	—	−2.10		
010	〃	—	壁柱穴	有	—	—	−1.74		
011	〃	(56.25)	4	有	—	北西	−1.61		
012	〃	(6.25)	—	有	—	北	−1.58		
013	〃	16.65	5	有	—	北	−1.58	刀子4	
014	〃	9.92	0	有	有(南東隅)	東	−1.55	土玉1	貯蔵穴より遺物
015	〃	9.30	1	有	—	北	−1.80		
016	〃	—	—	有	—	—	−1.17	土玉1	上面斜平、新旧関係不明
017A	〃	21.12	4	有	有(南東隅)	東	−1.90	紡錘車3	
B	方形	—	—	有	—	—	−1.50		
C	〃	—	—	有	—	—	−1.75		
018	〃	12.60	4	—	—	—	−0.65		018＜019
019	〃	12.25	—	有	—	北	−0.86		
020	〃	(5.76)	0	有	—	—	−1.34		
021A	〃	—	0	有	—	不明	−0.44		021A＞021B
B	〃	—	0	有	—	北	−0.60		021B＞031
022A	〃	(25.0)	4	有	有(南東隅)(南西隅)	南西	−0.24		022B＞022C＞022A
B	〃	7.84	1	有	—	北西	−0.26		
C	〃	—	—	有	—	北西	−0.24		
023A	〃	(16.0)	4	有	—	—	0.63		032A＜023B
B	〃	—	5	有	—	—	0.47		
024	〃	—	0	有	—	北西	0.84		
025	〃	—	—	有	—	北西	−0.57		025＜026
026	〃	(7.84)	—	有	—	—	−0.89		
027	〃	8.99	5	有	—	—	−0.16		
028	〃	(10.24)	1	有	有(南隅)	南西	−0.92		残存5%
027	〃	(7.02)	1	有	—	不明	−1.29		029＜031
030	欠番								

住居跡番号	平面形	床面積(m²)	柱穴	周溝	貯蔵穴	カマド	床面高さ(m)	土器以外の遺物	備考
031	方形	(18.92)	1	—	—	—	−1.15		
032	〃	(11.9)	—	有	—	北西	0.84		
033	〃	—	2	—	—	不明	1.02		
034A	方形	8.99	—	有	—	北西	0.80		
B	〃	28.09	4	—	有(北東隅)	北西	0.90		034B>034C
C	〃	—	—	—	—	北西	1.15		
035A	〃	36.54	4	—	—	北西	0.8		035A>035B
B	〃	—	—	—	—	—	0.70		
036	〃	(26.01)	(4)	—	—	—	0.90		
037	〃	7.02	0	—	—	北西?	1.06		
038	〃	(17.64)	(4)	有	—	北?	0.76		
039	〃	(22.0)	4	有	—	北西	0.74		上面，塚
040	〃	(32.49)	4	有	有(北東隅)	北	0.77		
041	〃	(14.8)	1	—	—	北西	0.70		
042	〃	(19.36)	—	有	—	不明	−3.80		042<043
043	〃	(34.2)	4	有	—	北西	−3.53	鉄製品1 鉄鏃1	043>044
044	〃	(16.0)	(4)	有	—	北	−3.28	紡錘車1	
045	〃	(32.5)	4	有	—	不明	−3.40		045<046<047
046	〃	20.68	5	有	有(北東隅)	北東	−3.65	鉄鏃1	
047	〃	(13.7)	—	有	—	北東	−3.68		
048	〃	(19.32)	4	有	有(北西隅)	北西	−3.55		048<049
049	〃	30.28	4	—	有(北西隅)	北西	−3.95		
050	〃	(41.6)	—	—	—	—	−4.05		
051	〃	40.95	5	有	—	西	−4.02		
052A	〃	5.98	—	有	—	北	−4.38		052A<052B
B	方形	72.25	—	—	—	北西?	−4.15		
053A	〃	(60.0)	—	有	—	—	−3.30		
B	〃	—	—	—	—	—	−3.04		
054A	〃	(27.04)	(4)	有	—	—	−2.63		
B	〃	—	—	有	—	北西	−2.40		054B>054C
C	〃	(36.0)	—	有	—	—	−2.52	紡錘車1	
055	〃	(10.89)	—	有	—	北	−2.10		055>056
056	〃	(5.76)	1	有	—	北	−2.61		
057	〃	(7.84)	—	有	—	—	−4.93	鉄鏃1	

第2節　土　　坑

201号土坑（第46図，図版31－2）

C5－12グリットに位置する。長径1.1m，短径0.6mの長方形を呈し，深さ0.8mを測る。遺構確認面よりやや下面で板碑の破片が出土している。

他に遺物の出土はない。

202号土坑（第46図）

C5区，041号住居跡の東側に位置する。長径2.2m，短径1.1mの長方形に近い楕円形を呈し，深さは0.6mを測る。

遺物の出土はない。

203号土坑（第46図）

C5区，039号住居跡の東側3mに位置する。長径0.9m，短径0.7mの楕円形を呈し，深さは0.3mを測る。

遺物の出土はない。

204号土坑（第46図）

C5区，041号住居跡の南側に重複する。長径0.9m，短径0.7mの楕円形を呈する。

遺物の出土はない。

205号土坑（第46図，図版32－1）

039号住居跡の東側に位置する。土坑が3基重複しているようである。本土坑には炭化物が多量に埋められていた。遺物はあまり出土しなかったが，5枚の古銭が出土している。これらの古銭はいずれも7世紀から12世紀にかけて輸入された渡来銭である。状態より墓坑である可能性が強い。

206号土坑（第47図，図版32－2）

001号遺構内に位置する。長径1.3m，短径1.0mの楕円形を呈する。深さは0.25mと浅い。

遺物の出土はない。

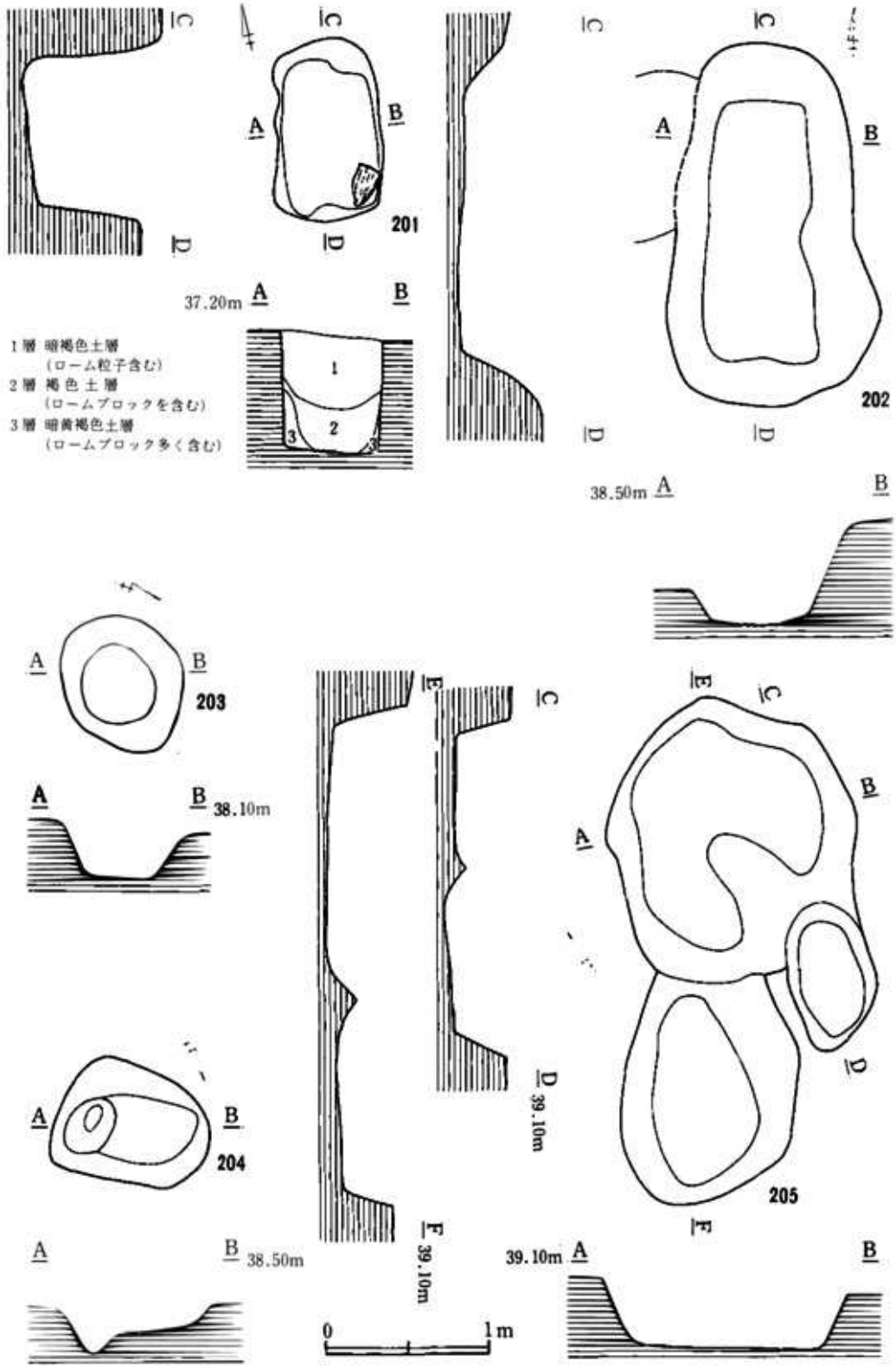
207号土坑（第47図，図版32－2）

001号遺構内に位置する。東側は一部削られ全容は知ることができない。長径1.5m，短径1.3mの不定形を呈する。深さ 20cm の平坦な底面であり，東側にはさらに 30cm の深さのピットがある。

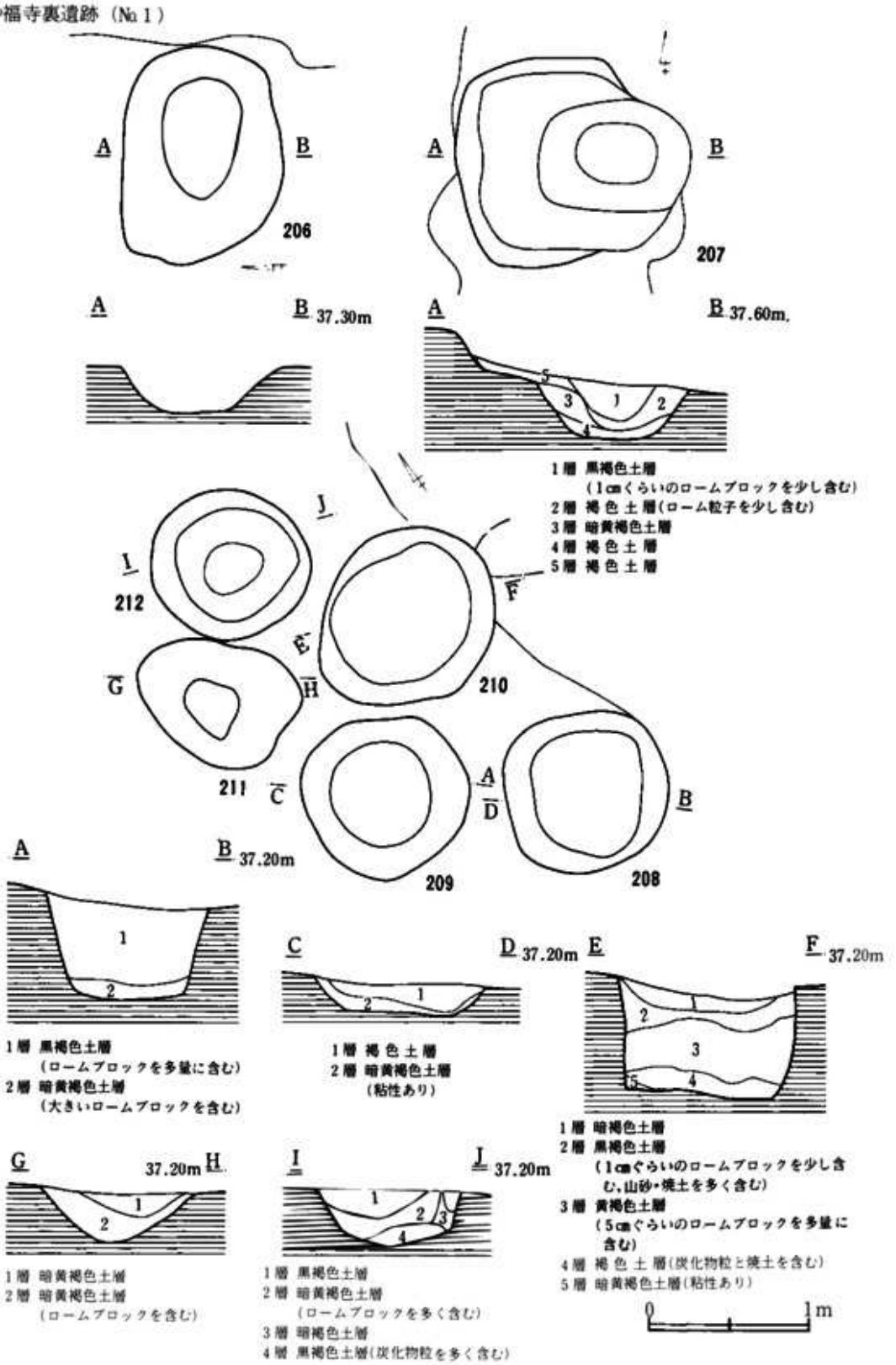
遺物は土師器が若干出土した。

208号土坑（第47図，図版32－2）

001号遺構に重複する。径1.0mの円形に近い平面形を呈する。深さは0.6mと深く円筒形を呈する。



第46図　201号,202号,203号,204号,205号土坑実測図



第47図　206号，207号，208号，209号，210号，211号，212号土坑実測図

遺物は土師器片が若干出土した。

209号土坑（第47図，図版32－２）

208号土坑の北西側に隣接する。径1.0mの円形を呈する。深さは0.2mと浅い。

遺物は土師器が若干出土した。

210号土坑（第47図，図版32－２）

209号土坑の北東側に隣接している。長径1.2m，短径1.1mの楕円形を呈し，深さは0.6mを測る。本土坑は焼土，炭化物を多く含む層があり，この層中より土器が多く出土する。

211号土坑（第47図，図版32－２）

210号土坑の東側に隣接する。長径1.0m，短径0.7mの楕円形を呈する。深さは0.3mと浅く舟底形を呈する。

遺物は土師器が若干出土している。

212号土坑（第47図，図版32－２）

211号土坑の北側に隣接する。径1.0mの不整円形であり，深さは1.4mを測る。

遺物は土師器が若干出土している。

213号土坑（第48図，図版32－２）

208～212号土坑群より２m北側に位置し，001号遺構と重複する。径1.1mの円形を呈し深さは0.6mとやや深い。

遺物は土師器片が若干出土したにとどまる。

214号土坑（第48図，図版32－２）

213号土坑の北側に隣接して位置し，上面は攪乱を受けている。径1.0mの円形を呈し，深さは0.25mを測る。断面は舟底状を呈する。

遺物の出土はない。

215号土坑（第48図）

013号住居跡の南壁に接するように位置する。上部は重複により不明である。底面付近の深さ0.2mを残すのみである。上径は1.3mを測る。

遺物は土師器が若干出土したにとどまる。

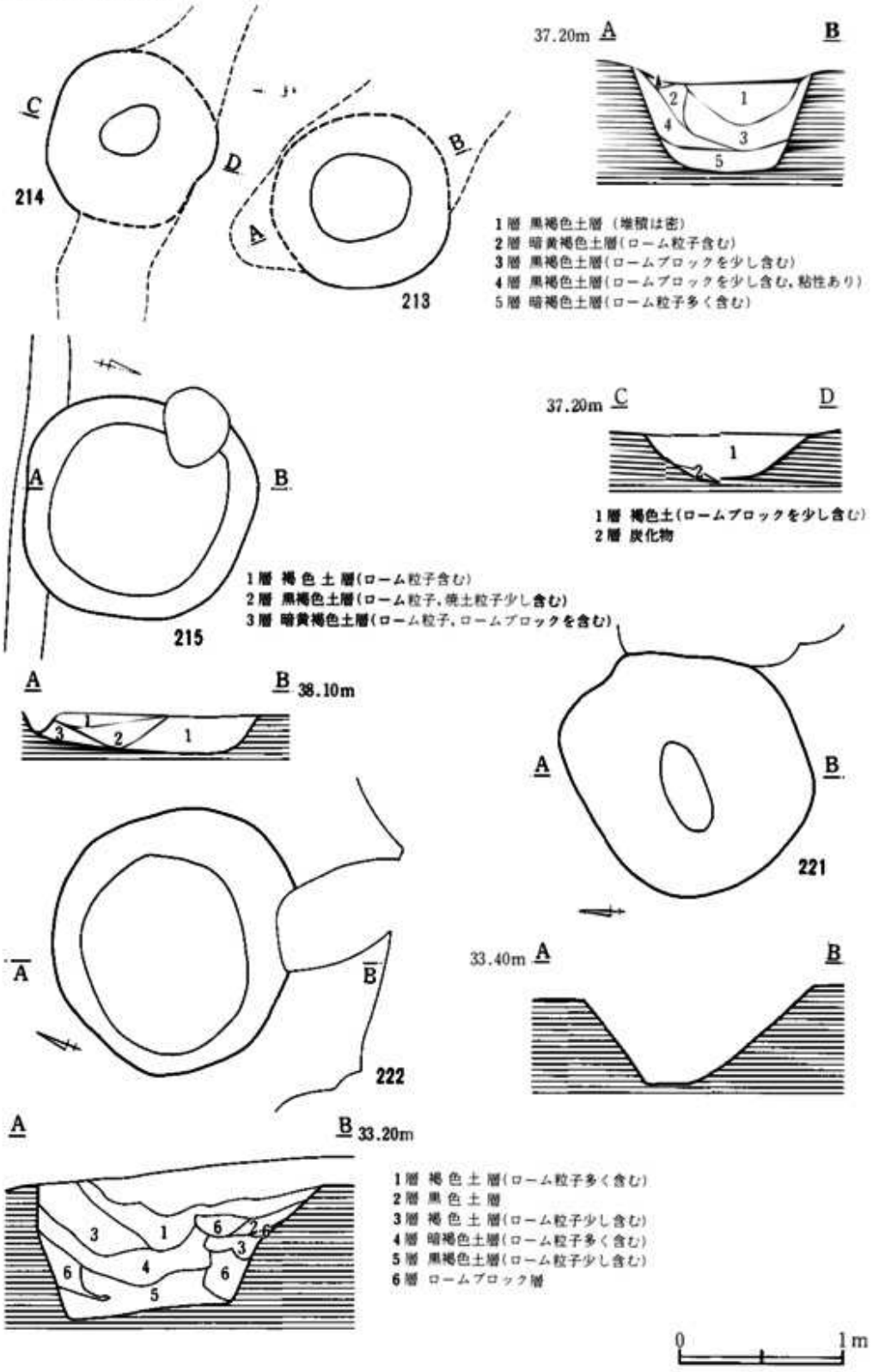
221号土坑（第48図，図版33－２）

Ｆ０区の229号土坑に接して位置する。長径1.5m，短径1.3mの楕円形を呈し，深さは0.6mで逆円錐形である。

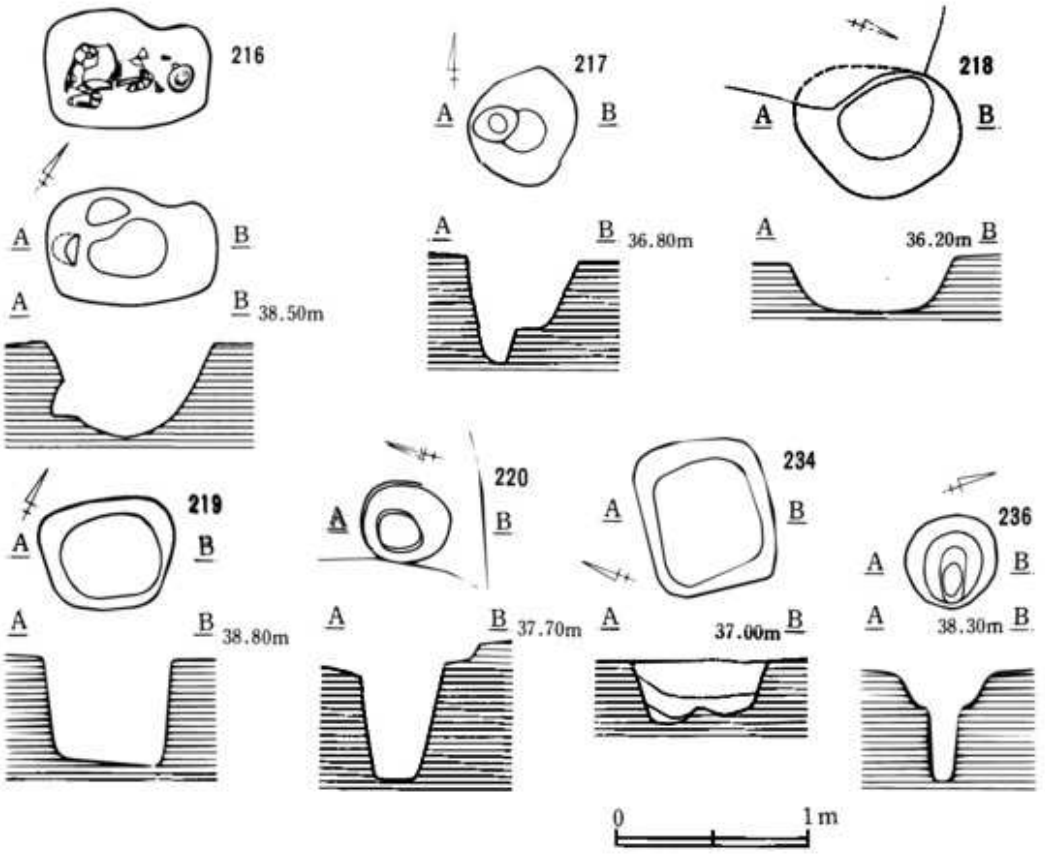
遺物の出土はない。

222号土坑（第48図，図版33－２）

221号土坑の北東に位置する。径1.5mの円形を呈し，深さは0.8mを測る。



第48図　213号，214号，215号，221号，222号土坑実測図



第49図　216号,217号,218号,219号,220号,234号,236号土坑実測図

遺物はほとんど出土していない。

223号土坑（第52図，図版33－２）

229号土坑の南で重複し，北側の半分以上を壊されてしまっている。円形を呈すると考えられるが，その規模の詳細は不明である。深さは0.6mを測る。

遺物の出土はない。

224号土坑（第50図，図版33－２）

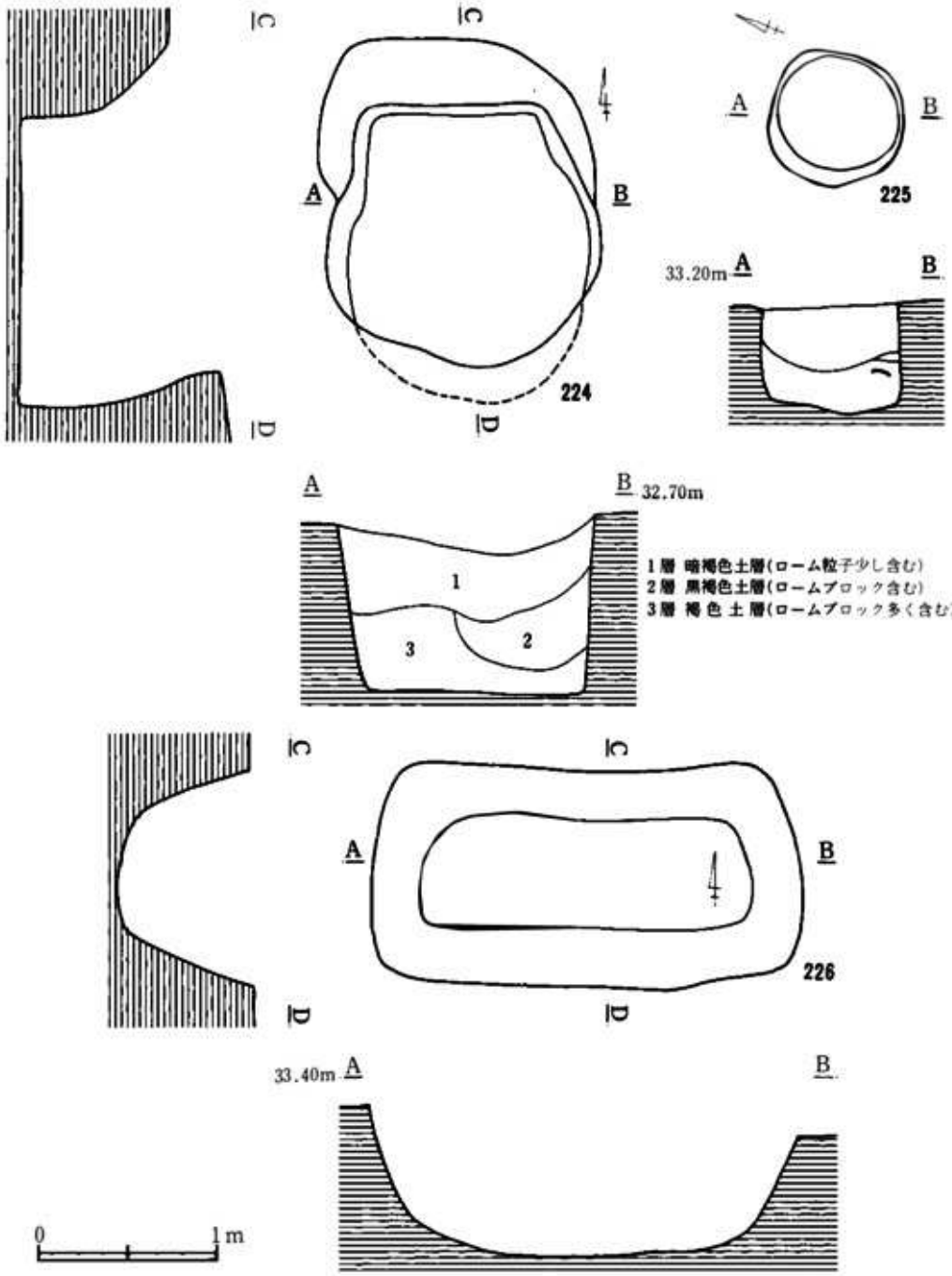
Ｇ０区に位置する。長径1.8m，短径1.5mの楕円形を呈する。南側は袋状になっている。深さは1.0mと深い。

遺物の出土はない。

225号土坑（第50図，図版33－２）

211号土坑の南側３mに位置する。径0.8mの円形を呈し，深さは0.6mを測る。

遺物は土師器の破片が若干出土したにすぎない。



第50図　224号，225号，226号土坑実測図

226号土坑（第50図，図版33－2）

052A号住居跡の西側に隣接する。東西に長軸をもつ長方形の土坑である。長径2.4m，短径1.2m，深さ0.8mを測る。底部は舟底状を呈する。

遺物は土師器が若干出土したにとどまる。

227号土坑（第51図，図版33－2）

C1－24グリットに位置する。径1.5mの円形を呈し，深さは0.6mを測る。

遺物の出土はない。

299号土坑（第52図，図版33－2）

221号土坑の東側に接して位置する。また223，232号土坑とも重複している。東西に長軸をもつ長方形を呈する土坑である。長径4.2m，短径1.1m，深さは0.6mを測る。

遺物の出土はほとんどない。223，232号土坑との新旧関係では本土坑が新しい。

230号土坑（第51図，図版33－2）

226号土坑の北側に隣接する。径1.9mの円形を呈し，深さは1.9mと非常に深い。底面も円形を呈し，径1.1mを測る。

遺物の出土はない。

231号土坑（第51図，図版33－2）

225号土坑の東側2mに位置する。長径0.9m，短径0.7mの楕円形を呈し，深さは0.4mを測る。

遺物の出土はない。

232号土坑（第52図）

229号土坑の北側で重複し，南側半分は壊されてしまっている。長径1.8m前後の楕円形を呈すると考えられる。深さは0.5mを測る。

遺物の出土はない。

233号土坑（第51図，図版33－1）

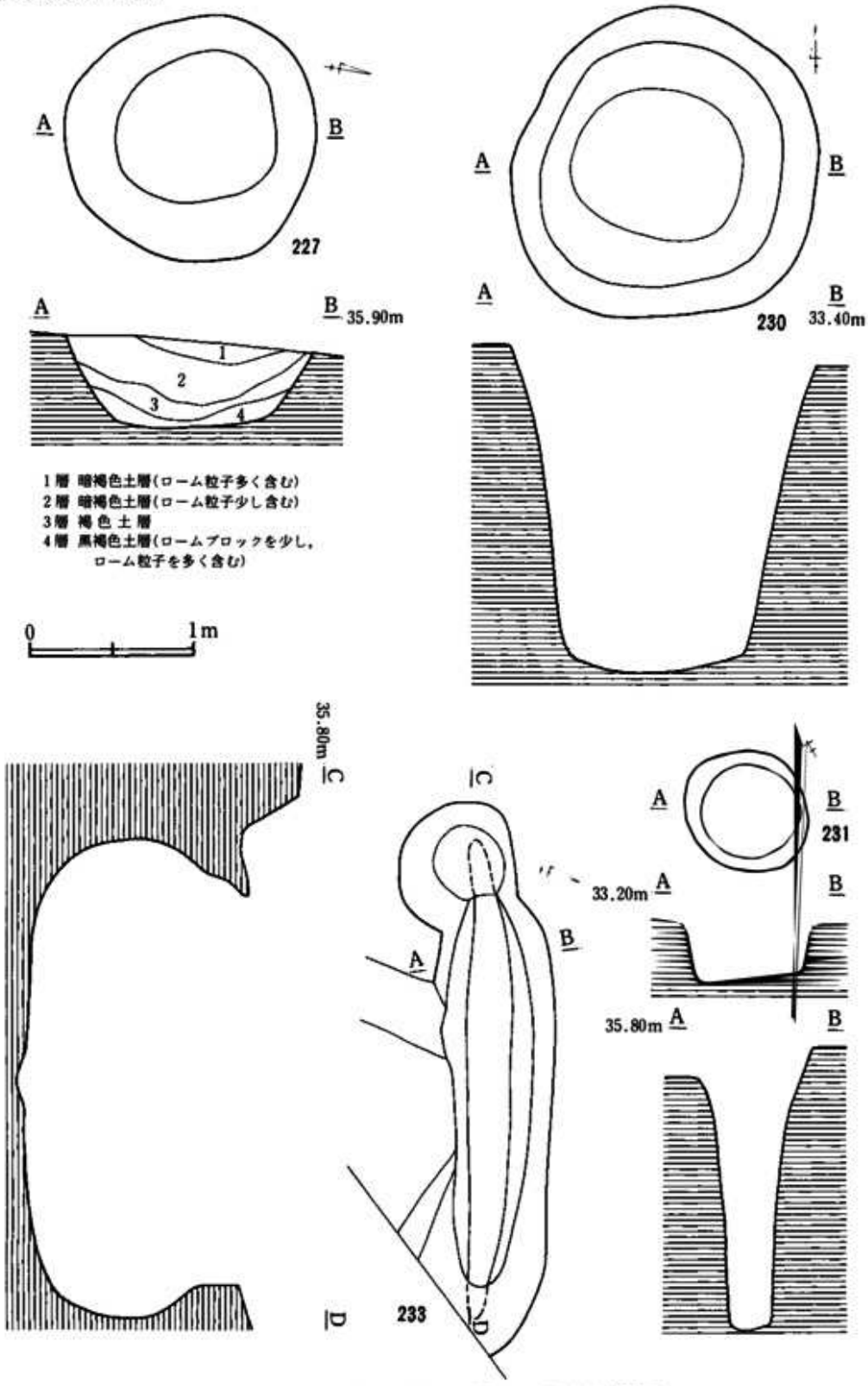
007号住居跡の北側に位置する。上面は長径2.8m，短径0.7mの長楕円形を呈し，深さは1.7mと非常に深い。縦断面は袋状を呈し，横断面は漏斗状を呈している。いわゆる陥し穴状を呈する。

遺物の出土はほとんどない。

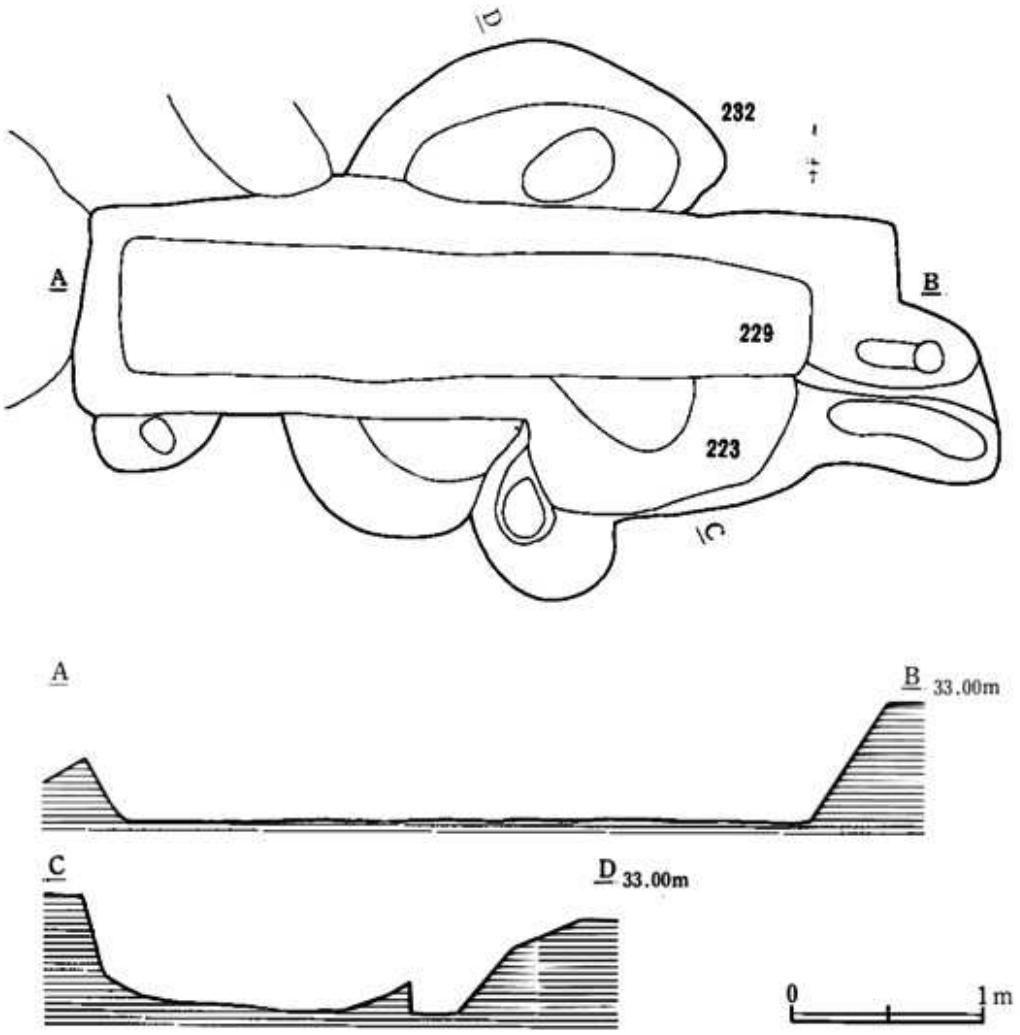
237号土坑（第53図）

007D住居跡と西側で重複している。径1.1mの円形を呈し，深さは0.3mを測る。

遺物の出土はない。



第51図　227号，230号，231号，233号土坑実測図



第52図　223号，229号，232号土坑実測図

238号土坑（第53図）

045号住居跡の西側で重複する。長径1.4m，短径0.8mの楕円形を呈し，深さは0.7mを測る。底面は長径0.6m，短径0.3mの楕円形を呈する。

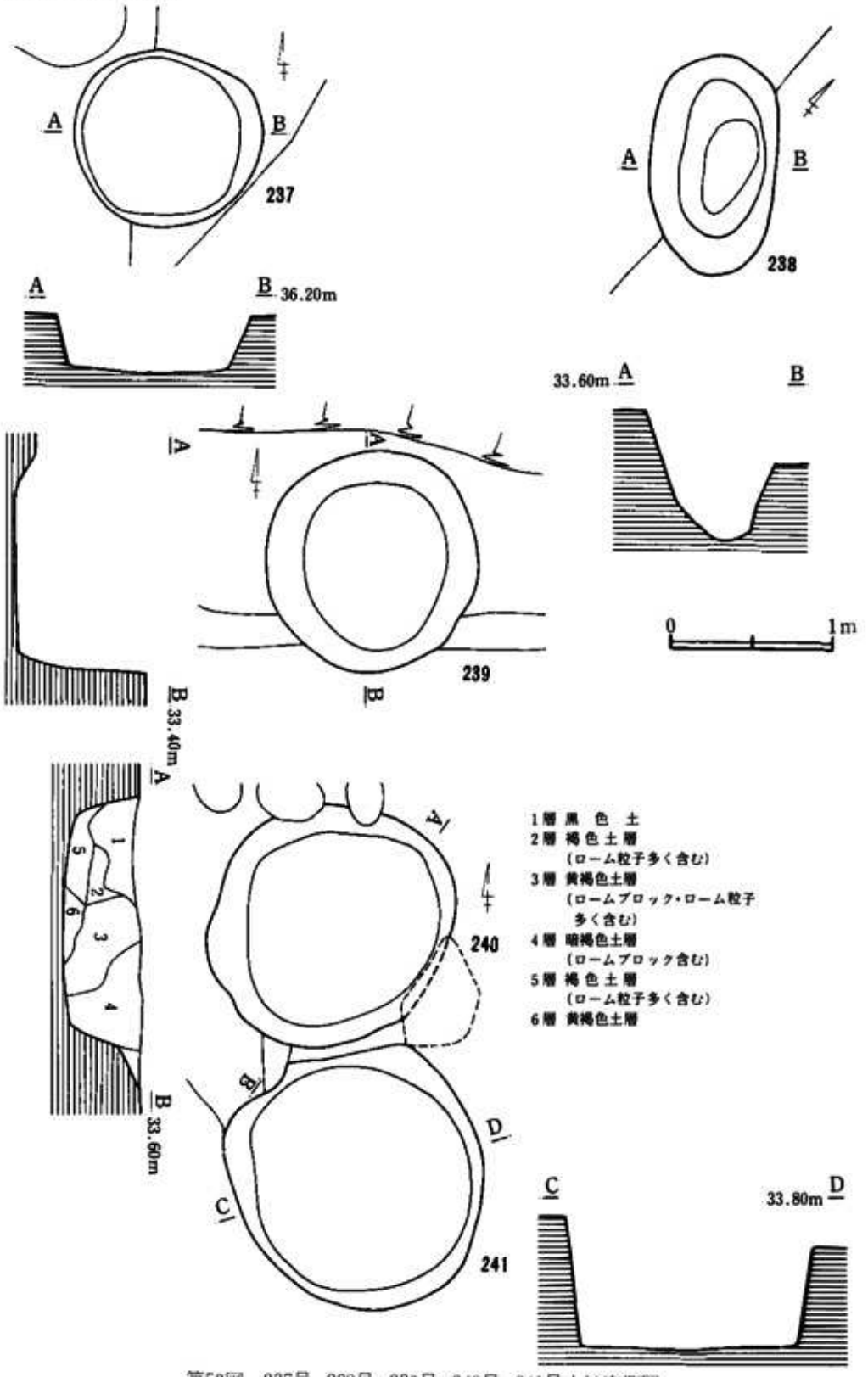
遺物の出土はない。

239号土坑（第53図）

057号住居跡の南壁面に接した内側に位置する。径1.4mの円形を呈する。深さは0.8mを測る。

遺物の出土はない。

240号土坑（第53図）



第53図　237号，238号，239号，240号，241号土坑実測図

E 1区，050号住居跡と重複する。径1.5mの円形を呈し，深さは0.5mを測る。

遺物の出土はない。

241号土坑（第53図）

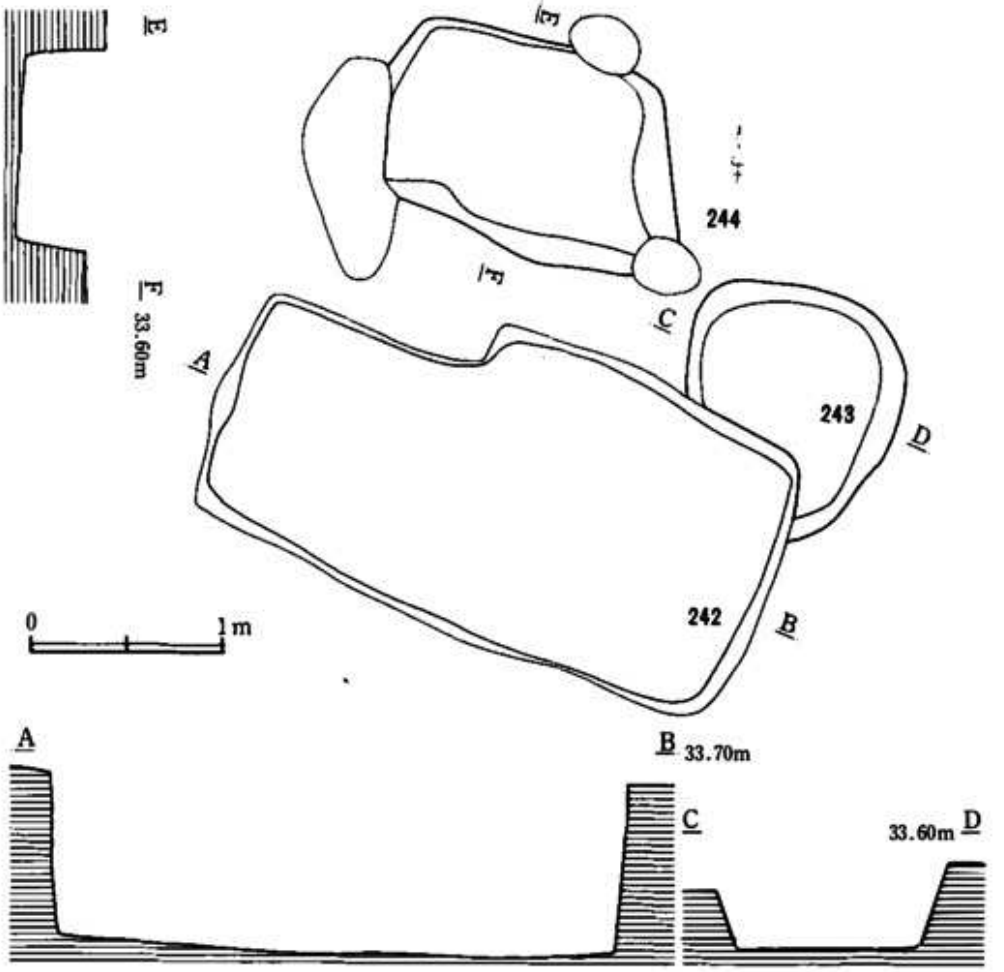
240号土坑の南に隣接して位置する。径1.5mの円形を呈し，深さは0.8mを測る。

遺物の出土はない。

242号土坑（第54図）

240号土坑の北東側に隣接して位置する。長径3.0mで，短径1.2mと1.5mの方形が接合したような形を呈する。深さは0.9mを測る。

遺物はほとんどない。



第54図　242号，243号，244号土坑実測図

243号土坑（第54図）

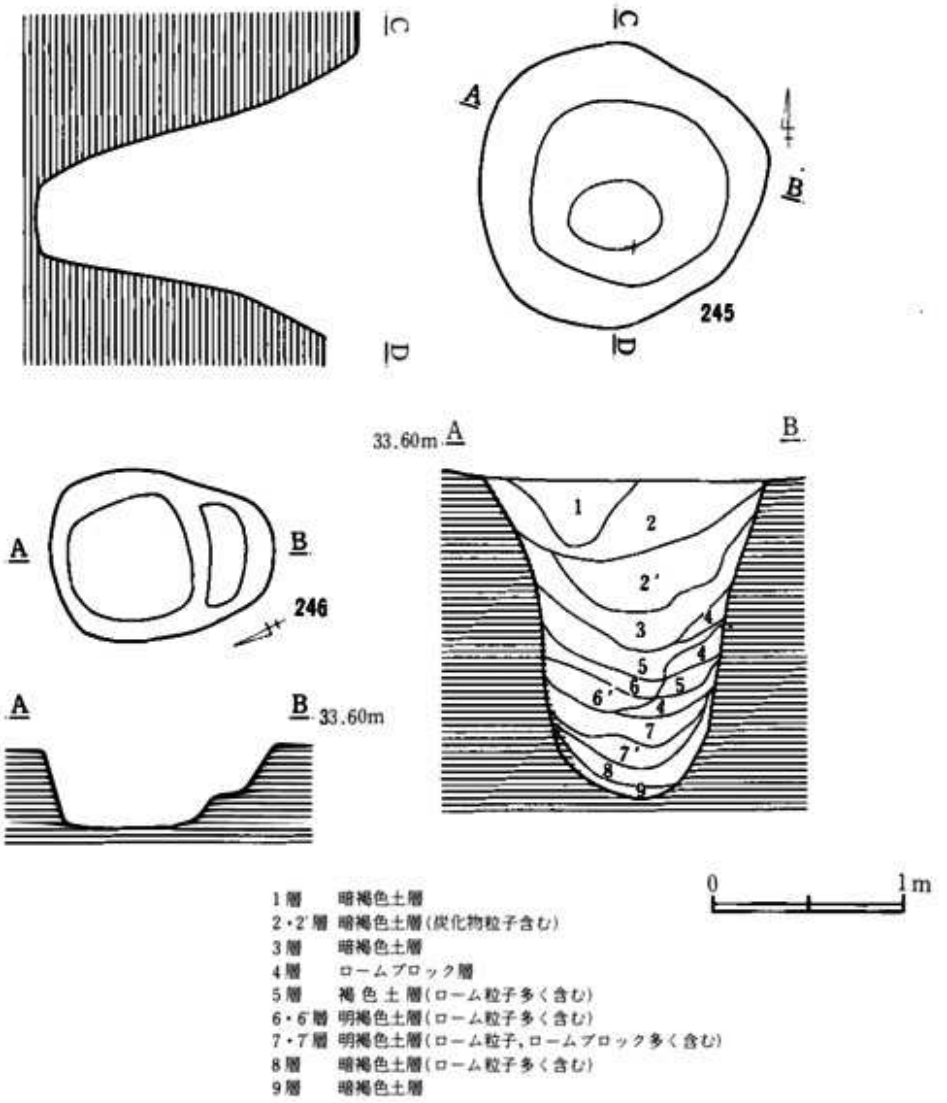
242号土坑の北東隅で重複する。長径1.3m，短径1.1mの楕円形を呈し，深さは0.4mを測る。

遺物の出土はない。

244号土坑（第54図）

242号土坑の北側に位置する。攪乱を一部受けているが長径1.7m，短径1.3mの台形を呈し，深さ0.4mを測る。

遺物の出土はない。



第55図　245号，246号土坑実測図

245号土坑（第55図）

242号土坑の東側1mに位置する。径1.5mの不整円形を呈し，深さは1.5mを測る。底面は長径0.5m，短径0.3mの楕円形であり，底に向かって狭くなっている。

遺物の出土はない。

246号土坑（第55図）

245号土坑の北側に接して位置する。長径1.2m，短径0.9mのだるま状の形を示す。底面は2段になっており，浅い部分は0.3m，深い部分は0.4mを測る。

遺物の出土はない。

次に掲げる9基の小ピットについては，土坑としては捉えなかった。これらの多くは単独の遺構ではなく，住居等の施設と考えられる。

216，217，219，234号等は住居跡の附帯施設の貯蔵穴であると考えられる。216号からは高坏，甕などの土器が出土している。また219号からは高坏が出土している。他の218，220号は住居跡と重複，または住居跡の中に掘られており，これもやはり住居の施設なのだろうか。236号は柱穴と考えられる。

第3節　掘立柱建物跡

301号掘立柱建物跡（第56図）

D3区に位置し，D54A・B号住居跡と重複する。棟方向は南北を示し，3間（3.6m）×2間(2.4m)の規模である。柱間は，桁行1.3mと1.0m，梁行は1.2mを測る。掘り方は径0.5～0.6m，深さ0.4～0.45mと大きさが揃っている。東側の柱穴の一部は住居跡との重複で検出できず，また柱痕跡も確認できなかった。

302号掘立柱建物跡（第56図）

E1区に位置し，048号住居跡と重複する。棟方向は北西，東南方向を示し，3間(3.6m)×2間（2.4m）の規模である。柱間は桁行0.8m，梁行1.2mを測る。掘り方は径0.3～0.4m，深さは0.2～0.5mと不揃いである。東南側の柱穴は検出できず，また柱痕も確認できなかった。

303号掘立柱建物跡（第56図）

D3区に位置し，301号建物跡の北側4m，009号住居跡と重複する。また304号建物跡を囲むようにある。東側は溝により削られている。棟方向は南北と考えられる。柱間は桁行0.5m，梁行は残るものでは0.7mを測る。掘り方は径0.35～0.5m，深さ0.05～0.3mと不揃いである。柱痕は確認できなかった。

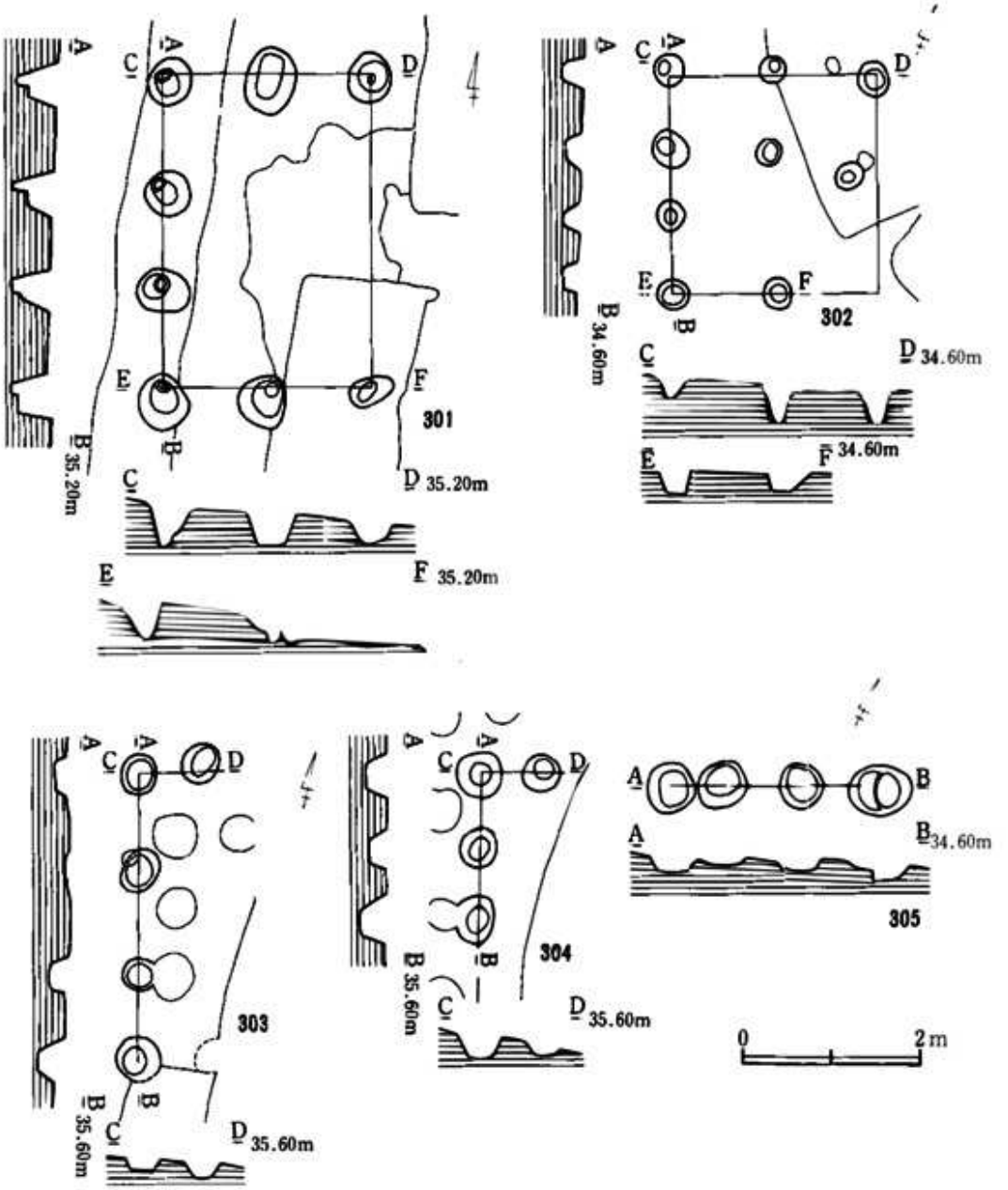
304号掘立柱建物跡（第56図）

303号建物跡の内側に位置し，東側は303号同様溝により消滅している。棟方向，規模は不明

である。南北方向の柱間は0.75m，東西方向の柱間は0.7mである。柱痕は確認できなかった。

305号掘立柱建物跡（第56図）

D２区に位置し，010号住居跡と重複している。南西，北西方向に一列のみ検出された。柱間は0.7mを測る。掘り方は径0.5～0.7m，深さ0.1～0.2mを測る。掘立柱建物跡と断定するのは難しい。



第56図　301号，302号，303号，304号，305号掘立柱建物跡実測図

第4節　溝状遺構

001号遺構（第57図，図版34－1）

C3・4区に位置する。削平と攪乱により東側は壊されている。また土坑との重複も多い。長さ13.6m，幅2.4m，深さ0.14mを測る。覆土は1層：茶褐色土層（ローム粒を多く含む），2層：暗褐色土層，3層：茶褐色土層（ロームブロックを多く含む），4層：黄褐色土層（ローム粒を多く含む）である。底部は小さな凹凸が多数あり，南側は中央がさらに深くなり2段になっている。ほかに附帯施設はない。この遺構の時期，性格等詳細は不明である。

遺物は土器破片が若干出土している。

030号遺構（第57図，図版34－2）

C2・3区に位置する。001号遺構の北側に隣接する。長径7.6m，短径4m，深さ0.3mを測る。覆土は1層：暗褐色土層（ローム粒，焼土粒を多く含む），2層：黒褐色土層，3層：黄褐色土層（ローム粒，ロームブロックを多く含む），4層：暗褐色土層（ローム粒，ロームブロックを多く含む），5層：黒褐色土層である。断面は舟底状である。底部は軟弱であり，踏み固められた様子はない。柱穴等の施設は全くなく，何に使われたものか不明である。

遺物は土師器片が若干出土しただけである。

第5節　堀（第58・59図，図版33－3・4，35・36）

調査区域の中央よりやや東側に寄ったところに，南北に走る大溝が検出された。幅5m，深さ1.8mで北の端で立上がる。東・西壁中段には犬走りが設けられている。底面は平坦ではなく，段が作られている。

遺物は多数出土している。

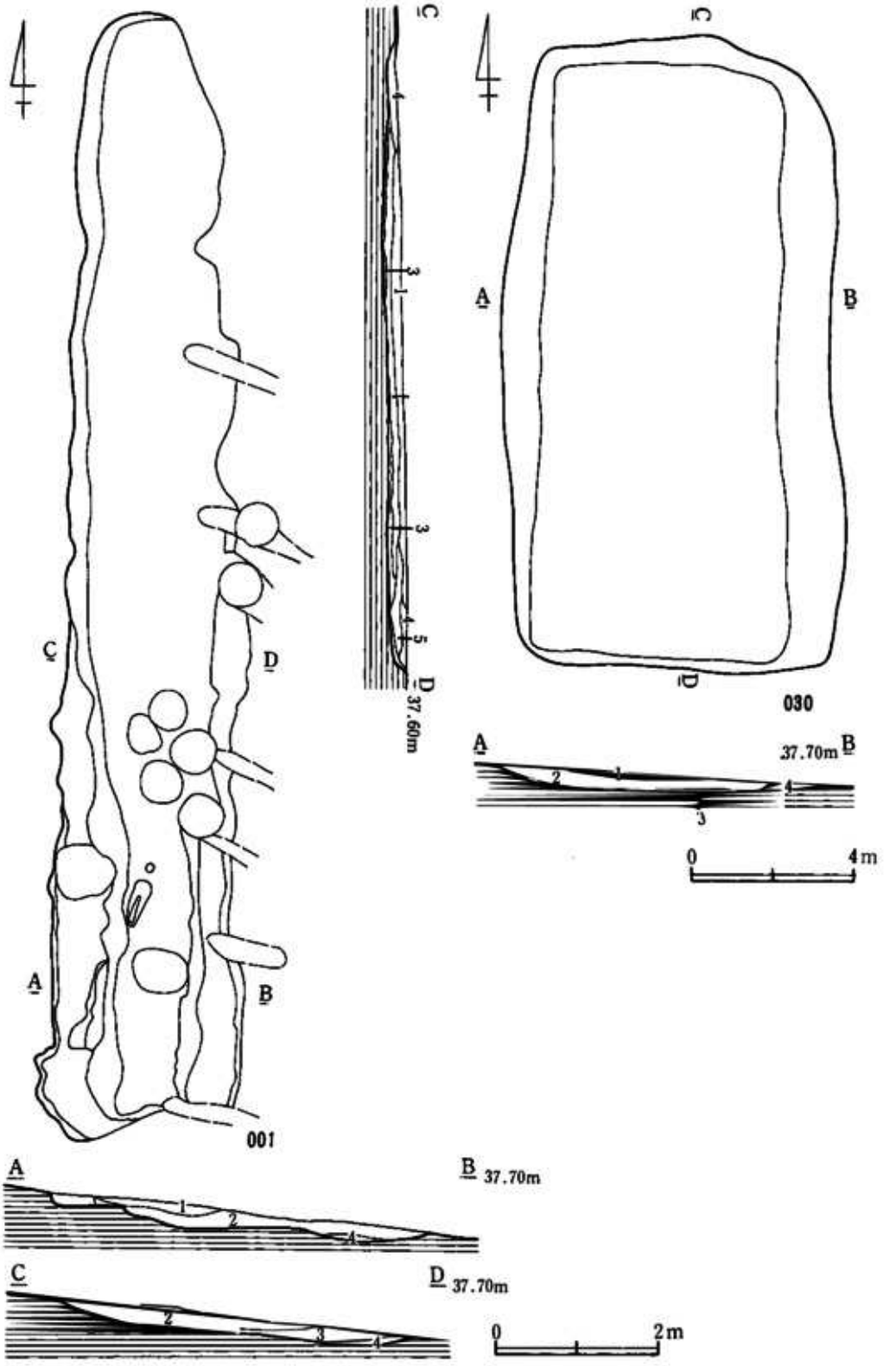
また西側の調査区では，台地整形を伴う溝が検出された。深さは台地上面より4～5mを測る。また中央附近は，橋状に一段高い所が見られる。この溝は台地の南側では失くなっている。この溝も台地の中心側に犬走りが設けられている。

これら2本の溝と犬走り，台地整形との関連から，城跡の堀と考えられる。

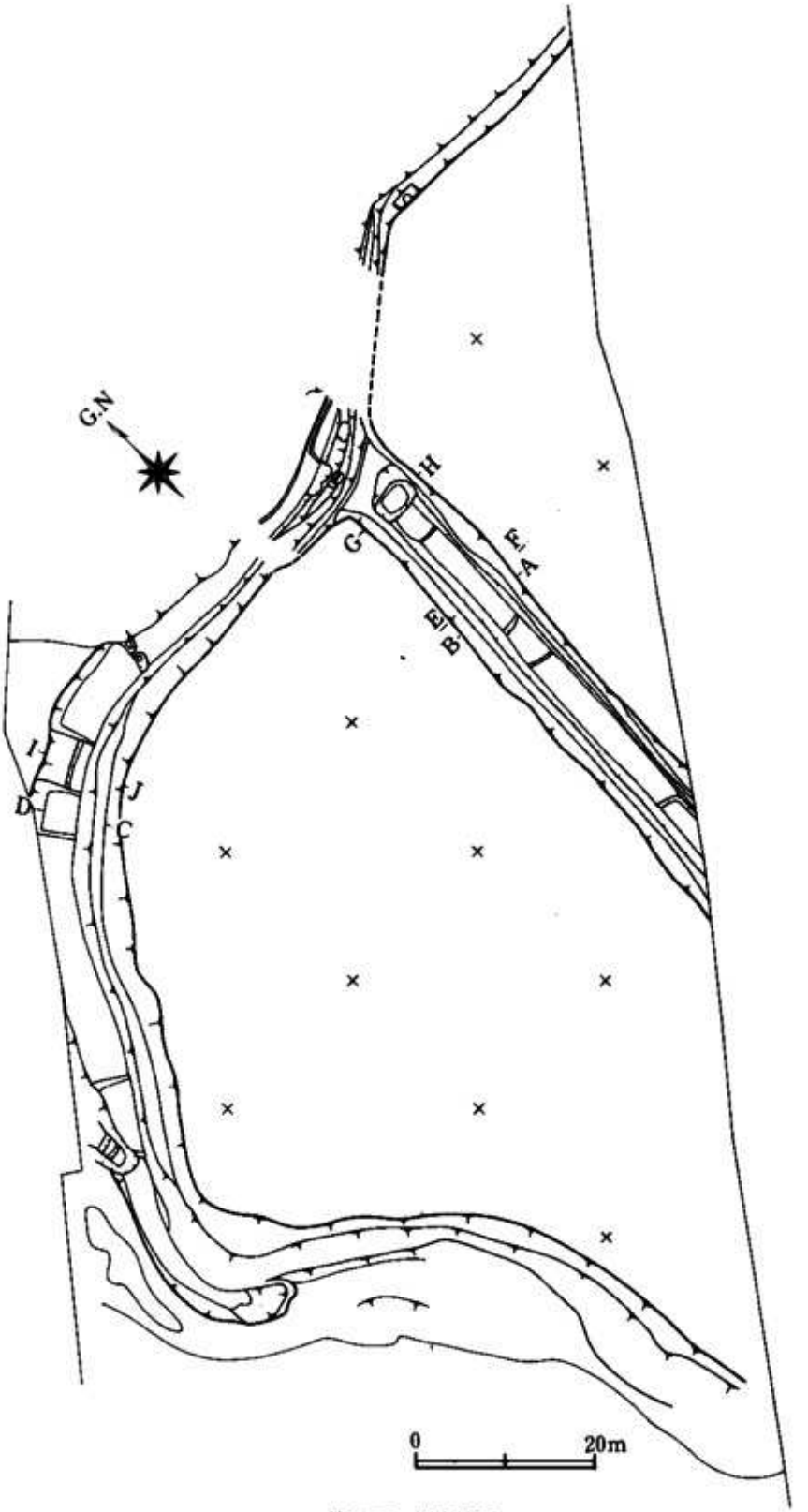
第6節　塚（第60図，図版37）

本調査区の南側B・C5区に位置する。取香川を北に望む「人手」状の舌状台地の付け根に近い西端の標高38mを測る台地上に築かれている。

一辺9mの方形を呈し，頂上部までの高さは現地表面から1.7mである。主軸は東西，南北を通る。旧地表面から上にロームブロックを含む褐色土を積み上げている。周溝は明確に確認できなかったが，周囲（西側を除く）は多少低くなっていた。

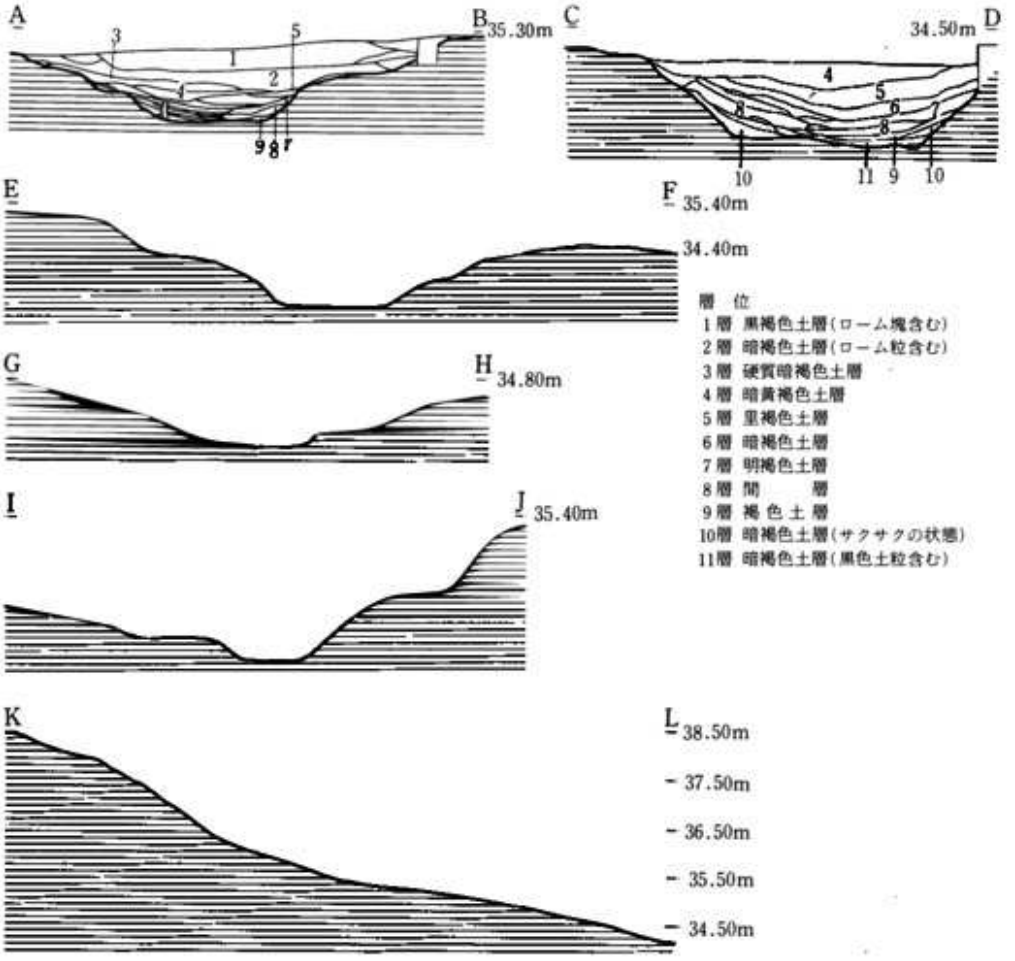


第57図　001号，030号遺構実測図

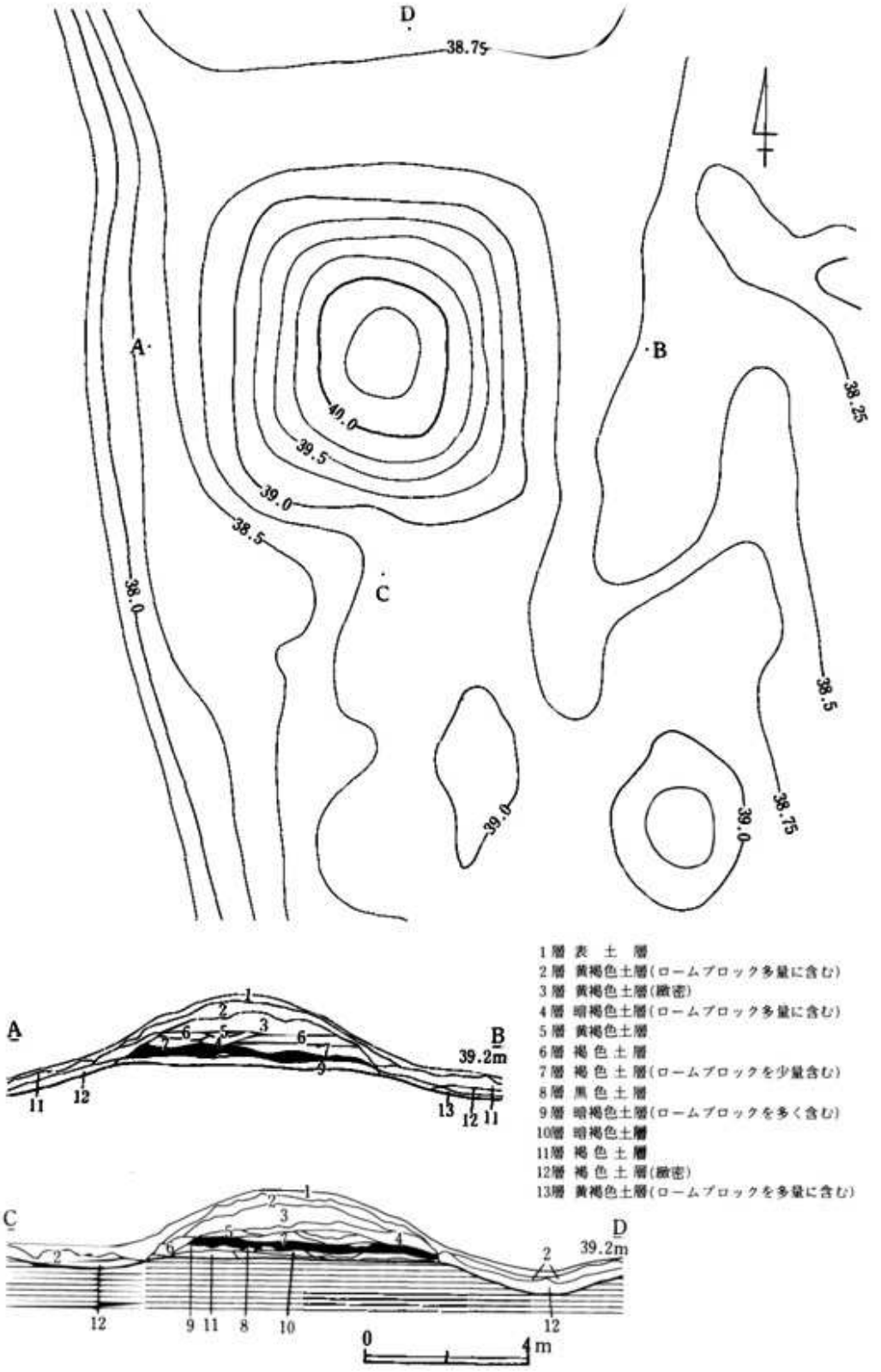


第58図　堀実測図

遺物は盛土中より土器片が多数出土した。また古銭も数枚出土している。築かれた時期は，出土遺物からでは近世以降と考えられる。



第59図　堀断面図



第60図　塚実測図，断面図

第3章　遺　　物

第1節　住居跡出土遺物

002号住居跡（第61図1～3，図版42）

1は坏で½欠損する。内面はヘラ削りにより整形されている。2は鉢で⅔欠損する。口縁が内彎し，胴下半部で「く」字形に屈曲する。3は甑と思われ，約¾欠損する。口縁部は外反し，胴部はヘラ削りされている。

004A号住居跡（第61図4・5）

4・5ともに坏で，口縁部下面に稜を有し口縁部がやや外反している。いずれも赤彩が施されている。

004B号住居跡（第61図6～15，図版42）

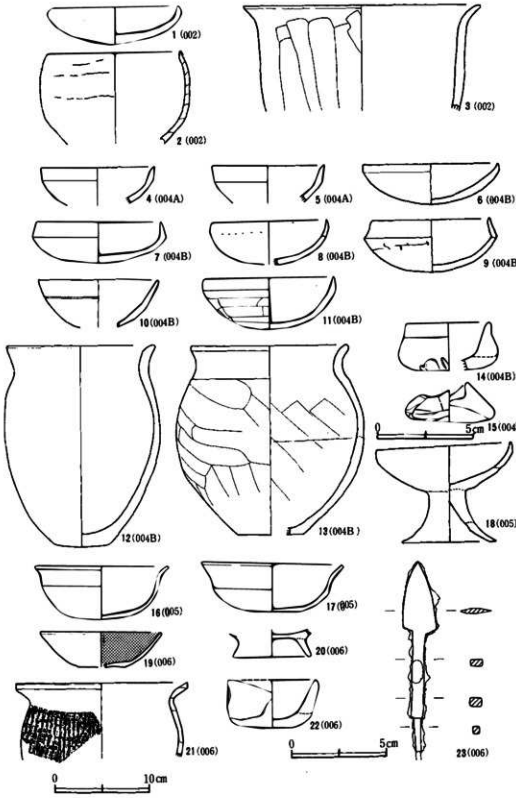
6～11は坏で，11は完形，9は完形に近い。他は½以上欠損する。口縁部は横ナデを施され，外面はヘラ削りののちナデやヘラ磨きが行なわれている。11のみヘラ削りを残す。器形をみると6は底が浅く，口縁部は外反する。7は稜を有し，口縁は内傾する。8は稜がみられない。9の稜は明瞭に突出する。10は口縁が外反し，器面に浅い溝が走る。11は弱い稜がみられる。12は器高 20.7 cm，口径 15.9 cm，胴径 16.3 cm を測る。ほぼ完形の甕である。口縁部のくびれは弱く，胴部の張りも弱い。器面は磨滅により明瞭にはわからないが，口縁部はヨコナデ，胴部は上から下方向に調整が施されたようである。13は器高 19.5 cm，口径 16.5 cm，胴径 20 cm を測る甕で約⅓欠損する。口縁部のくびれは小さく，胴部との間に稜をもつ。胴部は球状を示す。口縁部はヨコナデ，胴部はヘラ削りを施している。14は手捏土器で½欠損する。15は粘土塊とも思える。

005号住居跡（第61図16～18，図版42）

16・17は坏でともに約¼ほど欠損する。16は口縁部の外反が強く，体部は丸味をもつ。口縁部はヨコナデ，外器面はヘラ削りののち磨きを施している。17は口縁部の外反は強く，体部は浅い。弱い稜をもつ。口縁部はヨコナデ，器面はヘラ削りののちナデ，底部はヘラ削りを認める。ともに赤彩を施している。18は高坏で⅓欠損する。坏部は口縁部がまっすぐに開く。脚部は底に向かって「ハ」字形に開く。器面には赤彩が施される。

006号住居跡（第61図19～23）

19は坏で約½欠損する。底部はヘラ切り取りで，内面は黒色処理されている。20は高台の部分で，底部には糸切り痕を認める。21は甕で約⅘欠損する。口縁部は強く外反し，胴部には叩き目を認める。22は手捏土器である。23はカマド付近から出土した三角形式の鉄鏃である。鏃身は長さ 3.35 cm，幅 1.75 cm で箆被ぎと茎は方形の断面を示す。



第61図　002号，004A・B号，005号，006号住居跡出土遺物実測図

007A号住居跡（第62図1～9，図版43）

1・2は須恵器の坏で，5は高台付坏である。1は逆台形を示し，体部は直線状に開く。2はやや箱形を示し，口縁部が外反する。5の高台は直立に近い。3・4はくすべ焼成の坏で，底部に「＋」の墨書を認める。底部は1・3・4・5が回転ヘラ削り，2はヘラ削り調整である。6はロクロ使用の坏で，底部から体部下端に回転ヘラ削りを行なう。両面とも赤彩が施される。7・8は小形甕である。口唇部はともに素縁，口縁部は横ナデ，胴部上半にヘラ削りを認める。9は甕で口唇部が水平ぎみに折り返されて段状を呈する。

007B号住居跡（第62図10～12）

10，11は坏で，口縁部，体部に全く稜をもたない。口縁部はやや内彎する。10にはヘラ削り，11は赤彩が施されている。12は甕で，口縁部が「く」字形に外反し，口唇部は僅かに折れる段状を呈す。胴部は球形を呈する。

007C号住居跡（第62図13・14）

13・14はともに甕で，14は小形甕である。口縁部は外反し，口唇部は僅かに折れる段状を呈する。口縁部は横ナデ，胴部は13が磨滅により単位は不明であるが，ともに縦方向のヘラ削りを認める。

007D号住居跡（第62図15・16，図版43）

15は完形，16は¾ほど欠損する。15は器高 16.6 cm，口径 15.8 cm，底径 7.2 cm を測る。口縁部は外反し，外面に凹面をつくる。胴部は球形を呈し，外面上部は縦位，下部は横位のヘラ削り調整を施している。16は口唇部が直立ぎみに折り返されて段状を呈する。

007E号住居跡（第62図17～20，図版43）

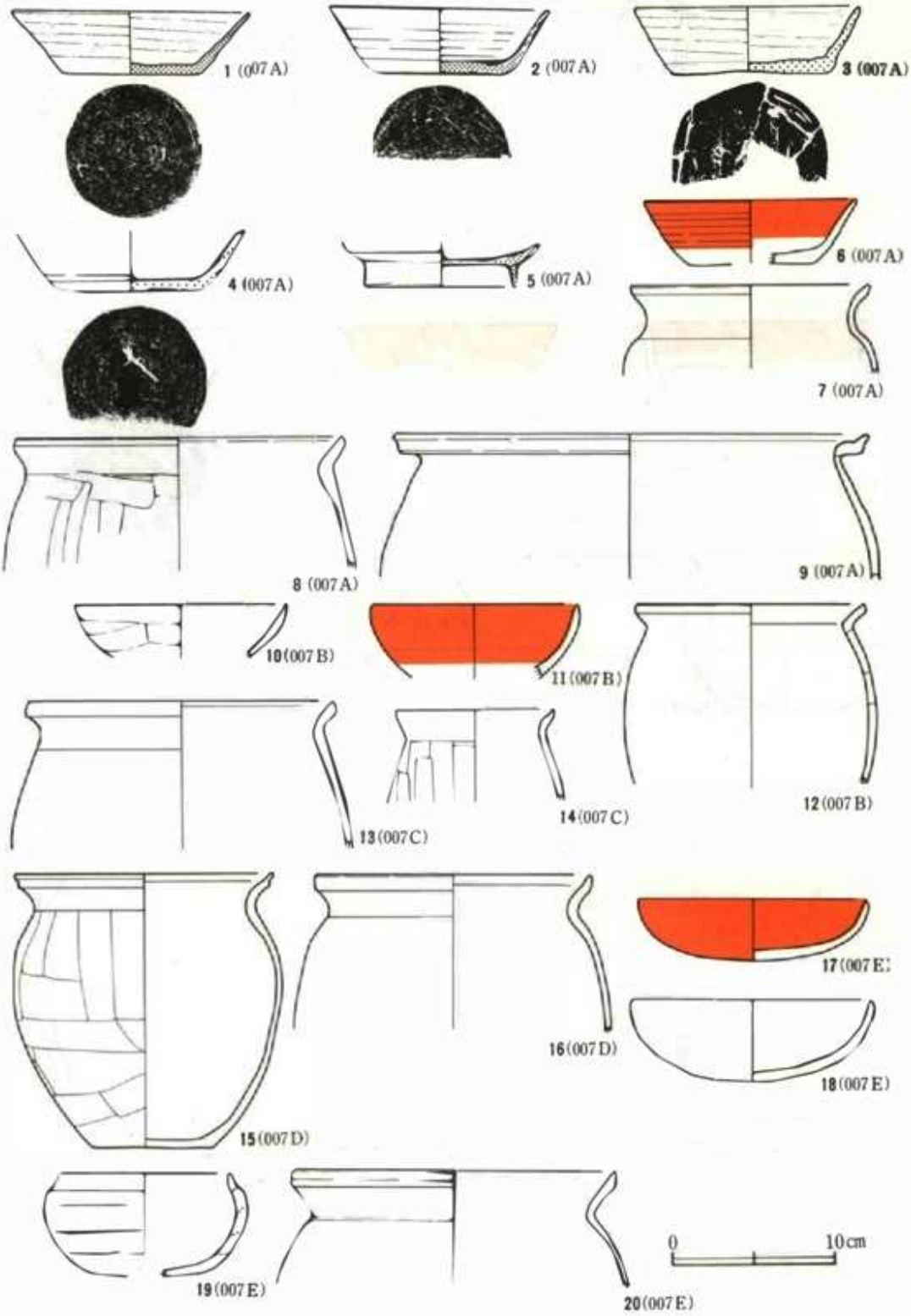
17・18は坏で丸底を呈し，体部には全く稜をもたない。口縁部は横ナデ，底面はヘラナデを認める。19は底部から胴部が球形を呈し，口縁部が僅かに内彎する小型壺形土器である。20は甕で，口縁部が「く」字形に外反し，口唇部が直立ぎみに折り返されて段状を呈するものである。

008号住居跡（第63図1～3）

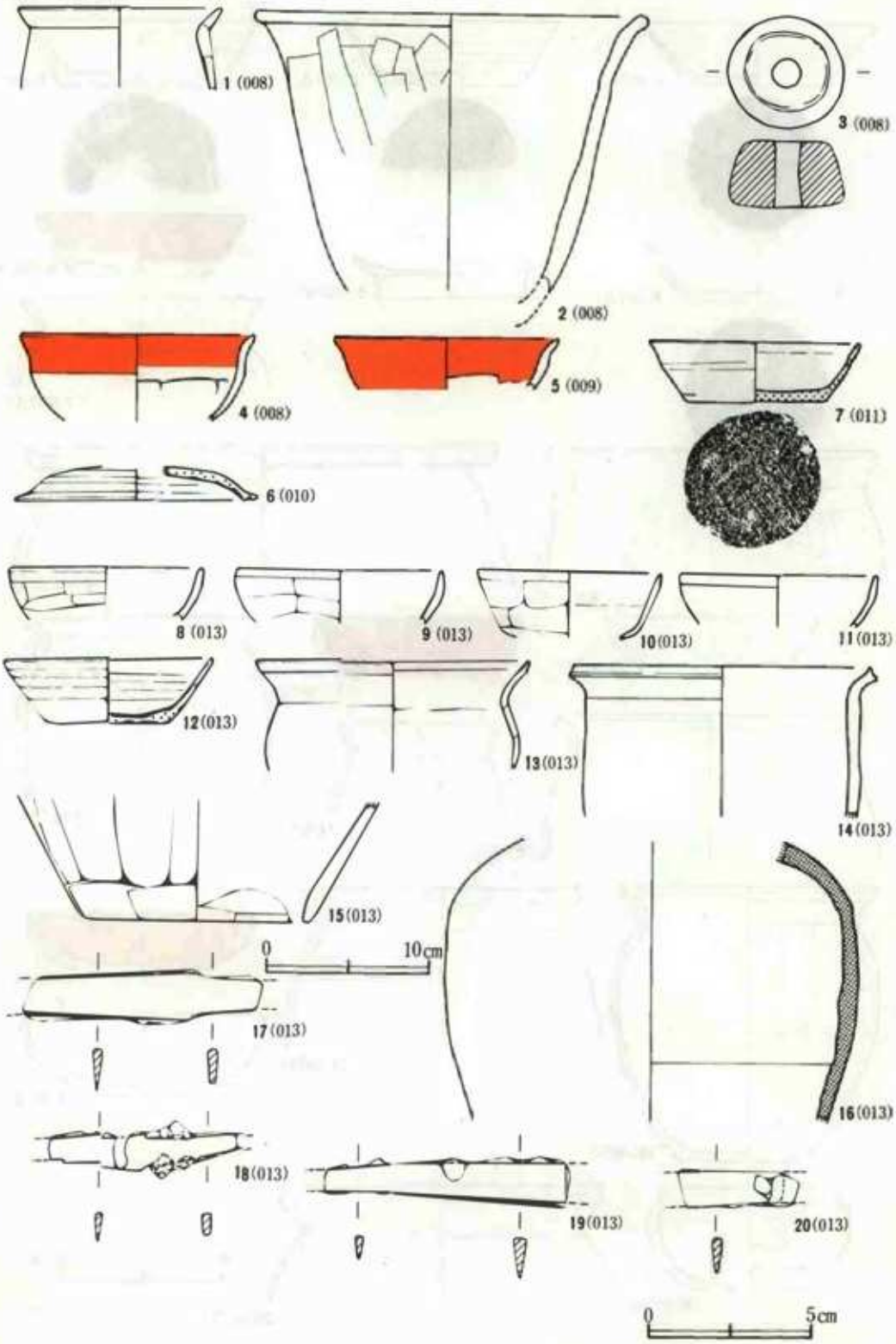
1は小形甕で口縁部が「く」字形に外反し，胴部は僅かに膨らむようである。2は甑で，胴部は直線的に外反し，口縁部は外に開く。器厚は比較的あり，口縁部に横ナデを施してから胴部上面にヘラ削りを行なっている。なお，胴下面にはミガキを認める。3は上径 26 mm，下径 35 mm，孔径 7.4 mm，厚さ 19 mmを測る滑石製の紡錘車である。

009号住居跡（第63図4・5）

4・5は坏で，ともに赤彩を施してある。4は口縁部と体部の間に稜をもつ。口縁部は外反する。5は口縁部が短く外反する。ともに口縁部は横ナデ，体部はヘラ削り調整を施している。



第62図　007A・B・C・D・E号住居跡出土遺物実測図



第63図　008号，009号，010号，013号住居跡出土遺物実測図

010号住居跡（第63図６）

６はくすべ焼成の坏蓋で，口縁端部内側にかえりをもつ。天井部外面は回転ヘラ削りを施す。

011号住居跡（第63図７，図版43）

７はくすべ焼成の坏で完形である。器高 3.7 cm，口径 13 cm，底径 4.5 cm を測る。平底を呈し，体部はほぼ直線的に外反する。体部と底部の境は明瞭で，底部はヘラ切り取りである。

013号住居跡（第63図８～20）

８～10はロクロ未使用の坏で，体部は弧状で平底，体部にヘラ削りを施す。11はロクロ使用の坏で，体部は弧状で口唇が真直ぐ立ち上がる。口縁部と体部の間には稜が僅かに認められる。12はくすべ焼成の坏で約⅔欠損する。体部は直線的に立ち上がる。体部と底部の境は明瞭で，底部は平底でヘラ切り取りである。13・14は小形甕で，口唇部が直立ぎみに折り返されて段状を示す。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削り調整を施す。14は胴部が直立し，口唇部は同じく直立ぎみに折り返され，段状を示す。15は甑の胴下半部である。単孔で器面にはヘラ削りを施す。16は灰釉陶器の長頸瓶の胴部である。全体の1/10のみの遺存である。最大径が胴部上半にある。17～20は刀子片である。

014号住居跡（第64図，図版43）

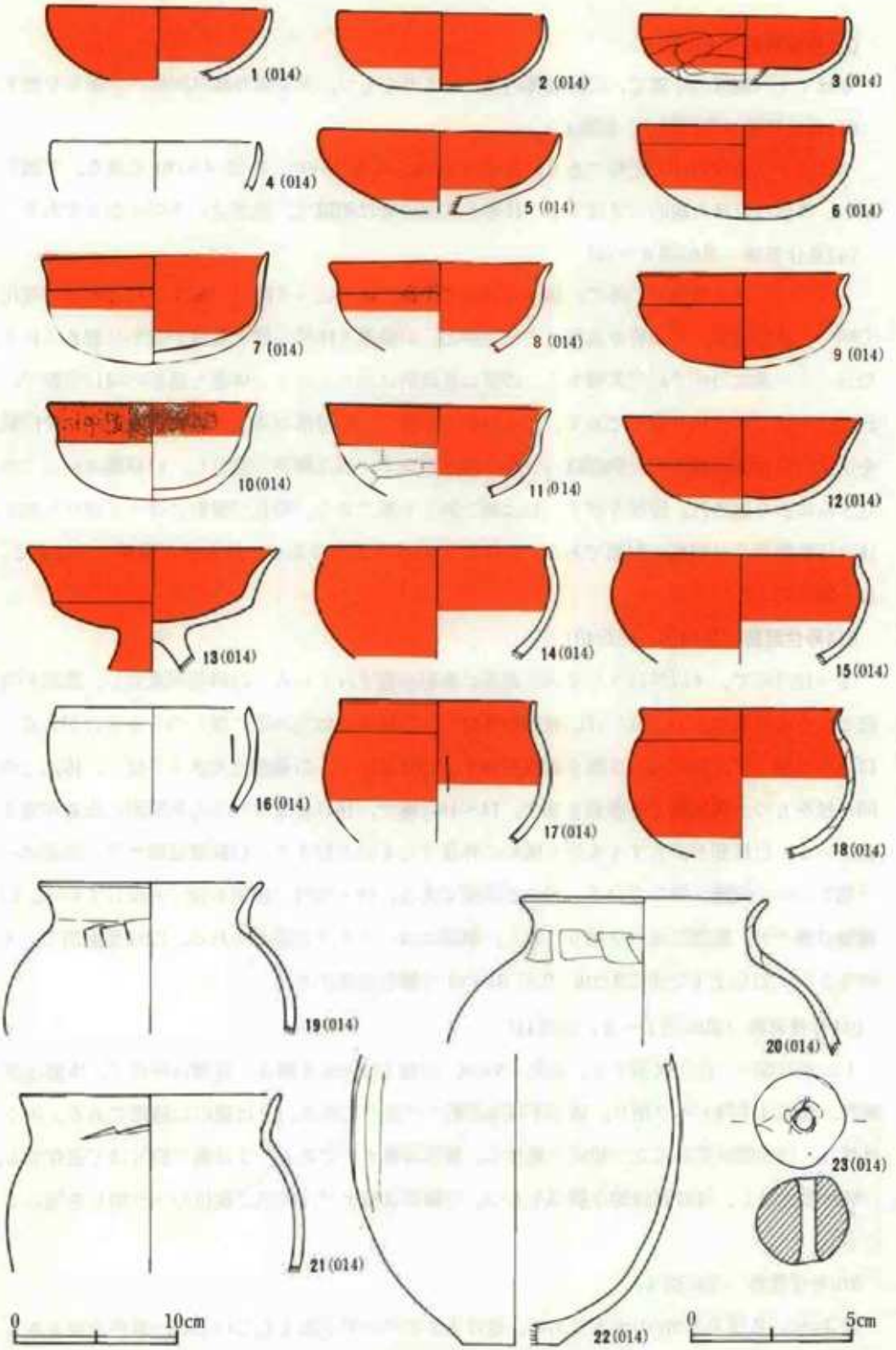
１～12は坏で，４以外はすべて内外両面に赤彩が施されている。口縁部が直立し，底部が丸底と小さな平底のもの，或いは口縁部が外反し，口縁部と体部の間に稜をつくるものがある。口縁部は横ナデ，体部はヘラ削り調整を施す。13は高坏で，口縁部は大きく外反し，体部との間に稜をもつ。両器面とも赤彩を施す。14～18は埦で，16以外はすべて内外両面に赤彩が施されている。口縁部が直立するものと僅かに外反するものとがある。口縁部は横ナデ，体部はヘラ削りののち調整を施している。19～22は甕である。19・20は口縁部が強く外反している。口縁部は横ナデ，頸部にはヘラ削りを施し，胴部にはヘラナデが認められる。22は甕胴部で，丸味をもつ。23は土玉で径 2.9 cm，孔径 0.5 cm で褐色を呈する。

015号住居跡（第65図１～３，図版44）

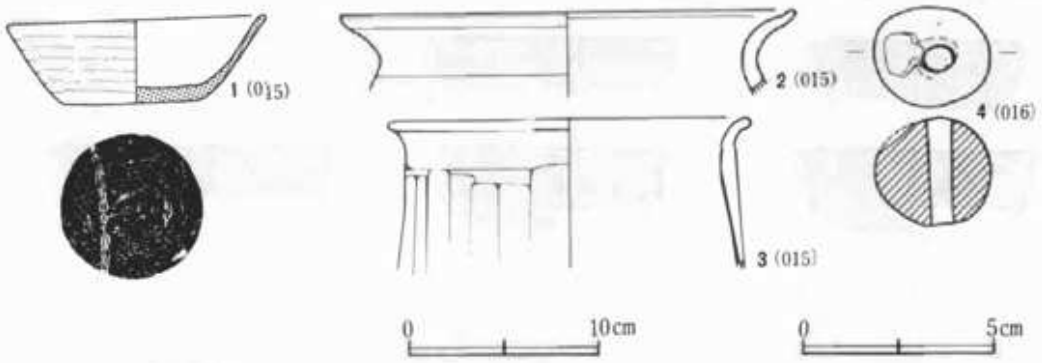
１は須恵器坏で約⅓欠損する。器高 4.4 cm，口径 13.6 cm を測る。底部は平底で，体部は直線的。底部は手持ちヘラ削り。体部下端は回転ヘラ削りである。２は甕の口縁部である。強く外反し，口唇部が僅かに立つ傾向を見せる。整形は横ナデである。３は甑で約⅓ほど遺存する。口縁部は外反し，ほぼ直線的な胴部をもつ。口縁部は横ナデ，胴部は縦位のヘラ削りを施している。

016号住居跡（第65図４）

径 3 cm，孔径 0.5 cm の土玉である。他は土師器片が若干出土しているが，器形の窺えるものはない。



第64図　014号住居跡出土遺物実測図



第65図　015号，016号住居跡出土遺物実測図

017A号住居跡（第66・67図，図版44）

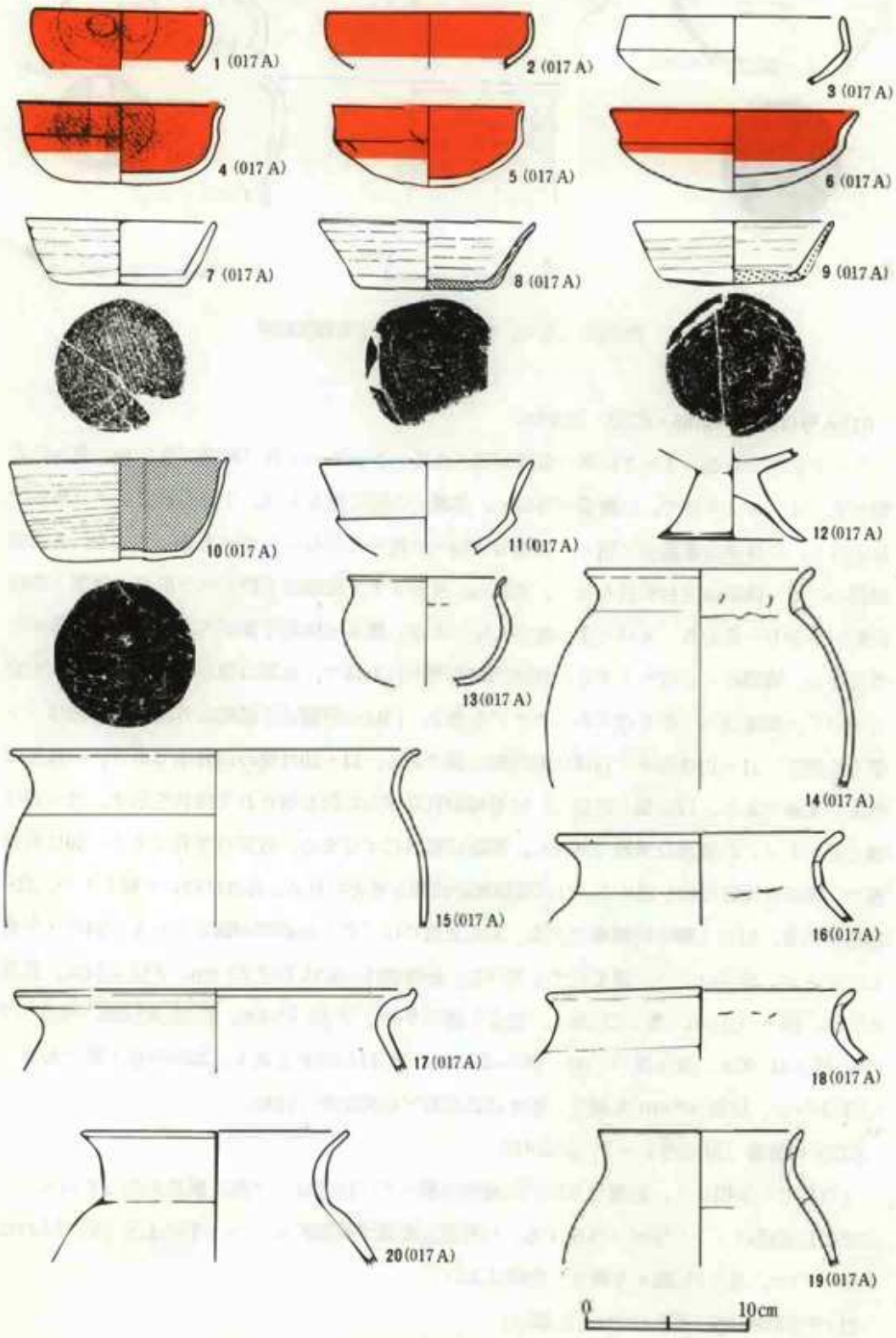
1～7は坏である。3・7以外は赤彩が施されている。1～3は口縁部が直立か，僅かに内彎する。4～6は丸底で，口縁部が外反し，体部との間に稜をもつ。7は平底でロクロ整形の痕を残し，口縁部は直線的に開く。底部は回転ヘラ削りののちヘラナデを施している。8は須恵器の坏で，体部は逆台形状を示し，直線的に外反する。底部は手持ちヘラ削り，体部下端は回転ヘラ削りを認める。9はくすべ焼成の坏である。底部・体部下面が内厚で口縁部は僅かに外反する。底部はヘラ削りである。10は内黒処理された鉢で，体部は僅かに膨らみをもって立ち上がる。底部はヘラ削りののちヘラナデを施す。13は小型甕で口縁部は外反し，体部はヘラ削りを施す。11・12は高坏で12は比較的短い脚である。14～20は甕の口縁部である。口縁部は外反し素縁である。17は強く外反し，口唇部が直立ぎみに折り返されて段状を示す。21～29は甑と思われる。口縁部は素縁で外反し，胴部は弧状にすぼまる。底部は単孔である。30は長頸瓶で，器面には自然釉を認める。31は長頸瓶の底部と考えられる。高台は短いが幅をもつ。32・33は滑石製，34は土製の紡錘車である。33の上面には「井」の線刻が認められる。34は½欠損しているが，焼成はよく，硬くしまっている。計測値は，32は上径 2.2 cm，下径 3.2 cm，孔径 0.5 cm，厚さ 1.5 cm，重さ22.38 g，33は上径 2.9 cm，下径 3.9 cm，孔径 0.6 cm，厚さ 1.2 cm，重さ31.86 g，34は径 3.3 cm，厚さ 2.1 cm，重さ13.29 g である。35は手捏土器である。口径 5.0 cm，器高 2.8 cm を測り，胎土には長石・石英を多く含む。

018号住居跡（第68図1～3，図版44）

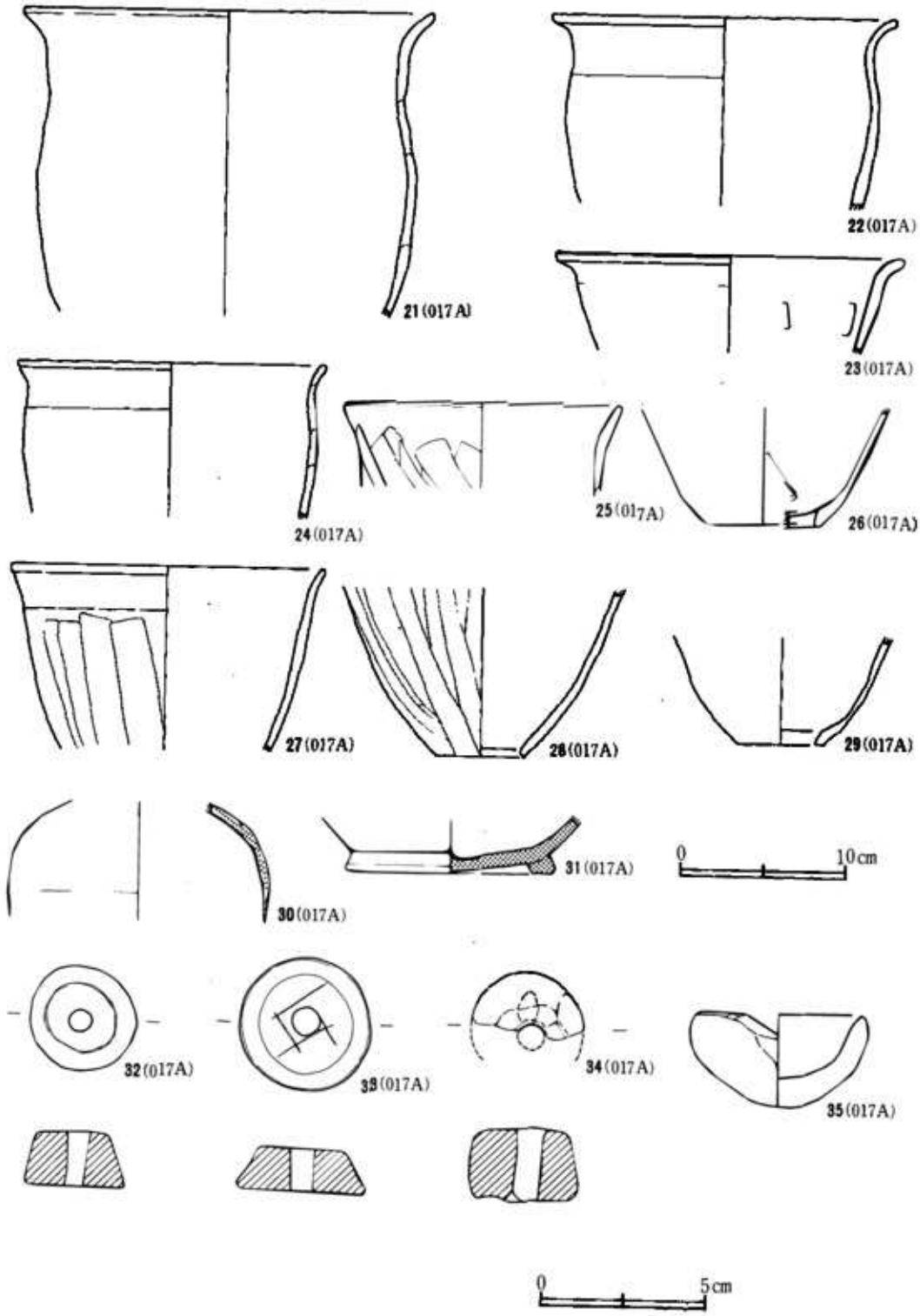
1は坏で⅗欠損する。底部は丸底で口縁部は横ナデ，体部はヘラ削り調整を施している。2は甕で口縁部は「く」字状に外反する。口唇部は素縁で直線的にたつ。3は土玉で径 3.1 cm，孔径 5.7 cm，重さ25.38 g を測る。焼成はよい。

019号住居跡（第68図4～10，図版44）

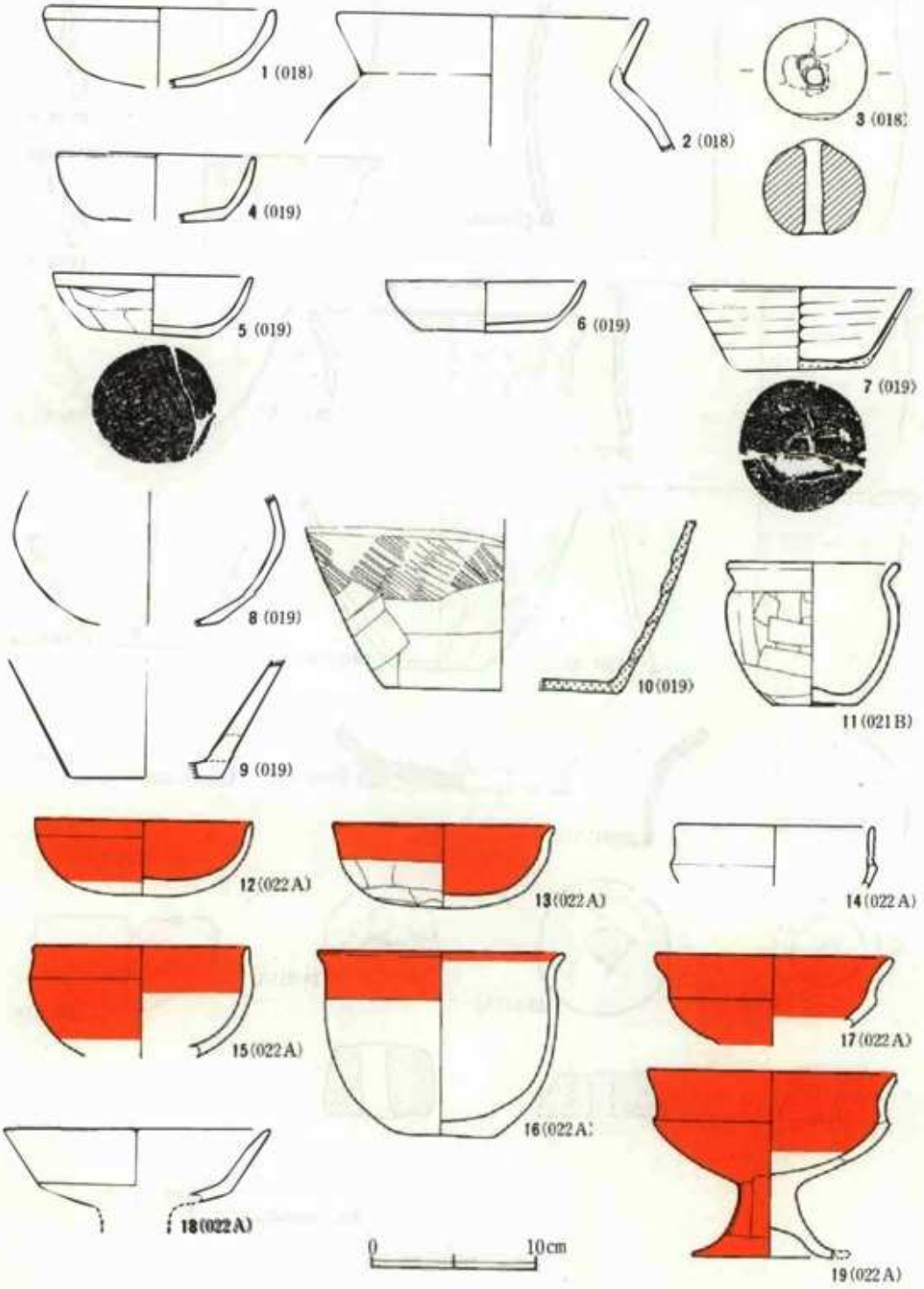
4～6は坏で，体部は弧状，底部は平底である。底面はヘラ削りを施す。7はくすべ焼成の



第66図　017A号住居跡出土遺物実測図 (1)



第67図　017A号住居跡出土遺物実測図 (2)



第68図　018号，019号，021B号，022A号住居跡出土遺物実測図

坏である。平底で体部は直線的に開く。体部下端は回転ヘラ削り，底部はヘラ削りを施す。8は小型甕の胴部で，ヘラナデを施している。9は甕の底部で，磨耗で不明であるが，ヘラ削りの痕跡を認める。10はくすべ焼成の甕の胴下半部である。叩き目の上にヘラ削りを施し，整形している。

021B号住居跡（第68図11，図版44）

11は完形の小形甕である。器高 8.3 cm，口径 10.2 cm を測る。口縁部は素縁で短く外反する。胴部は丸味をもち，最大径を胴上半部に有する。器面にはヘラ削りを施し，底部にもヘラ削りを認める。

022A号住居跡（第68図12～19，図版44・45）

12～15は土師器坏である。14以下はすべて両器面に赤彩が施されている。口縁部は直立し，体部との間に弱い稜が認められる。16は小形甕で鉢形に近い器形を示す。器高 10.9 cm，口径 15 cm で完形。口縁部は外反し，横ナデ，赤彩が施されている。体部はヘラ削りののちヘラナデが施されている。17～19は高坏である。口縁部は外反し，体部との間に稜をもつ。ともに赤彩が施されている。脚部は「ハ」字形を示す。

022B号住居跡（第69図1～4，図版45）

4点とも完形かあるいはそれに近い。1～3は坏である。1・2の体部は丸味をもち，口唇部も尖る。器面にはヘラナデ調整を施す。3は須恵器の坏のような器形を示す。両器面とも赤彩が施されている。底面はヘラ削りを施している。4は甑で，器高 18.8 cm，口径 25.2 cm，底径 10.5 cm を測り，器高に比べ口径がかなり広い。口縁部は強く外反し，外面には凹面を認める。整形は横ナデ。胴部はゆるやかな彎曲で底部に至る。器面は縦方向のヘラナデののち，横位のヘラ調整を施している。

026号住居跡（第69図5～8，図版45）

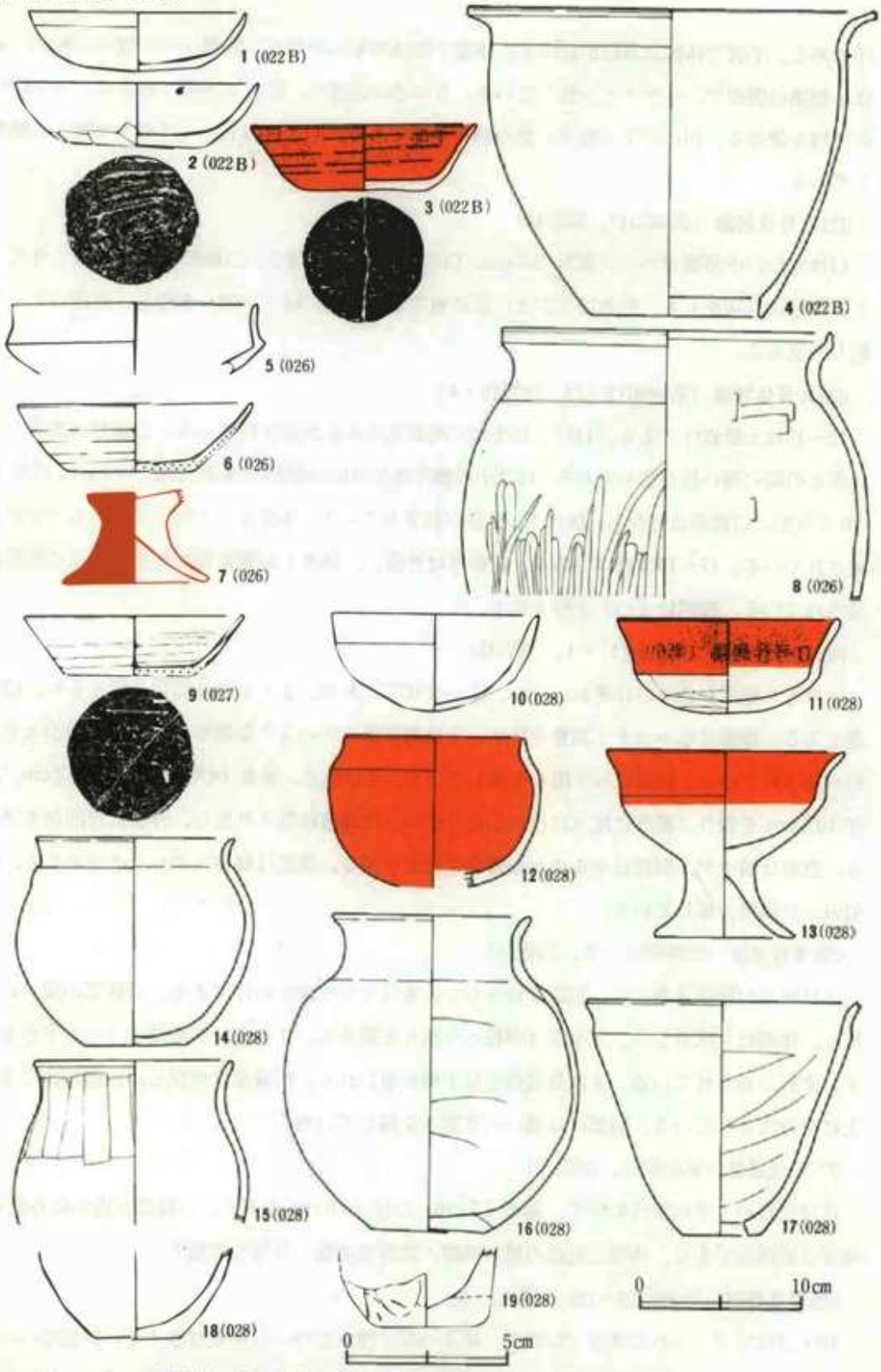
5は坏で口縁部は直立し，明瞭な稜をもつ。6はくすべ焼成の坏である。口縁部が僅かに外反し，体部は丸味をもつ。下半部は回転ヘラ削りを認める。7は高坏の脚部で「ハ」字形を示す。赤彩が施されている。8は長胴形を呈す甕と思われる。口縁部は外反し，口唇部はつまみ上げて段状としている。胴部には細いヘラ磨きを施している。

027号住居跡（第69図9，図版45）

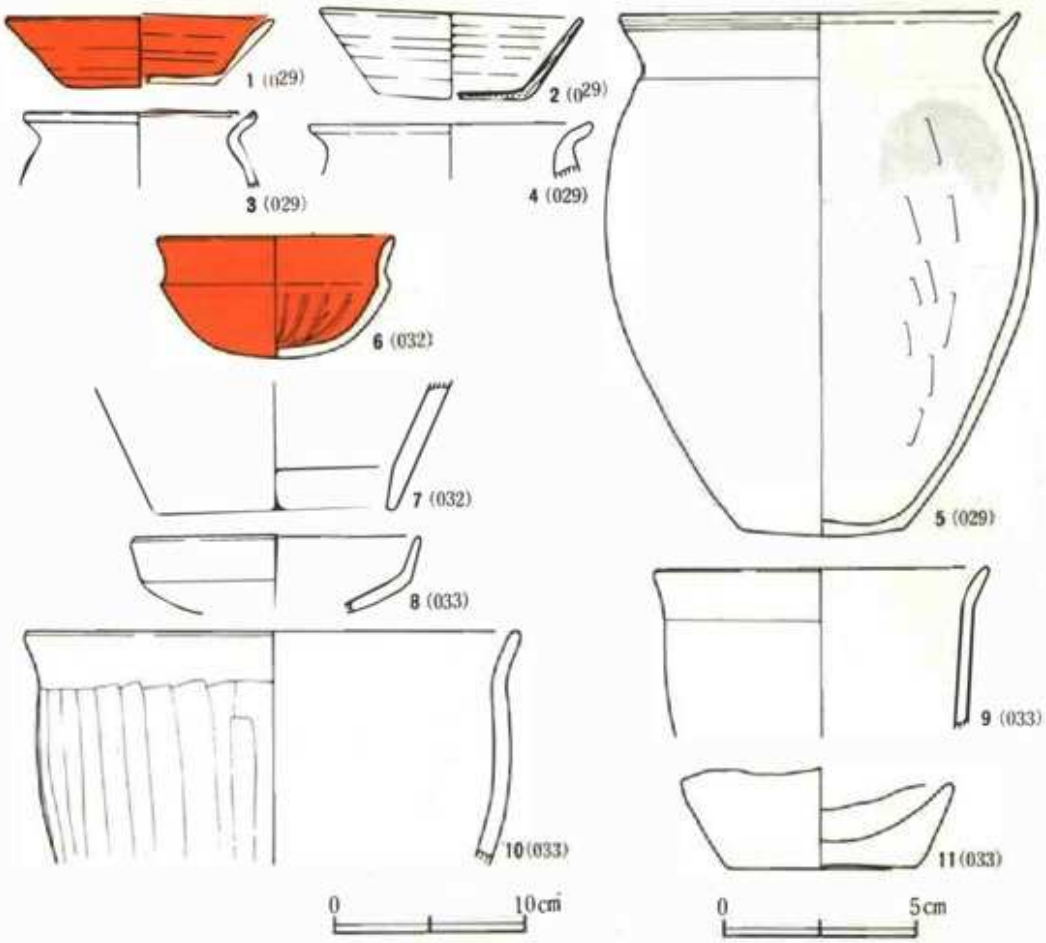
ほぼ完形のくすべ焼成の坏で，器高 3.7 cm，口径 13.6 cm を測る。口縁部が僅かに外反し，体部は直線的である。体部と底部の境は明瞭，底部は全面ヘラ削りを施す。

028号住居跡（第69図10～19，図版45・46）

10・11は坏で，ともに丸底で口縁部と体部の間に稜をもつ。口縁部は横ナデ，体部はヘラ削りを施す。11の口縁部の内外器面には赤彩が施されている。12は鉢で口縁部は直立し体部は球



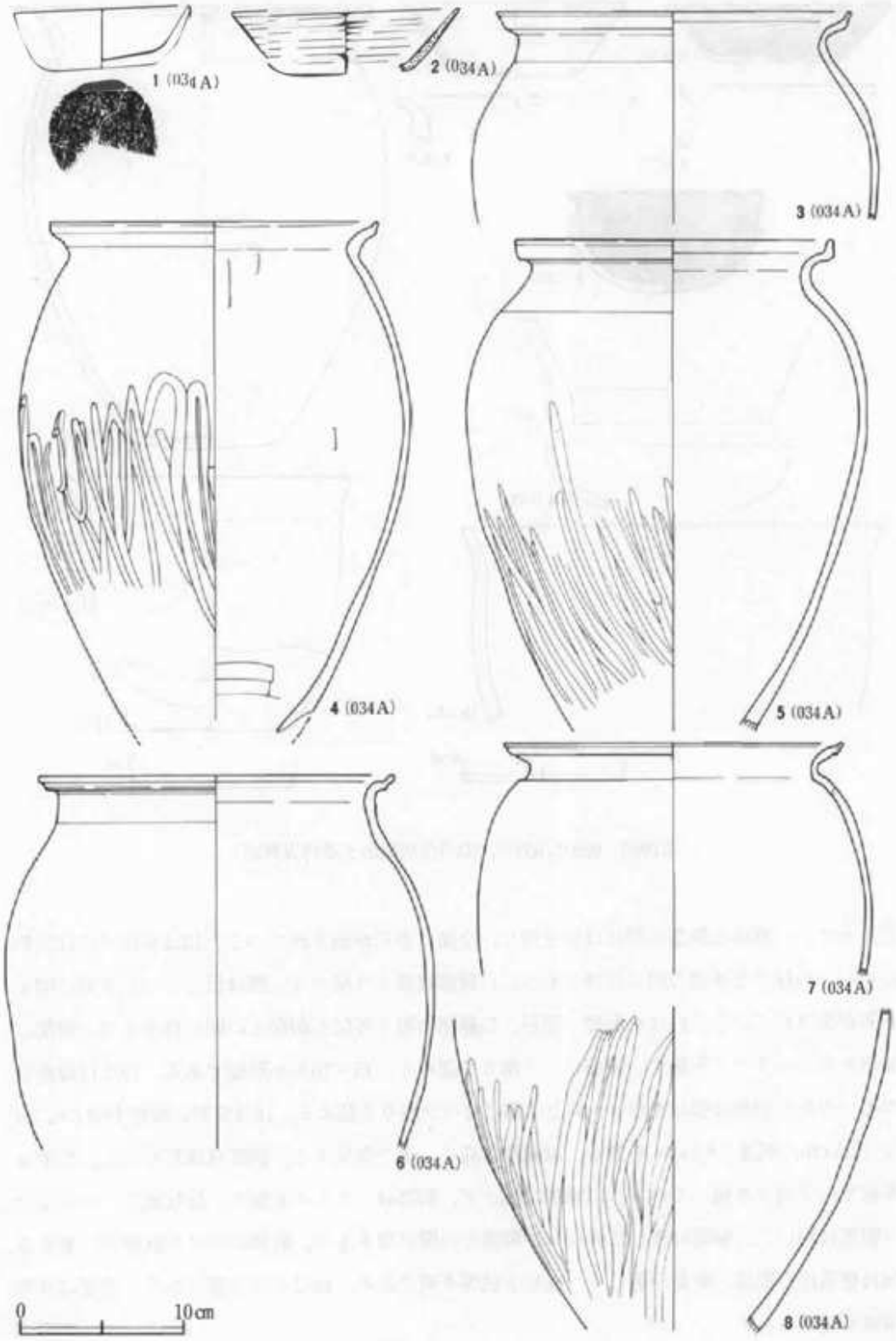
第69図　022B号，026号，027号，028号住居跡出土遺物実測図



第70図　029号，032号，033号住居跡出土遺物実測図

状を示す。口縁部と胴部の間には稜を残し，全面に赤彩が施されている。13は高坏でほぼ完形に近い。口縁部と体部の間には稜をもち，口縁部は強く外反する。脚は低く「ハ」字形に開く。赤彩が施されている。14は小形甕で完形。口縁部は短く外反し胴部との間に稜をもつ。胴部は球形を呈しヘラナデを施す。底部はヘラ削りを認める。15・16も小形甕である。15は口縁部がゆるく外反し胴部は弧状を示す。胴上半部にはヘラ削りを認める。16は完形。器高 19.0 cm，口径 12.3 cm，胴径 18.3 cm を測る。口縁部は高く，また外反する。胴部は球形を呈し，底部は平底でヘラ削りを施している。口縁部は横ナデ，胴部はヘラナデを施す。17は甑で，口径に比べ胴部は短い。口縁部は僅かに外反し，胴部との間に稜をもつ。底部にかけて直線的に窄まる。18は甕底部。器面の磨耗が著しく，成形手法等不明である。19は手捏土器である。器面には指頭痕を認める。

029号住居跡（第70図 1 ～ 5，図版46）



第71図　034A号住居跡出土遺物実測図（1）

1は坏。口縁部は外反し，逆台形状を示す。両面に赤彩を施し，体部下端は回転ヘラ削り，底部はヘラ削りを認める。2は須恵器坏で，体部は直線的で逆台形の形状を示す。体部下端は回転ヘラ削り，底部はヘラ削りを施す。3・4は小形甕の口縁部である。ともに強く外反し，3は口唇部が直立ぎみに折り返されて段状を呈す。5は約½欠損する長胴の甕である。口縁部は外反し，口唇部は僅かに折り返されて外面に凹面を認める。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りののちヘラナデ。底部は僅かに丸底でヘラ削りを施す。

032号住居跡（第70図6・7，図版46）

6は完形の坏である。口縁部は外反し，体部との間に稜をもつ。口縁部は横ナデ，体部には両器面ともヘラミガキを施す。ともに赤彩を施す。7は甑の底部である。単孔で器面にはヘラ削りを認める。

033号住居跡（第70図8～11，図版46）

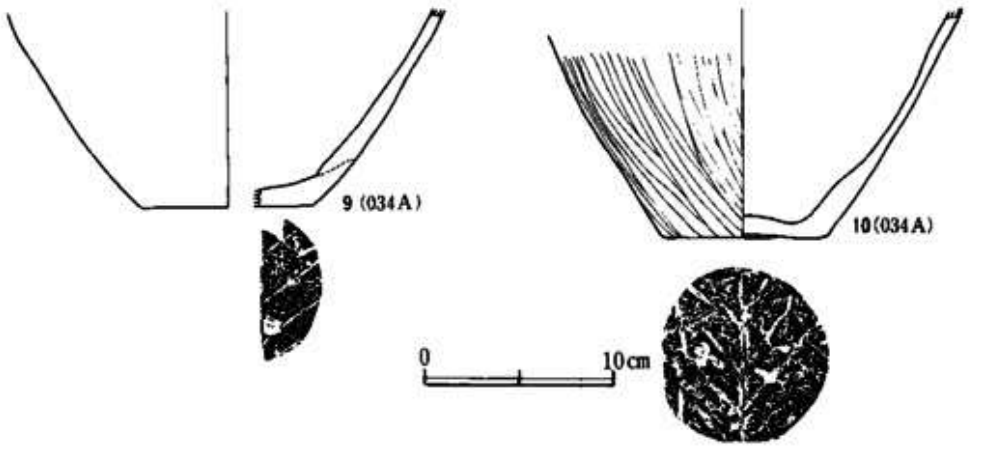
8は坏で口縁部は横ナデ，体部はヘラ削りを認める。9・10は甑と思われる。口唇部は素縁で，口縁部は僅かに外反する。口縁部は横ナデ，胴部にはヘラ削りを施す。

034A号住居跡（第71・72図，図版47）

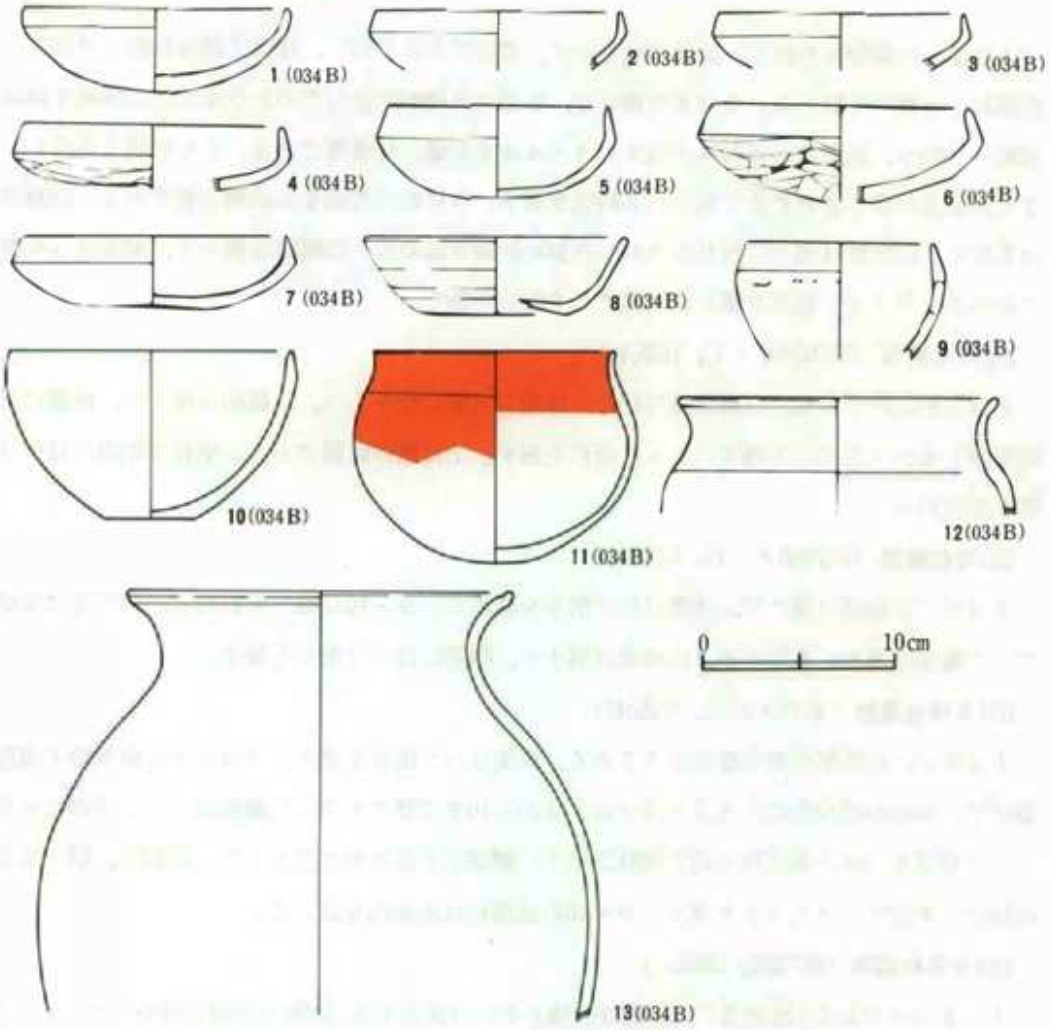
1は坏で，口唇部がやや直立ぎみである。底部はヘラ削りを施す。2はロクロ痕を残す須恵器坏で，体部が直線的に大きく外反する。3から10まで甕である。口縁部は「く」字形に外反し，口唇部をつまみあげ折り返し段状を示す。胴部上半部に最大径をもち，長胴で，胴下半部に細かい単位でヘラミガキを施す。9・10の底部には木葉痕を認める。

034B号住居跡（第73図，図版47）

1～8は坏である。底は浅く口縁部は内傾あるいは直立する。体部との間に稜をもつ。1～7



第72図　034A号住居跡出土遺物実測図 (2)



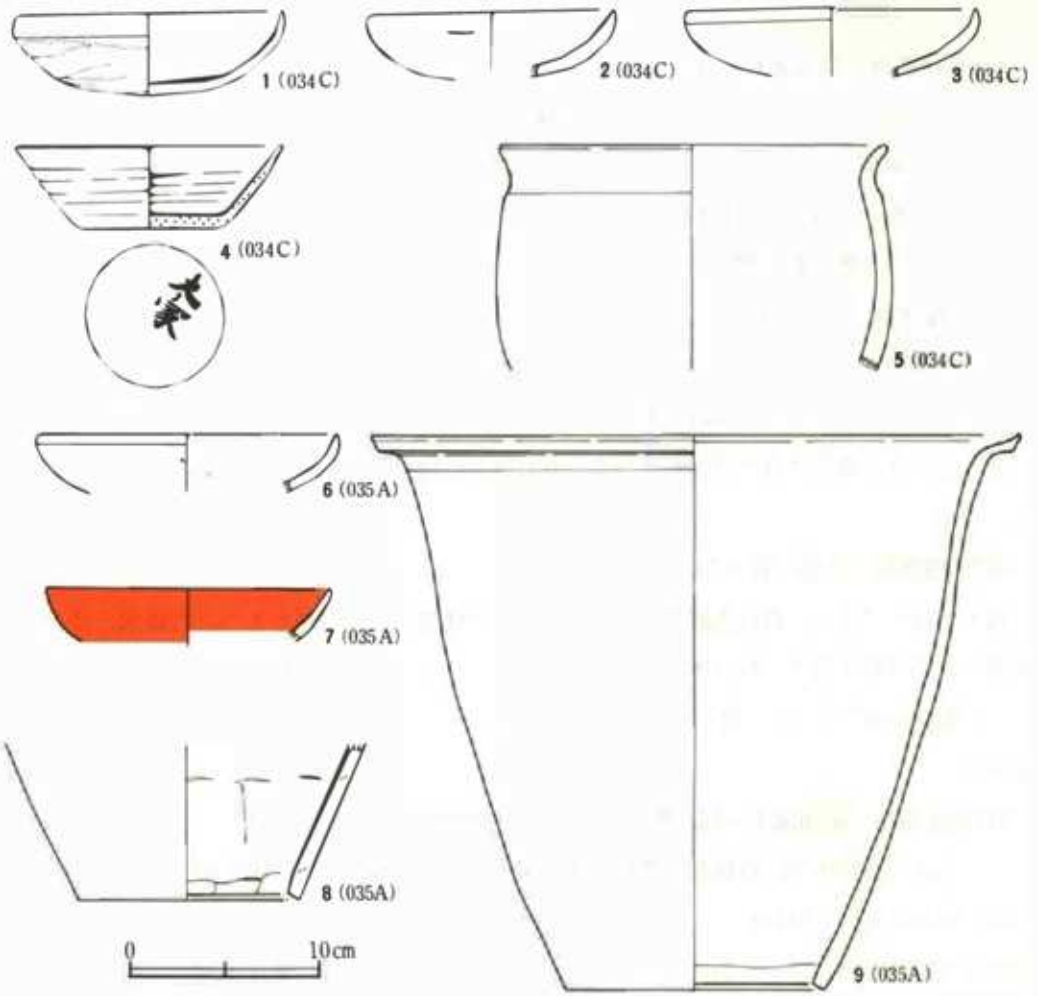
第73図　034B号住居跡出土遺物実測図

は丸底と思われる。8は糸切り底の坏である。9～11は鉢で口唇部は直立ぎみである。10は口径が大きく平底を示す。11は口縁部が内傾し，赤彩を施す。底部は丸底に近い。12は小形甕で，口縁部は外反し，一様に横ナデを施している。13はやや大形の甕である。

034C号住居跡（第73図1～5，図版48）

1～3は坏で，底は浅く口縁部は直立する。4はくすべ焼成の坏で，体部は直線的で口縁部が僅かに外反する。体部下部は回転ヘラ削り，底部はヘラ削りを施している。なお底部には「大家」と墨書されている。5は小形甕で，口縁部は外反し胴部との間に稜をもつ。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りののちヘラナデを施している。

035A号住居跡（第73図6～9）



第74図　034C号，035A号住居跡出土遺物実測図

6・7は土師器坏で，底は浅く外反する。7には赤彩を施している。8・9は甑で，9は全体の約⅓遺存する。口縁部は外反し口唇部をつまみ上げて段状を示す。胴部はほぼ直線状で，単孔の底部へ窄まる。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りののちヘラナデを施す。

035B号住居跡（第75図1～5，図版48）

1～3は坏で，僅かに外反ぎみの口縁部をもつものと，口縁部と体部との間に稜をもち，口縁部が内傾するものがある。1は体部にヘラ削りを認める。4は完形の甑である。器高 16.4 cm，口径 22.2 cm，底径 7.7 cmを測る。口径に比べ器高は低く鉢形を示す。口縁部は外反し，胴部との間に稜をもつ。胴部には大きな単位のヘラ削りが施されている。5は小形甕と思われる。口縁部は大きく外反し，胴部はほぼ直立に近い。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りを認め

る。

036号住居跡（第75図6～11，図版48）

6～9は坏ですべて丸底と思われる。口縁部は直立か内傾する。10は高坏の坏部である。底は浅く，口縁部は強く外反する。体部との間に稜をもつ。外面は赤彩，内面は黒色処理されている。11は甑の口縁部と思われる。口縁部下半には，横ナデあるいはヘラによる調整ナデの施される前のヘラ削り痕が僅かに残る。

039号住居跡（第75図12～16，図版48）

12～14は坏で，底は浅く口縁部は外反する。体部は12・14がヘラミガキ，13はヘラ削りを施す。15はくすべ焼成の坏でほぼ完形である。器高 3.5 cm，口径 13.1 cm を測る。体部は直線的に立ち上がり，底部にはヘラ削りを施す。16は甕の口縁部である。口唇部は肥厚し複合口縁化している。

040号住居跡（第75図17～20，図版48）

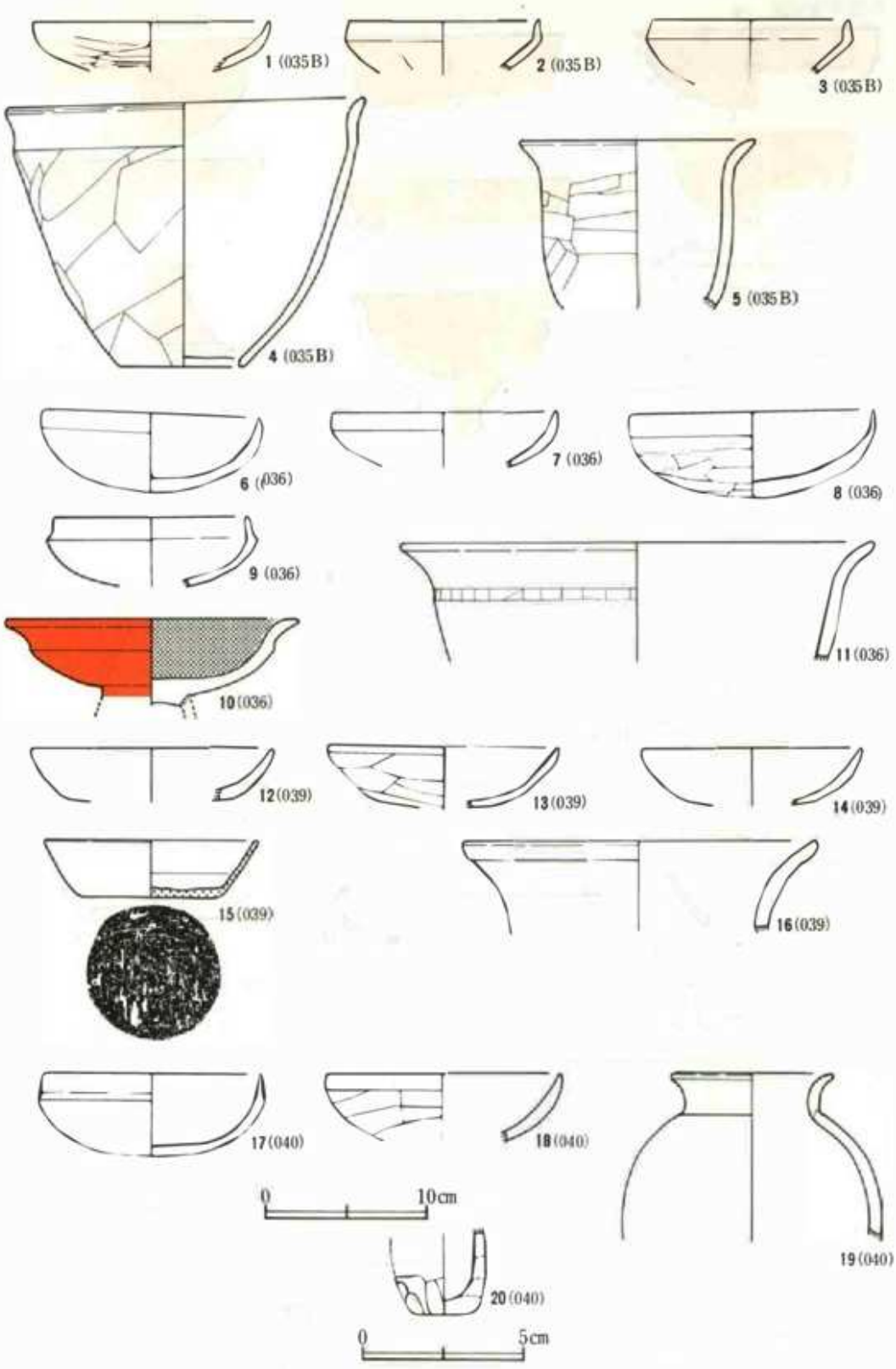
17・18は坏である。17は丸底で，口縁部は直立し体部との間に稜をもつ。口縁部は横ナデ，体部はヘラ調整を施す。18は体部が弧状を示し，ヘラ削りを施す。19は小形甕で，口縁部は外反し，胴部は球形を示す。器面にはヘラナデを施している。20は手捏土器で外面には指頭圧痕を残す。

042号住居跡（第76図1～13，図版48）

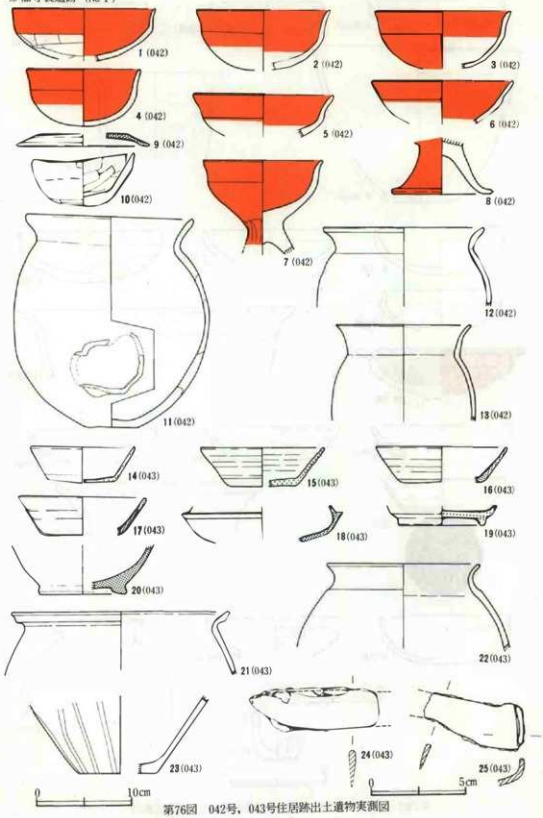
1～6は土師器坏で，口縁部は外反し体部との間に弱い稜をもつ。両器面には赤彩を施している。底部は丸底と思われる。7・8は高坏である。7は坏部で底は深く口縁部は外反する。脚部とのくびれ部にはヘラ削りを認める。両器面とも赤彩を施す。8は脚部で「ハ」字形を示し，外面には赤彩を施す。9は須恵器の蓋で口縁端部の内側に弱いかえりをもつ。天井部外面には回転ヘラ削りを施す。10は手捏土器である。11～13は甕である。11の口縁部は「く」字形に外反し，胴部は球形を呈し小さな底部をもつ。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りののちナデ調整を施す。胴下半には焼成後人為的に径 6.5 cm 前後の穴があけられている。12・13も口縁部が外反し球形の胴部をもつ。

043号住居跡（第76図14～25）

14・15はくすべ焼成の坏で体部が逆台形状を示す。14の体部下半は回転ヘラ削り，15はヘラ削りを施す。底部もともにヘラ削りを施している。16～18・20は須恵器。16～18は坏，20は高台部である。16・17は形状的には同じで直線的に立ち上がる体部をもつ。18は稜をもち口縁部は内傾する。21～23は甕で，21の口縁部は「く」字形に外反し，口唇部は外面に凹面をもつ。22は素縁である。23は細かい単位のヘラミガキを施し，底部には木葉痕を認める。24は鉄製品で長さ 4.9 cm，幅 3.5 cm，厚さ 0.35 cm を測る。25は鎌で長さ 5.2 cm，幅 2.5 cm を測る。



第75図　035B号，036号，039号，040号住居跡出土遺物実測図



第76図　042号，043号住居跡出土遺物実測図

044号住居跡（第77図1～8，図版49）

1～4は坏で，1・3・4は体部との間に稜をもち，口縁部は内傾する。須恵器蓋坏の器形を模したもので蓋受け部を作り出している。2には赤彩が施される。また4の体部の一部に長さ2cm，深さ2mm前後の「V」字形の沈線が焼成後刻まれている。5～7は小形甕で5・7ともほぼ完形である。5は口縁部が外反し胴部は弧状を示す。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りを施す。胴上半部の一部に焼成前，長さ9cm，深さ2mmほどの「V」字形のヘラによる沈線が刻まれている。4の坏の沈線と同じ形状を示すところから，意識をもった印と思われる。7は2次的焼成を受けたため形が歪んでいる。口縁部は外反し胴部は球形を示す。底部はヘラナデを施している。8は滑石製の紡錘車で，下径4.6cm，上径2.7cm，厚さ1.8cm，孔径0.64cm，重さ52.5gを測る。

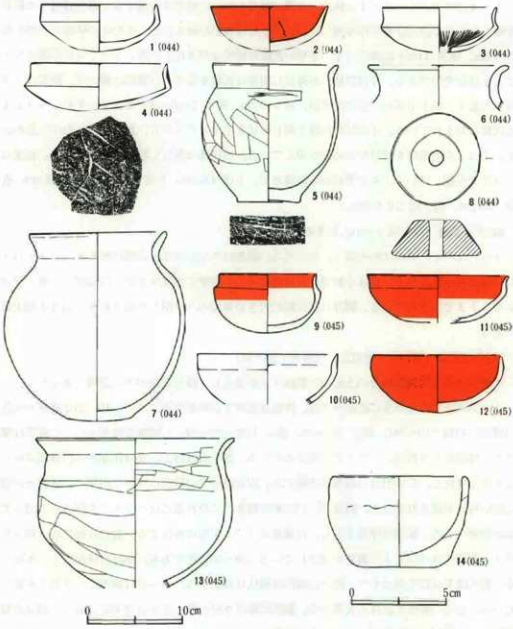
045号住居跡（第77図9～14，図版49）

9～12は坏で，底は比較的深く，12以外の口縁部は外反し体部との間に稜をもつ。9・11・12には赤彩が施される。13は小形甕で口縁部は「く」字形に外反するが，口縁部への横ナデはかなり下まで施されている。胴部には比較的大きい単位のヘラ削りが施される。14は手捏土器である。

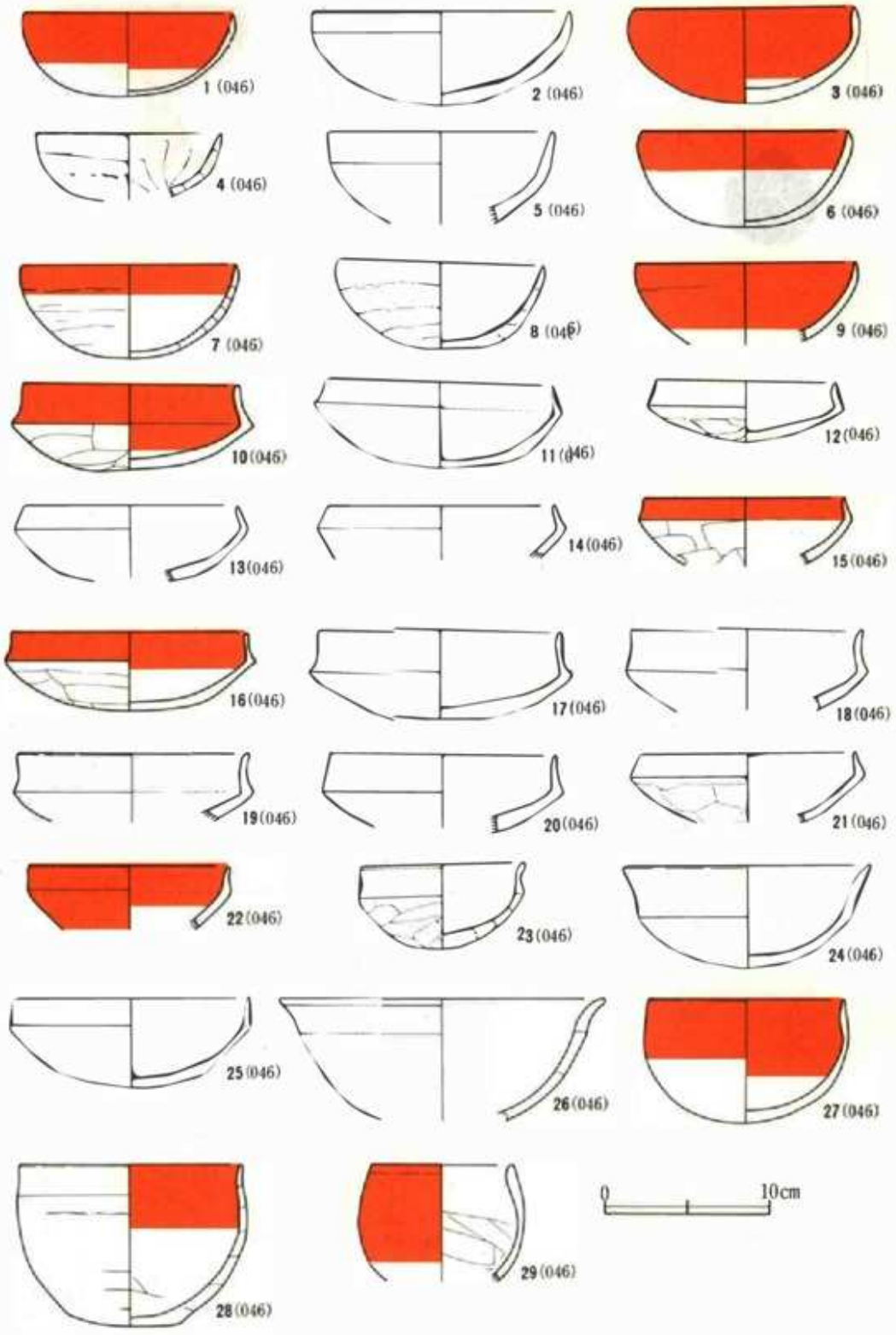
046号住居跡（第78図～第81図，図版49・50・51）

本遺構からは約58個体分の土師器と鉄鏃1点が出土し，最も遺物の多い遺構であった。

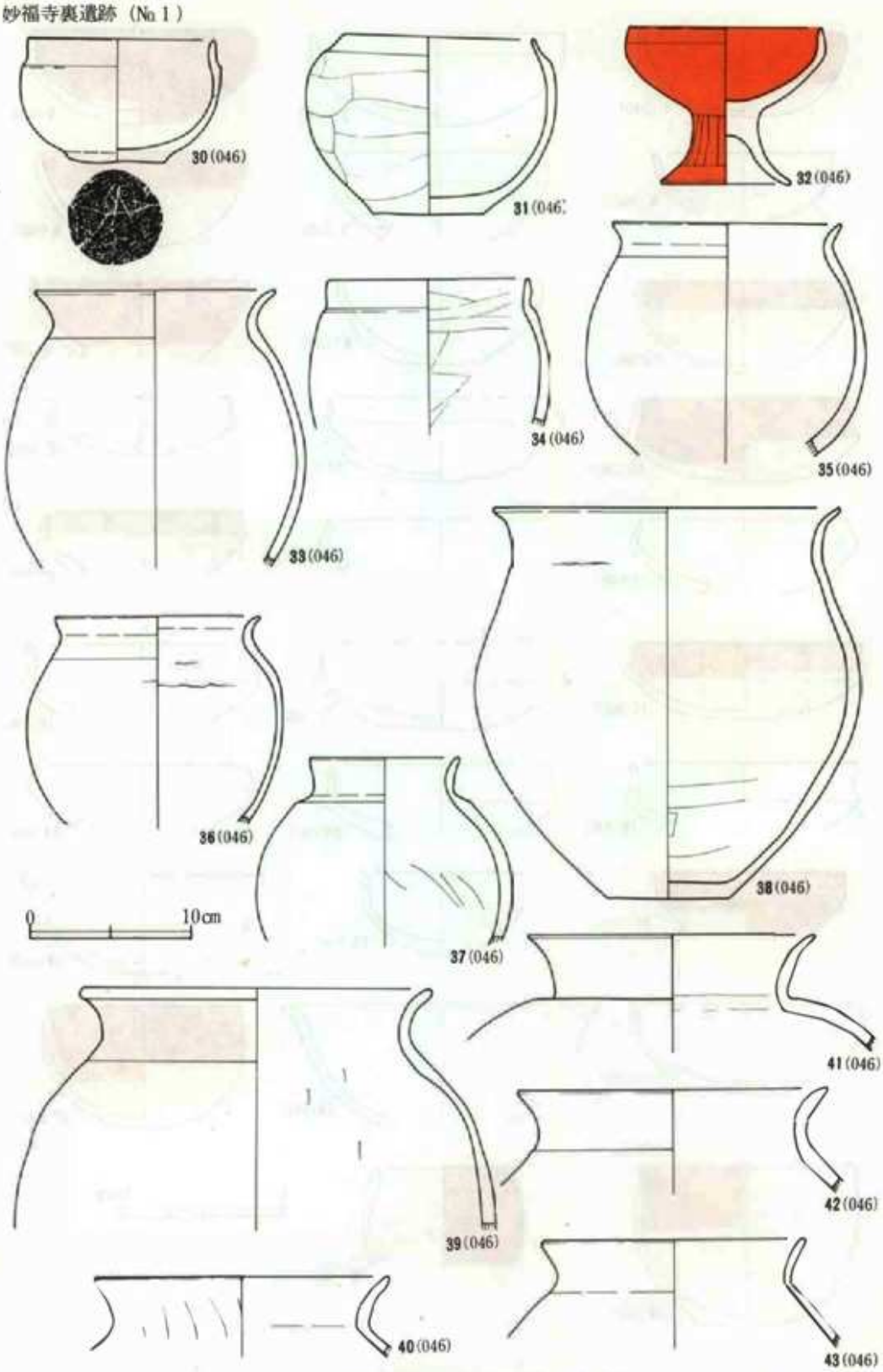
1～25は坏で，1～9は底部が丸底，体部は弧状で口唇部が直立する。10～25は底部が丸底，口縁部は内傾（10～16），直立（17～21，25），外反（22～24）し明瞭な稜をもつ。口縁部は横ナデ，体部はヘラ削り，ヘラナデが施されている。26～31は鉢で，26は体部から口縁部にかけて大きく外反し，27～31は口縁部が内傾する。32は高坏で口縁部は僅かに内傾し，体部との間に弱い稜が形成されている。脚部は「ハ」字形に開き，くびれ部にはヘラナデを認める。33～37は小形甕である。胴部は球形を呈し，口縁部は「く」字形に外反する。37は壺形に近い形状を示す。器面にはヘラによる調整が施されている。38～50は甕である。38は口縁が広く，外反する。最大径をほぼ中央にもつ。39の口縁部は弧状に外反する。44～47は胴部にヘラ削りを施している。48は口縁部と底部を欠損する。胴部は球状を呈し最大径をほぼ中央にもつ。49は長胴形を示す。胴部にはヘラ削りののちナデを施しているが全体的に行ってはいず，そのナデも丁寧ではない。底部はヘラ削りである。50・51は最大径を胴下半部にもち，下膨れである。器面はヘラにより平滑にナデられている。52～57は甑で形状的にほぼ同じである。口縁部は「く」字形に外反し，胴上半部はほぼ直立し，弧状に底部に至る。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りを施している。底部はすべて単孔である。58は平根の鉄鏃である。長さ4.1cm，幅2.3cm，厚さ0.2cmを測る。



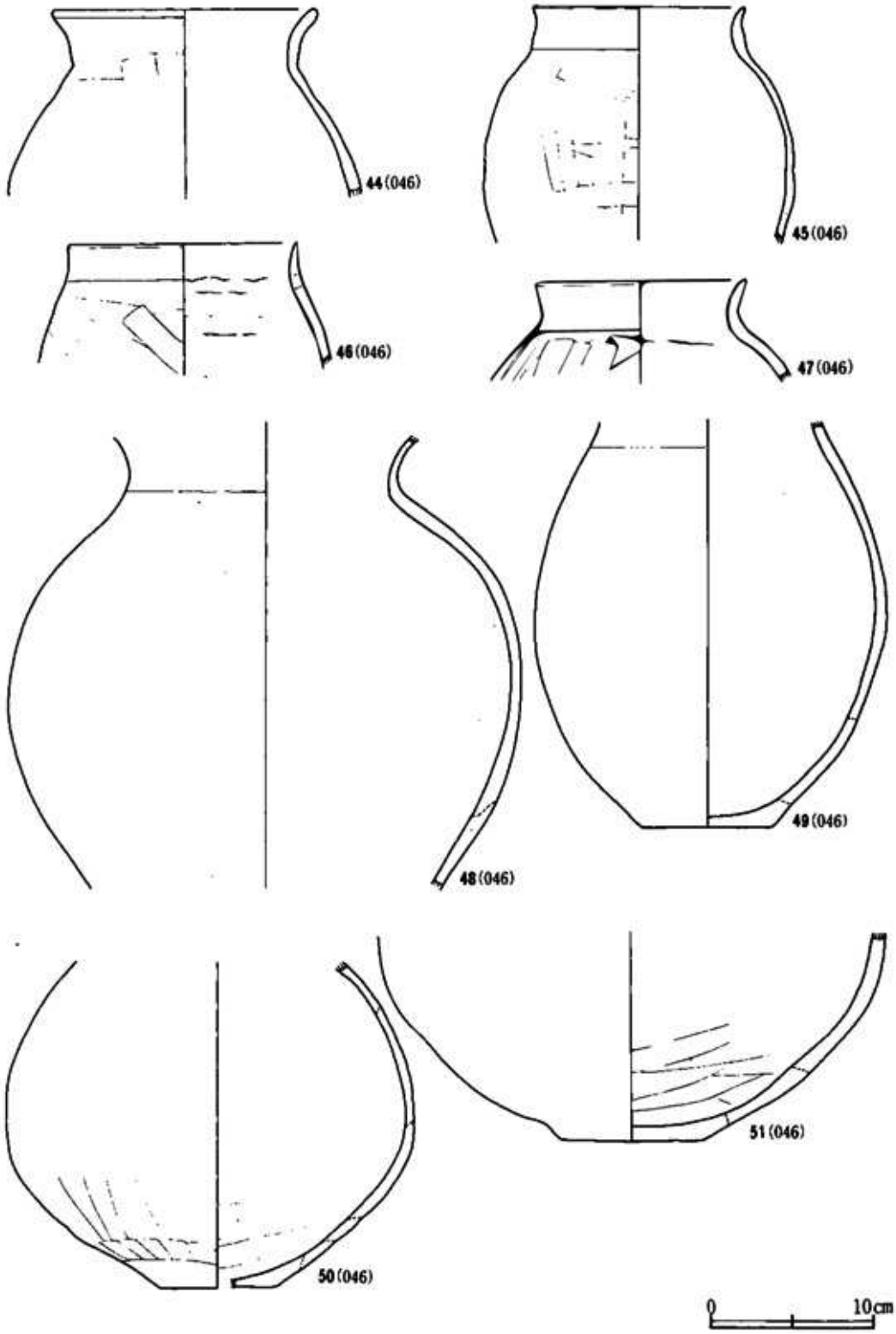
第77図　044号，045号住居跡出土遺物実測図



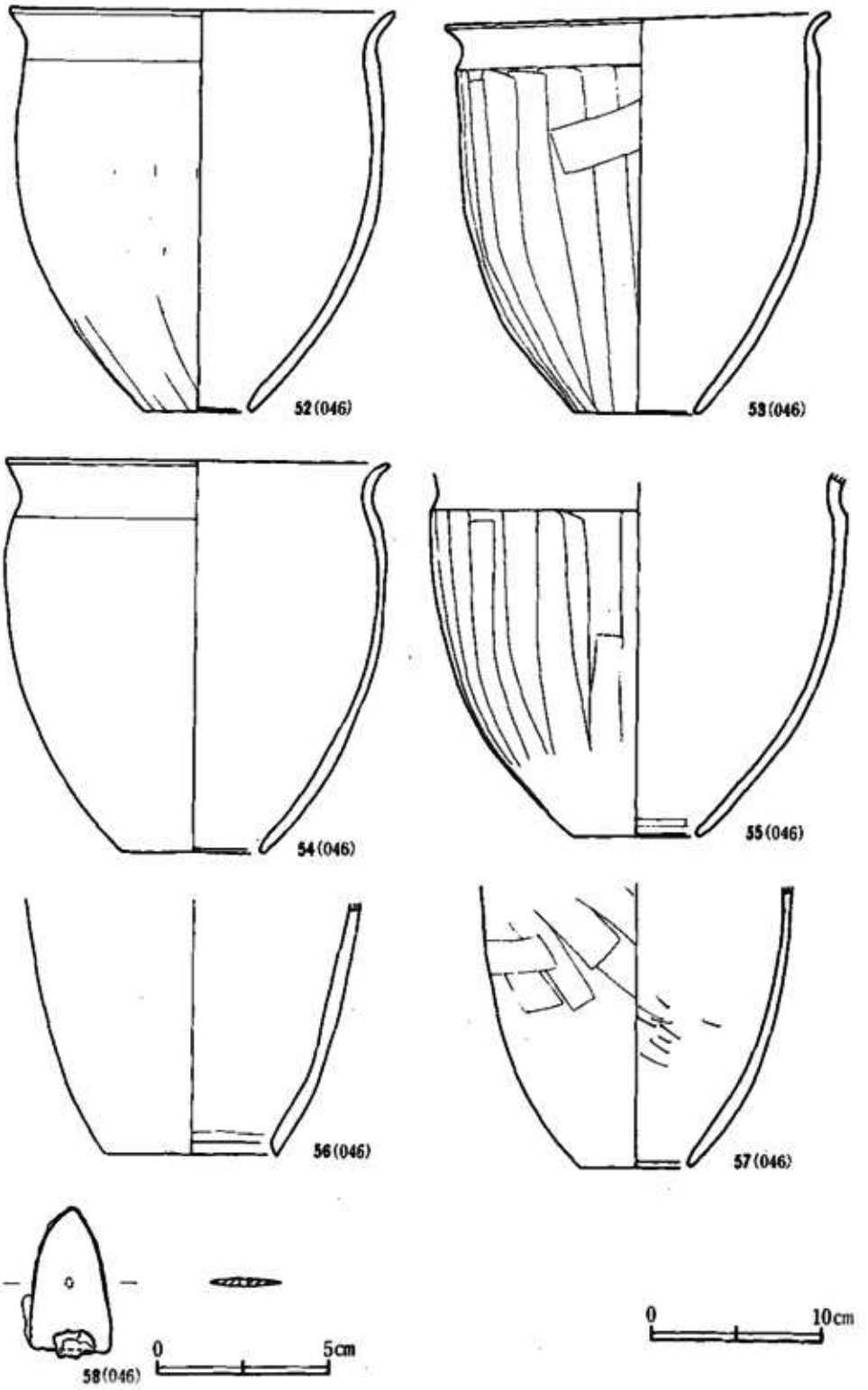
第78図　046号住居跡出土遺物実測図 (1)



第79図　046号住居跡出土遺物実測図（2）



第80図　046号住居跡出土遺物実測図 (3)



第81図　046号住居跡出土遺物実測図（4）

047号住居跡（第82図１～３，図版52）

坏が３点出土している。１・２は逆台形状を呈し，口唇部が僅かに肥厚する。底部はヘラ整形を施している。３は内面に黒色処理を施している。体部下端と底部にはヘラ削りが施される。

048号住居跡（第82図４～９，図版51・52）

４～６は坏で，体部は弧状に立ち上がり，口唇部は直立に近い。底部は丸底である。口縁部は横ナデ，体部はヘラ削りを施す。４は内面と外面の一部に黒色処理を施している。７・８は小形甕で，７は口縁部で「く」字形にくびれ，口唇部も外反する。口縁部は横ナデ，胴部はヘラナデを施す。９は土玉で径 3.3 cm，孔径 0.5 cm を測る。

049号住居跡（第82図10～21，図版52）

10～18は坏である。比較的小形で底は浅く丸底で，口縁部は外反するもの（10～13）と，同じく丸底で体部との間に稜をもつもの（14～18）とがある。19は小形甕で口縁部は外反し，体部との間に稜をもつ。口縁部は横ナデ，胴部にはヘラ削りののち粗くヘラナデを施している。20・21は高坏の坏部である。底は浅く，口縁部は強く外反する。外器面には赤彩，内器面には黒色処理を施している。

051号住居跡（第83図１～６，図版53）

１は坏で比較的厚手の作りである。口縁部は直立し横ナデ，体部はヘラ削りを施す。２はほぼ完形の鉢で底部は丸底，弧状の体部をもち口縁部とのあいだに稜をもつ。口縁部は外反する。口縁部は横ナデ，体部はヘラ削りののちヘラ調整を施す。３・４は小形甕で口縁部は外反し，球形の胴部をもつ。胴部にはヘラ削りを施す。５は手捏土器である。６は釘で上方から下方にむけて厚さを減ずる。頭部が曲げられている。長さ 4.2 cm，厚さ 0.5 cm である。

052 A 号住居跡（第83図７～10，図版53）

坏４点の出土である。口縁部は内傾し体部との間に稜をもつ。底部は丸底で，体部にはヘラ削りを施す。

052 B 号住居跡（第83図11～23）

11～14は坏で，14以外は口縁部が直立する。14は体部上面に稜をもつ。15・16は鉢で，15は平底で逆台形状を呈する。16は口縁部が直立し体部との間に稜をもつ。17～20は小形甕である。口縁部は外反し胴部にはヘラ削りを施す。21・22は甑，23は手捏土器である。

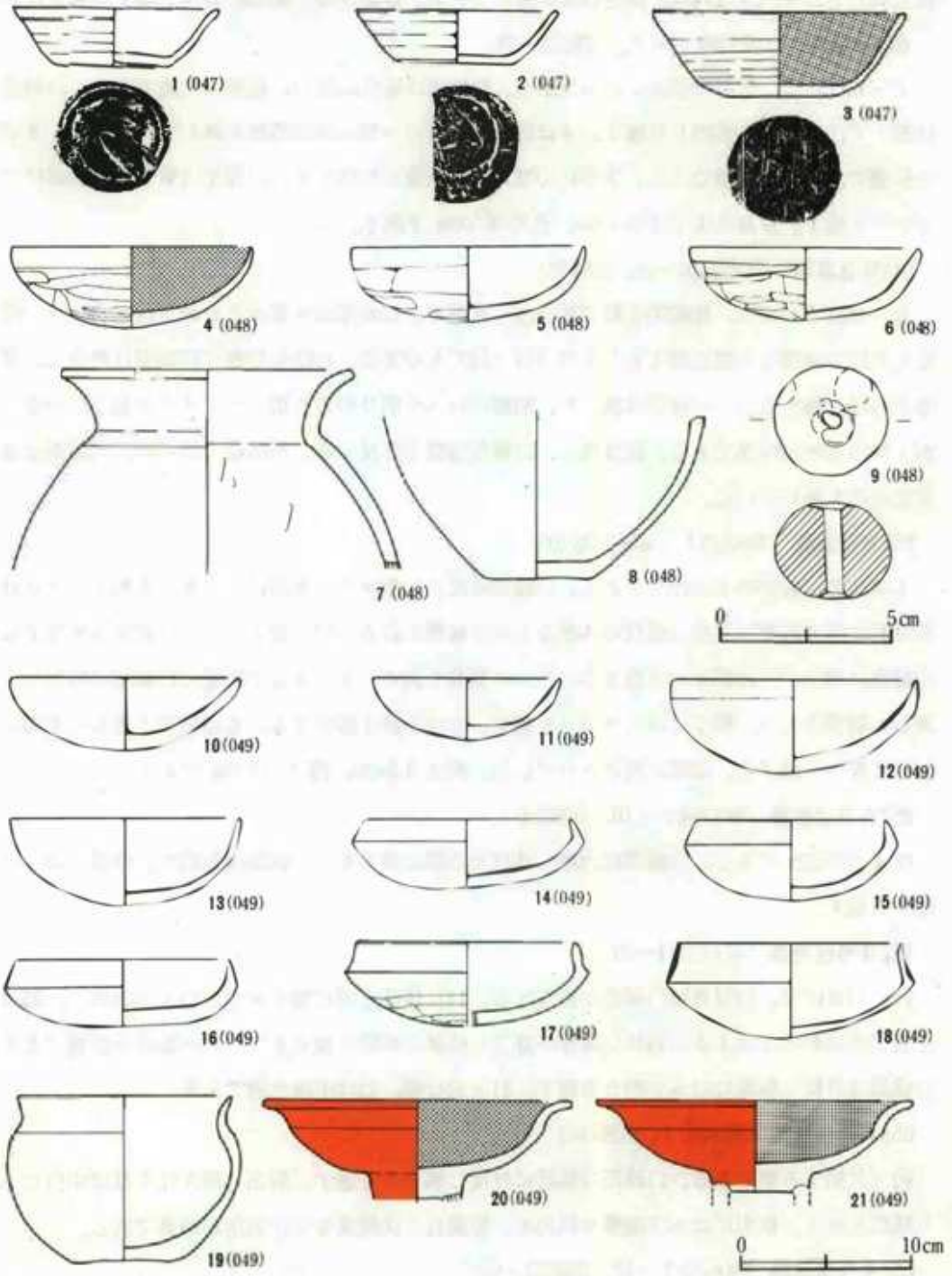
053 A 号住居跡（第84図１，図版53）

約½欠損する甕である。口縁部は弧状に外反し横ナデを施す。胴部は最大径をほぼ中位にもち球形を呈す。器面にはヘラ調整を認める。器面は二次焼成を受け剝落が顕著である。

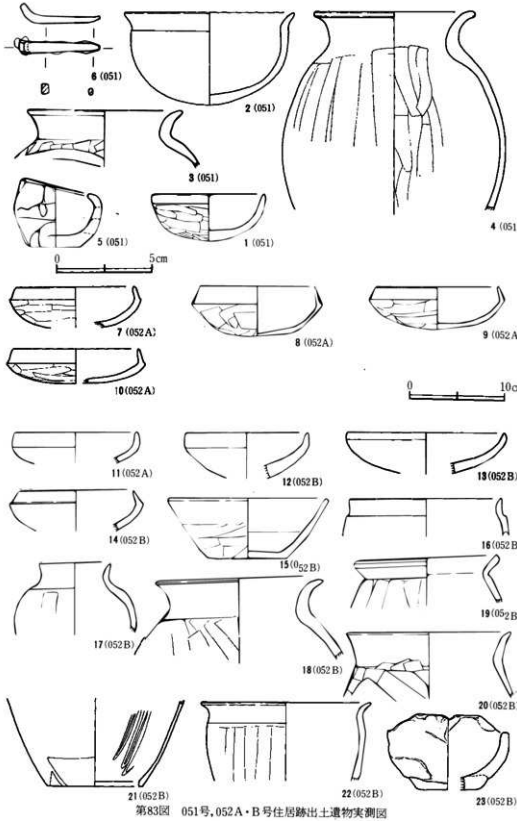
054 A 号住居跡（第84図２～12，図版53・54）

２・３は丸底の坏である。体部は球状で底は比較的深い。２には赤彩が施される。４は内黒

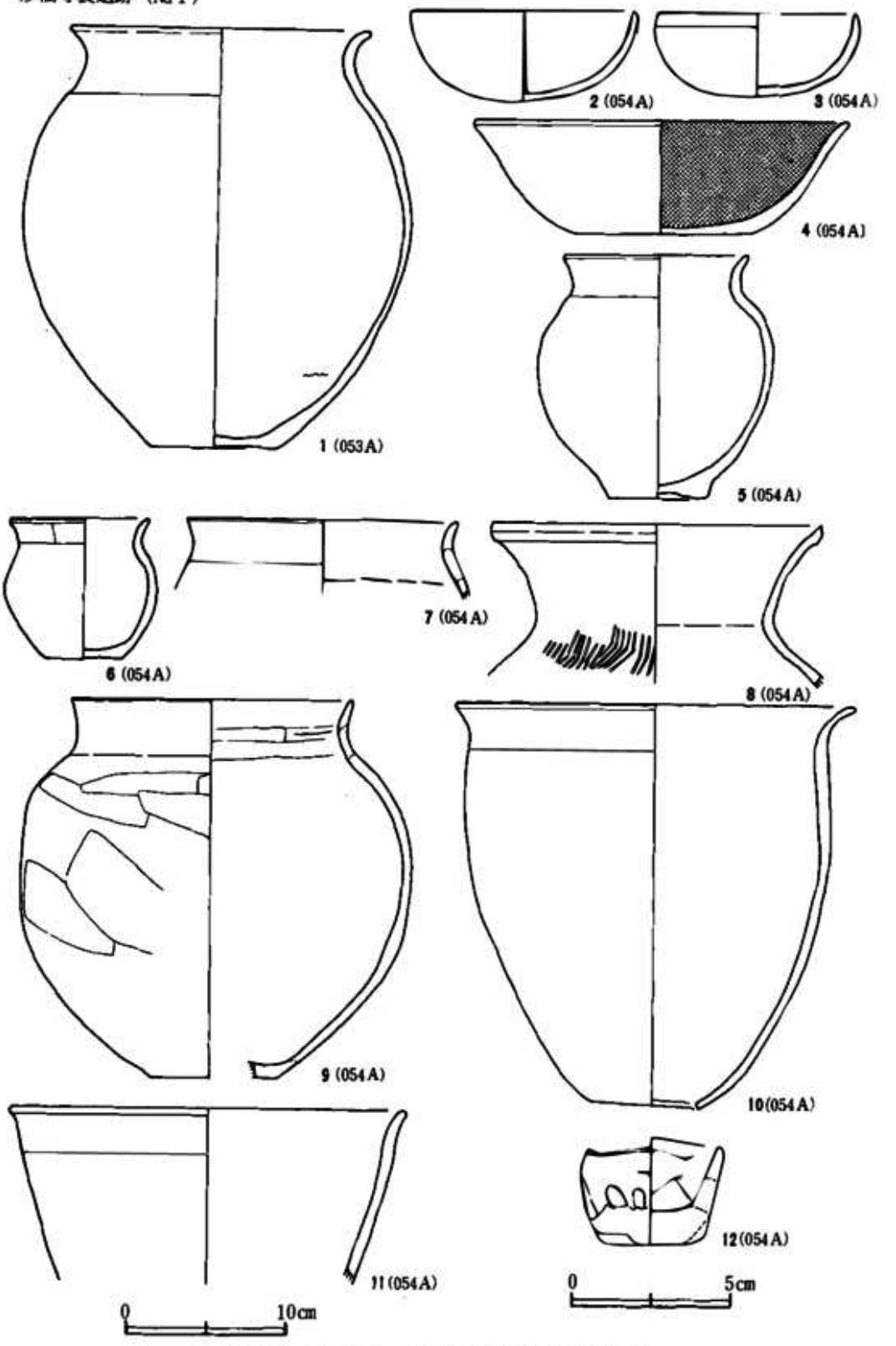
処理された坏で平底，口縁部は外反する。5～7は小形甕である。ともに口縁部は外反し球形の胴部をもつ。8・9は甕。8の口縁部は「く」字形に外反し，器面には叩き目を施す。9は



第82図　047号，048号，049号住居跡出土遺物実測図



第83図　051号，052A・B号住居跡出土遺物実測図



第84図　053A号，045A号住居跡出土遺物実測図

約½ほど欠損する。口縁部は僅かに外反し，器壁が薄くなる。胴部は最大径を胴上半部にもち，やや歪んだ球形を示す。器面は大きい単位のヘラ削りを認める。10・11は甑。10は完形である。器高 24.5 cm，口径 24.9 cm，底径 6.2 cm を測る。口縁部は強く外反し胴部との間に低い稜をもつ。胴上半部はほぼ直立し，弧状をもって底部に至る。12は手捏土器である。

054B号住居跡（第85図1～9，図版54）

1～3は坏。1は口縁部が外反し横ナデ，体部はヘラ削りを施す。2は口縁部が内傾し明瞭な稜をもつ。体部はヘラ削り，内面はヘラミガキを施す。3はやや底が深い。口縁部は横ナデ，体部はヘラ調整を施す。4は小形甕。口縁部は「く」字形に外反し横ナデを施す。5・6は甕で，5は完形。器高 33.4 cm，口径 21.4 cm，底径 8.5 cm を測る。口縁部を「く」字形に外反し，口唇部を直立ぎみに折り返して段を形成する。胴部の器壁は薄く，最大径を胴上半部にもつ。中央部から下部にかけて細いヘラミガキを施している。6も同様な施文，調整手法をもつものと思われる。7・8は甑と思われる。口縁部は頸部から外反し，口唇部は肥厚する。胴部には叩き目を施している。7はくすべ焼成，8は内外面ともに黒色処理されている。9は手捏土器である。

054C号住居跡（第85図10～12，図版54）

10は完形の鉢で口縁部は内傾し横ナデを施す。体部との間に稜をもち，器面にはヘラ削りを施している。底部はヘラ調整を認める。11は甕の口縁部で「く」字形に外反し，口唇部が僅かに直立ぎみに段状になっている。12は滑石製の紡錘車である。直径 4.2 cm，厚さ 1.1 cm，孔径 0.75 cm，重さ33.77 g を測る。

055号住居跡（第85図13～15）

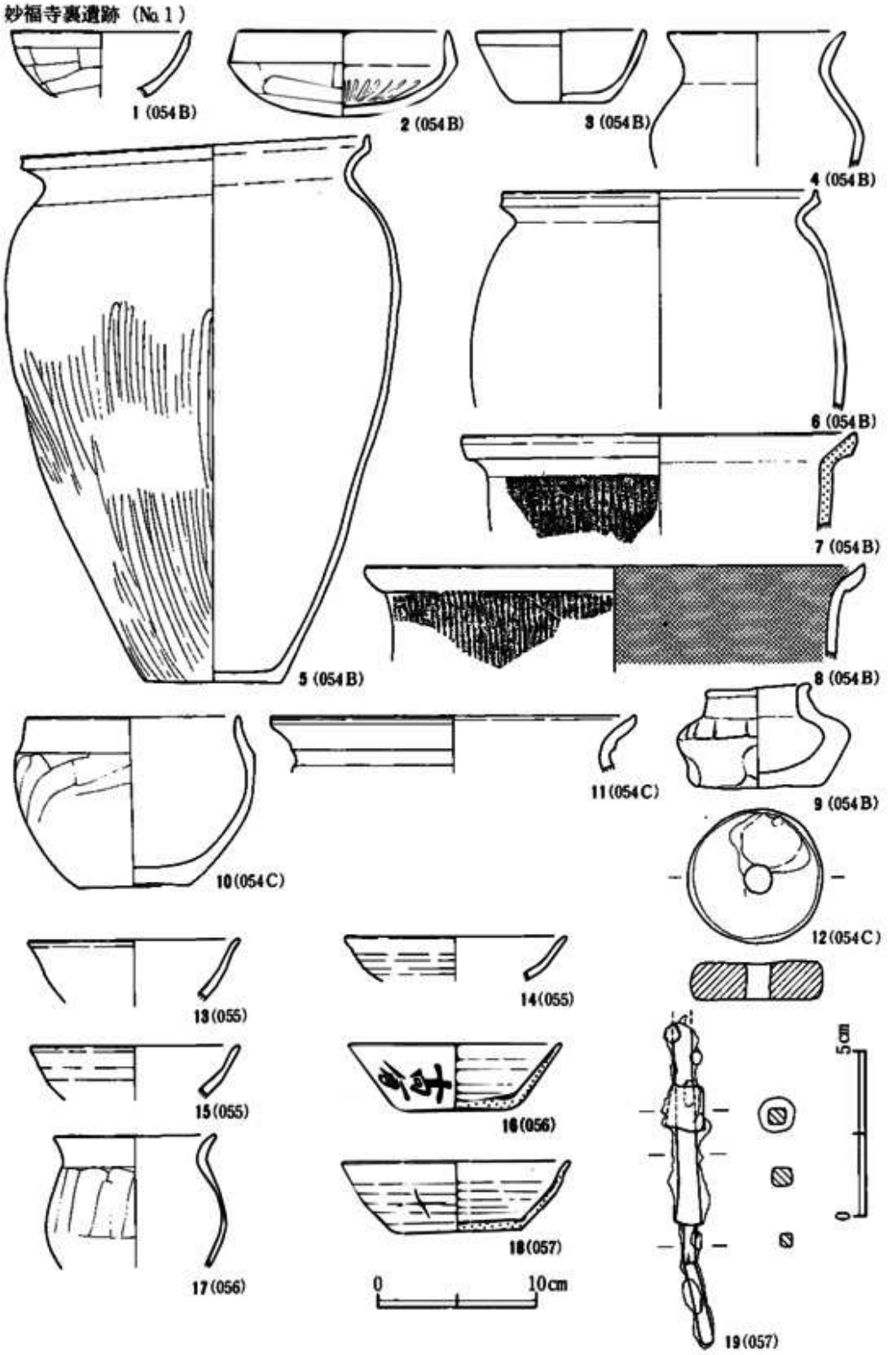
坏3点である。形状的には近似しており，口唇部が僅かに外反し，器面にはロクロ回転ナデを残している。

056号住居跡（第85図16・17，図版54）

16はくすべ焼成の坏で，体部が直線的に開き口唇部が僅かに外反する。体部下端は回転ヘラ削り，底部はヘラ削りを施している。なお体部表面に「高倉」と墨書されている。17は小形甕。頸部がかなり肥厚し，胴上半部の器厚が薄くなっている。口縁部は「く」字形に外反，胴部にはヘラ削りを施している。

057号住居跡（第85図18・19，図版54）

18はくすべ焼成の坏でほぼ完形である。器高 4.4 cm，口径 14.2 cm，底径 7.8 cm を測る。口縁部は僅かに外反，底部にはヘラ削りを施す。体部表面には焼成前「十」の線刻が行なわれている。19は鉄鏃で箆被ぎから茎にかけての部分である。



第85図　054B・C号，055号，056号，057号住居跡出土遺物実測図

第2節　土坑出土遺物

216号土坑（第86図1～4）

1・2は坏。底は浅く丸底で口唇部は尖りながら立ち上がる。口縁部は横ナデ，体部にはヘラ削りを施す。3は小形甕。口縁部は「く」字形に外反し，頸部が僅かに肥厚する。胴部との間に稜をもつ。胴部は一様にヘラ調整を施す。4は約½欠損する甑である。口縁部は外反し，胴部は弧状に底部に至る。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りののちヘラ調整を施す。

219号土坑（第86図5）

約⅕欠損する高坏である。体部は直線的に外に開き，口縁部で僅かに肥厚する。くびれ部は縦方向のヘラミガキを施す。脚部は「ハ」字形を呈する。外器面には広範囲にススの付着がみられる。また赤彩を施している。

221号土坑（第86図6）

底の浅い坏で，口縁部が内傾し体部との間に稜をもつ。口縁部は横ナデ，体部の内面はヘラミガキ，外器面はヘラ調整を施す。

223号土坑（第86図7・8）

7は坏で底は浅い。口縁部は直立し，体部は比較的厚手である。8は小形甕で，口縁部は外反し，胴部は直線的に延びる。口縁部は肥厚している。

224号土坑（第86図9）

小形甕と思われる。口縁部は「く」字形に外反し，横ナデを施す。胴部はヘラ調整を認める。

225号土坑（第86図10）

底部が糸切りの坏である。口縁部はほぼ直線的に開き，体部下端は明瞭なナデ整形を施す。

第3節　溝状遺構出土遺物

001号遺構（第86図11・12）

11は坏で，口縁部が直立する。12は小形甕で，口縁部は「く」字形に外反し，口唇部を直立ぎみにつまみ上げ，段状を呈す。頸部には稜をもち，また胴部にはヘラ削りを施す。

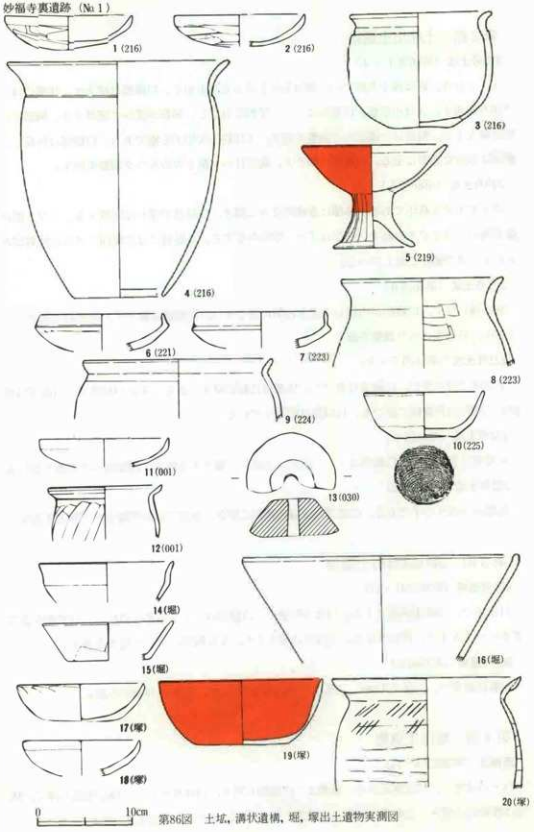
030号遺構（第86図13）

土製紡錘車で，上径 2.3 cm，下径 4.7 cm，厚さ 2.0 cm，孔径 0.24 cm を測る。

第4節　堀出土遺物

西地区（第86図14～16）

14・15は坏で，15は体部から口縁部まで直線的に開き，14は稜をもつ。16は陶器の鉢で，体部は直線的に開き，口唇部の内側には稜をもつ。外面にはススが付着している。



第86図　土坑，溝状遺構，堀，塚出土遺物実測図

第5節　塚出土遺物

土師器（第86図17～20）

すべて盛土中より出土したものである。17～19は坏。17・18は丸底で口唇部が尖りながら立ち上がる。口縁部は横ナデ，体部にはヘラ調整を施すが，17にはヘラ削りの痕跡が確認される。19は約¼欠損する。体部は弧状を呈し，口縁部は直線的に立ち上がる。内面は不定方向の細かいヘラミガキ，外面にヘラ調整を施し，また内外両面に赤彩を施している。20は小形甕で，口縁部は外反し複合口縁である。胴部は丸味をもち，輪積痕と叩き目のうえからナデ整形を施している。

第6節　その他の遺物

石　器（第87図）

1は003号住居跡出土の砂岩製砥石。1面のみ使用痕を残す。2は036号住居跡出土の砂岩製敲石。先端部に使用痕を残す。3は039号住居跡出土の角閃安山岩製の磨石。破片であるが側面に使用痕を残す。4は047号住居跡出土の輝石安山岩製の磨石。断面四角形で側面に使用痕を残す。5・6・7は051号住居跡出土の硬質砂岩製の砥石。一部欠損するが各面平滑に磨られている。7には刃先を研いだと思われるような細い溝や凹みも確認される。8はE1区の堀出土の集礫岩製の敲石。上面，下面に敲打痕を認める。

土製支脚（第88図）

1は035B号住居跡出土。中心部に穿孔されており，円筒形を示す。側面はヘラにより面取りされている。2は044号住居跡出土。ほぼ円筒形を示す。上面が僅かに凹む。3・4は046号住居跡出土。ともに円筒形を示す。3は両端部に粘土紐を貼り付けて安定をよくしている。5は052B号住居跡出土。円筒形を示すがやや崩れている。

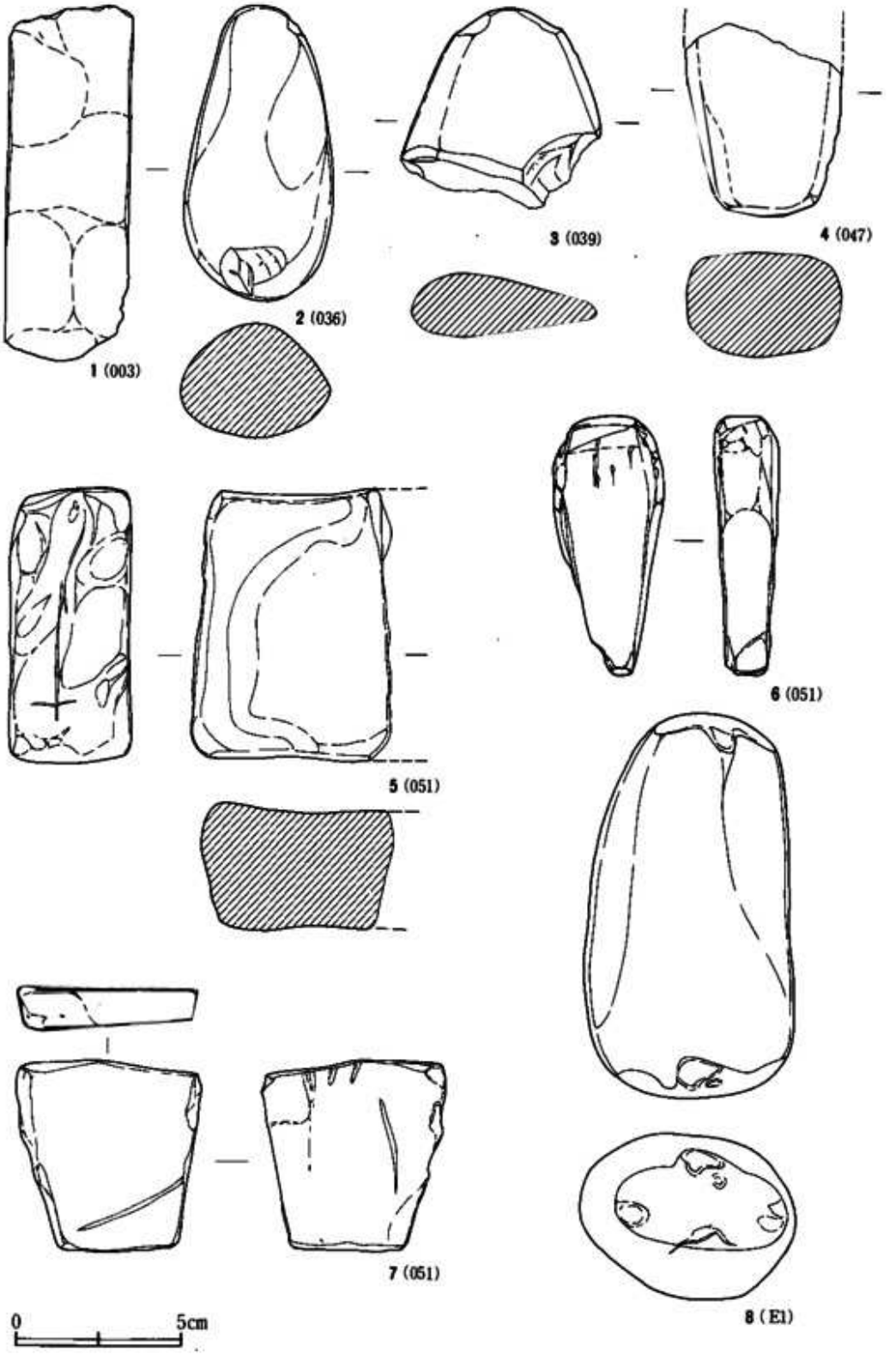
石造物（第89図，図版57－1）

1は034B号住居跡より出土した五輪塔の空・風輪部である。銚子産の白亜紀砂岩を用いている。2はC5－02グリット出土の五輪塔の空輪部である。欠損が著しい。3は201号土坑より出土した緑泥片岩製の武蔵型板碑である。幅 18cm，厚さ 2.1cm を測り比較的小形の板碑である。正面には「七月日」の紀銘が確認される。

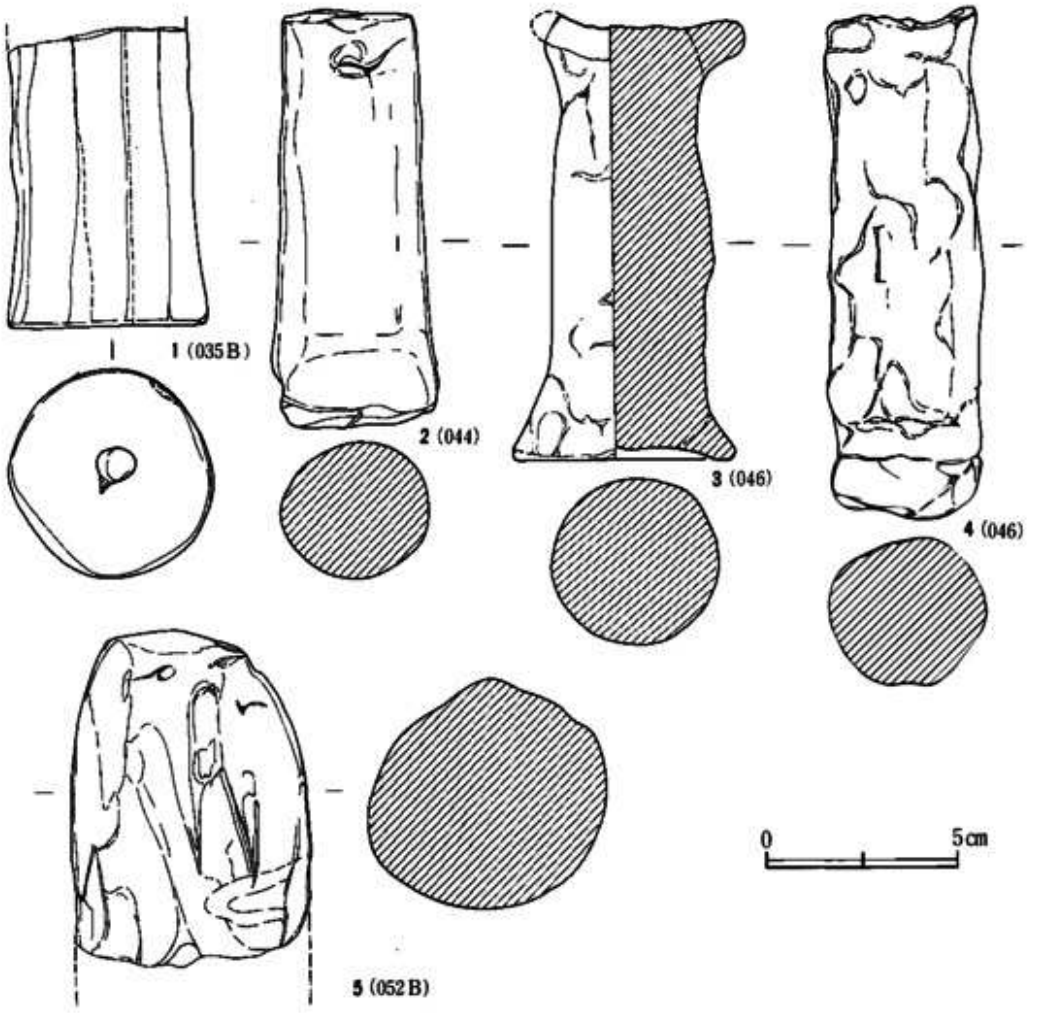
古銭（第90図，図版57－2）

034B号住居跡：10，11，036号住居跡：12，19，051号住居跡：13，056号住居跡：14，205号土坑：1，2，4～6，C5区：3，7，8，D3－04グリット：9，塚：15～18が出土している。

古銭は開元通宝(621年，唐)，大平通宝(976年，宋)，天聖通宝(1023年，宋)，治平元宝(1064



第87図　石器実測図



第88図　支脚実測図

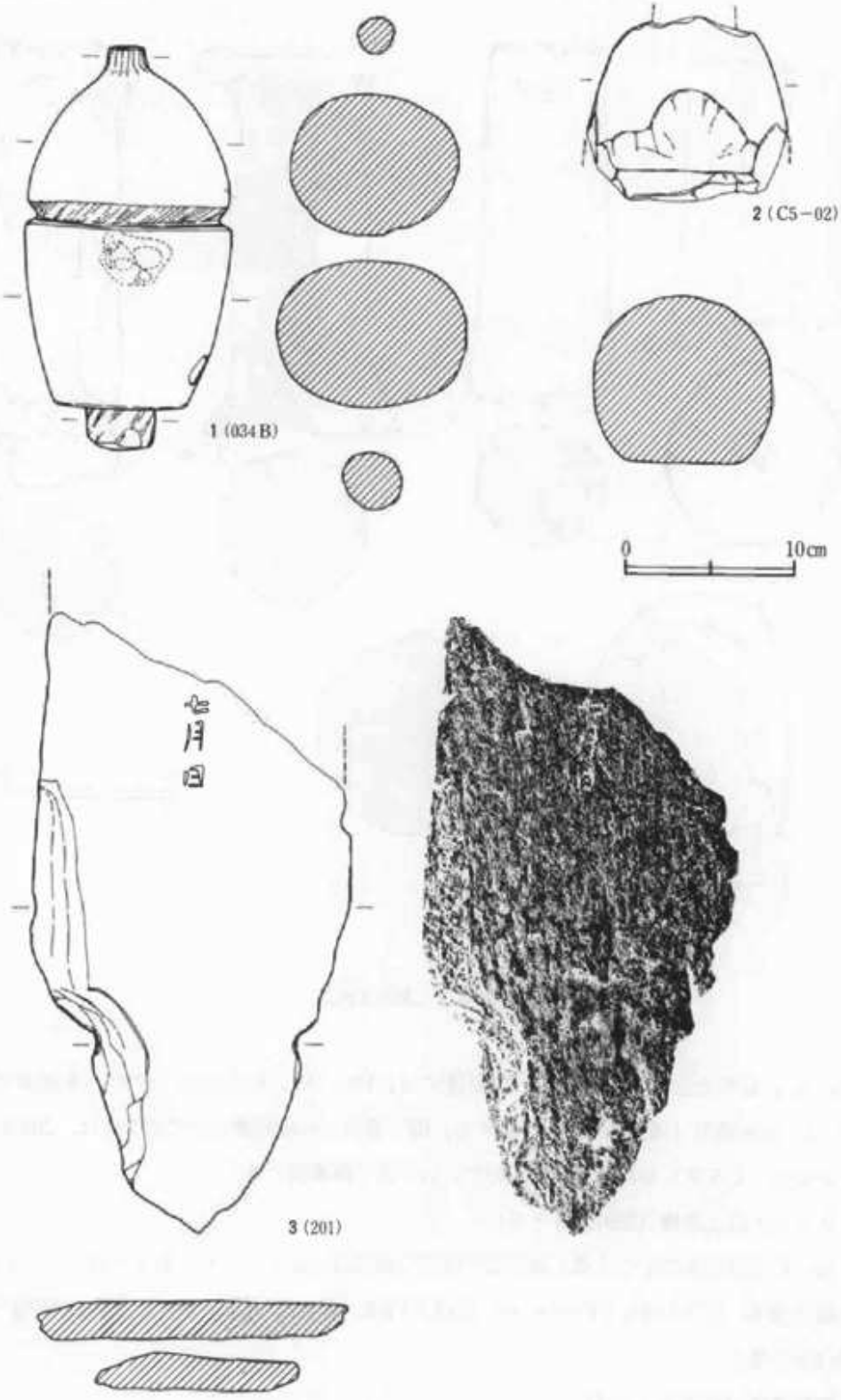
年，宋），紹聖元宝（1094年，宋），政和通宝（1111年，宋），和開通宝（不明），永楽通宝（1404年～），寛永通宝（1626年～）を確認する。開元通宝から和開通宝までの7枚は，205号土坑とその周辺（C5区）から出土したもので，いずれも渡来銭である。

グリット出土遺物（第91図5・6）

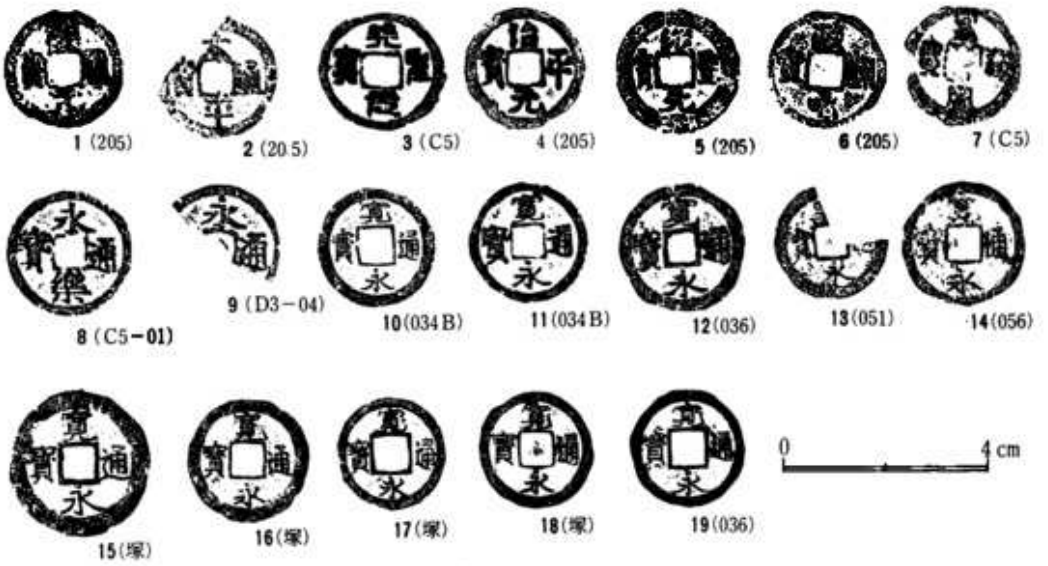
5はC2区出土の手捏土器。底部は平底で口縁部は外反する。6はB4－44グリット出土の土製紡錘車。径6.3 cm，高さ2.6 cm，孔径0.7 cm，重さ125.0 gを測る。上面は逆時計廻りの製作痕を残す。

表彩遺物（第91図1～4）

1はカワラケで内面には渦巻状の回転ナデを認める。底部は糸切りである。2は小形甕。口

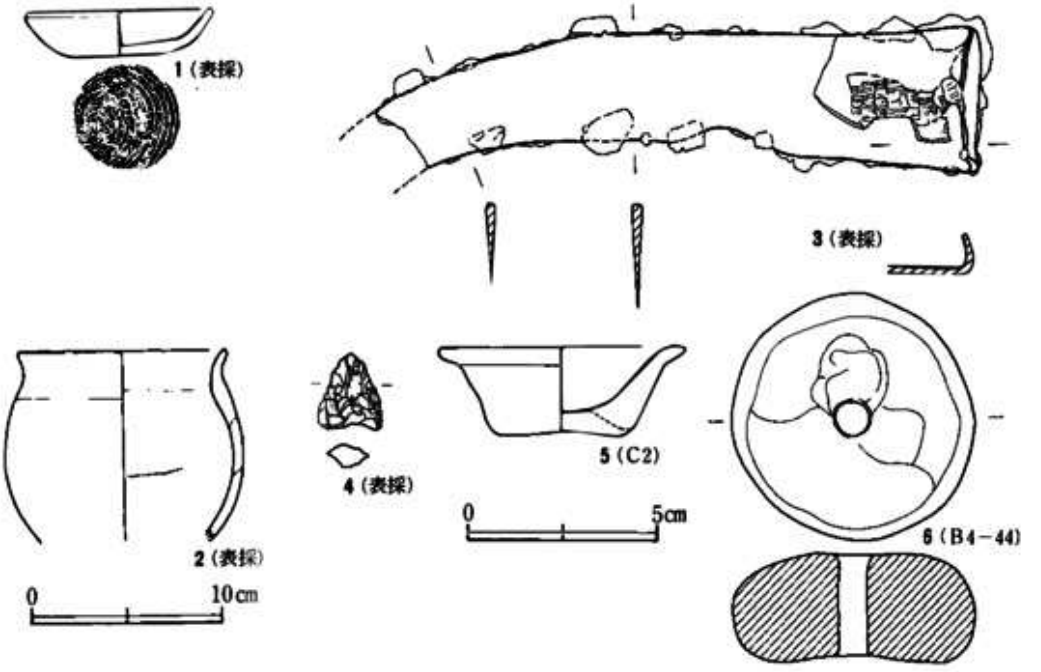


第89図　石造物実測図



第90図　古銭拓影図

縁部は外反し，胴上部が肥厚しながら球形を示す。二次焼成を部分的に受けている。3は鎌先で切先の一部が欠損している。現存長は 15.8cm，幅 2.7 cm，厚さ 0.3 cm，柄の部分の幅 3.8 cm，返しの高さ 1.1 cm を各々測る。柄の部分に木質が付着している。4はチャート製の石鏃。基部が直線的で無茎である。剝離は雑で肉厚である。



第91図　グリット出土・表採遺物実測図

第4章　遺跡総論

第1節　集落営為の年代

(1)　出土遺物の年代について

妙福寺裏遺跡出土遺物の多くは土師器であり，一部須恵器などがある。これらはいわゆる古墳時代後期から平安時代にかけてのものであることから，妙福寺裏遺跡出土土師器の遺構別前後関係を明確にし，具体的な年代を位置づけることから始めたい。

なお遺構に伴う遺物の出土状況は自然的なあるいは人為的な影響によりかなり型式の混入が見受けられる。それらを加味してその年代を捉えてみたい。

遺物を概観してみると，集落は大きく前期と後期に区分され，それぞれ4期に分類される可能性が強い。各時期に順じて各遺構出土土器群の様相を述べてみたい。

〔前期第Ⅰ期〕

014号住居跡出土の資料が本期に該当する。

坏は口縁部が直立し底部が丸底と小さな平底のものと，口縁部が外反し口縁部と体部の間に稜をつくるものがある。内外両体部に赤彩が施されているものが多い。埦は口縁部が直立するものと外反するものとがある。体部は半球形を示し，ともに赤彩が施される。甕は胴部が球形を呈し，口縁部が「く」字形に外反する。

〔前期第Ⅱ期〕

005，035B，045，048，054C号住居跡出土の資料が本期に該当する。

坏は全体に前代に比べ底が浅くなる。また底が深く口縁部が内湾あるいは直立するものもあるが，それらは減少する傾向で，底が浅く口縁部が外傾するものが多くなる。

鉢は平底で口径が大きく，口縁部下に稜を有する。また口縁部は内傾する。

高坏は坏部の形状が本期の坏に近似しており，口縁部が直立に近い。また口径が大きい。

甑は口縁部が外反し，体部との間に稜をもつ。体部はそれほど膨らまず，底部へとつづく。

〔前期第Ⅲ期〕

時代的には，集落の拡張期であり，出土する土師器も内容が豊富で，器種に富み充実をみる。

046号住居跡出土の一括資料が本期に該当する。

坏には口縁部下外面に稜をもち，口縁部が内傾するもの，また，やや内湾ぎみに直立するものがある。他には，口縁部下に稜をもち全体に底が深く，体部は円弧状を示し口縁部が直立するものや，体部が半球状を示すものがある。

鉢は平底で口径が大きく外面に弱い稜をもち，口縁部が直立，もしくは微かに外反するものがある。

甕は口縁部がゆるやかに外反するものと，強く外反するものとがある。胴部は全体的に球形の強いものが主流を占めているが，長胴化のきざしがみえ，また，口径が大きくなるものもある。

甑は口縁部が「く」字形に外反し，胴上半部はほぼ直立し体部は弧状に底部へと連なる。口縁部は横ナデ，胴部はヘラ削りを施す。

〔前期第IV期〕

004B，049号住居跡出土の資料が本期に該当する。

坏は全体的に底が浅くなる傾向を示す。丸底で口縁部下に稜をもち口縁部がやや内傾するものや，同じく口縁部下に稜をもち，口唇部が直立かやや外反するもの，また稜をもたず底はきわめて浅くなり，口縁部が外反するものなどが確認される。

鉢は口縁部が外反し，口縁部下に外稜を有し，胴部は丸味をもつ。

高坏は坏部の口縁部が強く外反し，あるいは外傾に近いものもある。内部は内黒である。

甕は前代からの系譜を引き，口縁部は外反し胴部は球形を呈し，最大径を胴部中央にもつ。長胴化を示す資料も確認される。

〔後期第Ⅰ期〕

007B号住居跡が本期に該当する。出土遺物がきわめて少ないので本期の特徴的な様相は捉えられない。

共伴した坏と小形甕があるので，その特徴のみ列記してみたい。

坏は外面に全く稜をもたず，直線的に外反する。口唇上部が尖がる傾向をもつ。また小形甕は口縁部が「く」字形に外反し，胴部の膨らみは弱い。口唇上部は折り返し手法の直前のものが見受けられる。

〔後期第II期〕

007A，013号住居跡出土資料が本期に該当する。

須恵器の坏は形状をみると逆台形を示し体部は直線状に開く。また箱形で口縁部が外反するものもある。底部は回転ヘラ削り，またヘラ削り調整も確認される。くすべ焼成の坏も伴い，形状は須恵器そのものである。

小形甕は口唇部が素縁で，口縁部は横ナデ，胴部にはヘラ削りを認める。

甕は口唇部が水平ぎみに折り返されて段状を呈する。

〔後期第III期〕

019，022B，043号住居跡出土の資料が本期に該当する。

土師器には坏と小形甕・甑が確認されている。坏はロクロ使用のものと未使用のものがあり，体部は丸味をもち口唇部は尖がる。底部はヘラ削りを施す。

小形甕は口縁部が素縁で短く外反し，胴部は丸味をもち最大径を胴上半部にもつ。器面にはヘラ削りを施している。

甑は口縁部が強く外反し，外面には凹面を認め，器高に比べ口径がかなり広い器形である。

須恵器では坏が確認されている。体部は直線的に開き，底部は手持ちヘラ削り，体部下端は回転ヘラ削りが確認される。くすべ焼成の坏も伴い，器形等は須恵器坏に同じである。

〔後期第IV期〕

006，034A，047，054B号住居跡出土の資料が本期に該当する。

坏は形が逆台形を示し，口唇部が僅かに肥厚する。底部はヘラ整形を施す。また，内黒土器も伴出する。

須恵器坏は坏の形状に近く，逆台形を示し体部は直線的である。体部下端，底部はヘラ削りを施す。

甕は口縁部が「く」字形に外反し，口唇部をつまみあげて折り返し，段状を形成する。胴部上半部に最大径をもち，直線的に底部へと至る。胴下半部に細かい単位でヘラミガキを施すものが多い。

以上，各期の様相を概観してきた。

近年，奈良・平安期の土師器研究がとみに進んだ観がある。片や『墨書土器』の出土により，その遺物の絶対年代が把握されるようになりつつある。しかし，墨跡の史実と我々が認識している土師器の編年には一部差異が生じていることも事実である。

この項では北総地帯より出土した他遺跡の遺物を参考として，その年代を考えてみたい。

大きく前期と後期とにわけているが，前期は5世紀末あるいは6世紀から7世紀末まで，後期は8世紀初めから9世紀中頃までと考えられる。

前期第1期は土師器の組成から5世紀末あるいは6世紀から同中頃まで，前期第II期は6世紀中頃より同末期まで，前期第III期は7世紀初めから同中頃まで，前期第IV期は7世紀中頃から同末期までと各々推察される。

後期になると遺構数も少なくなり，伴出する遺物も僅かになる。後期第I，II期は伴出する須恵器及びくすべ焼成の坏の様相より8世紀初めから同中頃までの実年代が与えられる。後期第III期は8世紀中頃から同末期まで，後期第IV期は9世紀前半の年代が考えられる。

(2) 集落営為の年代について

前項と内容的に同じになり，言葉を重ねる結果になるが，妙福寺裏遺跡において検出された各遺構は伴出した土器群の様相により，次のようになる。

5世紀末あるいは6世紀から同中頃――014，022A

6世紀中頃から同末期――005，032，035B，045，048，054C

7世紀初から同中頃――017A，028，034B，040，042，044，046，051，052A，054A

7世紀中頃から同末期――004B，021B，036，049，052B，053A

8世紀初から同中頃――007A，007B，013，022C

8世紀中頃から同末期――015，019，022B，026，027，043

9世紀初から同中頃――006，029，034A，047，054B

妙福寺裏遺跡の集落営為年代は，5世紀末あるいは6世紀初めに入植して以来，約350年継続したと考えてよいであろう。ただきわめて限られた範囲の調査であったので，集落本来の形はまた違った様相であった可能性もある。

第2節　集落の構造

(1) 住居構造について

今回の調査において検出した住居跡群の諸特徴を整理してみると第3表のようになる。これをまず平面形からみていくとその多くは方形を呈する。ただ022B号住居跡は北壁と南壁が若干張り出す形状となる。034A号住居跡は他遺構との重複のため，細部については検討を要するが不定形を示す。048号住居跡は南東壁が極端に短く，一辺だけ不整になっている。

床面積は各々重複関係にあったり，また一部削平をうけ全体を窺えないものが多い。一応全体を測れるものを呈示し，また一部推測したものは（　）にて表示した。なお算出値は単純に長辺と短辺より求めず，周溝をもつ遺構はその内側より計測し，個々の遺構の状況に応じ算出した。7～8㎡を測るものが6軒，16～17㎡を測るものが4軒のほかは，5.76㎡(020号住居跡)から72.25㎡（052B号住居跡）まで異なった床面積をもつ。このような差異は当然時代差もあることから，集落の変遷の中で床面積の推移をみると，前期第Ⅰ期(22.42㎡)，同第Ⅱ期(22.20㎡)，同第Ⅲ期（24.08㎡），同第Ⅳ期（43.62㎡），後期第Ⅰ期（不明），同第Ⅱ期（24.15㎡），同第Ⅲ期（13.40㎡），同第Ⅳ期（10.15㎡）の変化をたどる。

前期に関しては，第Ⅲ期に至り住居の大形化の徴候がみえ，第Ⅳ期では前半期の約2倍の床面積をもつようになる。

後期に関しては，再び前期前半期の床面積をもつ規模の住居にもどり，第Ⅲ・Ⅳ期に至りきわめて規模の小さい住居形態になる。

この床面積の変化の意味することはどのようなことであろうか。住居規模の増大・縮小は当然その住居の構成人員の変化として捉えられるのである。

柱穴は，前期第Ⅰ期では，まったく確認できないものと四本柱のものとがある。以後四本柱のしっかりした構造のものが主流を占める。後期第Ⅲ期に至り，住居の小規模化に伴い，カマ

ドの相対する壁寄りに1本だけ設けるものも確認される。後期第IV期には，全く柱穴は検出されないようになる。

貯蔵穴は，前期第III期頃まで設けられるようである。

カマドは検出されないものがあったが，ほとんどの住居には設置されていたと思われる。設置個所は北壁，あるいは北東壁，北西壁が主体であった。

(2) 集落の構造と変遷について（第92・93図）

本遺跡の調査面積は6,400㎡であったが，約73軒の竪穴住居跡が確認された。調査範囲が限られていたことを考えれば，台地上には150軒から200軒前後の住居跡があると予測されるのである。

調査された竪穴住居跡は，中世における城郭設置に伴う掘削や緩斜面のため表流水による地表の土壌の流失などにより，遺構面の露呈が進み遺存はきわめて悪かった。

以下各期にわたって集落の構造を概観してみたい。

〔前期第Ⅰ期〕

当期に該当する住居は，014・022A号住居跡の2軒であるが切合関係から017B号住居跡も当期の可能性がある。

014・022A号住居跡は遺跡の北西側に占地しており，約13m隔てて構築されている。南東側には約600㎡ほどの『広場』が存在する。この『広場』は集落が営まれた全時代に常に『広場』として存在したようで，無遺物，無遺構であった。

014号住居跡は床面積9.92㎡を示し，主柱穴をもたない。貯蔵穴は南東コーナー寄りに設けられており，カマドは東壁の中央よりやや南側に偏した位置にある。

022A号住居跡は床面積推定25㎡を示し，4本の主柱穴をもつ。貯蔵穴は南及び東コーナー寄りに設けられており，カマドは南西壁に設置されている。

〔前期第Ⅱ期〕

当期に該当すると思われる住居は005，032，035B，045，048，054C号住居跡があげられる。また，029，034C号住居跡もその切合関係より本期に含まれる可能性は強い。

戸数もふえ，住居が台地南側に拡大していく。それは，当初営まれた地点より高い地点と低い地点両方への広がりとして捉えることができる。

このように一挙に戸数が増加した現象は，前代の日常的農業労働が数戸の小規模経営によっていたことを考えれば，地域的に成功したためと考えられる。

また人口の増加は生産力の発展と捉えられ，これらについては，八賀晋氏によると灰褐色土壌群への開発行為，また都出比呂志氏によると農具の鉄器化がその背景にあるとしている。

〔前期第III期〕

当期に該当すると思われる住居は，017A，028，034B，040，042，044，046，051，052A，054A号住居跡があげられる。また031号住居跡も切合関係から本期に含まれる可能性は強い。

前代にもまして，集落は拡大の様相を示している。当初よりの『広場』はそのまま継承されていることから，広場としての機能の維持は継続して行われていたようである。

住居の平均床面積は，24.08m²を測り，前代に比べ1.88m²ほど広がる。主柱穴は4本を基本としているが，046号住居跡には南壁中央寄りに1ケ所柱穴が穿たれている。また小規模の028，052A号住居跡には全くないか，1ケ所のみの設置である。

周溝は034B号住居跡を除いて設けられている。貯蔵穴は壁コーナー寄りに設けられているのが多い。

カマドは切合で紛失されたものもあるが，すべて設けられているようである。

〔前期第IV期〕

当期に該当すると思われる住居は，004B，021B，036，049，052B，053A号住居跡があげられる。

住居は台地上に散在しており，集落の形態は前代からのものを継承して，変化はないように見受けられる。

住居の平均床面積は43.62m²を測り，前代に比べ，19.54m²も広がる。主柱穴は4本を基本としている。052B号住居跡は大形の住居であるが柱穴は認められなかった。

周溝は004B，021B，053A号住居跡には設けられている。貯蔵穴は049号住居跡のみに確認された。

カマドは切合及び削平で除かれているものもあるが，すべて設けられていたようである。

〔後期第I期〕

当期に該当する住居は007B号住居跡1軒のみである。

集落構成の上からみると数軒を加えた集落ではなかったかと思われる。

007B号住居跡は，調査対象地以外に接しており，また東側を上部遺構により削平されているため，その全容を窺うことはできない。平面形は四角形で周溝が設けられているが，他の点については不明である。

〔後期第II期〕

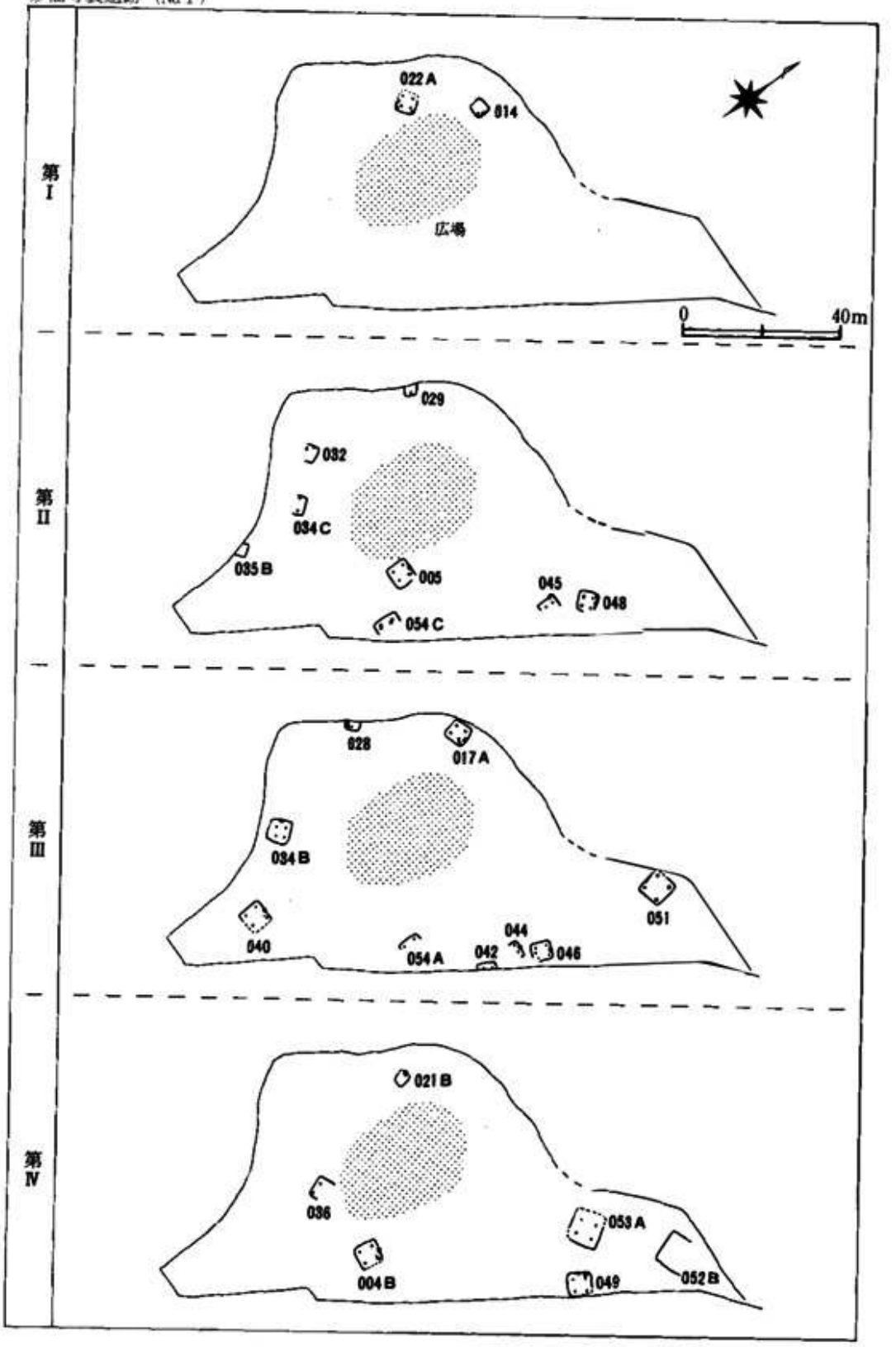
当期に該当する住居は，007A，013，022C号住居跡の3軒があげられる。

住居の平均床面積は24.15m²を測る。柱穴は007A号住居跡が4ケ所，013号住居跡が5ケ所，022C号住居跡は確認されなかった。周溝は3軒とも設けられている。

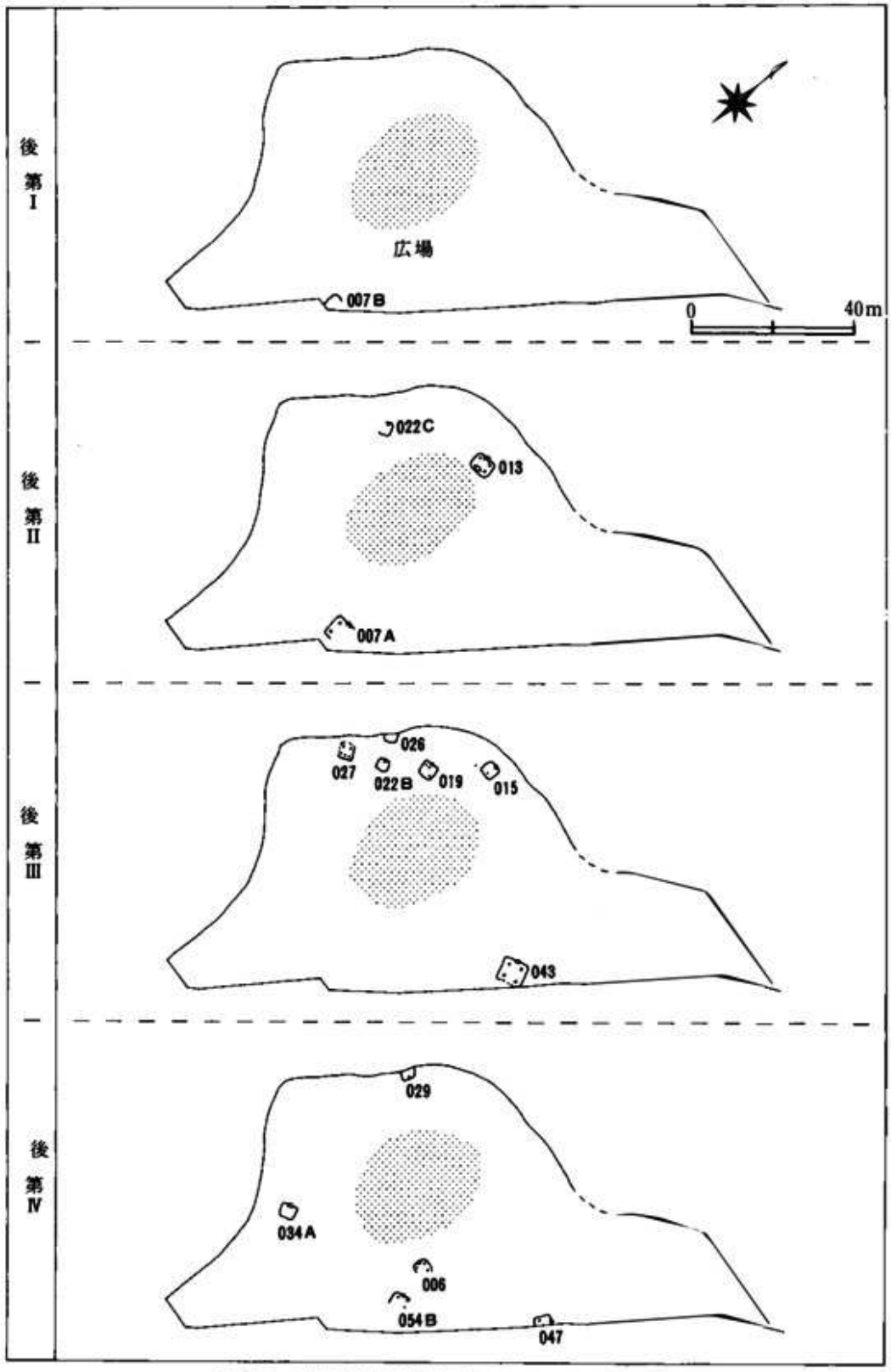
カマドは3軒とも北壁中央部に設定されている。

〔後期第III期〕

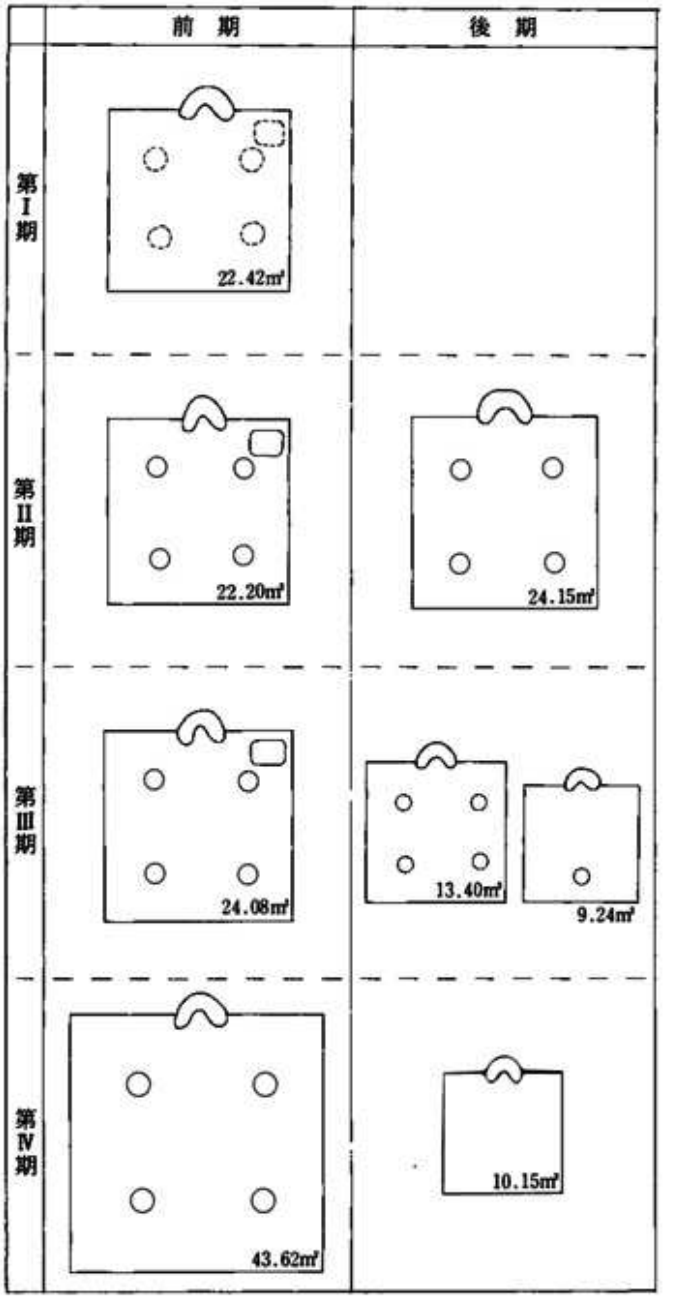
妙福寺裏遺跡（No.1）



第92図　妙福寺裏遺跡集落変遷図（　　）・(1/1,600)



第93図　妙福寺裏遺跡集落変遷図（後　）・(1/1,600)



第94図　妙福寺裏遺跡住居変遷図

当期に該当する住居は，015，019，022B，026，027，043号住居跡の6軒があげられる。『広場』をはさんで北西側に集中した状況である。

平面形は方形であり，全体的にかなり小規模になるようである。平均の床面積は13.40m²を示すが，大形の043号住居跡を除いた5軒では，平均床面積9.24m²を示し，一辺が3mの住居構造ということになる。これはきわめて急激に小形化する傾向を示しているようである。

柱穴は015，022B号住居跡が南壁中央寄りに1ケ所，027号住居跡は5ケ所，043号住居跡は平面部4ケ所と壁柱穴4ケ所が各々確認される。

周溝はすべての住居に認められる。

カマドは削平等で確認できない住居もあるが，北壁中央部に設置されている。

〔後期第Ⅳ期〕

本期に該当する住居は，006，029，034A，047，054B号住居跡の5軒である。集落構成上からみると台地一面に位置しており，継続して『広場』は意識されているようである。

住居の平均床面積は10.15m²を測り，前代に比べ3.25m²ほど狭まり，さらに住居の小規模化を示しているようである。

柱穴は006号住居跡は4ケ所，034A号住居跡はまったくなく，他は不明である。

周溝はすべての住居に認められる。

カマドは029号住居跡は切合関係で不明であるが，他は北西，西，あるいは北東側に設置されている。

第3節　城郭遺構の構造（第95図）

本遺跡一帯は中世の小菅城跡とされている。規模は東西530m，南北630mの大規模のものがあるが，今回の調査でその主郭部が確認された。

本遺跡が立地する台地を含め，取香川を北に望むV字状の台地一帯は，滑河城主細田左京太夫政治の元の居城であったと伝承されている。遺跡の東側に位置する標高20mの台地には根古屋という字名が残されており，また土塁（K），整形痕（J，L）なども確認され，今回の調査の成果の空堀や斜面の整形という状況をみると，根古屋式城郭の性格を整えていると思われる。

調査区の東寄りに南北に掘られた堀（B）は，主郭部と副部を分けるものと考えられるところから，堀の西側が主郭部であり東側が副郭であろう。また八手状に飛び出している台地も郭と考えられ，戦時には主郭部と切り離せるように堀が造られている。調査区西側の台地を掘り込んだもの（A），また南側でも空堀（D）が確認される。また台地の北東部に妙見社があり，その張り出しの所にも空堀（C）が確認できた。調査区北側の台地斜面は急傾斜に削られており，郭に接する斜面には人工的な整形（E）が行なわれた可能性もある。また主郭部に至る斜面にも整形の痕跡（F～H）が窺われる。調査区南側においては，主郭と考えられるところから4mほど下面に平坦な地域（I：幅5m，長さ20m）があり腰部と考えられる。

参考文献

阿部義平「ロクロ技術の復原」『考古学研究』第70号　1971

石田広美・松村恵司・金子真士『山田水呑遺跡』山田遺跡調査会　1977

小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」『考古学研究』第70号　1971

小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器(2)」『考古学研究』第71号　1971

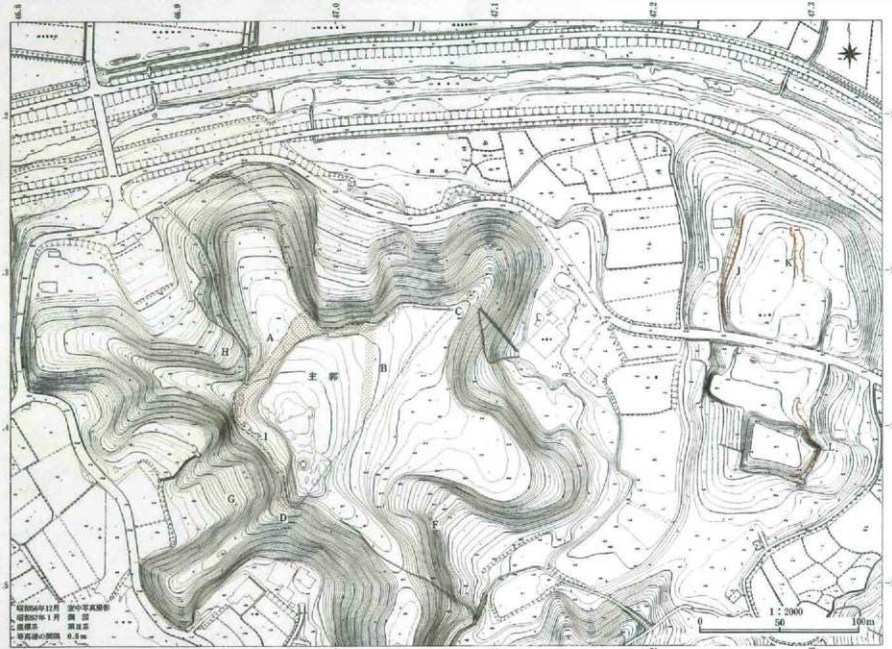
小川貴司「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第101号　1979

越川敏夫・長内美知枝「下総東部における奈良・平安時代の土器編年試案」『房総における奈良・平安時代の土器』　1983

杉原荘介・小林三郎「土師時代」『市川市史』第一巻　1971

宮内勝巳「東京湾沿岸における奈良・平安時代土器の様相」『房総における奈良・平安時代の土器」1983

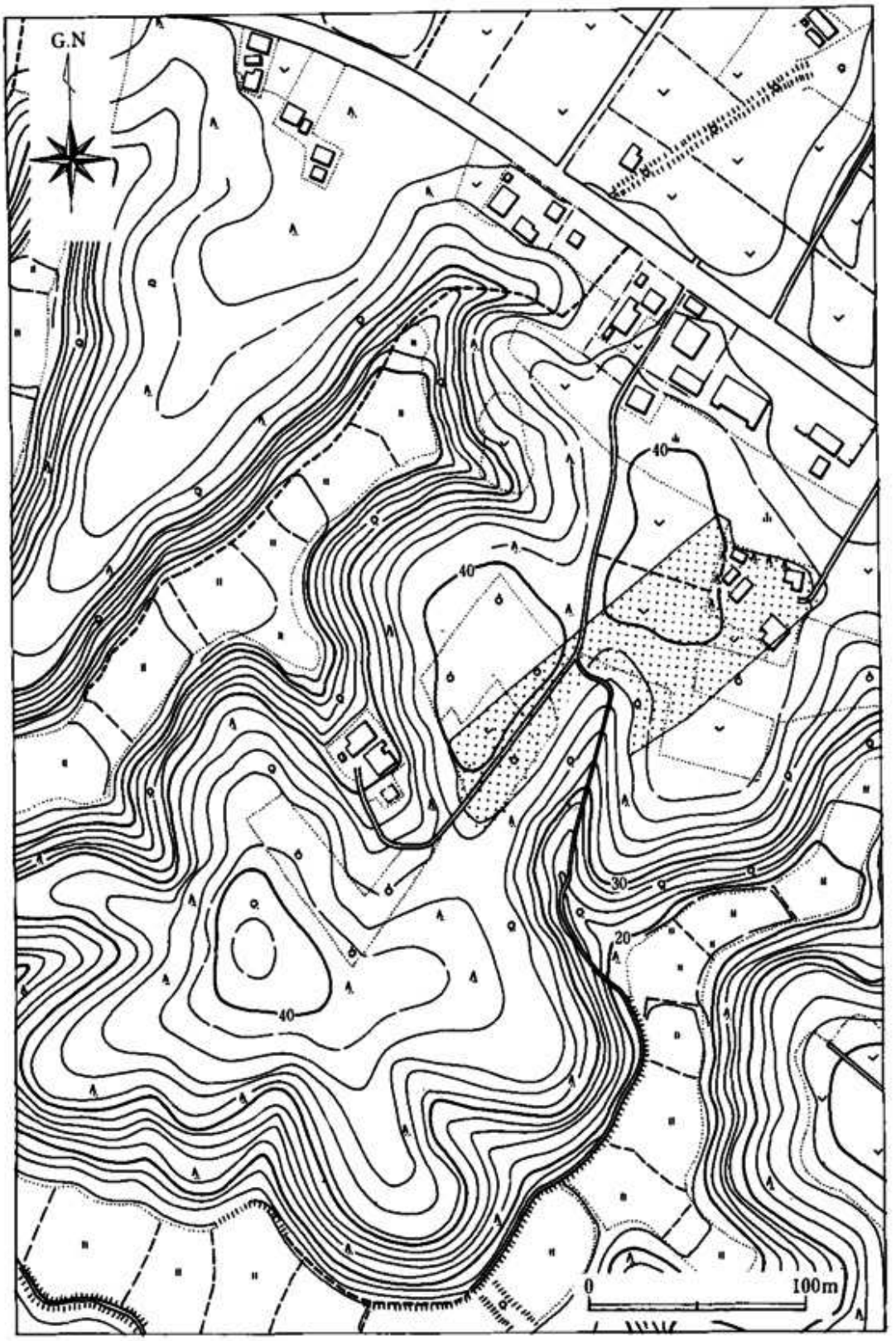
村田一男・木村修編『成田市中世城郭址調査報告書』1983



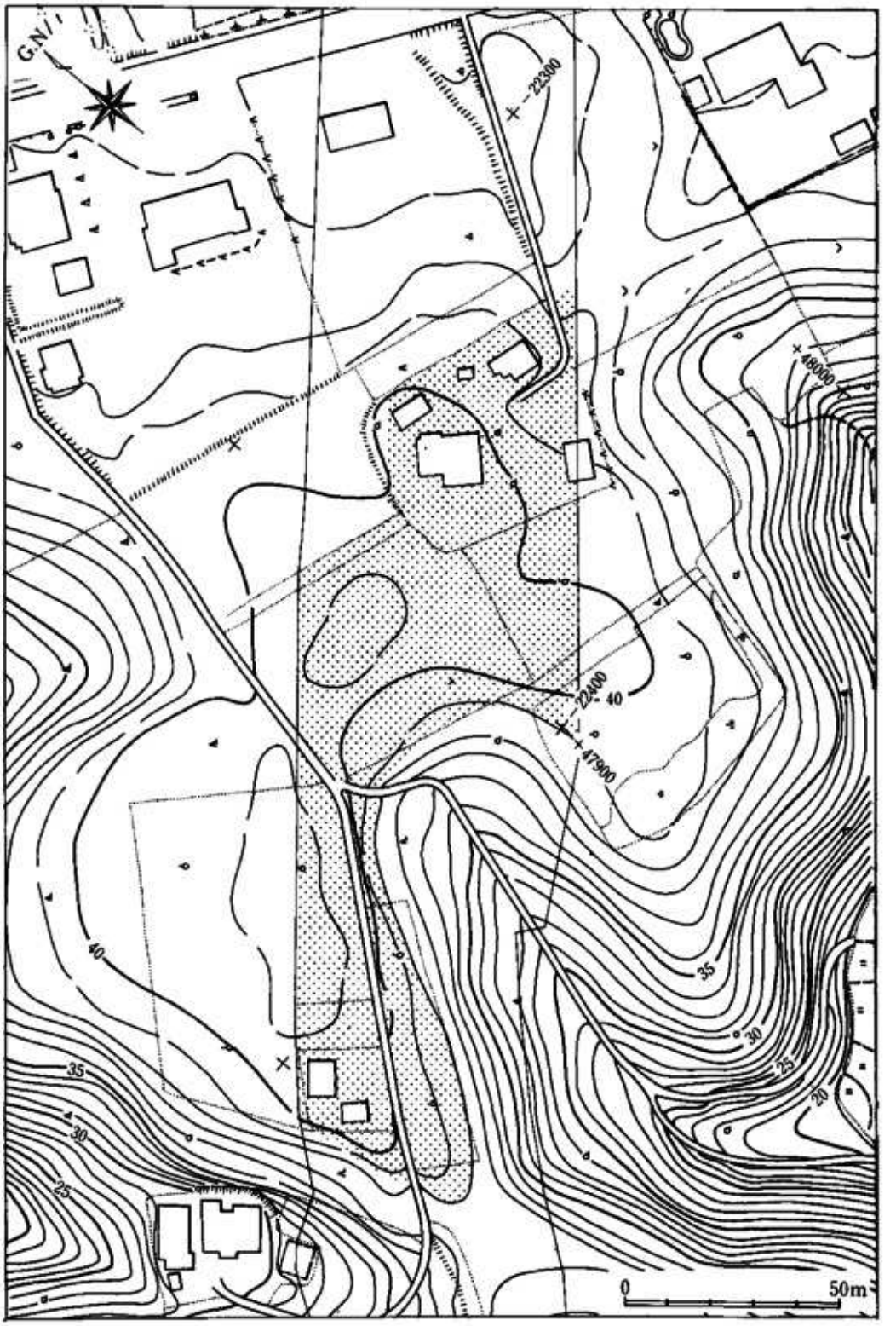
第95図 小菅城跡遺構関連図

円　妙　寺　遺　跡（No.2）

(211—020)



第96図　円妙寺遺跡周辺地形図（1/3,000）



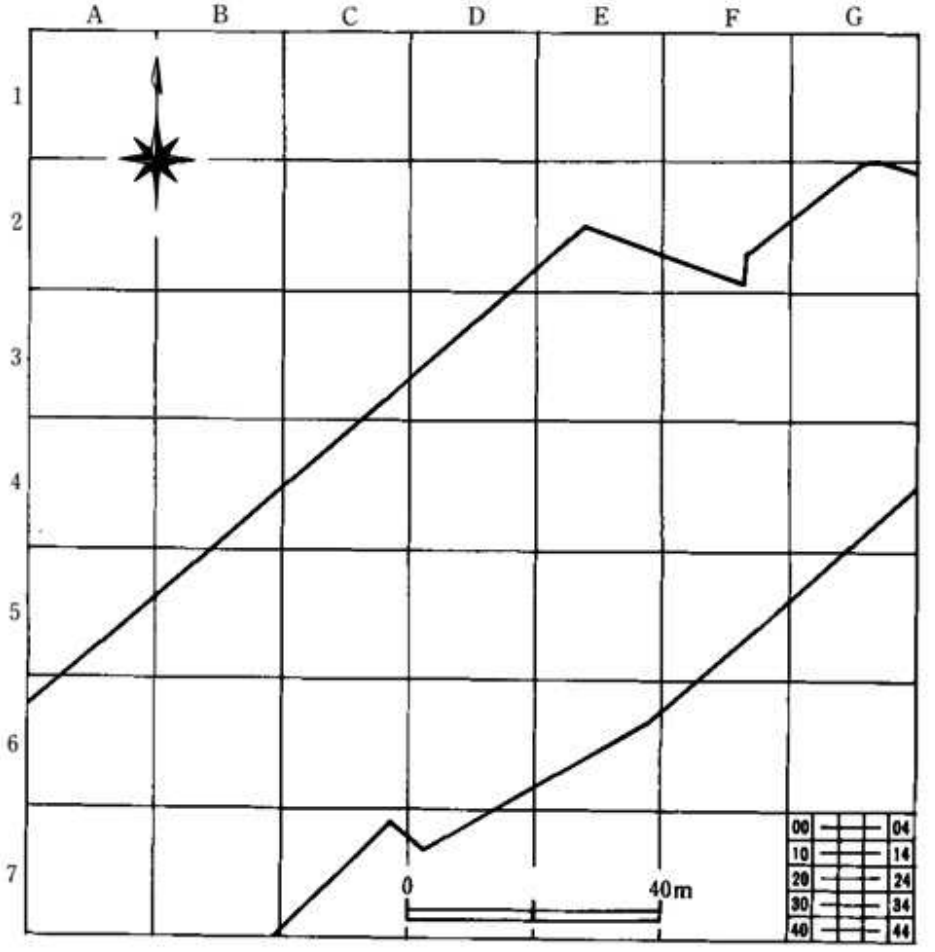
第97図　円妙寺遺跡地形図（1/1,500）

第1章　調　査　概　要

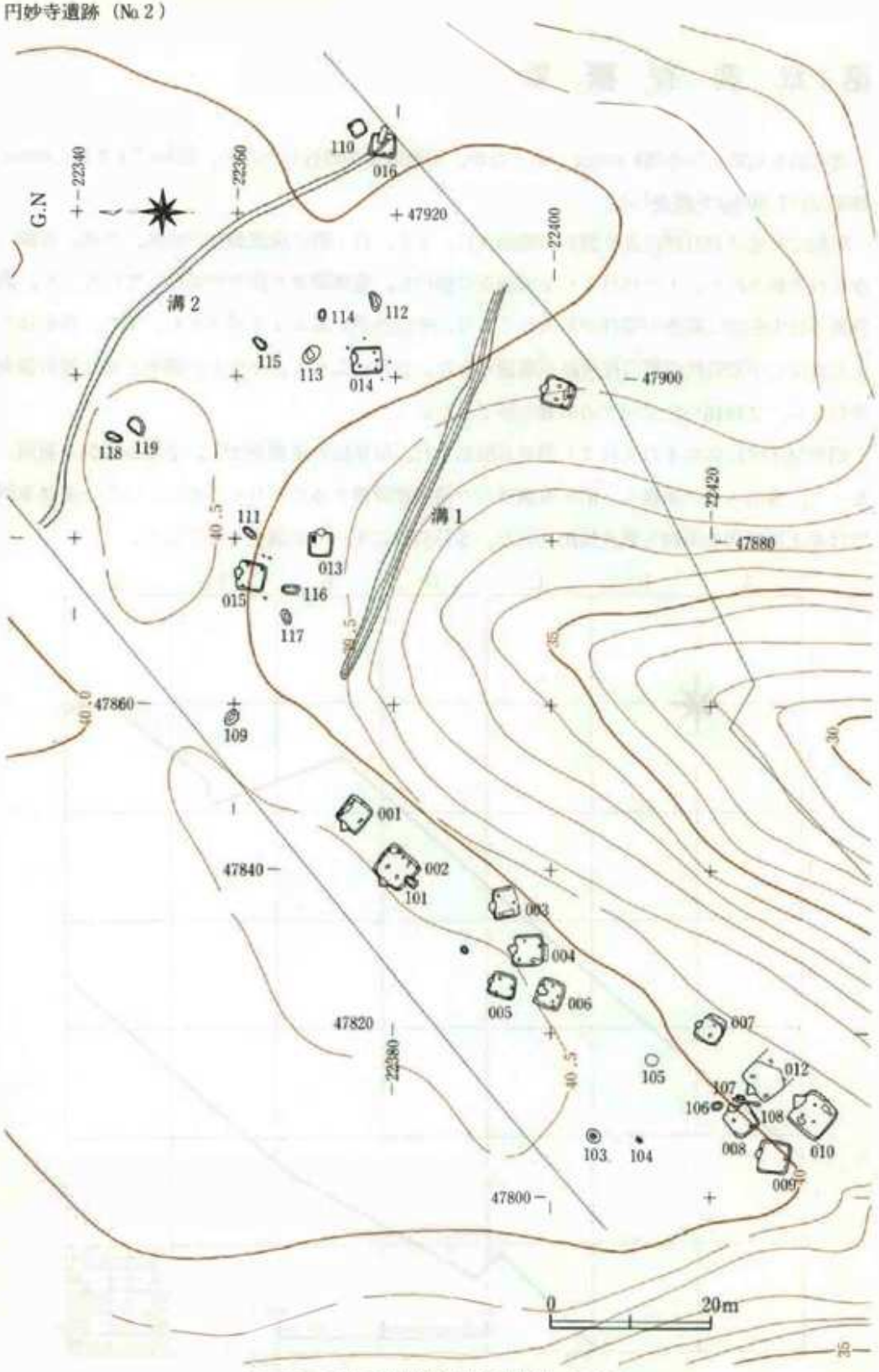
遺跡調査対象は包含地8,900㎡であったが，用地取得が難行したため，昭和57年度に2,000㎡，58年度に7,900㎡を調査した。

昭和57年度は12月15日より調査が開始され，まず，約1割の確認調査の結果，全域に遺構の存在が予測された。1月15日より全域調査に移行し，遺構調査と排土を並行して行なった。調査範囲は中央部に取香川支谷が湾入しており，その谷頭に溝が1条検出され，また，谷をはさんだ両岸に平安時代の竪穴住居跡が確認された。2月に入ると，カマドの調査と先土器の調査を行ない，2月16日にすべての調査を終了した。

昭和58年度は59年1月4日より調査が開始され，前年度の成果を加え，全域が本調査範囲になった。検出された遺構も，前年度調査した遺構に隣接する広がりをみせた。また，遺跡東側では先土器時代の遺物も数点検出された。3月31日にすべての調査を終了した。



第98図　円妙寺遺跡グリッド設定図

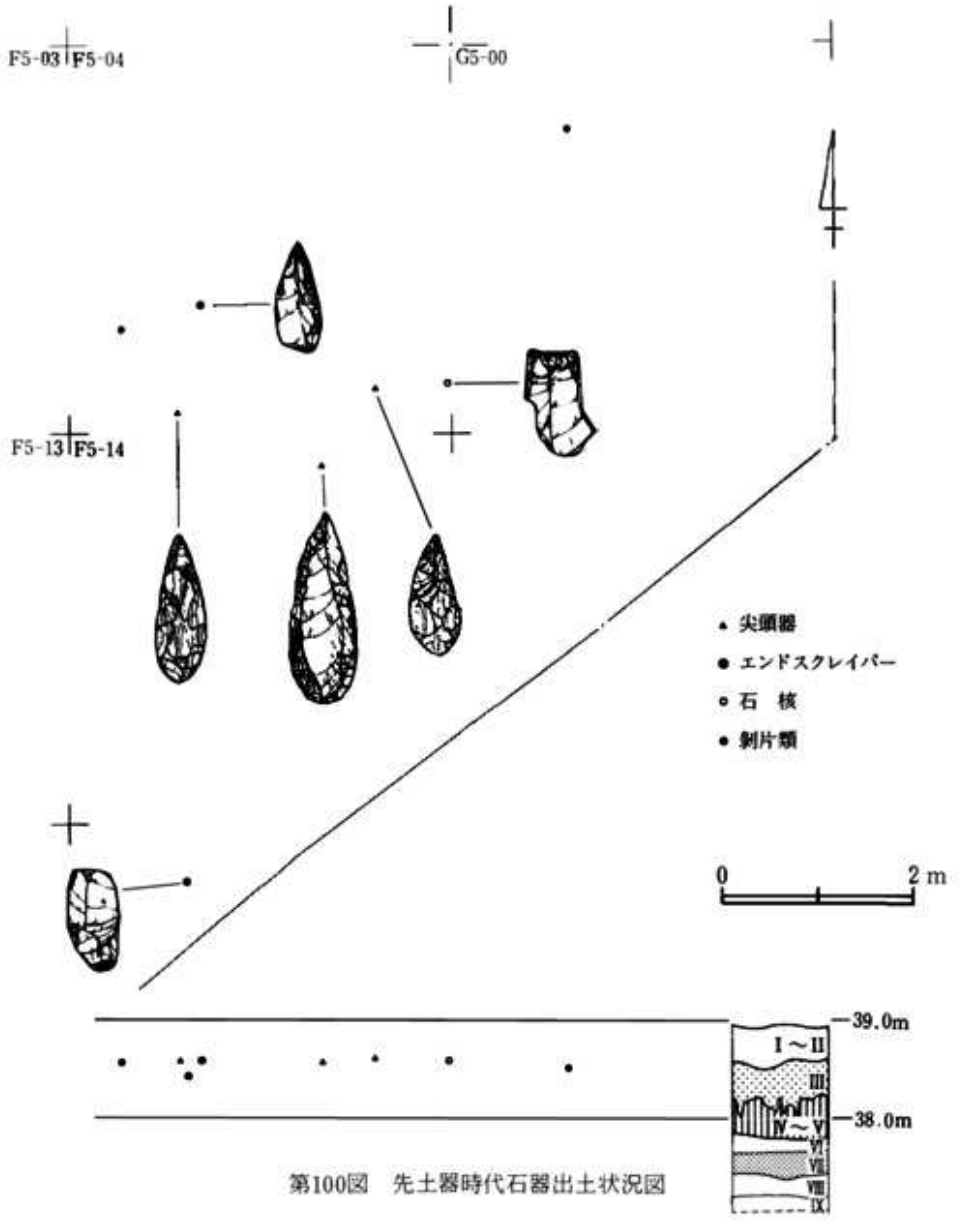


第99図　円妙寺遺跡遺構分布状況図（1/800）

第2章　遺　　構

第1節　先土器時代（第100図，図版59－2）

F5－04区南側を中心に分布するが，2点はやや離れて出土した。出土層位はII層暗褐色土層下部～III層ソフトローム層中で，III層上層にその主体を置くものと思われる。遺物総数は8点で，石材は安山岩，硅岩，砂岩を使用し，尖頭器3点，エンドスクレーパー2点，石核1点，剥片1点，小礫1点である。



第100図　先土器時代石器出土状況図

第2節　住　居　跡

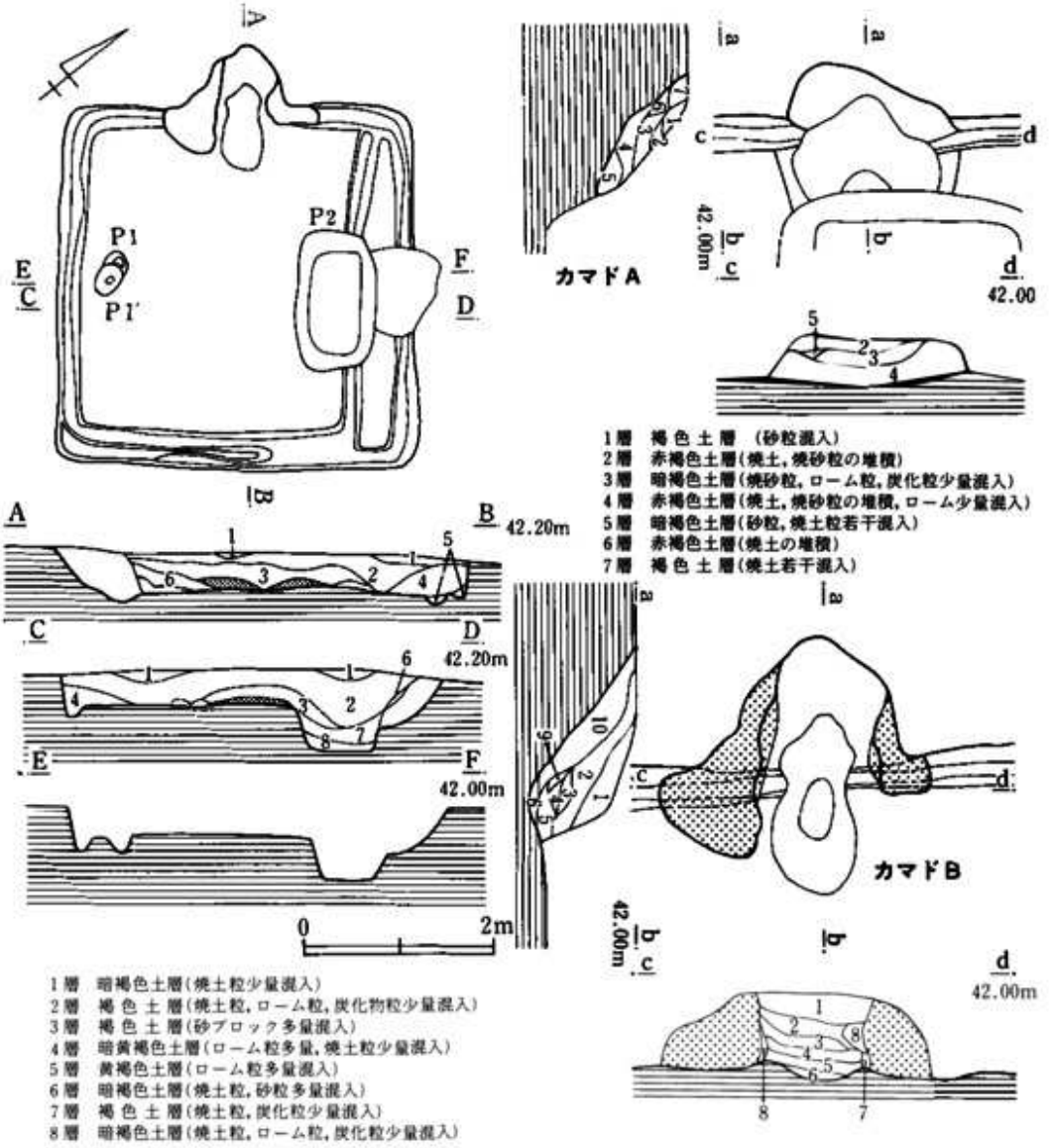
001号住居跡（第101図，図版60－1）

C4区南西側に位置する。拡張住居である前（B）住居跡は隅丸長方形で3.2×3.7mの規模であり，（A）・後（B）住居跡は，隅丸正方形で規模は3.7×3.7mである。Aカマドの主軸はN－39°－E，Bカマドの主軸はN－50°－Wを指す。埋没状態は，床面中央に焼土が堆積し，Bカマド付近を除いて床全面に住居の上部構造に使われたと思われる炭化材が散乱していることから，焼失住居であると考えられる。覆土は住居，貯蔵穴をあわせ，8層に分かれる。カマドは当初北西壁中央に構築されていたが，後に北東壁中央，その後に北西壁中央に移築されたものと思われる(前Bカマド→Aカマド→後Bカマド)。Aカマドの構築をみると周溝を掘った後に壁への掘込みや火床部を掘り込んでいるが，袖の部分の砂質粘土は認められず，後Bカマドへの移築時にはすでに取払われていたものと思われる。Bカマドは，周溝を掘った後に壁への掘込みを行い，砂質粘土でカマドの構築がなされている。壁外への掘り込みは，Aカマドの残存部分で30 cm，半円形を呈しており，火床部は床面から18 cm程掘り込まれている。Bカマドの壁外への掘込みは，楕円状に65 cm程掘込まれ，火床部は床面から10 cm程掘込まれる。壁は北側で高く46 cmを測り，南側で低く23 cmを測り一定しない。床面は北東側が高く南西側が低く高低差は10 cm程である。周溝は，全周しており，貯蔵穴P2に切られる周溝は初期のものである。幅は20～40 cm，深さ4～9 cmと一定しない。柱穴は1本で掘り直しの重複がみられる。深さはP1＝15 cm，P1′＝19 cmを測る。P2は貯蔵穴で，覆土の観察によると，Aカマドを削って掘込まれており，また貯蔵穴にも住居と同じ覆土が流れ込んでいることから，この貯蔵穴はBカマドに伴うものであると考えられる。深さは49 cmで，ほぼ平坦に掘込まれている。

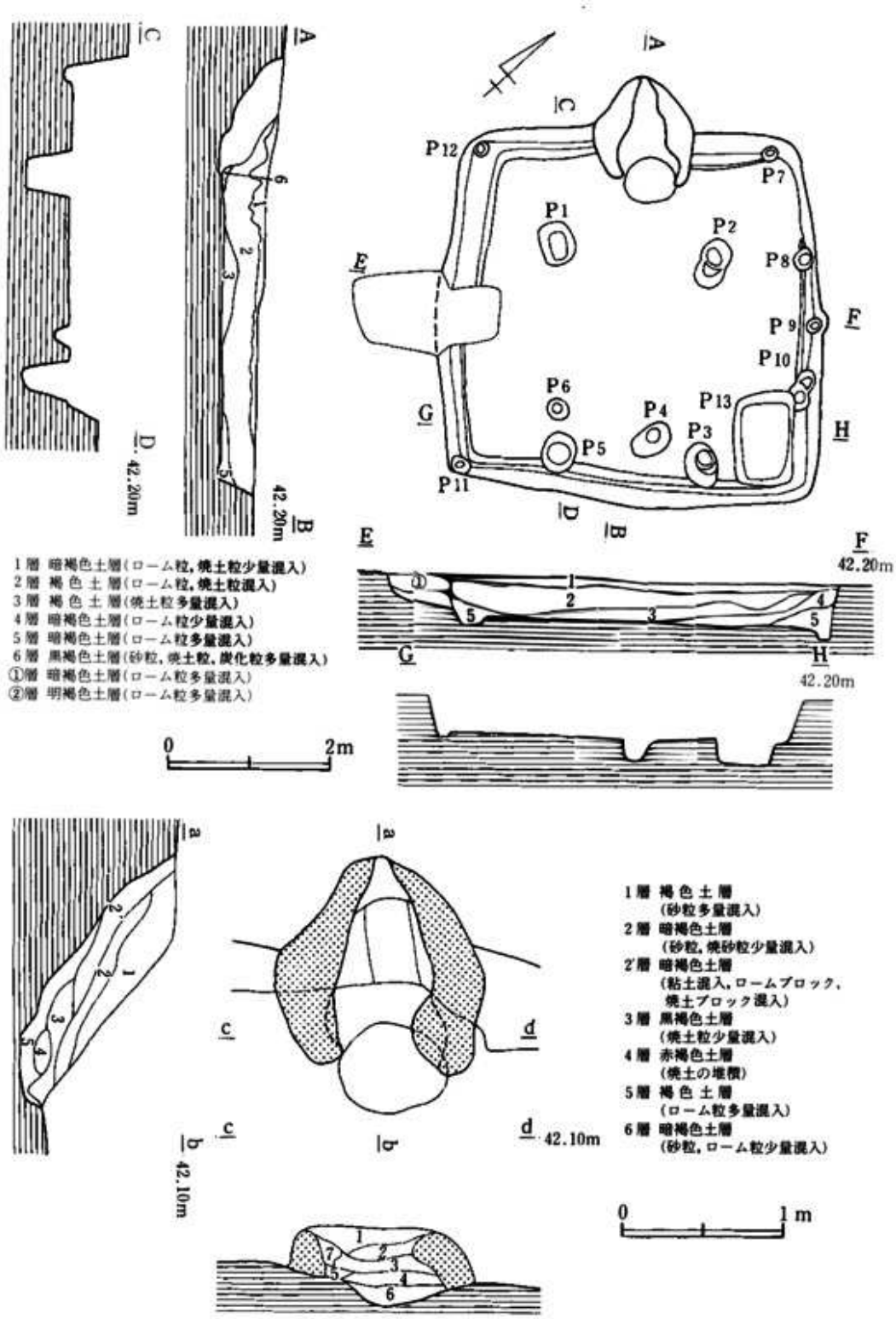
遺物は，焼失住居のため，床直上から住居の上部構造と思われる組んだ状態での炭化材や，カヤのようなストロー状の炭化物が束になって出土した。石製品が炭化材のわきと貯蔵穴内より出土し，貯蔵穴内からは奈良二彩片も出土している。また，住居内からは支脚，完形の坏，甕底部など，土師器片が多数出土しているが，須恵器の出土は若干であった。

002号住居跡（第102図，図版60－2）

B4－44，B5－04，C4－40，C5－00に位置する。形態は隅丸不整方形をなし，4.6×4.7mの規模であり101号土坑と重複している。カマドの主軸は，N－45°－Wを指す。住居確認面はソフトローム上である。土層の観察により住居の方が新しいということがわかる。カマドは，北西壁中央に設けられ，袖は山砂を積み構築している。天井部は削落しており，1層が天井部の残存ではないかと思われる。壁外への掘込みは60 cmを測り，半円形を呈す。火床部は床面から16 cm程掘込まれる。壁高は東側で44 cm，西側で66 cmを測り，漸次東から西に向か



第101図　001号住居跡実測図



第102図　002号住居跡実測図

って高くなる。床面は南西側が高く北東側に向かって低くなる。高低差は 15 cm である。周溝は北東壁北側の一部を除いて全周する。幅は 20～50 cm，深さ 14～25 cm と一定しない。柱穴は12本あるが内 6 本は壁柱穴である。P 1～P 3，P 5が主柱穴と思われる。P 2とP10において掘り直しが行われ，柱穴が重複している。またP 5には柱痕が認められた。深さはP 1＝5 9 cm，P 2＝58 cm，P 2′＝43 cm，P 3＝69 cm，P 4＝22 cm，P 5＝51 cm，P 6＝12 cm，P 7＝25 cm，P 8＝30 cm，P 9＝14 cm，P10＝12 cm，P10′＝24 cm，P11＝3 cm，P 12＝19 cm を測る。P 13は貯蔵穴で1.1×0.7mの方形のプランを呈し，深さ 30 cm を測る。

遺物は，土師器の坏片，甕片が出土しているが，出土量は少ない。カマド内からは完形にはならないが坏が 3 個体分重なるように出土している。

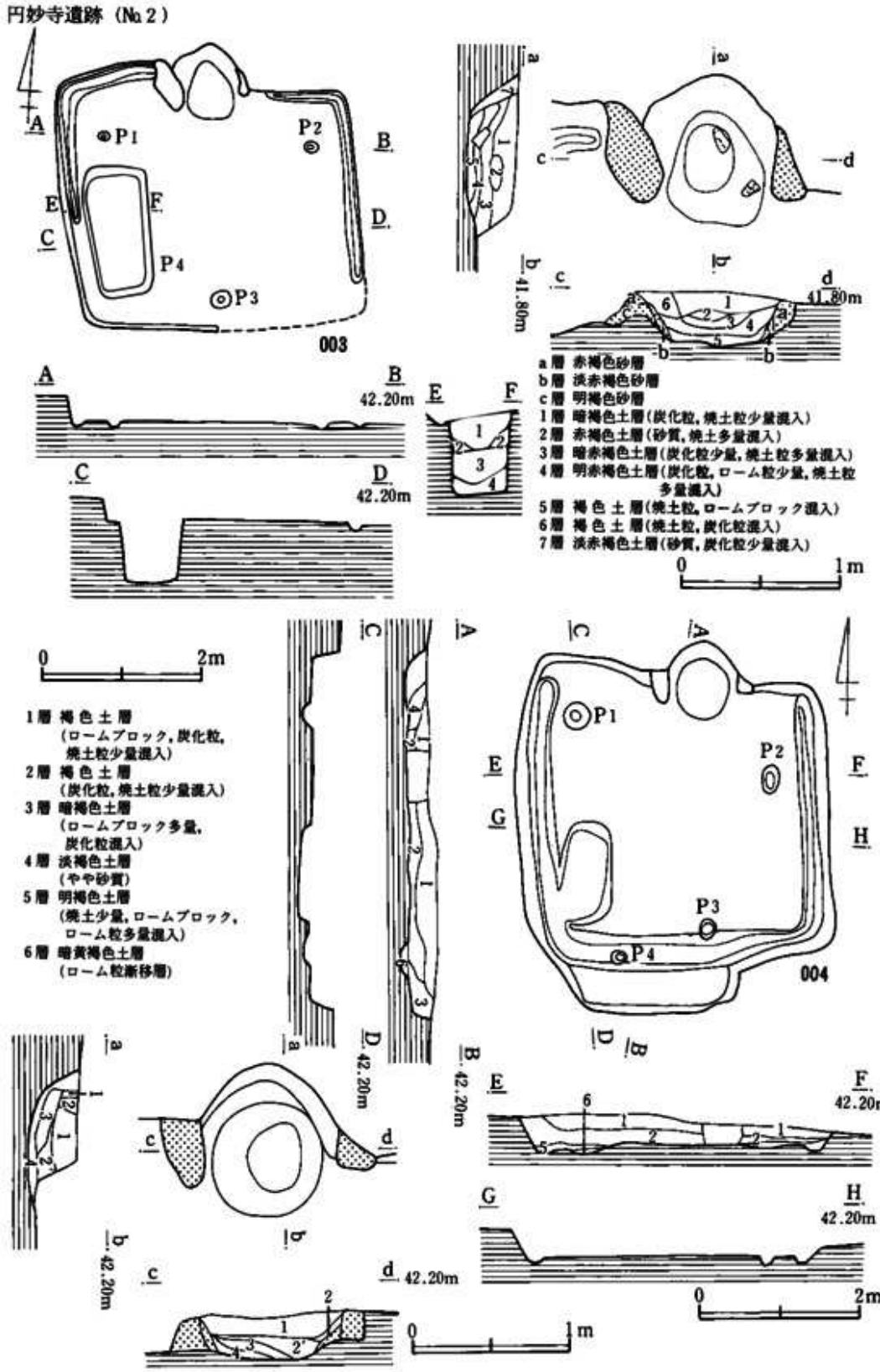
003号住居跡（第103図，図版61－1）

B 5 区南東に位置する。南壁東側，東壁は削平を受けて壊されていたが，東壁は周溝のみ検出できた。形態は横長隅丸不整長方形を呈し，貯蔵穴を有する。規模は3.2×3.7m，カマドの主軸方位はN－10°－Wを指す。埋没状況をみると，床面上で炭化材が散材し，焼土の堆積もみられ，あるいは焼失した可能性も強い。覆土は自然堆積である。カマドは，北壁中央に設けられ，ロームを基部に山砂を積んで構築している。天井部は削落している。壁外への掘込みは 35 cm を測り，半円形を呈す。火床部の掘込みは床面から 6 cm で，よく熱を受けている。壁高は，北壁が 25 cm，西壁が 29 cm，残存する南壁部分は 23 cm を測る。床面はほぼ平坦であるが，削平を受けているためか，6 cm 程の高低差を持つ。周溝は西壁中央から北壁，東壁から北壁のカマドを除く壁下にまわる。幅10～20 cm，深さは 2～7 cm を測る。柱穴は 3 本あるが，いずれも浅く窪み状を呈す。深さはP 1＝5 cm，P 2＝5 cm，P 3＝7 cm である。P 4 は貯蔵穴で，1.65×0.8mの規模で長方形を呈す。ほぼ垂直に掘込まれ，壁，底面ともに堅緻であり，深さ 77 cm を測る。

遺物の出土は比較的多い。甕底部をはじめ土器片多数，板状炭化材等の炭化物が出土した。北東コーナー付近からは土製紡錘車 3 点が出土しており，内 1 点は，「永」の刻書がみられる。カマド内からは支脚が 2 点出土している。

004号住居跡（第103図，図版61－2）

B 5 区南側中央，003号住居跡から西南西 3 m程に位置する。形態は南側に張り出しを持つ隅丸不整方形である。3.8×3.9m，張り出しは0.5×2.1mの規模を持ち，カマドの主軸はN－2°－Eを指す。覆土は，自然堆積を示す。カマドは北壁中央やや東よりに設けられ，砂質粘土により構築されている。袖は先端が流出しているが，床面から約 15 cm の高さで残存している。両袖内側及び火床部の燃焼は良好である。カマド層位は，1 層：褐色土層(砂質粘土混入)，2 層：砂質粘土層，2′層：砂質粘土層(焼砂粒混入)，3 層：暗褐色土層，4 層：赤褐色土層(焼



第103図　003号，004号住居跡実測図

土質ローム）である。壁外への掘込みは，40 cm で半円形を呈す。火床部は床面から 6 cm の掘込みで，円形を呈す。壁高は，西壁が最も高く 36 cm，東に向かい低くなり東壁では 16 cm を測る。南壁の張出し部は 28 cm の壁高を持つ。床面は比較的平坦で、堅緻である。張出しは床面より 3 cm 程高いレベルを持つ。周溝は，カマドのある北壁を除き「コ」の字型にまわる。幅 20～40 cm，深さ 2～12 cm と一定せず，特に張出し部下の周溝の幅は広い。柱穴は 4 本で，深さはＰ１＝3.7 cm，Ｐ２＝11 cm，Ｐ３＝19 cm，Ｐ４＝12 cm，といずれも浅く掘込みはしっかりとしていない。南西部に位置するピット状の落ちこみは床面より 15 cm 程であるが，掘込みははっきりせず，性格は不明である。

遺物はあまり多くなく，覆土中から少量の土師器片，カマド内からは支脚１点，甕などの土師器片を８点出土している。

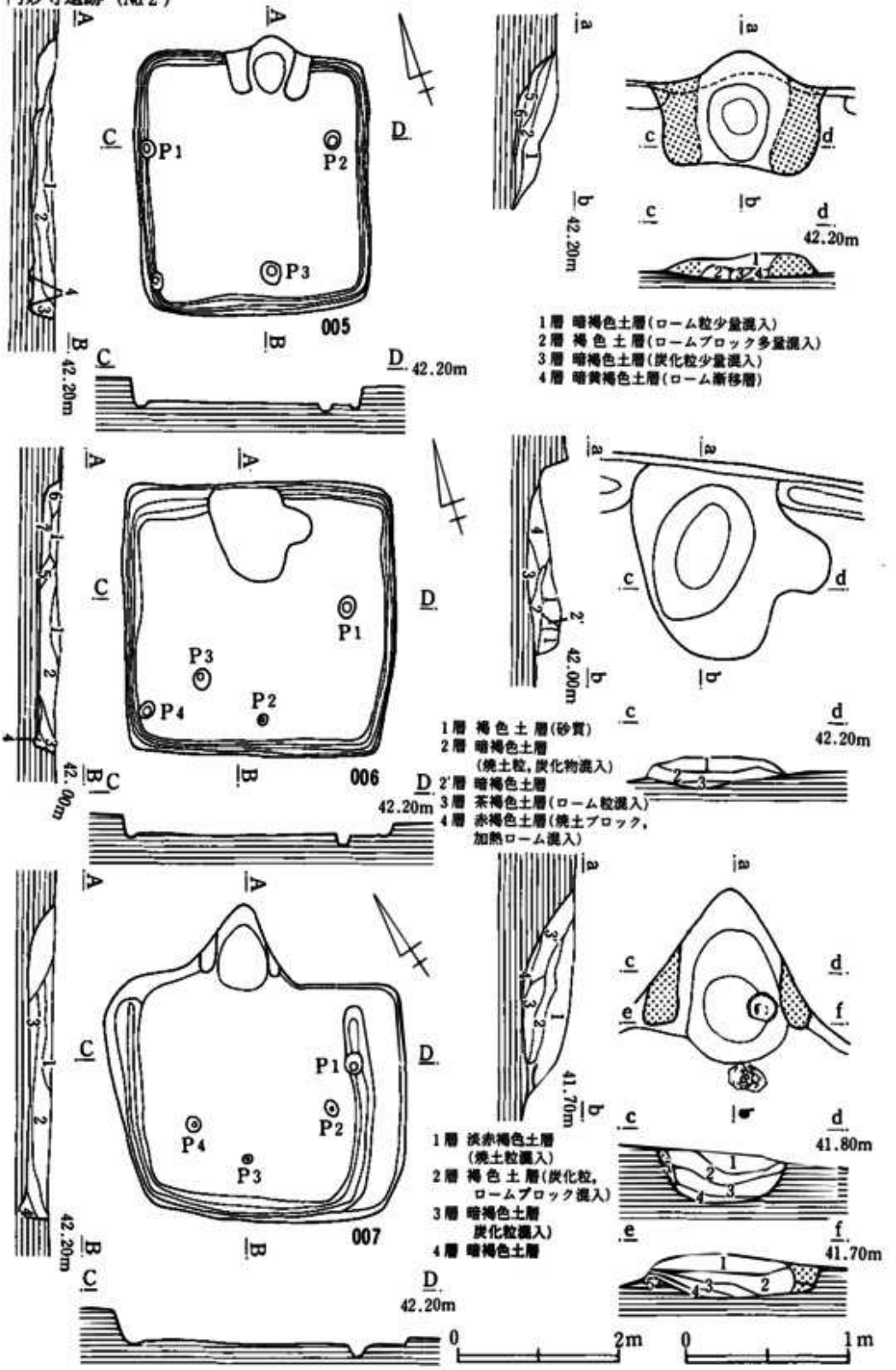
005住居跡（第104図，図版62－１）

Ｂ５区南西部，003号住居跡より西７ｍ，004号住居跡より北西に２ｍに位置する。形態は縦長の隅丸方形を呈し，規模は3.2×2.85m，カマドの主軸はＮ－19°－Ｅを指す。覆土は自然堆積を示す。カマドは北壁中央やや東よりに設けられ，砂質粘土により構築されている。火床部はロームが熱を受け，焼土ブロック状となる。カマド層位は１層：砂質粘土層，２層：焼成砂質粘土層（焼土ブロック混入），３層：砂質粘土層（焼土粒混入），４層：砂質粘土層（焼土粒多量混入），５層：暗褐色土層(ローム粒，焼土粒，焼土ブロック混入)，６層：淡赤褐色土層(焼土ブロック混入）である。壁外への掘込みは 20 cm，火床部は床面から 6 cm 掘込まれる。壁高は西壁南側が高く 32 cm，北東隅は低く 20 cm を測り，東西から北東に向かって低くなっていく。床面は比較的平坦ではあるが，中央部がやや低くなる。周溝は全周し，幅 10～20 cm，深さ 3～8 cm を測る。柱穴は４本で，深さはＰ１＝8 cm，Ｐ２＝7 cm，Ｐ３＝22 cm，Ｐ４＝9 cm を測る。

出土遺物は少ない。覆土中からは少量の土器片，カマド内からは，数点の土器片，土製支脚が出土した。

006号住居跡（第104図，図版62－２）

Ｂ５区南端からＢ６区にかけて，004号住居跡の南西２ｍ，005号住居跡の南３ｍに位置する。形態は隅丸正方形を呈し，規模は3.2×3.2m，カマドの主軸はＮ－19°－Ｅを指す。確認面はソフトローム上である。北壁は攪乱を受けている。覆土は７層に分けられた。１層：褐色土層(ローム粒少量混入)，２層：暗褐色土層（ロームブロック，ローム粒多量混入），３層：暗褐色土層（ローム粒少量混入），４層：黄褐色土層（ロームブロック少量混入），５層：褐色土層（砂粒，焼土粒多量混入），６層：褐色土層（砂粒，焼土混入），７層：砂質焼土層，である。カマドは北壁中央に構築される。遺存状態は不良である。北壁は攪乱を受けており，カマド部分の



第104図　005号，006号，007号住居跡実測図

壁への掘込みは残っていない。火床部の掘込みは，床面から 7 cm を測る。壁高は 15 cm を測り，しっかりと掘込まれている。床面は比較的平坦であるが中央部が若干窪んでおり，高低差は 4 cm 程である。周溝は全周し，幅 10～36 cm，深さ 1～6 cm である。柱穴はいずれも浅く判然としない。深さはＰ１＝14 cm，Ｐ２＝7 cm，Ｐ３＝13 cm，Ｐ４＝9 cm を測る。

出土遺物は少ない。土器片が少数北東部に出土し，中央部からはスラグが出土している。

007号住居跡（第104図，図版63－１）

Ａ６区，Ａ７区，Ｂ６区，Ｂ７区の交点に位置する。形態は隅丸不整方形である。規模は2.8×3.6m，カマドの主軸はＮ－32°－Ｅを指す。埋没状況をみると床面付近に炭化材，焼土の堆積がみられる。カマドは北東壁中央やや西よりに設けられており，袖はローム地山成形により造り出しているが，砂は検出されていない。カマド層位は，１層：褐色土層（焼土粒，ローム粒，炭化物混入），２層：暗褐色土層（焼土ブロック，炭化粒，ロームブロック混入），３層：赤褐色土層（焼土粒），３′層：赤褐色土層（焼土ブロック多量混入），４層：暗褐色土層（焼土粒，炭化粒少量混入），５層：明褐色土層（ローム粒多量，焼土粒，炭化粒混入），６層：黄褐色土層である。壁外への掘込みは三角状に掘込まれ，80 cm を測る。壁高は北西壁 36 cm，南西壁 27 cm，南東壁 11 cm を測り，北西から南東方向へ低くなっている。床面は凹凸が激しいが堅緻である。北西から南東に向かい低くなり，高低差は 10 cm を測る。周溝はカマドのある北東壁を除いて「コ」の字型にまわる。南東側の周溝は壁から約 40 cm 内側に掘削されている。幅 15～30 cm，深さは 1～9 cm を測る。柱穴は４本，深さはＰ１＝14 cm，Ｐ２＝47 cm，Ｐ３＝12 cm，Ｐ４＝12 cm を測る。

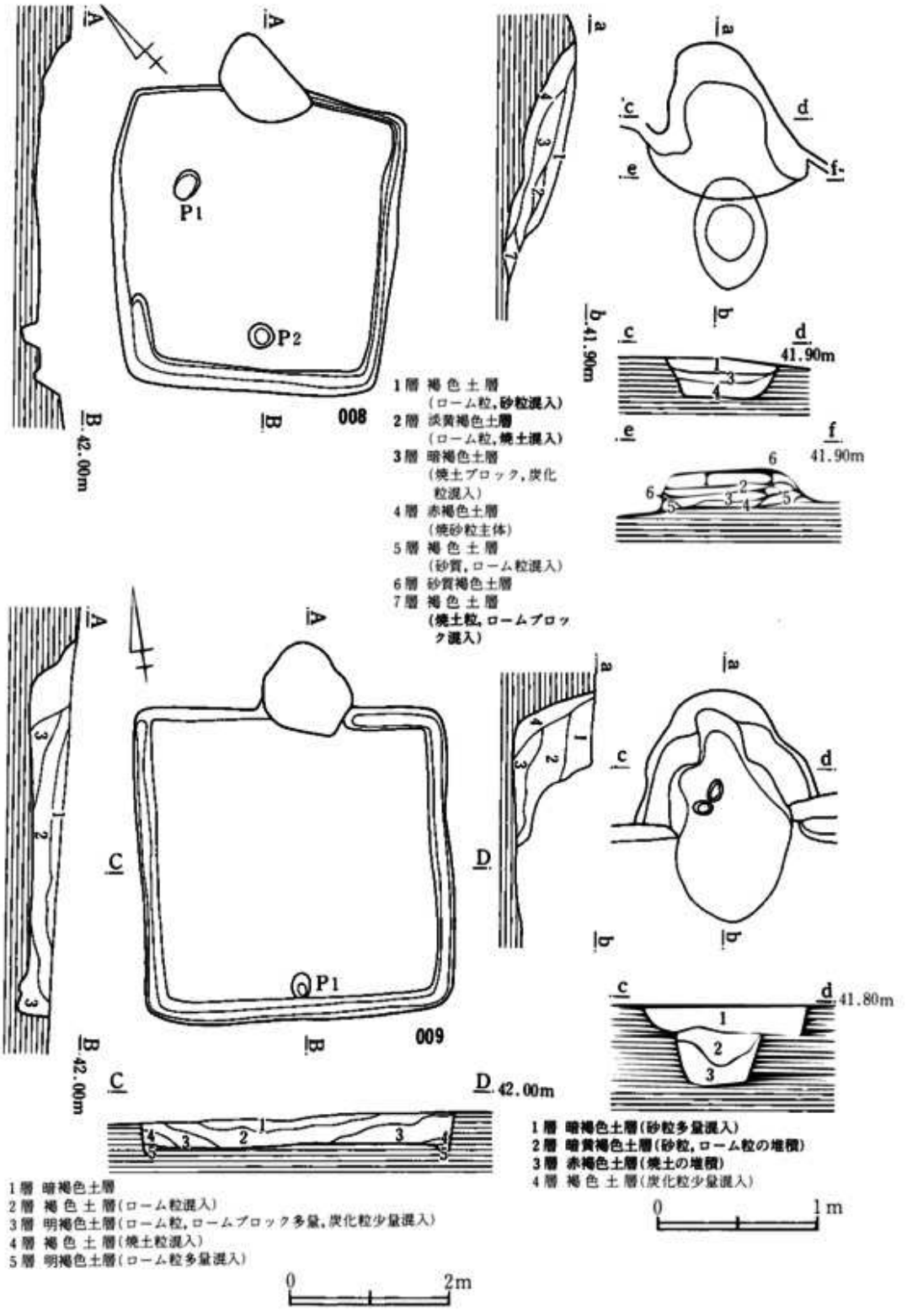
遺物の出土は少なく，カマド内より甑の底部，甕の底部が検出されたのみである。

008号住居跡（第105図，図版63－２，64－１）

Ａ７区北側中央に位置する。形態は隅丸不整方形を呈する。規模は3.8×3.5mで，カマドの主軸はＮ－53°－Ｅを指す。埋没状況をみると，住居は焼失住居と思われ，床全面に炭化材が確認でき，焼土の堆積も多い。カマドは北東壁ほぼ中央に設けられているが，遺存状態はあまり良好ではない。壁外への壁掘込みは三角形を呈し 55 cm を測る。床面への掘込みは 4 cm と浅く，楕円形を呈する。壁高は北西が高く南東に向けて低くなっており，ロームへの掘込みは北西壁が 35 cm，南東壁が 15 cm を測る。床面は中央西側が低くなっており，高低差 9 cm を測る。周溝は北東壁のカマド東側から南東壁，南西壁，北西壁西側までまわる。柱穴は２本あり，Ｐ２には柱痕が残っていた。深さは，Ｐ２＝39 cm であった。

遺物は，坏，甕片，鉄製品が覆土中から，カマド内からはほぼ完形の坏が出土したが，遺物量は少ない。

009号住居跡（第105図，図版64－２）



第105図　008号，009号住居跡実測図

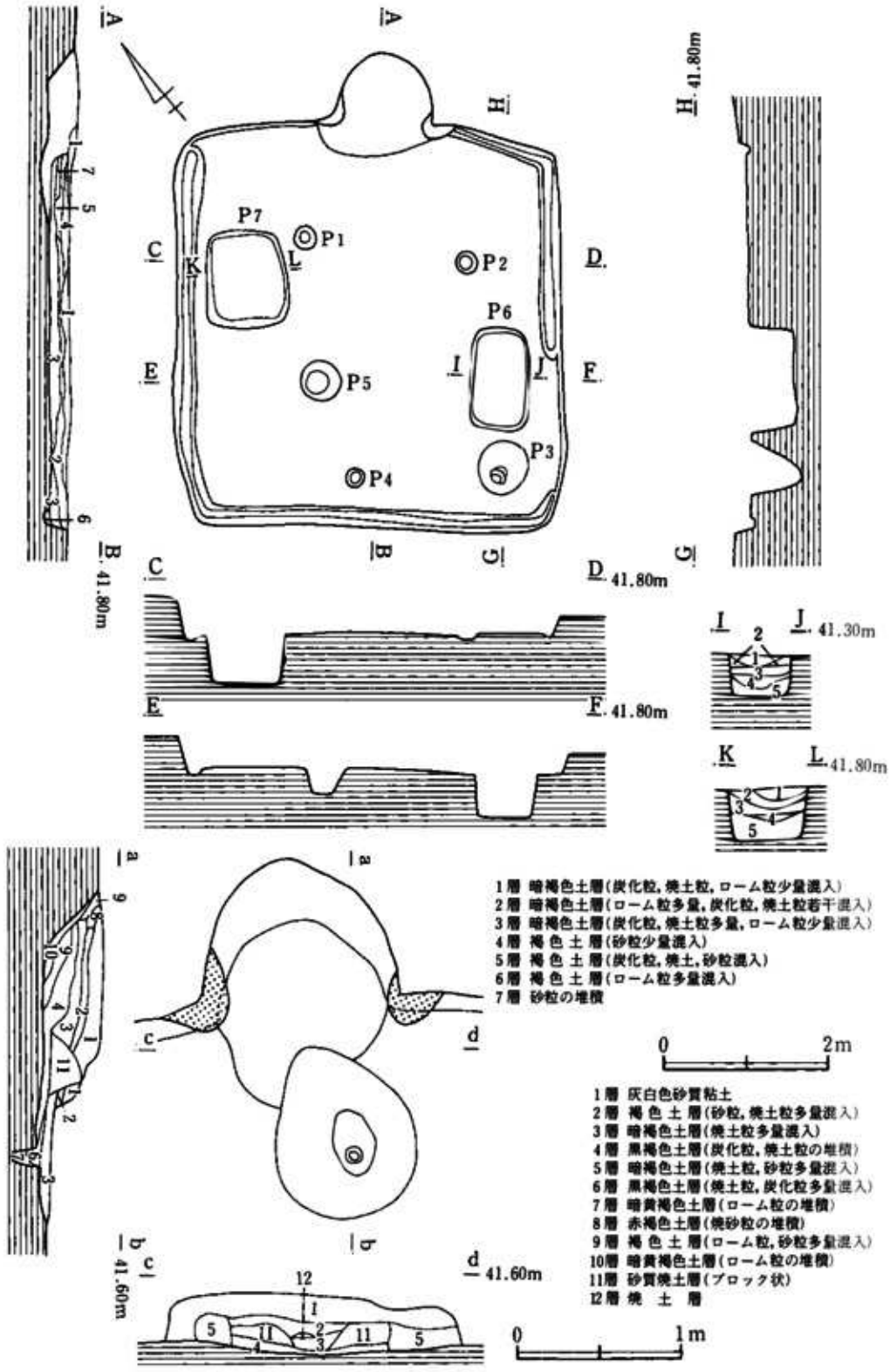
A 7 区北西側，008号住居跡から南西へ 2 mに位置する。形態は隅丸正方形を呈する。規模は，3.8×3.9m，カマドの主軸はN－9°－Eを指す。確認面はソフトローム上であった。カマドは北壁中央やや東よりに構築される。壁への掘込みの中にテラス状の段を一段もち，その段上に天井部が築かれていたものと思われる。遺存状態はあまり良好でなく，砂質粘土等はほとんど確認されなかった。壁外への掘込みは楕円形に 75 cm，火床部の床面からの掘込みは 4 cm と浅いが，テラスから火床部までは 43 cm を測る。壁高は北東隅が高く 48 cm を測り，南西隅に向けて徐々に低くなり 29 cm を測る。床面は東側が高く西側にかけて低くなり，高低差 10 cm を測る。周溝は，北壁のカマド西側を除き全周する。柱穴は 1 本で南壁に近接して設けられ，深さは 5 cm でやや窪んでいる程度である。

出土遺物は少ない。カマド内からは支脚が出土した。

010号住居跡（第106図，図版65）

調査範囲の南端，A 7 区中央やや南よりに位置する。形態は隅丸方形を呈する。規模は4.8×4.7mで，カマドの主軸はN－41°－Eを指す。住居跡確認面はソフトローム上であり，覆土は自然堆積である。カマドは北東壁ほぼ中央に設けられている。カマド前庭部に約0.8× 1 m，深さ 4 cm 程の落ち込みをもち，その内に径 13 cm，深さ 18 cm のピットが穿たれている。あるいは上部構造との関係をもつものであろうか。壁外への掘込みは楕円形を呈し，90 cm を測り，カマド下への掘込みは床面から 8 cm を測る。壁高は一定していない。北西壁が高く最高 42 cm を測り，南西壁 22 cm，南東壁 25 cm であるが，北東壁では 14 cm を測るにすぎない。床面は，中央部が若干高くなっている。周溝は，北東壁カマド西側と南東壁南側の一部を除いてまわる。ピットは 8 か所検出された。P 1 からP 5 までは柱穴で深さは，P 2 ＝7 cm，P 3 ＝61 cm，P 4 ＝7 cm，P 5 ＝32 cm である。P 6，P 7 は貯蔵穴である。P 6 は，1.2×0.8mの方形を呈し，深さは 50 cm を測る。覆土は，1 層：明褐色土層（ローム粒，ロームブロック多量，焼土粒，炭化粒少量混入），2 層：暗褐色土層(焼土粒，炭化粒多量，ロームブロック少量混入)，3 層：黒褐色土層（炭化粒，焼土粒多量，ロームブロック少量混入），4 層：暗褐色土層（ローム粒，ロームブロック多量混入），5 層：褐色土層（ローム粒多量混入）である。P 7 は，1.2×1.0mの方形プランをなし，深さは 62 cm を測る。覆土は，1 層：明褐色土層（ローム粒，焼土を少量混入），2 層：褐色土層（ロームブロック，炭化粒混入，若干砂質を帯びる），3 層：暗褐色土層（炭化粒多量，ロームブロック，焼土粒混入），4 層（焼土粒を多量，炭化粒，ロームブロック混入），5 層：明褐色土層（若干砂質を帯びる）である。

遺物は多数出土した。覆土中より，炭化した植物種子，鉄製品，灰釉陶器片 2 点，床直上より鉄器 2 点，多数の土器片，須恵器片，貯蔵穴内より完形の高台付きの皿，カマドからは須恵質甑の底部が出土している。



第106図　010号住居跡実測図

011号住居跡（第107図，図版66－1）

E5区南東隅からE6区北東隅にかけて位置し，谷の近くに位置する。形態は，隅丸長方形を呈し，規模は4.1×3.7m，主軸はN－14°－Eを指す。確認面はソフトローム上である。埋没状況をみると床面より炭化材の出土があり，床面が焼けていることから，焼失住居と考えられる。覆土は自然堆積で5層に分けられる。カマドは北壁中央やや東よりに設けられ，袖部の残存は良好ではあるが西方向へ破損を受ける。天井部は崩落しており，火床部，火袋部は焼土の形成もあまり良好ではない。壁外への掘込みは 32 cm，カマド下の掘込みは床面から 6 cm を測る。壁高は北東隅が高く 33 cm を測り，南西隅では 12 cm を測る。床面はほぼ平坦であるが，中央南側付近と，西壁南よりに木の根の攪乱を受ける。周溝は全周し，幅 15～20 cm，深さ 11～33 cm である。柱穴は5本検出されるが，掘込みが浅くはっきりとしていない。深さは，P1＝8 cm，P2＝12 cm，P3＝10 cm，P4＝17 cm，P5＝9 cm である。P6は深さ 10 cm を測り，不整形のプランを呈する。覆土には砂（カマド砂）が充満しているが，遺物は検出できなかった。性格は不明である。

遺物の出土はあまり多くない。覆土から坏片，甕片が出土している。

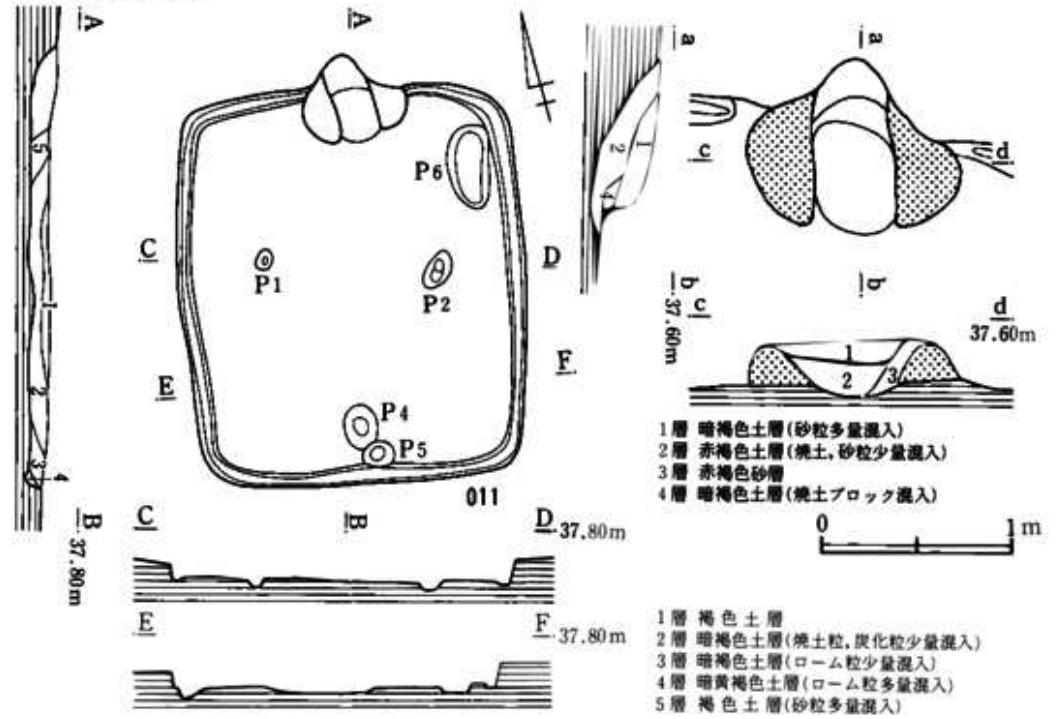
012号住居跡（第107図，図版66－2）

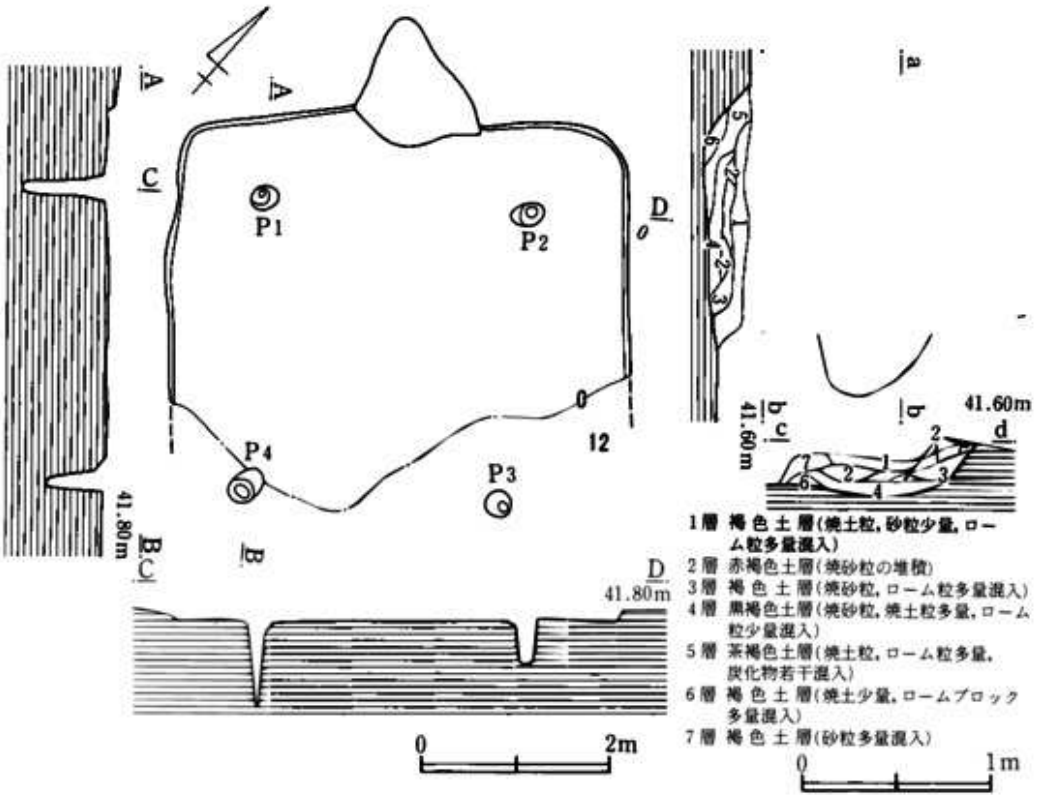
A7区北東，008号住居跡から南東に2m，010号住居跡から北東3mに位置する。住居の壁は削られており，南東壁はまったく残存しない。柱穴が4本対角線に2.9×3mの間隔で並び，残存する壁等から推定すると4.9×4.8mの隅丸方形を呈すると思われる。カマドの主軸はN－40°－Wを指す。ロームへの掘込みはきわめて浅い。中央からカマド付近にかけて若干の遺物が残るのみであった。カマドは，北西壁中央やや北よりに設けられているが，遺存はあまり良好ではなく袖はほとんど残っていない。壁への掘込みは三角形を呈し，97 cm を測る。壁高は残存している北西壁で 9 cm，南西壁で 10 cm，北東壁で 12 cm を測るが，本来はもっと高かったと考えられる。床面はほぼ平坦である。周溝はみられない。柱穴は4本あり，深さはP1＝88 cm，P2＝48 cm である。P3，P4は床面も削平をうけているため正確な深さは不明であるが，掘込みは深くしっかりとしている。P4の現存高は 61 cm を測る。

遺物は，住居中央からカマド付近にかけて少量出土し，カマド内からは支脚，甕片が出土した。

013号住居跡（第108図，図版67－1）

D4区東端とE4区西端の接する中央部分で，南西より入り込む谷の頭部に位置する。形態は隅丸不整形を呈する。規模は2.9×2.7m，カマドの主軸は真東を指す。埋没状態をみると，攪乱を床面まで受けているが，プランは明確に確認できた。覆土は自然堆積である。床面に焼土の堆積，炭化材が検出され，焼失住居と考えられる。カマドは西壁ほぼ中央に位置し，ロー





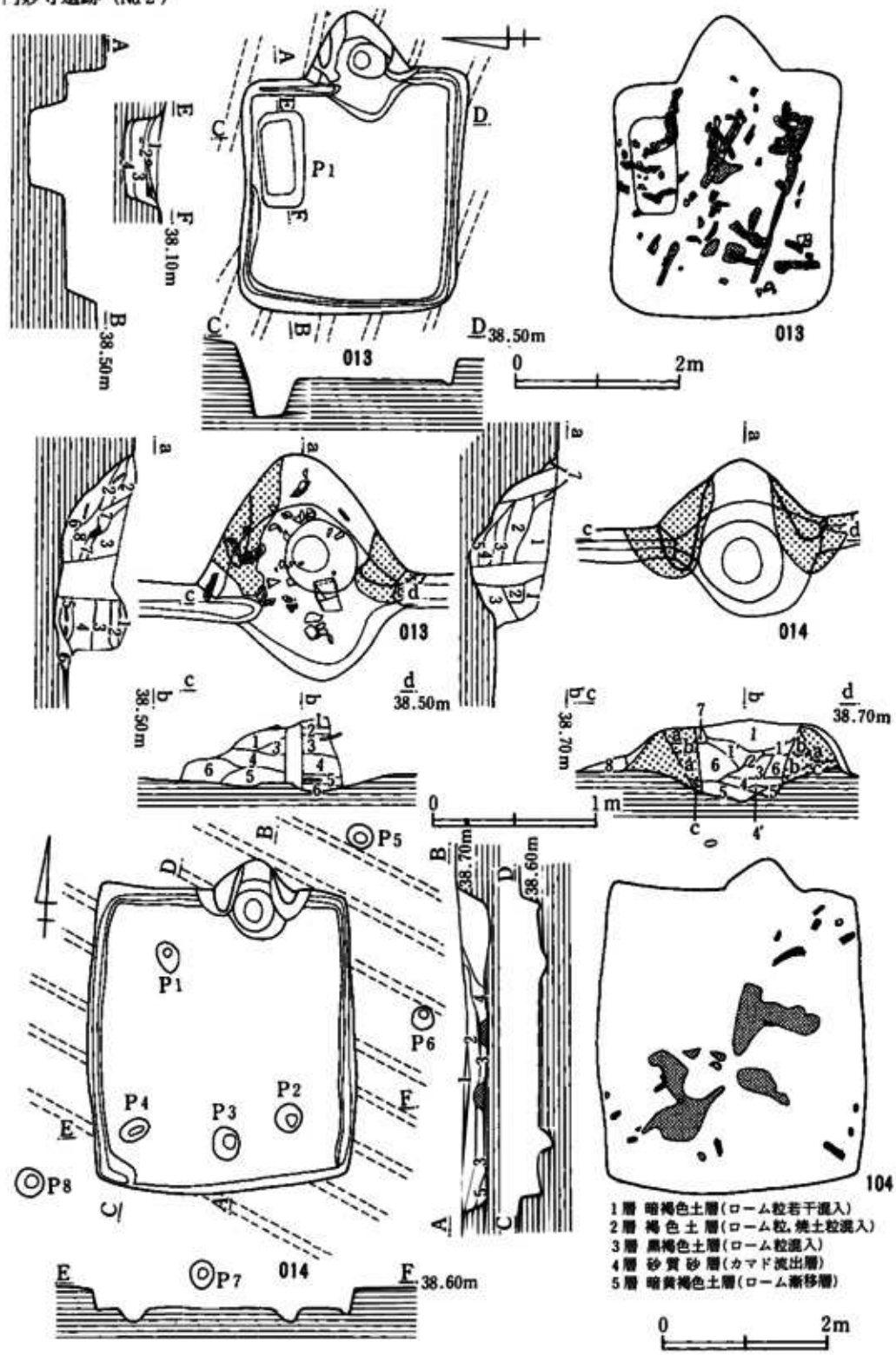
第107図　011号，012号住居跡実測図

ムを基盤とし山砂を積んで構築される。天井部は崩落している。壁への掘込みは楕円形に 65 cm 程掘込んであり，カマド下の掘込みは 10 cm を測り，ほぼ円形を呈する。カマド層位は，1 層：暗褐色土層（砂粒多量混入），2 層：砂層（砂ブロック主体），2′層：砂層（砂粒少量，焼土粒子混入），3 層：暗褐色土層（砂質を帯びる），4 層：明褐色土層（焼土粒子，炭化粒混入），5 層：赤褐色土層（焼土粒混入，炭化物混入），6 層：黄褐色土層（ローム漸移層），7 層：炭化層，8 層：焼土層（ブロック状）である。壁高は北壁が高く 45 cm を測り，しだいに南壁に向かい低くなる。南壁では 25 cm を測る。周溝は，北壁東側で途切れる他は全周する。幅 14～25 cm，深さ 4 cm 程である。柱穴はみとめられなかった。P 1 は貯蔵穴でカマドの左側に設けられている。方形のプランをなし，1.15×0.55mの規模，深さは 47 cm を測る。覆土は自然堆積である。1 層：暗褐色土層（ローム粒，炭化粒を混入する），2 層：炭化粒を主体とする層，3 層：暗褐色土層（ローム粒を若干混入する），4 層：黄褐色土層（ローム漸移層）である。

遺物は多数出土した。住居の上部構造と思われる炭化材のほか，ストロー状の炭化物が 1 カ所に集中して出土した。甕片，坏，坏蓋，灰袖片が覆土中から出土し，床直からは須恵器・土師・くすべ焼成の甕片，坏，カマドとその付近からは，くすべ焼成の土製カマド，甑，甕，坏等が出土した。貯蔵穴からは甕，坏が出土した。墨書土器も多い。

014号住居跡（第108図，図版67－2）

F 4 区南西端に位置する。形態は方形を呈す。規模3.6×3.3m，カマドの主軸はN－15°－Wを指す。埋没状況は，攪乱を受けているが，プランは明確に確認できた。床面中央部に焼土の堆積がみられ，炭化材も散在していた。カマドは，北壁中央東よりに設けられている。天井部は崩落している。袖部は褐色土層を基盤とし，山砂を積んで構築している。カマド層位は，a 層：砂層（山砂単一層，焼土混入），b 層：暗褐色砂層（砂質焼土粒混入），c 層：褐色土層（基盤層），1 層：褐色土層（砂粒多量，ローム粒混入），1′層：褐色土層（粒子粗い，砂粒多量混入），2 層：砂層，3 層：暗褐色土層（砂粒，焼土粒若干混入），4 層：暗褐色土層，4′層：暗褐色土層（ローム粒混入），5 層：黄褐色土層（ロームブロック主体），6 層：暗褐色土層（砂質，焼土粒若干混入），6′層：暗褐色土層（焼土多量混入），7 層：砂質焼土層，8 層：砂層（袖の流出）である。壁の掘込みは 36 cm を測り半円形をなす。火床部は床面より 15 cm 程掘込まれ，ほぼ円形を呈する。壁高は 23～36 cm で北東部分が高く西側に向かって低くなっていく。床面は，多少の起伏はあるがほぼ平坦であり，中央部はよく踏み固められている。周溝は南壁を除く他の壁下にまわる。幅 9～28 cm，深さは 4～6 cm を測る。柱穴は，住居内に 4 本，住居外に 4 本を検出した。深さは，P 1 ＝7 cm，P 2 ＝16 cm，P 3 ＝26 cm，P 4 ＝15 cm，P 5 ＝22 cm，P 6 ＝19 cm，P 7 ＝18 cm，P 8 ＝17 cm を測る。住居外ピットは住居壁から 75～95 cm を測る。



第108図　013号，014号住居跡実測図

出土遺物は少ない。坏，小形甕，甕片の遺物が覆土中から出土した。

015号住居跡（第109図，図版68－1）

Ｄ４区北東に位置する。形態は隅丸不整方形を呈する。規模は3.5×3.4mで，カマドの主軸はＮ－10°－Ｅを指す。埋没状況は，攪乱を受けているが，プランは明確であった。床上に焼土の堆積がみられた。覆土は自然堆積である。カマドは北壁中央，やや東側に設けられている。天井部は崩落し，片袖は耕作により削平をうけている。壁の掘込みは半円形を呈し，46 cm を測る。火床部は床面より 10 cm 程掘込まれる。壁高は，北東隅が高く 28 cm を測り，徐々に南壁中央に向かって低くなり 17 cm を測る。西壁，北壁は 26 cm を測る。床面は，南側中央部一帯がよく踏まれ少し低くなっている。周溝はカマドのある壁面を除き「コ」の字型にまわる。柱穴は住居内に３本，住居外に３本あり，全体的に浅い。深さは，Ｐ１＝6 cm，Ｐ２＝7 cm，Ｐ３＝18 cm，Ｐ４＝32 cm，Ｐ５＝25 cm，Ｐ６＝9 cm である。

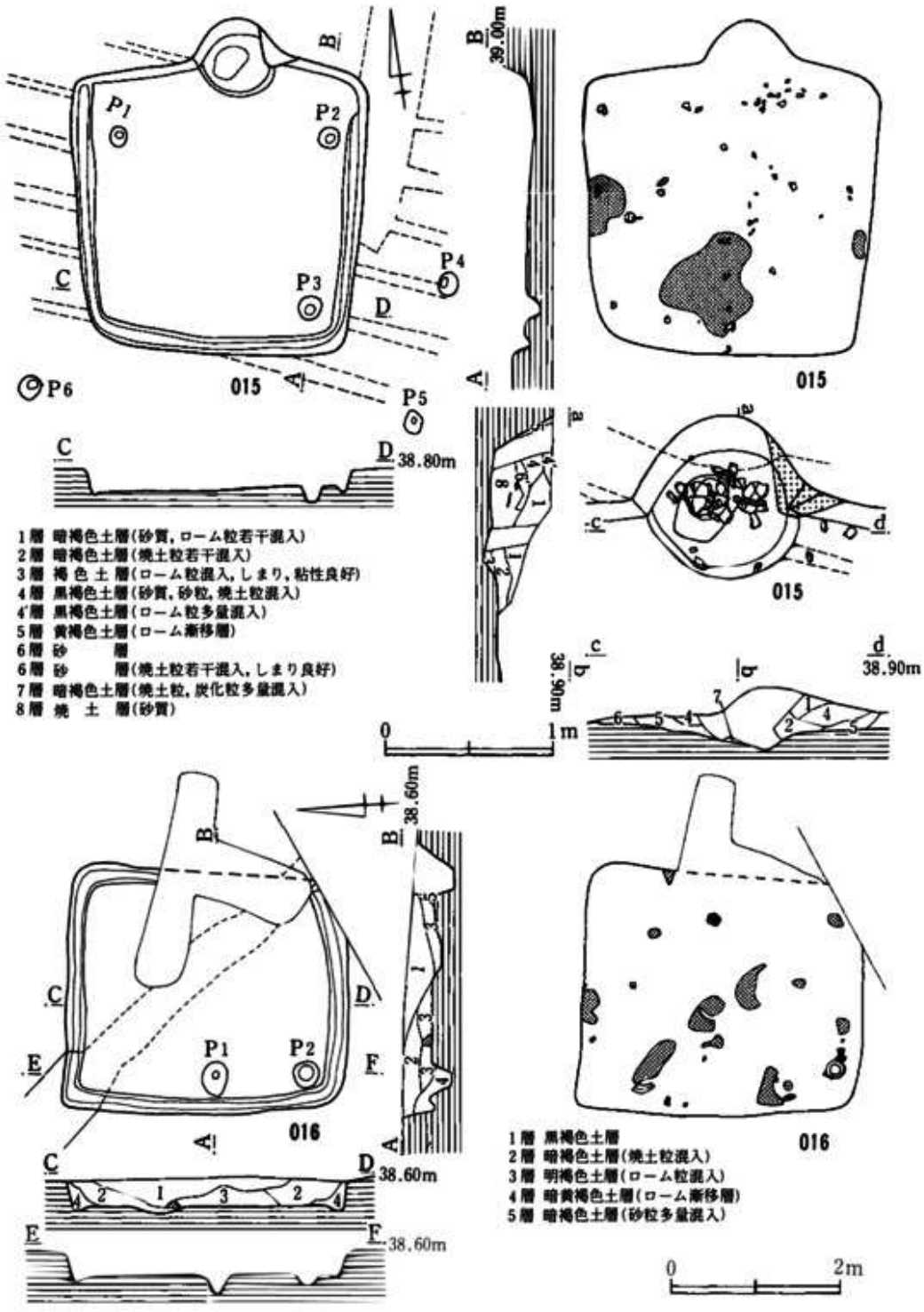
遺物は多数出土した。床直上からは坏，甕，カマドからは支脚，甕片が出土している。覆土中からは坏，甕などの破片も多く出土し，坏には，「万」の書かれた墨書土器もみられる。

016号住居跡（第109図，図版68－2）

遺跡調査範囲の東側，Ｇ４区の南側ほぼ中央に位置する。形態は，東側に削平を受けているが，隅丸方形を呈す。規模は2.9×3.4mを測る。埋没状況をみると，床面には焼土や炭化物が

第４表　円妙寺遺跡住居跡調査表

住居跡番号	平面形	床面積 (m²)	柱穴	周溝	貯蔵穴	カマド	床面高さ (m)	土器以外の遺物	備考
001	方形	A9.98 B8.36	1	有	有（北東）	A北東 B北西	41.540	剥製品(石製品(石の棒)支脚)	001前B→001A→001後B，焼失住居
002	〃	14.70	12 (壁柱穴6)	有	有（東隅）	北西	41.350	鉄製品（刀子）	101と重複
003	〃	10.06	3	有	有(南西隅)	北	41.560	土製紡錘車3，支脚，鉄製品	焼失住居
004	〃	9.30	4	有	有(南西隅)	北	41.540	支脚	テラスを有す
005	〃	7.22	4	有	－	北	91.960		
006	〃	8.27	4	有	－	北	41.660	スラグ	
007	〃	6.50	4	有	－	北	41.360		
008	〃	10.39	2	有	－	北東	41.420	鉄製品	焼失住居
009	〃	11.53	1	有	－	北	41.380	支脚Ｐ	
010	〃	18.90	5	有	－	北東	41.180	植物種子（もも？），鉄製品	
011	〃	12.14	5	有	－	北	37.420		焼失住居
012	(方形)	(22.09)	4	－	－	北西	41.500	鉄製品	南東側削平
013	方形	5.93	－	有	有(北)	東	38.000		焼失住居
014	〃	9.33	8 (住居外4)	有	－	北	38,300		焼失住居
015	〃	8.76	6 (住居外3)	有	－	北	38.520	鉄製品，砥石	
016	〃	(7.01)	2	有	－	(東)	38.22	石製品	



第109図　015号，016号住居跡実測図

少量堆積する。溝等による攪乱を受けている。カマドはみえないが，東側に大きな攪乱をうけており，またA－Bのセクションの東側に砂粒を多く混入した層（5層）がみえ，付近に砂粒を多く混入した土層があったことを考えると，東壁中央部にカマドが設けられていたと思われる。壁高は東壁が 18 cm と低いほかは 30 cm 前後でほぼ一定している。床面は，北西壁から南東壁へ対角線上に溝が走り，攪乱を受けているが，ほぼ平坦である。周溝は，全周する。幅は 18～24 cm，深さは 3～6 cm で，しっかりしている。柱穴は，住居内に 2 本みつかった。深さは，P 1＝21 cm，P 2＝13 cm である。

遺物は少ない。床直上南西部から，「くすべ」焼成の甕，北東部からは，砂岩質の石器が出土した。また西壁付近からは完形の坏が出土している。

第3節　土　　坑

101号土坑（第110図，図版72）

B 5 区北東隅に位置し，002号住居跡と重複する。縄文時代の土坑である。プランは隅丸長方形を呈したと思われるが，002号住居跡によって北東側半分が削られているため変形している。長軸方向はN－42°－Eを指す。規模は残存するところで1.8×1.0m，深さは0.7mを測る。埋没状況をみると，002号住居跡と重複しており，土層観察により002号住居跡より古い遺構であることが判明した。壁面は北東側半分が002号住居跡によって切られているため住居内には残っていない。底面は北側で低くまた中央でやや窪む。遺物は出土していない。

102号土坑（第110図，図版72）

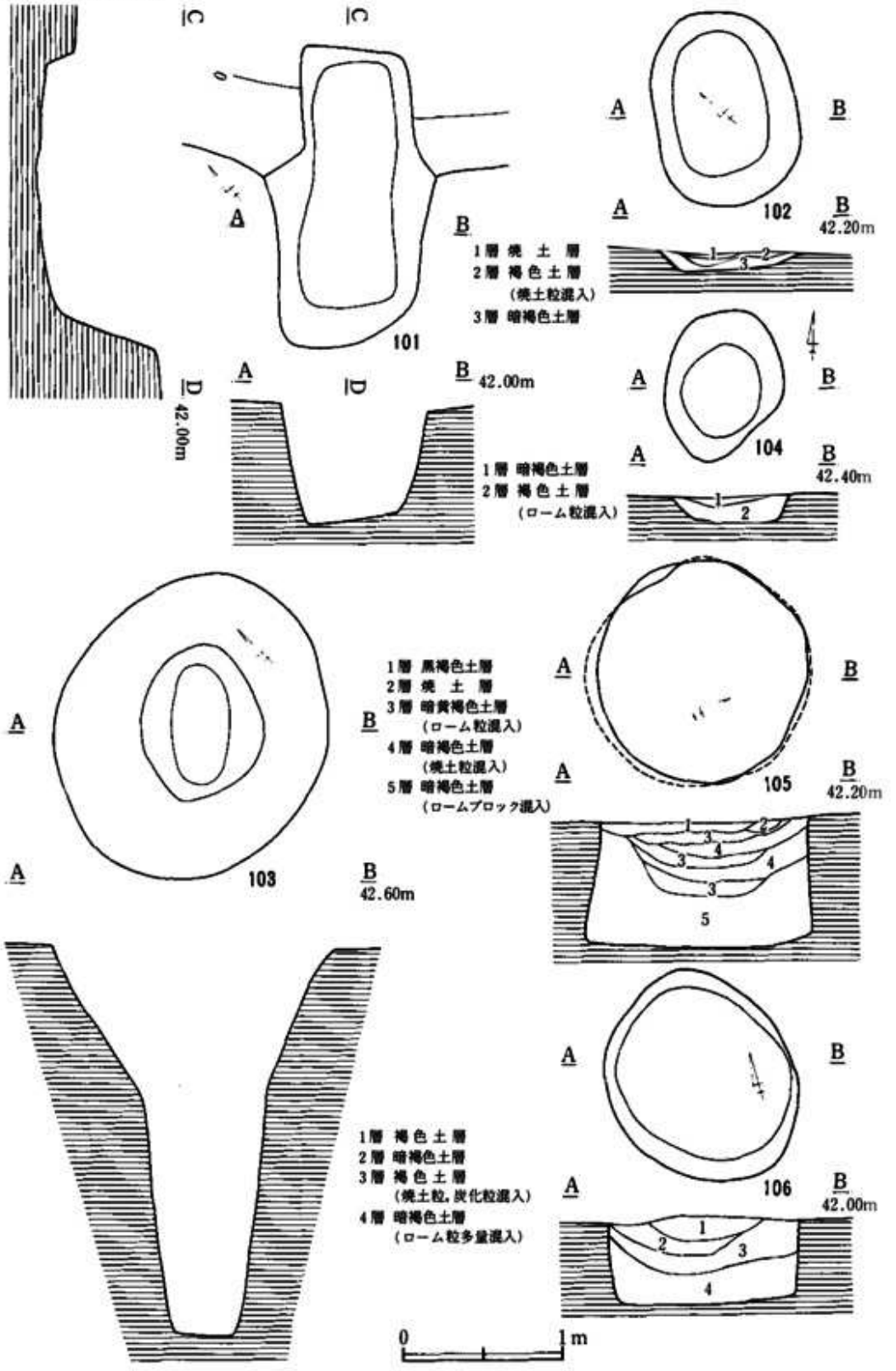
B 5 区ほぼ中央に位置する。平安時代の土坑である。プランは楕円形を呈し，長軸方向はN－41°－Eを指す。規模は1.2×0.9m，深さは0.1mを測る。確認面はソフトローム上面であった。埋没状況をみると，焼土の中に遺物が入り込んでいる状態であった。覆土は，3層に分けられる。底面は平坦である。遺物は，覆土中より土師器片が数点出土している。

103号土坑（第110図，図版72）

A 6 区北西に位置する。縄文時代の陥し穴と思われる。楕円形を呈し，長軸方向はN－47°－Eを指す。開口部長径1.8m，短径1.7m，底部長径0.8m，短径0.4m，深さ2.3mを測る。床面はほぼ平坦で，壁は鋭角に立ち上がり，上部でラッパ状に開口する。遺物の出土はない。

104号土坑（第110図，図版72）

A 6 区中央やや西よりに位置する。平安時代の土坑である。不整楕円形を呈し，長軸方向はN－18°－Eを指す。長径 95 cm，短径 70 cm，深さ 18 cm を測る。遺物は土坑最上部から須恵器片，土師器片，灰釉陶器片が出土した。確認時に上部を削りすぎている可能性が強く，本来もっと上から掘り込まれていたものと思われ，これらの遺物は底の方に位置していたと考え



第110図　101号～106号土坑実測図

られる。

105号土坑（第110図，図版72）

A 6 区東やや南よりに位置する。ほぼ円形をなし，底部は開口部よりやや大きく断面形は台形を呈す。開口部径1.3m，底部径1.4m，深さは0.8mを測る。確認面はソフトローム上であった。底面は平坦で壁はオーバーハングして立ち上がる。遺物は，覆土中上位に縄文土器片数点と，須恵器片，灰釉陶器片各 1 点が出土した。

106号土坑（第110図，図版72）

A 7 区北端中央，008号住居跡の北 2 mに位置する。不整楕円形を呈し，長軸方向はN－29°－Wを指す。開口部長径1.3m，短径1.2m，底部長径1.1m，短径0.95m，深さは0.5mを測る。底面は平坦で壁は垂直に近く立ち上がる。遺物は，覆土上位で須恵器片，土師器片数点，中位で完形の坏（土師器），長頸瓶口縁（灰釉）が出土した。

107号土坑（第111図，図版72）

A 7 区北側ほぼ中央に位置する。平安時代の土坑である。不整長方形を呈し，長軸方向はN－9°－Eを指す。108号土坑と重複しており，推定1.2m×0.8mの規模を呈するものと思われる。深さは0.6mを測る。土層観察により107号土坑が108号土坑を切っており，108号土坑より新しい遺構であることが判明した。また，107号土坑の西壁は，108号土坑の壁を利用していたこともうかがえる。遺物の出土はない。

108号土坑（第111図，図版72）

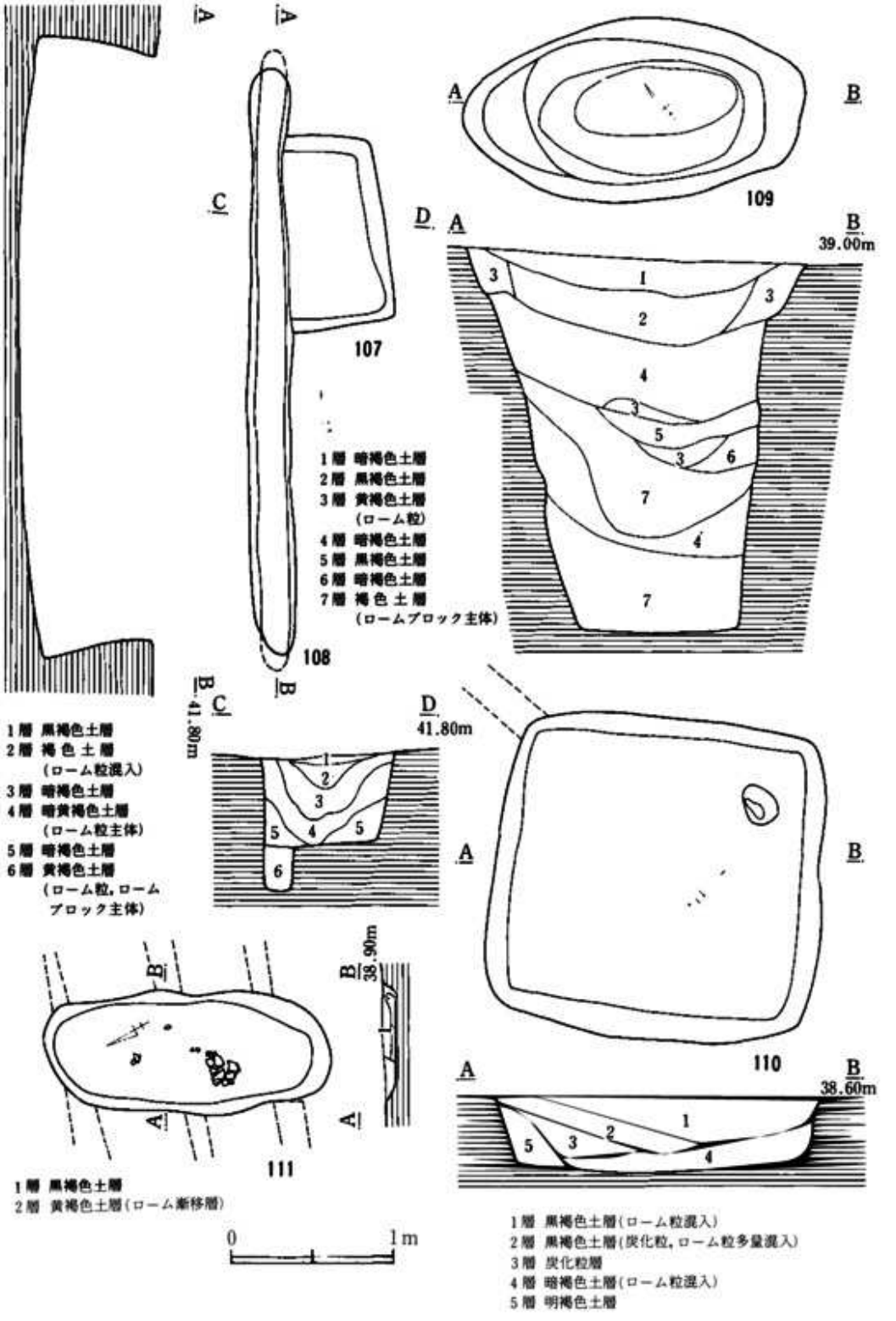
A 7 区北側中央，008号住居跡，107号土坑と重複する。縄文時代の陥し穴と考えられる。細長い楕円形を呈し，長軸方向はN－11°－Eを指し，断面は長軸面では袋状に広がり，短軸では，「U」字形を呈する。開口部長径3.6m，短径0.25m，底部長径3.8m，短径0.17m，深さは0.8mを測る。埋没状況をみると，008号住居跡，107号土坑に切られており，両遺構よりも古いことがわかる。底面は溝状をなし，東壁，西壁ともに垂直に近い壁を有し，北端，南端の壁はオーバーハングしている。遺物は出土していない。

109号土坑（第111図，図版73）

C 3 区南東端，C 4 区北東端に接して位置する。縄文時代の陥し穴である。楕円形を呈し，長軸方向は，N－52°－Eを指す。開口部長径2.1m，短径1.2m，底部長径1.0m，短径0.4m，深さは2.3mを測る。底面は水平で壁は鋭角に立ち上がる。出土遺物はない。

110号土坑（第111図，図版73）

G 4 区中央南より，016号住居跡より北 2 mに位置する。時期は不明である。形態は隅丸正方形を呈する。2.0×2.0mの規模で，深さは0.5mを測る。埋没状況をみると，全体的に攪乱的土層である。底面は中央が少し窪んでいるがほぼ平坦で，P 1 付近の底面に一部分焼けた跡がみ



第111図　107号～111号土坑実測図

られた。Ｐ１は不整形であり，深さは 56 cm を測る。遺物の出土はない。

111号土坑（第111図，図版73）

Ｅ４区北西隅，015号住居跡から３m東に位置する。平安時代の土坑である。平面形は楕円形を呈し，長軸方向はＮ－33°－Ｅを指す。長径1.8m，短径0.7m，深さ0.1mを測る。確認時に上部に土器の出土があり，存在を予想させた。検出時に上部をけずりすぎ，本来はもっと深かったものと考えられる。底面は平坦であるが，耕作による攪乱を受けている。遺物は，坏，土師器片が十数点出土した。

112号土坑（第112図）

Ｆ４区北側ほぼ中央，014号住居跡から５m東に位置する。時期は不明である。形態は不整楕円形を呈し，長軸方向はＮ－70°－Ｅを指す。規模は，長径2.3m，短径1.1m，深さは0.3mを測る。覆土は２層に分かれる。１層：黒褐色土層(粒子細かく粘性不良，ローム粒混入)，２層：黄褐色土層(ローム漸移層)である。遺物の出土はない。

113号土坑（第112図，図版73）

Ｆ４区西側中央，014号住居跡から４m北に位置する。時期は不明である。形態は不整楕円形を呈し，長軸方向はＮ－49°－Ｅを指す。規模は長径2.3m，短径1.5m，深さは0.4mを測る。覆土は，１層：黒褐色土層（粒子細かく粘性不良），２層：黄褐色土層（ローム漸移層）である。遺物は出土していない。

114号土坑（第112図，図版73）

Ｆ４区ほぼ中央，014号住居跡から６m北東に位置する。時期は不明である。形態は不整楕円形を呈し，長軸方向はＮ－85°－Ｅを指す。規模は長径1.4m，短径1.0m，深さ0.3mを測る。遺物は出土していない。

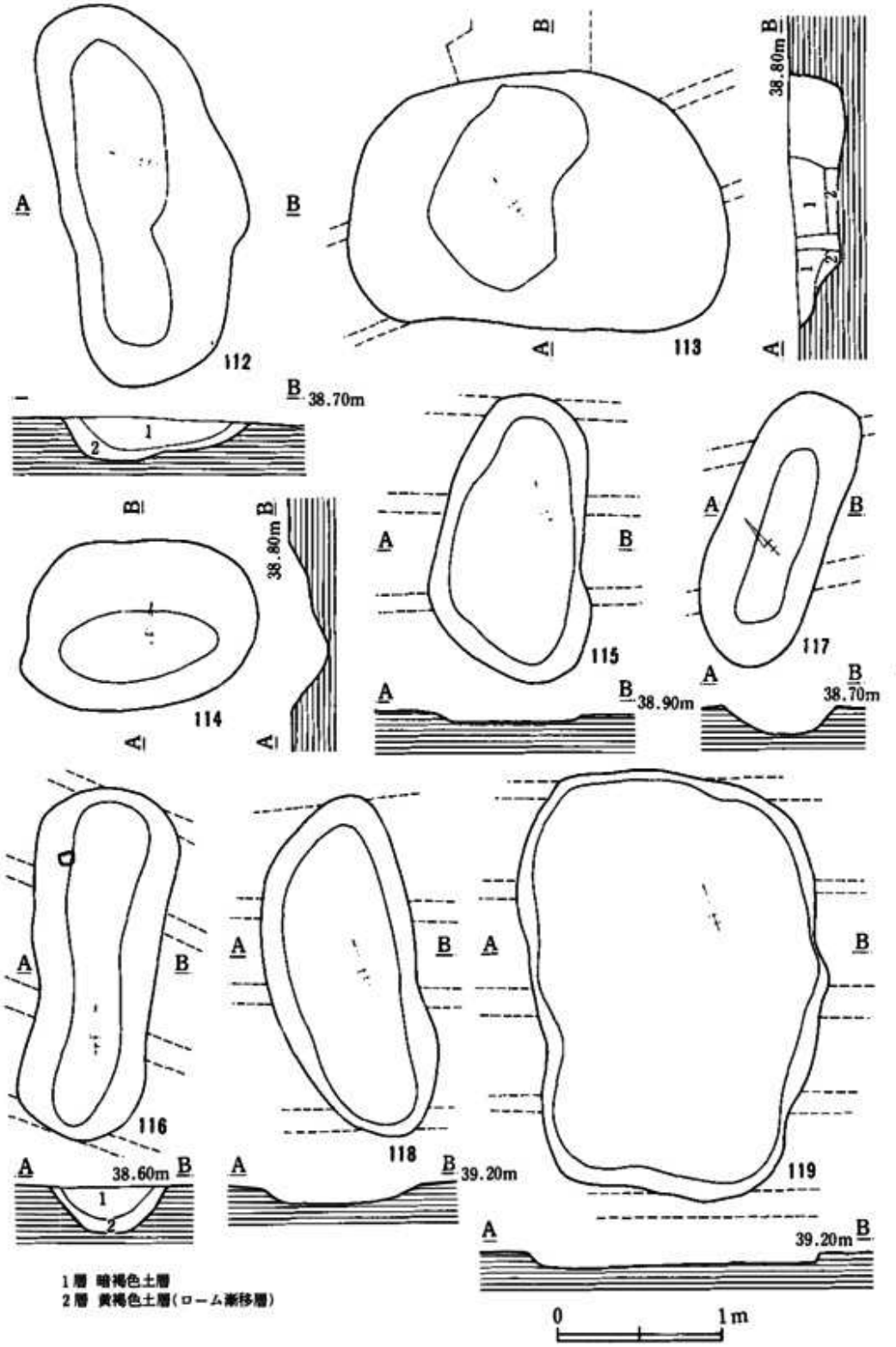
115号土坑（第112図，図版73）

Ｆ４区北西に位置する。時期は不明である。形態は不整楕円形を呈し，長軸方向はＮ－27°－Ｅを指す。規模は長径1.7m，短径0.9m，深さは0.1mを測る。底面は平坦で非常に浅い。遺物は出土していない。

116号土坑（第112図，図版73）

Ｄ４区中央よりやや北東より，015号住居跡から３m南，016号住居跡から５m北西に位置する。縄文時代の土坑である。形態は不整楕円形を呈し，長軸方向はＮ－９°－Ｅを指す。規模は長径2.1m，短径0.8m，深さは0.3mを測る。覆土は２層に分けられる。１層：暗褐色土層(粘性あり，しまり不良)，２層：黄褐色土層（ローム粒子混入）である。遺物は，縄文式土器が１点壁際から出土している。

117号土坑（第112図，図版73）



第112図　112号～119号土坑実測図

D 4 区中央やや北より，015号住居跡から 4 m南西に位置する。時期は不明である。形態は不整楕円形を呈し，長軸方向はN－64°－Eを指す。規模は長径1.7m，短径0.7m，深さ0.2mを測る。遺物は出土していない。

118号土坑（第112図）

E 3 区北東に位置する。時期は不明である。形態は楕円形を呈し，長軸方向はN－10°－Eを指す。規模は長径2.0m，短径0.9mを測り，深さは0.1mと非常に浅い。遺物は出土していない。

119号土坑（第112図）

E 3 区中央北東よりに位置する。時期は不明である。形態は隅丸不整長方形を呈し，長軸方向はN－23°－Eを指す。規模は長径2.5m，短径1.8m，深さは0.1mを測る。底面は浅く平坦である。遺物の出土はない。

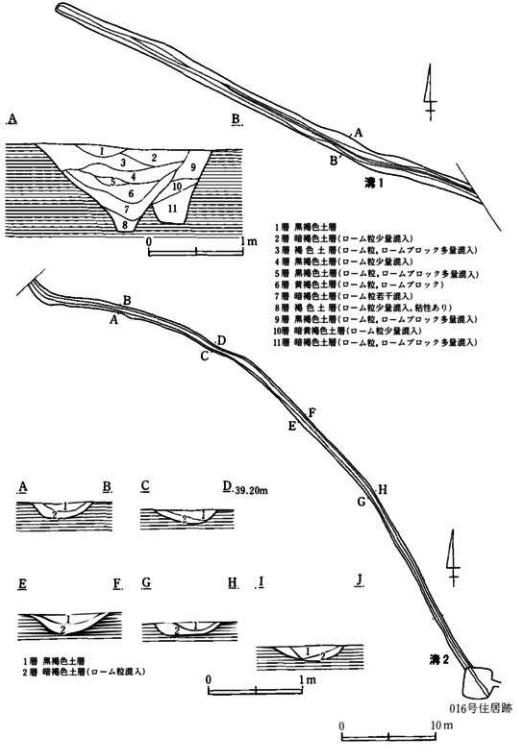
第 4 節　溝 状 遺 構

溝 1（第113図）

D 4 区の南側からD 5 区北東端にかかり，E5区北西端から西端中央，F 5 区の中央を通り調査区域外へ走る。規模は上端1.3～2.0m，下端0.4～1.4m，深さ0.75～0.85m，現存長は48.5mを測る。確認面はソフトローム上面である。溝は掘り直しが行われている。重複する遺構はない。歴史時代に属すると思われる。遺物は覆土中より若干の土師器片，須恵器片が出土した。

溝 2（第113図）

E 2 区南側よりE 3 区北東隅を通り，F 3 区北西端から南東端，F 4 区北東隅からG 4 区北西端から016号住居跡を切って調査区域外に走る。本跡西端，東端ともに調査区域外に続いている。規模は上端0.5～1.3m，下端0.2～0.5m，深さは0.1～0.2m，現存長は68mを測る。時期は，016号住居跡を切っていることから，すくなくとも016号住居跡よりは新しく，歴史時代と考えられる。遺物は覆土中よりナイフ形石器が出土しているが，本跡とは直接関係しない。



第113図　溝１，２実測図

第3章　遺　　物

第1節　先土器時代遺物（第114図・第115図，図版74）

調査区東側F5区を中心として出土した先土器時代の遺物は，尖頭器3点，エンドスクレイパー2点，石核1点，剥片1点，小礫1点の合計8点であった。出土層位は，第2層の暗褐色土層下部から第3層のソフトローム層中にあり，層位的に縄文時代草創期の可能性もあったが，尖頭器も草創期に普遍的に出土する有舌尖頭器ではなかった。技法的にも石核から縦長の長剥片を剥離するという技法を用いており，先土器時代の遺物と考えられる。また，この遺物群のひとつと思われるスクレイパーが溝2の攪乱中より出土している。

尖頭器（第114図1～3，図版74）

1，2は最大幅が胴下半分にあり，両側縁先端部及び基部を両面にやや大まかに調整剥離を施す，所謂，木葉形の尖頭器である。細部調整を側縁から全面に施す。

3はやや大型の尖頭器で，形態も1・2と同様に木葉形を呈す。縦長の長剥片を利用し，先端部，基部，及び両側縁に丁寧な細部調整を施す。一方の側縁は，かなり微細に調整を全縁に施すが，もう一方は，先端部の調整が全くみうけられない。裏面には，先端部と基部に若干の加工を施すのみで，主要剥離面をほとんど残している。形態，及び，整形調整等から考えると尖頭器と考えられよう。しかし，一方の側縁にかなり微細な調整を施している為，ナイフとしての機能も十分に考えられまいか。

エンドスクレイパー（第114図4・5，図版74）

4は最大幅が刃部側にある，所謂，狭基のエンドスクレイパーで，刃部の輪郭が弧状を呈す。調整が両側縁に及び，基部を若干尖頭状に加工している。裏面は基部に若干の加工が認められる。あるいは，基部をドリルとして使用したのかもしれない。断面は三角形を呈す。

5は最大幅が基部にある，所謂，広基のエンドスクレイパーである。刃部の輪郭は弧状を呈す。調整は刃部と両側縁に若干のリタッチを施す。裏面の調整は全く認められない。刃部の断面は三角形を呈す。

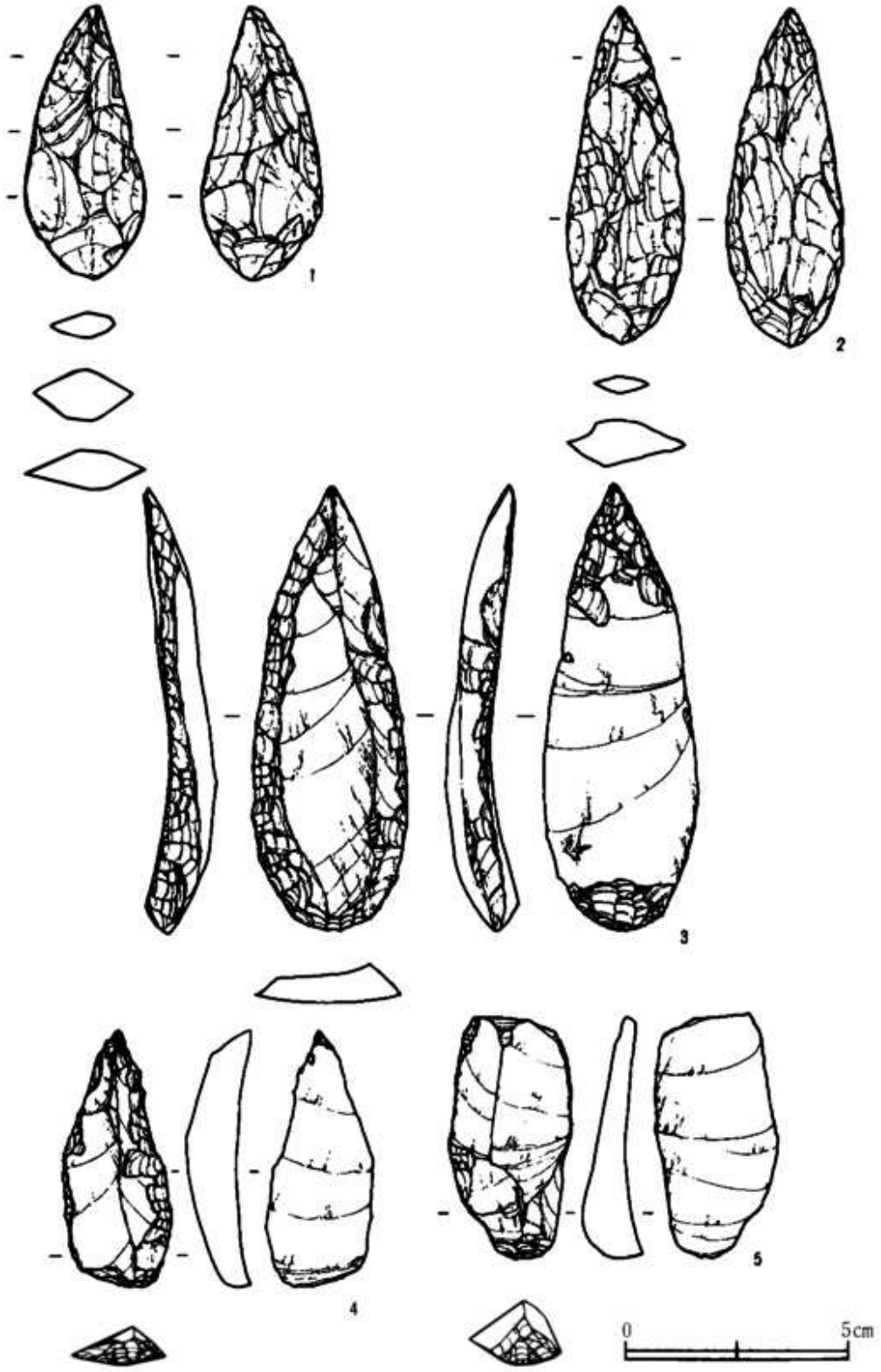
石核（第115図6，図版74）

6は縦長の剥片を剥いだ剥片石核である。正面には2ケ所に縦長の剥片剥離面が認められる。石器としての調整剥離はみうけられないが，下端に若干の刃こぼれが認められる。また，上端は打面調整を施した剥離面が認められ，数ケ所に打点が認められる。

その他（第115図7～9，図版74）

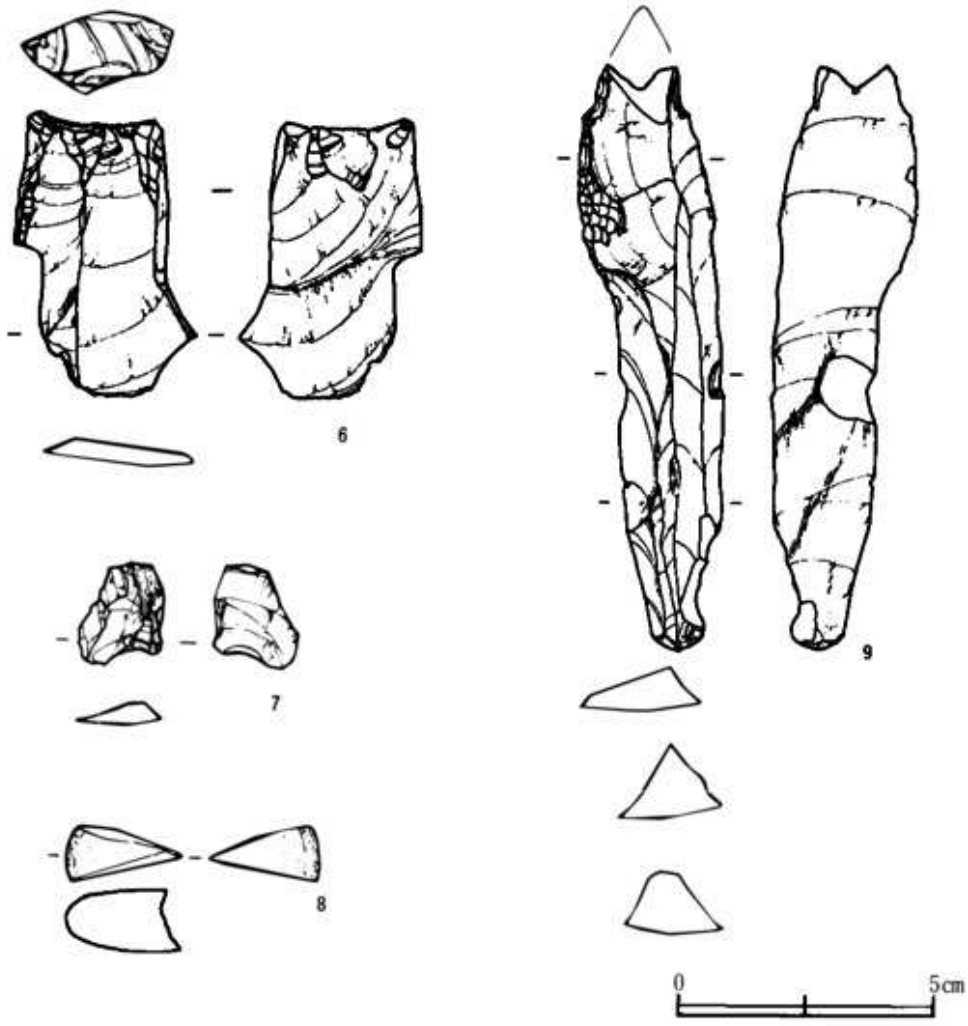
7は石器製作時に剥離したと思われる剥片である。

8は小礫で，自然面を残している。小型の円礫であったであろう。



第114図　石器実測図（1）

9は先土器時代の所産と思われる縦長のスクレイパー，あるいはリタッチドフレイクであろう。G4－21グリット，溝2の覆土上面から出土した。溝は歴史時代に属し，石器は原位置をとどめていない。F5区より集中して出土した先土器時代の石器群からは若干離れてはいるが，縦長の剥片を作出する剥離技法は先土器時代の技法に近い。表面には縦長の剥片を数片剥いだ痕跡がみられる。先端部は欠損しているが尖頭状を呈すと考えられる。先端部の一方の側縁にはリタッチが認められる。基部の調整は全くみられない。裏面は主要剥離面を残す。断面は三角状を呈す。



第115図　石器実測図 (2)

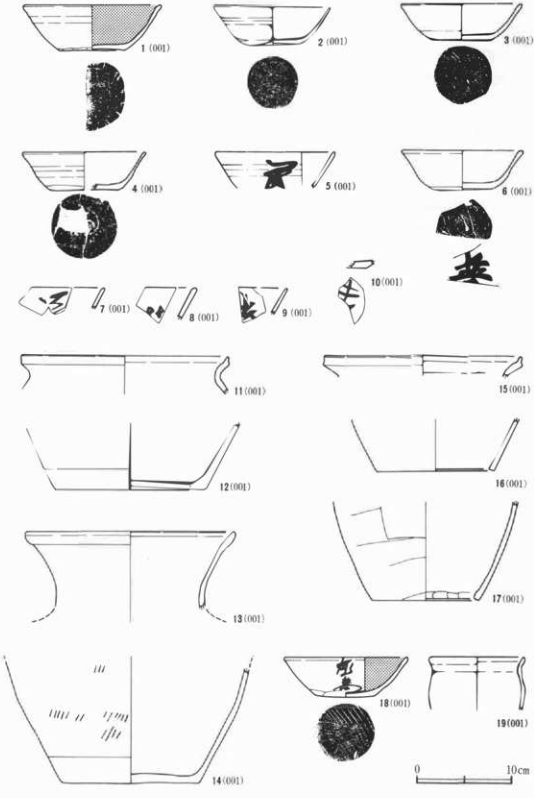
第5表　円妙寺遺跡石器計測表

挿図番号	遺物番号	器種	計測値 cm			重量g	石質
			長さ	幅	厚		
第114図1	F5－04，0004	尖頭器	6.2	2.75	1.1	13.65	安山岩
2	F5－04，0002	尖頭器	7.65	2.6	1.0	20.24	安山岩
3	F5－14，0003	尖頭器	9.9	4.1	1.1	35.59	硅岩
4	F5－04，0006	エンドスクレイパー	5.7	2.4	1.15	10.24	硅岩
5	F5－24，0001	エンドスクレイパー	5.4	2.8	1.1	11.78	硅岩
第115図6	F5－04，0005	石核	5.3	3.0	1.6	20.22	硅岩
7	F5－04，0007	剥片	1.1	1.6	0.45	0.77	砂岩
8	G5－00，0008	礫片	(1.0)	(2.2)	(1.3)	(2.54)	砂岩
9	溝2，攪乱中	スクレイパー	11.4	2.6	1.4	33.09	硅岩

第2節　住居跡出土遺物

001号住居跡（第116図，図版75，80）

1～6，18は坏で，2は完形，3はほぼ完形，18は⅓程欠損，他は½以上欠損する。全てロクロ整形である。1は体部外面ナデ，下端ヘラケズリ，内面は黒色処理され，細かいヘラミガキが施され，底部は糸切りの後ヘラによる調整である。体部外面に若干の凹凸が残る。2は器高4.2cm，口径12.3cm，底径5.7cm，3は器高3.9cm，口径12.6cm，底径6.2cmを測る。2～6は体部外面回転によるナデ，5を除き体部下端ヘラケズリ，体部内面ナデ，底部は2が糸切り後ヘラ調整，3はヘラケズリ，4はヘラ切り後ヘラ調整，6は回転糸切りである。焼成はいずれも良好である。3の内面底に「X」の線刻，5の体部外面に墨書（字体不明）が認められる。6の底部には「普」の墨書がみられる。18は体部外面ナデ，下端ヘラケズリ，内面は黒色処理がなされ，不定方向の細いヘラミガキが施される。底部はヘラ切り後ヘラ調整である。体部に墨書が認められるが，文字は判読できない。7～10は墨書土器片である。10は「法」であろうか。他の文字は判読できない。11～15は甕で，口縁部，胴部下半～底部にかけてのみ遺存する。11，15は，肩部から大きく外反する口縁は口唇部で外面に凸部を作り，直立する。肩部ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ，口唇部つまみヨコナデ，内面ナデにより調整される。12は凹面を持つ底部から強く立上がり，ほぼ一様な器厚で開いていく。胴部叩きの後ヘラ調整，下端ヘラケズリ，底部ヘラ調整，内面ヨコナデによる調整である。13，14は同一個体と思われる。口頸部ヨコナデ，胴部叩き，下端ヘラケズリ，底部ヘラケズリによる調整である。16，17は甑である。どちらも底部の¼程の遺存である。16はほぼ一定の器厚をもち，胴部外面ヘラ，底部孔はヘラケズリ，内面は不定方向のナデにより調整される。17はほぼ一定の器厚を保ち，やや



第116図　001号住居跡出土遺物実測図

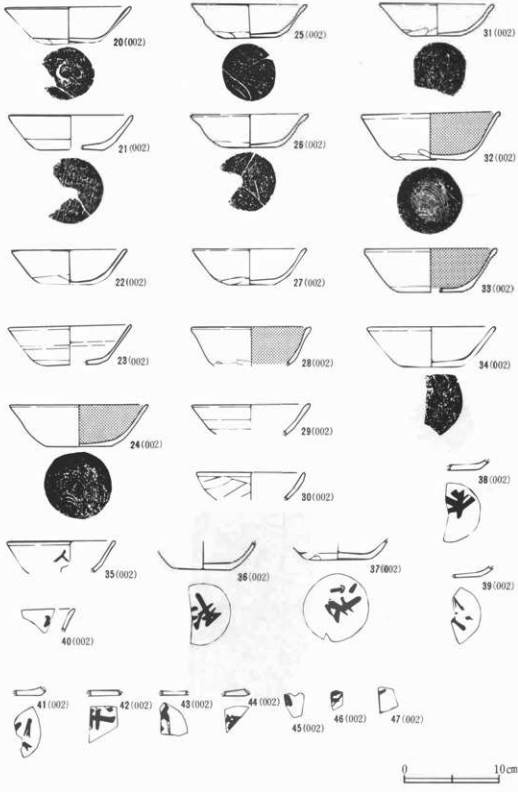
内彎しながら胴中位へのびる。胴部横位ヘラケズリ，底部孔ヘラケズリ，内面横方位ヘラナデにより調整される。19は小型甕で，⅔程欠損する。内面に稜をもつ頸部からやや外反する口縁部は端部を丸く整形し，胴部はあまり張らずにゆるやかに内彎する。胴部縦位ヘラケズリ，口頸部ヨコナデ，内面ナデによる調整である。

002号住居跡（第117，118図48～53，図版75，80）

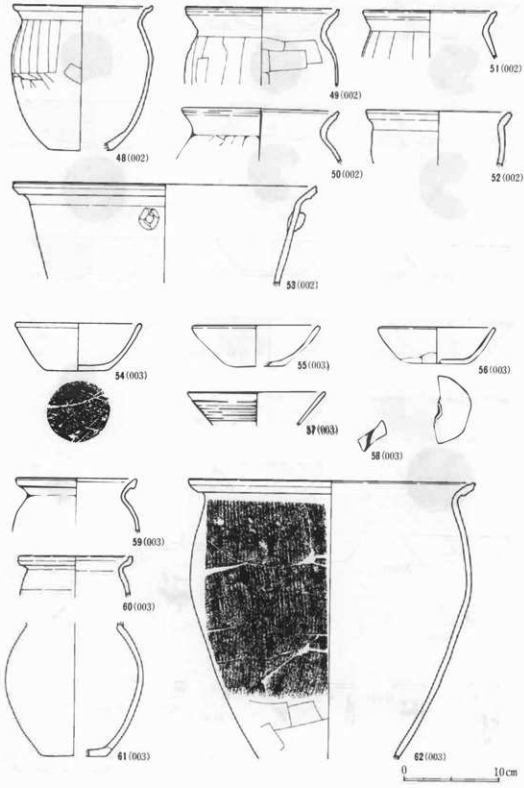
20～34は坏である。25は完形，20，32がほぼ完形である。26，31が⅓，その他は½以上の欠損である。20は器高 3.9 cm，口径 13.2 cm，底径 5.6 cm，25は器高 3.8 cm，口径 12.2 cm，底径 5.5 cm，32は器高 5.0 cm，口径 14.4 cm，底径 7.2 cm を測る。23は須恵質様の胎土と焼成である。器高 4.0 cm，口径 (12.8)cm，底径 (6.0)cmを測る。内外面に凹凸がみられ口縁はやや外反し，丸味を帯びる。体部ヨコナデ，下端ヘラケズリ，底部ヘラケズリにより調整される。23を除いて調整方法から，大きく 4 つに分けられる。（1）体部外面ヨコナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデにより調整される。底部の調整により，ヘラケズリがなされるもの（22，25～27，31），ヘラ切り後ヘラケズリがなされるもの（20），欠損のため不明（29）に分かれる。（2）体部外面ヨコナデ，下端ヘラケズリ，内面は黒色処理，ミガキが施される。底部の調整により，回転糸切り後周辺ヘラケズリ（24，32），ヘラケズリされるもの（33），欠損のため不明（28）に分けられる。（3）体部ヨコナデ，下端ヘラケズリ，内面ミガキ，底部ヘラケズリされるもの（21，34）。ただし，34は器面荒廃のため体部下端のヘラケズリは観察できない。（4）体部ヘラケズリ，内面ミガキが施されるもの(30)。35～47は坏の墨書土器片であるが，器形の判明するものは35～37の 3 点である。35は口縁部が若干肥厚し，ナデにより調整されており，体部に「人」の文字が判読できる。36は体部外面ナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデ，底部糸切り後ヘラ調整である。底部に「法」の文字が判読できる。37は体部外面ナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデ，底部糸切り後ヘラケズリによる調整である。38・39・41～46は坏の底部で，38は「太」または「衣」，39，41，42は「法」と判読できるが，他は判断できない。40は坏口縁部，47は坏体部であるが字体は不明である。48～52は甕で，体部ヘラケズリ，口頸部ナデ，内面は49がヘラケズリの他はナデによる調整である。53は甑と思われる。くすべ焼成で非常に堅緻である。口径 (32.0) cm である。口縁下につまみが相対して 2 個貼付けされると思われる。体部外面叩き，内面ナデ，口縁ヨコナデによる調整である。

003号住居跡（第118図54～62，図版75，76，80）

54～57は坏である。54は⅓，他は½以上欠損する。54～56は，体部内外面ヨコナデ，56は体部外面下端ヘラケズリが加えられる。57は体部外面ナデで細かな凹凸をもち，内面ミガキが施される。底部は54がヘラ切り後ヘラケズリ，55，56はヘラケズリにより調整される。56は焼成後，内面から外面に向けての穿孔がなされる。58は坏体部の墨書土器片で，字体は判読できな



第117図　002号住居跡出土遺物実測図



第118図　002号，003号住居跡出土遺物実測図

い。59～61は甕で，59は胴部叩きの後ナデ，口縁部内面ナデにより調整される。口縁は強く屈曲して外反し，口唇部は外面に面をなし，浅い凹面が回る。60は胴部，口縁部ナデにより調整され，胴部より強く屈曲し外反した口縁は立上がる。61は胴部中上位ヨコナデ，下位ヘラ調整，底部ヘラケズリ後ミガキ，内面ナデにより調整される。胴部中上位に最大径をもつ。62は甑と思われ，中上位に最大径をもつ。口縁部ヨコナデ，内面ナデ，胴部中上位叩き後ナデ，下半ヘラケズリにより調整される。

004号住居跡（第119図63～71，図版80）

63～67は坏で63は⅓，他は⅔以上欠損する。すべて，体部ヨコナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデによる調整である。底部は63がヘラケズリ，67は糸切り後ヘラ調整がなされる。66，67は体部外面に細かい凹凸を有す。67は体部外面に墨書が認められる。文字は「信」であろうか。68は墨書土器片で，坏の口縁～体部で，「万」の文字が判読できる。69，71は甕でどちらも¾以上欠損する。69は最大径が口縁にあり，口唇部は立上がりをみせ，胴部の張出しは弱い。口縁部ヨコナデ，胴部縦位ヘラケズリが施される。71は外反する口縁部において口唇部は外面に面をもち強い稜を有す。ヨコナデにより調整される。70は甑で口縁部のみ残存する。体部外面叩き，口縁部ヨコナデ，内面ナデにより調整される。

005号住居跡（第119図72～74，図版75）

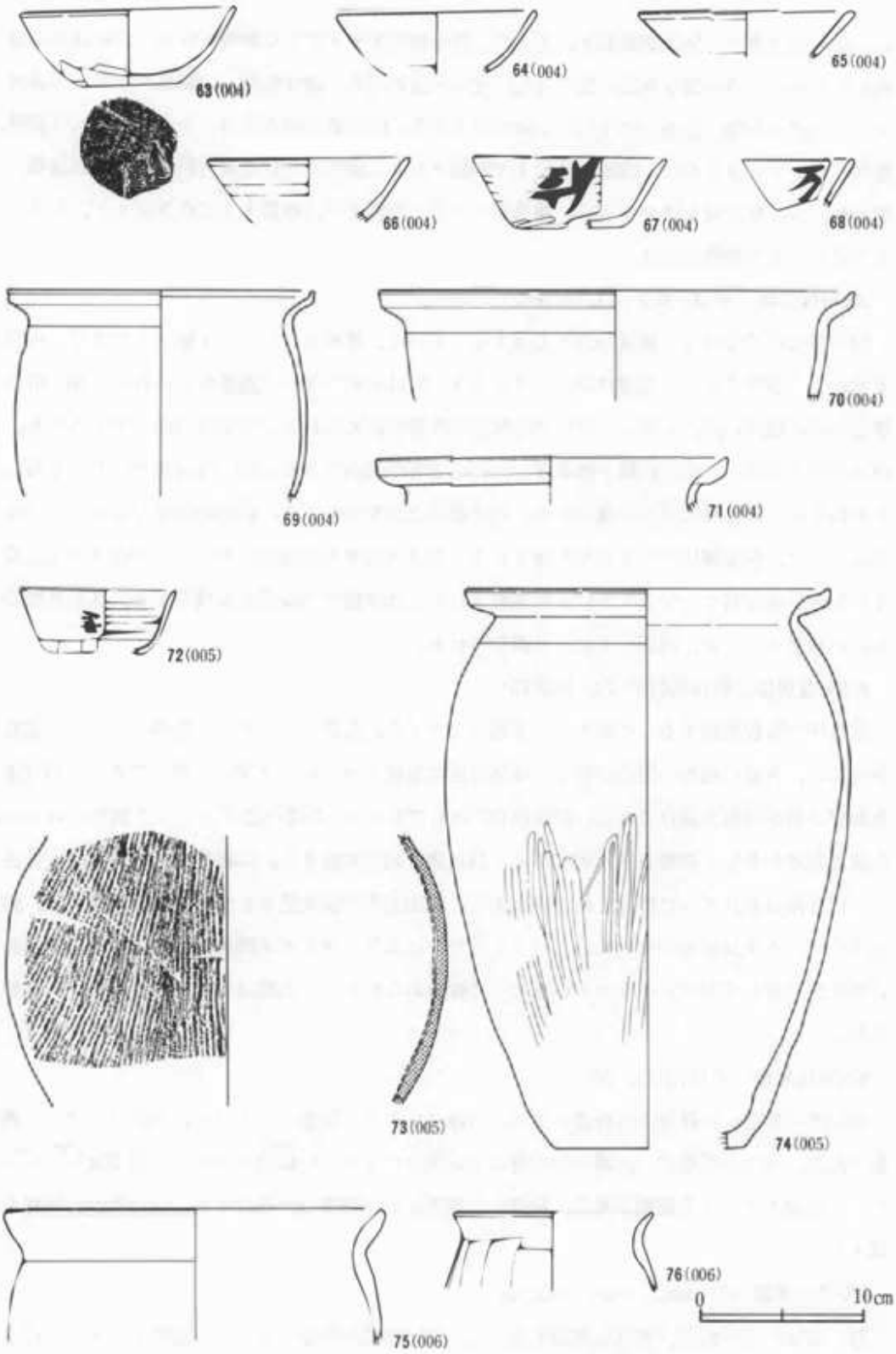
72は坏で¾程欠損する。体部ナデ，下端ヘラケズリ，底部ヘラケズリ，内面ナデにより調整されるが，内面に細かい凹凸が残る。体部外面に墨書がみられ，文字は「仲」である。73は須恵器甕で胴部⅙程の遺存である。胴部径(27)cm であろう。胴部外面叩きにより調整されるが，内面は剝離が著しく調整方法不明である。74は甕で約½欠損する。口縁部は頸部より強く屈曲し，口唇部は直立ぎみに折返されて突出する。胴部上半に最大径をもつ。口縁部ヨコナデ，胴上半ナデ，下半は縦位のていねいなヘラナデツケによりヘラミガキ様の光沢を出すが，器表面に焼土が付着しており，ヘラナデ痕をすべて確かめられない。内面はヘラケズリの後ナデが施される。

006号住居跡（第119図75，76）

75は甕で肩部～口縁部の⅓程遺存する。口縁ヨコナデ，胴部ヘラケズリ，内面ナデにより調整される。76は小形甕で，口縁～胴上部の⅔の遺存である。口縁部ヨコナデ，胴部縦位ヘラケズリ，内面ナデによる調整である。胴部から頸部にかけ肥厚し，外反する口縁に向かい器厚を減ずる。

007号住居跡（第120図77～81，図版76）

77～80は坏で77が⅓，他は½欠損する。77，79は体部内外面ヨコナデ，底部ヘラケズリにより調整されるが，77は体部下端にヘラケズリが加わる。78，80は不整の器形を呈し，ともに内



第119図　004号,005号,006号住居跡出土遺物実測図

面黒色処理，ヘラミガキがなされるが，78は体部ヨコナデ，下半ナデ，底部ヘラケズリ，80は体部ヨコナデ，下半ヘラケズリ，底部回転糸切り後ヘラケズリが施される。81は甑の胴～底部で5孔を有す。胴部縦方向ヘラケズリ，胴下端横方向ヘラケズリ，底部ヘラケズリ，中央孔ナデ，周囲孔ヘラケズリによる調整である。

008号住居跡（第120図82～92，図版76）

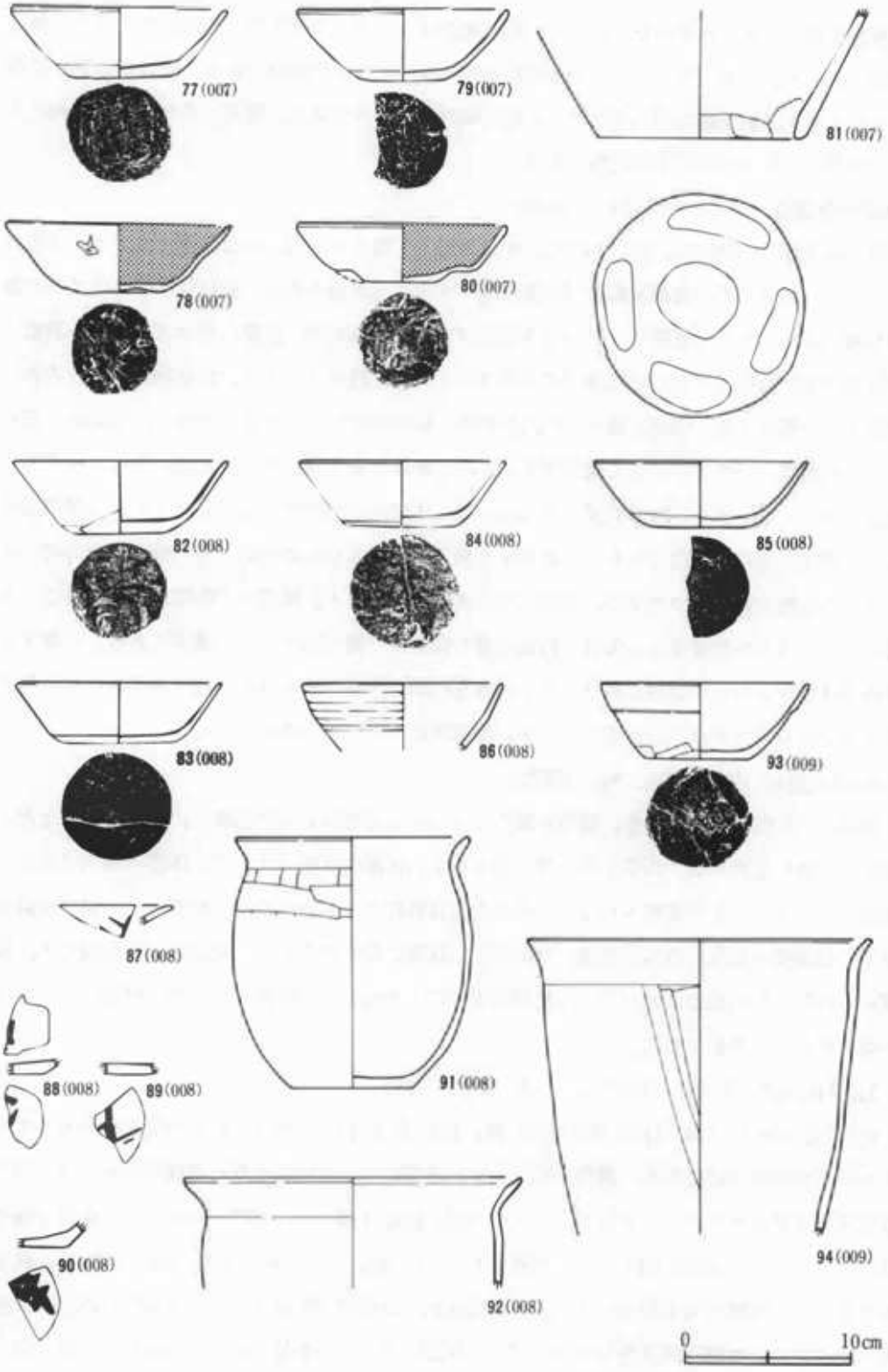
82～86は坏で，84が1/5，82，83が1/3，他は2/3以上欠損する。82，83は体部ヨコナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデ，底部回転糸切り後周囲ヘラケズリが施される。82は体部中上位でやや器厚を減じ僅かに外反し肥厚する。84は体部ヨコナデ，下端ナデ，底部ヘラケズリによる調整で，口縁部は僅かに外反する。85は体部内外面ヨコナデ，下端ヘラケズリ，底部静止糸切りの後ヘラケズリが施される。内面に細かい凹凸が残る。86は体部がゆるやかに内彎し，外面には細かい凹凸が残り，ヨコナデによる調整である。87～90は墨書土器片で，87は皿，他は坏片である。90は「古」であろうか。他は判読できない。91は比較的小形の甕で約1/3欠損する。口縁部は外反し，胴部上半に最大径をもち，肩はあまり張らずにゆるやかに内彎する。胴部は縦方向ヘラケズリの後横方向のヘラケズリ，底部ヘラケズリが施される。頸部から胴部一面にかけて，全面の1/3程にススが付着する。92は口縁部に最大径をもつ甕で図示の1/2の遺存である。内彎する口縁部は頸部において屈曲し外反する。口縁部内面に凹面が形成され，稜が認められる。胴部外面は縦位ヘラケズリ，口頸部ヨコナデ，胴部内面ナデにより調整される。

009号住居跡（第120図93，94，図版76）

93は坏で2/3程の遺存である。器厚を減じて立上がる体部は上半で肥厚し，厚さを保ちながら僅かに内彎して終わる。体部上半に強い稜を有す。体部内外面ヨコナデ，体部下端ヘラケズリ，底部ヘラケズリにより調整されるが，底部内面は磨耗による器面の凹凸が著しい。94は長胴の甕で，口縁部～胴部のみ1/3程の遺存である。口縁部に最大径をもつ。肩はほとんど張らず，頸部から外反した口縁部において，口唇部は水平に上を向く。口頸部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ，内面ナデによる調整である。

010号住居跡（第121～124図150～153，図版76～78）

95～116は坏で，104，113がほぼ完形，95，102，112は約1/3，他は1/2以上の欠損である。すべてロクロ使用で平底である。調整方法により，底部にヘラ切り痕を残し周縁手持ちヘラケズリ，体部下端手持ちヘラケズリが施されるもの（97，100，113）と，底部ヘラケズリ，体部下端手持ちヘラケズリ，体部に細かい凹凸が残るもの（95，99，102～105，109，110，112）と，底部ヘラケズリ，体部下端手持ちヘラケズリが施され，口縁部が肥厚するもの（107，108）と，底部ヘラケズリ，体部下端手持ちヘラケズリ，体部ナデにより調整され，凹凸がないもの（96，98，101，106，111，114）と，底部ヘラケズリ，体部ヨコナデにより調整されるもの（116）と



第120図　007号，008号，009号住居跡出土遺物実測図

に分けられる。115は器面が荒廃し調整技法は不明である。101，108には体部外面に墨書がみられ，108は「万」と読めるが，101は判読できない。104は器高 4.1 cm，口径 12.7 cm，底径 6.3 cm，113は器高 4.1 cm，口径 12.6 cm，底径 6.1 cm を測る。117は鉢でほぼ完形である。器高 6.9 cm，口径 17.8 cm，底径 5.8 cm を測る。底部は回転糸切り後周縁ヘラケズリ，体部ヨコナデ，下端ヘラケズリ，内面ヘラミガキにより調整される。体部には細かい凹凸が残り，底部は一部剝離している面もあり荒廃しているが，器厚はほぼ一定している。118，119は高台付皿で，118は完形で器高 3.4 cm，口径 12.1 cm，底径 5.8 cm を測り，119は90％程の遺存である。内面はヘラミガキ，外面ヨコナデによって調整される。高台は貼付けされる。118の体部外面には線刻がみられる。120は高台であるが，焼成後に底部穿孔がみられる。内面ヘラミガキ，外面，高台はナデにより調整される。121，122は皿で，どちらも½以上欠損する。ともに底部ヘラケズリ，体部内外面ナデにより調整される。122は体部上半に稜を有し，口縁部は器厚を減ずる。123～125は坏蓋で123が⅔，他は¼程の遺存である。123は天井部が窪み，ナデによって整形され，つまみが貼付けされる。124，125は器高は低く，天井部を欠損する。天井部は稜をもって折れ口縁部となり，端部は外反度を増す。126～137は坏片で墨書が認められる。126～136は体部，137は底部片である。文字は126～131が「万」と読めるが，他は判読できない。138～143は甕である。138は小形甕で，約⅖の遺存である。比較的厚い底部から立上がり，胴部上半に最大径をもつ。肩部から頸部にかけて屈曲し外反する。口縁部は肥厚し，凹面を内・外面に持つ。器厚は全体的に厚めである。焼成は良好である。140，141は⅓，他は½以上欠損する。139は口頸部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ，内面ナデにより調整される。肩部から屈曲し外反する口縁部では口唇部が外面を向き稜を作る。140，143は口頸部ヨコナデ，胴部叩きの後ナデ，内面ナデが施され，140の胴下半はヘラ調整がなされる。140は口縁部がつまみ出され直立するが，143は口縁が肥厚し稜をなす。141は器面の荒廃のため調整技法は不明である。強く屈曲した頸部は外反し，口縁部端でつまみ出され，内外面に稜をつくる。145～147，149は甕で149は底部，口縁部を欠くが約90％の遺存であり、他は½以上の欠損である。145，149は口縁部ヨコナデ，胴部叩き後ナデ，胴部内面ナデ，149は胴部下端横方向ヘラケズリ，底部ヘラケズリ，146は口縁部ヨコナデ，胴部縦方向のヘラケズリ，内面ナデ，147は胴部内外面ナデ，胴部下端ヘラケズリ，底部ヘラケズリが施される。焼成は全て良好である。148は甑で約40％の遺存である。底部に5孔を有す。口縁部ヨコナデ，胴部外面叩き後ナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデ，内面下端ヨコナデで調整される。孔は外周ヘラケズリ，他はナデにより調整される。胴部上端，口縁下につまみが貼付けされる。つまみは1つしか遺存していないが，本来は2つを有していたと思われる。142，144，150～153は須恵器の甕である。151が約90％を遺存する他は⅔以上の欠損である。142は肩部から強く屈曲し外反する口縁部をもつ。口唇部は肥厚し外面を向き，ヘラ先によ

るナデで凹部を形成する。口頸部ヨコナデ，胴部外面叩き後ヨコナデ，内面ナデにより調整される。144は頸部から強く外反する口縁は口唇部で肥厚し，肩部はゆるく張り出す。口頸部ヨコナデ，胴部ナデにより調整される。150は土師質須恵器の小形甕で，器高 15.3 cm，口径（16.2）cm，底径 9.0 cm，胴径 15.2 cm を測る。口縁部に最大径を持ち，強く外反する口縁は口唇部で肥厚し稜を作る。肩部の張りは弱い。口頸部ヨコナデ，胴部外面ナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデ，底部ヘラケズリによる調整である。151は土師質須恵器甕で，底径 15.6 cm，胴径 29.3 cm を測り，底部ナデ，胴部叩き，下端ヘラケズリ，内面ナデによって調整される。胴部は球形にちかく，上半に最大径を持つ。152は須恵器甕で，頸部より強く屈曲した口縁部は端部で肥厚する。胴部ナデ，口頸部ヨコナデ，頸部下半から胴部内面はナデにより調整される。153は底径 14.7 cm を測る須恵器甕の胴～底部である。胴部叩き，下端ヘラケズリ，内面ナデにより調整される。底部は「むしろ」のようなものの痕が残り，周縁をヘラケズリにより調整する。

011号住居跡（第124図154～160）

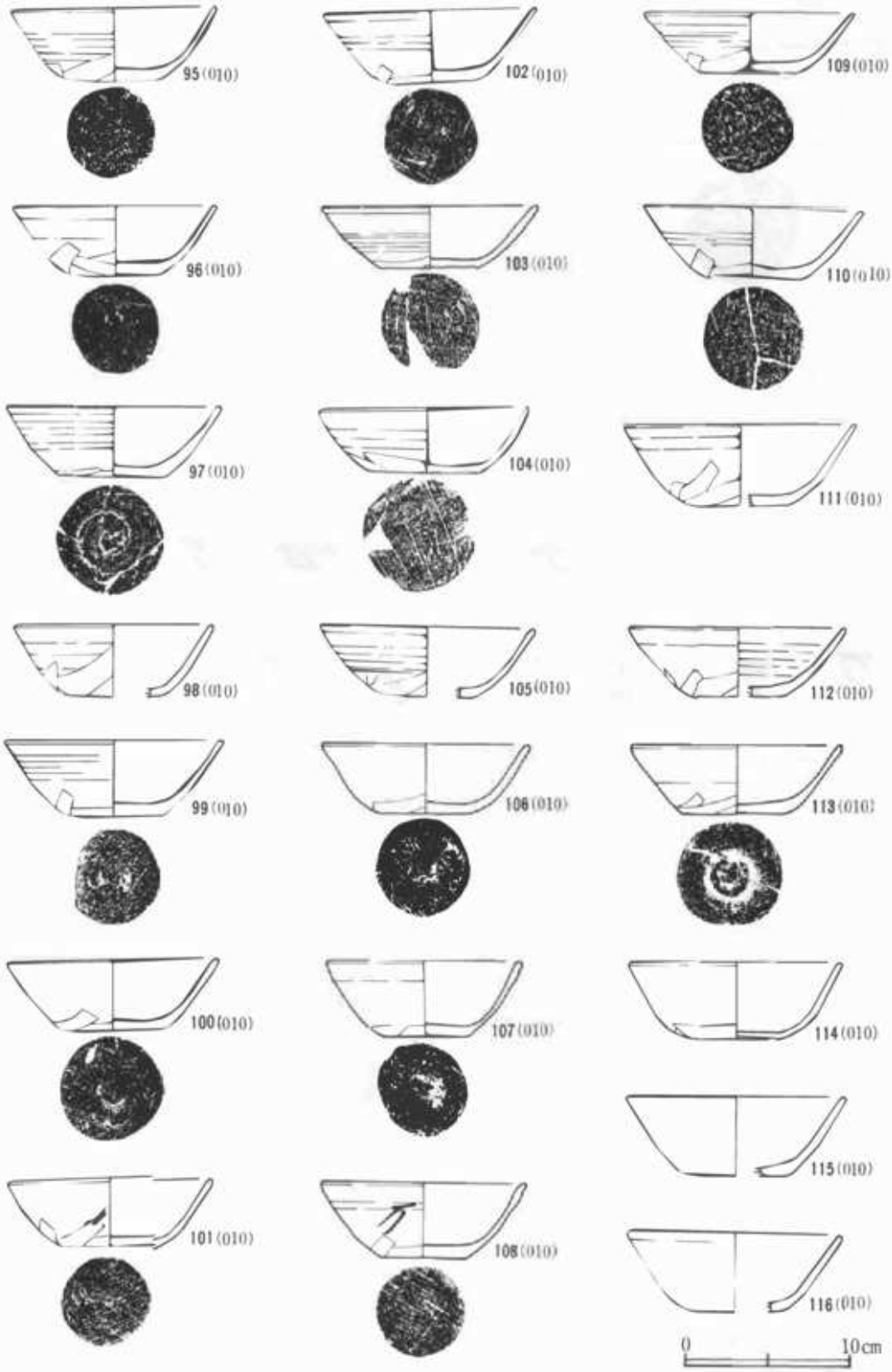
154～156は坏で，155，156は⅓，154は¾の欠損である。154，155は体部横位ヘラケズリ，口縁部ヨコナデ，体部内面ナデ，底部ヘラケズリにより調整される。体部はややふくらみを持ち内彎し，口縁部で若干器厚を減じる。156は底部に回転糸切り痕を残し，体部外面ナデ，内面ミガキにより調整される。157は小形甕で，頸部で屈曲し外反した口縁は肥厚し，口唇部はつまみ出され直立する。胴部外面縦位ヘラケズリ，口頸部ヨコナデ，胴部内面はナデにより調整される。158，159は甕で，⅔以上の欠損である。胴部外面ヘラケズリ，口頸部ヨコナデ，胴部内面ナデにより調整されるが，159は胴部ヘラケズリ後ナデにより調整される。158は強く張った肩部は強く屈曲し外反する。口唇部は外面を向きつまみ出される。159は口径に最大径を持ち，強く外反する口縁部は端部をつまみ出し口唇部を外面に向ける。口縁部内面に凹面，外面に稜をもつ。160は須恵器甕の胴部で，胴部のみ⅓の遺存である。胴部外面叩き，下端ヘラケズリ，内面ヘラケズリ及びナデにより調整される。内面の凹凸が著しい。胴部上半に最大径を有する丸胴型の甕と思われる。

012号住居跡（第125図161～164）

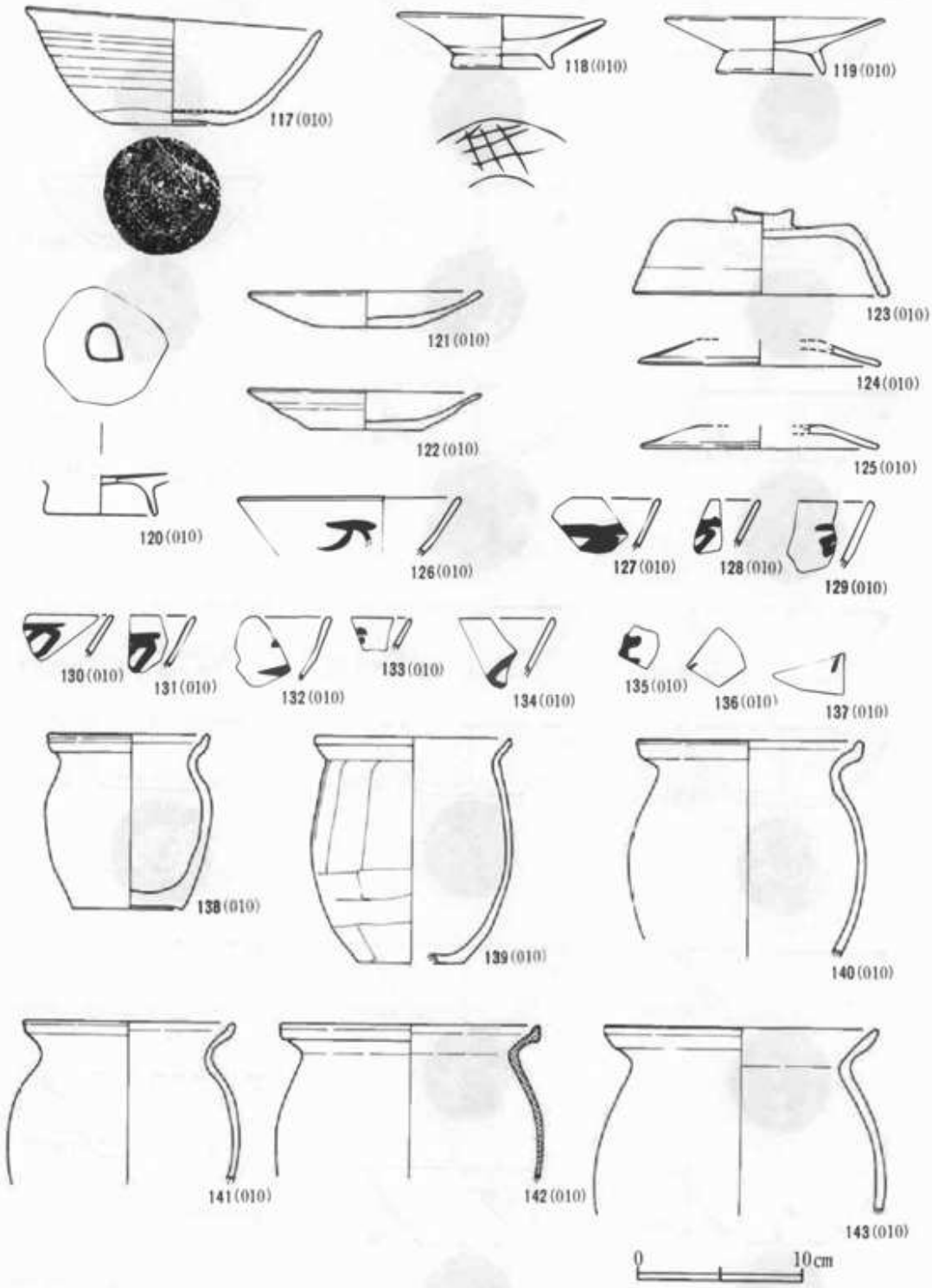
161，162は坏でともに⅕程の遺存である。体部ナデ，底部ヘラケズリ，内面ナデにより調整される。163は甕で，図示の⅓の遺存である。強く外反した口縁は肥厚する。164は甑と思われるが口縁部のみ⅕程の遺存である。口縁部で外反し，肩はほとんど張らない。口縁部に最大径をもつ。口縁部ヨコナデ，胴部ヘラケズリ，内面ナデの調整である。

013号住居跡（第125図165～176，図版79）

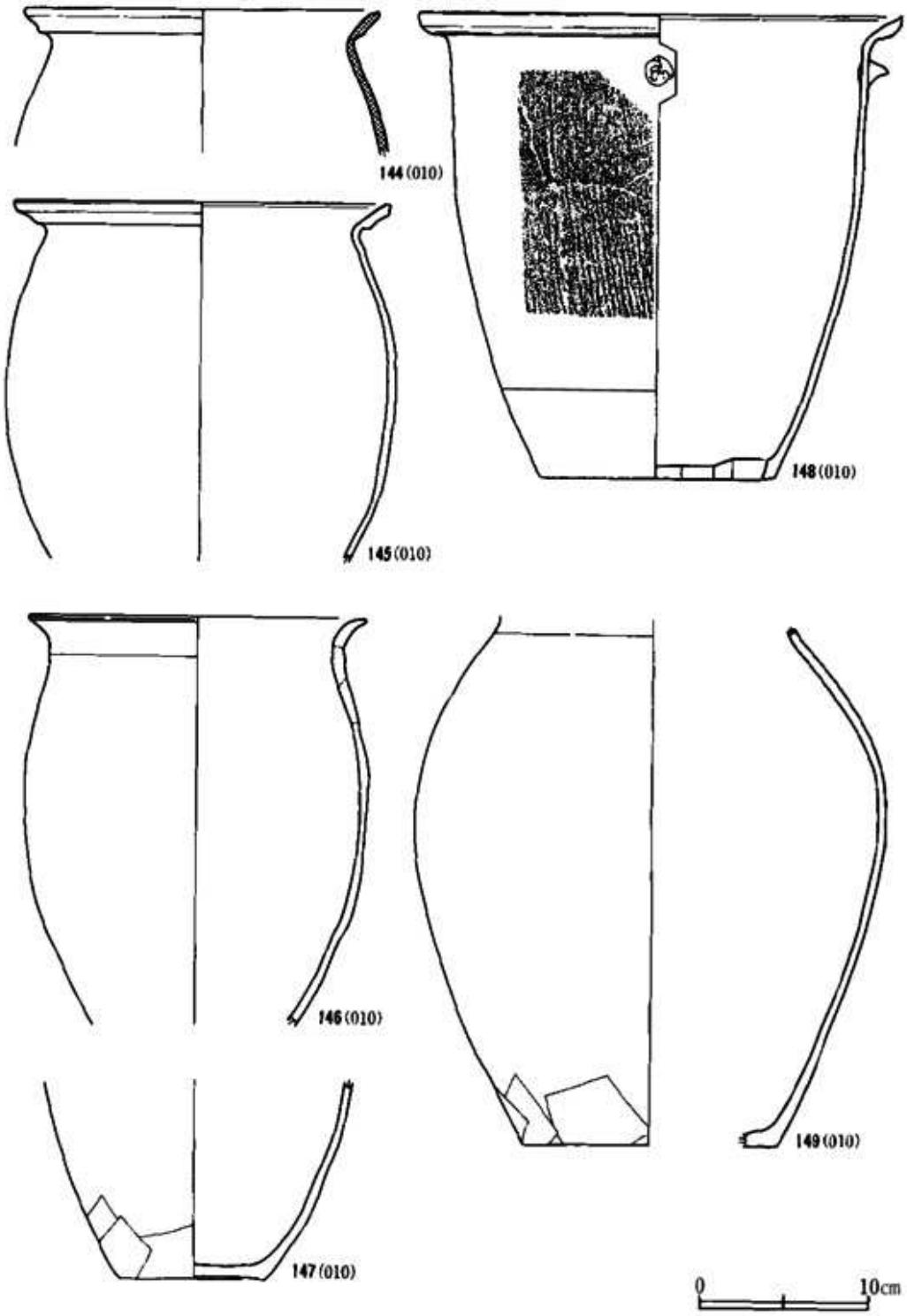
165～168は坏で，168はほぼ完形，他は⅔以上欠損する。168は器高 4.5 cm，口径 12.7 cm，底径 5.8 cm を測る。調整方法は，底部ヘラケズリ，体部ナデのもの（165），底部ヘラケズリ，



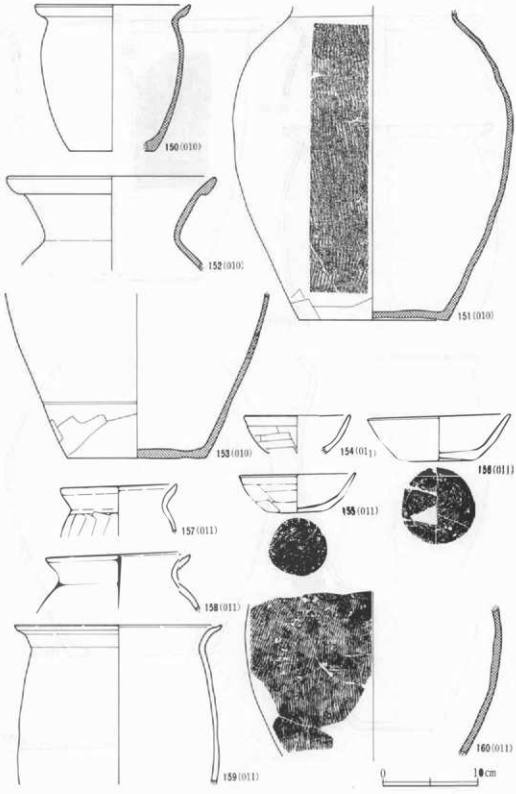
第121図　010号住居跡出土遺物実測図



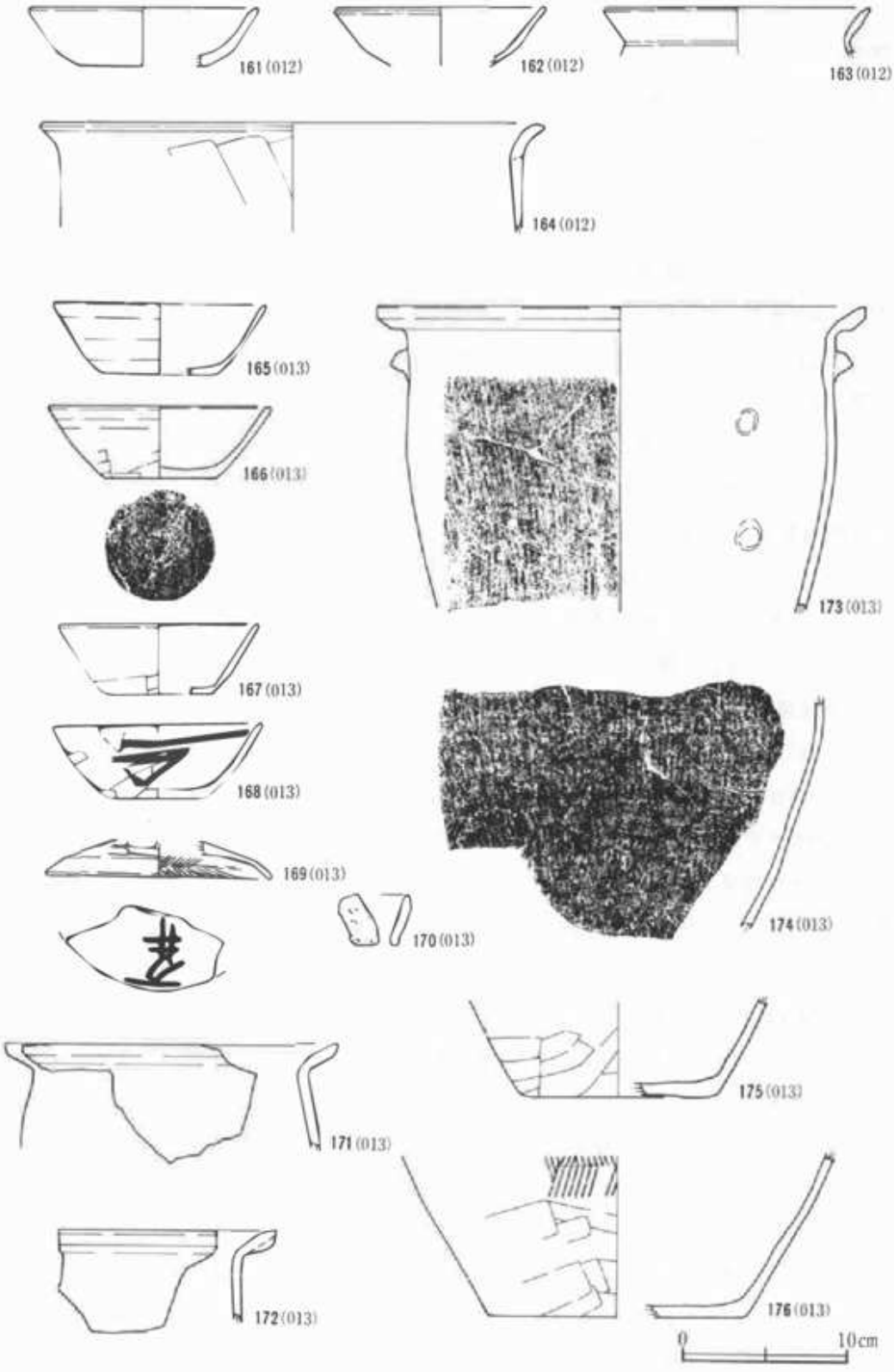
第122図　010号住居跡出土遺物実測図



第123図　010号住居跡出土遺物実測図



第124図　010号、011号住居跡出土遺物実測図



第125図　012号，013号住居跡出土遺物実測図

体部ナデ，下端ヘラケズリのもの(167，168)，底部回転糸切りの後ヘラケズリ，体部ナデ，下端ヘラケズリのもの（166）に分けられる。168は体部外面に墨書がみられる。字体は「万」であろうか。169は坏蓋で⅓程の遺存である。外面に稜を有し，天井部外面ヘラケズリ，口縁部ナデ，内面ヘラミガキによる調整である。外面に「万井」の墨書がみられる。170はカマド内から出土した手捏土器であるが，形態・用途ともに不明である。173は甑で，胴部叩きの後ナデ，口頸部ナデ，内面には指頭痕が残るがナデにより調整される。口縁下につまみが貼付けされるが，本来は2個相対して貼付けられていたものと思われる。171，172，174～176は甕で，171，172は口縁部に最大径を持ち，胴部は，171が叩きの後ナデ，172は叩き，口頸部内面はナデ，175は胴部下端ヘラケズリ，内面ナデにより調整されるが，底部は器面の荒廃のため調整方法は不明である。174，176は同一個体と思われる。胴部中位は叩きの後ナデ，下端ヘラケズリの後ナデ，内面ナデにより調整されるが，底面は器面の荒廃のため調整方法は不明である。

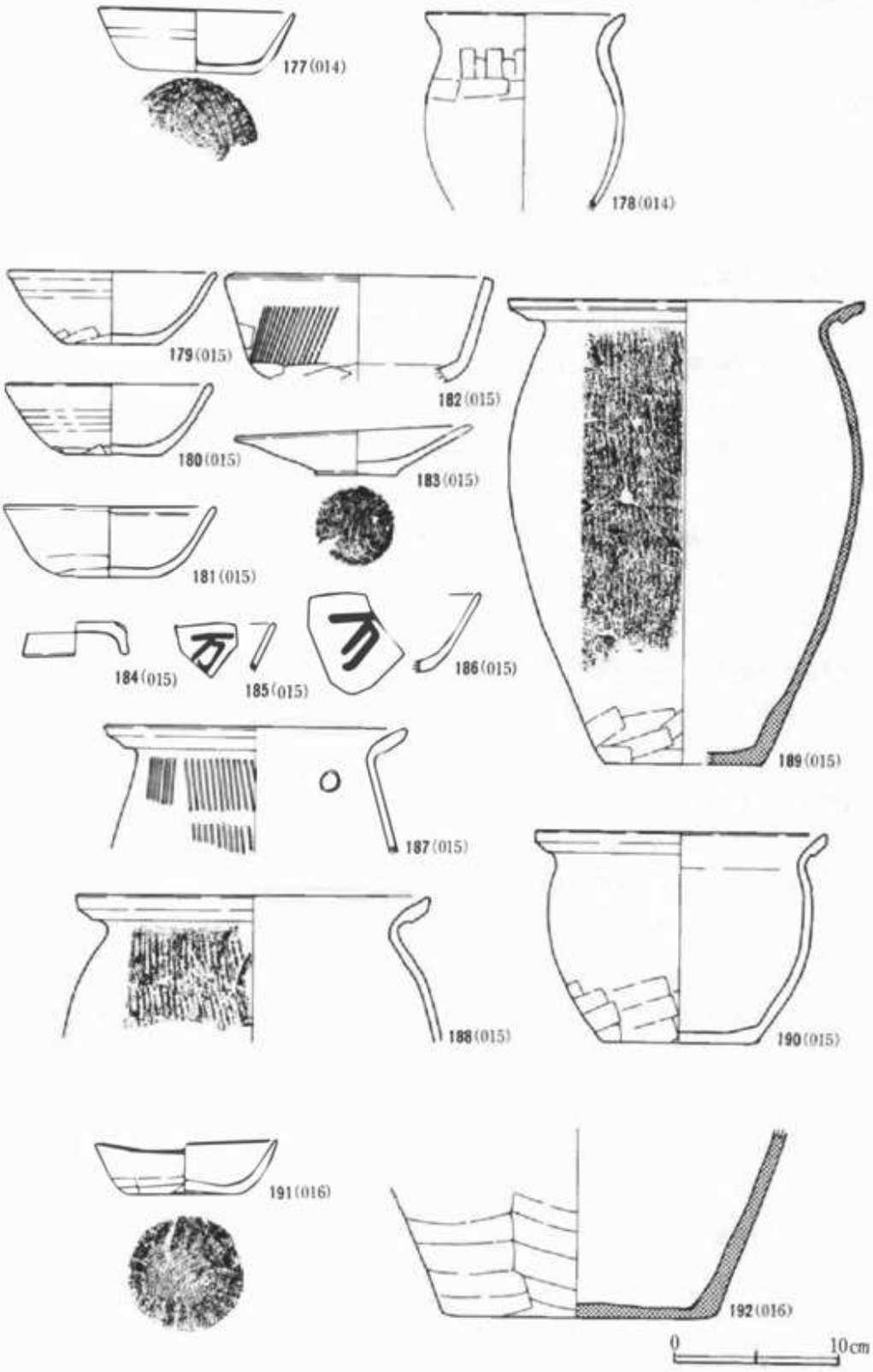
014号住居跡（第126図177，178，図版79）

177は坏で½欠損する。底部は回転糸切り後周縁ヘラケズリ，体部はナデ，体部下端ヘラケズリにより調整される。178は小形甕で¼程の遺存である。胴部上位縦方向，中位横方向，下位縦方向のヘラケズリ，口縁部，内面ナデによる調整である。

015号住居跡（第126図179～190，図版79）

179～181は坏で，180が⅚遺存するが，他は½以上の欠損である。179，180はほぼ一定の器厚をもち，体部外面に細かい凹凸が若干残る。いずれも底部ヘラケズリ，体部ナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデにより調整される。181は，底部中央に指頭痕が認められる。182は椀で⅓程遺存する。器厚は厚く体部の厚さはほぼ一定である。口縁部，内面はナデ，体部外面叩き，下端横方向手持ちヘラケズリにより調整される。183は皿で，ほぼ完形である。器高 3.0 cm，口径 14.6 cm，底径 5.0 cm を測る。底部回転糸切り，体部ナデにより調整される。底部は高台状を呈する。184は高台で，外面ナデ，内面ヘラミガキにより調整される。185，186は坏の墨書土器片で「万」の文字が判読できる。187，188は甕で調整方法は胴部叩き，口頸部，内面ナデ，188は胴部上位叩きの後ナデにより調整される。頸部で強く屈曲し外反する口縁部は肥厚し，口唇部を外面に向け，口縁部に強い稜を有す。189は土師質須恵器の甕で½遺存する。器高 27.6 cm，口径 21.8 cm，底径 9.5 cm を測る。口頸部ナデ，胴部下半～上部叩き，胴部下端，底部周縁はヘラケズリによる調整である。底部は器面荒廃のため詳しい調整は不明である。頸部で強く屈曲し外反した口縁は折返し口縁で，強い稜をもつ。190は小形甕で⅓欠損する。強く屈曲する口頸部は外反し，口唇部を外面に向ける。口頸部，内面ナデ，胴部叩きの後ナデ，胴部下半，底部ヘラケズリにより調整される。胴部内面には輪積痕が残る。

016号住居跡（第126図191，192，図版79）



第126図　014号，015号，016号住居跡出土遺物実測図

191は坏で完形である。器高 3.2 cm，口径 11.0 cm，底径 7.0 cm を測る。底部回転糸切り後周縁ヘラケズリ，体部ナデ，下端ヘラケズリ，内面ナデにより調整される。器形は歪んでおり，体部の長さは一定しない。192はくすべ焼成の甕の底部である。底径 16.7 cm を測る。胴部中位叩き，下半横方向ヘラケズリ，内面ナデにより調整されるが，底部は荒廃により調整方法不明である。内面底部と胴部の境には指による整形圧痕がほぼ等間隔で1周に12痕めぐる。

住居跡出土土製品（第127図，図版82）

1～3は紡錘車である。1は長径 6.1 cm，器厚 1.65 cm，孔径 0.65 cm，重量62.5 g を測る。2は長径 5.8 cm，器厚 2.0 cm，孔径 0.65 cm，重量78.5 g を測る。3は長径 4.9 cm，器厚 1.05 cm，孔径 0.7 cm，重量27.85 g を測る。1，3は器面全体をヘラケズリによって調整される。1には「永」の文字が刻まれる。2には孔を囲むようにヘラ先で線刻がなされる。
3は暗灰色を呈し，くすべ焼成である。4～9は支脚である。全てカマド内からの出土である。4，5は003号住居跡，6は004号住居跡，7，8は009号住居跡，9は012号住居跡からの出土である。断面が多角形を呈するもの（4～6），ほぼ円形を呈するもの（7），楕円形を呈するもの（8，9）とに分けられる。

住居跡出土銅製品（第128図1，図版83－1）

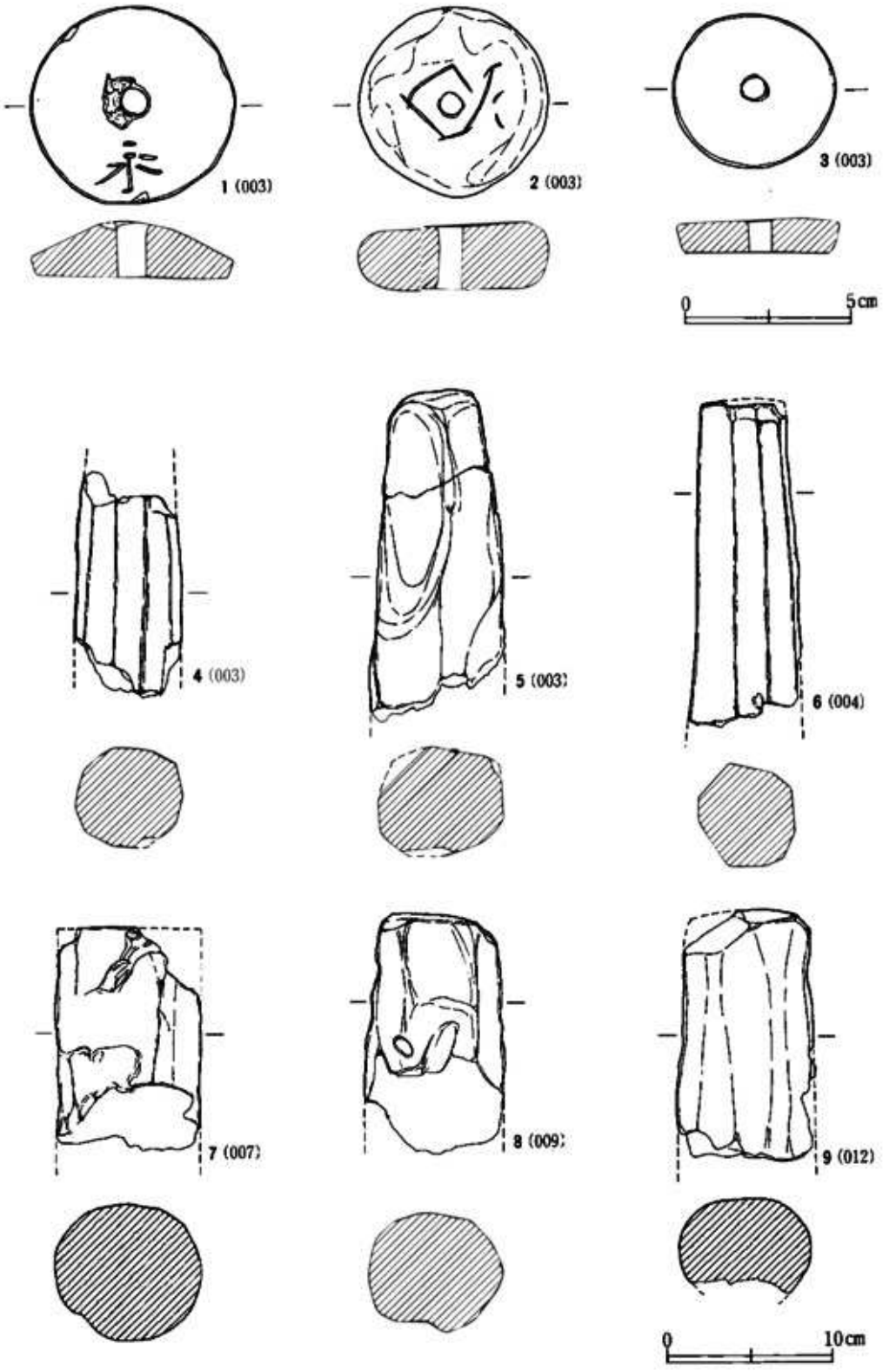
1は，銅製の把手であろう。断面形は外側がやや丸味をもち，内側がそぎ落されたような形態を呈す。下端には両側に孔があけられており，内面には目釘が若干ながら遺存している。

住居跡出土鉄製品（第128図2～9，図版83－1）

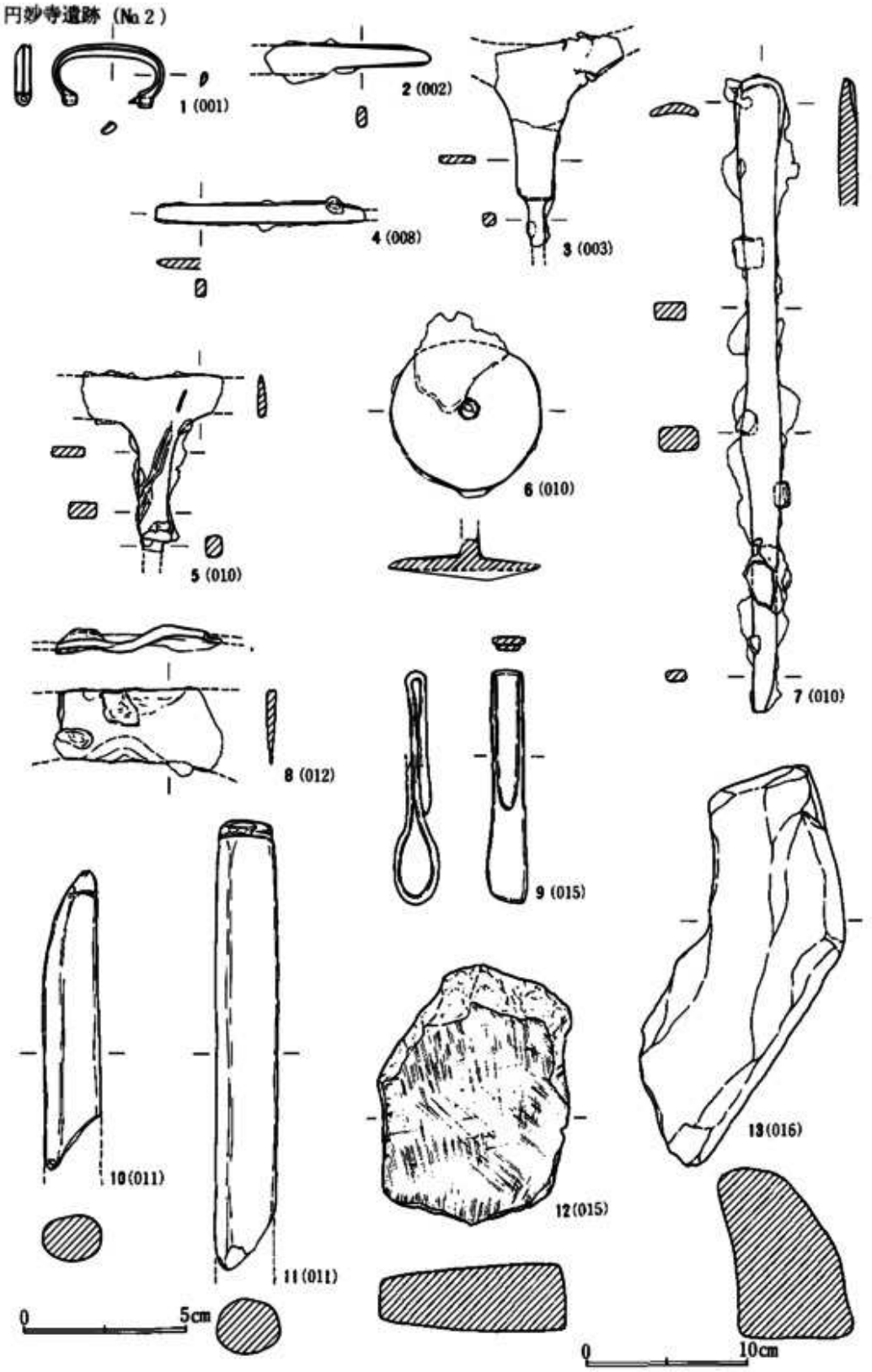
2は刀子片で，刃部を欠損する。現存長 5.2 cm を測る。茎は完存し，棟幅 0.3 cm，長さ 3.2 cm を測る。木質の付着は認められない。3・5は変形の雁股の鉄鏃で，刃部を欠損する。刃部は3がやや上向きに開くが，5はほぼ水平に近くなる。箆被ぎは扁平で大形であるが，茎は断面方形を呈する。棘部には明瞭な稜が観察される。5の棘部から刃部にかけて木質がみられるが，本体と関連するものではないようである。4は棒状を呈し，先端が刃状，断面は長方形を呈す。種類は不明であるが，釘の可能性がある。6は鉄製の紡錘車である。全体に銹が著しいが，径 4.6 cm 程を測る。7は全長 19.5 cm を測る完形品で，鉈になると思われる。最大幅 1.2 cm，厚さ 0.7 cm を測り，刃部に移行するに従い薄くなる。8，9は不明の鉄製品であるが，8はその形状より鎌となる可能性が強い。

住居跡出土石製品（第128図10～13，図版83－2）

10，11はいずれも欠損しており，用途については不明である。いずれも端部には浅い凹みが施される。10の形態がやや異なるが，本来は11と同様の整形であったものが，破損した後研磨を加えた現形のように整えたものと思われる。全体的に丁寧な研磨を施している。石材は粘板岩であろう。12は表裏面ともかなり使用された砥石である。使用途中に欠損したのであろうか



第127図　住居跡出土土製品実測図



第128図　住居跡出土銅製品・鉄製品・石製品実測図

欠損部が凹凸であるが，欠損部にも若干砥いだ痕跡が認められる。最大長 7.6 cm，最大幅 5.9 cm，最大厚 2.7 cm，重量150 g を測る。13は底面が平坦で，上面はやや山形を呈し，周縁部を「く」の字状に磨いている。一部は熱を受けて赤く酸化しており，タール状の付着物がみられる。縁辺部を磨き，「く」の字状を呈すこと，底面を平坦にすること，一部に二次的な熱を受けた痕跡がみられること等を考えると，カマドの構築に際して袖のような機能をもって本遺物を利用したことが考えられる。最大長 24.3 cm，最大幅 8.4 cm，最大厚 10.4 cm を測る。石材は砂岩系のようである。

第3節　土坑出土遺物（第129図，図版79）

102号土坑（1，2）

1・2はともに坏の墨書土器片である。1・2とも体部はナデにより調整され，1の体部下端はヘラケズリがなされる。1は「信」，2は「万」の墨書が体部にみられる。

104号土坑（3）

3は同一個体と思われる須恵器の甕で，自然袖が肩部から胴部中位にかけてかかっている。胴部外面はヘラナデ，内面は不定方向のナデにより調整される。

105号土坑（4）

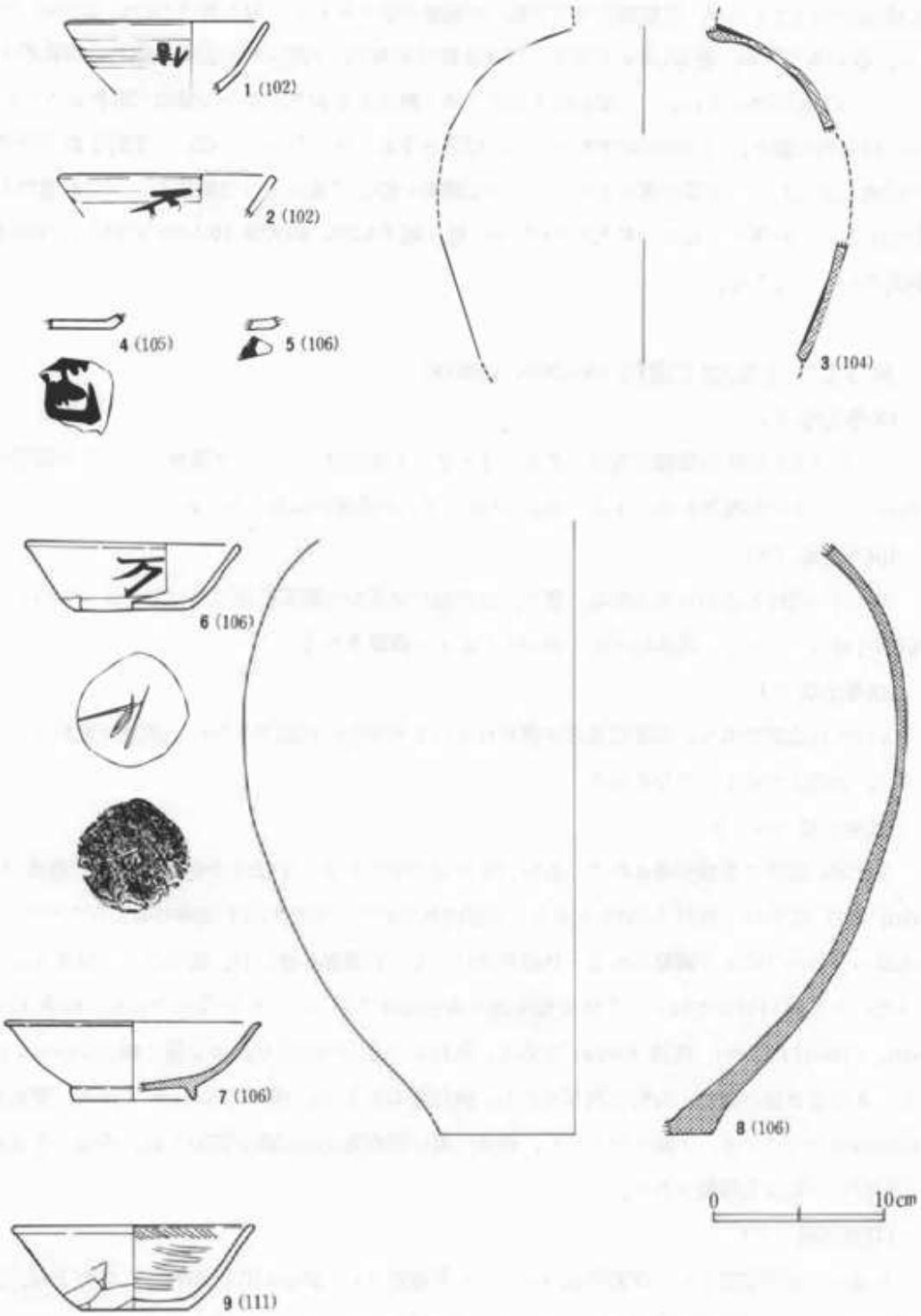
4は坏の底部である。底部に墨書が書かれているが字体は判読できない。調整は底部ヘラケズリ，体部ナデによってなされる。

106号土坑（5～8）

5は坏の底部で墨書が書かれているが，字体は不明である。6は坏で完形である。器高 3.9 cm，口径 12.3 cm，底径 6.3 cm を測る。体部内外面ナデ，体部外面下端横方向のヘラケズリ，底部ヘラケズリにより調整される。体部外面に「万」の墨書が書かれ，底部には，焼成後にヘラ先により線刻がなされる。7は灰釉陶器の高台付椀である。¼程の残存である。器高 (4.4) cm，口径 (14.8) cm，底径 6.0 cm である。高台より内側の底部を除き全面に釉がかかっている。8は須恵器の甕で，⅙程の残存である。胴部径 (39.2) cm，底径 (16.0) cm である。胴部外面は斜位方向タタキ，下端ヘラケズリ，胴部内面は青海波文の痕跡が認められ，内面下部は横方向のナデにより調整される。

111号土坑（9）

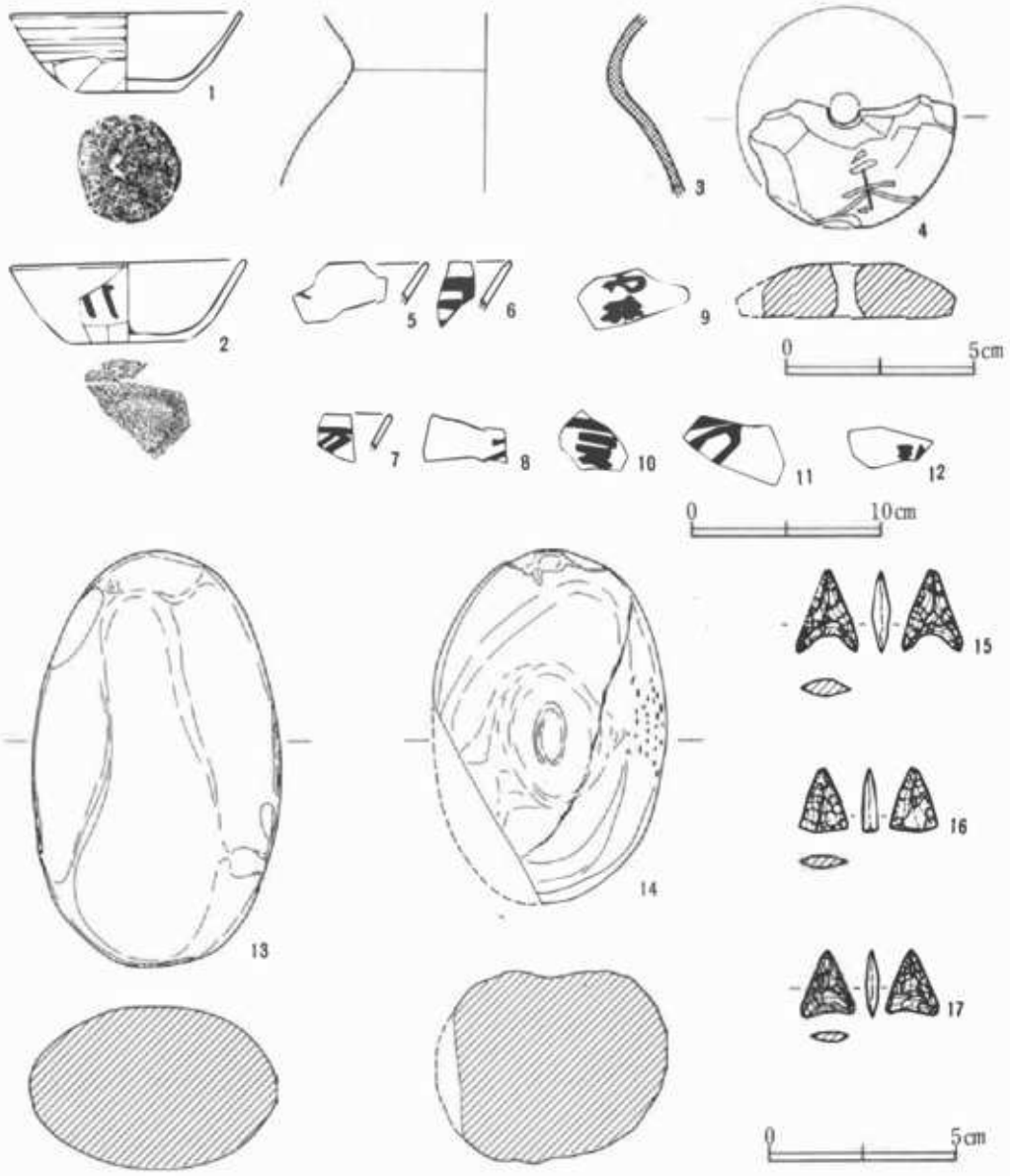
9は坏で½程欠損する。体部外面はナデにより調整され，細かい凹凸が残る。体部下端，底部ヘラケズリ，体部内面はていねいなヘラミガキ様のヘラナデツケがなされる。



第129図　102号，104号，105号，106号，111号土坑出土遺物実測図

第4節　グリット出土遺物（第130図，図版81）

1・2は坏で⅔以上欠損する。1はB2—21グリット，2は013号住居跡付近表土の出土である。体部内外面はナデ，外面下端にヘラケズリ，底部は1がヘラ切り後ヘラケズリ，2が回転糸切り後周縁ヘラケズリが施される。1の体部外面には細かい凹凸が残る。3は須恵器の甕で，図示の50%の残存である。肩部外面はタタキ，内面ナデ，頸部内外面はヨコナデにより調整される。内面は凹凸が著しい。4は紡錘車で，½欠損する。器面はヘラケズリにより調整される。



第130図　グリット出土遺物実測図

ヘラ先により刻書される。字体は「永」と思われる。表土出土である。5～12は墨書のある坏片で，5～8はA4－04グリット，9～11はC2－00グリット，12はC1－31グリットの出土である。それぞれ付近に住居跡があり，関係があると思われる。7が「万」，9が「口井」と読めるほかは判読できない。13は磨石で010号住居跡の出土である。表面はよく研磨されておりよく使用した様子をうかがえる。また長軸両端部には敲打痕がみられ，敲石としても利用していたものと思われる。14は敲石で，012号住居跡の出土である。敲石としてほぼ全面を使用している。13は長さ 10.9 cm，幅 6.6 cm，厚さ 4.3 cm，重さ420.5 g，14は長さ 9.3 cm，幅 6.2 cm，厚さ 5.0 cm，重さ350.5 g である。15～17は石鏃で，15はF4－40区で，014号住居跡の南壁直下の出土である。014号住居跡は土師の住居であるので包含層からの出土とした。側縁は直線状をなし，基部は弧状に強くえぐれ，両面ともに細かい加工がみられる。長さは 2.15 cm，幅 1.62 cm，厚さ 0.5 cm，重さ0.51 g を測り，石質は黒曜石である。16はD4－01区からの出土である。基部を欠損するため全体の形態は不明である。長さ 1.65 cm，幅 1.29 cm，厚さ 0.4 cm，重さ0.52 g を測り，石質はチャートである。17はA4－03区からの出土で長さ 1.73 cm，幅 1.41 cm，厚さ 0.32 cm を測り，石質はチャートである。

第4章　小　　結

本遺跡は，南西から入り込む支谷に面した台地の縁辺部のみの調査にすぎず，これによって集落の問題を論じていくことは多くの危検性を伴なうものであり，ここでは調査区域内に展開する集落の年代を明らかにすることにとどめたい。

土器から見た集落の営為年代

本遺跡の住居跡内より出土した土器群を概観する限りでは，それほどの大きな時期差はなく，すべていわゆる「国分期」の範囲に含まれるものである。しかしながら，土器を詳細に観察することにより，これらの土器群はほぼIII期に分類されるようである。ここではその根拠資料として，土師器の坏形土器を中心として考え，補足資料として，皿あるいは甕等を加味していきたい。なお，絶対年代に欠くことのできない須恵器が本遺跡においてはきわめて不足としており，明確な実年代の呈示が困難であることは否めない。

〈第I期〉

005・009・011号・014号住居跡があげられる。このなかで最も古く位置づけられるのが，011号住居跡出土の坏である。ロクロ整形によらず，体部・底部とも比較的粗いヘラケズリが施される。005・014号住居跡出土の坏はロクロ整形で底径と口径との差が少ない。底部は糸切り後外周をヘラケズリする。体下部にもヘラケズリが施される。009号住居跡出土の坏は体部上半に稜を有するもので，特異な形態である。甕は口唇部に最大径を有し，口縁部が短く外反する。真間期からの技法が残っているようである。

〈第II期〉

003・004・012・013・016号住居跡出土土器があげられる。坏は口径と底径の差が大きくなり，その法量は全体に統一された規格となる。一方では，004号住居跡出土の坏（65）のように前代の様相を有するものもみられる。底部は，糸切り後全体にヘラケズリが施される。なお，体下部にも若干ながらヘラケズリがみられる。

〈第III期〉

001・002・007・008・010・015号住居跡の出土土器があげられる。これらから出土する坏は前代を受け継いだ形で，法量の規格性が認められるものの，そこには若干のばらつきがみられるようになる。底部は全面を手持ちヘラケズリによって処理するものが多いが，010号住居跡出土の坏（97，113）のように回転ヘラケズリを施すものも存在する。また，002号住居跡の坏

（24，32）のように糸切り後外周をヘラケズリするものもみられるように，底部の処理に関してのばらつきも観察される。

この時期を前代の第II期と区別する要素として，法量および底部処理のばらつきの他に内黒土器と皿形土器の存在があげられる。001・002号住居跡の内黒土器は口径および器高において他と比してやや大きめのものとなる。010・015号住居跡では皿形土器が伴出する。これには高台のつくものとつかないものが混在する傾向がみられる。

以上のように，かなり限定された資料ではあるが，土師器の坏形土器を中心にして集落内より出土した土器をIII期に分類して概観してきたのであるが，以下ではその実年代を検討したい。

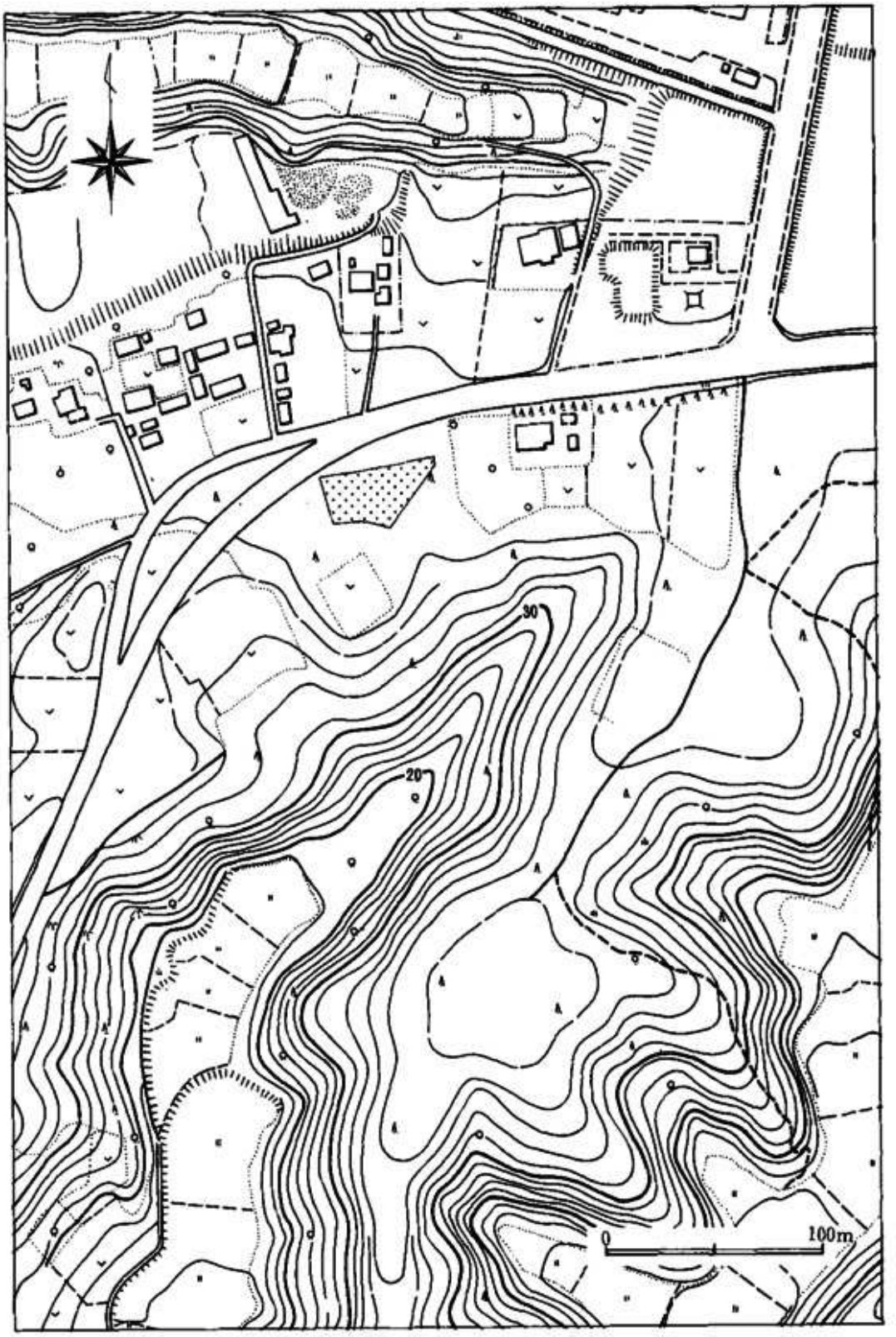
本遺跡では須恵器のようなメルクマールとなるべき資料がとぼしいために絶対年代としての確実性にはやや欠けるが，まず，遺跡内での伴出土器の上限と下限を決定しておく。上限となるべき住居跡出土の土器は011号住居跡のロクロ未使用の坏である。この坏は底径と口径の差が大きく，口唇部がやや外反する傾向が強いことより，ロクロ未使用坏でも後出的な様相が強く，北総方面では，ロクロ使用の坏が主体を占めるような時期と考えられる。公津原にみられるセットより8世紀の終末から9世紀の初頭の所産であろう。

次に，下限と考えられる資料は，010号住居跡出土の高台付皿である。高台部が高く，体部が直線的にのびる点で，村上込の内遺跡の例と共通する要素がみられる。これより考えれば，この時期は，9世紀の末から10世紀の初頭にかけてのものと推定される。001・002号住居跡出土の内黒の坏もほぼ同時期と思われる。これらの中間に位置するII期は，根拠となる資料がとぼしいのであるが，以上のことから考えれば，9世紀の中葉を中心とした時期として差しつかえないものであろう。

このようにして把えた年代をもとにして本遺跡の住居跡出土土器の年代を整理すれば，I期は，8世紀末から9世紀の前葉，II期は9世紀の中葉，III期は9世紀の後葉から10世紀の初頭にかけての時期となるであろう。もちろん，少ない資料をもとにしての編年であり，台地全体の集落から出土する土器との組み合わせによりさらに詳細な細分も可能であるが，調査区内の資料に限定されるため，現時点では以上のような年代観を呈示しておく。

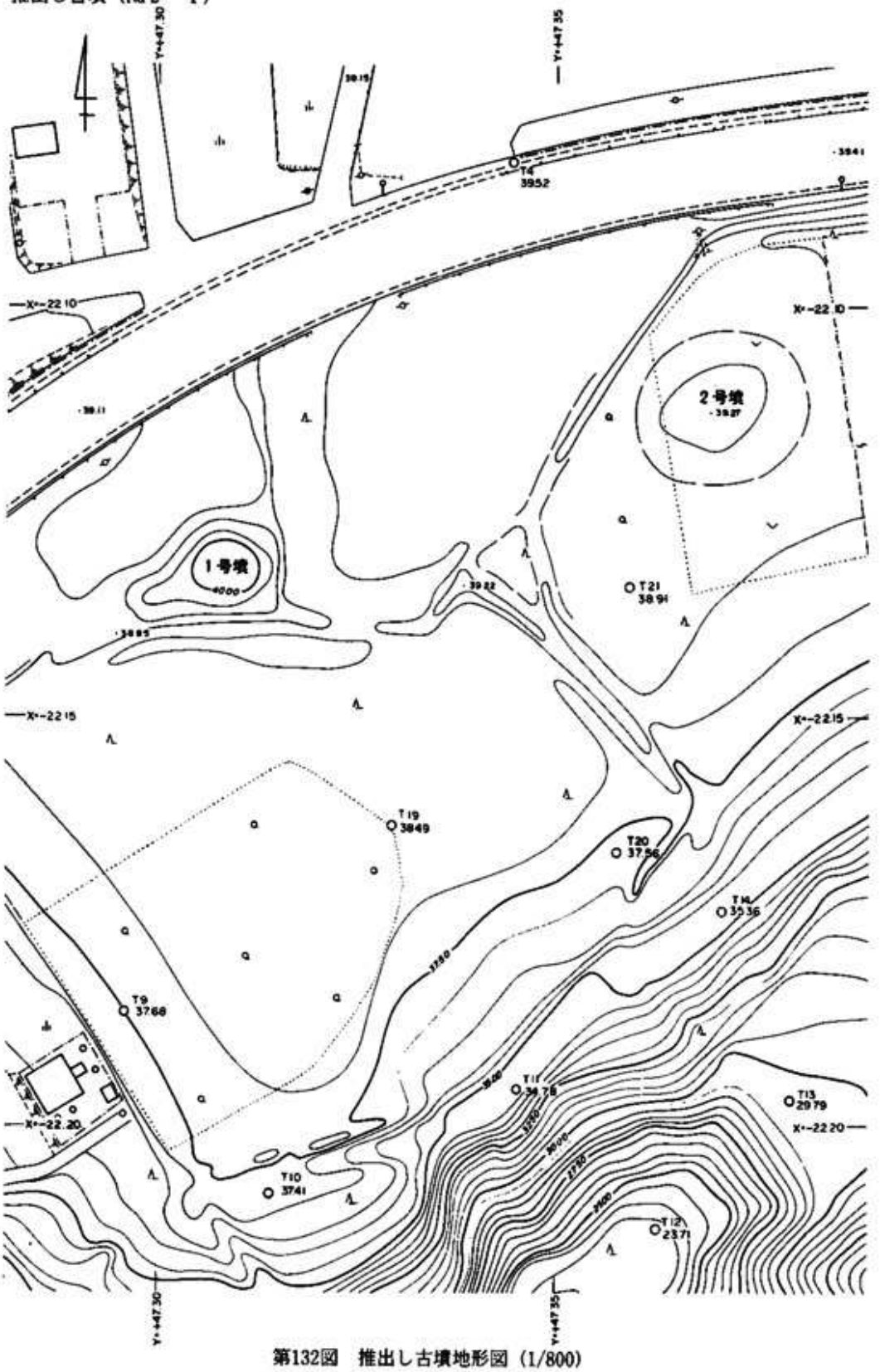
推　出　し　古　墳（No.2－1）

(211－031)



第131図　推出し古墳周辺地形図（1/1,500）

推出し古墳（No.2－1）



第132図　推出し古墳地形図（1/800）

第1章　調　査　概　要

遺跡調査対象は前方後円墳1基及び包含地1,000㎡であった。

昭和58年11月1日より調査は開始された。調査に先立って地形測量を行ない，その成果を考慮して調査区を設定した。まず，遺跡内に繁茂している樹木，草類の伐採・搬出を行なった。

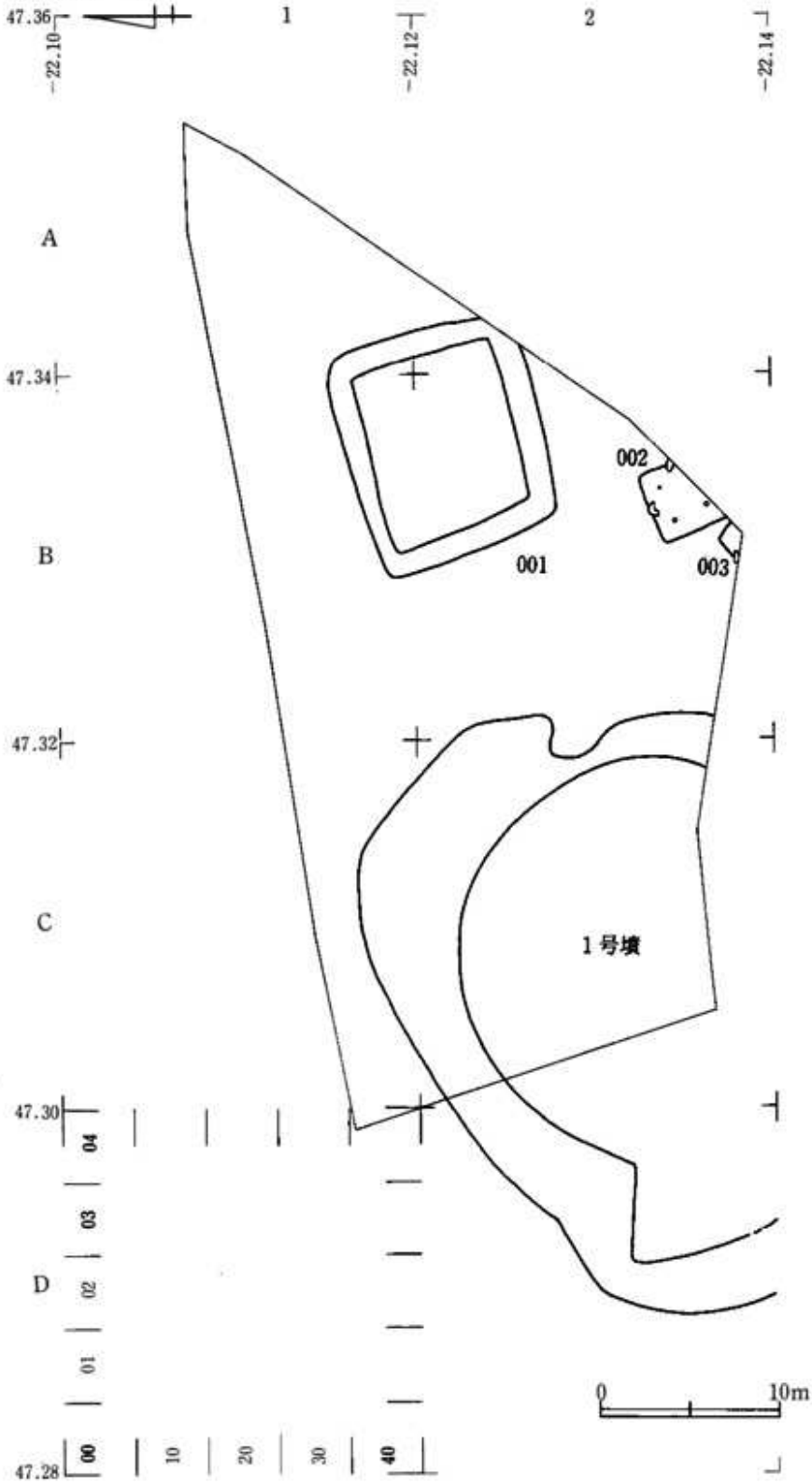
前方後円墳は長軸に沿うように，確認のトレンチを設定し墳丘の状態を捉えるとともに周溝範囲の確認を行なった。それにより各々長軸26m，後円部径15m，高さ2.3mの規模であることが判明した。その後，主体部の検出に移行し，ほぼ後円部中央に確認したが，著しい盗掘をうけており，良好な遺物は出土しなかった。主体部と周溝の調査を終了してから墳丘構築の状態を確認するため，旧地表まで下げる作業を行なった。

包含地は，ほぼ古墳の調査に並行して行なった。まず，土層の状態をトレンチで確認してから，全面排土作業に移行した。その結果，住居跡2軒，方形周溝遺構1基などが確認された。

南側に杉・松などの巨木が繁っているため，日当りは悪く，また，今冬は寒くなるのが早く，きわめて劣悪な状況の中での調査であったが，12月24日すべての調査を終了した。

本墳は，根木名川支流の取香川から北にのびる大きな谷の谷頭にあたる台地上に位置する。西側には浅い谷が入り込む。

推出し古墳（№2－1）



第133図　推出し古墳遺構分布状況図（1/400）

第2章　遺　　構

第1節　前方後円墳

本調査区の西側に位置する本墳は，調査前に雑木に覆われていてその旧状を窺うことは困難であったが，伐木後その全容が明らかになるとともに，比較的良好に墳形を維持する前方後円墳であることが明確になった。ただし，前方部が径4m程の範囲で攪乱されており，これによる墳丘の損壊は著しいものである。

墳丘実測図（第134図）によると，墳形は比較的良好に整っているものの，前方部の等高線がややだれている点，盛土の削平が予想された。また後円部の墳頂部が径4m前後で平坦な面を呈しており，墳頂部に埋葬施設の存在が予想された。後円部の東側および墳丘南側には近世の土手が走っており，これによる墳丘の改変が若干認められた。見かけの墳丘長は22mである。

墳丘の構造（第135・136図）

墳形は前方後円墳で，トレンチを主軸線，主軸線と後円部の中央，くびれ部，前方部のおのおのが直交する線上に設定し，これを土層断面の観察に利用した。トレンチ調査では旧表土の範囲を明確にとらえることを主眼とし，これにより墳丘の復元に努めた。この結果，旧表土端部すなわち墳裾と周溝内端との間には明確なテラスが存在することが確認できた。このテラスは旧表土からソフトロームにかけて地山を整形して形成しており，その幅は後円部で2.5～3.6m，墳丘くびれ部で最大4.1mを測る。周溝のくびれ部で極端に狭くなり，前方部側では2.1mを測る。南側は区域外のため不明ではあるが，全体に比較的整美であることから，この部分にもほぼ同様のテラスがめぐっていると考えられる。このテラス面は，前方部側で若干高くなるものの，ほぼ平坦である。このテラスの形成により墳丘の築造規模が決定される。それによると，墳丘の全長は，21.7m，後円部径16.2m，前方部の幅は端部で9.0mを測る。

次にこの旧表土に墳丘を築成することが開始される。墳丘断面図（第135図）によると，前方部に先行して後円部を形成したことが明瞭に観察される。後円部の第1段階の盛土は，削平された旧表土のプランに沿って幅4～5m，高さ0.8m程で土堤状に築かれる。これはロームブロックを若干含むものの，黒褐色土あるいは暗褐色土の土を主体としたものであり，旧表土削平の際に削り出された土を利用したものであろう。この土提は全周するものではなく，次の行程を考えれば土を搬入する部分が開かれていたと思われるが，調査上では確認されなかった。次の段階として，後円部の中央部に径5m程，高さ1.3m程の円丘状の盛土が施される。この盛土の頂部は後に掘り込まれる主体部の坑底に位置するものであり，この時点ですでに主体部が意識されたものと考えられる。この段階においても盛土は暗褐色土を主としており，削平がローム層まで達していないことを示している。すなわち，墳丘断面図で明らかなように，墳丘構築

面である旧表土と周囲のローム面との比高差が40～50m程あり，それが周溝外にも達していることからすれば，旧表土の削平がどの範囲まで行なわれたかは不明であるが，十分に土量を供給できたものと思われる。

次の段階では，土堤と円丘状を呈す盛土の間に土を充塡する作業が行なわれる。これはロームブロック土と褐色系の土を互層状に積み上げ，最終的には先述した円丘状の盛土の頂部でほぼ水平状態を呈すように築かれる。以上のような行程で後円部の略形が形成されるのであるが，この後ロームを中心とした土をこの上に積みあげて後円部の整形が完成する。

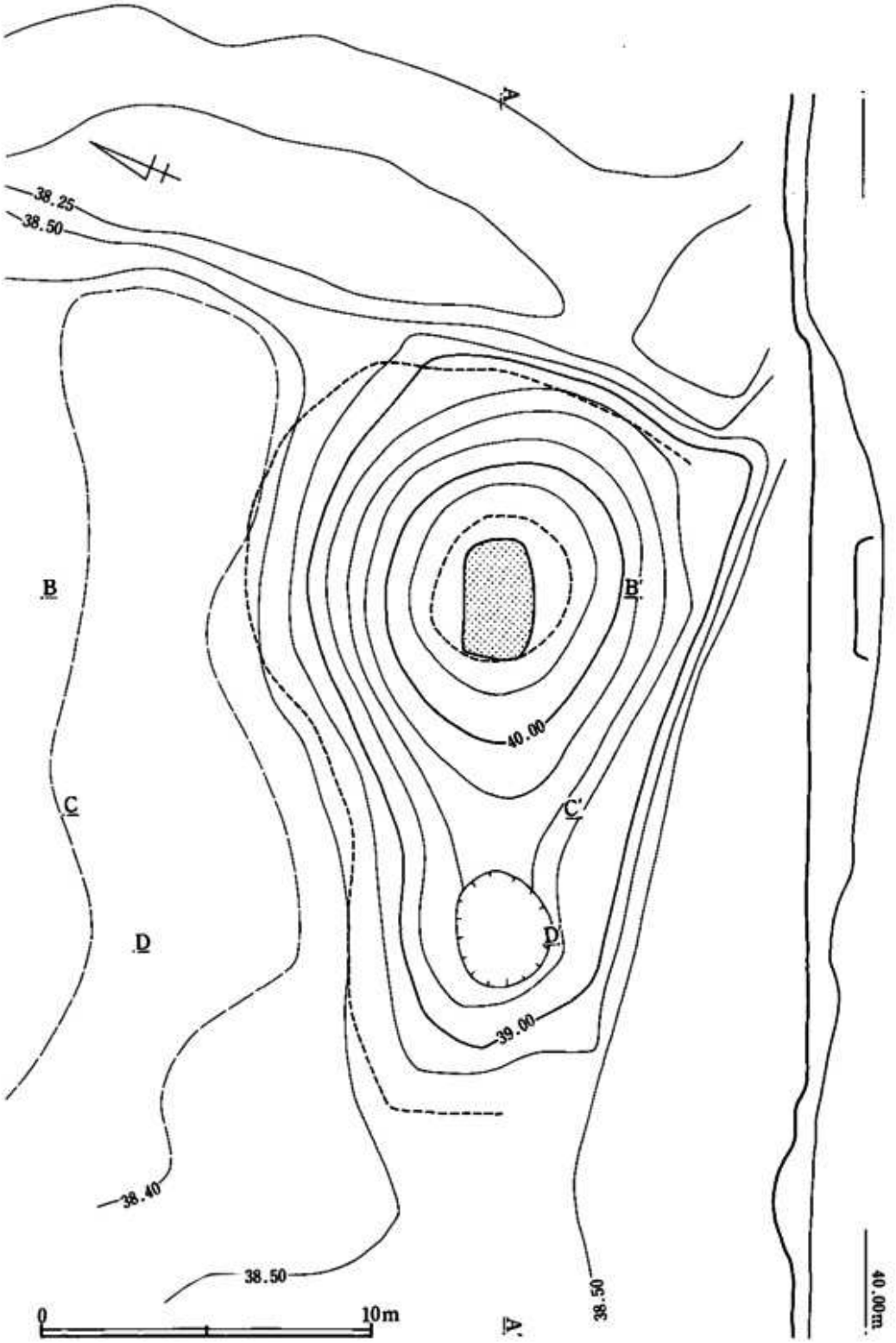
次に前方部の構築が開始される。ただし，この行程が後円部最終段階より前に行なわれる可能性もあるが，断面図では確認し得なかった。いずれにせよ，前方部が後円部より後に形成されたことは明らかである。前方部の盛土に先行して，まず前方部に接続する後円端部の整形が施される。墳丘断面図（第135図）で明らかなように，端部が直線的に削り落とされ，つなぎ目として良好な状況を呈している。前方部は，ほぼ水平積みに近い状態で盛られており，後円部側では，黒色土の上にローム土さらに黒色土を互層に施しており，盛土の流出を防ぐ工夫が採られている。

周溝は，外端を概観する限りではいわゆる楯形のプランを呈しているが，内端には明瞭なくびれ部が掘り込まれており，全体には整美な形態を呈している。周溝内端の後円部側は，墳丘で求めた中心点が描く円と同心円となる。このため楯形を呈す外端とは相似とはならず，周溝の幅が一定しない。また，調査区域外に続く東側の周溝は極端に狭くなっているが，これは確認面からの掘り込みがきわめて浅いためにこの部分のみ検出されたのであって，本来はやはり楯形を呈していたものと思われる。前方部側の周溝は，前方部端部に対して主軸線上を頂点にしてやや湾曲する傾向がみられる。特に外側の上端はこの状況が著しくなっている。全体的に墳丘側の立ち上がりが急で，外側は緩やかとなる。掘り込みは全体に浅くなっているが，くびれ部付近は一段深く掘り込まれている。

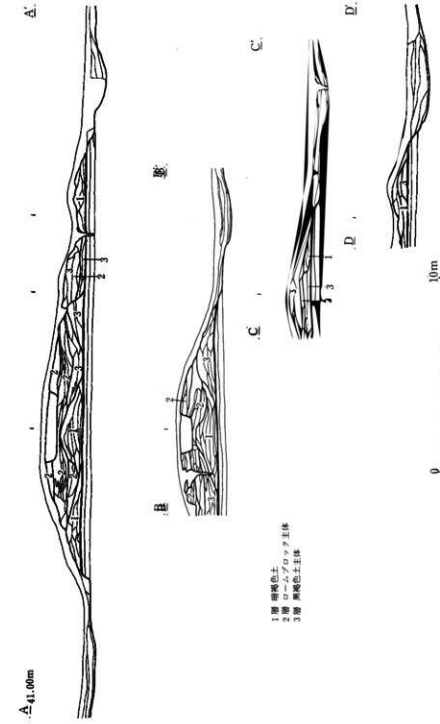
周溝の掘り方は周溝内の等高線によってある程度観察される。すなわち，後円部側は全体に浅いもので，底面もほぼフラットであるが，くびれ部にかけて徐々に深く掘り込まれ，くびれ部で最も深くなる。さらに，前方部のコーナー付近ではブリッジ様に浅くなっている。この状況は，未調査部である南側でも同じような状況を呈しているものと考えられる。これらの様相は築造者の意識的な所作によるものと思われる。

主体部（第137図，図版86，87）

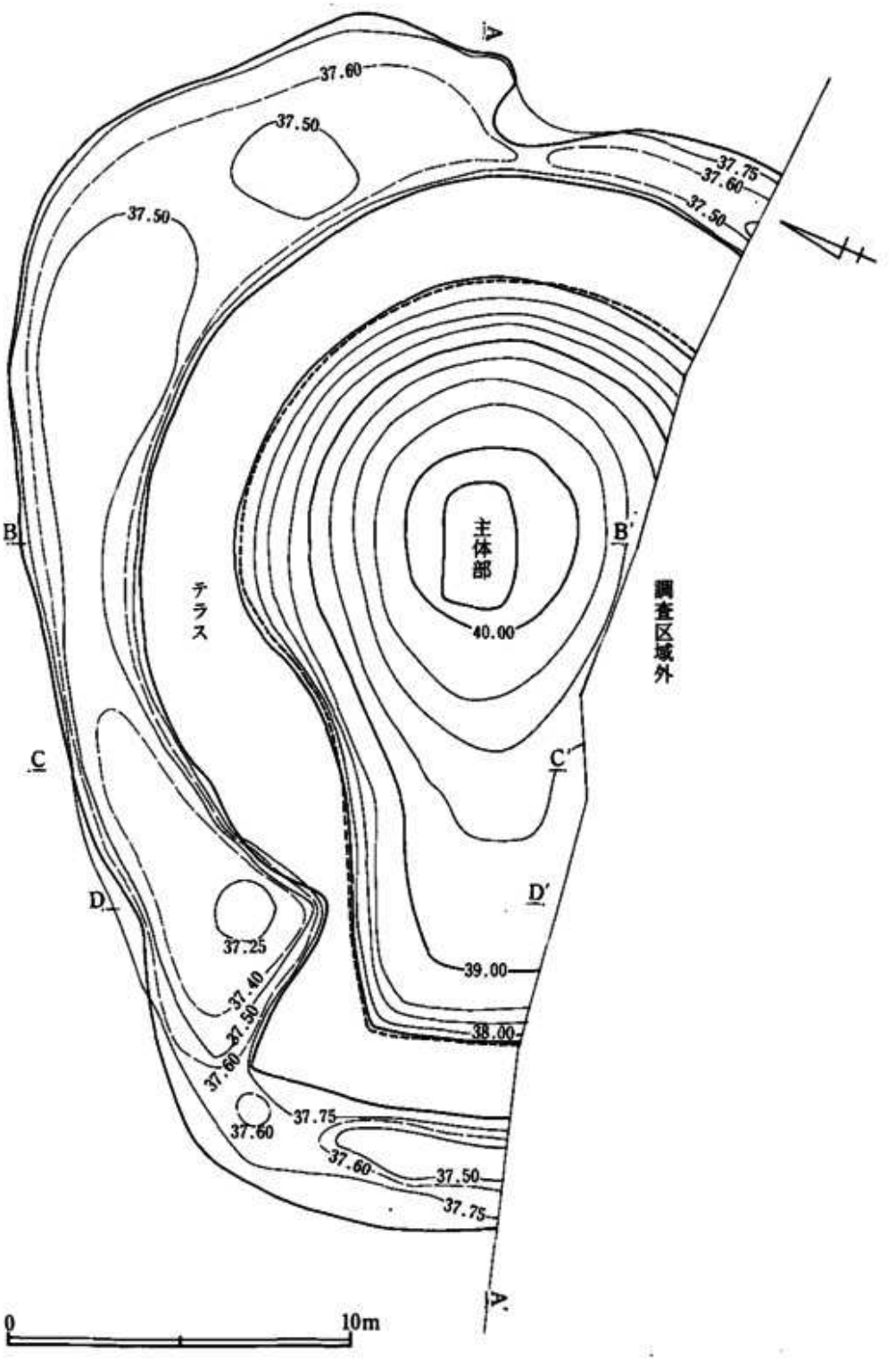
主体部は，後円部の墳頂部ほぼ中央に1基検出されたが，遺存はきわめて悪く原状を観察するには困難が伴なうものであった。掘り込みは墳丘断面図でみる限り，墳頂部よりなされたと思われる。



第134図　推出し１号墳墳丘実測図

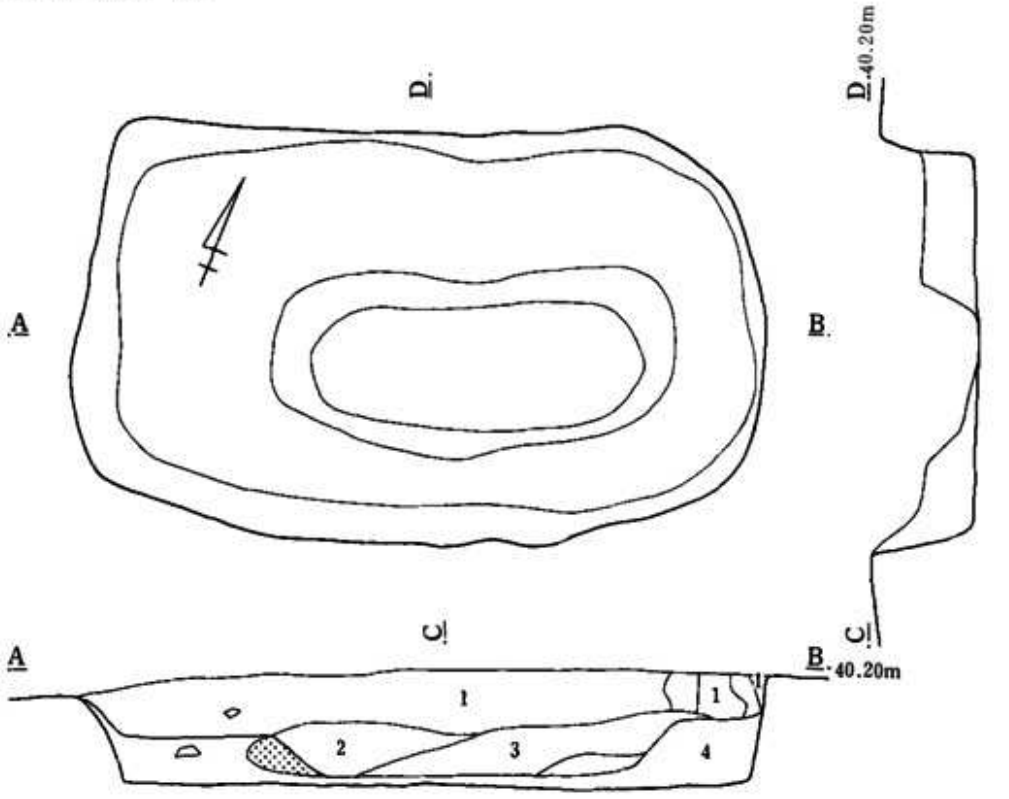


第135図　推出し１号墳墳丘断面図

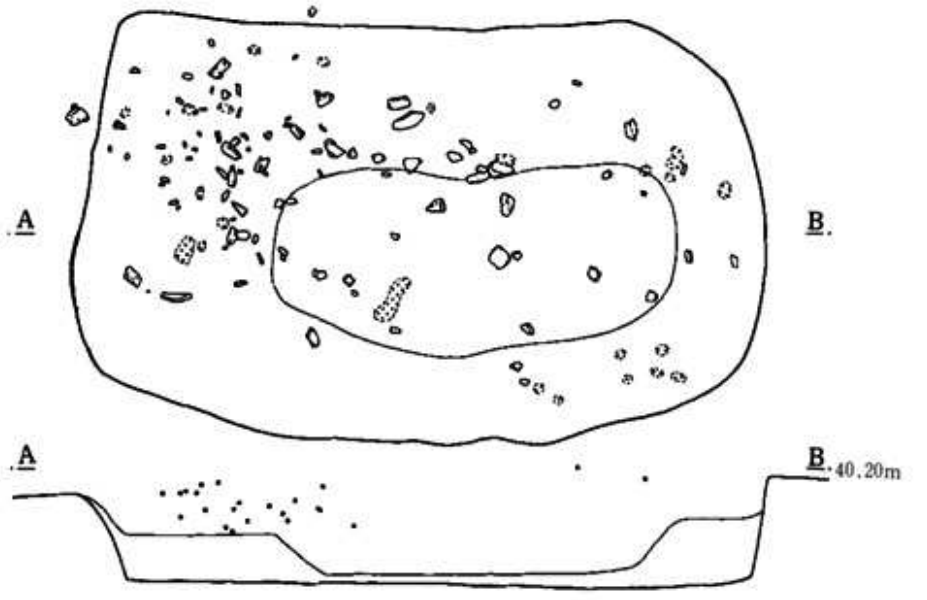


第136図　推出し１号墳墳丘(表土除去後)，周溝実測図

推出し古墳（No.2－1）



1層 褐色土層(粘性,しまり不良)
2層 明褐色土層(ローム粒,ロームブロック主体,しまり不良)
3層 明褐色土層(ローム粒,ロームブロック少量混入)
4層 黒褐色土層(ローム粒若干混入,粘性,しまり良)



第137図　推出し1号墳主体部実測図

土坑の平面形は，やや不整の隅丸長方形状を呈す。規模は，長軸3.6m，短軸2.2m，確認面からの深さ0.6mを測る。主軸方位はN－66.5°－Eを指し，墳丘の主軸とほぼ一致する。

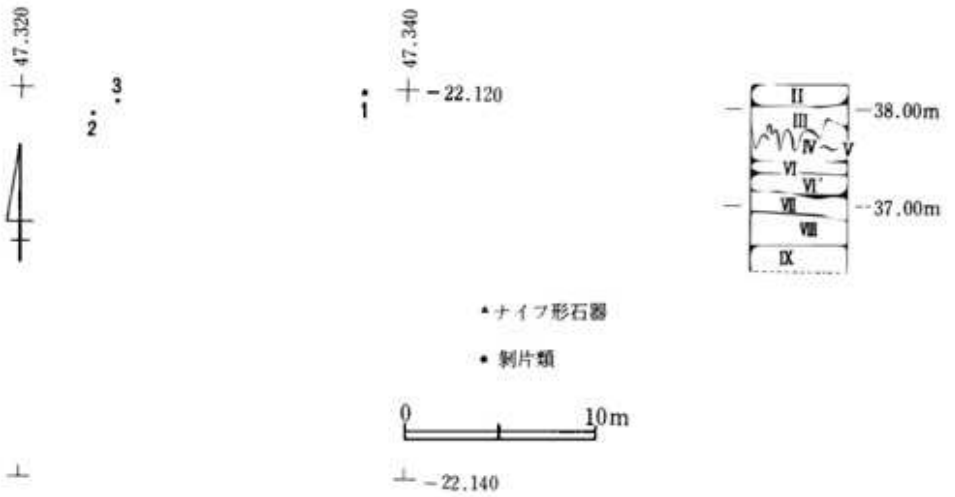
この土坑内には，長軸2.1m，短軸0.9mの落ち込みが認められる。形態はやや不整の隅丸長方形を呈す。この落ち込みの底面は明確にとらえられなかった。

本主体部は，掘り方としての土坑を掘り込んだ後に内部に棺体を置くものであるが，その棺体が何によって形成されるかが問題となる。可能性としては，木棺の直葬と箱式石棺の両者があげられる。ただ，土坑内の落ち込みを囲うような形で検出された絹雲母片岩の小片群をみるかぎり，墳頂部に設けられた箱式石棺とする方が妥当と思われる。この場合は，石棺の裏込めは粘土を含む単純な土層を呈していたものと推定されるし，また，絹雲母片岩を裏込め土のなかに詰め込んだ可能性も看取される。

主体部はかなり攪乱されており，出土遺物も直刀および鉄鏃のみで，ほとんど小片となっている。ただ，これらの遺物が掘り方の西側小口部に集中することからすれば，被葬者の頭位が東側を向いていたことが推測される。

第2節　先土器時代（第138図）

ローム層の調査は，縄文時代以降の遺構確認，方形周溝遺構調査後に，1号墳，住居跡の調査と並行して行われた。調査方法は，2×4mの試掘坑を遺構にかかる部分を除いて調査範囲



第138図　先土器時代石器出土状況図

に入れた。B 2－00区，B 2－04区で石器が出土したため調査範囲を拡張した。全調査面積は6グリット，61.2㎡で全体の6.12%にあたる。石器は3点出土しているが，出土点数も少なく，位置も離れているためユニットとはならない。

遺物は，1がB 2－04区，標高37.703m，Ⅳ～Ⅴ層の上位，2はB 2－00区，標高36.855m，Ⅷ層下位，3はB 2－01区，標高36.935m，Ⅷ層下位の出土である。

第3節　住　居　跡

002号住居跡（第139図，図版88－1）

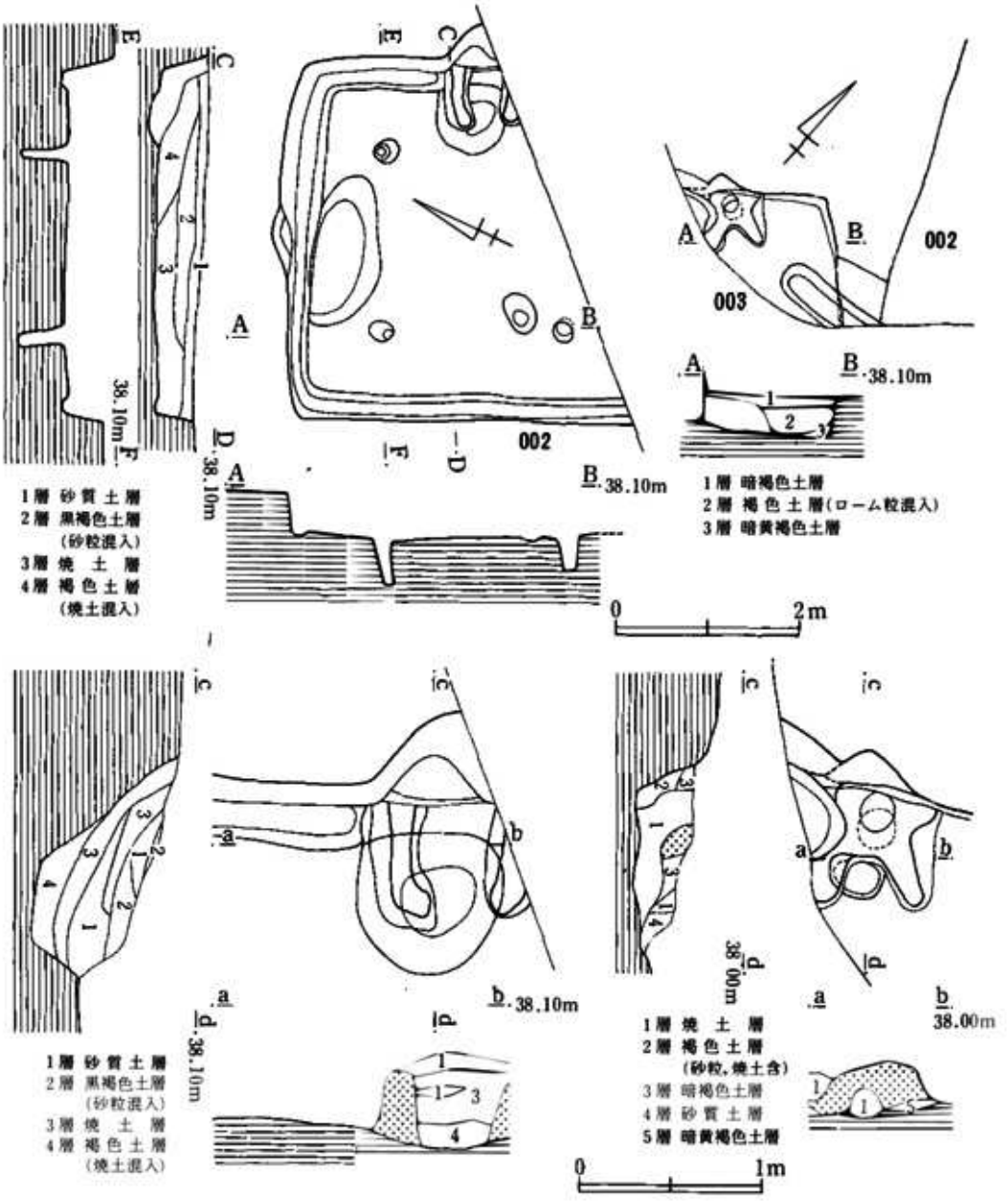
B 2区東南に位置する。南東側の約4分の1が調査区域外にあり調査できなかった。形態は柱穴の位置等を考慮すると整った正方形のプランを呈するものと思われる。規模は推定3.8×3.8m，柱穴間は2×2m，カマドの主軸はN－68°－Eである。埋没状況をみると，焼土は床面に散在的にみられるが，炭化材の量は少ない。カマドは北壁中央と東壁中央に設けられているが，カマドの状況により北カマドの使用後，東カマドが新たに設けられたものと思われる。北カマドには袖部等残存せず，砂質を帯び焼土を含む層が若干認められ，壁と火床部の掘込みが残存している。東カマドは袖部，壁の掘込み，火床部ともに良好に残存する。壁への掘込みは北カマド14 cm，東カマド48 cm，火床部の掘込みは床面から北カマド17 cm，東カマド23 cmである。壁高は41～56 cmを測り，東側にかけてやや高くなる。床面は全体的に良く踏み固められており，柱穴間は特に良好である。周溝は調査部分においては全周する。柱穴は3本認められ，深さはP 1：50 cm，P 2：40 cm，P 3：50 cmである。P 4には焼土が充満しており，深さは9 cmと浅く，遺物の出土はない。

出土遺物は少なく，破片が主であり，覆土中からの出土である。またスラグが多数覆土中から出土しており，大きさは2～8 cmと様々である。他に，完形の須恵器の坏が西壁の壁沿いに底部を壁に向けた状態で出土しており，本跡に伴なうものと思われる。この坏より，本跡の年代はいわゆる真間期に属すると考えられる。

003号住居跡（第139図，図版88－2）

B 2区調査区域の南端，002号住居跡より0.5m西に位置する。カマド，北壁，東壁の一部しか調査できず，形態，規模ともに不明である。カマドを通る主軸はN－42°－Wを指すと考えられる。覆土は自然推積の様相を示している。カマドは北西壁に設けられており良好に残存する。ロームを基盤としその上に山砂を積んで構築されている。壁への掘込みは25 cm，火床部は床面からの掘込みが10 cmを測る。壁高は約40 cmを測る。床面は全体的に良好で，周溝はまわらない。柱穴は検出されていない。

遺物は少なく，カマド上から土器が1点のほか，覆土中からの出土である。



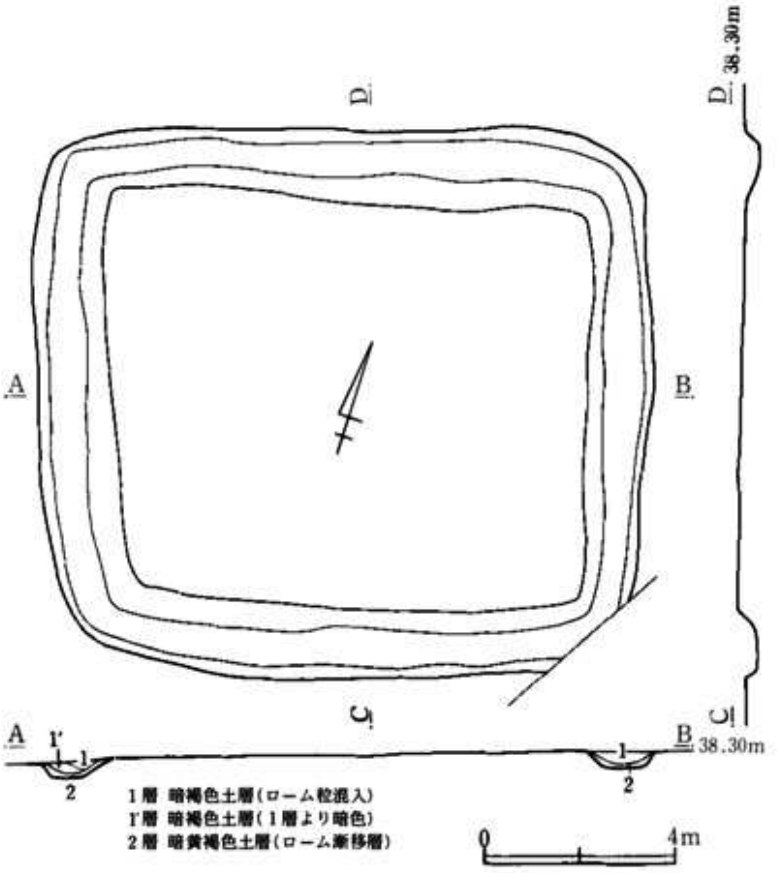
第139図　002号，003号住居跡実測図

第４節　方形周溝遺構（第140図，図版89）

Ａ１区南西，Ａ２区北西，Ｂ１区南東，Ｂ２区北東，前方後円墳周溝より東へ10m，002号住居跡より北へ５ｍに位置する。南東隅は調査区域外で調査できなかった。形態は外縁の隅が若干丸味を帯びた，隅丸長方形を呈する。規模は，外縁東西13.0m，南北11.2m，内縁東西10.0

m，南北8.3mを測る。周溝は上端幅1.0～1.7m，溝底幅0.5～0.8m，深さ0.1～0.5mを測り，西側が0.4m前後と深く，東側になるにつれ浅くなっていく。断面形は逆台形を呈す。覆土は自然推積の様相を示す。埋葬施設等は検出されなかった。

遺物は，周溝から縄文式土器，土師器が多数出土し，須恵器も2点出土している。年代は不詳である。



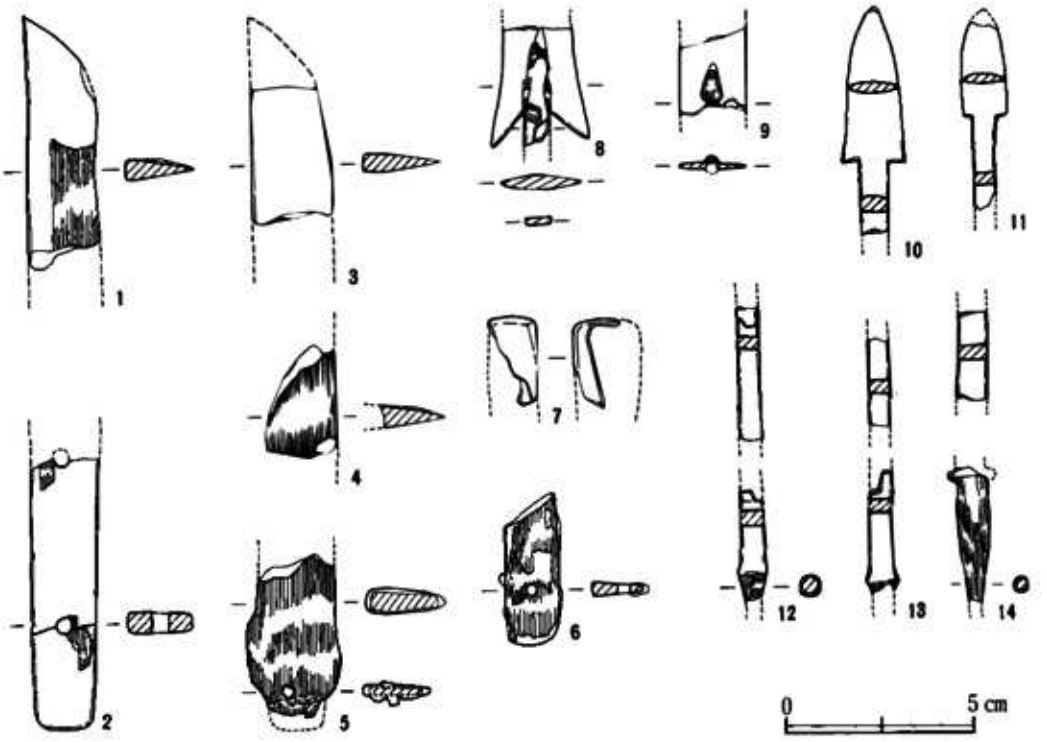
第140図　001号跡(方形周溝遺構)実測図

第3章　遺　　物

第1節　前方後円墳出土遺物

主体部出土遺物（第141図，図版90－1）

1～6は直刀の破片で，1と2および3～5は同一個体となるものであろう。いずれも平棟を呈し，平造りとなる。関部は欠損のため不明である。1の鋒はややふくらを有し，棟幅0.5cmを測る。2は茎で，茎尻はほぼ平坦である。棟幅0.5cm，茎幅1.7cmを測る。目釘孔は2ケ所穿たれており，いずれも径0.4cm程の円形状を呈す。5の茎の尻に近く目孔が長さ0.6cm程で遺存し，断面は方形を呈する。木質は比較的良好に認められる。6も茎部片であるが，やや小形となる。尻部はやや丸味をおび，円形を呈す目釘孔がみられる。7は断片ではあるが，直刀の把縁金具と思われる。内面には木質が若干遺存する。8～14は鉄鏃である。8は柳葉式，9は小片のため明確ではないが，柳葉式あるいは長五角形鏃となるものであろう。8は両丸造り，9は平造りとなり，8の腸抉りは鋭いものである。矢柄はいずれも鏃身をはさみ込んで装着するものである。9には身の中央に孔があり，矢柄を繊維状の紐でしばりつけたものがみられる。10・11は長三角形鏃となるものである。10は両丸造り，11は片丸造りとなり，10には若

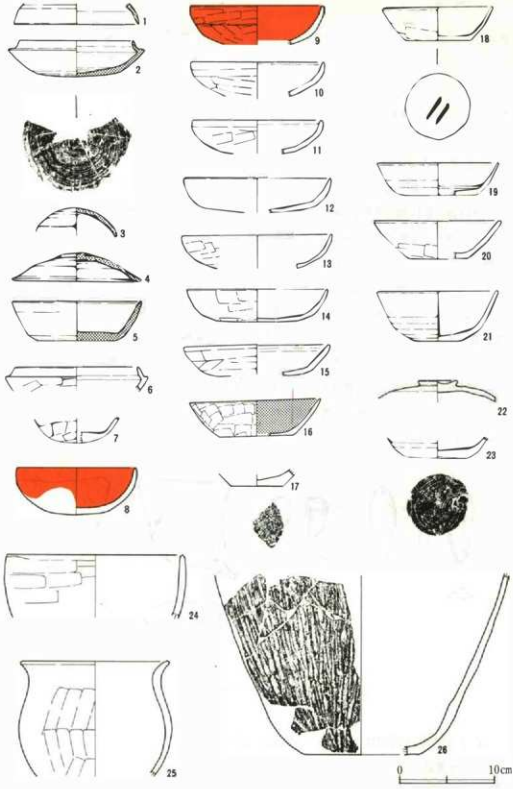


第141図　推出し1号墳主体部出土遺物実測図

干の腸抉りが認められる。12～14は箆被ぎおよび茎の破片である。茎の断面はいずれも方形を呈する。

墳丘，周溝内出土土器（第142図，図版90－2）

1は坏蓋で，口径 (13.2) cm，2は坏身で器高 3.8 cm，口径 (11.9) cm，受部径 14.4 cm を測る。セットをなすと考えられ，ともに須恵器で焼成も良好である。墳丘前方部北側の旧表土上面からの出土であり，本墳の時期決定に有効な土器であろう。1は体部内外面ともヨコナデ，2は体部内外面ナデ，底部回転ヘラケズリにより調整される。2の底部から体部にかけて「十」の線刻があり，乾燥後に刻まれたものと認められる。3，4は須恵器坏蓋で，3は天井部を¼程，4は½の遺存である。3は稜を有し，天井部外面手持ちヘラケズリ，口縁部ヨコナデ，内面ヨコナデにより調整され，天井部外面に自然釉がかかっている。4はかえりを有し，つまみは全体を貼り付けし，天井部外面は回転ヘラケズリ，内面ヨコナデ，つまみは指によるナデで調整される。5はくすべ焼成の坏で⅔欠損する。器高 4.1 cm，口径 (13.6) cm，底径 7.8 cm を測る。比較的器厚が厚く，底部ナデ，体部内外面ともヨコナデにより調整されるが，器面が全体的に磨耗しており，詳しい調整法は不明である。胎土は緻密であるが，焼成は不良で中間焼成の様相を示し，色調は暗灰褐色を呈す。6～21，23は坏で，14は¼，16，18は⅓，23は½，他は½以上欠損する。6～15は丸底，16～21，23は平底である。6は稜を有し，口縁部外面ナデ，体部外面ヘラケズリ，内面ミガキにより調整される。焼成は良好である。7は体部外面ヘラケズリ，内面ナデにより調整されるが粗雑である。8，9は丹塗土器で体部は8がヘラケズリ，9がヘラケズリ後ナデ，内面はともにナデにより調整される。ともに焼成は良好である。9には体部中央に接合痕が明瞭に認められる。10～15は，体部外面ヘラケズリ，その後12は弱いミガキ，13，14にはナデが加わり，内面ミガキ，口縁ナデにより調整される。胎土は12，13がやや粗く，他は普通で，焼成は12～14は普通，他は良好である。16は内面黒色処理されており，体部外面ヘラミガキ，内面ミガキ，口縁ナデ，底部ヘラケズリにより調整されている。胎土，焼成とも普通である。17，23は底部に回転糸切り痕が残る。体部はナデにより調整され，胎土・焼成とも普通である。18は体部ヨコナデ，体部下端手持ちヘラケズリ，内面ヨコナデ，口縁つまみナデ，底部回転糸切り後周辺ヘラケズリにより調整される。底部に「ニ」の墨書がみられる。19～21は体部内外面ナデ，20は体部外面下半ヘラケズリ，底部ヘラケズリにより調整される。21は底部が高台状を呈し，体部はやや内彎ぎみに立上がる。器面にはやや細かい凹凸が残る。22は，坏蓋でつまみが貼付けされる。つまみはナデ，天井部ヘラケズリ，体部内外面ナデにより調整される。胎土には雲母，小石を含み，焼成は普通である。24は鉢で⅙程の遺存である。体部外面横位ヘラケズリ，口縁端部，内面はナデによる調整である。焼成は良好である。25は甕で比較的小型である。胴部中位に最大径を持つ。丸味の強い胴部を持ち，頸部は



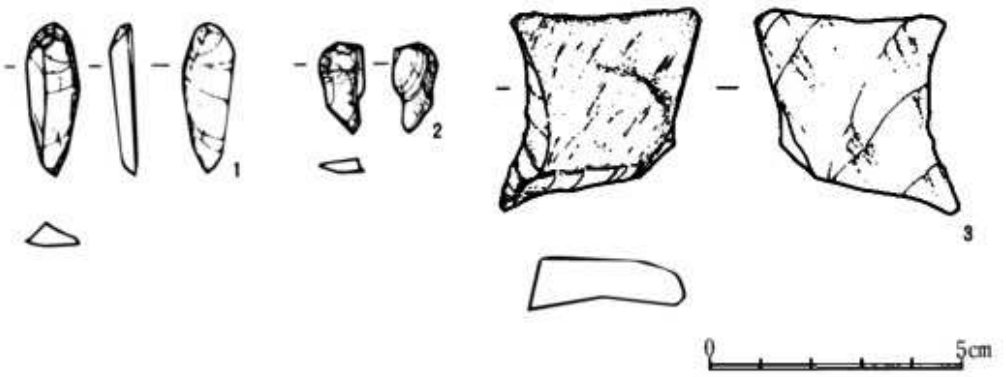
第142図　推出し１号墳墳丘・周溝出土遺物実測図

肥厚し，口縁部に向って器厚を減ずる。口頸部ヨコナデ，胴部やや斜め縦方向ヘラケズリ後ヘラナデ，内面ナデにより調整される。胎土はやや粗く，焼成は比較的良好である。26は甕で全体に厚手のつくりであり，胴部下半に縦位のヘラミガキが施される。内面はヘラナデにより調整され，底部は木葉痕を持つ。胎土に雲母，砂粒を含み，焼成は普通である。

第2節　先土器時代遺物（第143図，図版91）

先土器時代の遺物は，ナイフ型石器1点，剝片2点の合計3点である。ナイフ型石器出土層位は第III層と第IV層の不整合面にあたり，その他2点の剝片は第VII層下部から第VIII層上部である。1は調査区東側B2－04区，2はB2－00，3はB2－01区で出土した。2，3は同一文化層の遺物と考えられるが，1は別の文化層の遺物であろう。

1はナイフ型石器で小さな縦長の剝片を利用し，一方の側縁に微細な刃部調整を施す。また素材の縁辺を残し，基部にのみ両縁に調整を施す。裏面は剝片剝離面をそのまま残しており，無調整である。断面は三角形を呈する。器長 3.0 cm，器幅 1.0 cm，器厚 0.5 cm，重量1.70 g を測る。2は石器製作時に剝離した剝片である。最大長 1.7 cm，最大幅 0.9 cm，最大厚 0.25 cm，重量1.00 g を測る。石質は安山岩である。3は石核から剝離した剝片で，一面には原石面を残す。石器としてのリタッチ等は施されていない。最大長 3.8 cm，最大幅 3.8 cm，厚さ 1.0 cm，重量19.00 g を測る。石質は安山岩である。

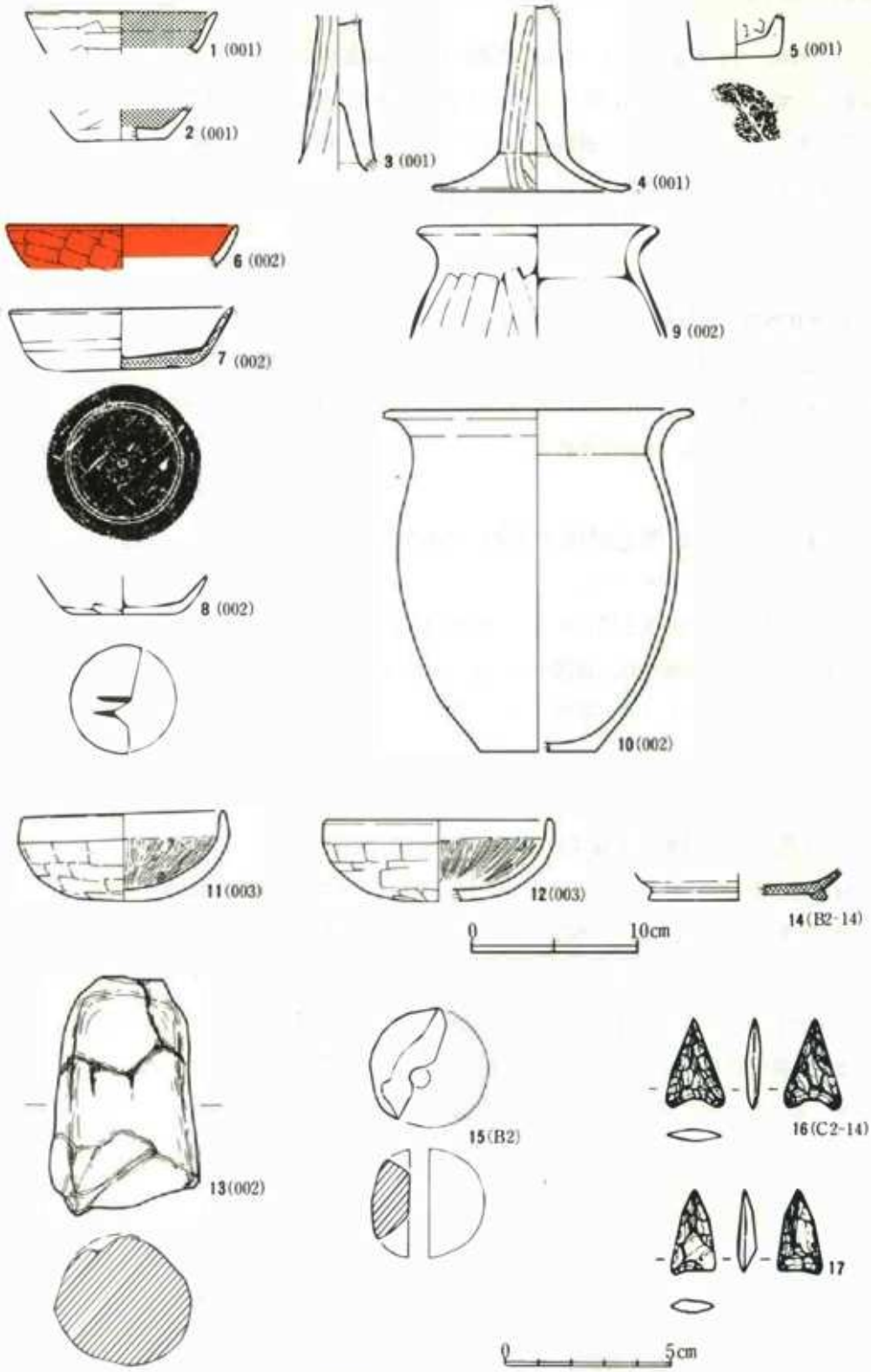


第143図　出土石器実測図

第3節　住居跡出土遺物（第144図，図版91）

002号住居跡（第144図6～10，13，図版91）

7の須恵器坏は壁際に出土した伴出土器であり，他はすべて覆土中からの出土である。6は坏で，⅙程の遺存である。体部外面ヘラケズリ，内面ヘラミガキ，口縁端部ナデにより調整さ



第144図　001号方形周溝遺構(1～5),002号住居跡(6～10,13)
003号住居跡(11～12),包含地(14～17)出土遺物実測図

れる。全面に丹彩が施される。7は須恵器の坏で口縁部を若干欠損するが，ほぼ完形である。器高 3.6 cm，口径 13.5 cm，底径 8.6 cm を測る。体部内外面ナデ，体部外面下端ヘラケズリ，底部手持ちヘラケズリにより調整され，底部には2本一単位の円形の線刻が認められる。8は坏で体部下半～底部の遺存である。底部一方向のヘラケズリ，体部内外面ナデ，体部外面下端手持ちヘラケズリにより調整される。底部に「ニ」の墨書がみられる。13は支脚であるが，下半部を欠損する。

003号住居跡（第144図11，12，図版91）

11，12は坏で，11は口縁部が若干欠損するがほぼ完形で器高 5.2 cm，口径 12.0 cm を測り，12は¼程の遺存である。底部は丸底，口縁部と体部の境に稜の痕跡を留める。口縁部ヨコナデ，体部外面ヘラケズリ，内面は放射状のヘラミガキが施される。

第4節　方形周溝遺構出土遺物（第144図1～5，図版91）

すべて周溝覆土から出土した。

1，2は坏で同一個体と思われる。口縁部内外面ナデ，体部外面ヘラケズリ，内面は黒色処理されヘラミガキが施され，底部ナデにより調整される。3，4は高坏脚部で，外面ヘラミガキ，内面柱状部ヘラケズリ，裾部ヘラミガキにより調整される。5は底部に木葉痕のある土器で手捏土器であろうか。

第5節　包含地出土遺物（第144図14～17，図版91）

14は須恵器長頸壺底部で，底部径（高台径）（10.7）cm である。高台部分は貼付けされる。底部は回転ヘラナデ，高台，体部外内面はナデにより調整される。15は土玉で⅓程の遺存である。孔周囲に面とりの痕が見うけられる。16，17は縄文時代の石鏃である。16は長さ 2.6 cm，幅 1.8 cm，重さ1.52 g を測り，石質は珪質砂岩である。周溝内より出土した。先端部を鋭く作り出し，両面はていねいな加工が施される。17は古墳の盛土中より出土し，長さ 2.5 cm，幅 1.3 cm，重さ1.50 g を測る。両面に加工を施す。石材は脆く，磨耗が著しい。石質は泥岩である。

第4章　小　　結

前方後円墳

本墳は，推出し1号墳と仮称して調査を実施したが，本来は成田市の東金山から野毛平を経て四本木まで続く野毛平古墳群のなかに含まれるものである。この古墳群は，昭和48年度の成田市の分布調査によると，円墳22基で構成されているものであり，この段階では前方後円墳は確認されなかったようである。実際，調査前では前方部の確認がむずかしく，伐採後に前方後円墳として明らかになったものである。そうなると，本墳は野毛平古墳群中唯一の前方後円墳であり，その意味するものはかなり重要なものと思われる。しかしながら，その性格を考えるうえで最も重要な主体部が荒廃した状況であったことはまことに残念である。

まず，本墳の営造年代を検討してみる。この手掛りとなるものは，主体部から出土した鉄鏃と，旧表土端部より検出された須恵器の坏のみである。鉄鏃は断片的な資料しかないために明確な決め手とはならないであろうが，身の形態からすれば，平根の長三角形鏃や柳葉鏃がみられることより，6世紀の中葉から後半にかけての所産と考えられる。一方，須恵器は坏と蓋がセットとしてとらえられる資料であり，年代の根拠としては確実なものである。口径に比して器高が低く，底部が平底状を呈し，口縁の立ち上がりが低い点からみて，6世紀の後半から末葉にかけての時期に相当しそうである。以上から考えれば，本墳の築造年代は，6世紀の後半から末期頃にあてはめることができよう。

次に，本墳の墳丘および周溝について検討してみる。墳丘は，後円部形成後前方部を築造したものであり，そこにはいくつかの工夫が採られていることは前述したとおりである。旧表土でプランを確認する限り，前方部は開きはほとんど認められず，むしろ狭小化する傾向すらあり，周溝の形態とは相似しないものである。また，周溝は，全体的に整っているものの，前方部が極端に小さく，前方後円墳と呼ぶにはやや無理がある状況である。

以上のような例を他の古墳との比較で検討してみると，共通するものとして山武町に所在する森台7号墳があげられる。埴輪列を伴なう前方後円墳で，6世紀の後半から末期かけての造営である。この古墳の周溝は本墳の周溝の形態ときわめて相似している。さらには，土浦市の石倉山5号墳，牛堀町の観音寺山1・7号墳でも主体部のあり方が異なるものの墳丘および周溝に共通する要素が認められる。これらはいずれも終末期の様相をもつものである。これらから本墳を類推することは無理があるかもしれないが，本墳のような特異な形態の墳丘および周溝は，当該地域における前方後円墳の終末期的な様相をもつものではなかろうか。類例の増加を待ちたい。

推出し古墳（№2－1）

参考文献

杉山晋作「古墳群形成にみる東国の地方組織と構成集団の一例―公津原古墳群とその近隣」『国立歴史民俗博物館研究報告』第1集　1982

吉田章一郎他『千葉県山武町森台古墳群の調査』森台遺跡発掘調査団　1983

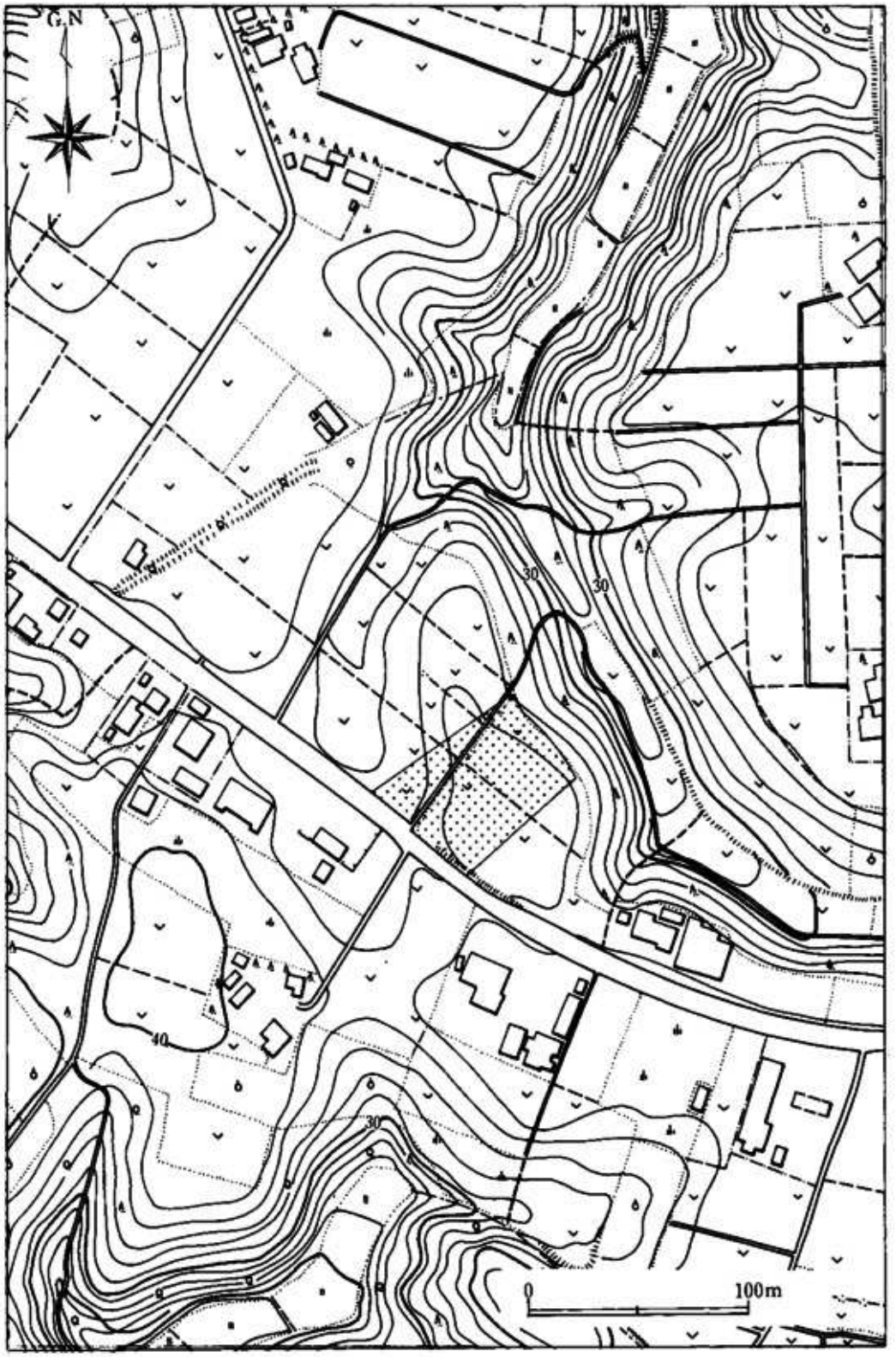
茂木雅博『常陸観音寺山古墳群の研究』　1980

大森信英他『土浦市烏山遺跡群』茨城県住宅供給公社　1975

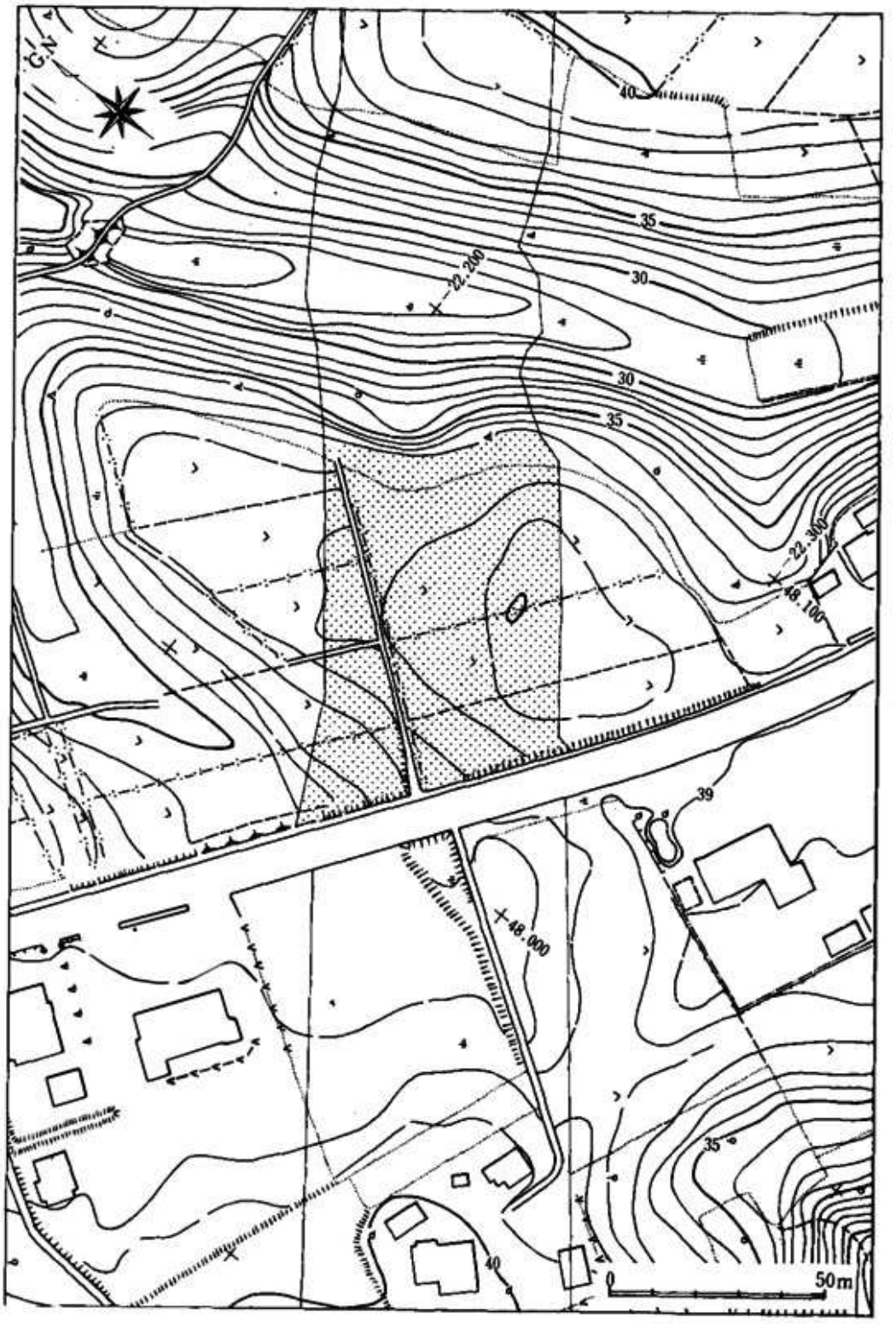
茂木雅博「各地域における最後の前方後円墳東日本Ⅱ―茨城県」『古代学研究』106　1984

野 毛 平 古 墳 群（No.3）

(211—010)



第145図　野毛平古墳群周辺地形図（1/3,000）



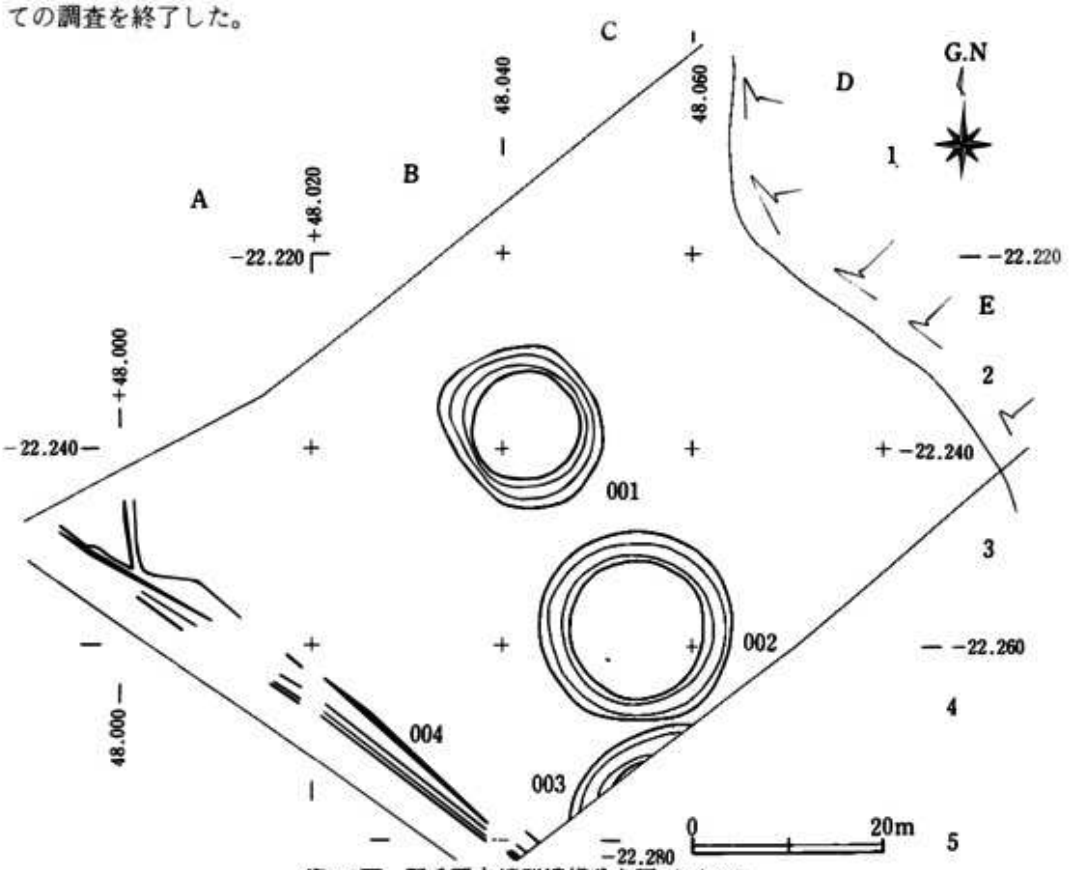
第146図　野毛平古墳群地形図（1/1,500）

第1章　調　査　概　要

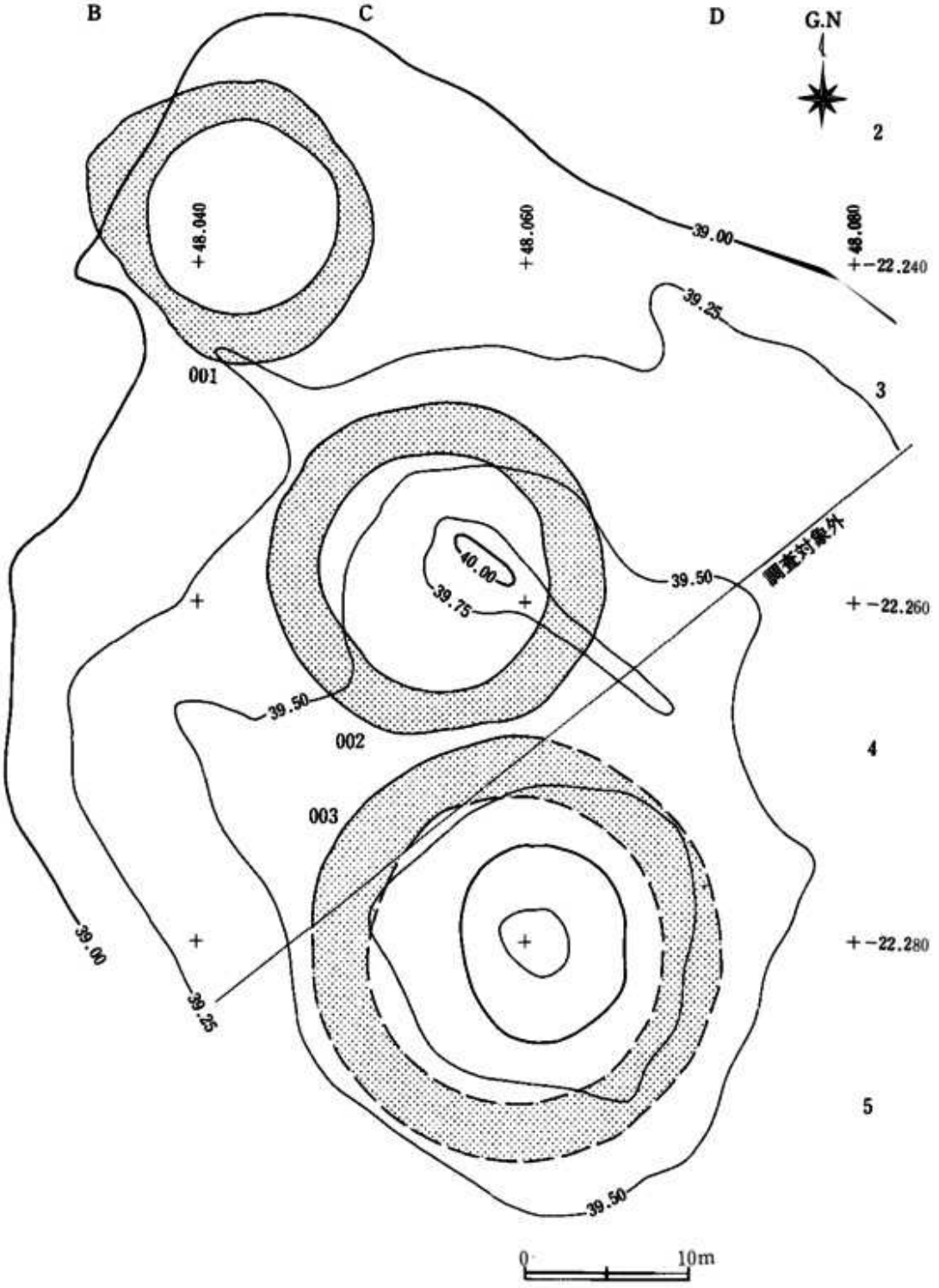
遺跡調査対象は古墳３基及び包含地2,000㎡であった。調査に先立って地形測量を行ない，確認調査後，本調査に移行した。古墳はすでに耕作等により墳丘自体がかなり低くなっているため，遺跡全体に方眼網をかけ，それに沿う調査区設定を行なった。包含地も当初の発掘区の設定方法を踏襲し，20×20mの発掘区あたり，幅２mのトレンチを52m設けたもので，全面積の約26％を調査するものであった。

古墳は主体部がすでに削平されてしまったようで確認されず，周溝のみの検出であった。その他には，溝状遺構を２基確認している。

昭和53年７月７日に調査関係者により鎮魂祭を行ない，同月24日から調査に着手した。26日よりわずかに残存する墳丘の測量に着手し，設定されたトレンチの発掘も開始された。８月２日には周溝３ケ所，溝２ケ所が確認され，その成果を踏まえて３日より表土除去を開始，Ｄ２区，Ｄ３区，Ｅ３区，Ｂ２区，Ｃ１区，Ｃ２区の順で行ない，９月２日にはほぼ終了した。９月５日より溝状遺構の調査を開始，その後，先土器時代の確認調査を行ない，10月31日にすべての調査を終了した。



第147図　野毛平古墳群遺構分布図（1/800）



第148図　地形測量図（1/400）

第2章　遺　　構

第1節　古　　墳

001号墳（第149，150図，図版94－2）

本墳は墳丘がまったくなく，遺構確認のためのグリットにより確認された。

地形的にみると古墳の中心は北東側の谷斜面より約26m台地中央に入った平坦面上に位置している。調査の結果，周溝の形状により墳形は円墳だったと思われる。周溝の内径は東西11.7m，南北11.5mで，この範囲内に封土が盛られていたのであろう。

周溝は完全に一周し，長径17.6m，短径14.7mを示し，形状をみると北西－南東にやや長い変形円形である。北西側が幅4.1mと幅広になっているが，他はほぼ2.5m前後を測る。溝底の高低差をみると北西側の幅広の地点がいちばん低く，北東，南西地点で約 56 cm ほど高くなる。埋没状況は黄褐色土層の上面に黒褐色土層となり，以下表土層を基本とする。

封土はまったく確認できなかった。

内部施設もその痕跡はまったくなかった。

周溝内より，土師器坏が出土した。しかし溝底より約 10 cm 浮いた状態であった。

002号墳（第151～153図，図版95～97）

本墳はわずかな高まりが残る古墳であった。地点的にはＣ３，Ｄ３，Ｃ４，Ｄ４区内に位置する。

地形的には台地平坦面上にあり，標高39mを測る。墳丘はまったく認められなかった。調査は散布地の調査区を投影し，それにより周溝を確認した。周溝の形状より墳形は円墳だったと思われる。

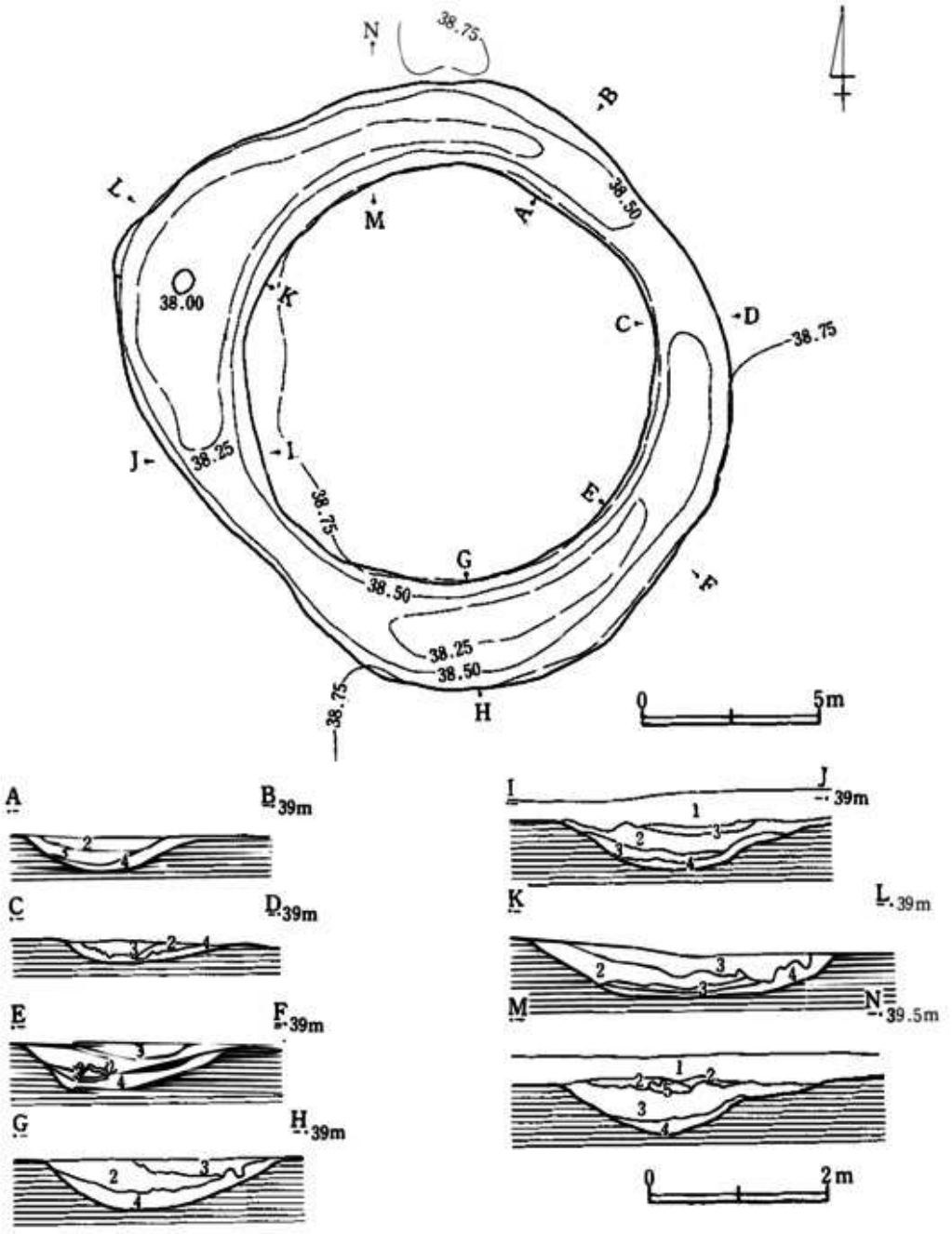
周溝は完全に一周し，長径20.6m，短径20.0mを測り，ほぼ円形である。溝底の高低差はほとんどなく，平坦である。溝は幅3.0m，深さ 50～60 cm を測り，黄褐色土層，黒褐色土層がほぼレンズ状に埋没していた。一部有機質の黒色土層が認められた。

封土はまったく確認できなかった。

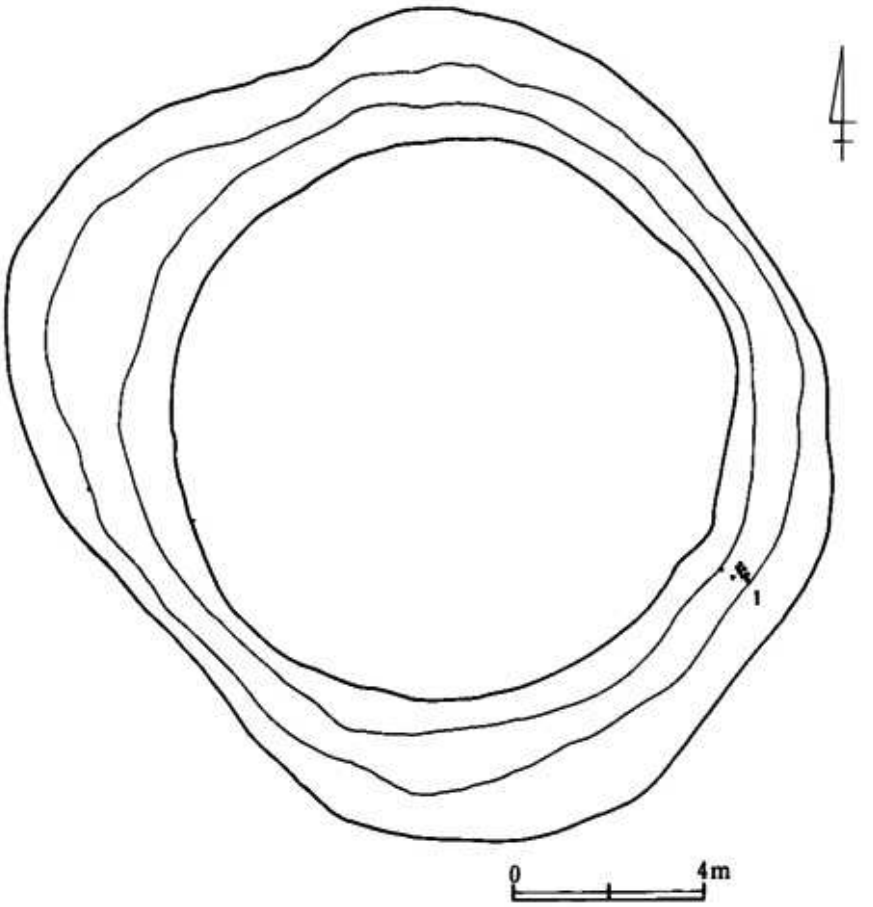
内部施設もその痕跡はまったくなかった。

南側を003号墳の周溝と切り合うが土層が薄く，また，耕作等による攪乱のため新旧関係は不明であった。

西側の周溝内より，かなり細かく破砕された須恵器の大甕が確認されている。ほとんどが周溝内に位置し，東西10m，南北15mの範囲に散布していた。その多くは溝底より約 40 cm 前後，浮いた状態であった。また，墳丘下の南西寄りより，直刀と思われる破片が６点出土した。その内，1.6m離れた直刀と3.6m離れた直刀が各々接合した。このような状態より推察するな



第149図　001号墳実測図



第150図　001号墳遺物出土平面図（1/160）

らば，主体部は完全に破壊されてしまったと思われる。

003号墳（第151～153図，図版96，97）

調査対象地外に接し，一部の周溝の確認に留まった。

位置的には002号墳に接し，幅 3 m，深さ 40 cm 前後を測る円形の周溝であった。

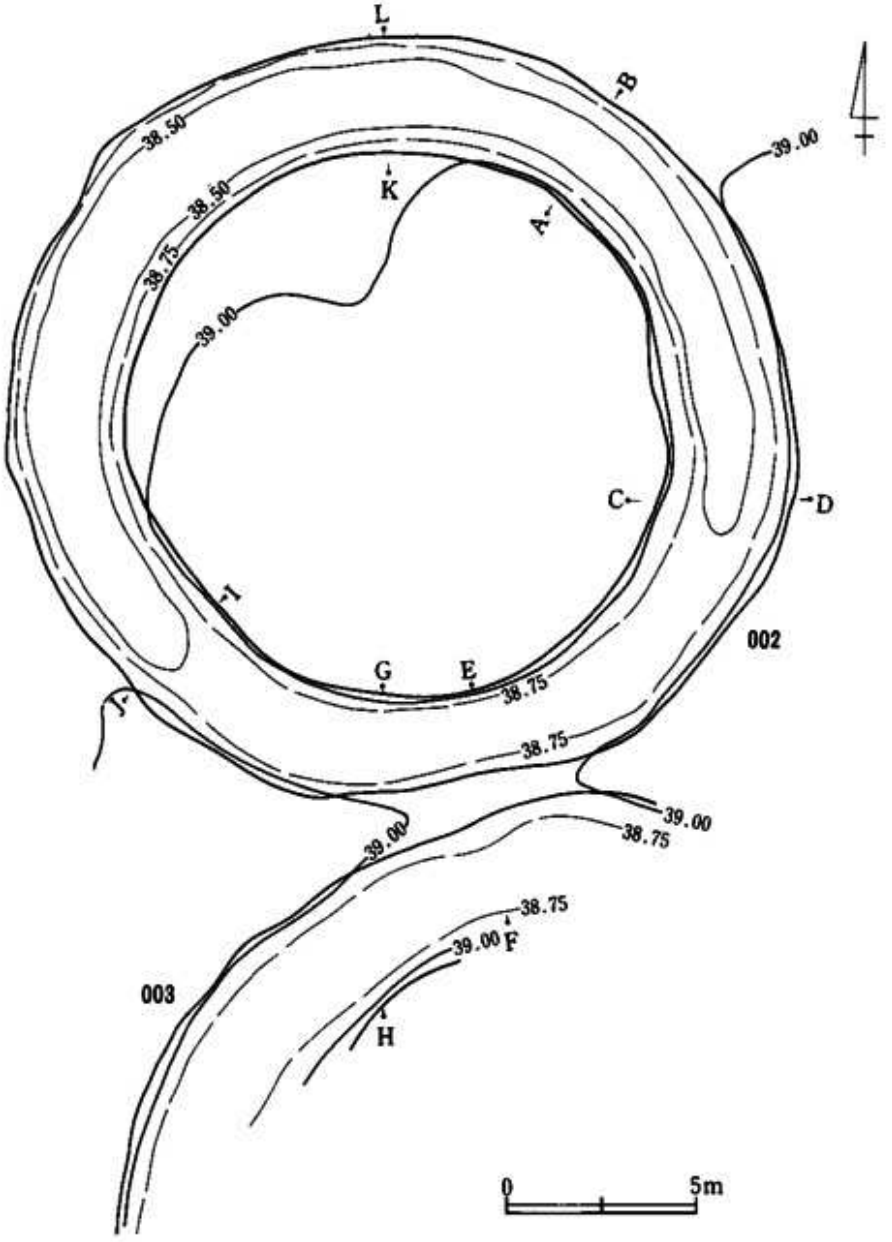
第151図に示すように，周溝の外周で直径25m前後を測る円墳と思われる。

周溝内より，坏，甕がほぼ一括で，また，内縁の地点より，石製紡錘車が出土した。

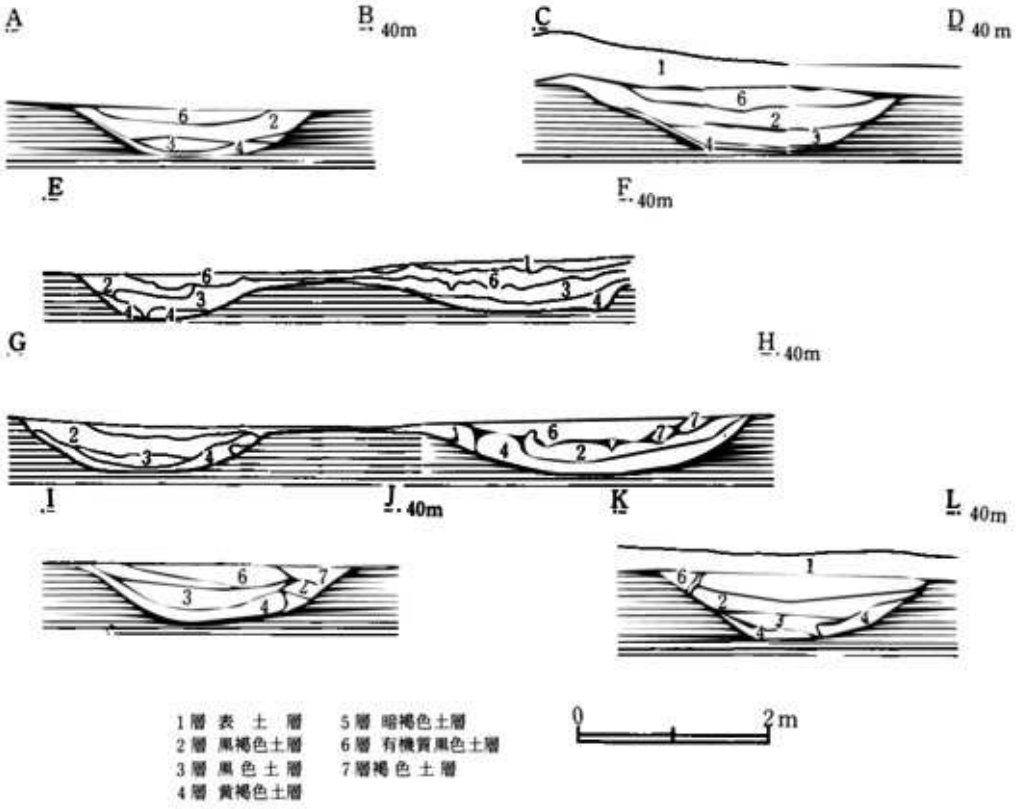
第2節　溝状遺構

004号跡（第154，155図，図版98）

遺跡の南西端，国道51号線に接して確認された。二条の溝が接して構築されており，台地平



第151図　002号，003号墳実測図（1/200）



第152図　002号，003号墳土層断面図（1/80）

坦面上より西側の谷の谷頭に向かって直線的に延びていた。また，先端部の谷に落ちる手前で北方に延びる溝も確認された。

1号溝の規模は幅約0.8m，長さ10m以上，深さ 16 cm で，掘込みは浅いが，底面は硬くしまったロームで，傾斜面上に構築されている。

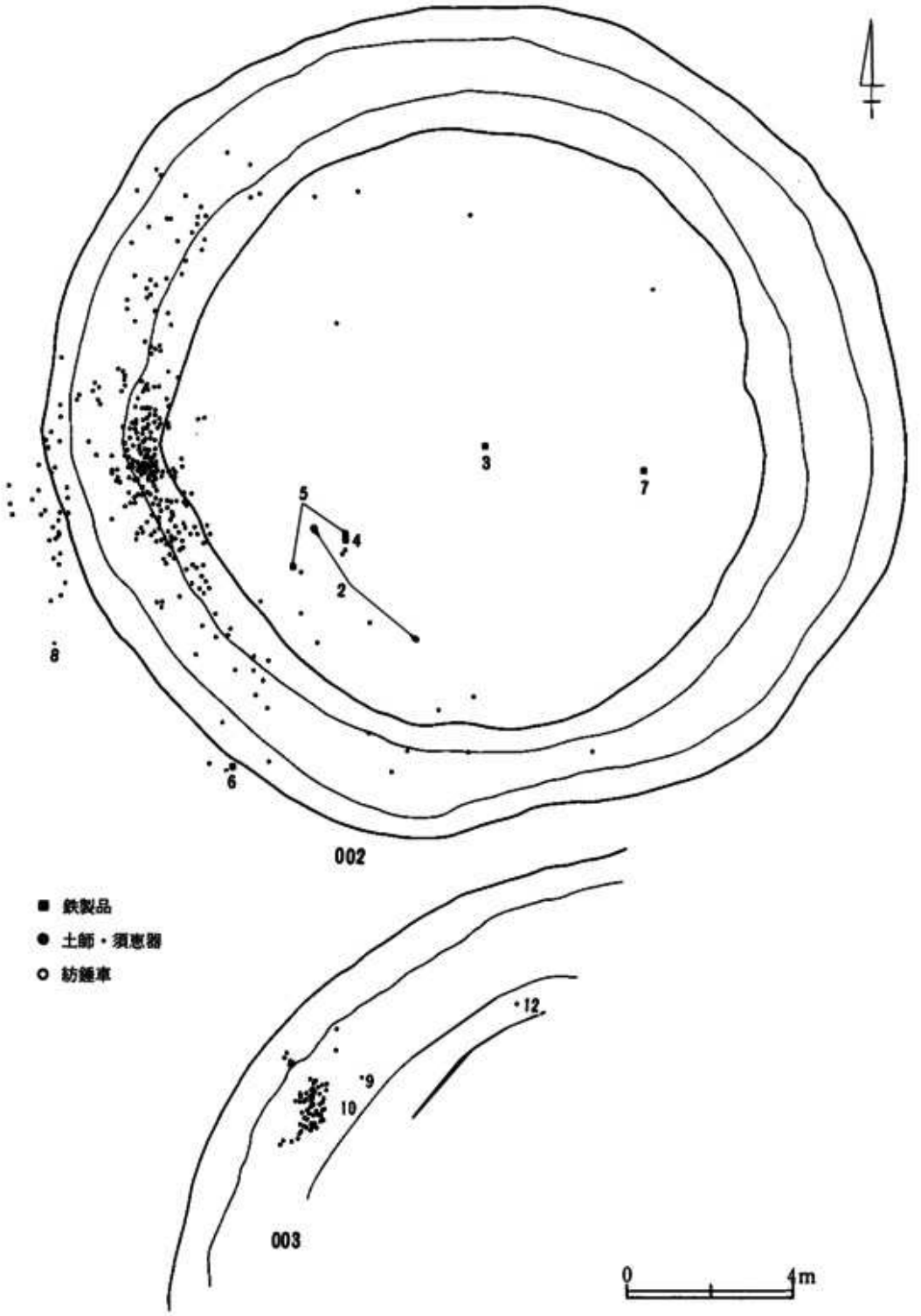
2号溝の規模は幅約2m，長さ60m以上，深さ0.5mで底面の形は舟底形を示す。

3号溝の規模は幅1.2m，長さは2号溝と同様に60m以上，深さ 30 cm で底面は丸味をもつ。

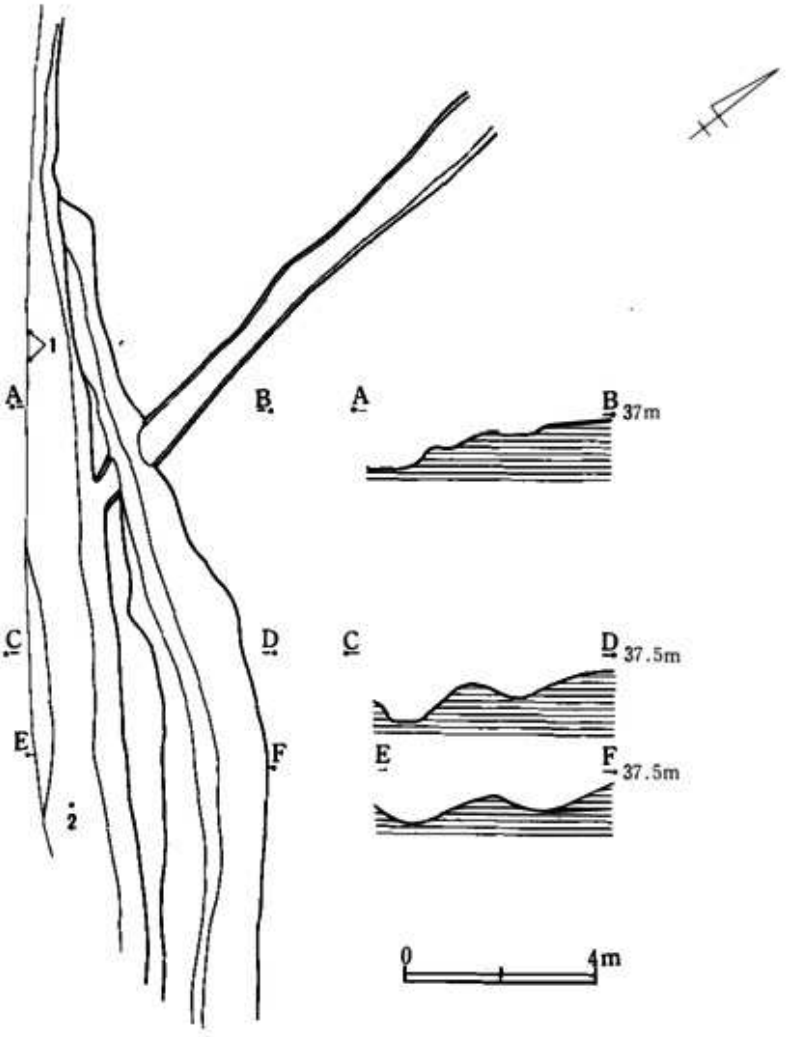
埋没状態をみると2，3号溝では底面にローム粒，ロームブロックを含む褐色土層が広がり，その上面に，暗褐色土層，また，有機質で軟質の黒褐色土層が確認された。

新旧関係をみると1号溝→2号溝→3号溝の順に新しくなる。

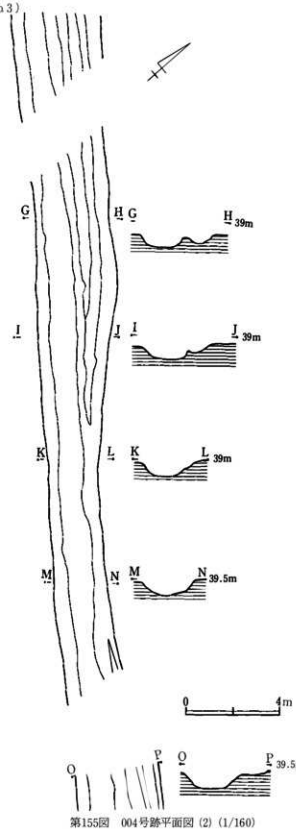
遺物は2号溝の溝底より，土師器の甕と坏が出土した。



第153図　002号，003号墳遺物出土平面図（1/160）



第154図　004号跡平面図 (1) (1/160)



第155図　004号跡平面図（2）（1/160）

第3章　遺　　物

第1節　古墳出土遺物（第156図，図版100）

1は001号墳，2～8は002号墳，9～12は003号墳出土遺物である。

1は体部の深い坏で，底部は焼成後人為的に穿孔される。口縁下の稜は外方に突出し，口縁部は外彎ぎみに外傾する。口縁部内外面とも丁寧に横ナデが施され，体部にはヘラケズリが加えられる。焼成，胎土とも比較的良好で，底部内外面を除き赤彩が観察される。

2～5は直刀片で，2～4は刀身部，5は茎部である。接合はしないものの形状よりみて同一個体となるものであろう。2は刀身幅 3.4 cm，棟幅 0.7 cm を測る大形のもので平棟となる。5も厚手であるが，茎尻にかけて徐々に幅を減じる。目釘は遺存しないものの，孔は関部側に径 3 mm 程で穿たれている。木質の遺存が観察される。6は身が剣身形を呈す鉄鏃で片丸造りとなる。7は小片であるため明確ではないが，基部に若干折り返しが認められることにより，小形の摘鎌と推定される。木質の遺存は認められなかった。

8は口径 39.2 cm を測る大形の甕である。口頸部は胴部より屈曲し，外反する。口唇部は下端を下方に向けた突帯を貼付し断面三角形状を示す。口頸部は上位に断面三角形の突帯を2本1単位で上下に配し，そのほかに櫛描き波状文をめぐらしている。胴部には外面にのみ擬似格子目文を施す。胎土・焼成とも良好で，部分的に自然釉が観察される。9は坏で，1同様底部が人為的に穿孔される。1に比して口縁部の外反度が強く，器高も低くなる。調整はほぼ同様で，遺存部全面に赤彩が観察される。

10・11は甕の口縁部および底部片で，同一個体の可能性が強い。胎土・焼成とも良好で明褐色を呈す。

12は整美な紡錘車で上径 2.9 cm，底径 4.8 cm，重さ47.45 g を測る。孔径は 0.9 cm を測る。調整は比較的丁寧で，砥石による擦痕が明瞭に観察される。石材は滑石であろう。

第2節　溝状遺溝出土遺物（第157図，図版100）

1は甕の胴部片で胴中位で微かであるが屈曲する。推定で胴径は 19 cm を測る。器面は三段にわたり叩き目痕を認める。

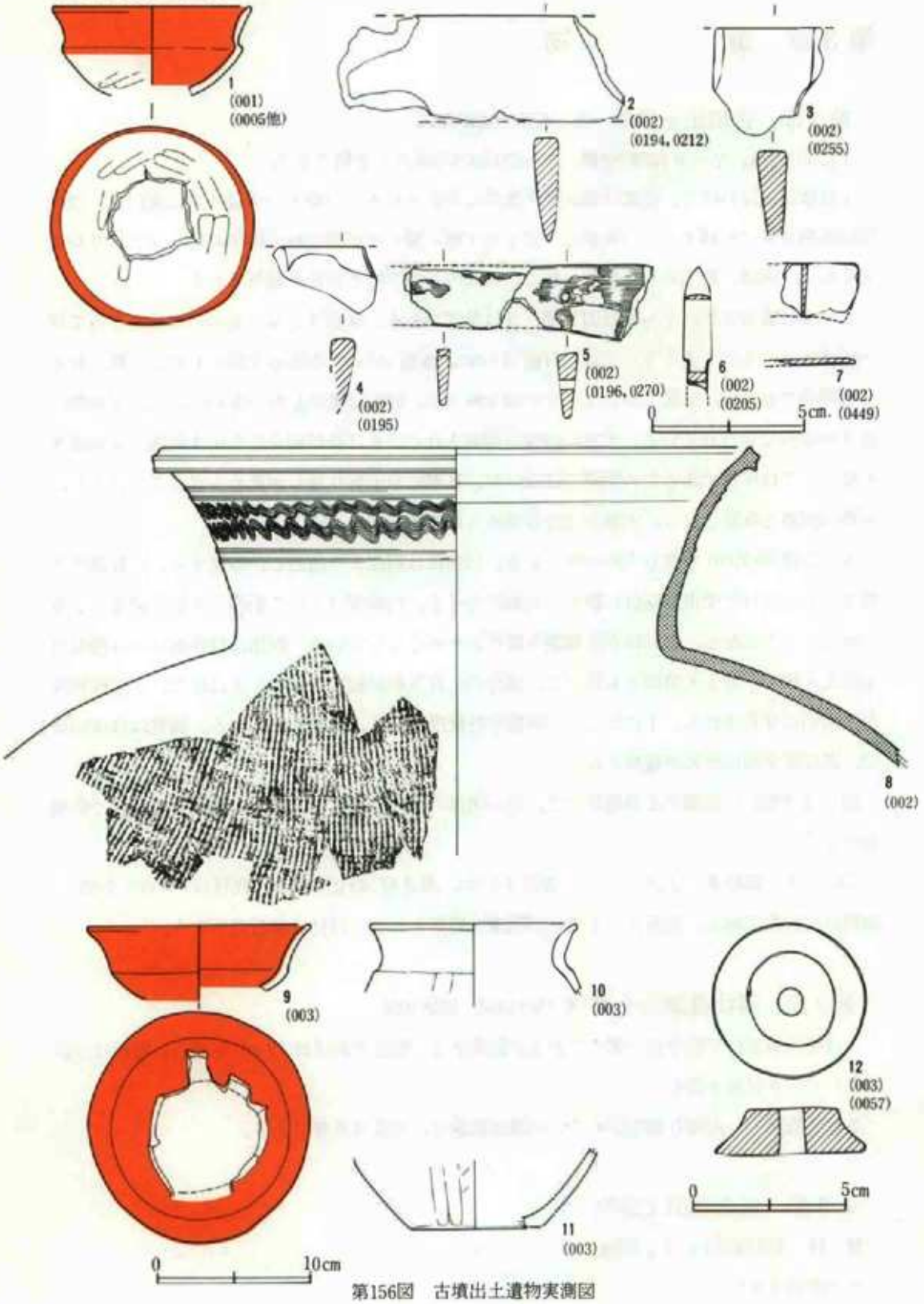
2は坏底部で，糸切り痕を認める。色調は褐色で，焼成は良好である。

第3節　包含地出土遺物

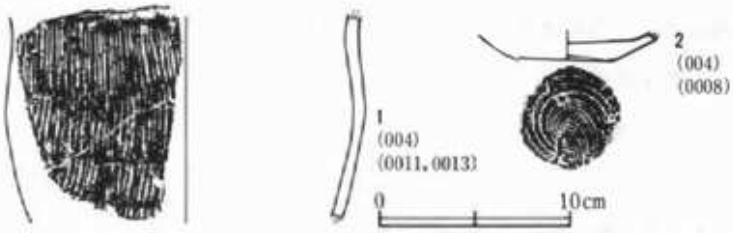
剝　片（第158図1，2，図版101）

2点確認された。

野毛平古墳群（№3）



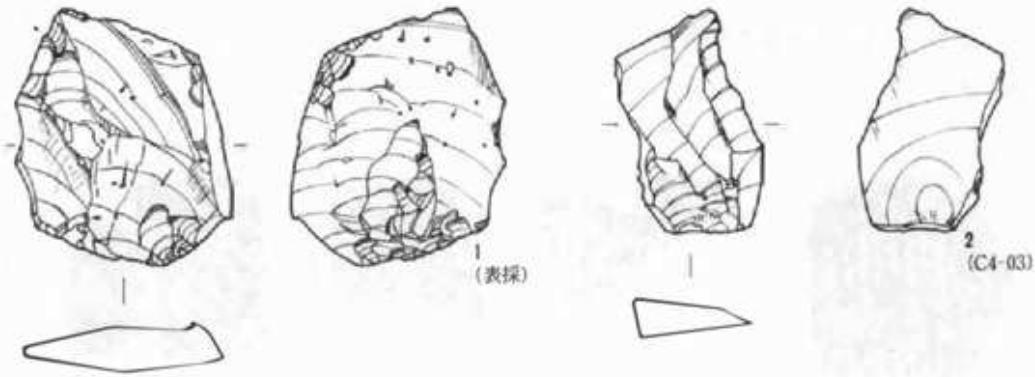
第156図　古墳出土遺物実測図



第157図　溝状遺構出土遺物実測図

1は表採であるが最大長 4.78 cm，最大幅 4.55 cm，厚さ 0.94 cm を測る大形の剝片である。黒曜石製。

2は正面に剝離面を3面もつ。最大長 3.86 cm，最大幅 2.50 cm，厚さ 0.8 cm を測る。打面は剝離面にある。頁岩製。



第158図　出土遺物実測図

縄文土器（第159図1～7，図版101－2）

1，2は縄文時代早期前半，撚糸文系土器である。ともに口縁部破片で，使用された原体は1がL，2はRで縦位に施文されている。1は口唇で若干外反し円頭状を示し，2は微かに外反し，口唇は角頭状である。器厚は 9～11 mm。胎土は砂粒を含む撚糸文系土器群独得のものである。焼成は良好で色調は淡褐色を示す。

3は縄文時代早期末の沈線文系土器である。口縁部破片で文様構成は細沈線文を縦位に1本入れ，それを基本として斜位に整然と施文されている。口縁部は円頭状を示す。表面は横方向の調整痕を認める。器厚は 9 mm で，胎土は長石などを含み，焼成は堅緻である。

4は縄文時代中期後半の加曽利ＥⅡ式土器である。施文原体ＲＬを縦方向に施文し，太沈線

文で文様帯を区画して，一方を磨消している。胴部破片で，器厚 11 mm，胎土は若干砂粒を含み，焼成は普通，色調は黒褐色を示す。

5，6，7は縄文時代後期の土器である。

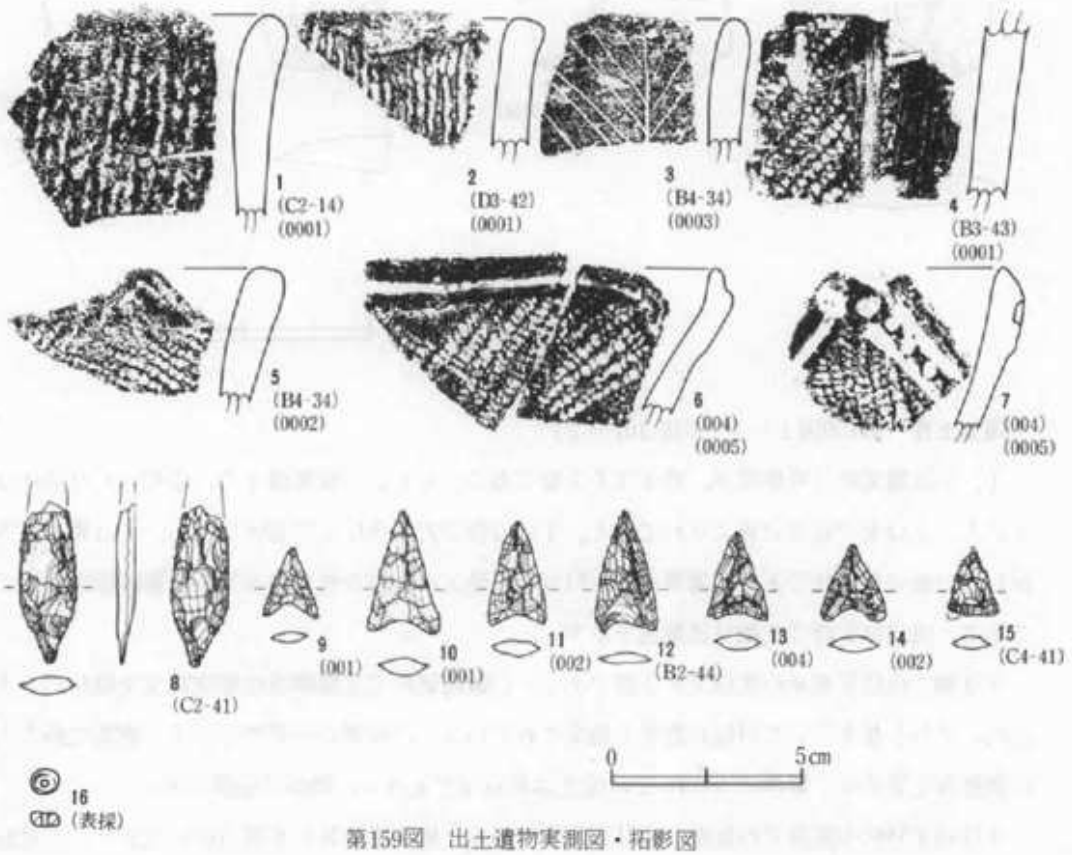
5は波状口縁を呈し，口唇はやや角頭状を示し，微かに外反する。施文は器面一様に調整を行なってのち，原体ＬＲを縦方向に施す。器厚は 10 mm，胎土には微かに砂粒を含み焼成は良好，黒色を呈す。

6，7ともに波状口縁を示し，口唇は円頭形でやや尖る。口唇直下に沈線が口唇に沿うように周回する。口縁はやや外反する。施文原体はR｛L/L｝で斜位に施している。7は隆帯上に円形の刺突を加える。器厚は6は 7 mm，7は 9 mm 前後を測る。焼成は良好で色調は黒褐色を示す。

石　器

尖頭器（第159図8，図版101－1）

先端部を欠損する有茎の尖頭器である。成形のための剥離を左右から施し，細部には押圧剥離を認める。



第159図　出土遺物実測図・拓影図

石　鏃（第159図 9～15，図版101－1）

7点出土した。9，10は安山岩製，11～14までがチャート製，15は黒曜石製である。

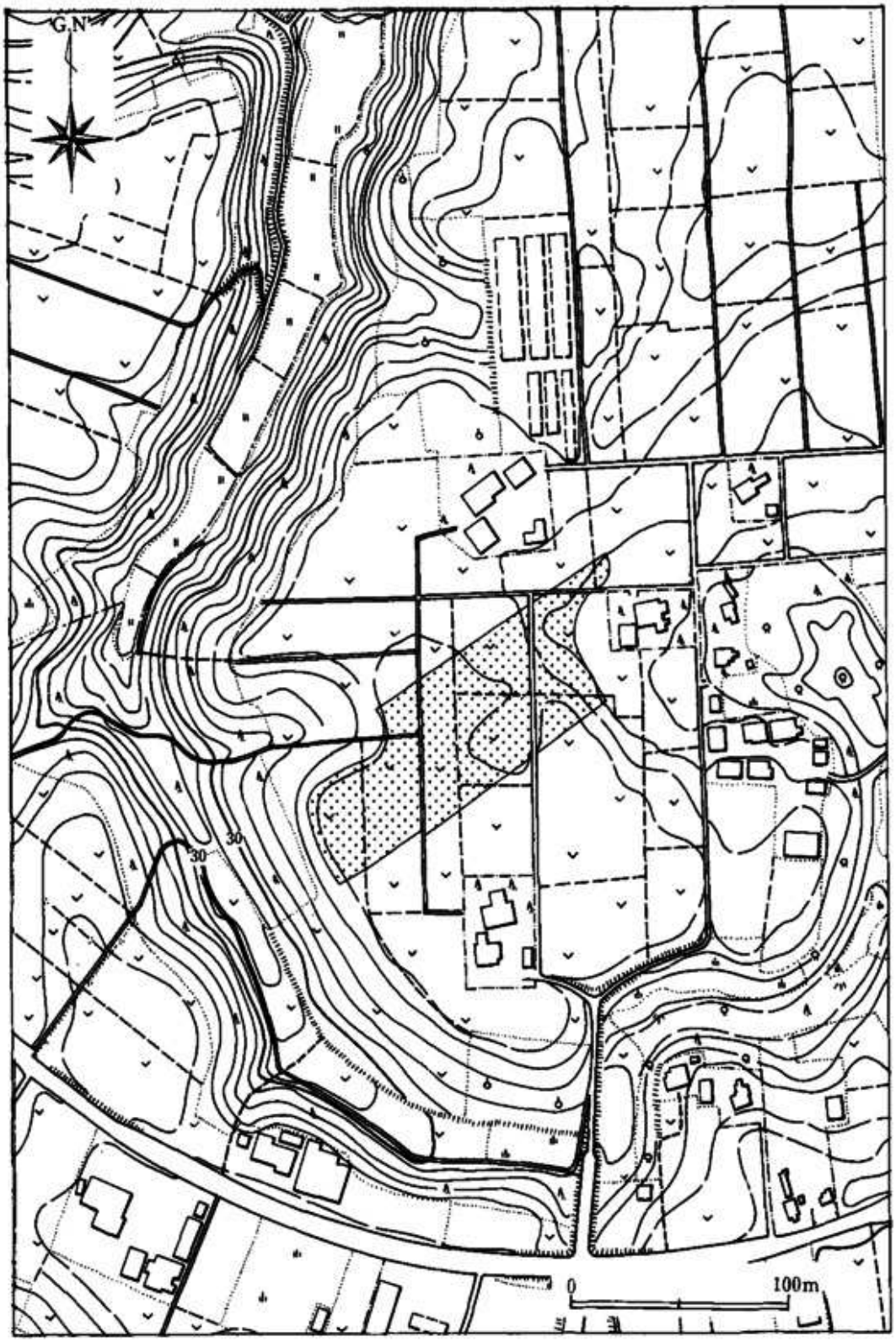
形態をみると，基部に抉入を施した凹基無茎鏃がほとんどで15のみ基部が直線的で平基無茎鏃になると思われる。最大長をみると 3.17 cm（10）から 1.63 cm（15）まで測り，最大幅はほぼ 1.6 cm を示す。

第6表　縄文石器計測表

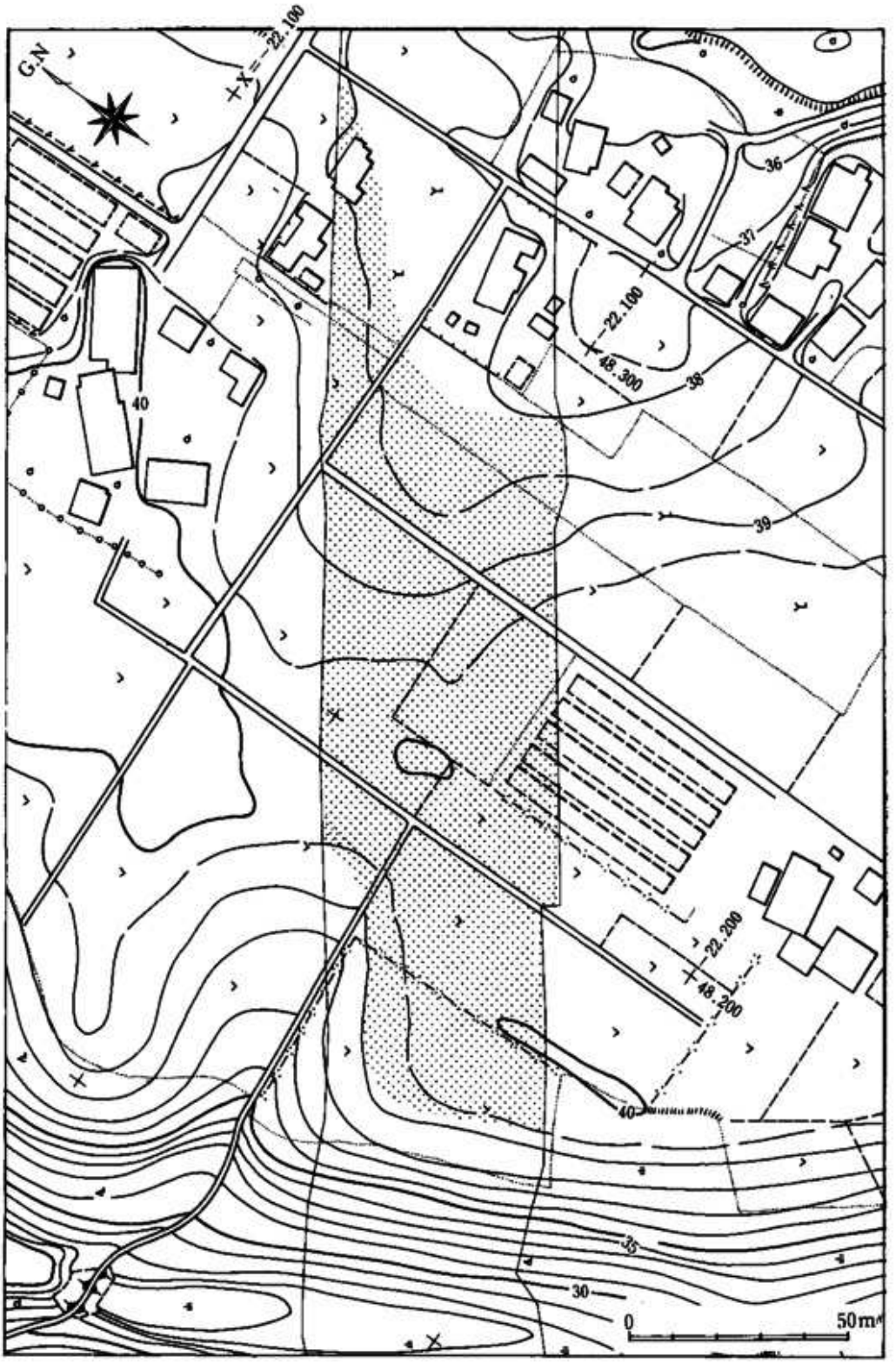
挿図番号	遺物番号	器種	計測値 cm			重量 g	石質
			長さ	幅	厚		
第159図 8	C 2－41，0001	尖頭器	(4.09)	1.5	0.55	(3.50)	頁岩
9	001，0002	石鏃	1.8	1.42	0.27	0.43	安山岩
10	001，0109	石鏃	3.17	1.91	0.49	1.92	安山岩
11	002，0448	石鏃	2.64	1.52	0.4	1.31	チャート
12	B 2－44，0001	石鏃	3.14	1.64	0.35	1.51	チャート
13	004，0006	石鏃	2.23	1.56	0.44	1.04	チャート
14	002，0114	石鏃	1.92	1.67	0.4	0.77	チャート
15	C 4－41，0001	石鏃	(1.63)	1.29	0.33	(0.55)	黒曜石

瓜　生　池　遺　跡（No.4）

(211—012)



第160図　瓜生池遺跡周辺地形図（1/3,000）



第161図　瓜生池遺跡地形図（1/1,500）

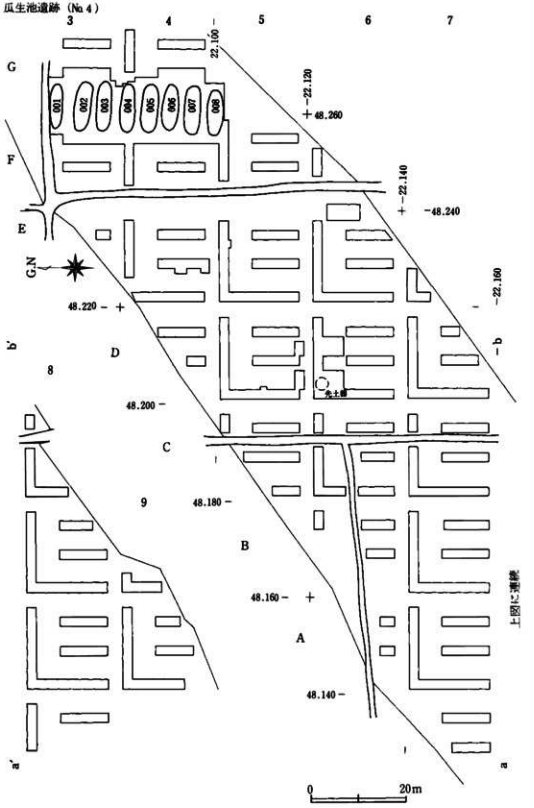
第1章　調　査　概　要

遺跡調査対象は包含地9,900㎡であった。当初の発掘区の設定方法を踏襲し20m×20mの調査区あたり幅２mのトレンチを52m設けたもので，全面積の約26%を調査するものであった。

遺跡は甘藷類の栽培が行なわれており，確認トレンチにおいても，作物の貯蔵穴，溝などもみられ部分的に攪乱が著しい地点もあった。

昭和55年４月１日より調査は着手され，設定された確認調査区を順次発掘していった。遺跡中央部より，先土器時代のフレイクが出土し，付近を拡張したが，広がりはなかった。また，遺跡北東部，緩傾斜面において長大な規模を有する溝状遺構が確認され，付近を拡張して，その調査を行ない，６月27日にすべての調査を終了している。

標高39.8mを測るC，D区においてはいわゆる第II層の暗褐色土層を認めるが，谷頭の影響を受けたと思われる遺跡北東区においては表土層下，直接第III層ソフトローム層となる。これは地表傾斜に伴う，表流水の影響によるものと思われる。



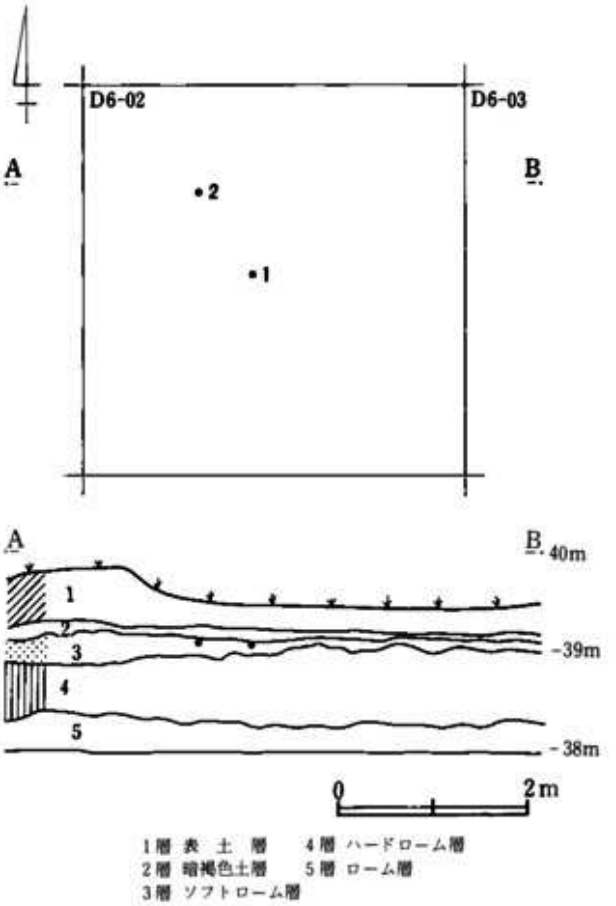
第162図　瓜生池遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図

第2章　遺　　構

第1節　先土器時代（第163図，図版103－1）

確認調査の際に，D6－02区内でフレイクが2点出土した。付近を拡張したがこれ以上の遺物の広がりは捉えられなかった。

出土地点は遺跡の最高地で，台地平坦面上である。出土した層位は，第3層ソフトローム層上面で，現地表面よりほぼ40cmを測る。



第163図　先土器時代遺物出土平面図

第2節　溝状遺構（第164～168図，図版103－2～111－2）

G3，G4区にかけて長大な規模をもつ黒色の落込みを確認した。長軸をほぼ東西方向に向け，南北に8基並列していた。規模等はまったく同じようで，北側より001～008のコード番号

を付した。

第7表に示されるように，平面形はほとんど同じであるが，隅丸方形と長楕円形，隅丸長方形に分けられる。底面は水平で，横断形は006，007の2基はV字形であるが他はすべてU字形である。上面の長径をみると，最大規模は002の10.5m，最小規模は001の9.5m，底面の長径は最大が002の9.1m，最小が008の7.4m，短径は最大が006，008の3.5m，最小が001の2.7m，深さは最大が006，007の1.4m，最小が002の0.8mであった。

遺構の埋没状態をみると，8基ともほぼ同じような状況を示す。溝底より約40～50cmの面まできわめて薄い土層が水平的に幾重にも重なっている。状況より水成層であることがわかる。土層は，遺構の端の部分には崩落したと思われるロームブロックを多量に含む粘質の暗褐色土層，また，緻密な黒色土層，砂質の暗褐色土層，あるいは砂粒土層も確認される。

水成層より上面は自然堆積であり，各遺構が同じような埋没状態を示す。

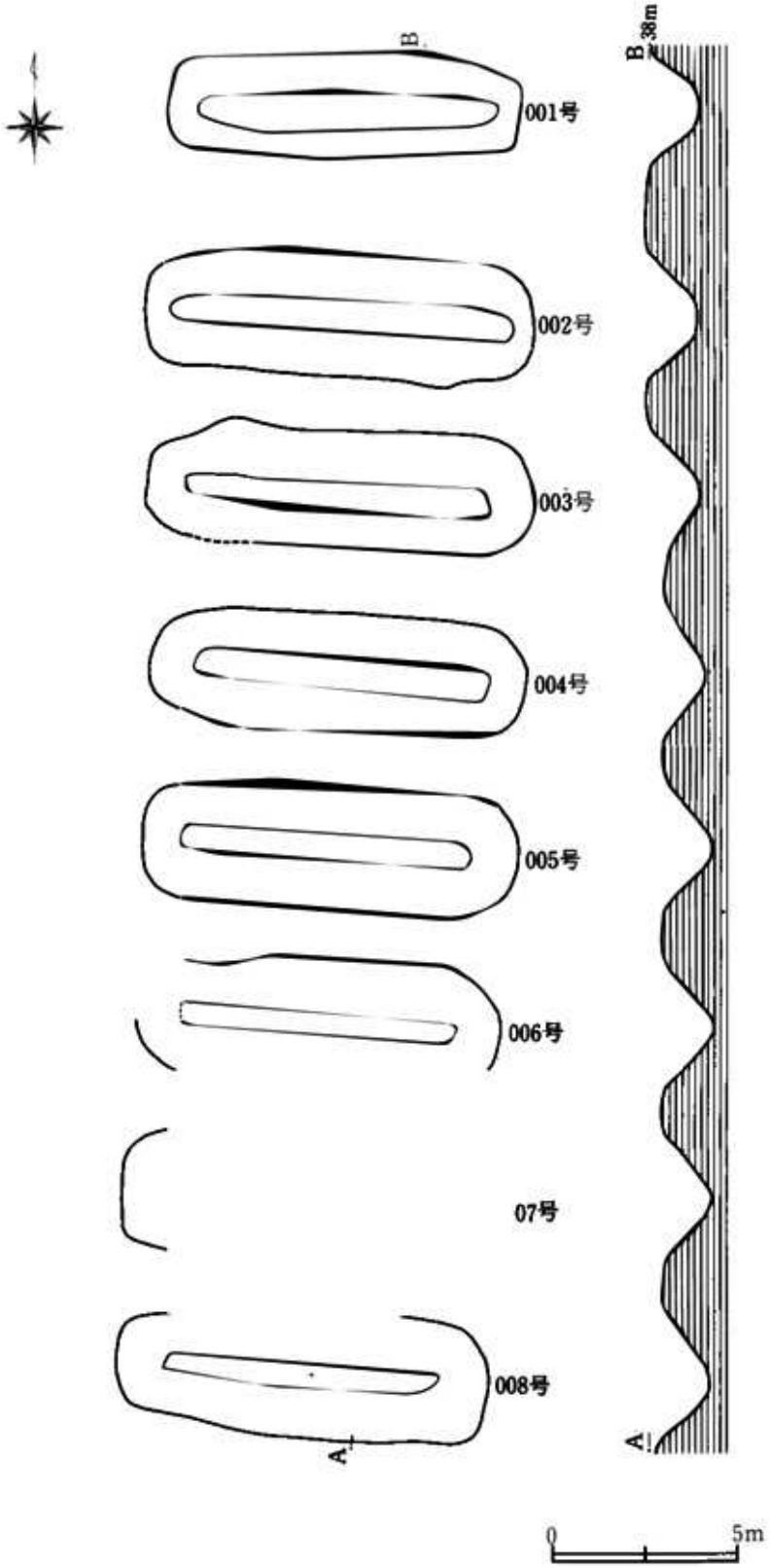
基本的には黒色土層（耕作土）の下には第5層の黒褐色土層が50～60cm堆積し，以下第6層の暗褐色土層（ローム粒・ロームブロック少量含む）が20～30cm，第8層の粘質黒褐色土層が約20cmで水成層の最上面に達する。しかし，005，007，008の3基は第5層の下面が水成層の最上面に一致する。横断面をみると，左右両面より，第9層，ロームブロック層，第10層，暗褐色土層の流入が認められる。

これらの埋没状況及び水成層の状況をみると，8基とも同時期構築，同時期使用，また同時期破棄の状態を示している。これを，底面及び水成底面を標高でみてみると近似値を示す。すなわち，底面の標高は001が36.6m，006が36.2mで，約40cmの差はあるが，他の遺構はすべてこの間の値になっている。水成層上面標高をみると，36.8mと36.9mでその間，わずか10cmである。

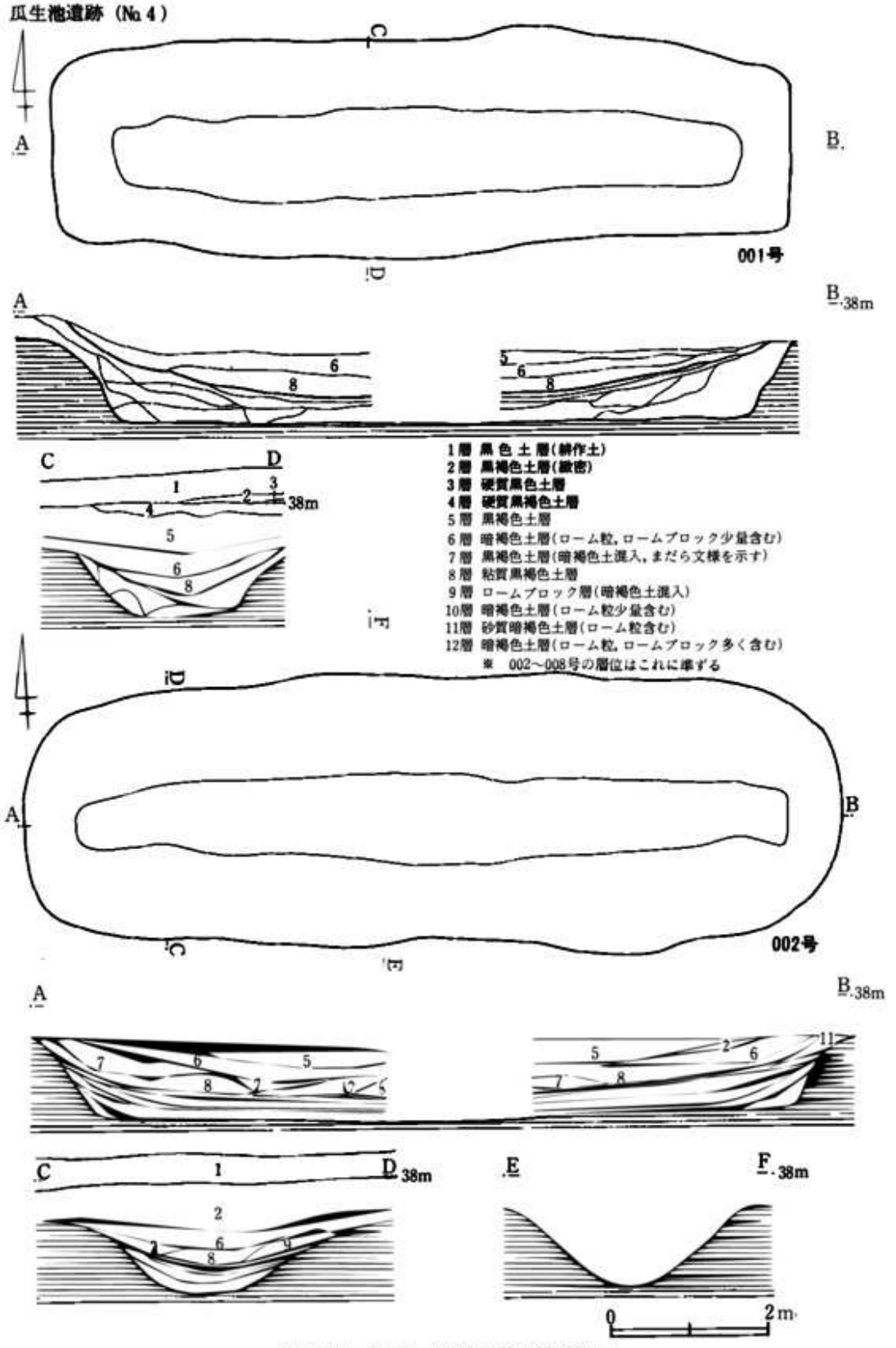
なお，これらの遺構に伴う遺物はまったくなく，遺構の性格，時代等を考察する具体的な資料はなかった。

第7表　瓜生池遺跡遺構調査表

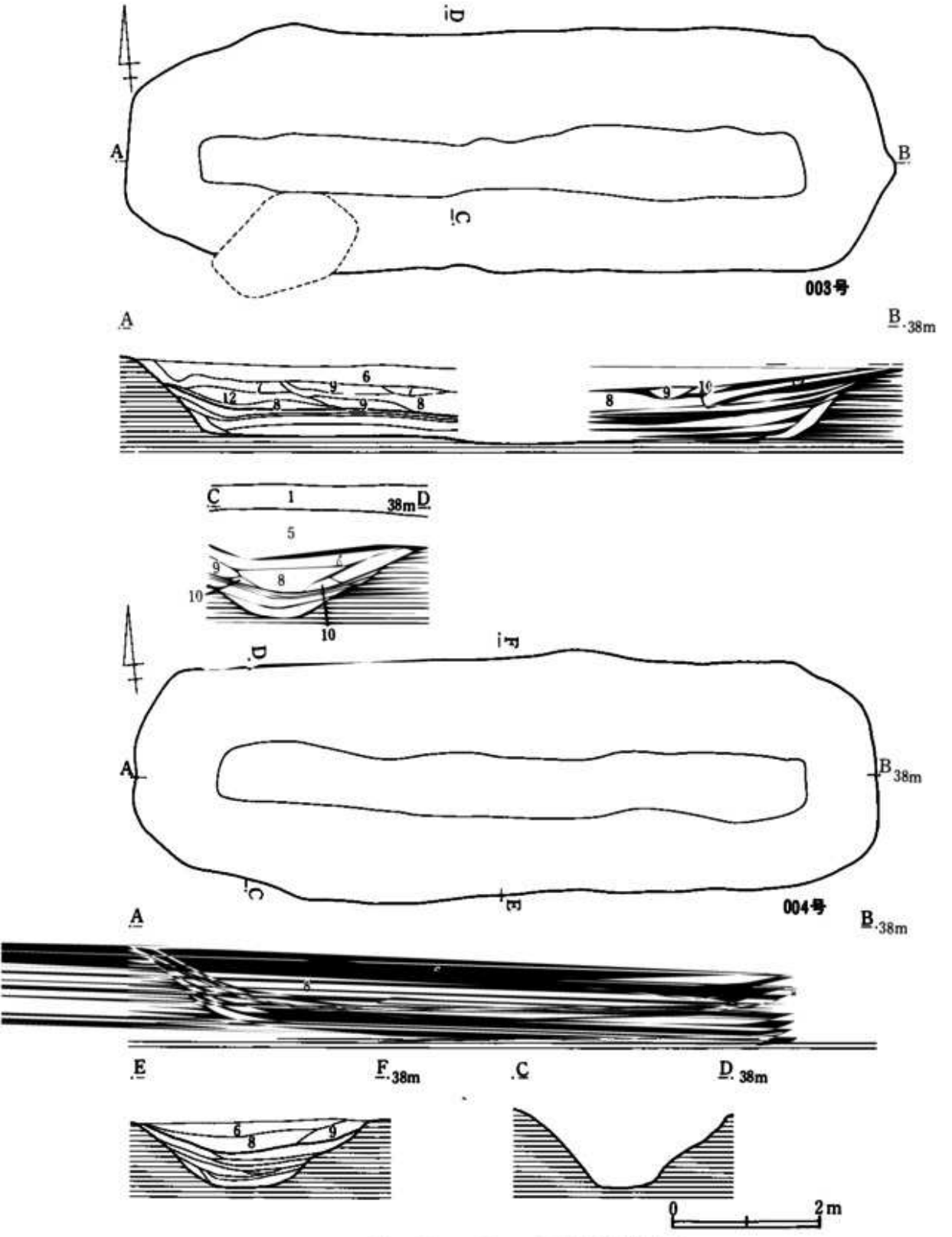
項目／遺構	平面形	底面	横断形	長径 m	底径 m	短径 m	深さ m	底面標高 m	水成層上面標高m
001	隅丸方形	水平	U	9.5	8.0	2.7	1.1	36.6	36.9
002	〃	ほぼ水平	〃	10.5	9.1	3.3	0.8	36.5	36.8
003	〃	〃	〃	10.3	8.2	3.2	1.0	36.5	36.8
004	〃	水平	〃	10.1	8.0	3.1	1.0	36.5	36.9
005	長楕円形	ほぼ水平	〃	10.2	7.7	3.5	1.2	36.3	36.8
006	〃	水平	V	9.8	7.4	3.4	1.4	36.2	36.8
007	〃	〃	〃	10.1	7.7	3.2	1.4	36.3	36.8
008	隅丸長方形	〃	U	10.0	7.4	3.5	1.2	36.3	36.9



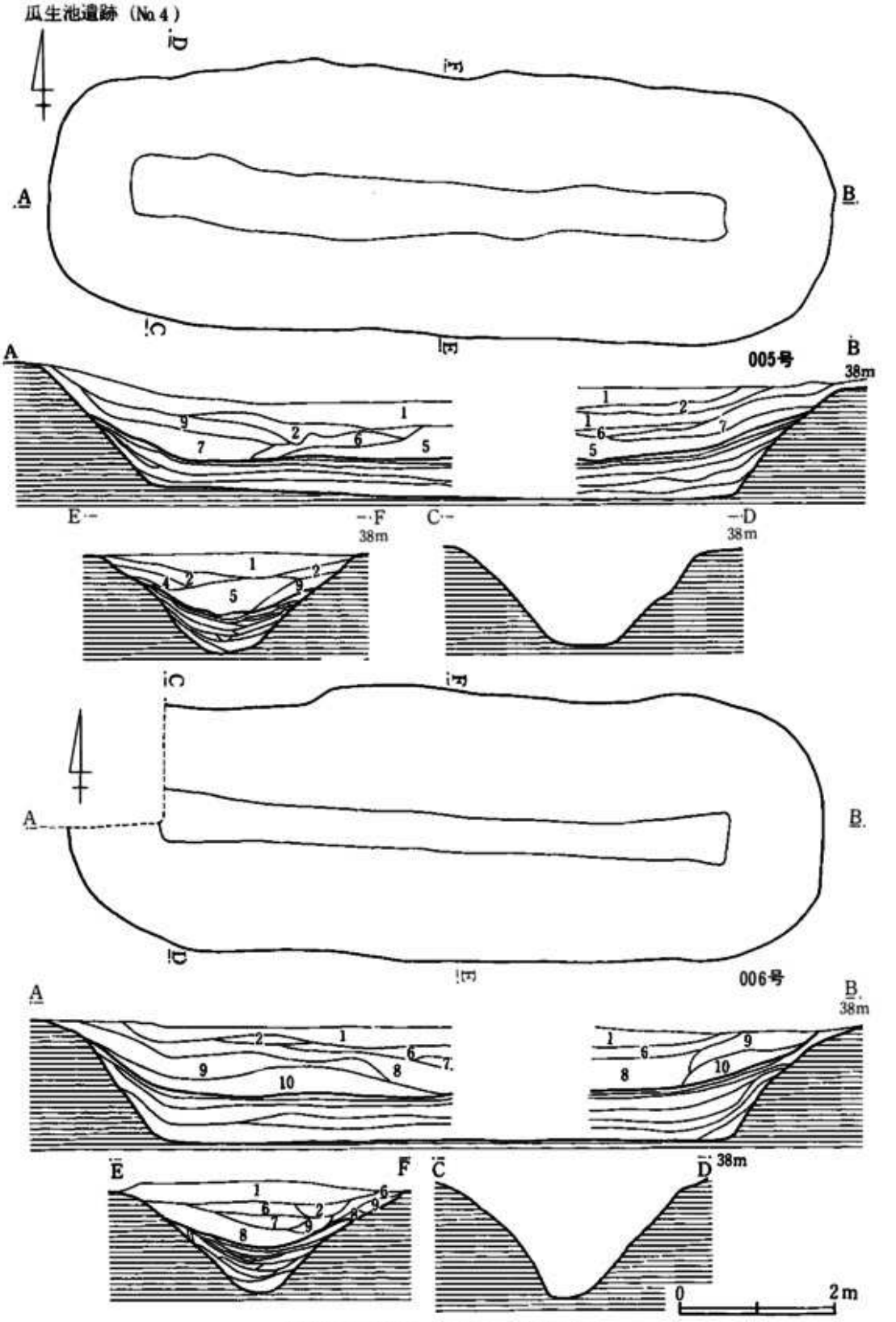
第164図　溝状遺構群実測図



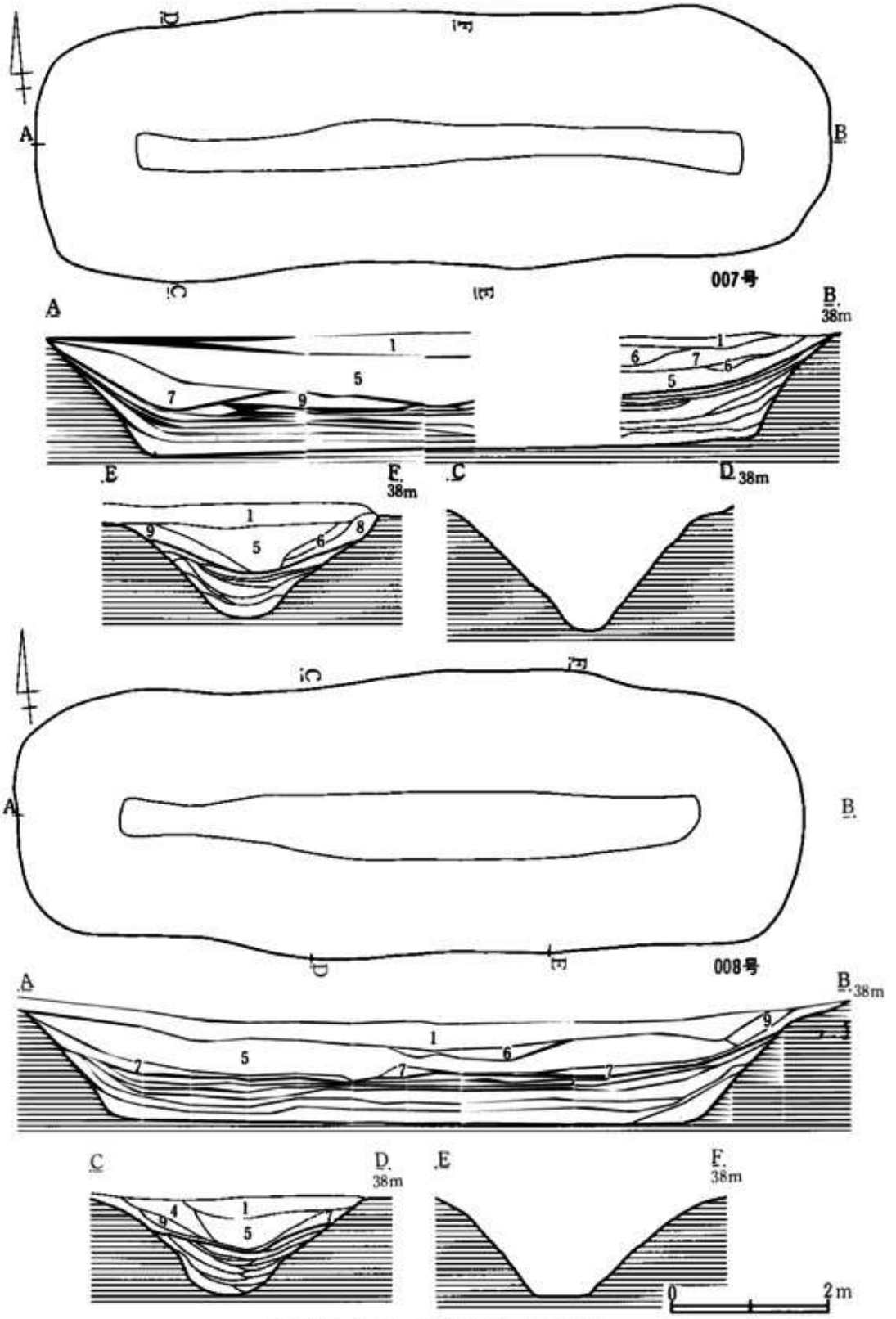
第165図　001号，002号溝状遺構実測図



第166図　003号，004号溝状遺構実測図



第167図　005号，006号溝状遺構実測図

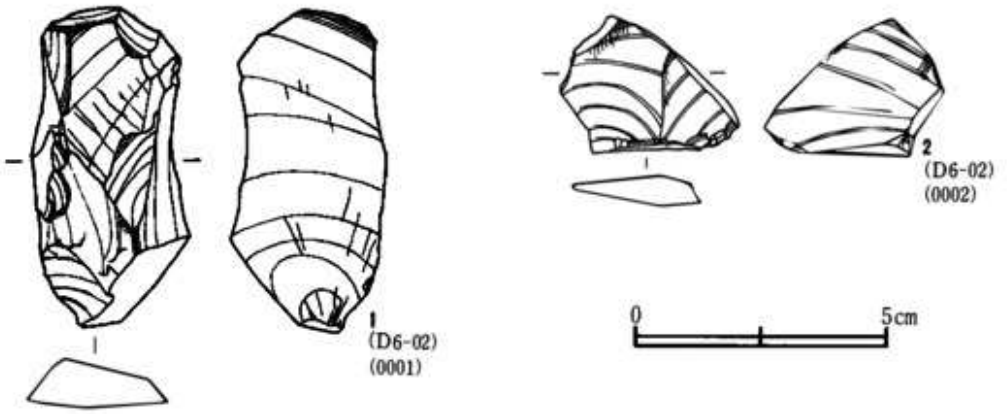


第168図　007号，008号溝状遺構実測図

第3章　遺　　物

剝片（第169図，図版111－3）

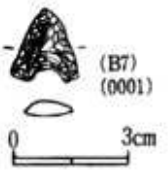
ともに頁岩製であり，同一の石核から剝離されたものと思われる。1は正面の剝離面は不整で，比較的器厚をもつ。



第169図　石器実測図

石器（第170図，図版111－3）

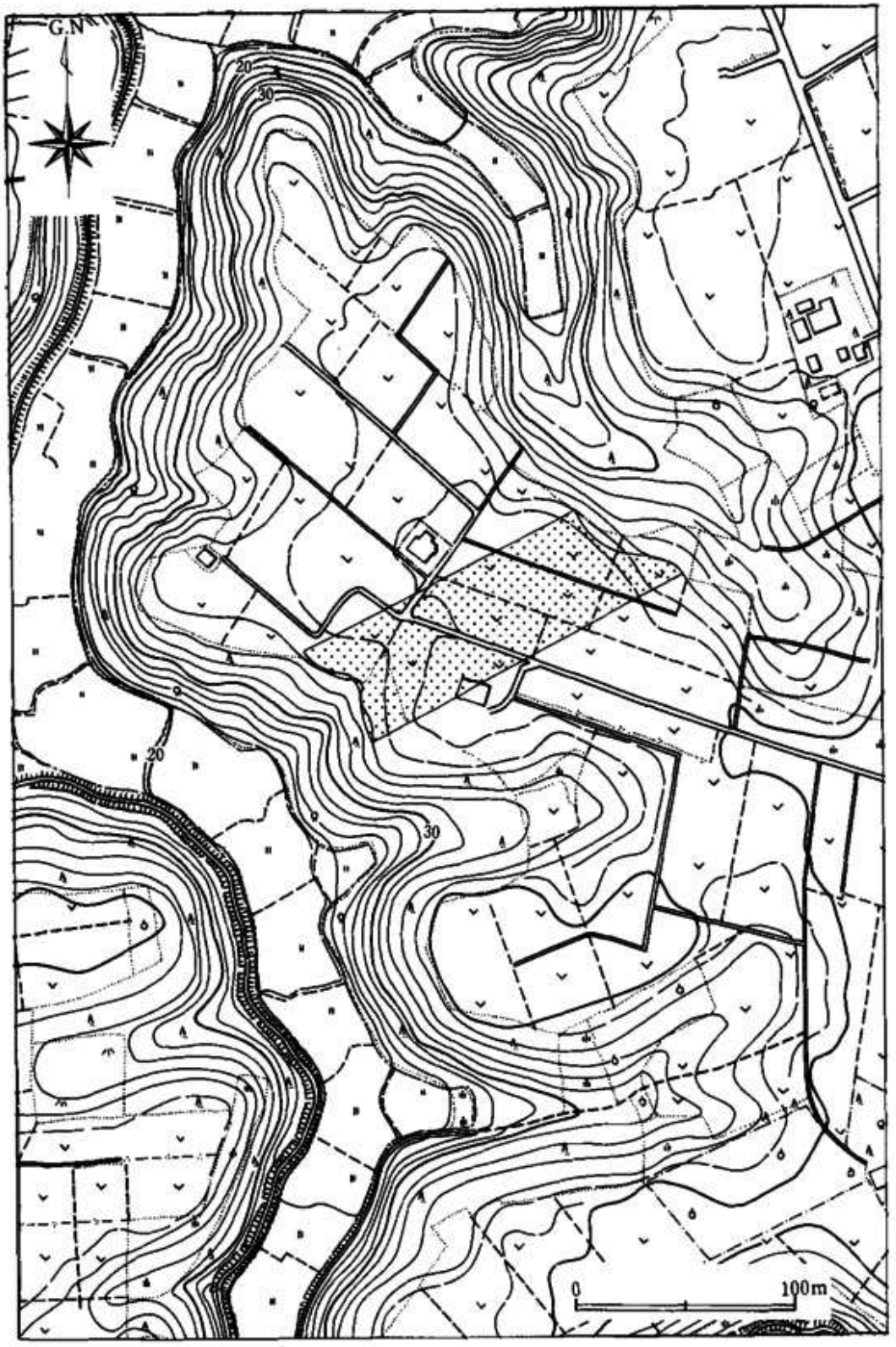
黒曜石製の石鏃である。形態をみると基部に抉入があることより，凹基無茎鏃である。脚が太く残されていることが特徴である。



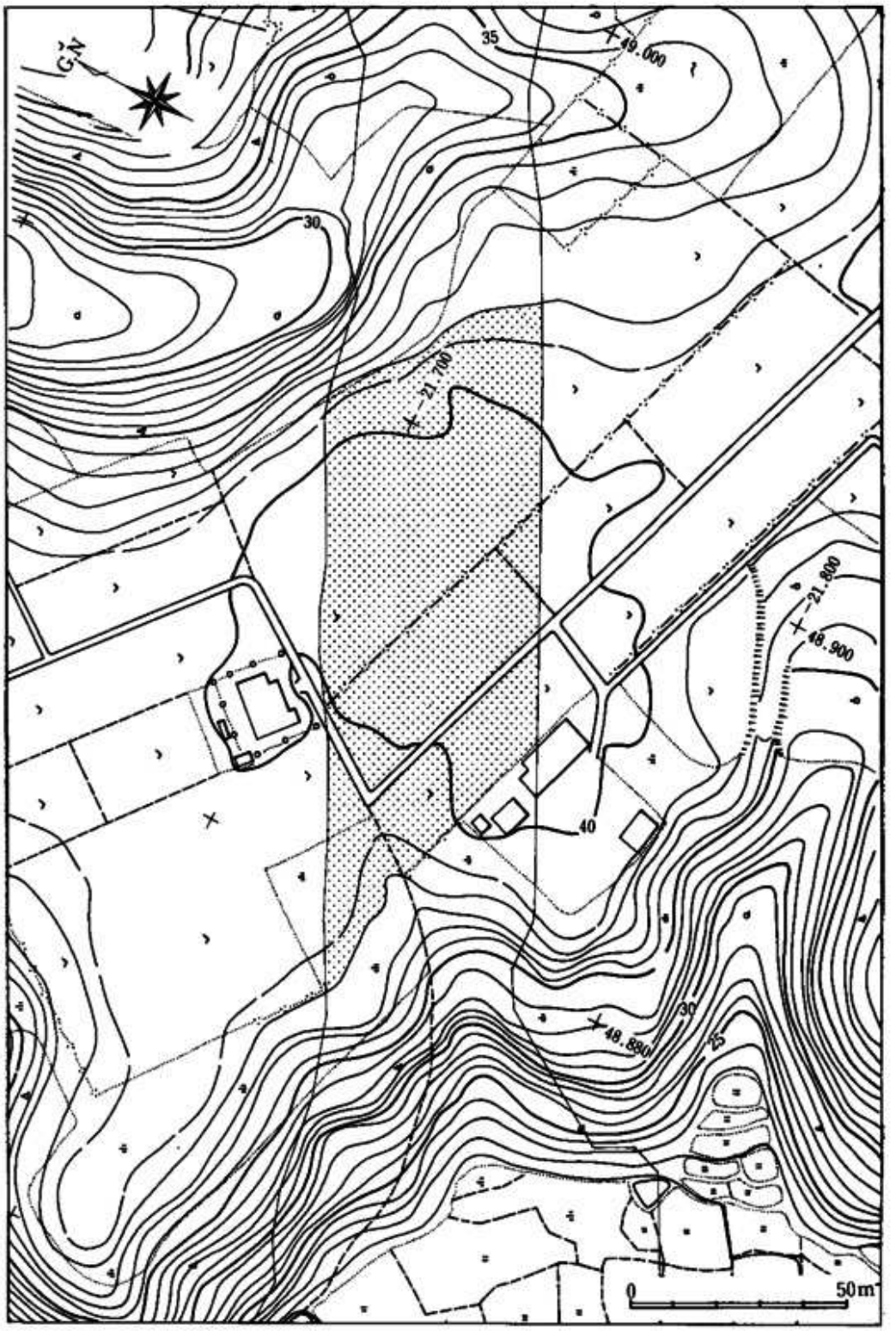
第170図　出土遺物実測図

四　本　木　遺　跡（No.4）

（211－009）



第171図　四本木遺跡周辺地形図（1/3,000）



第172図　四本木遺跡地形図（1/1,500）

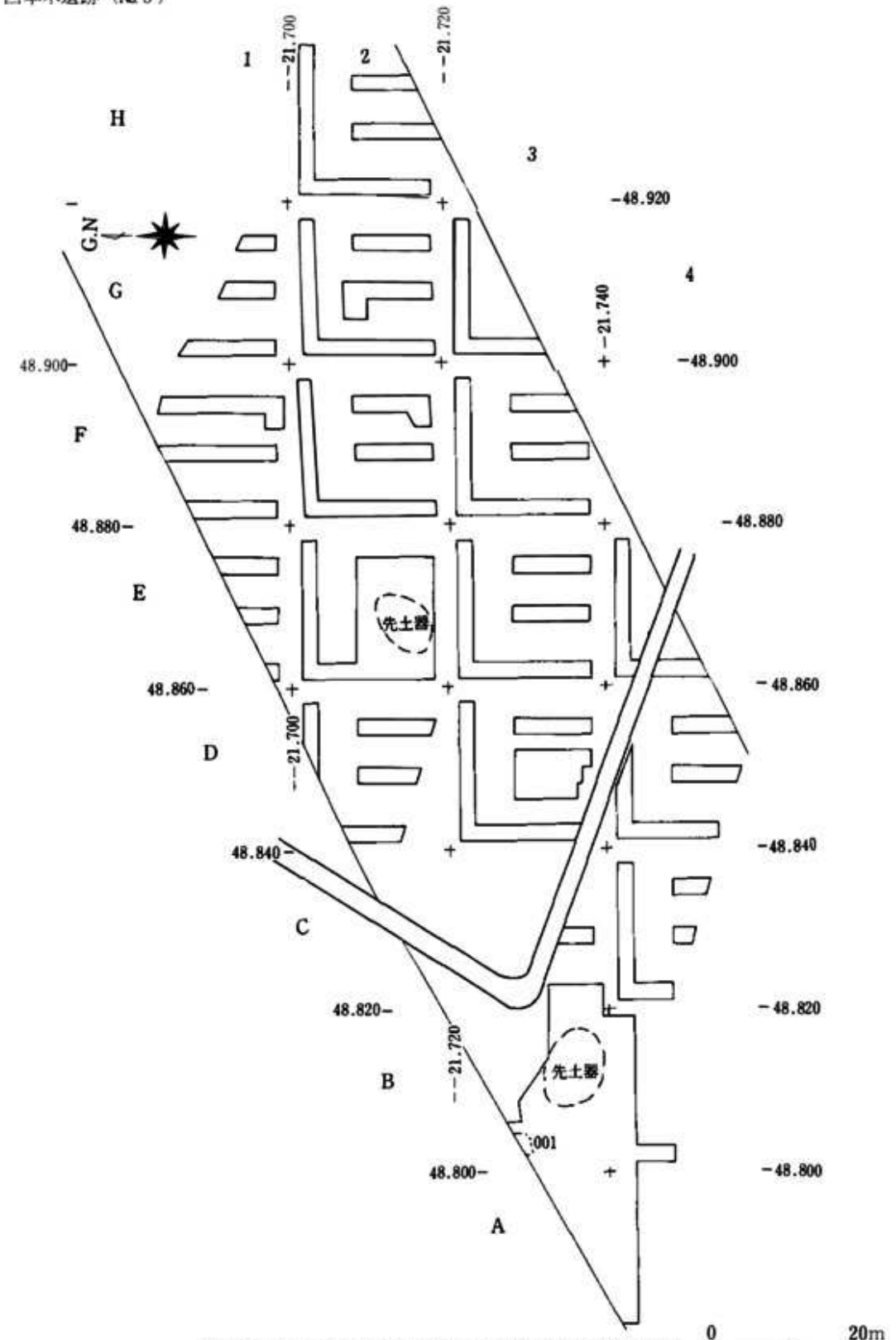
第1章　調　査　概　要

遺跡調査対象は，包含地5,160㎡であり，東関道遺跡調査の最初の調査遺跡であった。確認調査は20×20mの調査区あたり幅２m，長さ10mのトレンチ２本と直角に設定した長さ32mのトレンチを設けたもので，全面積の約26％を調査するものであった。

昭和53年５月10日より調査は開始され12日は，調査に携わる補助員への作業説明及び諸注意，器材の調達，環境整備を行なった。13日より，調査区を設定し，23日より設定された確認調査区を順次発掘していった。24日には，Ｂ３－22グリッド，及び42グリッドソフトローム層中より石片が出土し，27日にはＢ３－32グリッドより有舌ポイントが出土した。

６月１日より，Ｄ２，Ｆ１，Ｆ２，Ｆ３区の調査を着手した。また22日には，Ｂ３区より住居跡が確認された。27日より，撚糸文土器群が出土するＢ３区内を全面拡張し，その平面位置と出土レベルを記録していった。７月20日にはすべての調査を終了した。

遺跡はほぼ同一の層位を示す。他遺跡では認められない地点もあった第II層，暗褐色土層は，遺跡全域で確認され，厚い所では約 30 cm を測った。ソフトローム層は，ほぼ 40～50 cm を示すが，遺跡東方のＨ２区は 20 cm 前後を測り，谷側への傾斜による表流水の影響をうけていたものと思われる。



第173図　四本木遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図

第2章　遺　　構

第1節　先土器時代

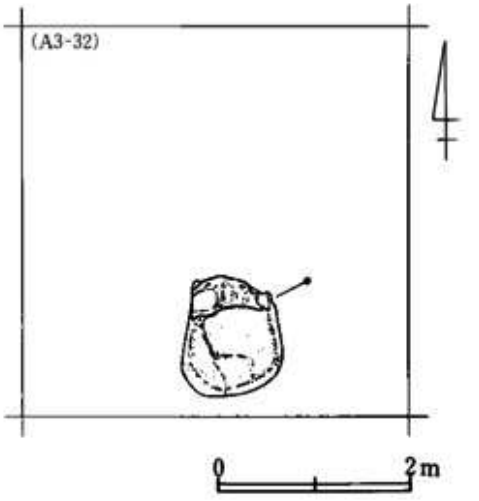
A3区（第174図）

1点のみの単独出土である。安山岩製の礫片で，ハードローム上面より出土した。

B3区（第175図，図版114，115－1）

B3－33，43グリッドに特に集中して出土したが，分布は12×10mの範囲に広がる。石器群は，ナイフ形石器，石核，スクレイパー？，剥片で構成されている。石材をみると，安山岩，頁岩，チャート，砂岩，凝灰岩を認める。

一方，石器群の出土層位についてみると，いわゆるハードローム（第IV層）に集中し，若干ソフトローム，及び暗褐色土層に含まれている。



第174図　先土器時代遺物出土平面図

E2区（第176図，図版113，115－2）

分布は，径8mの範囲に広がるが，E2－31グリッドを中心とする径4mを測る空白地帯が存在する。石器群は，サイドスクレーパー，礫器，石核，剥片で構成されている。石材をみると，安山岩，頁岩，チャート，砂岩，凝灰岩，硅岩を認める。

一方，石器群の出土層位についてみると，ソフトローム（第III層）に集中しており，一部，暗褐色土層に移入している。

第2節　縄文時代

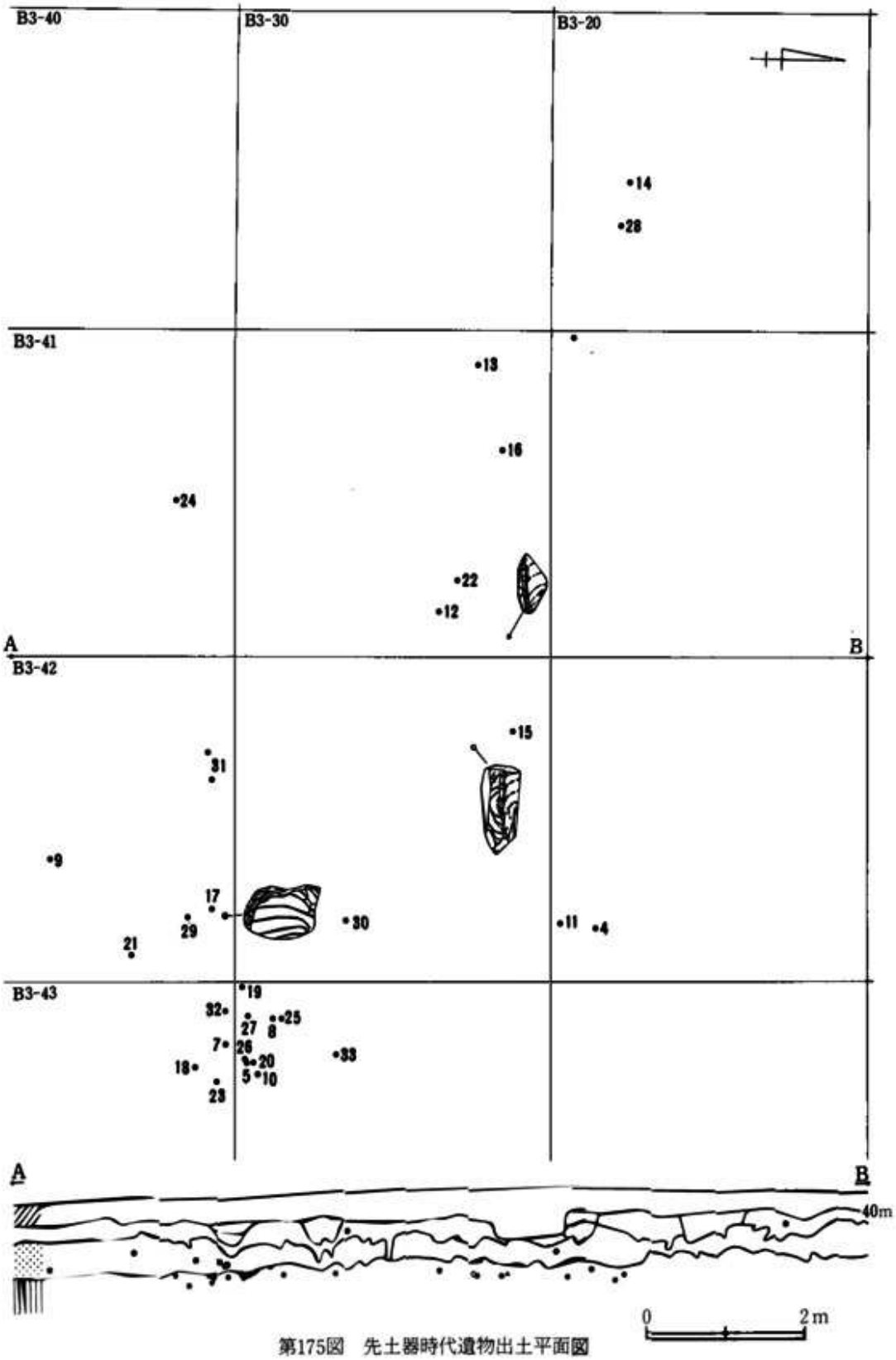
D3区（第177図）

有舌尖頭器の単独出土である。位置的には台地のほぼ中央部で，いわゆるソフトローム（第III層）の上面より約10cmほど下がったレベルより出土した。

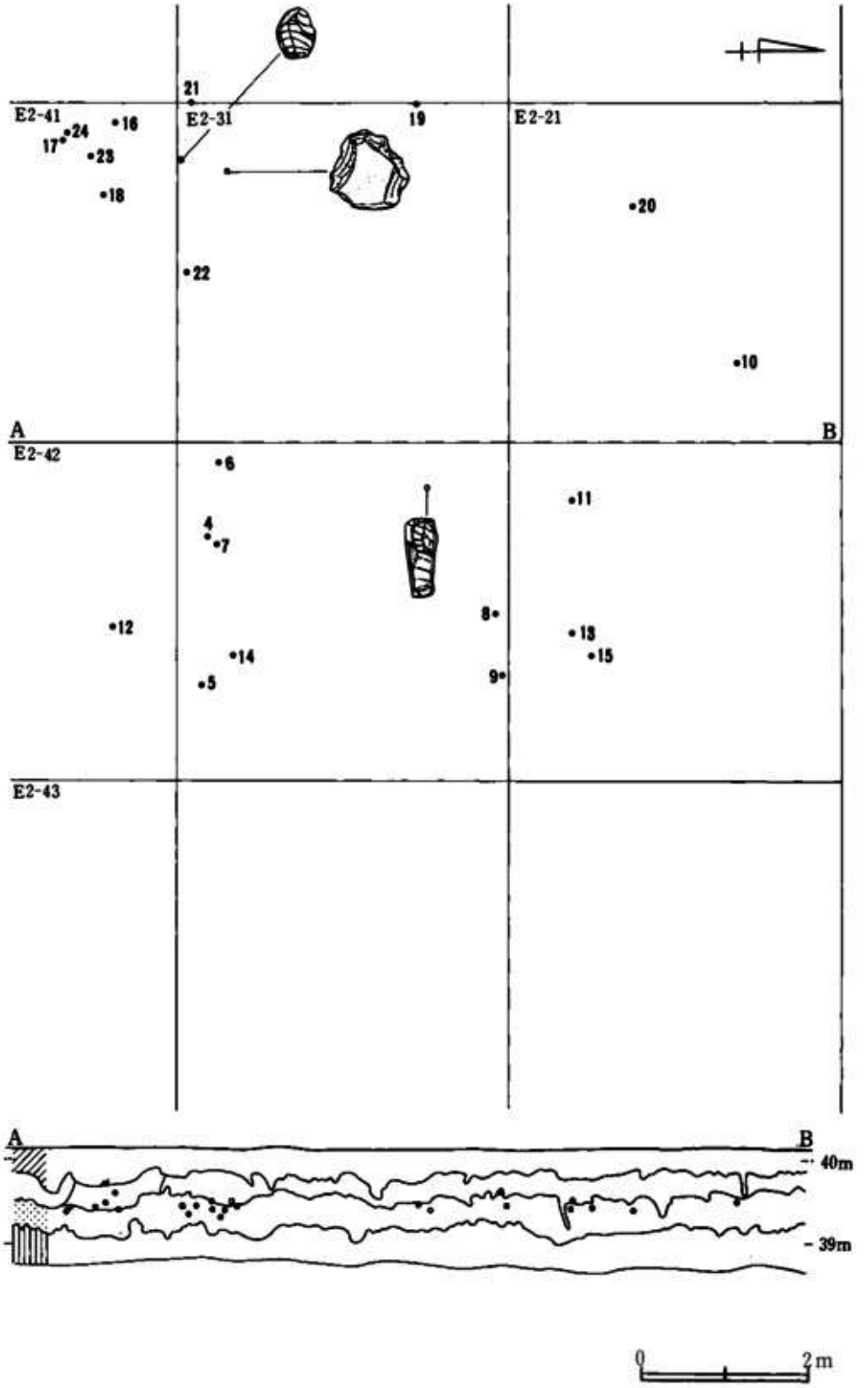
A3，A4，B3，B4区（第178図）

遺跡西側の地形が斜面に移行する手前の地点より，かなりの数の撚糸文系土器群が確認された。D2，D3区においても微かに出土しているが，A3，A4，B3，B4区においては，ほぼ等高線に沿うように，幅14m前後の範囲で出土している。

土器群の出土層位についてみると，暗褐色土層（第II層）の下面より，ソフトローム（第III層）上面にかけて確認され，ほぼ同一文化層中より出土している。

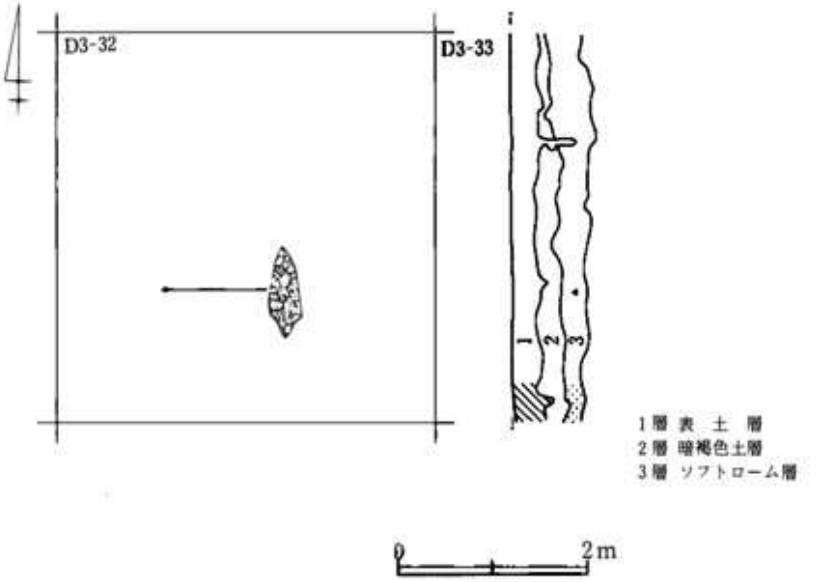


第175図　先土器時代遺物出土平面図



第176図　先土器時代遺物出土平面図

接合関係を示す資料が3点確認されている。第188図2はB3－31グリッド内で各々約80cm離れて出土した土器片が接合した。また，第188図3はB3－42グリッド，B3－34グリッドで出土した土器片が接合した。距離にして，約9m離れており，同一個体の土器片の広がりの範囲を示す。第188図17はB3－42グリッド内より出土し，1.8mの距離をおいて接合しているものもみられる。



第177図　遺物出土平面図

第3節　歴史時代

001号住居跡（第179図，図版116）

遺跡西側のB3区内で，調査範囲に接して確認された。北側は未掘である。

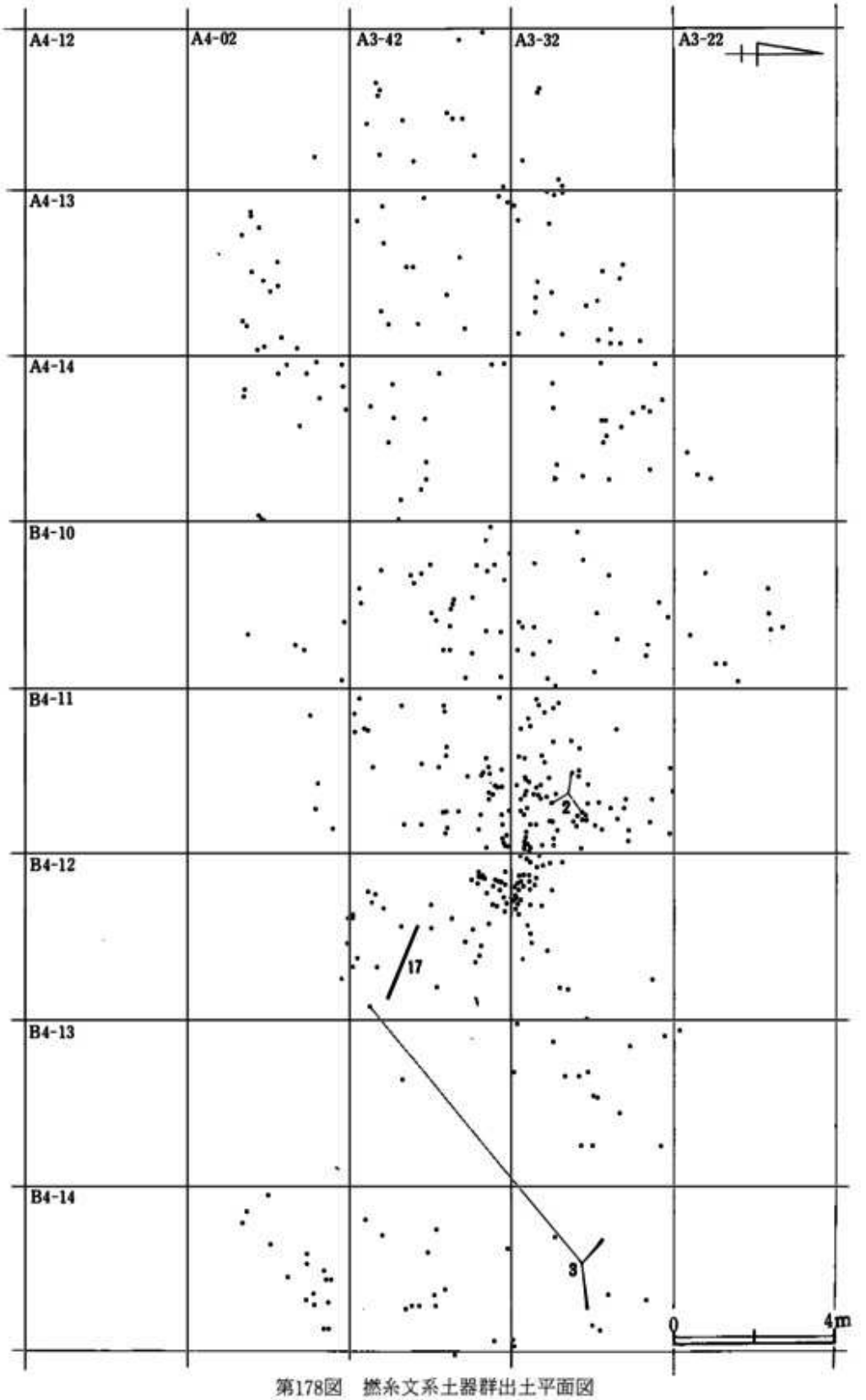
形態はほぼ方形を呈するものと思われ，東西の一辺が約3.1mを測る。埋没状態をみると，床面上には，砂質黄褐色土層，炭化物混入土層を認め，その上面には，暗褐色土層，焼土粒を含む明褐色土層を堆積している。

カマド，炉は確認されなかった。

壁高は32cmを測り，掘込みはあまりしっかりしていない。

床面はあまりしっかりしておらず，かなりの炭化材が検出され，床面のほぼ中央より，焼土塊が確認された。

周溝は検出された壁下においては，確認されたので，ほぼ全周して設けられていたと思われる。

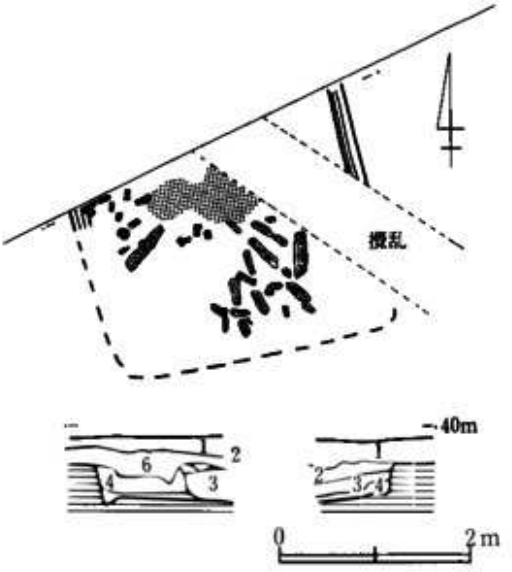


第178図　撚糸文系土器群出土平面図

柱穴は検出されなかった。

遺物の出土状態をみると，土師器片が床面上より数点出土したのみであった。

本跡は，床面上あるいは覆土内より，多量の炭化材，焼土が確認されたが床面上はまったく焼けていなかった。また，遺物の出土がきわめて少ない点などから，焼失住居ではなく廃棄された住居を，故意に燃したものと思われる。



1層 表　土　層
2層 明褐色土層（焼土粒含む）
3層 暗褐色土層
4層 砂質黄褐色土層
5層 炭化物混入土層
6層 軟質暗褐色土層

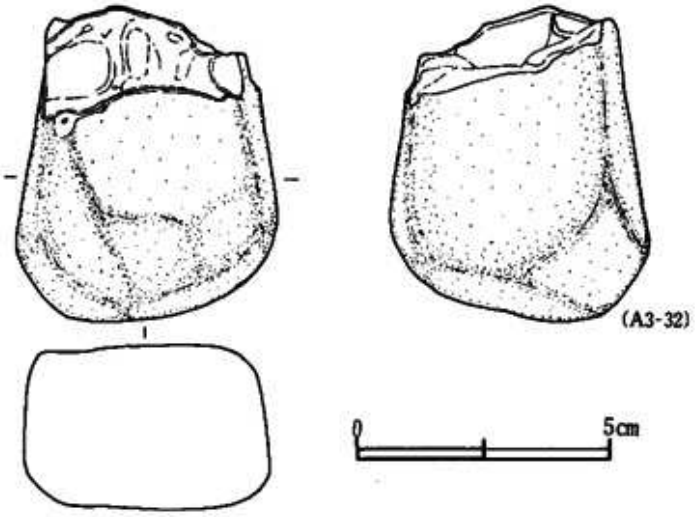
第179図　001号住居跡実測図

第3章　遺　　物

第1節　先土器時代遺物

A 3区（第180図，図版118）

1は礫で，加熱された痕跡を残している。器面は風化が進んでおり使用痕などは確認できない。



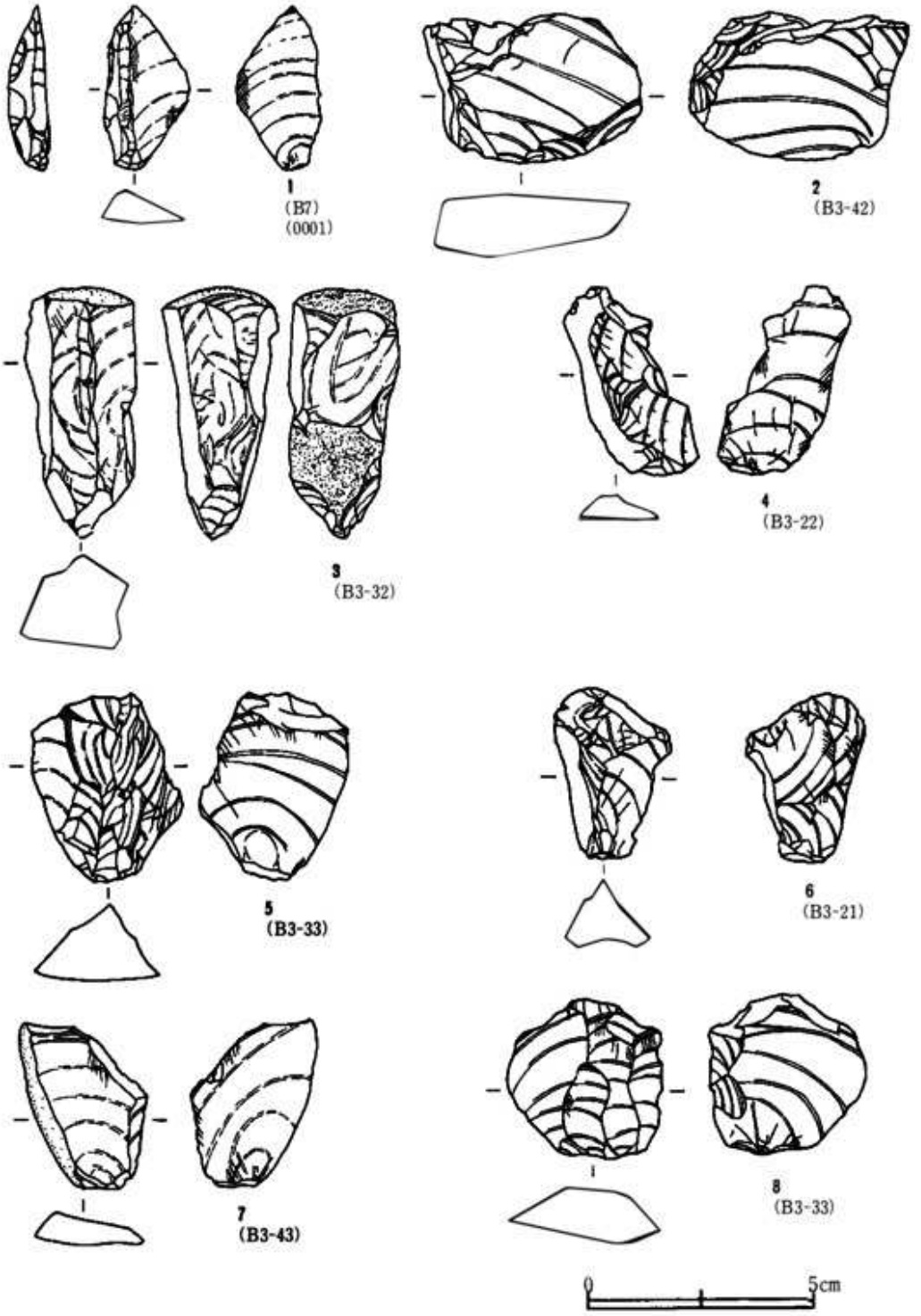
第180図　先土器時代遺物実測図

B 3区（第181～184図，図版117，118）

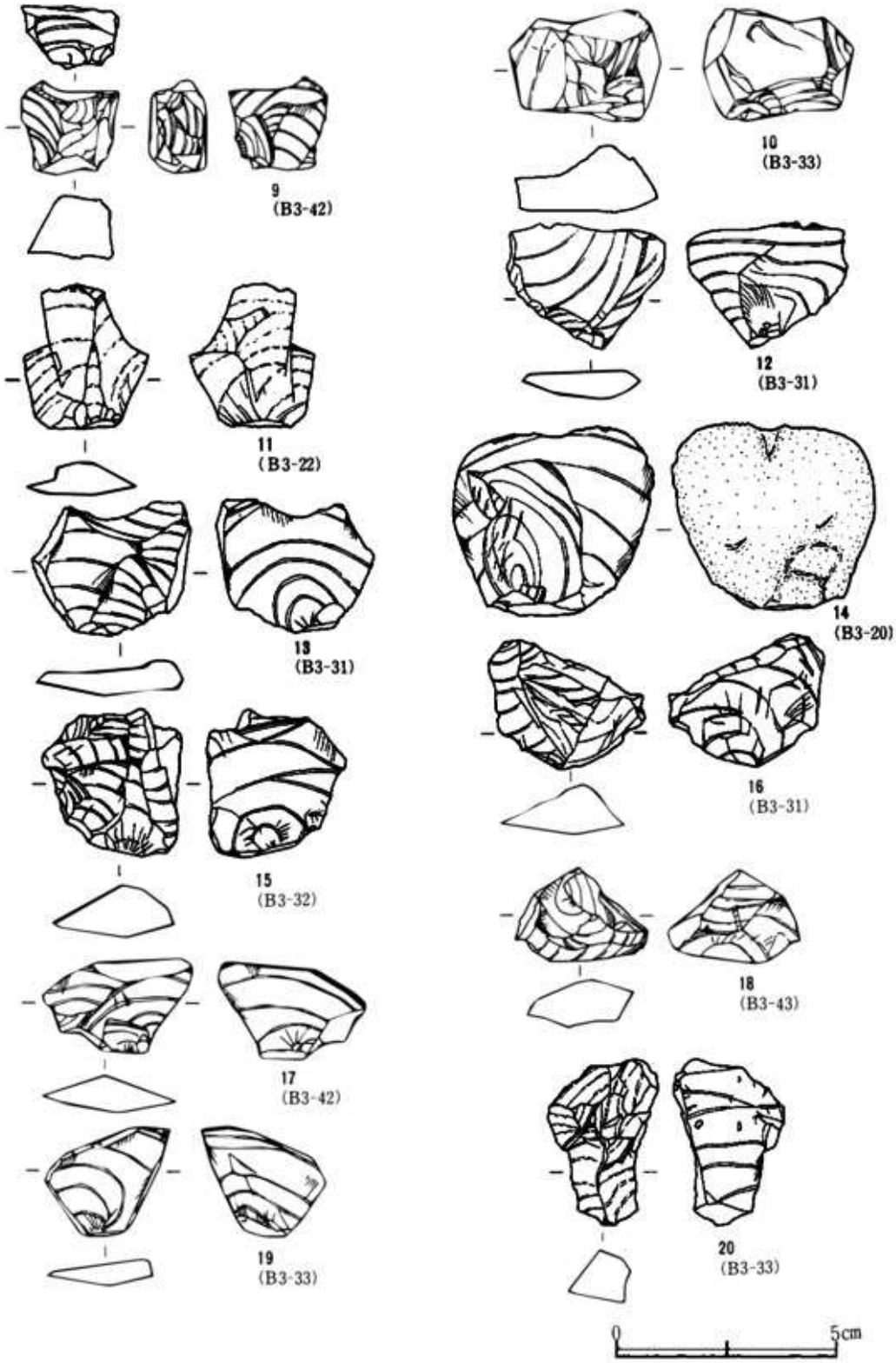
1はナイフ形石器である。背面には調整が加えられ形を整えている。2は一部に調整痕がみられる。3は石核と思われる。頂部に自然面を残し，各面は縦長の剥離痕を残す。4～31は剥片である。32は安山岩の礫で二次的加熱の痕跡がある。33も熱を受けている様子である。

E 2区（第185，186図，図版119）

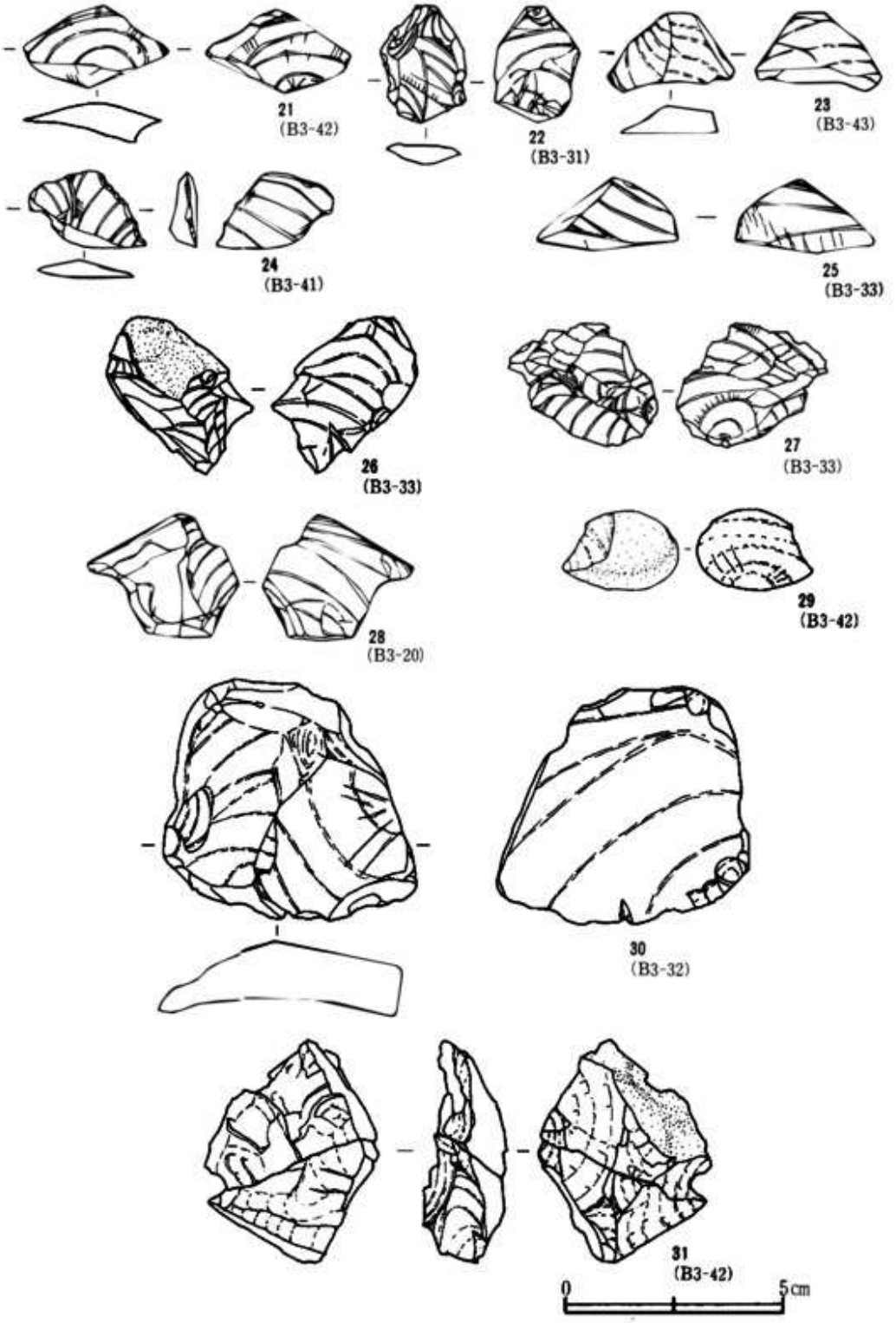
1はサイドスクレーパーで，刃部横には自然面を残す。2はランドスクレーパーに近い。小形の礫を用い両面より打撃を加え，刃部を作っている。3は凝灰岩製の石核である。一部自然面を残しているが，側面4面に上下より打撃が加えられている。4～20は剥片である。21～24は礫片で自然面を大きく残している。



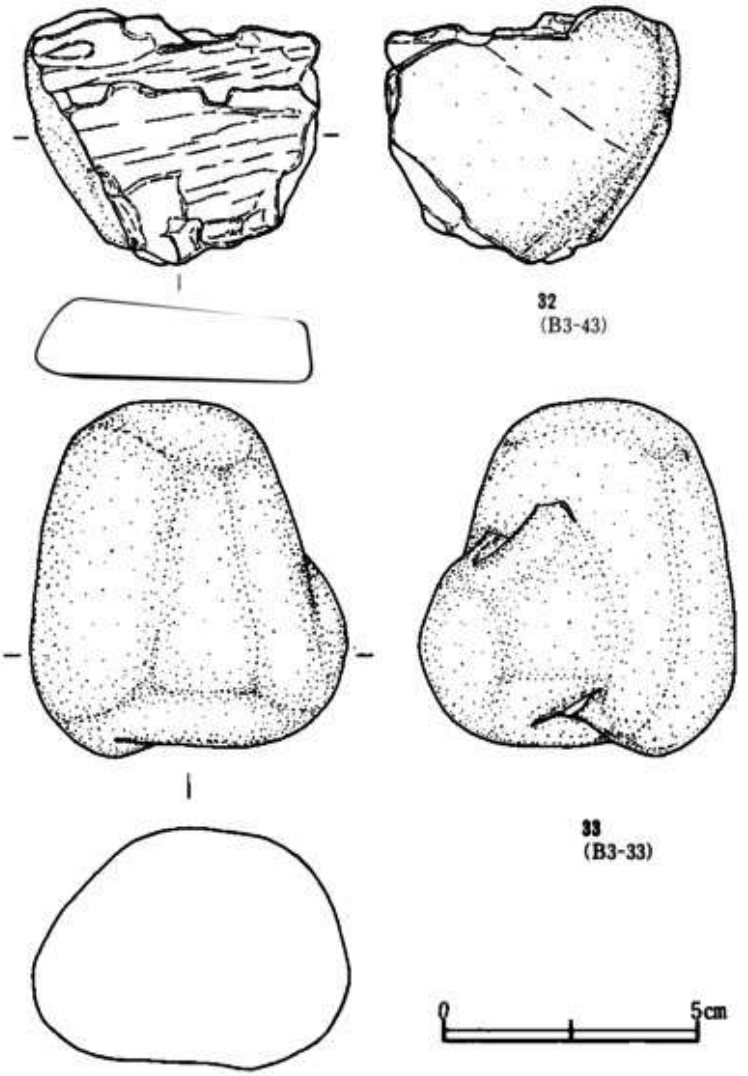
第181図　先土器時代遺物実測図



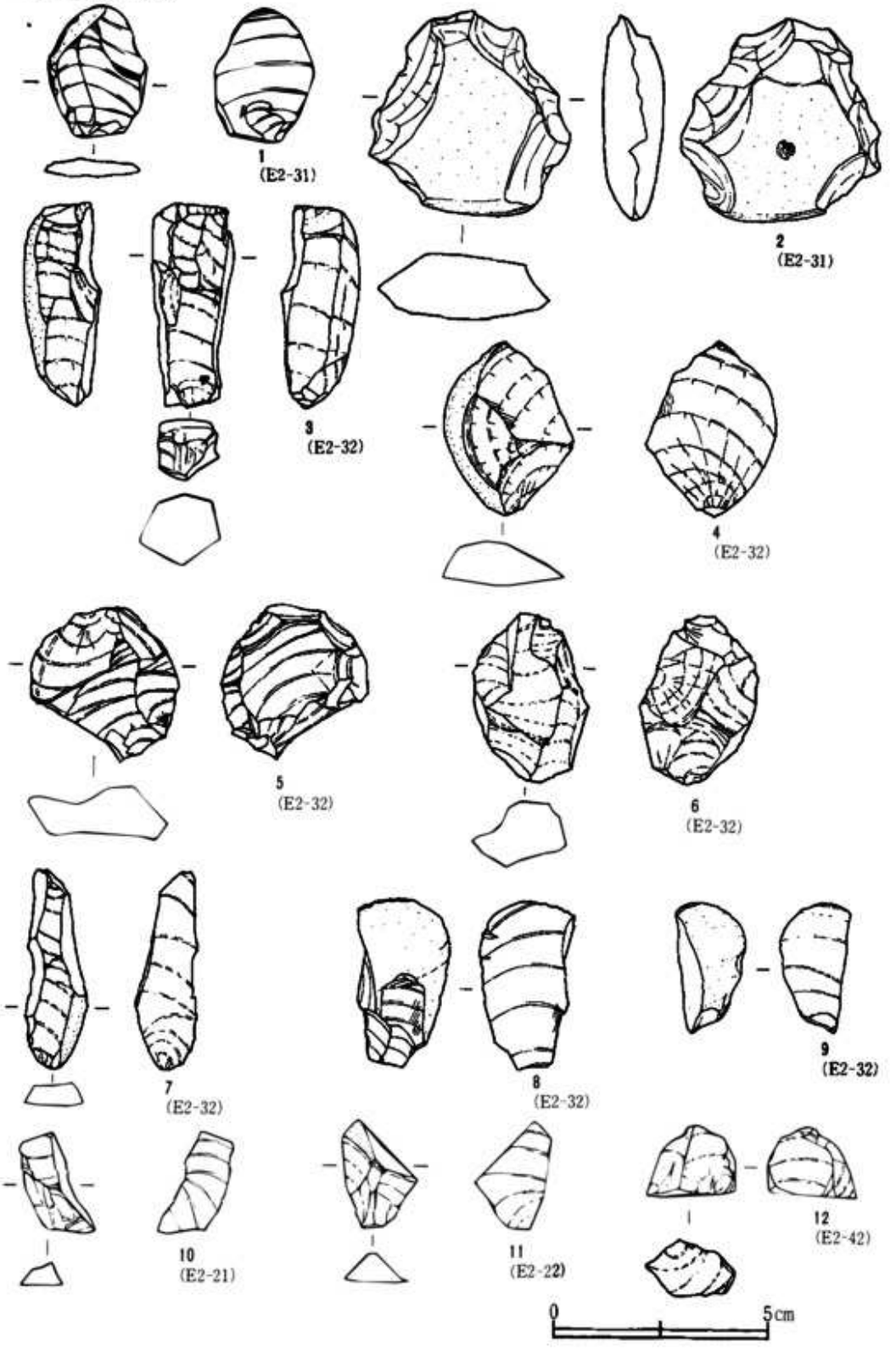
第182図　先土器時代遺物実測図



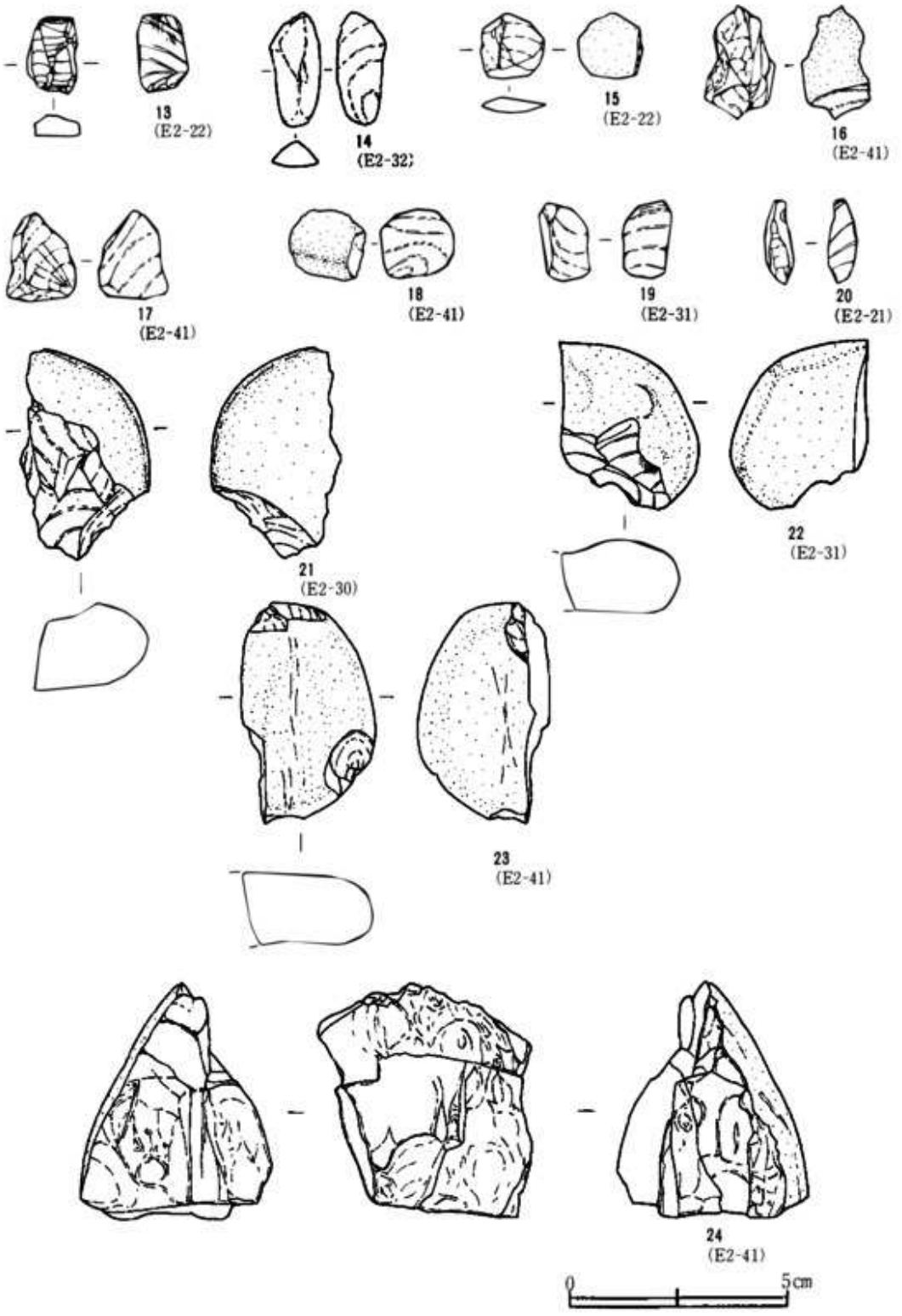
第183図　先土器時代遺物実測図



第184図　先土器時代遺物実測図



第185図　先土器時代遺物実測図

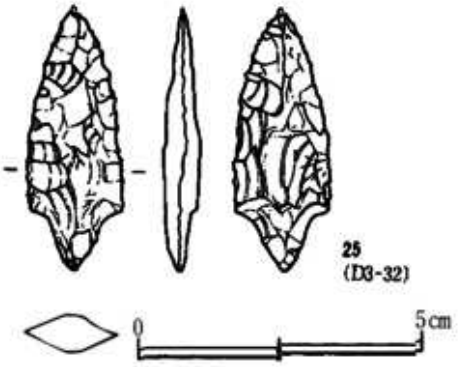


第186図　先土器時代遺物実測図

第2節　縄文時代遺物

D3区（第187図，図版118）

有舌尖頭器で，先端部を一部欠損しているが，両側面より調整剥離が施され形を整えている。



第187図　出土遺物実測図

○土　器

当遺跡で検出された縄文土器は，その大半を占めるものは，縄文早期前半の撚糸文系土器群である。小さい土器片が多いが，口縁部片のすべて，及び若干の胴部片を呈示した。その他に縄文前期の繊維土器が数点出土している。

第1群土器（第188，189図，図版120）

本群は縄文早期前半の撚糸文系土器群である。図示したものは，口縁部片15点，胴部片17点である。文様要素，手法上の特色から以下のように分類できる。

第1類（4）

口縁部が肥厚・外反し，頸部文様帯に横位の廻転縄文を施す。施文構成をみると，いわゆる胴部文様帯，頸部文様帯，口唇部文様帯よりなると思われる。

4は頸部文様帯が横位の縄文となる。口唇部も頸部も施文原体RLを施す。施文は肥厚する口唇部直下まで行なわれ，口唇部は横位のかなり丁寧なナデのあと，施文されている。焼成も良好。色調は赤褐色を示す。胎土内には砂粒と白色不透明砂粒を認める。

第2類（5）

口唇部が肥厚し，施文構成をみると，いわゆる胴部文様帯と口唇部文様帯よりなると思われる。

5は口唇部，頸部に施文原体RLを施す。口唇部は球状に肥厚し，内器面はほぼ直立し，ケズリ状にナデられている。焼成は良好。色調は淡褐色を示す。胎土内には砂粒と若干の白色不透明砂粒を含む。また，断面に長さ7mm，厚さ2mmを測る礫も確認される。

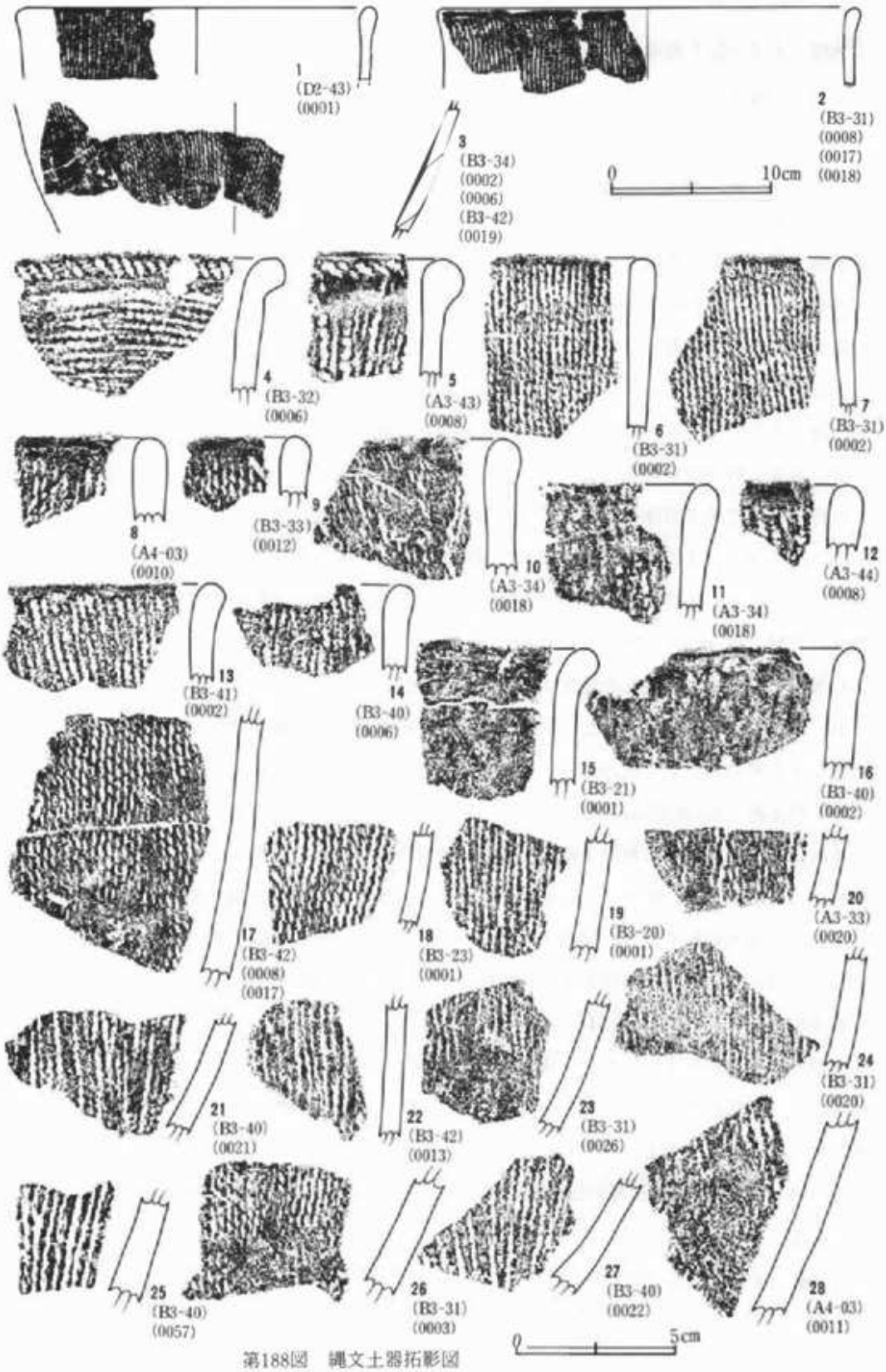
第3類（1，2，6～14）

口唇部は肥厚せず，直立に近いか，僅かに外反するもの。

A種：J型で施文原体RLを施文するもの。（1，11，14）

1は，推定口径21.5cmを示す。施文は浅く，器壁がある程度乾いてから施文されたと思われる。焼成は良好。色調は淡褐色を示す。胎土内には白色不透明の砂粒（長石？）と，白色透明の砂粒（石英）がかなり含まれている。

11，14は施文は浅い。



第188図　縄文土器拓影図

B種：J型で施文原体LRを施文するもの（2，12，13）

2は，口縁部片3点の接合資料である。推定口径26cmを示す。焼成は良好。色調は赤褐色を示す。内器面は横方向のケズリに近い整形痕を認める。胎土内には砂粒，及び白色透明砂粒が含まれている。

13は，若干口唇部が外反する。内器面には2同様にケズリ整形がみられる。

C種：Y型でRの撚糸文を施文するもの（6，7，9，10）

10の撚糸文は不規則であるが，6，7は絡条体を用いて密に施文している。

第4類（3，17～32）

胴部破片を一括する。

A種：J型で施文原体LRを施文するもの（19，30～32）

30は器面に数回廻転施文しているようである。32は縄文の節が粗い。19，30は同一個体。

B種：Y型で施文原体Rを施文するもの（3，17，18，20，22，25，26，29）

3は胴下半部の3点の接合資料である。胴径27cm前後を測るので口縁部は径29～30cmを測ると思われる。色調は明褐色で，白色不透明粒と白色透明粒（石英）が胎土中に確認される。焼成は良好。17は同一個体と思われる。

C種：Y型で施文原体Lを施文するもの（21，23，27，28）

21，27は色調が灰褐色を示し，胎土内には径2mm前後の小礫を含む。石英と思わしき白色透明粒を多量に含む。焼成は良好。

第2群土器（第188図15，16）

本群は縄文早期中葉の無文土器群である。確認されたのは口縁部片2点である。

15は口唇部が僅かに肥厚し，口縁部は外反する。焼成は良好。色調は暗褐色を示す。胎土内には白色不透明砂粒を含む。内器面は横方向にケズリに近いナデ調整が行なわれている。

16は，ほぼ直立する口縁部をもつ。焼成は普通。色調は明褐色。胎土には砂粒を含む。

第3群土器（第189図33，34）

本群は縄文前期前半の土器で，繊維土器の1群である。

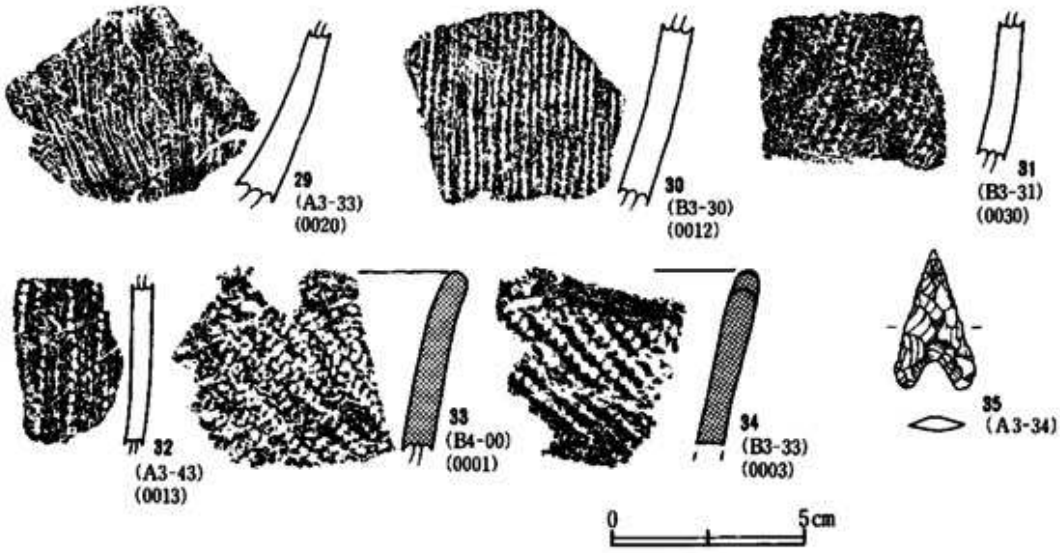
33は，口唇部が微かに外反する。胎土内には砂粒とともに繊維を含む。施文原体R$\left\{\begin{matrix}L\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.\\L\left\{\begin{matrix}R\\L\end{matrix}\right.\end{matrix}\right.$を横方向に廻転施文したものと思われる。

34は波状口縁で，波状頂部の口唇部に刻みを施す。施文原体RLを横方向に廻転施文している。

○石器

石　鏃（第189図35，図版118）

石鏃が1点出土している。石質チャート。形態をみると，基部に抉入を施した凹基無茎鏃である。



第189図　縄文土器拓影図，石器実測図

第８表　先土器時代，他・石器計測表

挿図番号	遺物番号	器種	打面の種類	計測値 cm			重量g	石質
				長さ	幅	厚		
第180図	A 3 -32,0003	礫片	―	6.21	5.11	3.17	155	安山岩
第181図 1	B 3 -31,0042	ナイフ形石器	剥離面打面	3.65	1.80	0.79	4.22	頁岩
2	B 3 -42,0011	スクレーパー？	欠損	3.3	4.8	1.54	29.61	チャート
3	B 3 -32,0002	石核？	―	5.47	2.6	2.05	32.52	安山岩
4	B 3 -22,0002	剥片	点状打面	4.11	3.09	0.61	5.57	砂岩
5	B 3 -33,0038	剥片	剥離面打面	4.14	2.65	2.11	22.47	チャート
6	B 3 -21,0008	剥片	―	3.78	2.65	1.60	9.75	チャート
7	B 3 -43,0020	剥片	剥離面打面	3.59	2.72	0.62	6.01	砂岩
8	B 3 -33,0024	剥片	剥離面打面	3.59	3.5	1.35	16.3	頁岩
第182図 9	B 3 -42,0040	剥片	―	2.13	2.15	1.35	7.7	チャート
10	B 3 -33,0033	剥片	―	2.57	3.46	1.54	13.21	頁岩
11	B 3 -22,0003	剥片	剥離面打面	3.35	2.81	0.74	6.39	砂岩
12	B 3 -31,0043	剥片	欠損	2.94	3.61	0.6	3.56	頁岩
13	B 3 -31,0047	剥片	原面打面	3.40	3.73	0.7	7.58	頁岩
14	B 3 -20,0009	剥片	原面打面	4.21	4.59	0.94	21.83	チャート
15	B 3 -32,0001	剥片	剥離面打面	3.25	3.17	1.8	14.85	チャート
16	B 3 -31,0046	剥片	原面打面	2.95	3.74	1.46	10.76	チャート
17	B 3 -42,0038	剥片	剥離面打面	2.14	3.44	0.98	12.02	頁岩

18	B 3-43,0008	剝片	—	2.10	3.10	1.04	5.90	頁岩
19	B 3-33,0056	剝片	剝離面打面	2.40	2.78	0.64	3.65	頁岩
20	B 3-33,0031	剝片	—	3.78	2.5	1.48	5.15	チャート
第183図21	B 3-42,0023	剝片	点状打面	1.92	3.29	0.77	3.60	チャート
22	B 3-31,0034	剝片	剝離面打面	2.68	2.11	0.50	3.25	チャート
23	B 3-43,0007	剝片	—	1.81	2.81	0.91	3.44	頁岩
24	B 3-41,0025	剝片	欠損	1.78	2.75	0.62	2.13	チャート
25	B 3-33,0025	剝片	—	1.62	3.19	0.92	2.88	頁岩
26	B 3-33,0037	剝片	—	3.53	3.23	1.67	11.83	チャート
27	B 3-33,0044	剝片	剝離面打面	1.77	3.57	1.37	7.78	チャート
28	B 3-20,0010	剝片	剝離面打面	2.75	3.44	0.77	3.77	チャート
29	B 3-42,0043	剝片	原面打面	1.80	2.67	0.68	3.22	安山岩
30	B 3-32,0008	礫片	—	5.18	5.83	2.14	50.8	凝灰岩
31	B 3-42,0002 0004	礫片	—	5.08	3.97	1.86	27.09	頁岩
第184図32	B 3-43,0033	礫片	—	5.32	5.83	1.80	60.0	安山岩
33	B 3-33,0019	礫	—	7.07	6.37	4.73	290.0	安山岩
第185図 1	E 2-31,0007	サイドスクレーパー	点状打面	3.04	2.25	0.48	3.17	チャート
2	E 2-31,0005	礫器	—	4.76	4.70	1.45	37.75	安山岩
3	E 2-32,0004	石核	剝離打面	4.63	1.82	1.71	18.46	凝灰岩
4	E 2-32,0002	剝片	剝離面打面	3.95	3.05	1.01	11.06	凝灰岩
5	E 2-32,0006	剝片	—	3.58	3.42	1.18	13.89	硅岩
6	E 2-32,0001	剝片	点状打面	3.99	2.60	1.46	18.31	安山岩
7	E 2-32,0015	剝片	点状打面	4.46	1.40	0.83	5.28	安山岩
8	E 2-32,0005	剝片	欠損	3.82	2.17	0.7	5.47	硅岩
9	E 2-32,0010	剝片	剝離面打面	2.97	1.65	0.65	2.98	軟質砂岩
10	E 2-21,0002	剝片	—	2.42	2.07	0.6	1.43	安山岩
11	E 2-22,0001	剝片	—	2.46	1.90	0.6	1.72	安山岩
12	E 2-42,0001	剝片	—	1.73	2.16	1.24	3.42	安山岩
第186図13	E 2-22,0002	剝片	欠損	1.75	1.14	0.54	1.3	頁岩
14	E 2-32,0008	剝片	—	2.60	1.08	0.7	1.41	軟質砂岩
15	E 2-22,0003	剝片	—	1.48	1.53	0.47	1.17	チャート
16	E 2-41,0003	剝片	—	2.63	1.56	1.23	3.95	安山岩
17	E 2-41,0018	剝片	—	1.98	1.66	0.6	1.67	軟質砂岩
18	E 2-41,0011	剝片	—	1.55	1.70	0.46	1.21	軟質砂岩
19	E 2-31,0001	剝片	—	1.75	1.24	0.59	1.20	安山岩
20	E 2-21,0001	剝片（チップ）	—	1.89	0.62	1.27	0.27	頁岩
21	E 2-30,0005	礫片	—	4.69	3.12	2.02	27.99	安山岩

22	E 2 -31, 0009	礫　　片	—	4.19	3.04	1.68	26.12	チャート
23	E 2 -41, 0017	礫　　片	—	4.97	3.14	1.71	33.39	軟質砂岩
24	E 2 -41, 0006	礫　　片	—	5.27	5.06	4.65	100.0	軟質砂岩
第187図25	D 3 -32, 0001	有舌尖頭器	—	4.58	1.72	0.62	4.29	安山岩

第3節　住居跡出土遺物

○土師器（第190図1，2）

2点ともかろうじて器形が窺える小破片である。

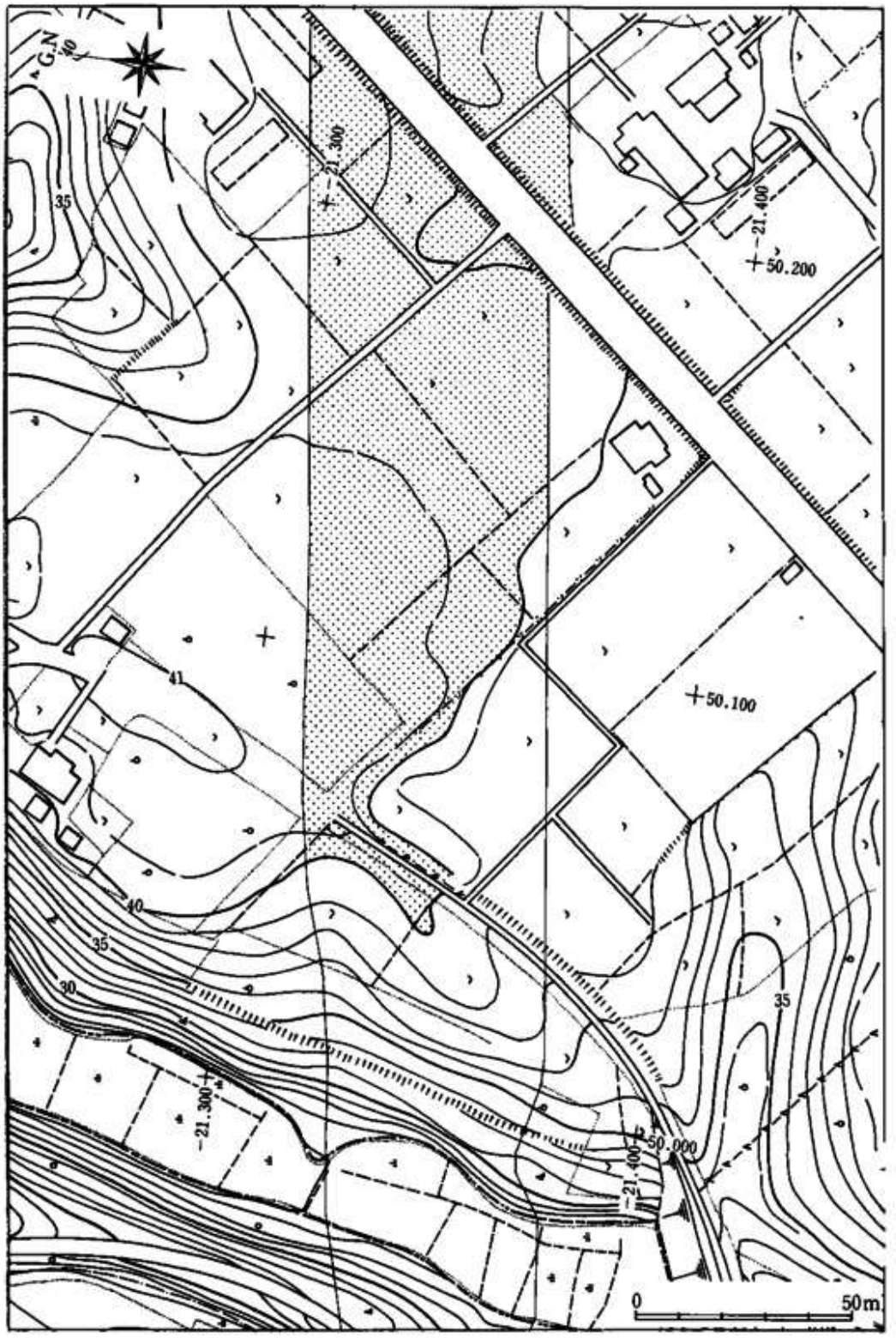
1は坏で，口縁部の外反は強く，若干肥厚する。体部はきわめて薄くなる。口縁部はヨコナデ。底部はヘラ削りを施している。2は小形甕で，口唇部が折返され，やや立ち上がる。

第190図　001号住居跡出土遺物実測図

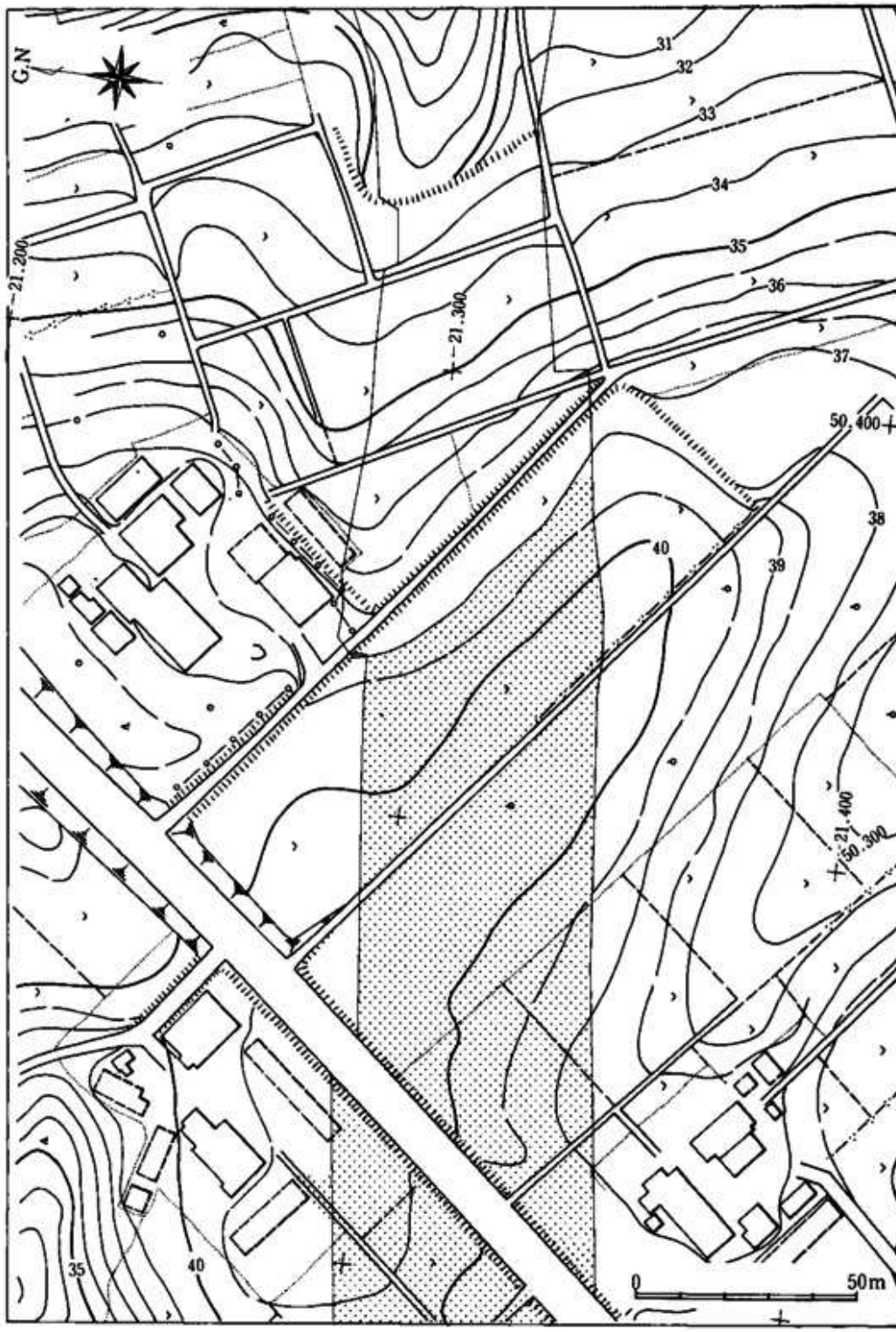
稲　荷　峯　遺　跡（No.6）

（211—013）

第191図　稲荷峯遺跡周辺地形図（1/3,000）



第192図　稲荷峯遺跡地形図 (1) (1/1,500)



第193図　稲荷峯遺跡地形図 (2) (1/1,500)

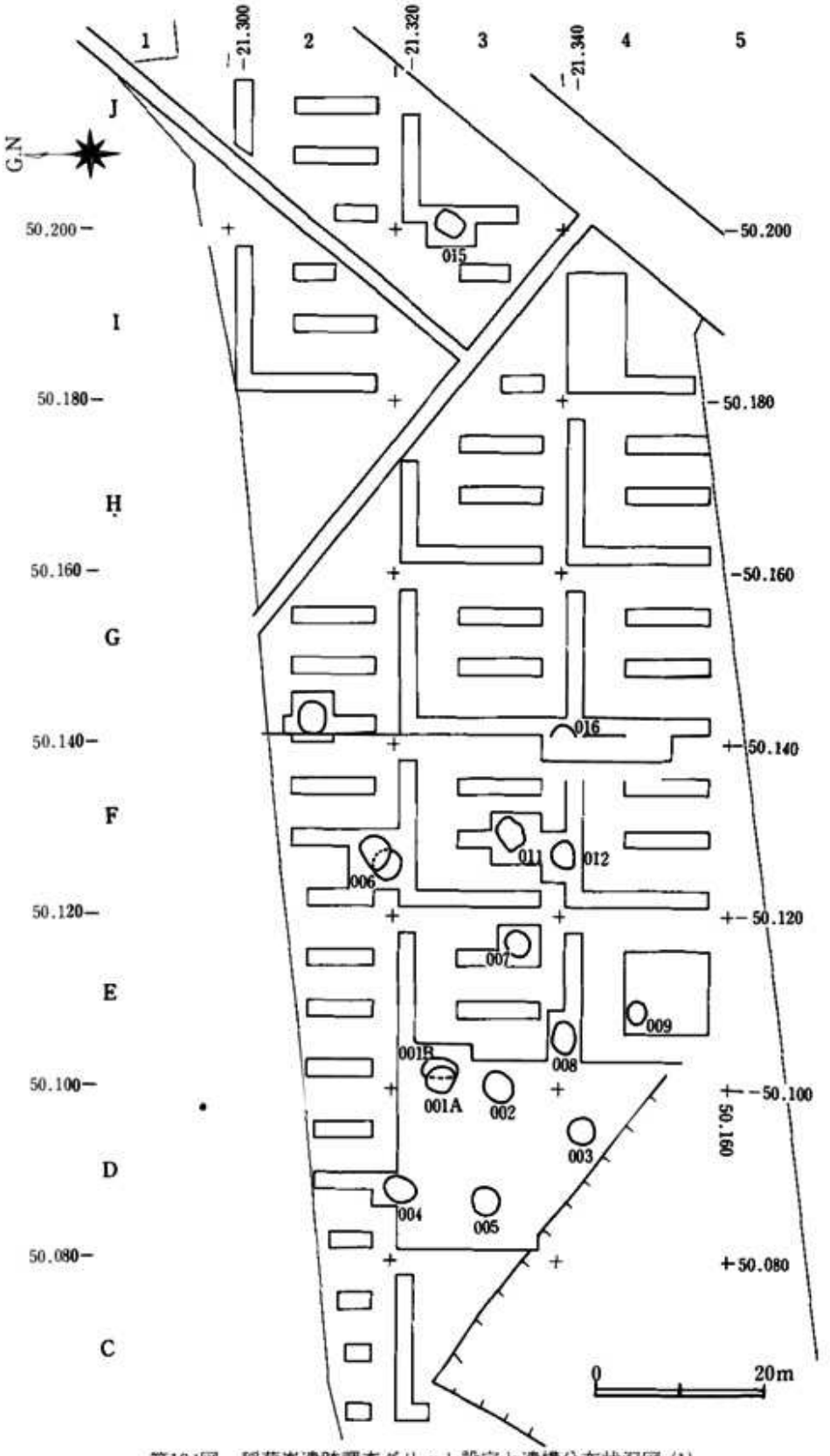
第1章　調　査　概　要

遺跡調査対象は，包含地15,700㎡であった。当初の発掘区の設定方法を踏襲し，20×20mの調査区あたり幅2m，長さ10mのトレンチ2本と，各区基本線より1m離して直角に設定した長さ32mのトレンチを設けた。

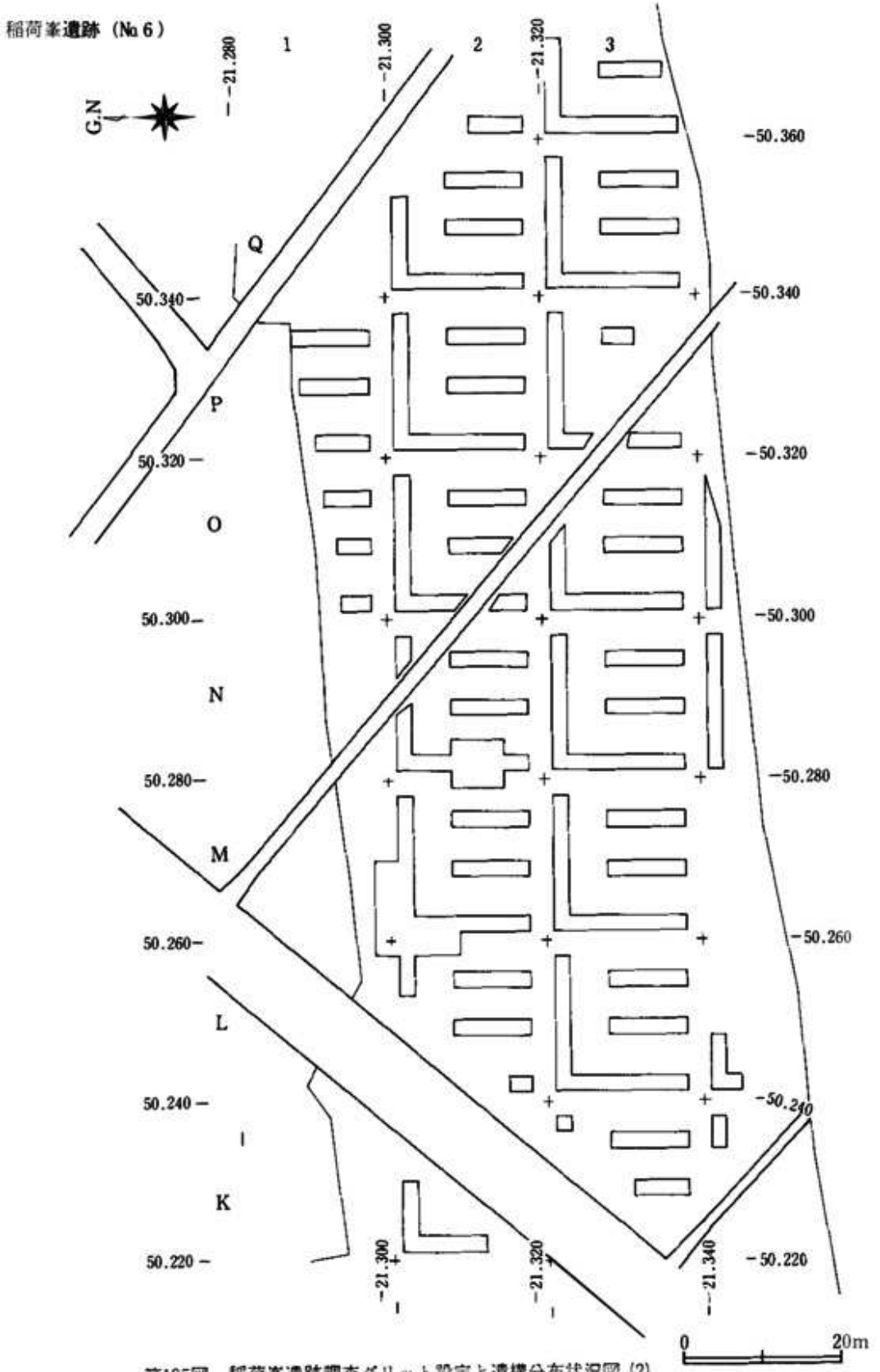
昭和55年6月30日より調査は開始され，同年9月30日までの約3ケ月の期間を要した。

まず，国道51号線で分断されている西側地点より調査を着手し，確認のためのトレンチを発掘した。7月14日頃より確認された遺構の拡張作業を並行して行う。23日より，各グリットで確認された遺構の調査に着手，順次遺物取上，遺構平面実測に移行した。8月中旬頃より，国道の東側部分の調査に移行し，先土器時代の調査も並行して行ない，9月30日にすべて終了した。

標高40.7mを測る遺跡西側地点においては，いわゆる第II層の暗褐色土層が認められない。東側地点では，部分的ではあるが10～20cmの厚さで認められる。第III層のソフトロームは40～50cmの厚さを示す。



第194図　稲荷峯遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図 (1)



第195図　稲荷峯遺跡調査グリット設定と遺構分布状況図（2）

第2章　遺　　構

第1節　住　居　跡

住居跡は国道51号線で分断された遺跡の西側に確認された。台地平坦面上に占地し，径60mの範囲に16軒検出され，歴史時代以降のものと思われる住居跡1軒が国道51号線寄りに確認された。

001A号住居跡（第196図，図版123）

台地のほぼ中央E3－10グリット内で確認。形態は楕円形状を呈し，3.3×2.75mを測る。ほぼ水平に埋没しており，上面には黒褐色土層，床面直上には焼土混入赤褐色土層，あるいは焼土層を確認する。炉は住居のほぼ中央に位置し，形状は円形で35×32 cm，深さ 7 cm を測る。火床の遺存は良好であるが，掘込は浅い。なお，近接してほぼ円形の小ピットを確認する。壁高は 25 cm を測り，床面はソフトローム中に構築されており，中央部に向かって凹むようである。軟弱であるが遺存は良好である。周溝は認められず，柱穴はほぼ円形に設けられている。深さはP1＝42 cm，P2＝25 cm，P3＝34 cm，P4＝28 cm，P5＝25 cm を各々測る。

遺物は土器片が2点ほど覆土中より出土した。

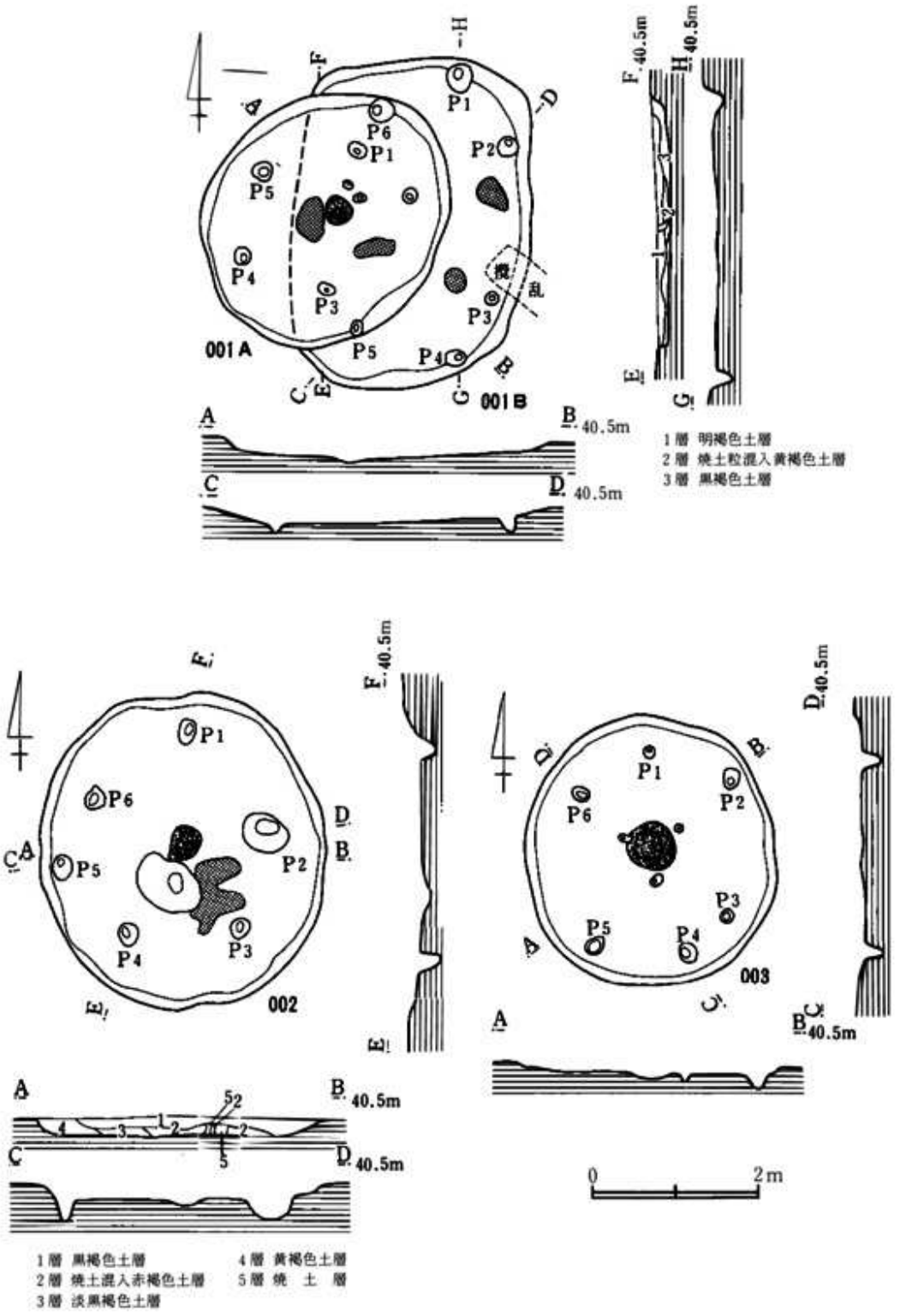
001B住居跡（第196図，図版123－2）

001A号住居跡と重複して検出された。切合い関係より，本跡のほうが古い。形態は隅丸長方形を呈し，4×2.8mの規模を示す。埋没状況は，焼土がかなりまとまって出土しており，西北隅には木炭が検出された。土層は，ローム粒を少量含み，焼土を多く含む暗褐色土層が認められ，壁寄りには部分的にローム粒を含む黄褐色土層が認められた。炉は存在していたと思われるが，001A号住居跡の構築により消失したものと考えられる。壁高は 18 cm を測り，ゆるやかに立ち上がっている。床面は軟弱で凸凹が多い。周溝は認められない。柱穴は壁下にほぼ円形に設けられており，深さはP1＝46 cm，P2＝52 cm，P3＝50 cm，P4＝55.5 cm，P5＝55 cm，P6＝69 cm を各々測る。

遺物の出土はない。

002号住居跡（第196図，図版124－1）

台地のほぼ中央D3－34，E3－30グリット内で確認された。形態は楕円形状で，3.7×3.5mの規模を示す。不整な埋没状態を示し各土層もブロック状を示す。床面上には焼土を流入した赤褐色土層があり，壁寄りには黄褐色土層を確認する。上面には黒褐色土層を認める。炉は遺構のほぼ中央に位置し，50×35 cm。火床は深さ 10 cm を測り，あまり焼けていない。壁高は 20 cm を測り，ゆるやかに立ち上がる。床面はかなり軟弱で，凸凹が多い。周溝は認められない。柱穴は床面上にほぼ円形に配置している。深さはP1＝21 cm，P2＝26 cm，P3＝31



第196図　001，002，003号住居跡実測図

cm，P 4＝33 cm，P 5＝33 cm，P 6＝22 cm を測る。炉に近接して，87×85 cm，深さ 20 cm の大形のピットを確認している。

遺物の出土はない。

003号住居跡（第196図，図版124－2）

D 4－03，04グリット内で確認された。形態は正円形をなし，3.2×3 mを測る。現地表下 45 cm に床面を確認し，表土下にローム粒を多く含む，暗褐色土層がほぼ水平に堆積している。炉は住居跡中央に位置し，58×53 cm，深さ 7 cm と浅く，あまり使用された痕跡は認められなかった。ほぼ等間隔に，深さ11～14 cm の小ピットを伴う。壁高は 15 cm でゆるやかに立ち上がる。床面はソフトローム中に構築されており，軟弱で凸凹がある。周溝はない。柱穴は壁より約 20～30 cm 離れて，ほぼ円形に 6 本設けられている。深さはP 1＝22 cm，P 2＝19.5 cm，P 3＝20 cm，P 4＝22 cm，P 5＝33 cm，P 6＝26 cm を測る。

遺物は，土器が数点覆土中より出土し，石器は，床面直上で，ポイント 1 点，石鏃 2 点，敲石 2 点，凹石 1 点が確認され，覆土中より石鏃 2 点出土した。

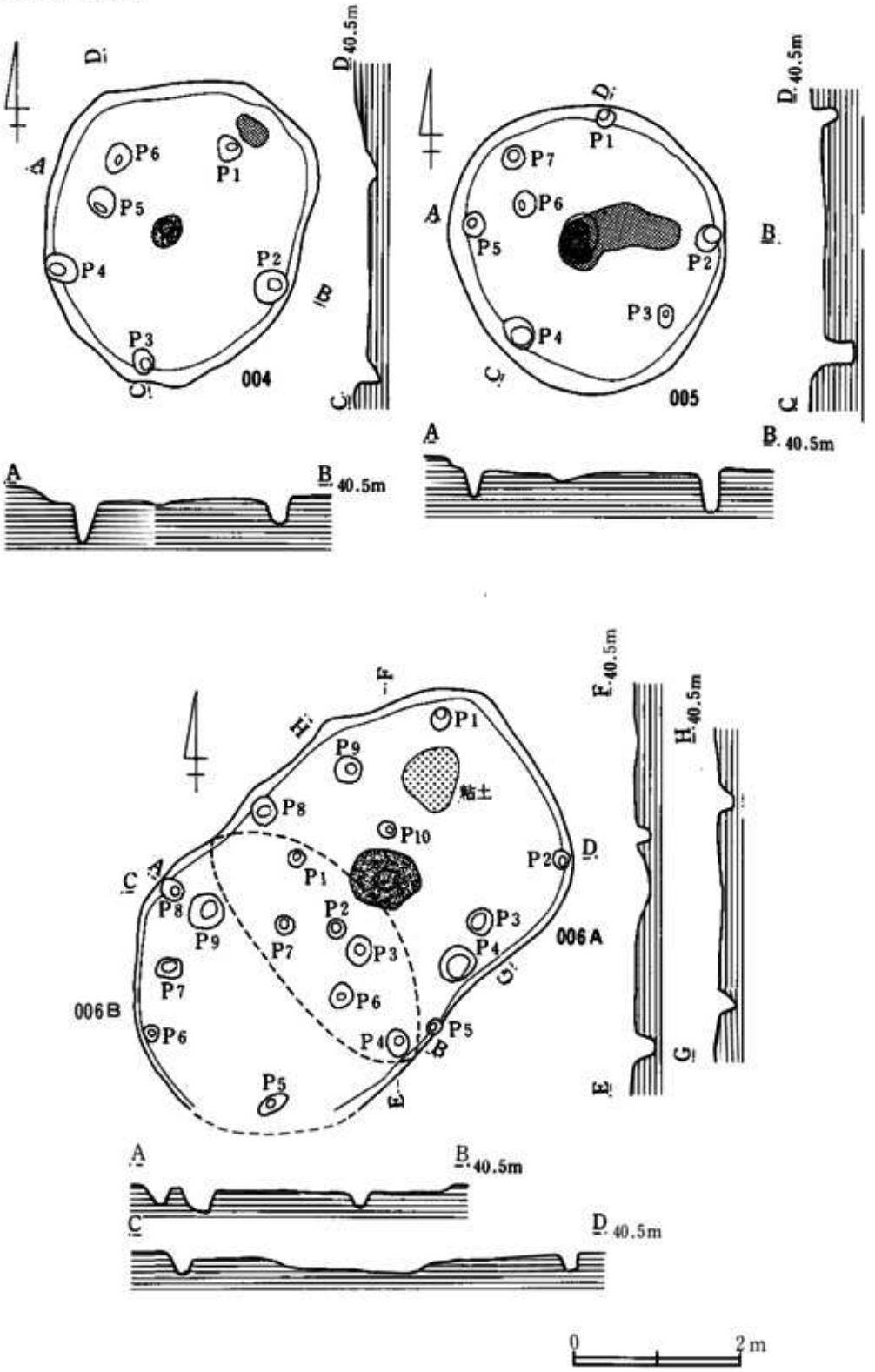
004号住居跡（第197図，図版125－1）

D 3－01，02グリット内で確認された。形態は楕円形で，3.7×3.1mの規模を示す。現地表下 40 cm に床面が確認され，表土下にローム粒を含む黒褐色土層，暗褐色土層がほぼ水平に堆積し床面上にはローム粒を少し含む暗褐色土層を認める。炉は住居跡のほぼ中央に構築され 40×35 cm の規模をもつ。深さは 6 cm を測り，かなり使用した状態である。壁高は 15 cm で壁はかなりゆるく立ち上がる。床面は軟弱で凸凹がある。周溝はない。柱穴は 3 本が壁に接して，また，他の 3 本は壁より 50 cm ほど離れて認められる。深さはP 1＝33.5 cm，P 2＝29 cm，P 3＝17 cm，P 4＝22 cm，P 5＝52 cm，P 6＝13 cm を測る。

遺物の出土状況は，器形の窺える繊維土器 1 個体，炉の西側より確認され，また，平面盤状の砂岩質の石器が北東壁寄りにある焼土に接して出土した。

005号住居跡（第197図，図版125－2，126－1）

住居跡群の西端に位置し，D 3－21，22，31，32グリットで確認された。形態はほぼ円形をなし，3.5×3.25mの規模である。埋没状況をみると，床面中央に多量の焼土が堆積している。土層は表土下にローム粒を含む黒褐色土層，床面直上に焼土及びローム粒，焼土を少し含む暗褐色土層がほぼ水平に堆積している。炉は住居跡ほぼ中央に位置し，50×45 cm の楕円形を呈す。深さは 8 cm を示し，遺存は不良である。壁高は 18 cm を測り，ゆるやかに立ち上がる。床面はソフトローム中に作られ，軟弱で若干凹凸がある。周溝は認められない。柱穴は 7 本あるが，1 本を除いて壁に接するか，近接して設けられている。深さはP 1＝23 cm，P 2＝44 cm，P 3＝14 cm，P 4＝37 cm，P 5＝31 cm，P 6＝25 cm，P 7＝22 cm を測る。



第197図　004号，005号，006号住居跡実測図

遺物は，土器片が覆土中より約20点近く出土した。

006A号住居跡（第197図，図版126－2）

2軒が重複してF2－41，42，F3－01，02グリットで確認された。形態は隅丸方形で，3.8×3.45mの規模を示す。現地表面から床面まで43cmを測り，ローム粒を含む暗褐色土がほぼ水平に堆積している。炉は，住居跡のほぼ中央，88×68cm，深さ20cmを測り，火床の焼土化は進んでおり，黒褐色土が堆積，焼土粒，炭化物が多く含まれていた。壁高は10cm，壁はややゆるやかに立ち上がる。床面はソフトローム中に認められ，軟弱で凹凸がある。周溝はなく，柱穴は一部重複で不明であるが，ほぼ壁下に設けられているものが，本跡に伴うものと推定する。深さはP1＝20cm，P2＝17cm，P3＝22cm，P4＝35cm，P5＝22cm，P6＝20cm，P7＝20cm，P8＝18cm，P9＝17cm，P10＝17cmを測る。

遺物は石鏃が1点，覆土中より出土した。

006B号住居跡（第197図，図版126－2）

006A号住居跡と重複して検出された。新旧関係は本跡のほうが古い。形態は北東壁が推定であるが，ほぼ円形を示すと思われる。規模は3.62×3.3mを示す。埋没状態は006A号住居跡と同様に，ローム粒を含む暗褐色土が堆積している。炉は確認されず，006A号住居跡の構築により消失したものと思われる。壁高は10cmと低く，壁も不明瞭である。床面は軟弱で凹凸が多い。周溝はなく，柱穴は一部重複しているが9本確認された。深さはP1＝20cm，P2＝19cm，P3＝17cm，P4＝25cm，P5＝18cm，P6＝19cm，P7＝28cm，P8＝19cm，P9＝26cmを測る。

遺物の出土はない。

007号住居跡（第198図，図版127－1）

E3－33，34，44グリットで確認された。形態は不整形で，3×2.6mを測る。覆土はローム粒を多く混入し，また，焼土粒を少量含む暗褐色土が認められ，また，壁寄りはローム粒を流入する明褐色土が混入している。炉は住居跡のほぼ中央に設けられており，42×32cm，深さ7.5cmを測る。壁高は10cm，壁はゆるやかに立ち上がる。床面はほぼ平坦でやや軟弱である。周溝は確認されない。柱穴は5本確認され，ほぼ100cm～150cmの間隔で設けられている。形状は不整円形で，深さはP1＝27cm，P2＝26cm，P3＝20cm，P4＝26cm，P5＝22.5cmを測る。

遺物は，土器が数点，また，石鏃が1点覆土内より出土した。

008号住居跡（第198図，図版127－2）

E4－01グリットで確認された。形態は楕円形をなし，3.1×2.4mの規模を示す。覆土はほぼ平坦に堆積しており，床面直上にはローム粒を含む暗褐色土層，部分的に焼土を含む暗褐色

土層を認める。炉は住居跡のほぼ中央に認められ，形状は楕円形で，30×20 cm の大きさである。壁高は 10 cm を測り，床面はやや軟弱で凹凸が多い。周溝は認められず，柱穴は壁寄りに5本構築されている。深さはP 1＝18.5 cm，P 2＝22 cm，P 3＝15 cm，P 4＝16 cm，P 5＝11 cm を測る。

遺物は，石鏃が1点覆土内より出土した。

009号住居跡（第198図，図版128－1）

E 4－21，22グリットで確認された。形態は正円形をなし，直径2.3mを測る。ローム粒を多く含む暗褐色土層が一様に堆積しており，壁寄りには褐色土層が流入している。炉は住居跡のほぼ中央に位置し，30×26 cm，深さ 5 cm を測る。使用状況をみると焼土化は低い。壁高は 18 cm を測り，壁の立ち上がりは，他の住居跡に比べれば明瞭である。床面はソフトローム中にあり，軟弱で凹凸が多い。周溝，柱穴は認められなかった。北壁寄りには，径20 cm，深さ 28 cm 前後を測る小ピットが近接して穿たれていた。

遺物は，若干の土器片と石片が覆土内より出土した。

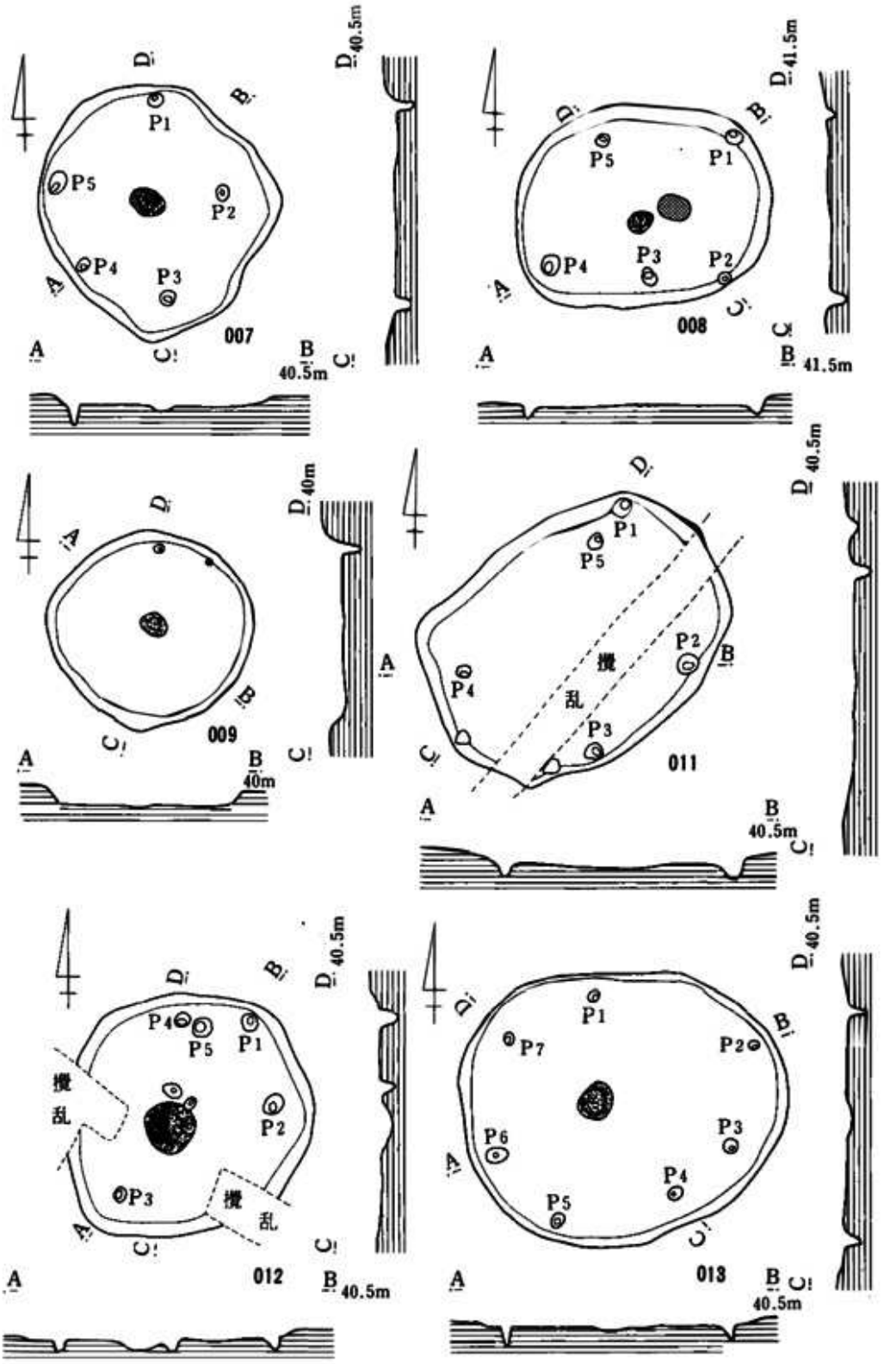
011号住居跡（第198図，図版128－2）

F 3－32グリット内で確認された。形態は不整形を呈し，北東から南西にかけて幅 50 cm の攪乱が入っている。3.8×2.8mを示す。現地表面から 45 cm で床面が確認でき，層はほぼ水平に堆積している。表土下にローム粒を多く含む暗褐色土層，床面上にはローム粒，木炭粒を少量含む暗褐色土層を認めた。また部分的には焼土粒を多く含んだ土層もブロック的に確認された。炉は攪乱による溝で消失したと思われる。壁高は 15 cm を測り，なだらかに立ち上がる。床面はソフトローム中にあり，軟弱で凹凸が多い。周溝はなく，柱穴は5本壁寄りに確認したが，配置が不規則で，柱穴としての機能をすべてには求められない。深さはP 1＝15 cm，P 2＝19.5 cm，P 3＝21 cm，P 4＝21 cm，P 5＝22 cm を測る。

遺物は石片が2点ほど覆土内より出土した。

012号住居跡（第198図，図版129－1）

台地のほぼ中央，F 3－41，F 4－01，02グリットで確認された。形態は不整円形をなし，3.2×2.9mの規模を示す。一部に攪乱が入っている。土層をみると，表土下にローム粒を多く含む暗褐色土層，その下に床面までローム粒を少し含んだ黒褐色土層を認める。炉は微かに南壁に偏在してあり，60×50 cm のほぼ円形を呈し，深さ 10 cm で擂鉢形を示す。火床の焼土化はあまり進んでいない。近接してピットが2ケ所ある。深さは 23 cm と 16 cm を測る。壁高は 15 cm を示す。壁はあまりはっきりせず，ゆるやかに立ち上がる。床面は軟弱で凹凸が多い。周溝はない。柱穴と思われるピットは壁下にあるが，その配置は不規則である。深さはP 1＝20 cm，P 2＝20 cm，P 3＝15 cm，P 4＝23.5 cm，P 5＝19 cm を測る。



第198図　007号，008号，009号，011号，012号，013号住居跡実測図

遺物は凹石が床面直上より出土した。

013号住居跡（第198図，図版129－2）

G2－20，21グリットで確認された。形態は楕円形状を呈し，3.95×3.2mの規模を示す。埋没状況をみると，住居中央部に炭化物，焼土を多く含む黄褐色土層が確認され，壁寄りには，ソフトローム土，ローム粒を多く含む暗褐色土層を認める。炉は住居跡のほぼ中央部にあり，45×38 cm，深さ 7 cm を測る。遺存状態はやや不良である。壁高は約 12 cm を測り壁はゆるやかに立ち上がる。床面はソフトローム中にあり軟弱である。周溝はなく，柱穴は7本確認され，壁より約 15～30 cm 住居内にあり，ほぼ均等に配置している。深さはP1＝64.5 cm，P2＝65 cm，P3＝55 cm，P4＝53 cm，P5＝63 cm，P6＝58 cm，P7＝58 cm を測る。

遺物の出土はない。

014号住居跡（第199図，図版130－1）

G3－30，31，40，41グリットで確認された。形態は不整円形をなし，3.1×2.75mの規模を示す。覆土はローム粒を少し含む暗褐色土層が主体を占め，部分的に焼土を認める。炉はやや一方に偏在しており，45×25 cm，深さ 3 cm を示す。火床はかなり焼土化している。近接してピットが2基ある。深さは北側が 7 cm，南側が 12 cm を測る。壁高は 12 cm を測り，壁はゆるやかに立ち上がる。床面はソフトローム中にあり，軟弱である。周溝は認められない。柱穴と思われるものが5本あるが，その配置に規則性はない。形状等はほぼ円形であり，直立している。深さはP1＝32 cm，P2＝18 cm，P3＝30 cm，P4＝22 cm，P5＝22 cm である。

遺物は，土器片数点が覆土内より出土した。

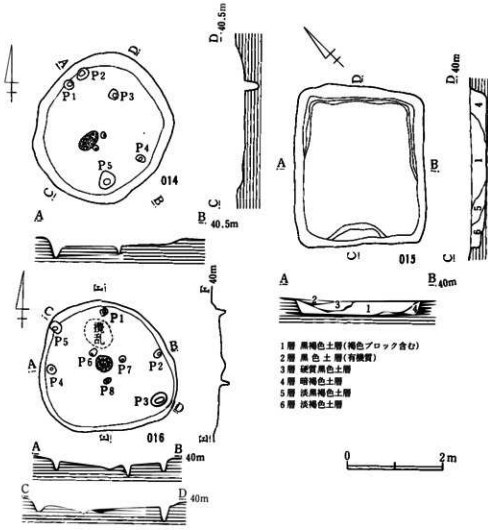
015号住居跡（第199図，図版130－2）

縄文早期の遺物を出土する住居跡群より，60mほど東側の，H3－14，J3－10，20グリットで単独で確認された。形態はほぼ長方形を呈し，3.3×2.7mの規模である。また，南西壁下には幅 100 cm，長さ 20 cm を測り，床面より 6 cm 高いテラスをもつ。覆土はレンズ状に埋没し，中央部は褐色土ブロックを含む黒褐色土層，壁寄りにはやや軟質の暗褐色土層，淡褐色土層を認める。炉あるいはカマドの痕跡は認められなかった。壁高は 53 cm で，やや傾斜している。床面は堅緻である。周溝は北東側に確認される。柱穴，ピット類はまったくない。

遺物は，流入した縄文式土器数点と石鏃1点が出土し，また，砥石が1点床面近くより確認された。

016号住居跡（第199図，図版131－1）

F3－44，F4－04，G3－40，G4－00グリットで確認された。不整円形を呈し，2.9×2.7mの規模を示す。現地表下 40 cm に床面を認め，表土下中央にレンズ状にローム粒を多く含み，焼土粒を少量含む暗褐色土層が推積する。炉は住居跡ほぼ中央に位置し，60×32 cm，深さ



第199図　014号，015号，016号住居跡実測図

8 cm を測る。使用による焼土化は不良である。炉に付随して小ピットが等間隔に 3 基設置されている。深さはＰ１＝14 cm，Ｐ２＝21 cm，Ｐ３＝20 cm である。壁高は18 cm を測り，壁はゆるやかに立ち上がる。床面は軟弱で凹凸が多い。周溝はない。柱穴は，壁中，もしくは壁に接して５本確認されている。ほぼ等間隔であるが，一辺だけかなりあいている。深さはＰ１＝17 cm，Ｐ２＝22 cm，Ｐ３＝33 cm，Ｐ４＝22 cm，Ｐ５＝18 cm を測る。

遺物は，敲石としても使用した痕跡を残す凹石が１点，覆土中より出土した。

第9表　稲荷峯遺跡住居跡調査表

住居跡番号	平面形	長径 m	短径 m	床面積 m²	柱穴	ピット	炉	遺物	備考
001A	楕円形	3.3	2.75	5.56	5	2	中央		
001B	隅丸長方形	4.0	2.8	(8.47)	6	0	消失		001B<001A
002	楕円形	3.7	3.5	8.83	6	1	中央		
003	正円形	3.2	3.0	6.36	6	3	中央	尖頭器1，石鏃4 凹石1，磨石1，敲石1	
004	楕円形	3.7	3.1	7.49	6	0	中央	前期黒浜式，石皿？	
005	円形	3.5	3.25	6.69	7	0	中央	条痕文系・沈線文系土器，石鏃1	
006A	隅丸方形	3.8	3.45	11.06	10	0	中央	石鏃1	
006B	円形	3.62	3.3	(8.34)	9	0	不明		006B<006A
007	不整形	3.0	2.6	5.4	5	0	中央	石鏃1	
008	楕円形	3.1	2.4	4.47	5	0	中央	石鏃1	
009	正円形	2.3	2.3	3.43	0	2	中央		
011	不整形	3.8	2.8	6.84	5	0	不明		
012	不整円形	3.2	2.9	5.39	5	2	やや南壁寄り	石器？	
013	楕円形	3.95	3.2	8.96	7	0	中央		
014	不整円形	3.1	2.75	4.52	5	2	南西壁寄り		
015	長方形	3.3	2.7	5.96	0	2	なし	石鏃1，砥石1	テラス・一部周溝有，歴史時代
016	不整円形	2.9	2.7	5.02	5	3	中央	敲石？1	

第2節　縄文時代遺物包含層

J3－02グリット（第200図，図版131－2）

本グリットのやや北壁寄りから，縄文早期中葉の沈線文土器が単独出土した。現地表から98cmの深さの第II層，暗褐色土層の最下面に，口縁から胴部にかけて，全体の約⅗が平面的に押し潰された状態であった。また，その西側より，尖底部が出土したが，胴部とは直接接合しなかった。

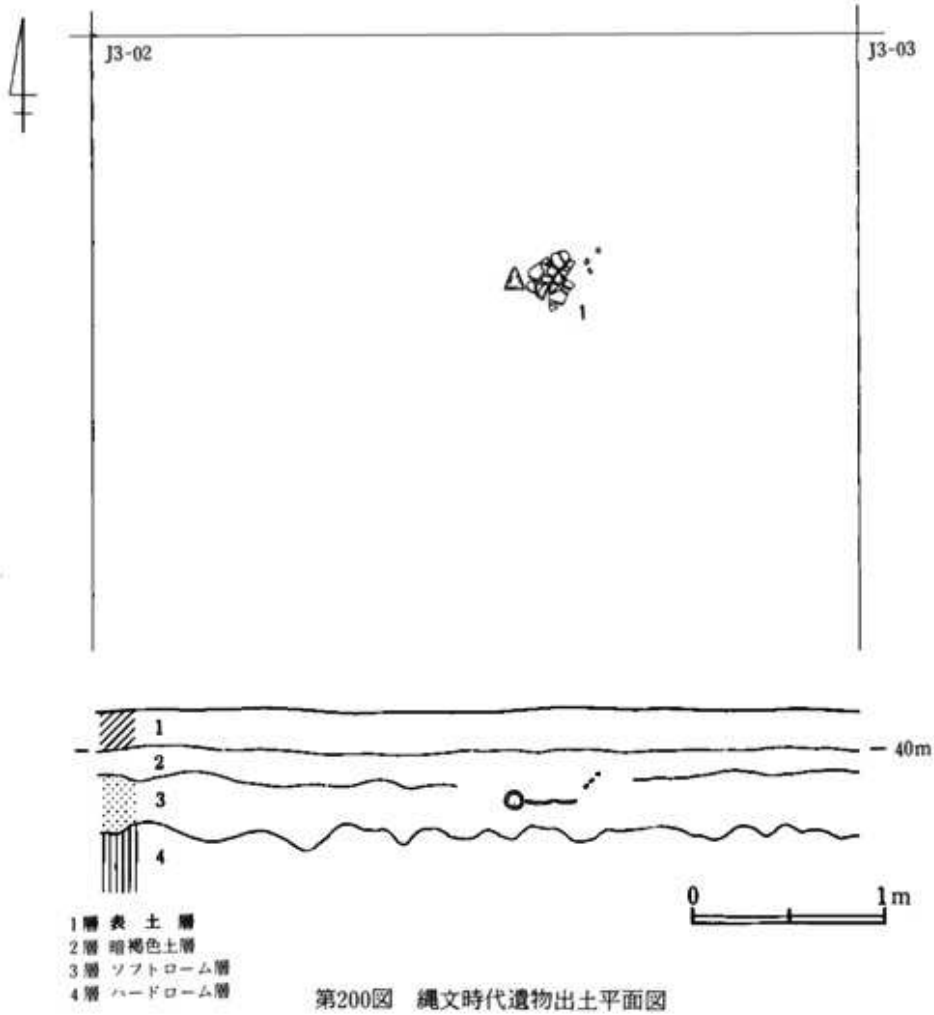
付近をかなり広く拡張し，遺構の確認，あるいは，遺物の出土面の検出を計ったが，遺構の痕跡はまったくなく，また，遺物の出土もなかった。

I4区（第201図，図版132）

I4－02，03，12，13グリットにかけて，縄文中期中葉の加曽利E式土器と，曽利式土器が混在出土した。

I4－02グリット，土器片数29点，I4－03グリット，土器片数4点，I4－12グリット，土器片数76点，I4－13グリット，土器片数37点，以上合計146点の出土があった。

接合してみると，第210図67，68に示す縄文土器2個体になり，他の土器の混入はまったくな



第200図　縄文時代遺物出土平面図

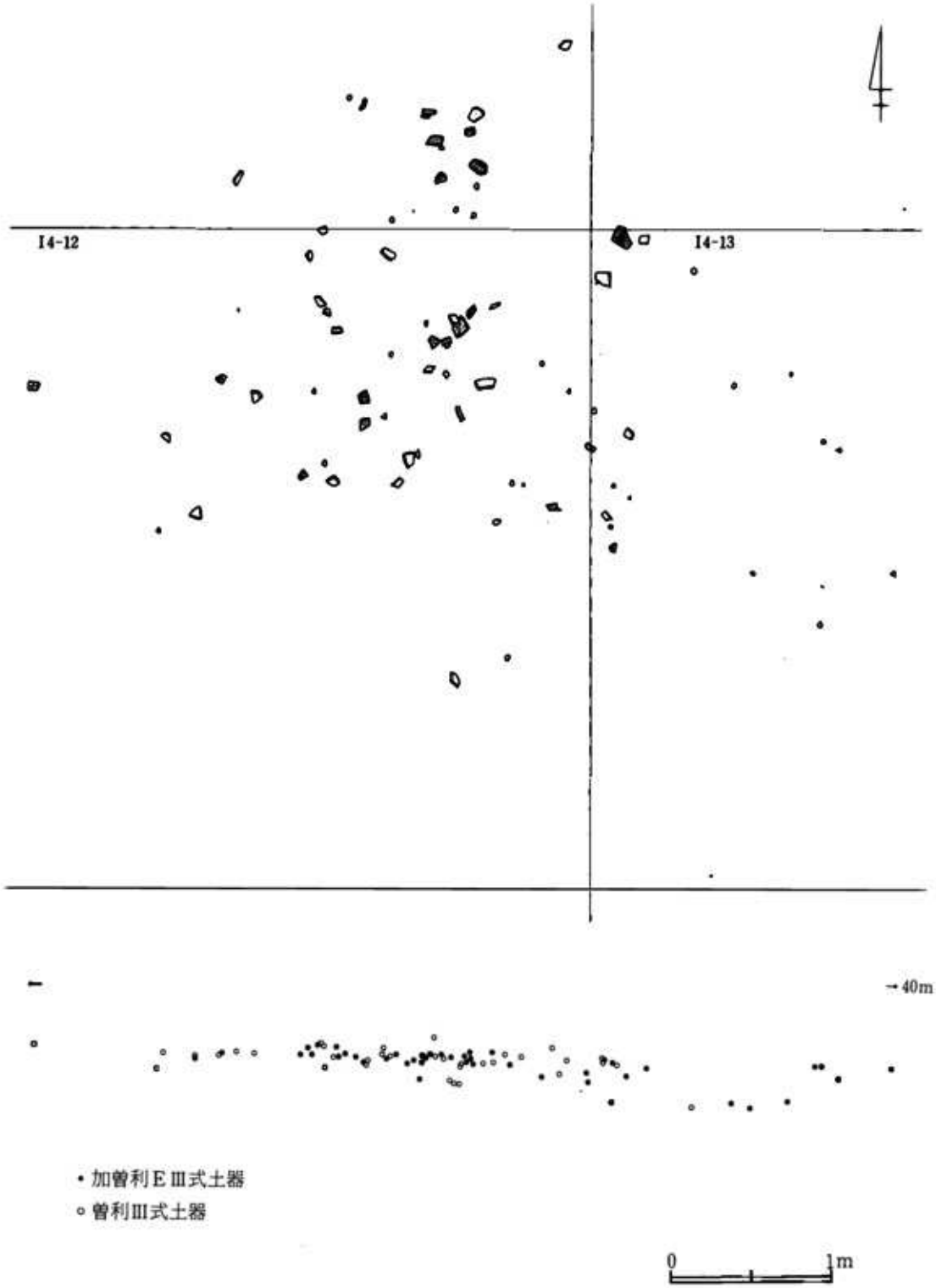
かった。

第210図67の加曽利ＥIII式土器は，Ｉ４－02グリットの大形破片を中心に，東西4.5m，南北3.8mの範囲より確認された。Ｉ４－13グリットなどの端になると小破片であった。出土層位は**第II層**（暗褐色土層）最下位からソフトローム上位にかけて確認され（第201図●にて表示），標高上は多少の上下はあるが，これは，遺跡そのものが南側に傾斜しているので，それに呼応して土層も低くなるためである。

第210図68の曽利III式土器は，Ｉ４－12グリットを中心に，東西4.5m，南北3.0mの範囲より確認された（第201図○にて表示）。出土層位は，加曽利ＥIII式土器とまったく同じで，混在出土である。

以上の２個体の縄文式土器は，出土層位もまったく同じで，また，平面的な散布規模も同じである。特に，遺構等の確認に注意をはらったが，焼土などの痕跡，また，硬質面の痕跡などまったくなかった。平面的な遺物の出土状態より考えられることは，当時の生活面であったと思われる。

稲荷峯遺跡（No.6）



第201図　縄文時代遺物出土平面図

第3章　遺　　物

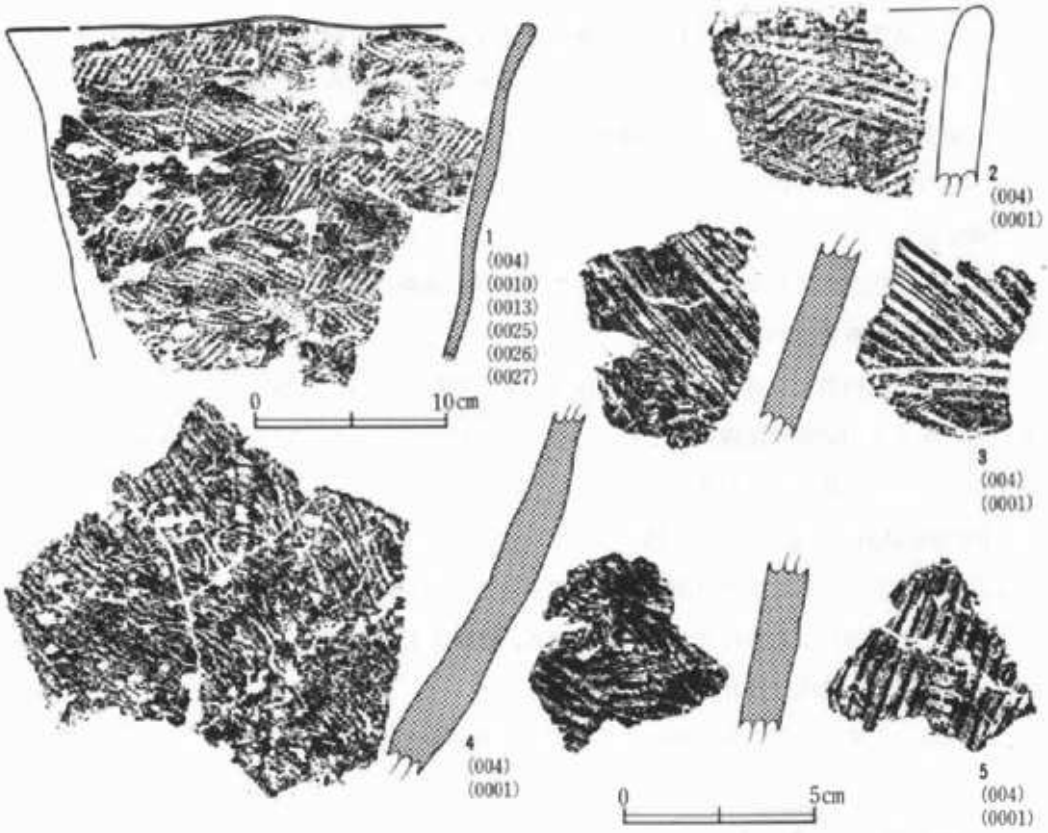
第1節　住居跡出土遺物

○土器

004号住居跡出土土器（第202図，図版133）

1は口縁部から胴部下半まで約⅔が遺存する。推定口径27.2cm，器厚0.7cmを測る。器形は全体的に外傾し，口縁部で外反する。口縁部は若干波状を呈し，口唇上は平坦である。器壁は部分的に若干凹凸をもつ。胎土内には多量の繊維を混入する。器面には，施文原体RL，LRを横方向に施文し，羽状縄文の文様構成をもつ。裏面は繊維の混入により器壁の剝脱が顕著である。色調は黒褐色，焼成は不良である。

2は口唇部で微かに外反する器形である。器厚1.1cm，表面は短い単位の条痕，裏面は平滑に調整されている。胎土には砂粒を含む。焼成良好。



第202図　住居跡出土縄文土器実測図，拓影図

3～5は表裏に条痕文を認める。胎土内には繊維を混入する。4は底部に近い部位である。

以上が，住居跡内より出土した土器片である。特に1の土器はこの住居跡の時期認定を行うについて，最も良好な資料として出土した。出土状況は，住居跡の炉の周辺の床面上より出土した。土器は多量の繊維を含み，器面には羽状縄文を施していることから，縄文前期中葉の黒浜式土器に該当するものと思われる。また，その特徴より黒浜式土器でも新しい時期として捉えられる。

005号住居跡出土土器（第203図1～14，図版134）

1～5は表裏に条痕文を施した土器である。器厚は 0.9～1.0 cm を測り，比較的厚い。条痕文は単位の短いものと長いものとがある。色調は黒褐色を示し，焼成は不良，比較的脆い。

6，7は表のみ条痕文を施した土器である。胎土には同じく繊維を含む。

8は無文であるが，胎土に繊維を含んでいるため，器表面に繊維束がでている。色調は黒褐色を示し，焼成は不良で脆い。

9，10は器面に絡条体圧痕文が施されている。絡条体の方向は横位，9は格子状沈線文も認められる。裏面はともに無文。胎土には繊維を多量に含む。色調は赤褐色で焼成は不良。

11は波状口縁部である。口唇部は若干外反し，その口唇上面及び口縁部には貝殻腹縁文が縦方向に施文されている。胎土内には繊維を混入する。

12～14は器面に単節縄文が施文されている。施文原体は12はＬＲ，13，14はＲＬである。ともに繊維を含む。

以上が，住居跡内より出土した土器片である。特に遺構の時期を決定するような遺物はなく，ほとんどは住居跡覆土からの出土である。

1～10はその特徴より縄文早期後半の条痕文系土器群のなかの一類であろう。11は貝殻文施文から，縄文早期中葉の沈線文系土器群のなかの一類と思われる。12～14は縄文前期中葉の繊維土器のなかの一類と思われる。

016号住居跡出土土器（第203図15）

1点のみの出土である。出土面は覆土中であることから流れ込みと考えられる。

太沈線と細沈線による斜行文が施されている。器厚は 1.2 cm であり比較的厚い。胎土内には砂粒を多く含み，焼成は良好。

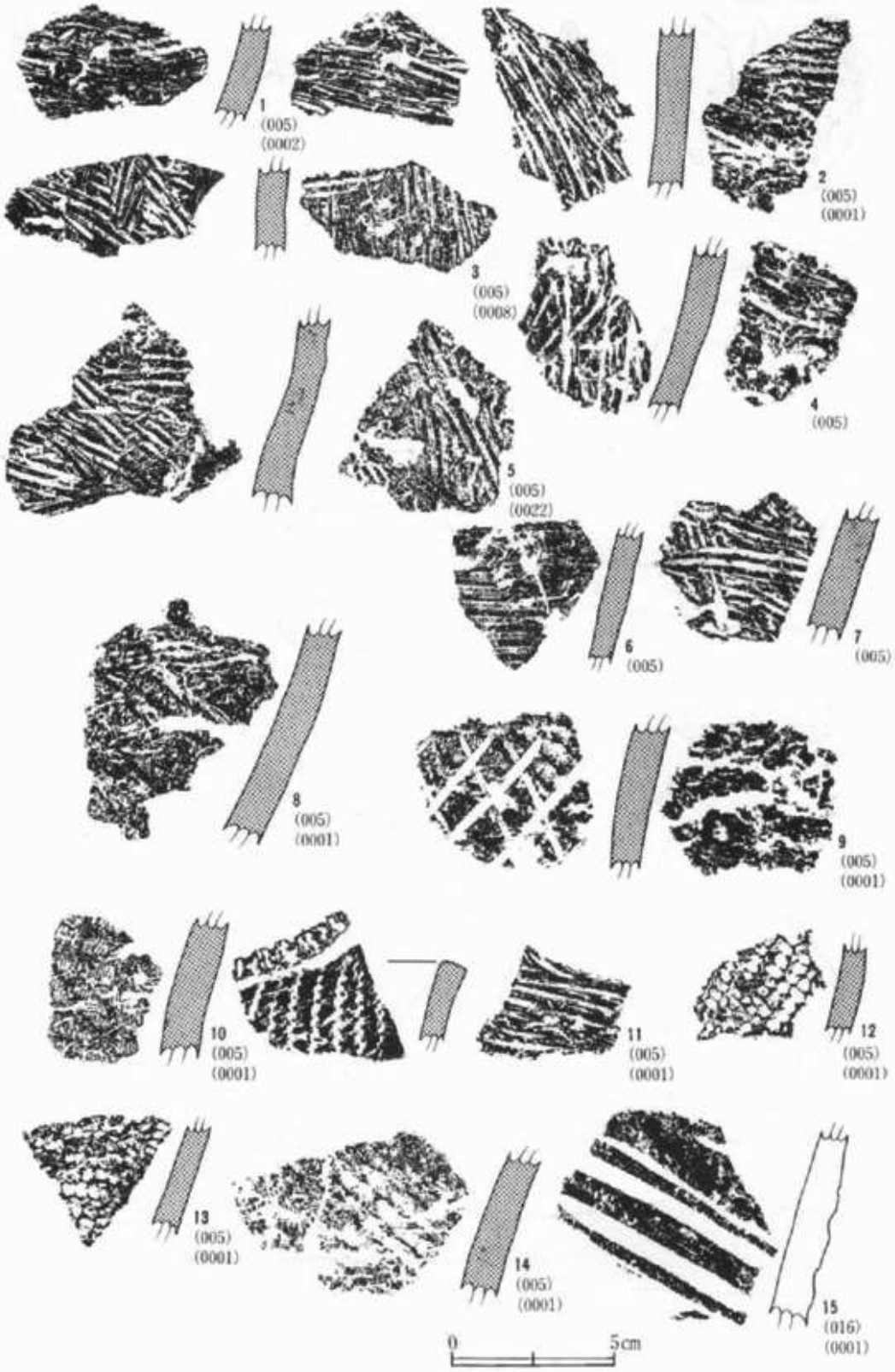
この特徴より縄文早期中葉の沈線文系土器群のひとつと思われる。

○石器

003号住居跡出土石器（第204図1～8，図版135・140）

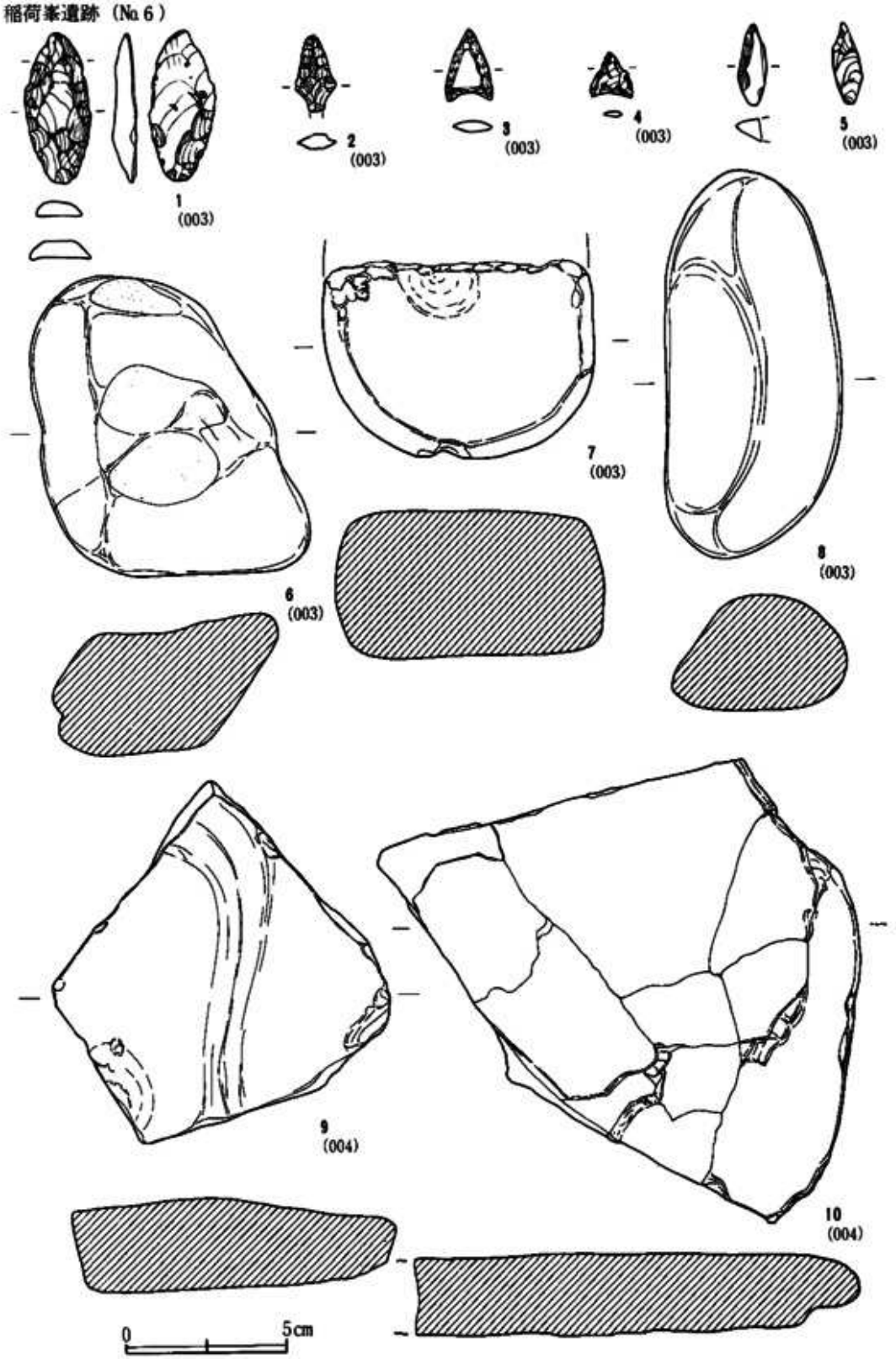
石鏃2，3以外は床面上より出土した。

1は尖頭器，正面は左右より細部調整が行なわれ，背面は1回の剝離により平坦面を作り出



第203図　住居跡出土縄文土器拓影図

稲荷峯遺跡（No.6）



第204図　住居跡出土石器実測図

し，それに部分的に細部調整を行なっている。器全体に磨滅しており，丸味をもつ。

2～5は石鏃あるいはその破片である。

2は形態的に凸基有茎鏃，3，4は凹基無茎鏃である。5は左翼の一部と思われる。

6は不整形な礫を用いた凹石である。中央部二ケ所凹部が確認される。上面端部には敲打痕を認める。

7は磨石で上面を欠損している。各側面は磨耗痕を認める。なお，中央部が若干凹む。

8は平滑な器面をもった敲石である。先端部に一部敲打痕を認める。

004号住居跡出土石器（第204図9・10，図版135）

9・10ともに片理状の特徴をもつ砂岩を利用した石器で，機能的にはいわゆる石皿的な使用に供したと考えられる。9には縦方向に曲線をもって稜部が形成されている。

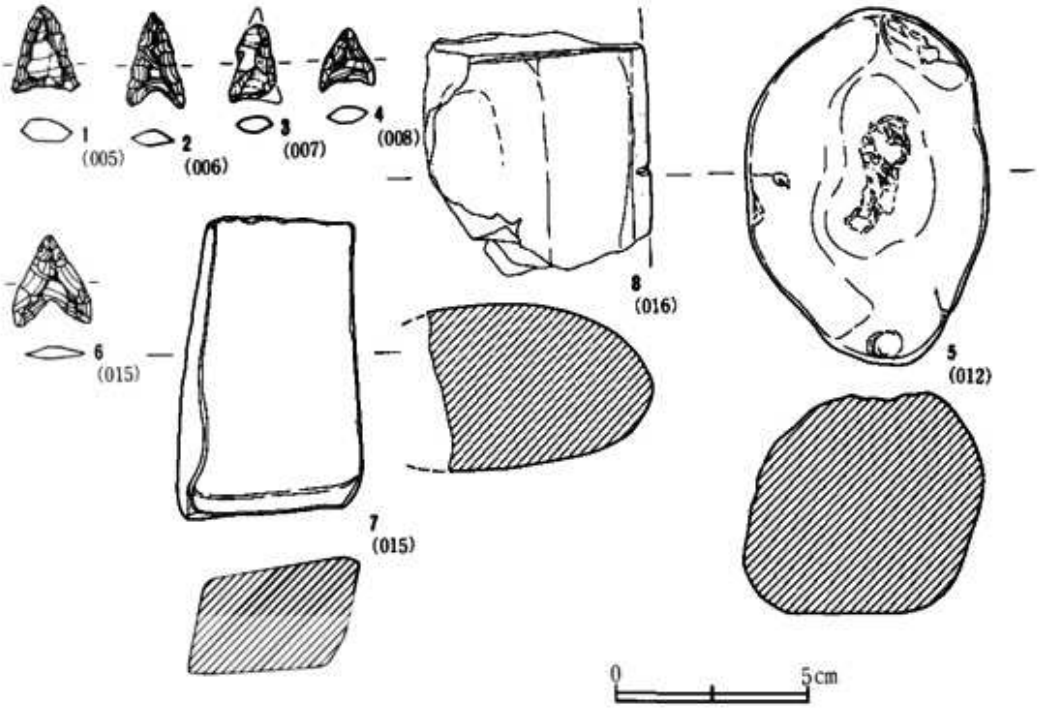
005号住居跡出土石器（第205図1，図版140）

石鏃で凹基無茎鏃で，中央に一次剥離痕を残し，周縁には細部調整が施されている。

006号住居跡出土石器（第205図2，図版140図）

石鏃で形態は凹基無茎鏃，周縁より細かく調整を行なっている。

007号住居跡出土石器（第205図3，図版140）



第205図　住居跡出土石器実測図

形態的にきわめて不整な石鏃で，一部欠損している。

008号住居跡出土石器（第205図 4，図版140）

石鏃で，形態は凹基無茎鏃，若干器厚をもつ。

012号住居跡出土石器（第205図 5，図版135）

自然礫であるが，中央部に敲打痕を残している。二次的加熱を受けている。

015号住居跡出土石器（第205図 6・7，図版135・140）

6は石鏃で，形態は基部に抉りを施した凹基無茎鏃である。

7は砥石で，各面体が平滑に磨られている。

016号住居跡出土石器（第205図 8，図版135）

破片であるが，器中央と側面に敲打痕を認める。他の部分は平滑に磨られている。

第10表　住居跡出土縄文石器計測表

挿図番号	遺物番号	器種	計測値 cm			重量 g	石質
			長さ	幅	厚		
第204図 1	003，0010	尖頭器	4.65	2.04	0.73	6.31	黒曜石
2	0019	石鏃	(2.42)	1.27	0.52	(1.98)	チャート
3	0019	石鏃	2.24	1.46	0.33	1.02	安山岩
4	0006	石鏃	2.43	1.3	0.28	0.41	黒曜石
5	0005	石鏃？	(2.59)	(1.01)	(0.76)	(1.64)	チャート
6	0015	凹石	9.0	7.9	3.6	392.0	硬質砂岩
7	0016	磨石	(5.8)	8.5	4.45	353.0	硬質砂岩
8	0017	敲石	11.95	5.4	11.9	343.0	硬質砂岩
9	004，0002	—	10.45	10.4	10.9	355.0	砂岩
10	0002	—	14.1	14.3	14.2	508.0	砂岩
第205図 1	005，0013	石鏃	2.22	1.72	0.55	1.95	チャート
2	00.，0002	石鏃	2.48	1.50	0.38	1.10	チャート
3	007，0001	石鏃	(2.17)	(1.21)	0.47	(1.0)	安山岩
4	008，0001	石鏃	1.65	1.47	0.43	0.82	チャート
5	012，0003	凹石	9.1	6.3	5.6	463.0	石英斑岩
6	015，0002	石鏃	2.28	2.05	0.28	1.02	チャート
7	015，0006	砥石	7.7	4.1	2.7	165.0	凝灰岩
8	016，0001	磨石	(6.0)	(5.9)	4.2	(214.0)	硬質砂岩

第2節　縄文時代遺物

○土器

当遺跡で検出された縄文土器は，縄文早期中葉の沈線文系土器群，縄文前期前半の繊維土器，縄文中期中葉の土器群であった。分布範囲は国道51号に面した，Ｉ，Ｊ，Ｋ，Ｌ，Ｍ区内であり，地形的にみると，南側からゆるく進入している小支谷の谷頭の地点にあたる。

第1群土器（第206～208図，図版136～138）

本群は縄文早期後半の沈線文系土器群である。文様要素，手法上の特色から以下のように分類できる。

第1類（第206～208図35～45，図版136～138）

太めの沈線や刺突文，貝殻文等を主文様とするもの。田戸下層式に比定できるが，これらをさらに数種に分類する。

Ａ種：太沈線が施文されるもの（1～12）

1はＪ３－02グリット内出土。全体の約⅔を遺存するが，近接して出土した尖底部は接合しなかった。推定器高 39.0 cm，口径 19.0 cm，器厚 0.8 cm を測る。文様は外器面をヘラ削りに近い調整をしてから沈線文を施す。沈線文は右上り沈線→右下り沈線→横位区画沈線の施文順を示す。内器面は下から上方へのヘラ削り，口縁付近は横方向の削りが確認される。

2は1に比べ，口縁部が若干外反する。

本種は1の文様構成でわかるように横位と斜位の沈線文を主文様とするが，斜行沈線文の基点に刺突を加えるもの（7，11，12）。沈線を円弧状に結ぶもの（9）もある。沈線もきわめて浅いもの（10）もある。

Ｂ種：きわめて短い沈線を組み合わせたもの（13，14）

主文様は横位と斜位の沈線であるが，沈線間にはさまれた部分に直角方向で短い沈線を施文する。

Ｃ種：沈線が施文され，それによって区画された中を刺突文で充填するもの。（15～21）

沈線はそれほど太くない。刺突文はヘラ状工具による円形刺突文（15，16）と竹管を用いた刺突文（17～21）がある。

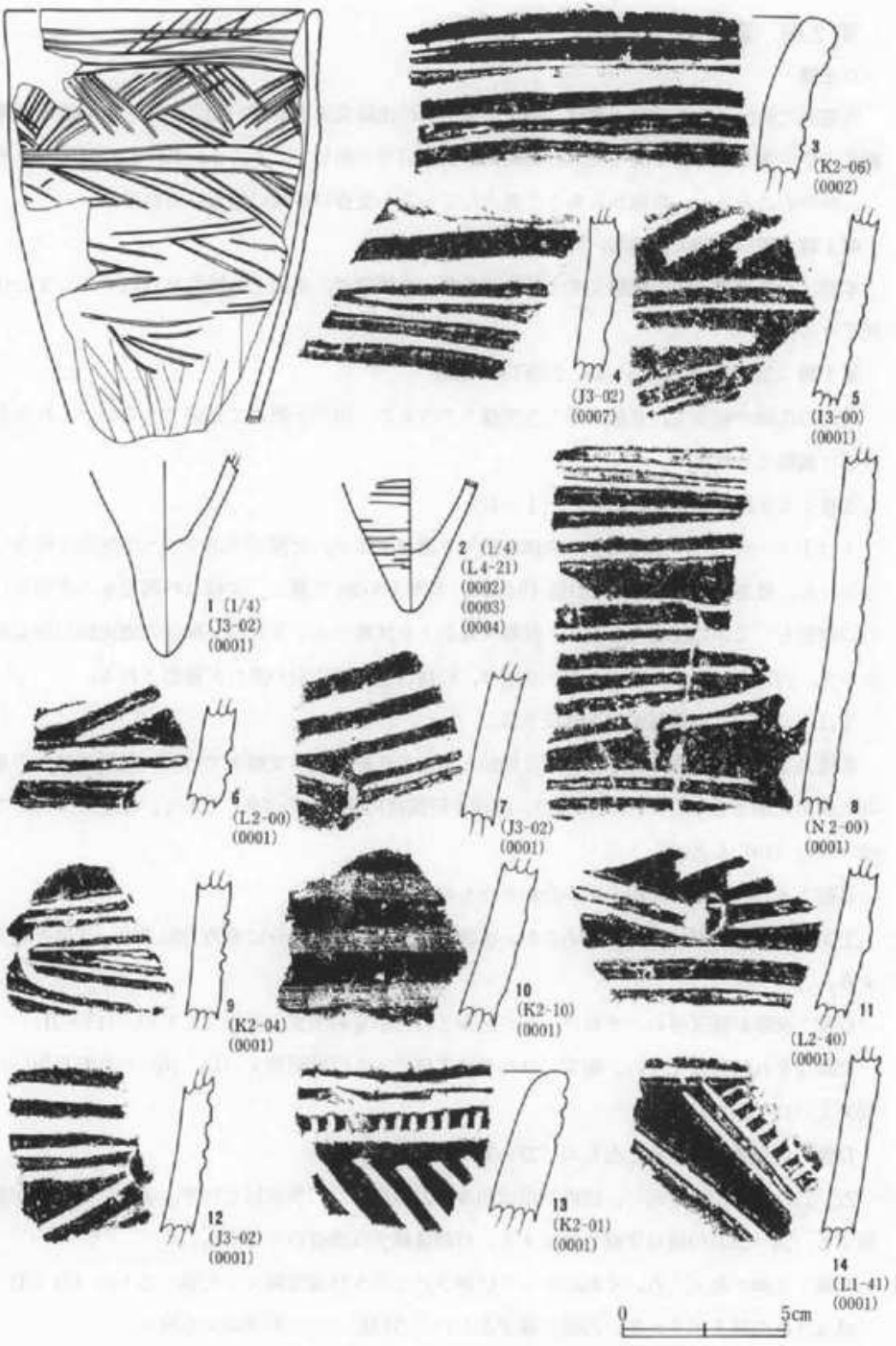
Ｄ種：貝殻腹縁文を施したもの（22～30）

22，23は波状口縁を示し，22の頂部は凹み，23の頂部は円形突起を付す。また，口唇部が肥厚する。24～26の口縁は平縁で外反する。貝殻腹縁文は横位のみである。

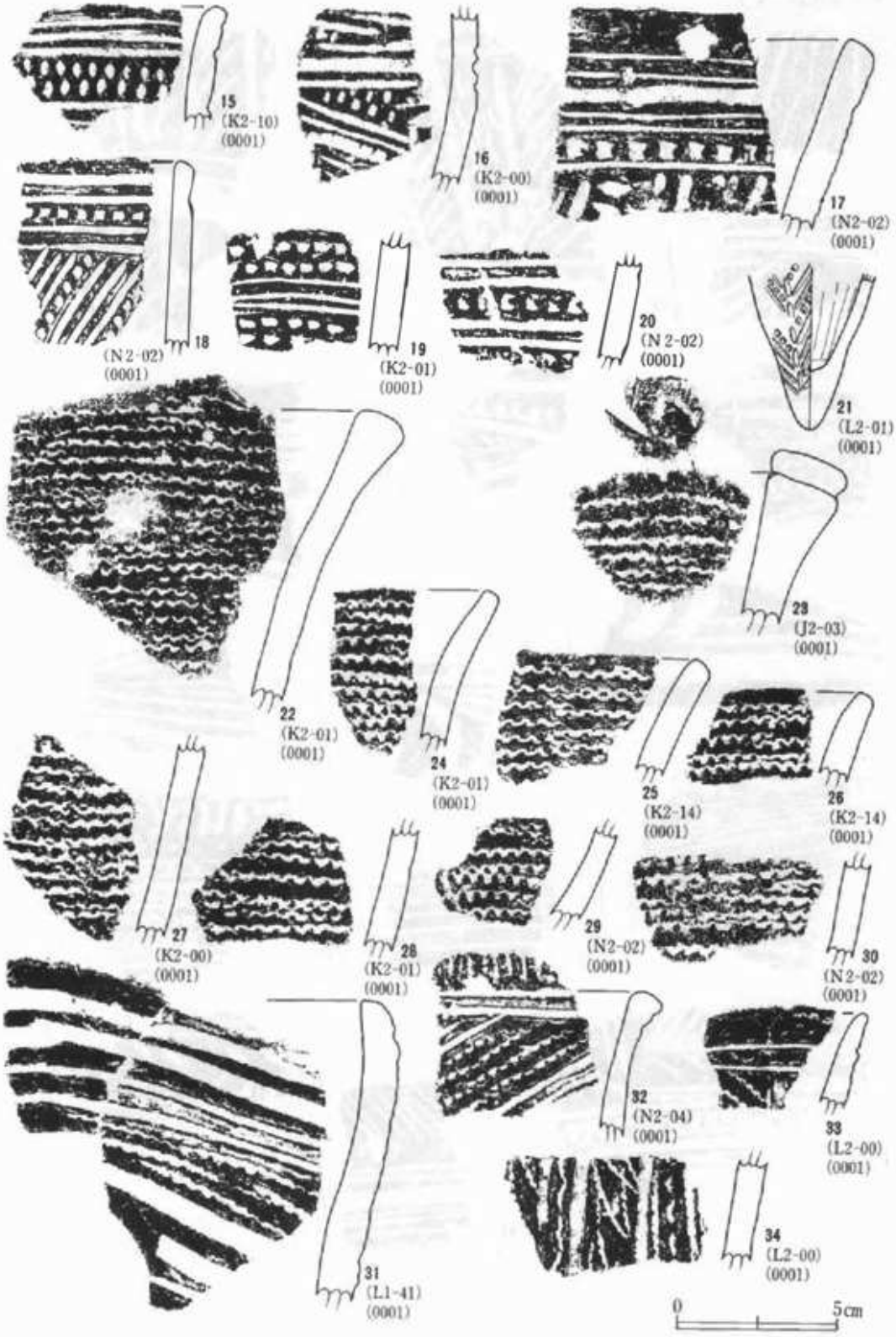
Ｅ種：沈線が施文され，それによって区画された中を貝殻復縁文で充填するもの（31～33）

31は波状口縁を示す。32，33は平縁であり，32の口唇上には短沈線文を施す。

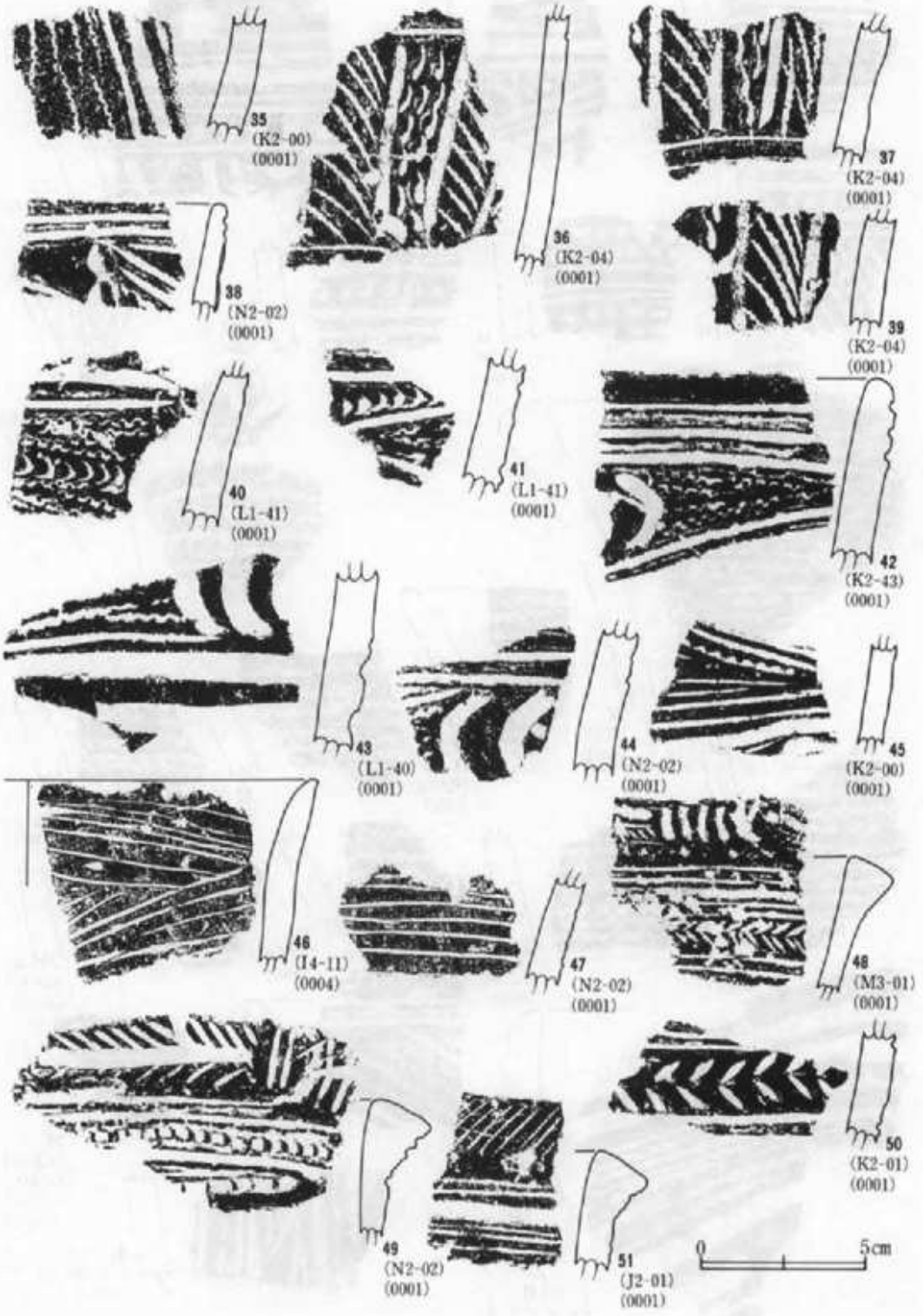
Ｆ種：沈線が施文され，これに貝殻復縁文と刺突文を加えたもの（34～41）



第206図　グリット出土縄文土器拓影図 (1)



第207図　グリット出土縄文土器拓影図 (2)



第208図　グリット出土縄文土器拓影図 (3)

貝殻文は沈線間に充塡するように施文し，また，刺突文は縦位または横位に施文している。

G種：E種に太い弧状沈線文を施したもの（42～45）。

弧線文は，斜行沈線によって作られた空間部に配置され，文様構成のひとつのアクセントとなっている。

第2類（第208図46～51，図版138）

沈線文，刺突文を基調とする文様構成をもつもの。田戸上層式に比定される。

A種：細沈線文が施文されるもの（46・47）。

46は，口縁部が外反し，口唇部に至って器壁は薄くなる。推定口径 17.0 cm を測る。文様は 1.5 mm 前後の幅の沈線をほぼ等間隔で横位または斜位に施す。

B種：口唇上に短沈線文が綾杉状に施されるもの（48，49）

ともに口唇部は肥厚し，48は短沈線の5本単位のものと，細かい綾杉短沈線文を認める。また，口縁部には横位の細沈線と綾杉短沈線が施される。49は口唇上に綾杉沈線文を配し，中央を太沈線で区画する。また，ボタン状の突起を付し，上面に沈線を施す。口縁部には細沈線と刺突文が施される。50は胴部片であるが，文様よりこの種に分類されると思われる。

C種：口唇上に細沈線文が施されるもの（51）

口縁部は微かに外反し，口唇部は肥厚する。口唇上には単一方向に細沈線文が施される。口縁部にも，同一の施文具を用いたと思われる，横位の細沈線文が施される。

第2群土器（第209図，210図63，図版139）

条痕文系土器群を本類とした。胎土内には繊維を多量に含む。

第1類（第209図52～54）

口縁部が少し外反し，52，54は口唇が若干尖る。ともに繊維を多量に含み，器表面には繊維痕を残す。

第2類（第209図55）

器壁は 1.1 cm を測り厚手である。口唇上は小波状を示し，上面には貝殻腹縁の刺突を加えている。表裏に条痕文を施している。胎土内には細かい白色不透明粒と繊維を含んでいる。

第3類（第209図56）

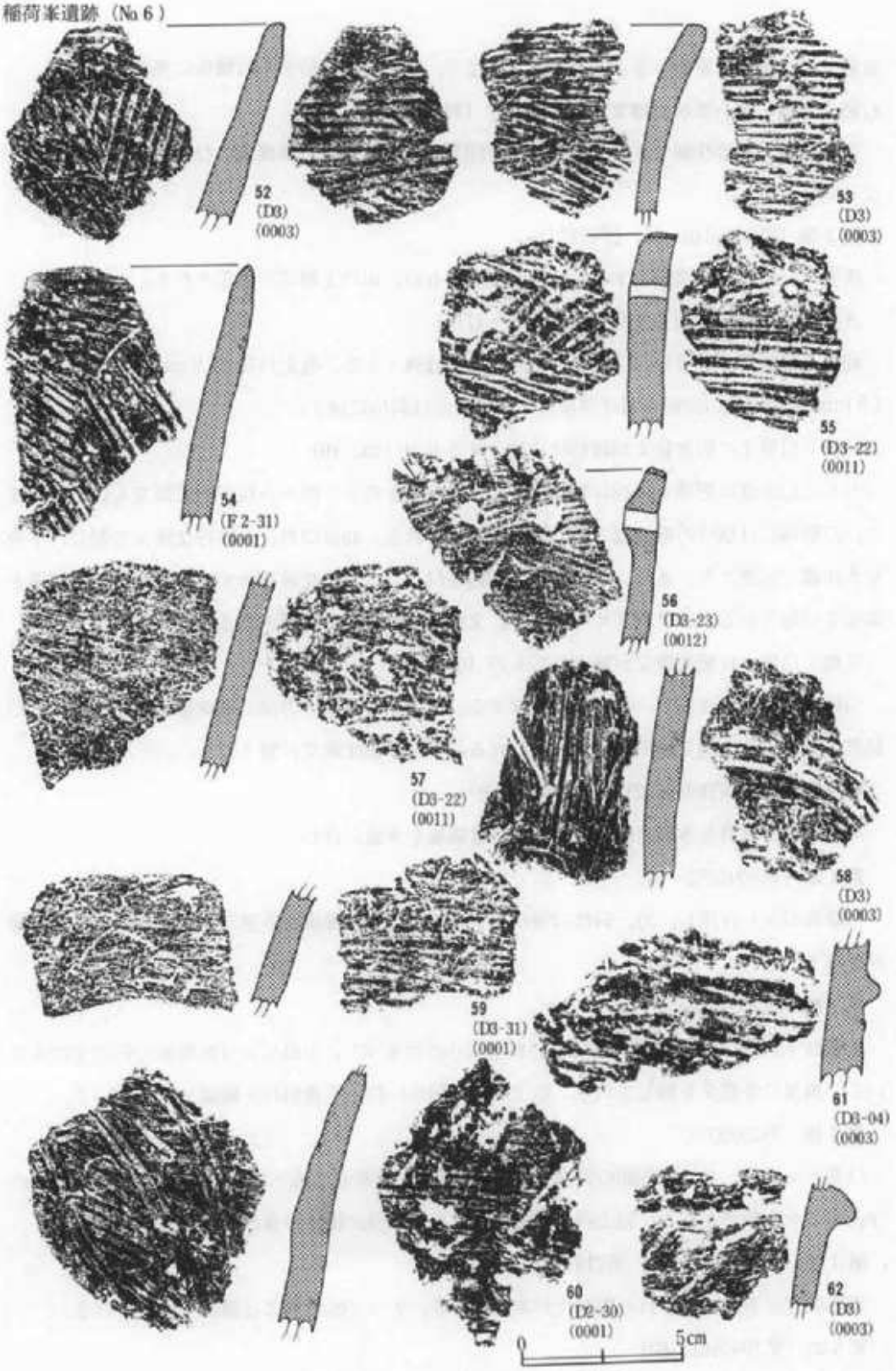
口唇上に半截した竹管内面の押文を施し，条痕文が表器面に施されている。なお径 6.5 mm の穿孔が2ケ所確認される。胎土内には繊維を含み，表面に繊維の痕が表出されている。

第4類（第209図57～60，第210図63）

表裏両面に条痕の施される胴部片が本類である。すべて胎土内には繊維を含んでいる。

第5類（第209図61，62）

太い隆帯の貼り付けが見られるもの。繊維を含む。器面には部分的に条痕文を認め，器壁に



第209図　グリット出土縄文土器拓影図（4）

は繊維の痕跡を確認する。隆帯は断面三角形状に近い。

第3群土器（第210図66）

黒浜式土器に比定される。

第1類

胴部片であるが，施文原体縄文ＲＬを，縦横方向に交互に施文したものである。胎土内には繊維を多量に含む。

第4群土器（第210図67，68，図版140）

縄文中期中葉の土器群を一括した。

第1類（67）

加曽利ＥⅢ式に比定されるものを本類とした。

Ⅰ4－12，13グリット内で4.5×3.5mの範囲より出土した。口縁部から胴下半部までの約½を遺存する。口縁は一周しない。器形はキャリパー形を示し，推定口径 25.6 cm を測る。器面は，隆帯，ヘラ描きなどの区画帯を設けたのちに，施文原体ＲＬを施文し，さらに区画帯の再調整を行なっている。沈線は竹管の背によるヘラ描き，隆帯は指撫で。口縁部の文様構成は4単位，渦巻文と楕円文を交互に配する。胴部の沈線は2本単位で，その間は縦方向に磨消しする。色調は外面が橙褐色，内面は黒褐色。胎土は，石英粒等の砂粒を含む。焼成は普通。

第2類（68）

曽利Ⅲ式に比定されるものを本類とした。

第1類の加曽利ＥⅢ式土器とほぼ重複して出土した。

口縁部から胴部にかけて，約⅔遺存する。口縁は一周しない。器形は深鉢形を示し，推定口径 29.2 cm，頸径 25.1 cm を測る。器面は一様に条線を施している。その後，隆帯貼付，隆帯は指頭による押圧痕を認める。内面は横方向のヘラ削りののち，指による撫でを行なっている。頸部以上は横方向のヘラ撫でを認める。色調は外面が黒褐色，一部褐色，内面が暗褐色を呈す。胎土内には多量の砂粒を含む。焼成は悪い。

○**石器**（第211図，図版140，141）

遺構以外より検出された石器は，石鏃15点，磨石5点，砥石2点である。

石鏃はすべて凹基無茎鏃である。1～4は抉りが強いが，他は基部が弧状を示す。

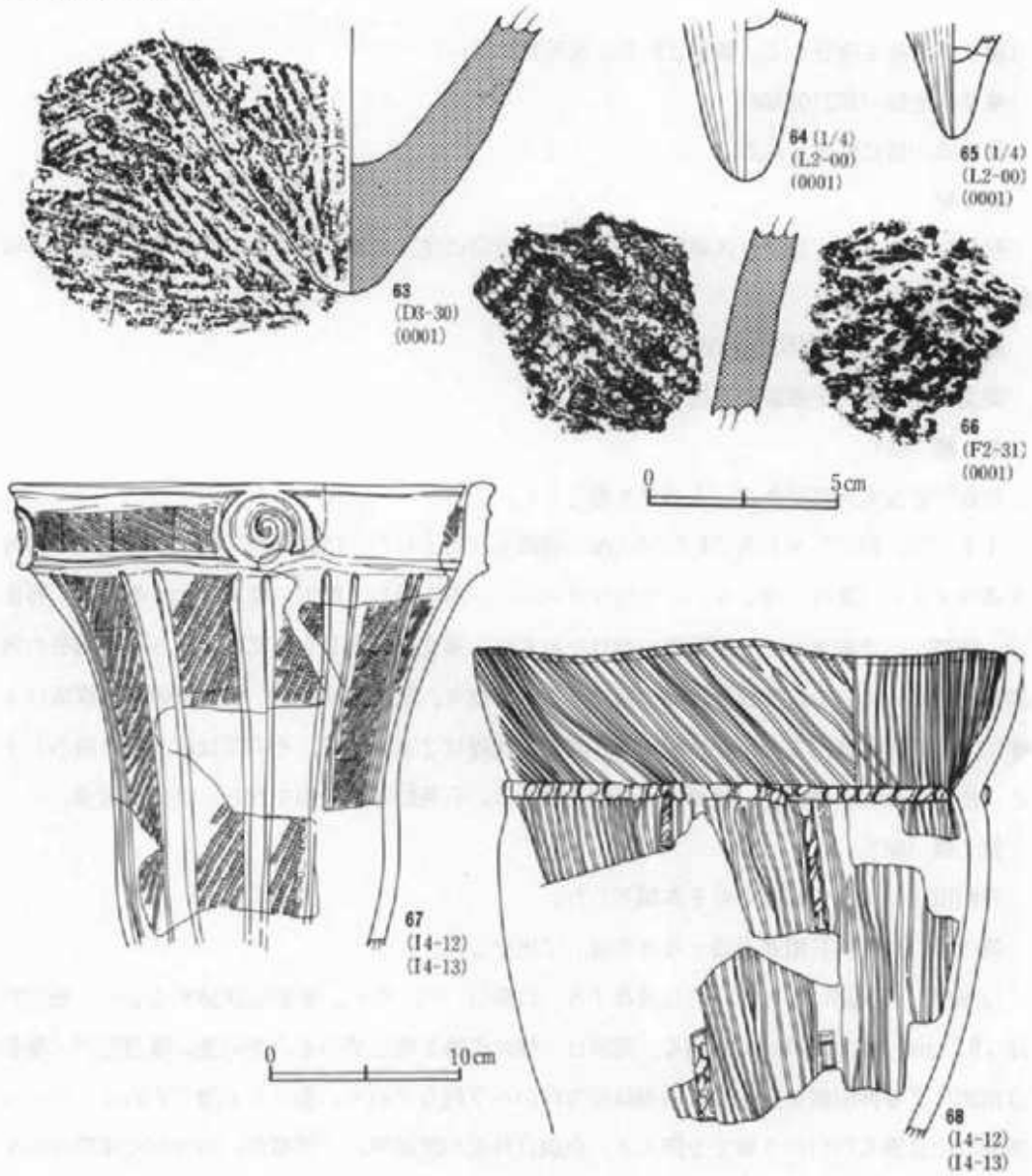
16は自然礫の表面に敲打痕を認め，凹石として使用されたものと思われる。

17は不整な礫であるが，一部に使用痕を認める。

18は自然礫の断片であるが，一部にＶ字形に磨られた跡を認める。

19は手頃な礫を用いた磨石である。

20は扁平な礫であるが，周縁が磨られている。

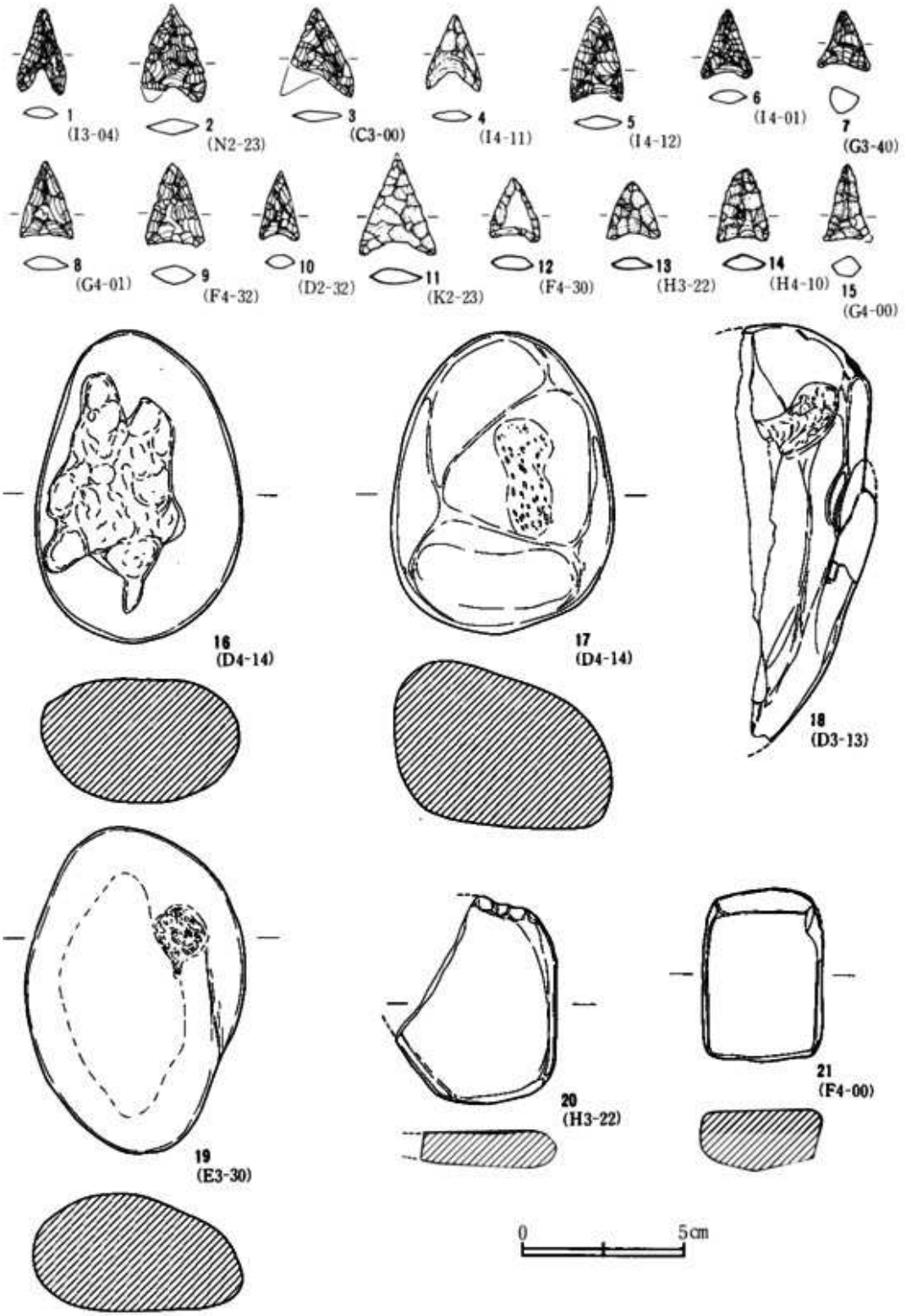


第210図　縄文土器実測図，拓影図

21は各面体，平滑に磨られた砥石である。

第11表　縄文石器計測表

挿図番号	遺物番号	器種	計測値 cm			重量g	石質
			長さ	幅	厚		
第211図1	I 3－04，0001	石鏃	2.63	1.47	0.36	0.98	チャート
2	N 2－23，0001	石鏃	(2.98)	(1.96)	0.48	(1.72)	黒曜石


1
(I3-04)
2
(N2-23)
3
(C3-00)
4
(I4-11)
5
(I4-12)
6
(I4-01)
7
(G3-40)
8
(G4-01)
9
(F4-32)
10
(D2-32)
11
(K2-23)
12
(F4-30)
13
(H3-22)
14
(H4-10)
15
(G4-00)
16
(D4-14)
17
(D4-14)
18
(D3-13)
19
(E3-30)
20
(H3-22)
21
(F4-00)
0
5cm

第211図　石器実測図

稲荷峯遺跡（No.6）

3	C 3－00, 0002	石　鏃	2.62	1.90	0.34	1.04	黒曜石
4	I 4－11, 0002	石　鏃	2.33	1.69	0.36	0.91	安山岩
5	I 4－12, 0002	石　鏃	(2.13)	1.63	0.41	(1.42)	黒曜石
6	I 4－01, 0001	石　鏃	2.11	1.54	0.38	0.79	黒曜石
7	G 3－40, 0001	石　鏃	1.85	1.60	0.78	1.23	黒曜石
8	G 4－01, 0001	石　鏃	2.4	1.63	0.49	1.27	チャート
9	F 4－32, 0001	石　鏃	2.63	1.81	0.48	1.71	チャート
10	D 2－32, 0001	石　鏃	2.16	1.20	0.40	0.80	チャート
11	K 2－10, 0001	石　鏃	2.98	2.35	0.40	1.93	安山岩
12	F 4－30, 0001	石　鏃	2.03	1.56	0.44	1.21	安山岩
13	H 3－22, 0002	石　鏃	1.81	1.64	0.31	0.75	安山岩
14	H 4－10, 0001	石　鏃	2.23	1.57	0.58	1.46	安山岩
15	G 4－00, 0001	石　鏃	(2.37)	(1.39)	0.63	(1.47)	安山岩
16	D 4－14, 0009	凹　石	9.4	6.3	3.8	325.0	硬質砂岩
17	D 4－14, 0010	敲　石	9.2	6.9	4.7	426.0	硬質砂岩
18	D 3－13, 0032	－	(12.6)	(3.9)	(4.9)	(250.0)	硬質砂岩
19	E 3－30, 0001	磨　石	9.9	6.7	3.5	328.0	花崗岩
20	H 3－22, 0001	－	6.3	(5.0)	1.1	(49.0)	硬質砂岩
21	F 4－00, 0001	砥　石	5.2	3.7	1.8	59.0	凝灰岩

参考文献

赤星直忠「横須賀市田戸先史時代遺跡調査」『史前学雑誌』第7巻第6号，1935

赤星直忠「古式土器としての三戸式土器に就いて」『考古学』第7巻第9号，1936

赤星直忠・岡本勇『神奈川県史資料編20，考古資料』1979

新井和之「黒浜式土器研究の問題点」『土曜考古』創刊号，1979

上の台遺跡調査団『鴨居上の台遺跡』1981。

岡本勇「縄文土器の生成から発展へ」『縄文土器大成』1，早・前期，1982

小野真一『常陸伏見』1980

中島宏「縄文土器について」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』XI，1981

西川博孝「三戸式土器の研究――千葉県船塚古墳封土出土土器を中心として」『古代探叢』1980

宮崎朝雄「縄文式土器」『針ケ谷北通遺跡発掘調査報告書』1975

宮崎朝雄「如来堂B遺跡の発掘調査」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告』X，1980

『向原遺跡』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告1，1982

安岡路洋『大丸山遺跡発掘調査報告書』1977

吉田格・横山悦枝「伊豆峠遺跡―縄文早期の出土遺物―」『考古学ノート』第6号，1976

結　　語

妙福寺裏遺跡は北面に取香川支谷を望む法華塚支台上に営まれた遺跡だった。当初より台地の整形が認められ，また小菅城跡の比定地であったため，広域的な踏査などを実施してきた。

調査の結果，古墳時代後期からの住居跡が確認され，さらに平安時代に至る集落跡であることが確認された。また大規模な堀が掘削されており，中世城館跡の一部を調査することができた。

集落の変遷については，当初入植した小集団が営農地の高生産などにより集落として大規模になっていく様子が推察された。また，集落構成では遺跡中央に無遺物，無遺構の空白地が検出されたことから，永続的に「広場」が設けられていたと考えられた。その後，8世紀に入り集落としては無住，あるいはきわめて小集団になったようである。そして8世紀中頃になると再び集落として隆盛するようである。きわめて限られた範囲の調査であったが，古代における東下総地方の一集落の栄枯盛衰を垣間みることができたのである。

円妙寺遺跡は先土器時代と平安時代の遺構，遺物を検出し，複合遺跡としては興味深いものであった。

先土器時代はポイントの組成に注目されるものがあり，また，きわめて縄文時代に接するものであり，その移行期の問題と照らし合わせ，将来にわたって検討される内容を含んでいる。

平安時代は台地縁辺に展開される集落構成が注意される。特に数軒をもって構成される群は谷地形との関係において注目される。

推出し古墳は，野毛平古墳群の中において有力なものであるが，主体部に著しい盗掘をうけており，良好な遺物は出土しなかった。主体部は箱式石棺と思われ，裏込めに粘土，雲母片岩を使用していたと推定される。本墳の時期は遺物の出土が僅少であったために明確な呈示は困難であるが，主体部出土の鉄鏃及び北側旧表土端部で出土した須恵器の坏片で推測する限り，6世紀の後半～末期の時期と思われる。

野毛平古墳群は，墳丘の削平された3基の古墳を確認し，その調査を行なった。ただ主体部は確認できず，鉄器等の散在する出土状態から，すでに壊されたものと思われる。

瓜生池遺跡では，きわめて特異な溝状遺構群を調査した。これに類するものは，下総台地の西部で確認され，『しし落し』と考えられているようであるが，なお詳細は不明である。これらの遺構のあり方は，形状，規模等は似かよっているが，細部においては異なる点も多い。

瓜生池遺跡で調査した溝状遺構は，8基が並列して一群となり構築されていたこと，地形的に緩やかな谷頭に設置されていたこと，また，遺構の層位を確認したところでは，いわゆる「水」が大きく作用していたこと，などが指摘できる。

古老に尋ねると付近一帯は広大な牧場であったということである。従って，この遺構群は牧場に伴う施設であった可能性が強い。

四本木遺跡は，約7年にわたる東関道事業地内埋蔵文化財調査の最初に着手された遺跡であった。

主に先土器時代の遺物と，縄文時代早期前半の撚糸文系土器群が確認され，貴重な資料を呈示し得た。

先土器時代の石器の多くは剝片であったが，石材に関して，安山岩，チャート，頁岩が卓越していた。

縄文時代早期前半の撚糸文系土器群は，施文原体Rを用いた資料が多い。縄文は施文原体RL・LR，ほぼ同数である。

稲荷峯遺跡は，縄文時代の住居跡が15軒，歴史時代以降のものと思われる住居跡1軒，また，縄文時代の遺物包含層が確認された。

縄文時代の住居跡は，遺物を伴うものは少なく，明瞭なる時期を確定することはできなかった。ただ，004号住居跡からは器形の窺える黒浜式土器が出土していることから，本跡は，縄文前期に該当すると思われる。

他の住居跡は，包含層の状況などから，縄文早期から前期までの時代が与えられる。

東関東自動車道埋蔵文化財調査は，57遺跡の調査が実施された。

調査報告書は，行政区域に準じ，成田地区，大栄地区，佐原地区にわけるが，大栄，佐原地区は，遺構数もかなり多く，また，出土資料も膨大であるため，各2冊にて報告する予定である。

写 真 图 版

遺跡航空写真

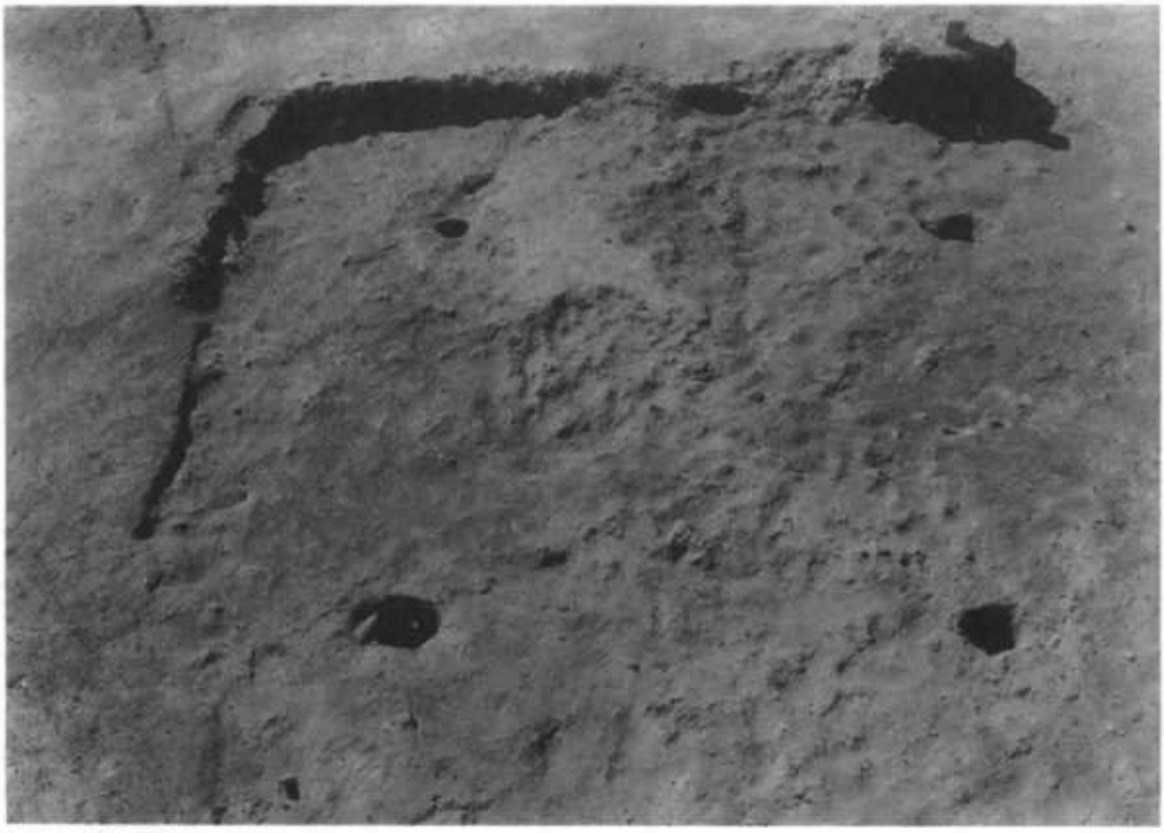
1．遺跡遠景

2．遺跡近景

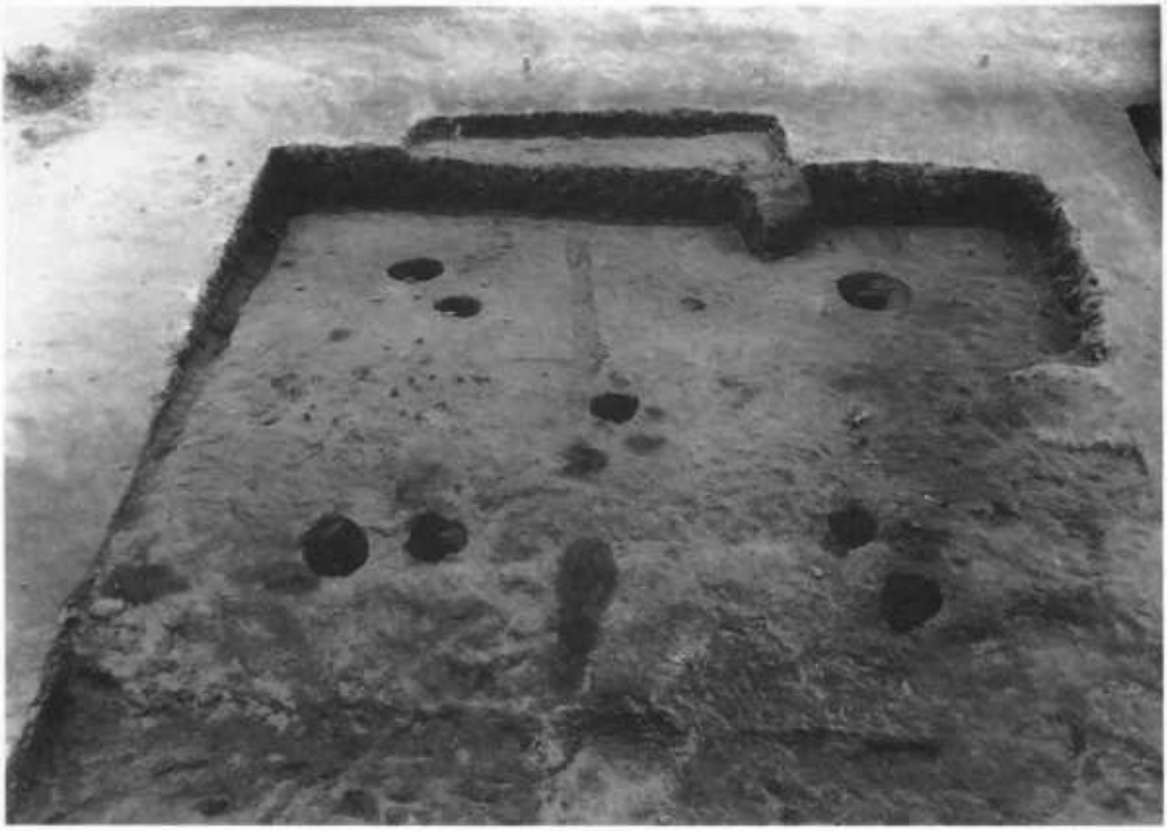
1．確認トレンチ

2．グリット層位

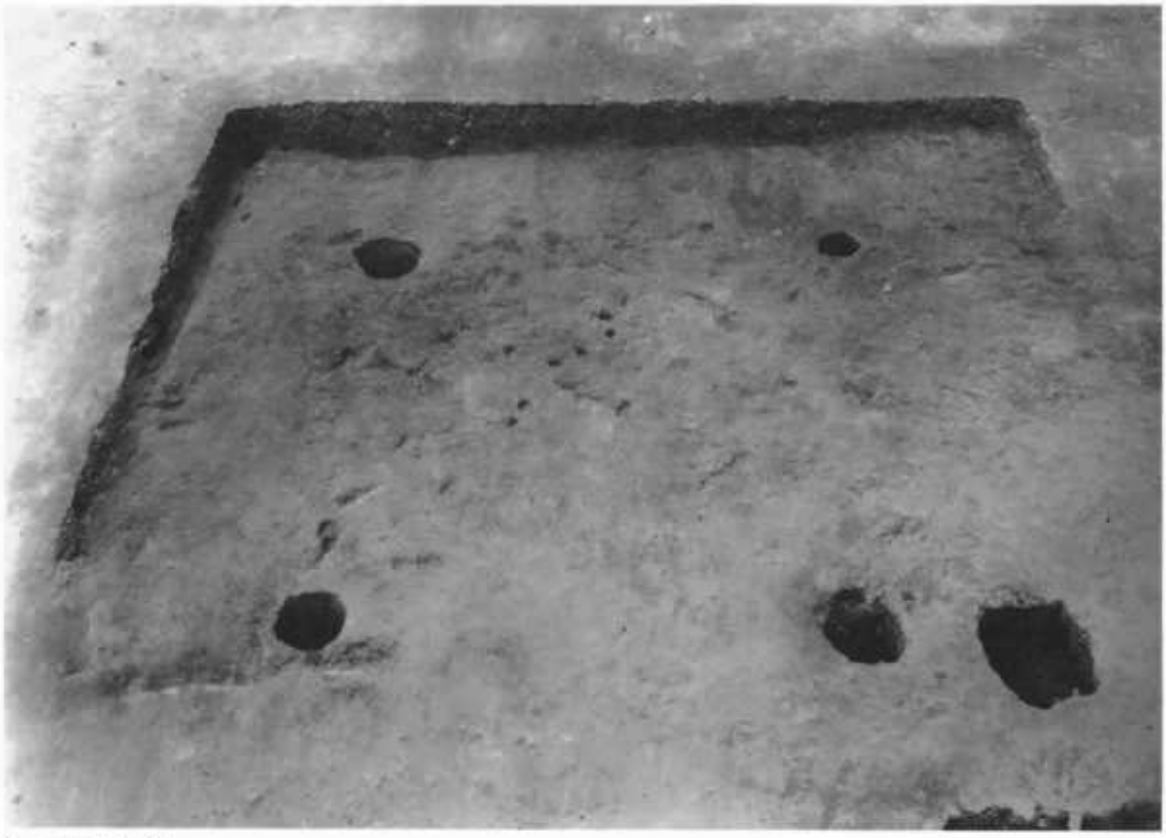
1．002号住居跡



2．003号住居跡



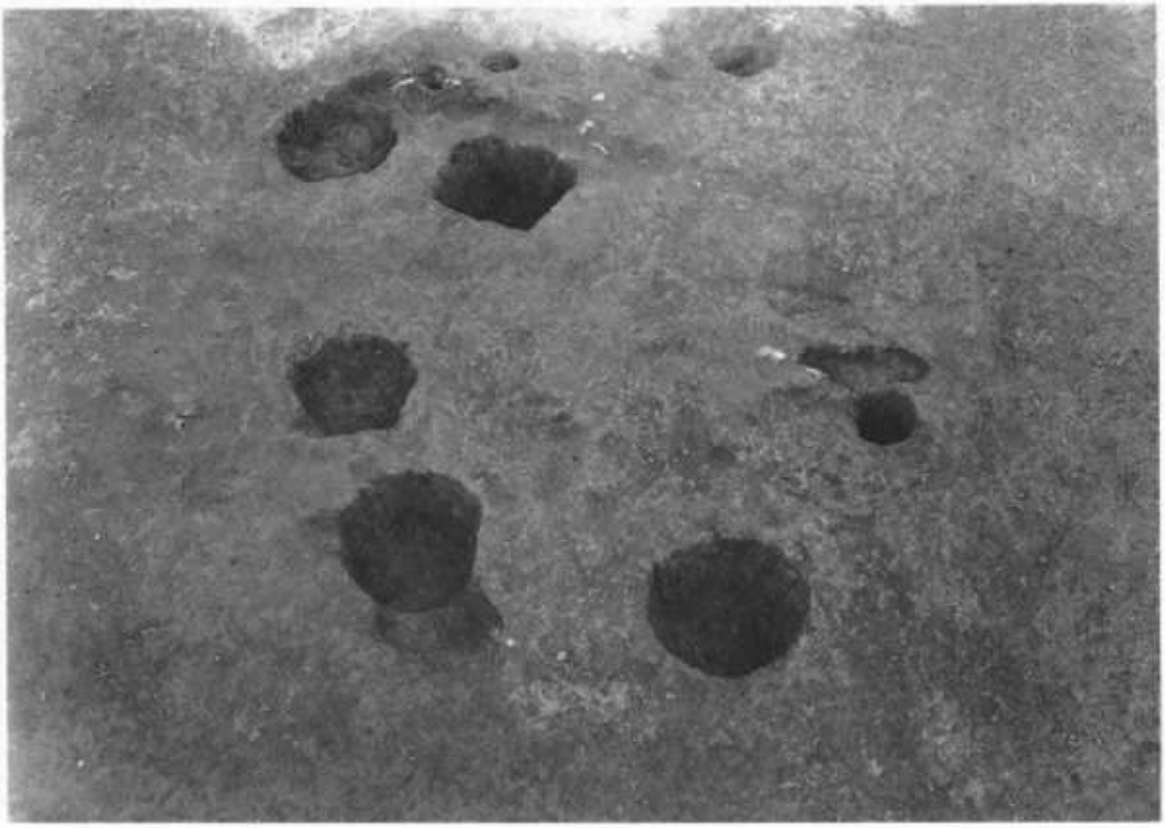
1．004A・B号住居跡



2．005号住居跡

1．006号住居跡

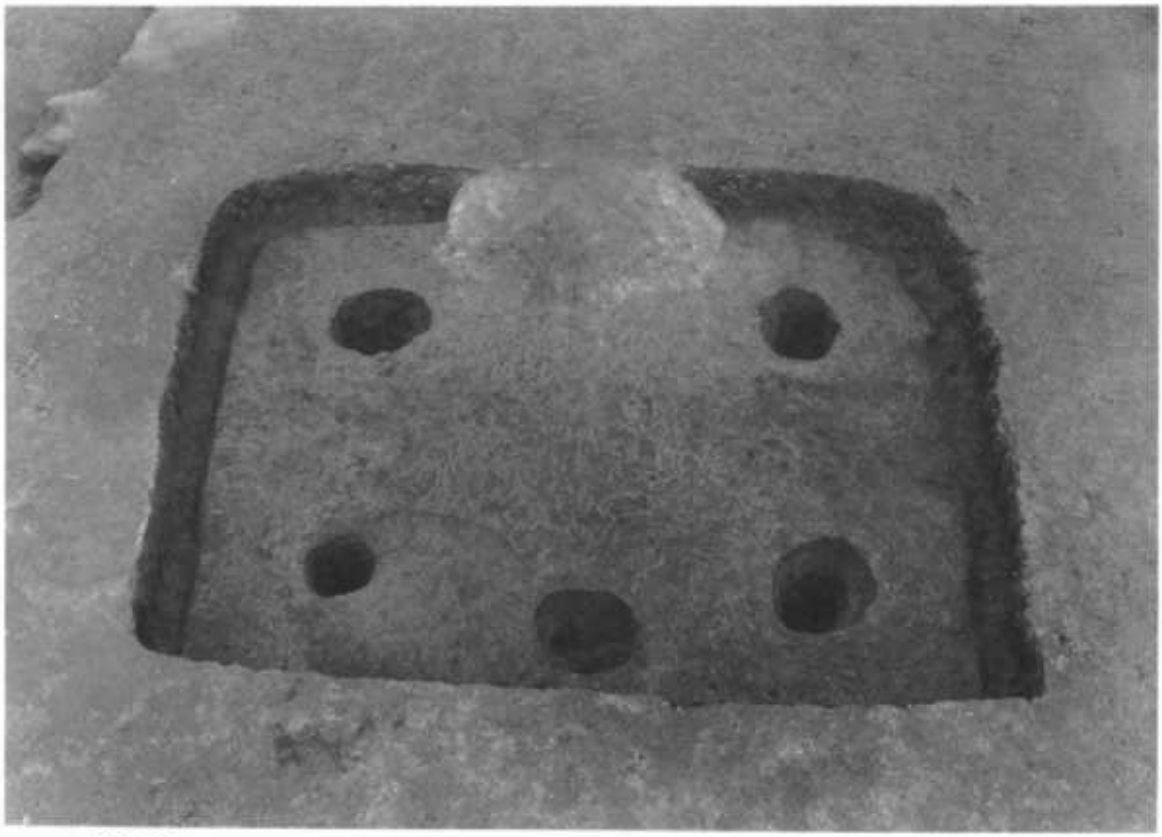
2．007A・B・C・D・E号住居跡



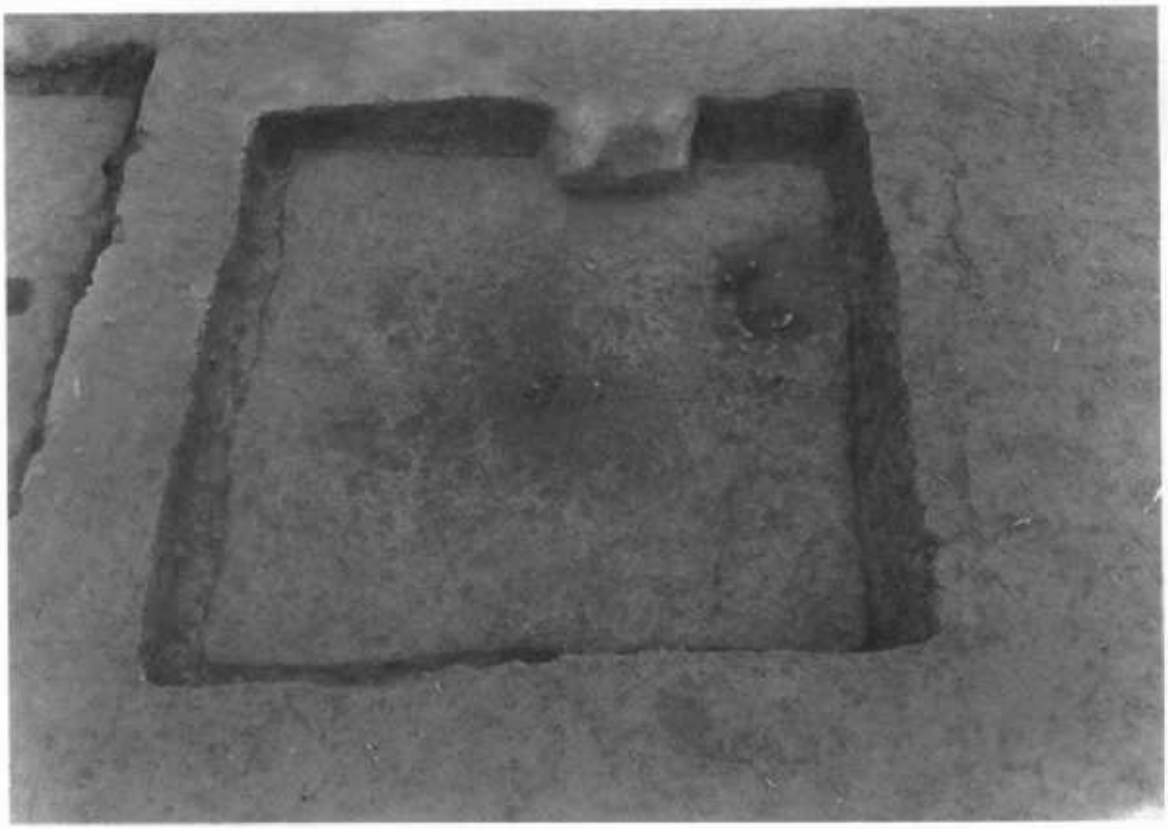
1．008号住居跡

2．010号住居跡

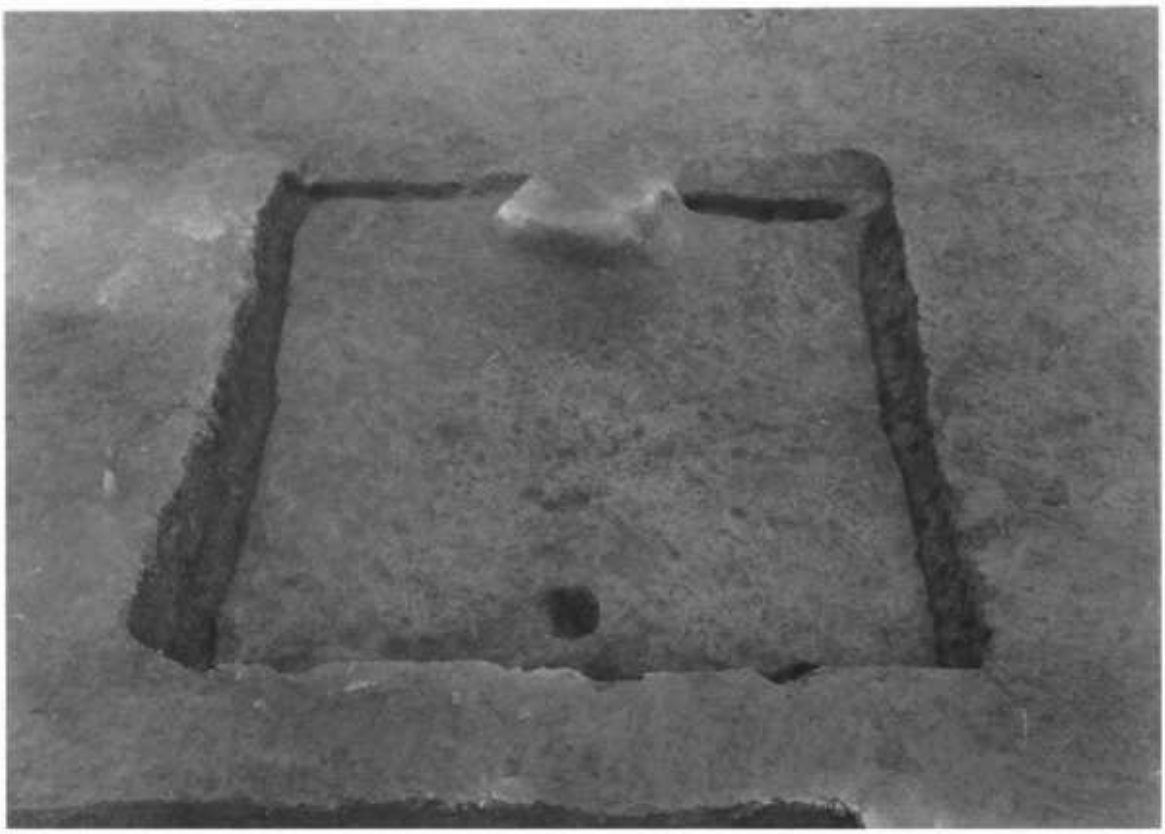
1．011号住居跡



2．013号住居跡



1．014号住居跡

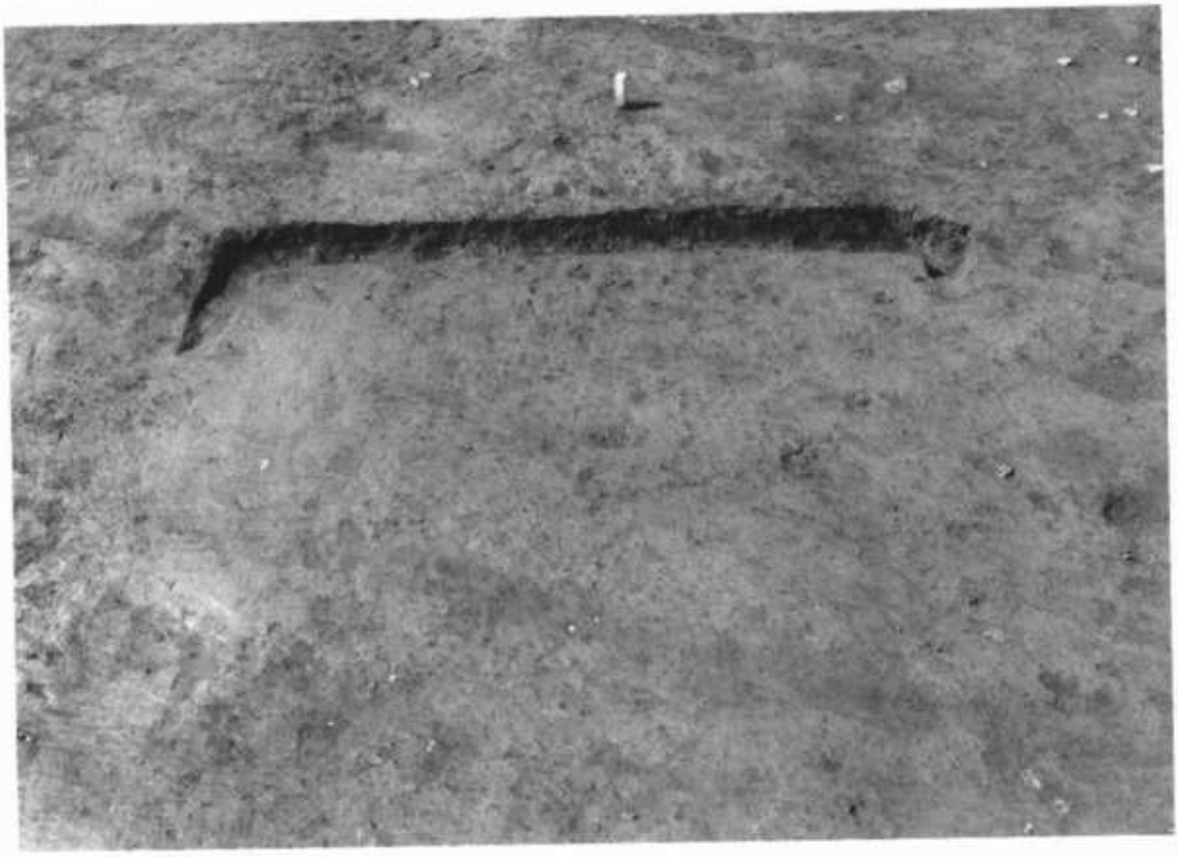


2．015号住居跡

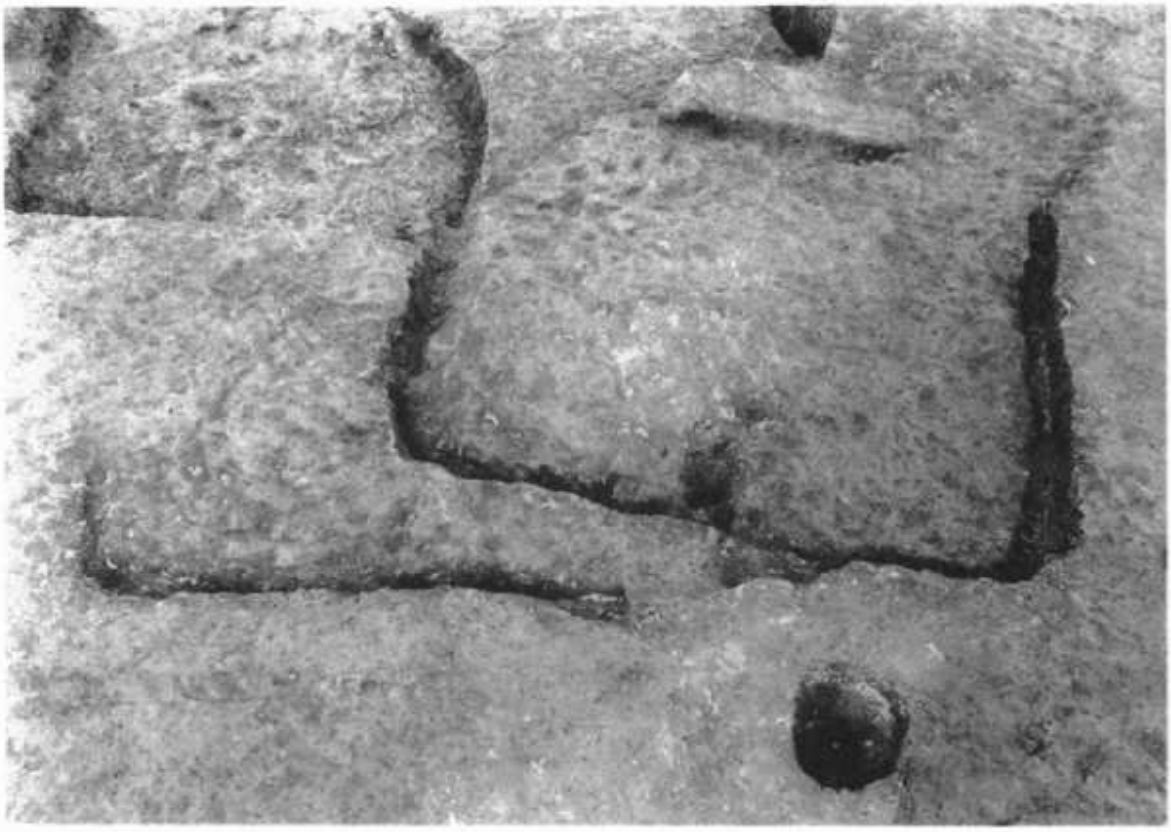
1．016，017A・B・C号住居跡

2．018号住居跡

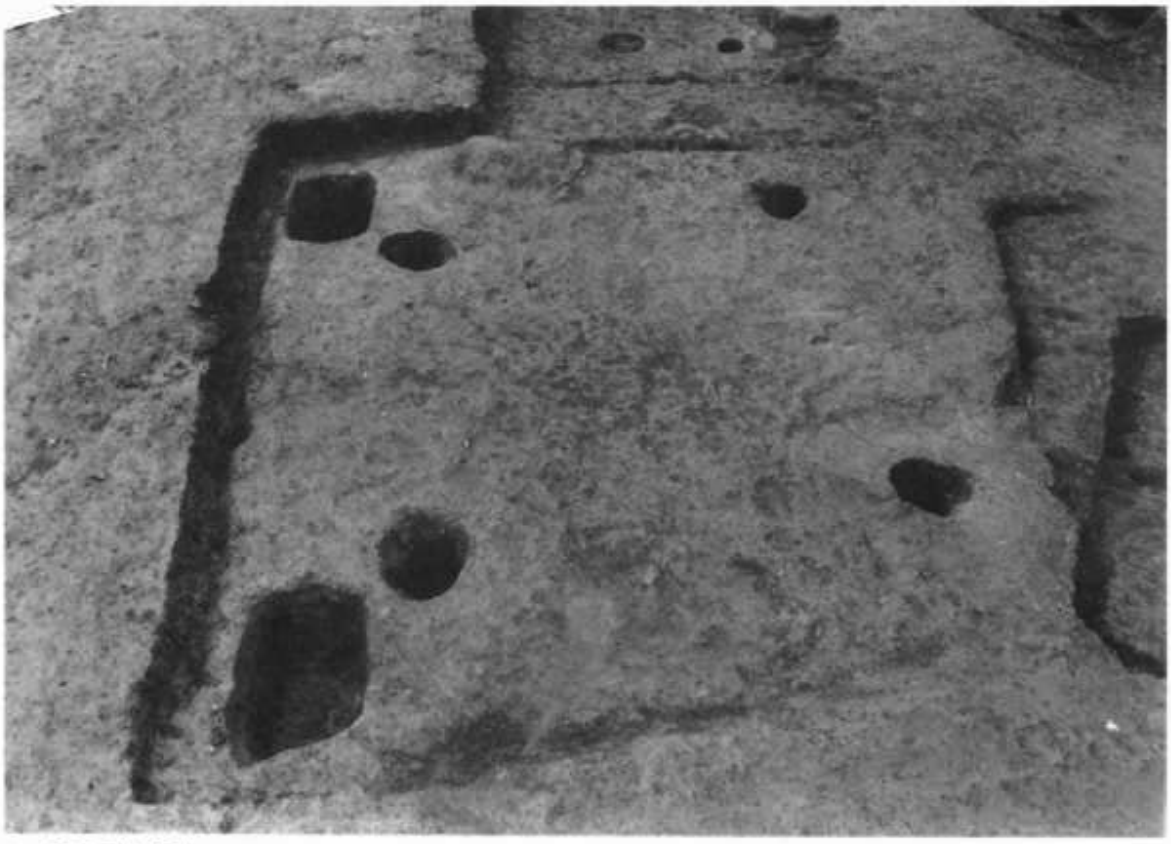
1．019号住居跡



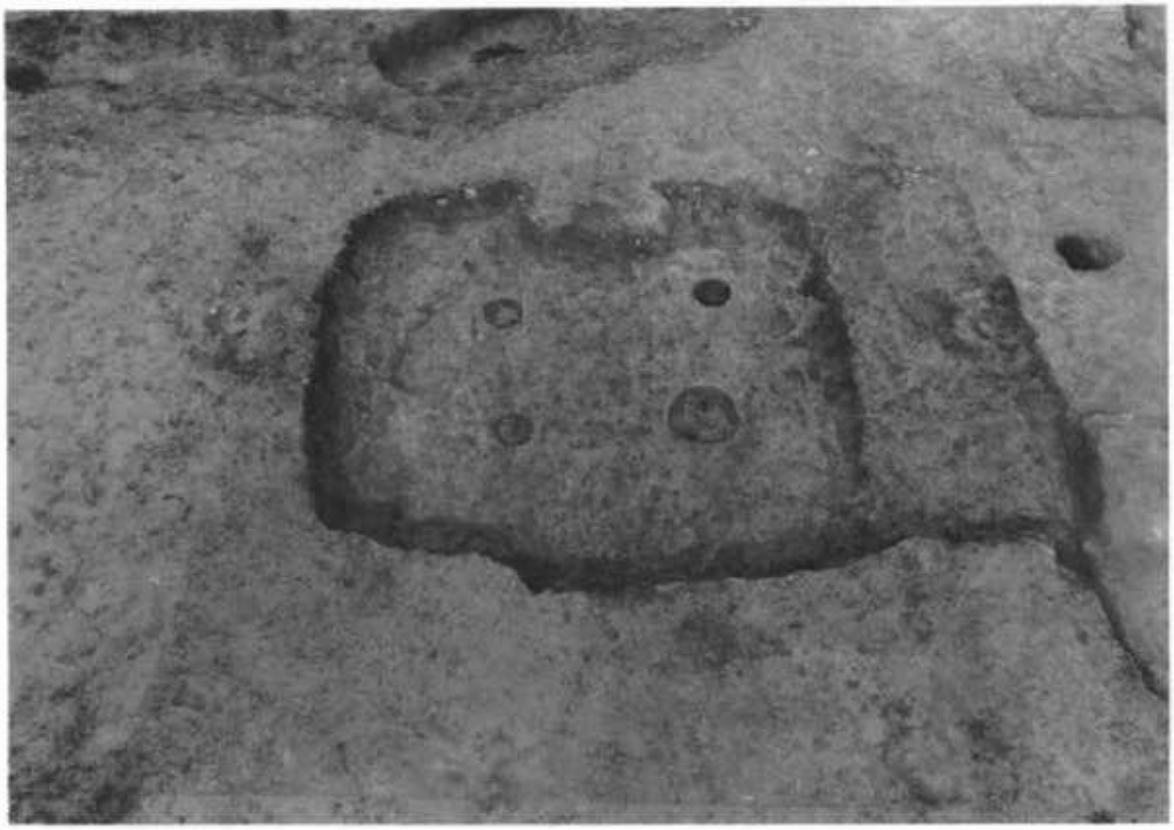
2．020号住居跡



1．021A・B号住居跡



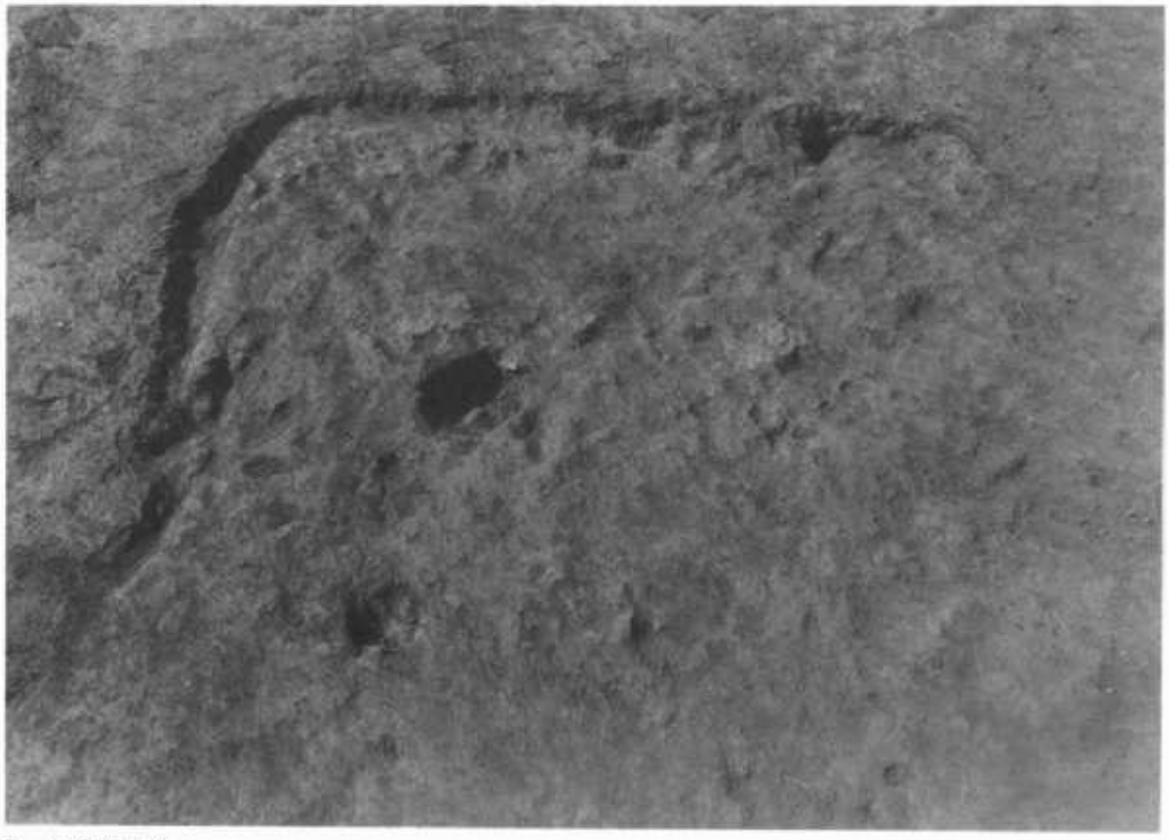
2．022A号住居跡



1．022B・C号住居跡

2．022B号住居跡遺物出土状況

1．023A・B号住居跡



2．024号住居跡

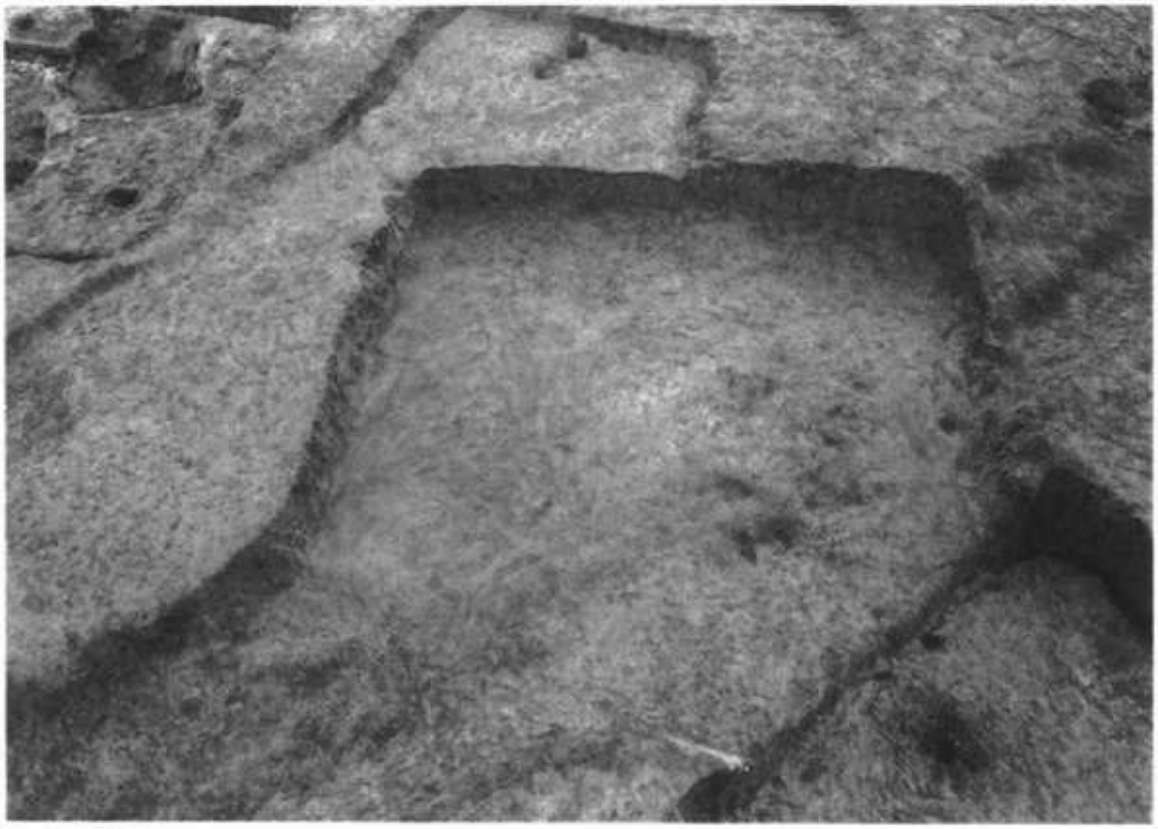
1．025号住居跡

2．026号住居跡

1．027号住居跡

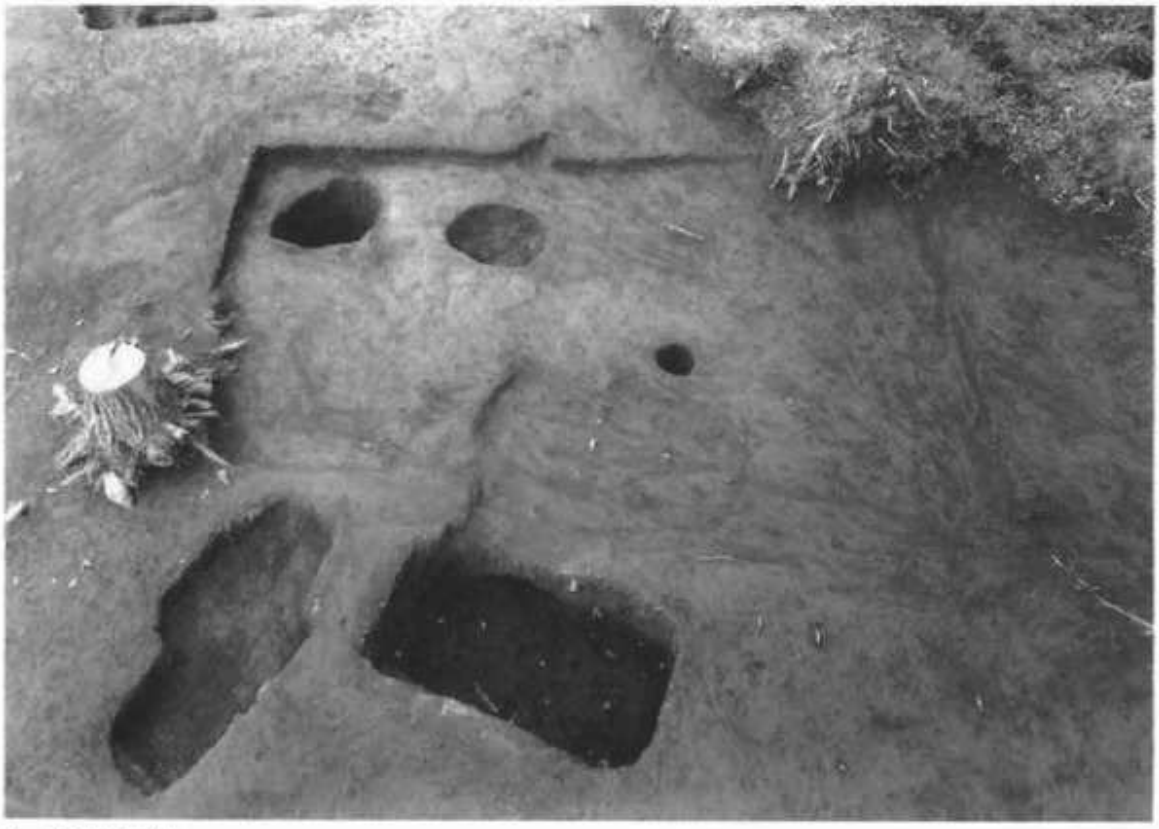
2．028号住居跡

1．029号住居跡



2．031号住居跡

1．032号住居跡



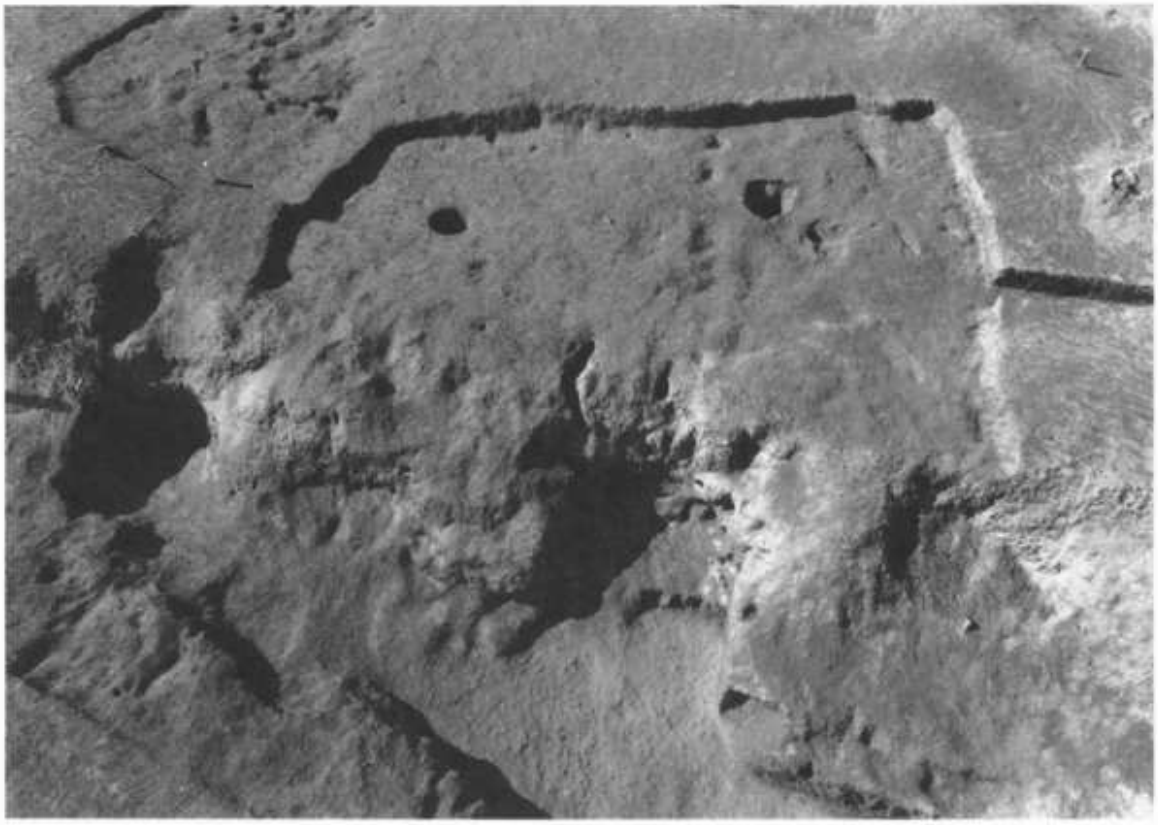
2．033号住居跡

1．034A号住居跡

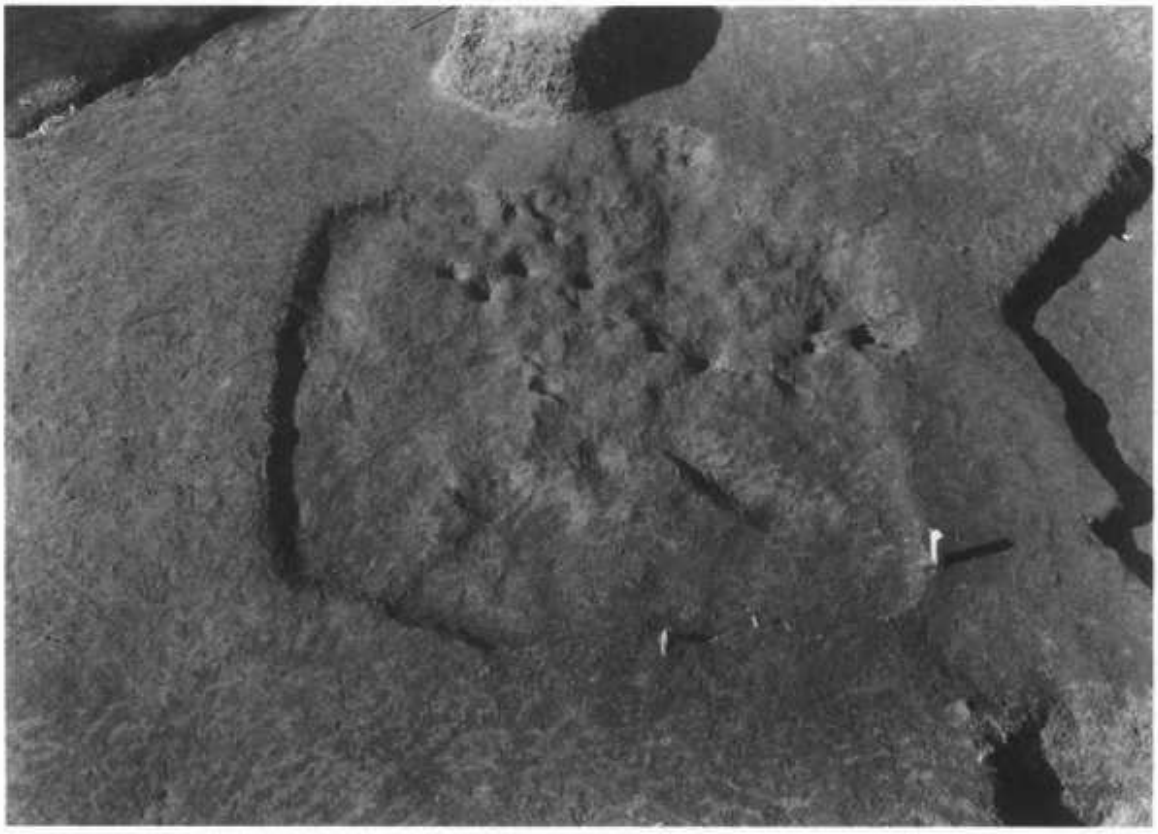
2．034号住居跡遺物出土状況

1．034B・C号住居跡

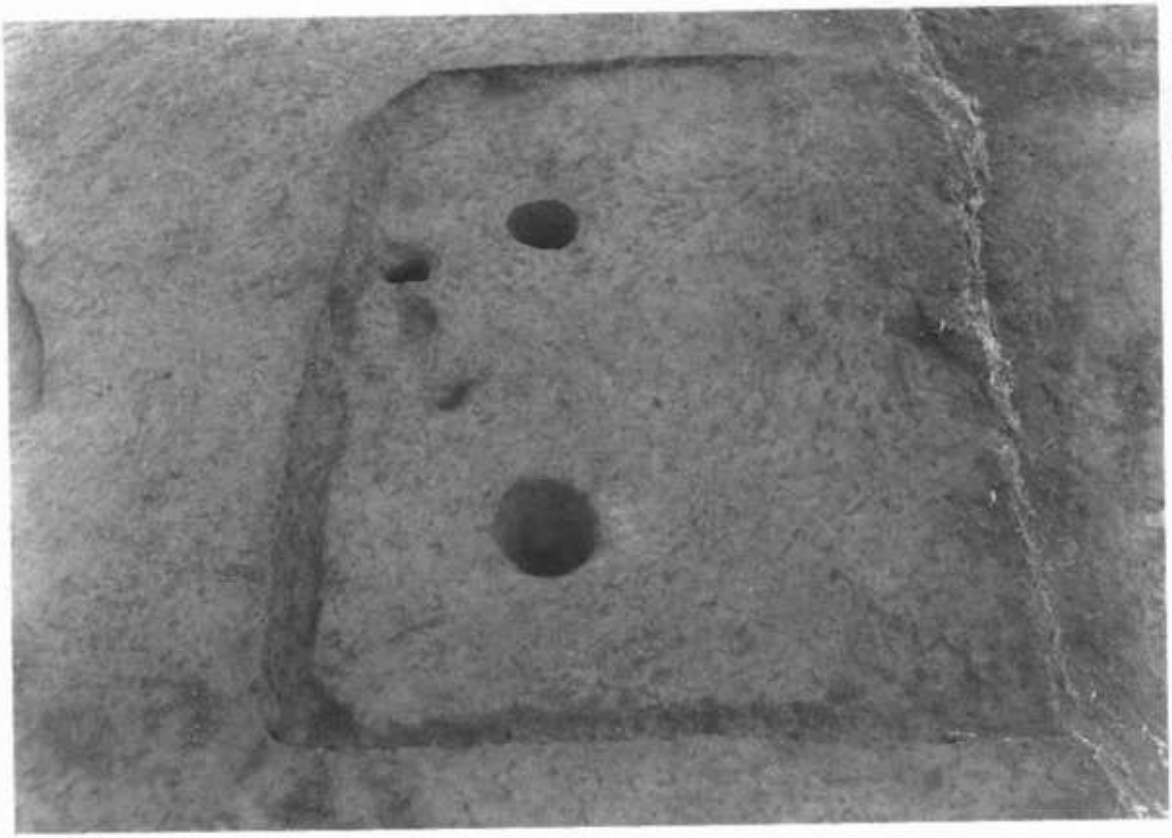
2．035A号住居跡



1．036号住居跡



2．037号住居跡

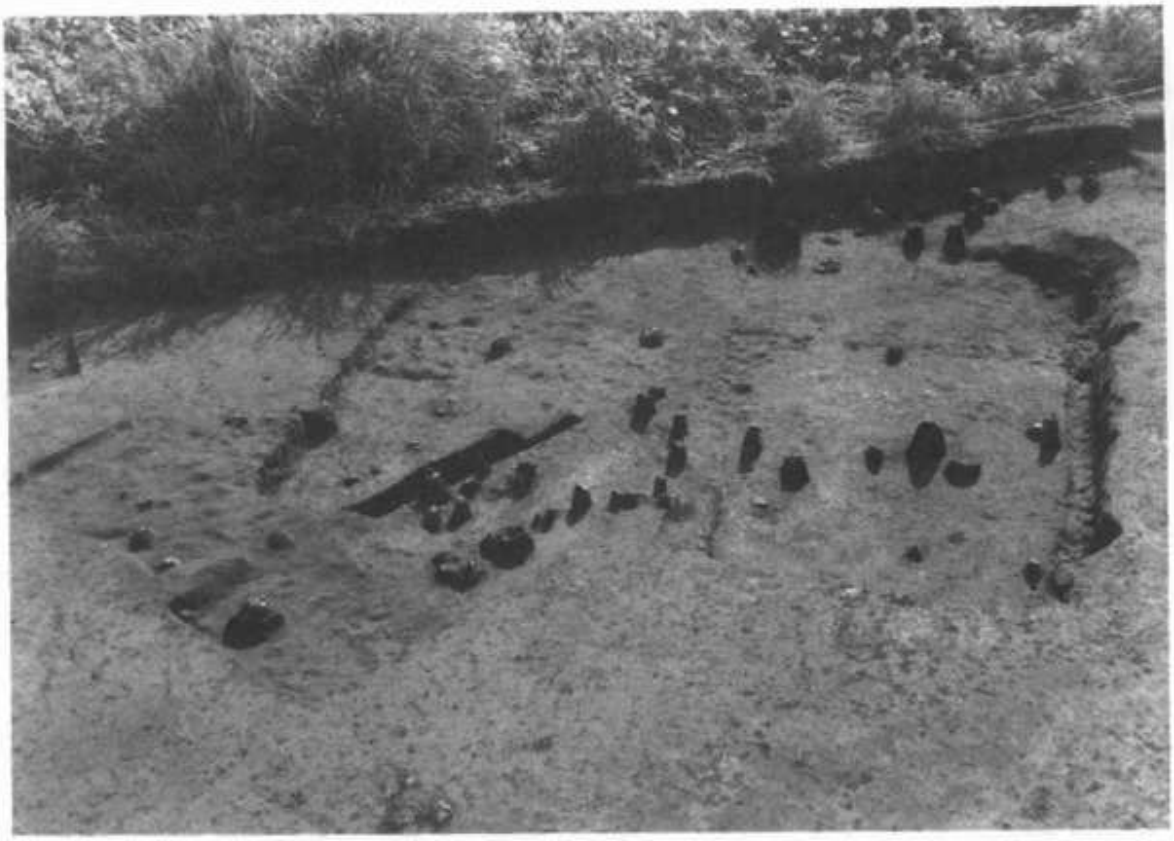


1．038号住居跡

2．039号住居跡

1．040号住居跡

2．041号住居跡

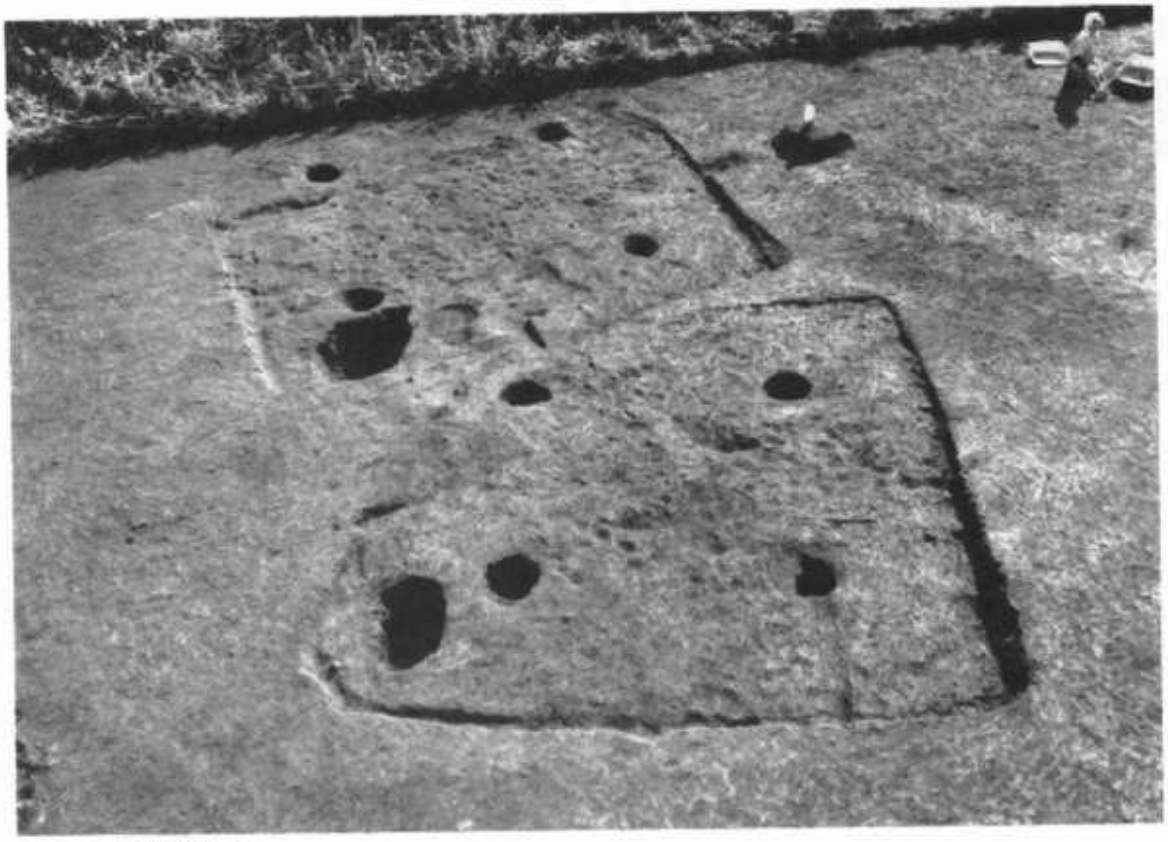


1．042，043，044号住居跡遺物出土状況

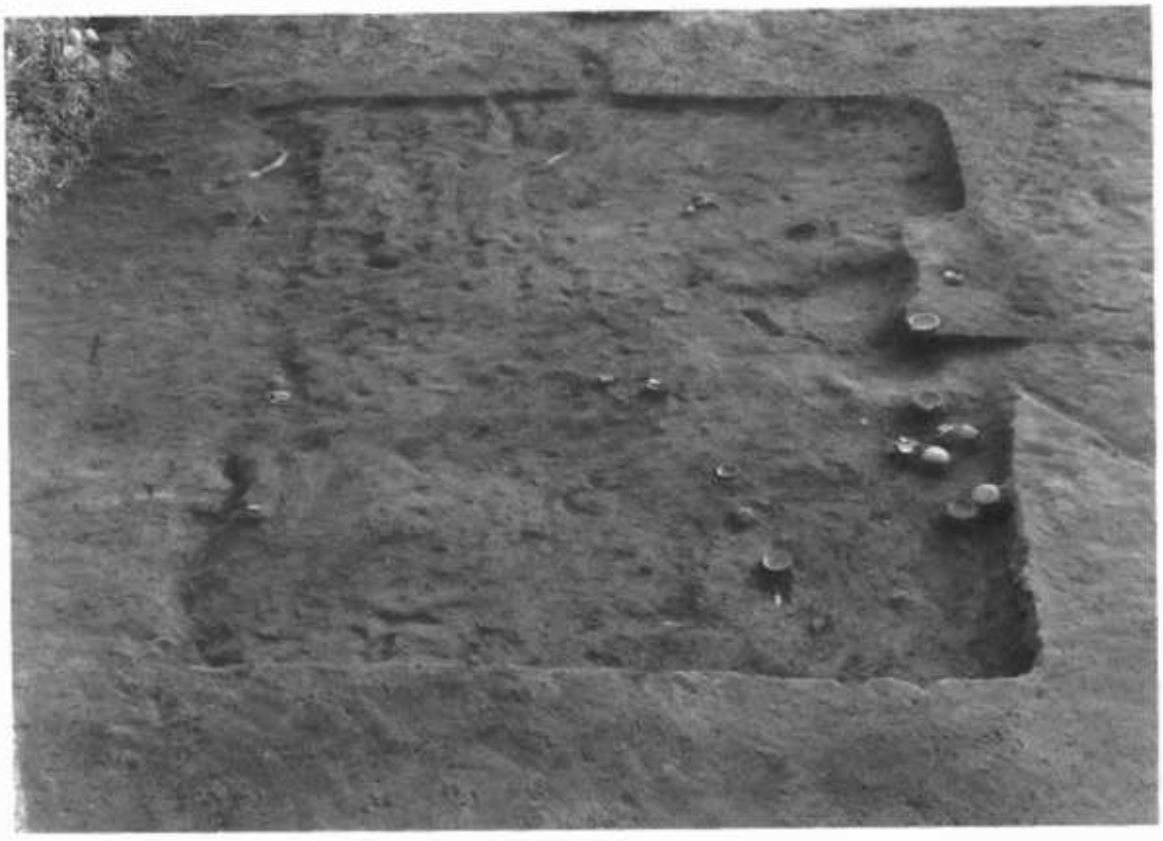
2．042，043，044号住居跡

1．045，046，047号住居跡

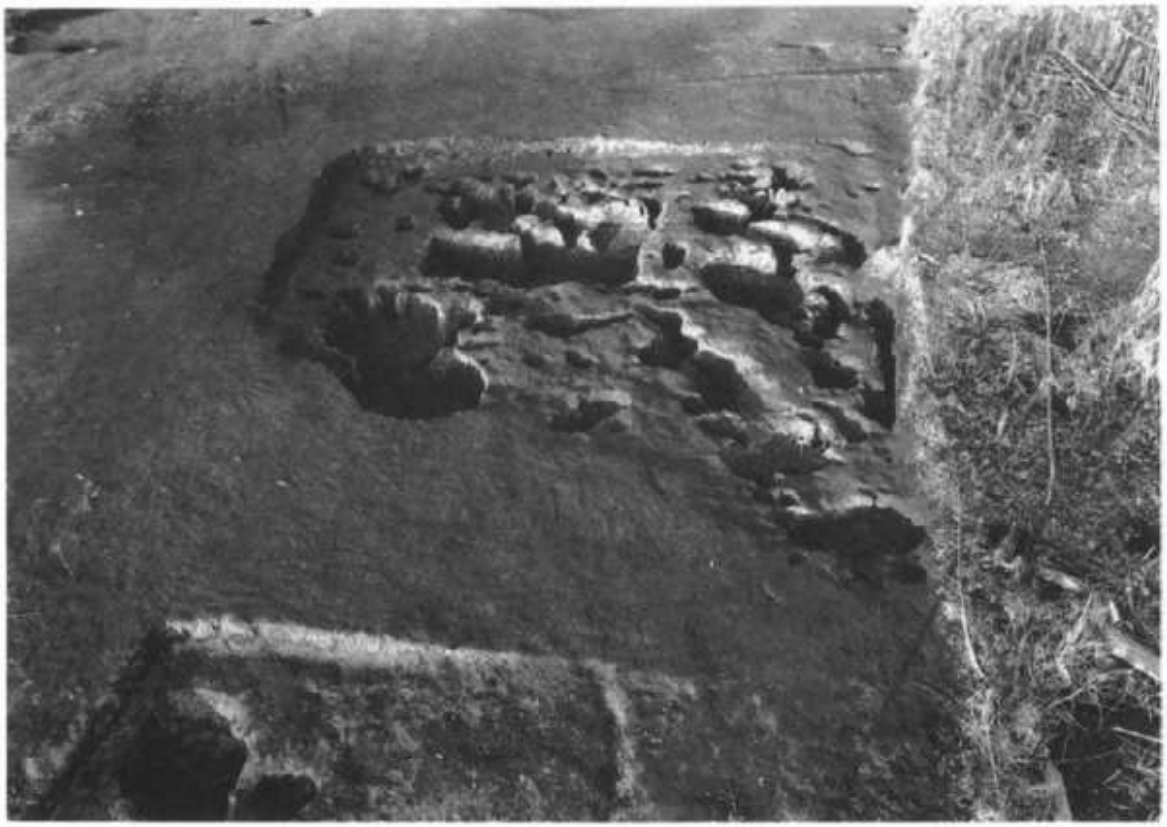
2．046号住居跡遺物出土状況



1．048，049号住居跡



2．049号住居跡遺物出土状況

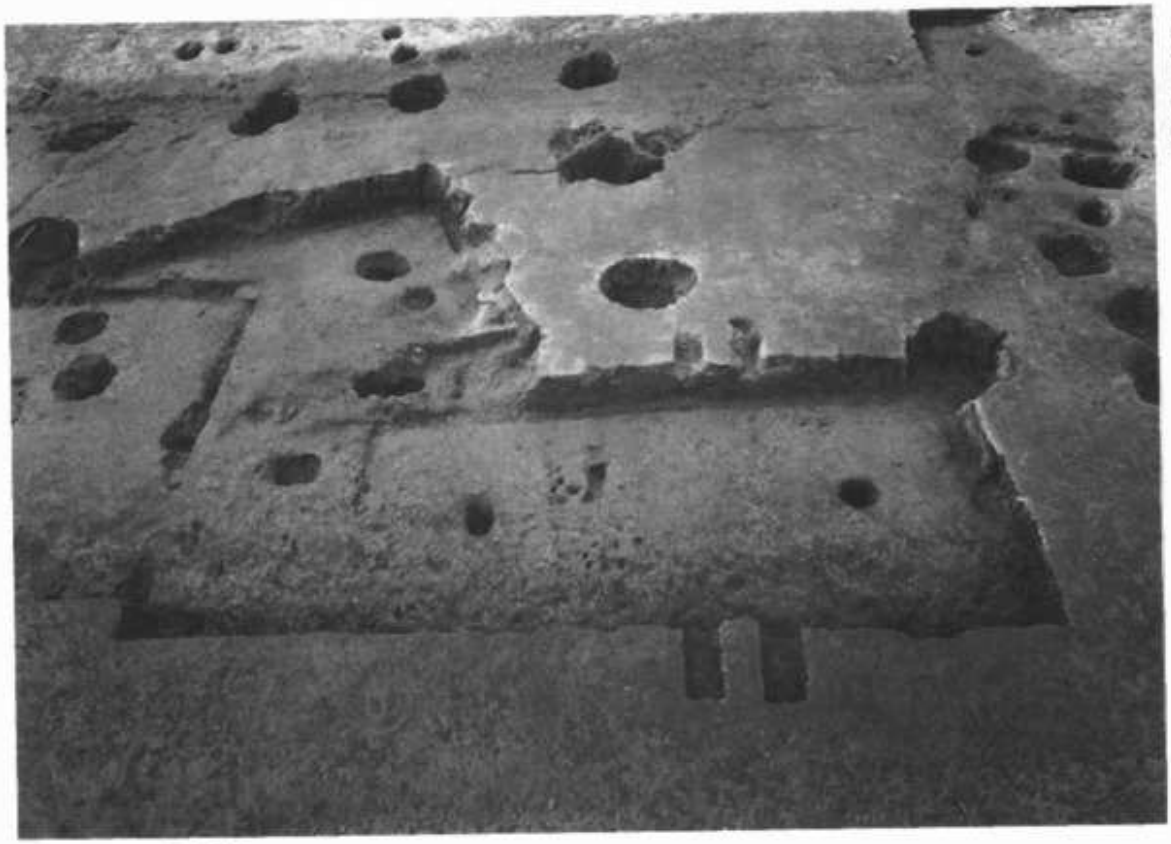


1．050号住居跡

2．051号住居跡

1．052A・B号住居跡

2．053A・B号住居跡



1．054A・B号住居跡

2．054B・C号住居跡

1．055号住居跡

2．056号住居跡

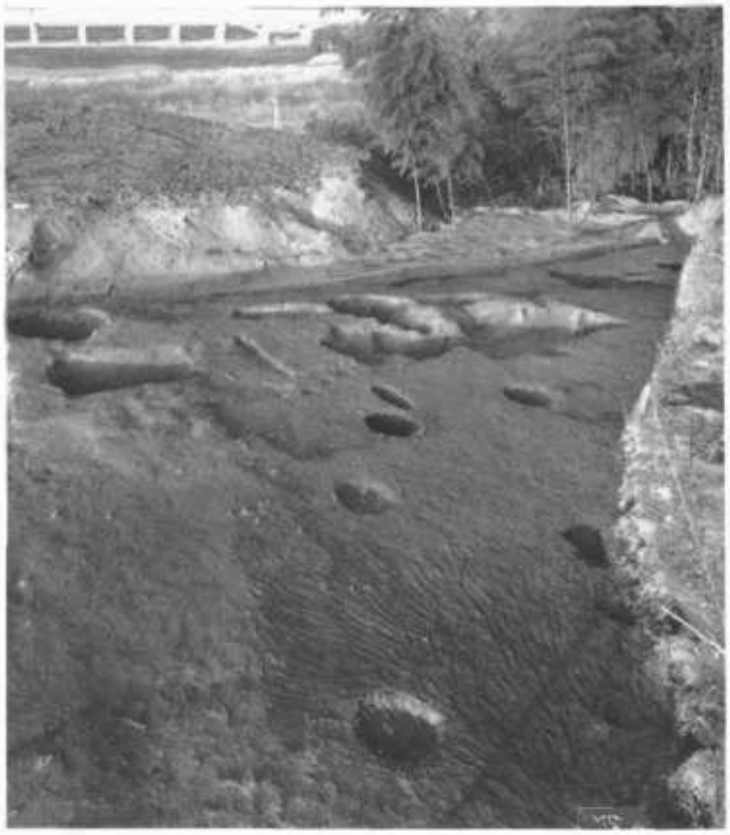
1．057号住居跡

2．201号土坑

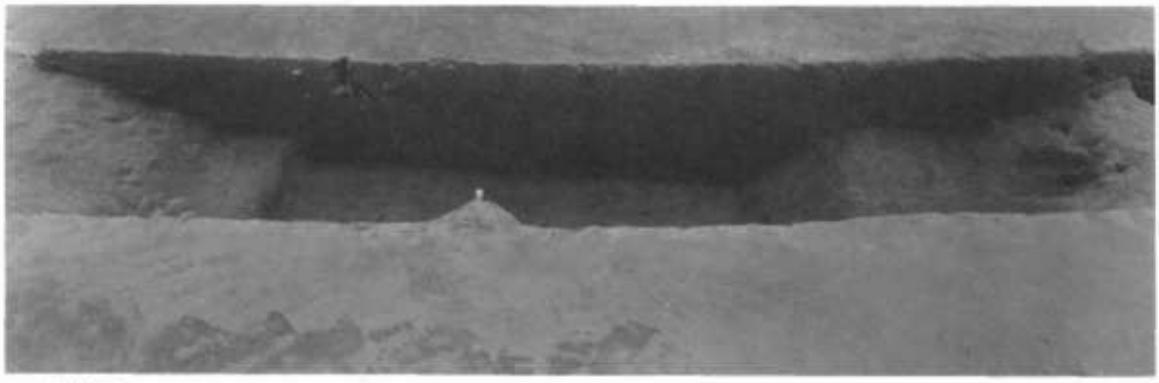
1．205号土坑

2．206～214号土坑

1．233号土坑



2．土坑群(221～231)



3．堀断面(A～B)

4．堀断面（C～D）

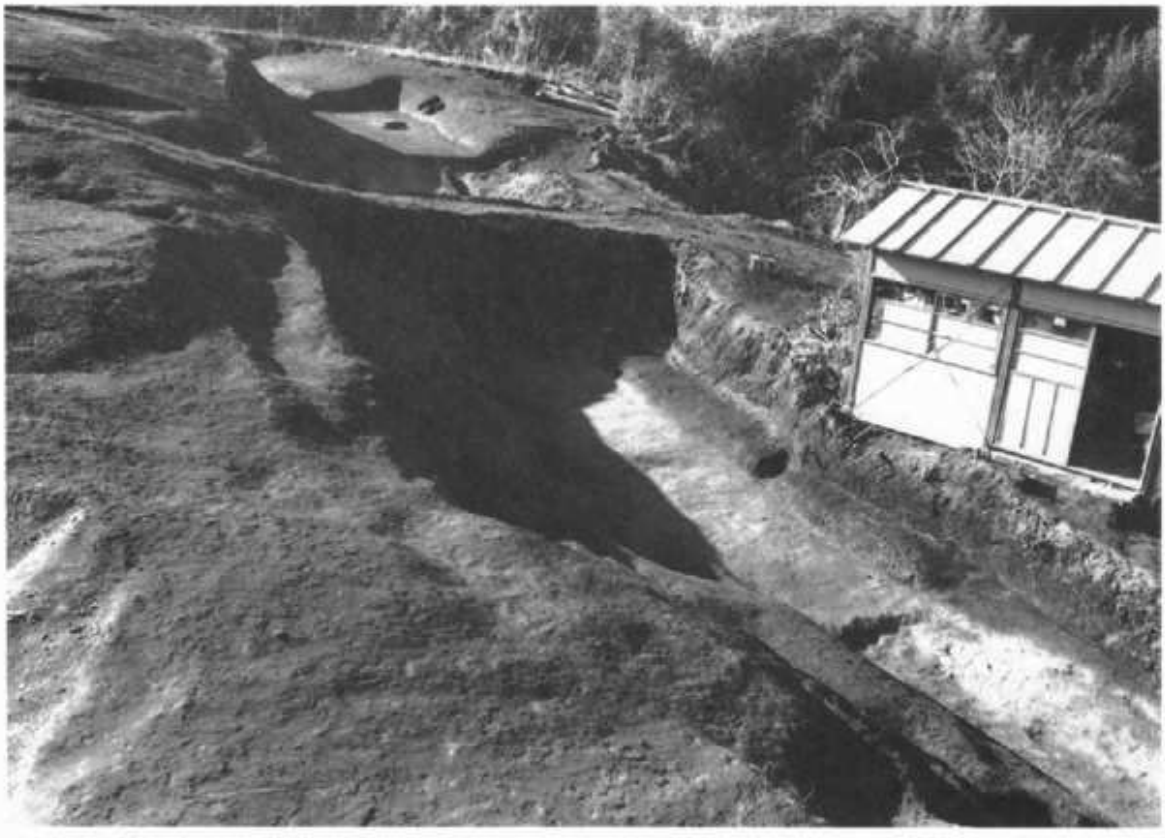
1．001号遺構

2．030号遺構

1．堀，北西側

2．堀，南側

1．堀，中央



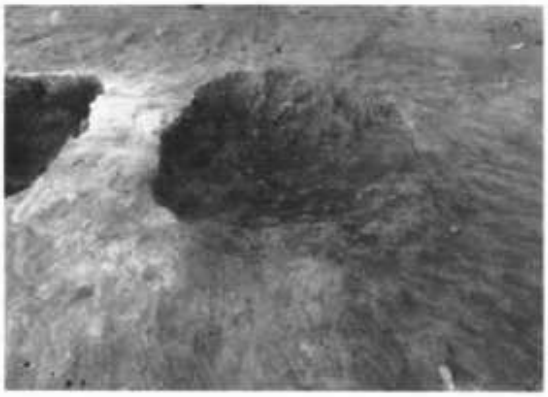
2．堀，北側

1．塚近景

2．塚断面

004 B

007 A



011

013

014

015

017 A

021 B

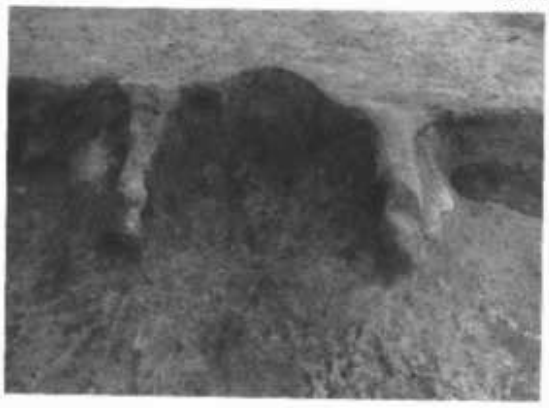
022 A

022 B

025

034 A

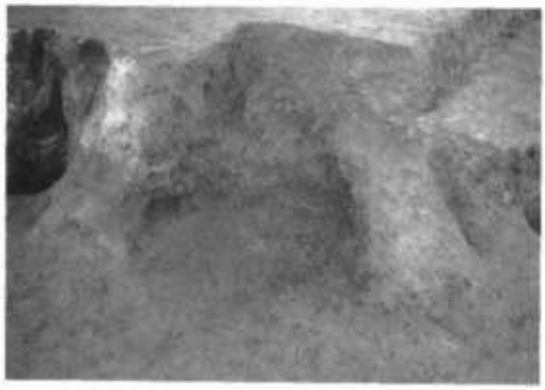
034 B



039

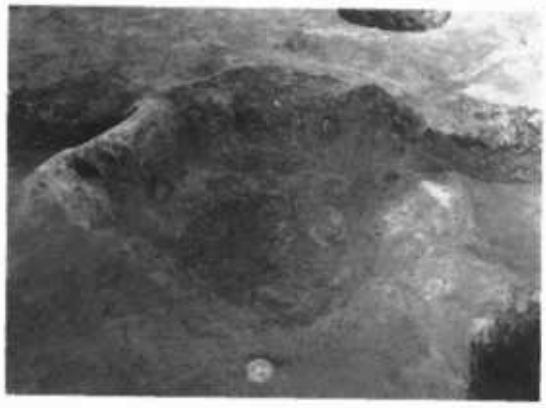
040

041



043

046



049

052 A

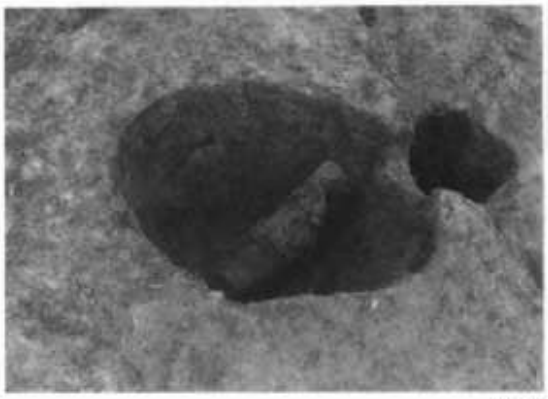
004

006

007 D

017 A（貯蔵穴）

022 B

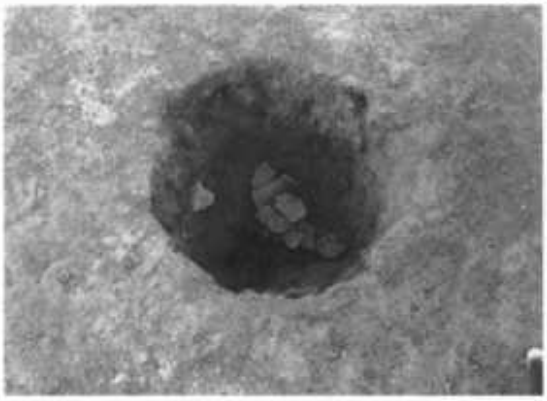


023 D

033

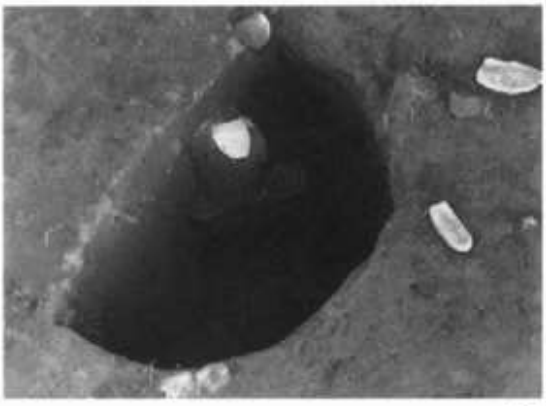
056

216



217

218



225

1 (002)

6 (004B)

7 (004B)

9 (004B)

11 (004B)

13 (004B)

12 (004B)

16 (005)

17 (005)

18 (005)

出土遺物(002・004B・005号住居跡)

1 (007 A)

3 (007 A)

17(007 E)

15(007 D)

18(007 E)

7 (011)

7 (014)

2 (014)

13(014)

6 (014)

21(014)

18(014)

出土遺物(007A・007D・007E・001・014号住居跡)

1 (015)

6 (017 A)

9 (017 A)

13 (017 A)

6 (019)

11 (021 B)

13 (022 A)

5 (017 A)

7 (017 A)

10 (017 A)

1 (018)

5 (019)

7 (019)

16 (022 A)

出土遺物(015・017A・018・019・021・022A号住居跡)

17(022A)

1(022B)

2(022B)

3(022B)

9(027)

12(028)

19(022A)

4(022B)

6(026)

10(028)

11(028)

出土遺物(022A・022B・026・027・028号住居跡)

13(028)

14(028)

16(028)

17(028)

6 (032)

5 (029)

10(033)

出土遺跡(028・029・032・033号住居跡)

4 (034 A)

5 (034 A)

6 (034 A)

8 (034 A)

1 (034 B)

7 (034 B)

5 (034 B)

11 (034 B)

出土遺物(034 A・034 B 号住居跡)

3（034C）

4（034C）

3（035B）

4（035B）

6（036）

15（039）

10（036）

8（036）

17（040）

4（042）

7（042）

10（042）

出土遺物（034C・035B・036・039・040・042号住居跡）

4 (044)

5 (044)

7 (044)

12(045)

1 (046)

2 (046)

3 (046)

6 (046)

7 (046)

8 (046)

10(046)

11(046)

出土遺物(044・045・046号住居跡)

12(046)

16(046)

18(046)

24(046)

25(046)

30(046)

28(046)

17(046)

23(046)

27(046)

31(046)

33(046)

出土遺物(046号住居跡)

35(046)

38(046)

48(046)

49(046)

50(046)

53(046)

出土遺物(046号住居跡)

1 (047)

2 (047)

3 (047)

4 (048)

5 (048)

10(049)

11(049)

12(049)

13(049)

14(049)

16(049)

18(049)

19(049)

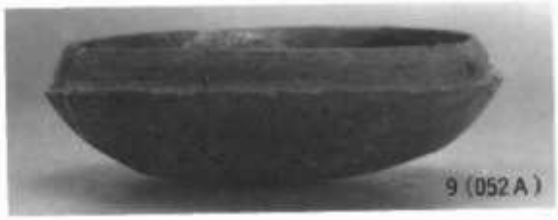
出土遺物(047・048・049号住居跡)

1 (051)

2 (051)

7 (052 A)

8 (052 A)


9 (052 A)

10 (052 A)

1 (053 A)

2 (054 A)

3 (054 A)

4 (054 A)

5 (054 A)

出土遺物(051・052A・053A・054A号住居跡)

9（054A）

10（054A）

5（054B）

6（054B）

16（056）

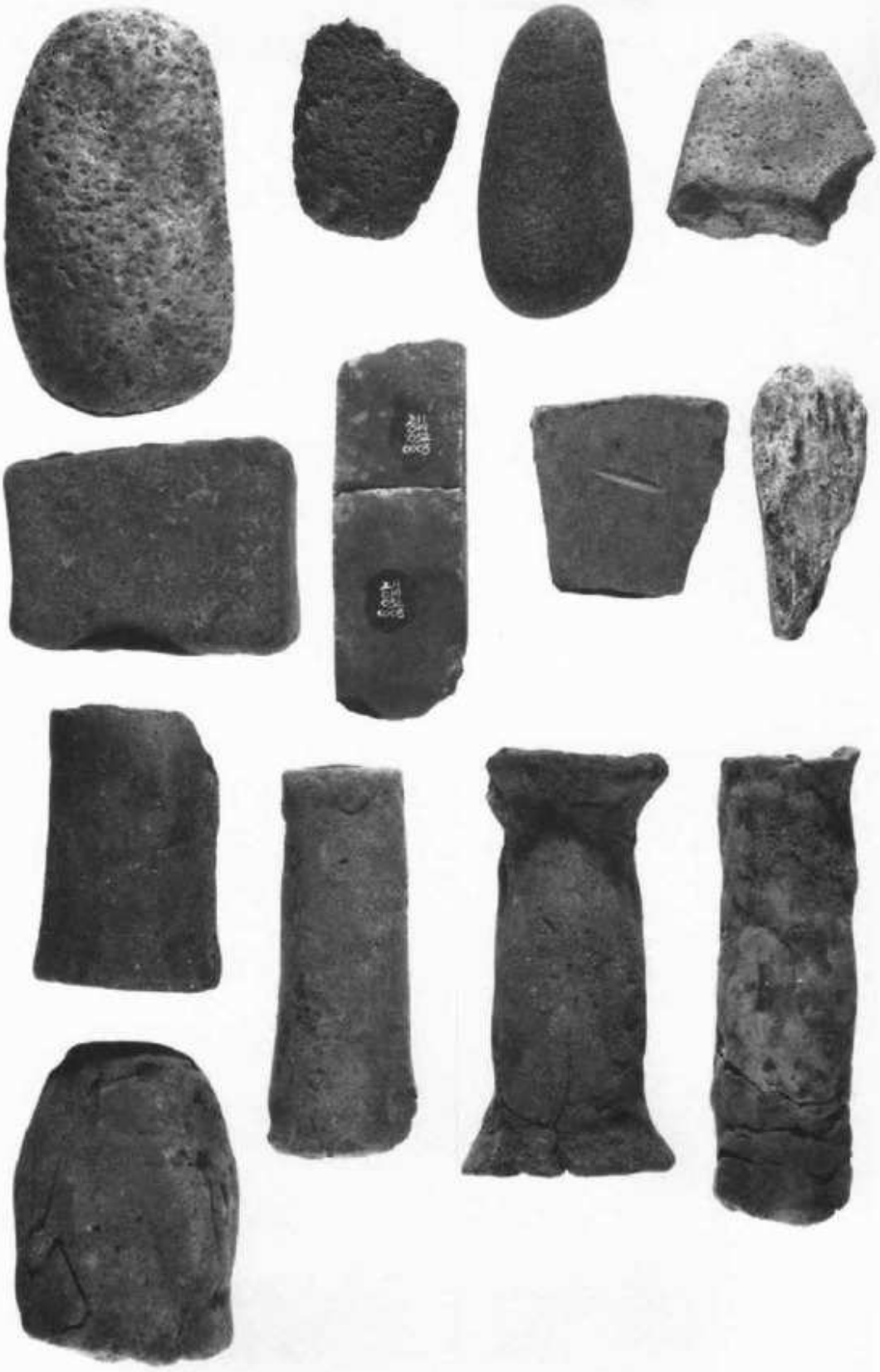
10（054C）

18（057）

出土遺物（054A・054B・054C・056・057号住居跡）

1．鉄製品

2．紡錘車，土玉



石製品，支脚

1．石造物

2．古銭

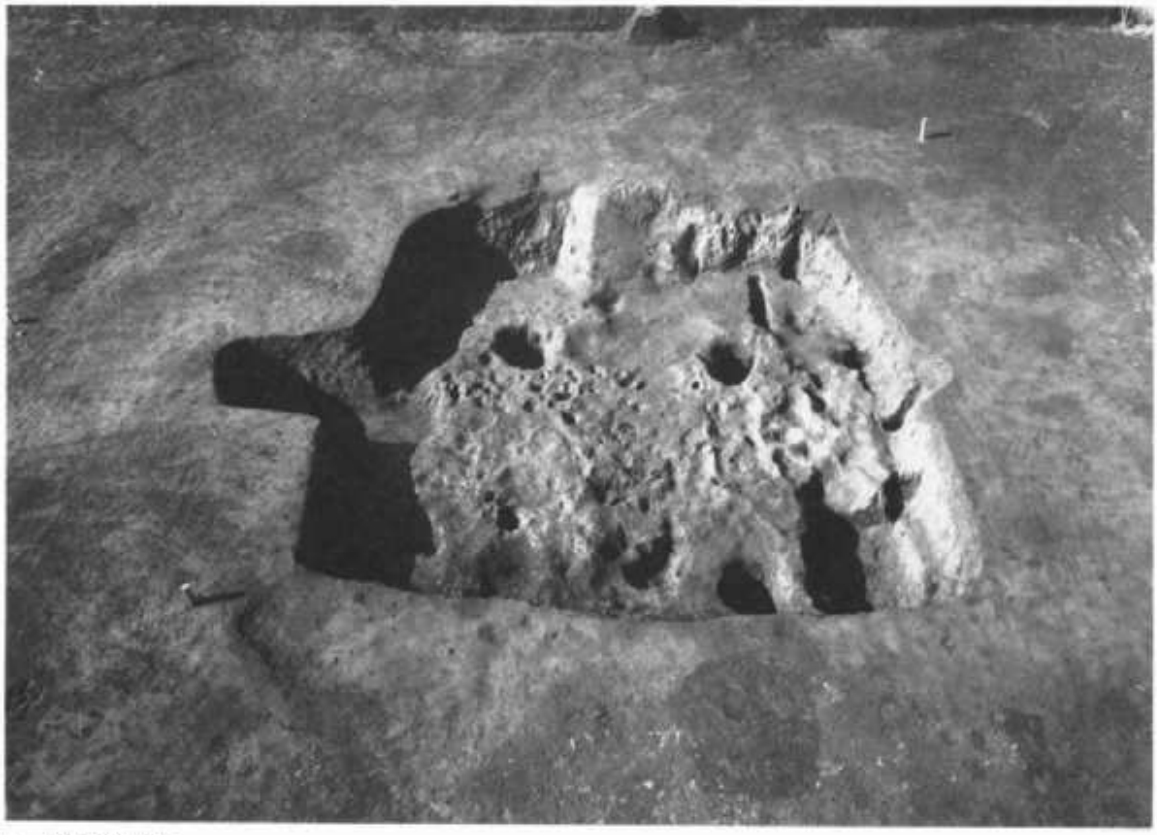
1．遺跡遠景

2．遺跡近景

1．層序(G5-10)

2．石器出土状況

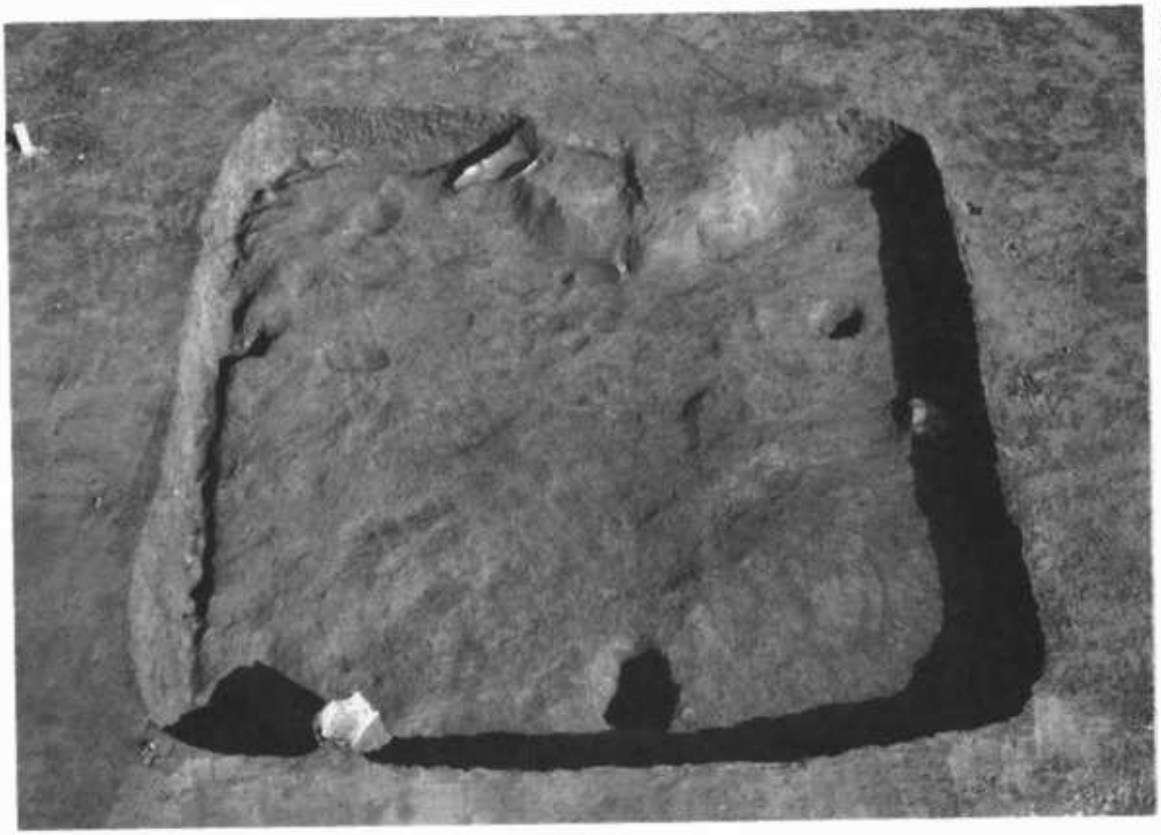
1．001号住居跡



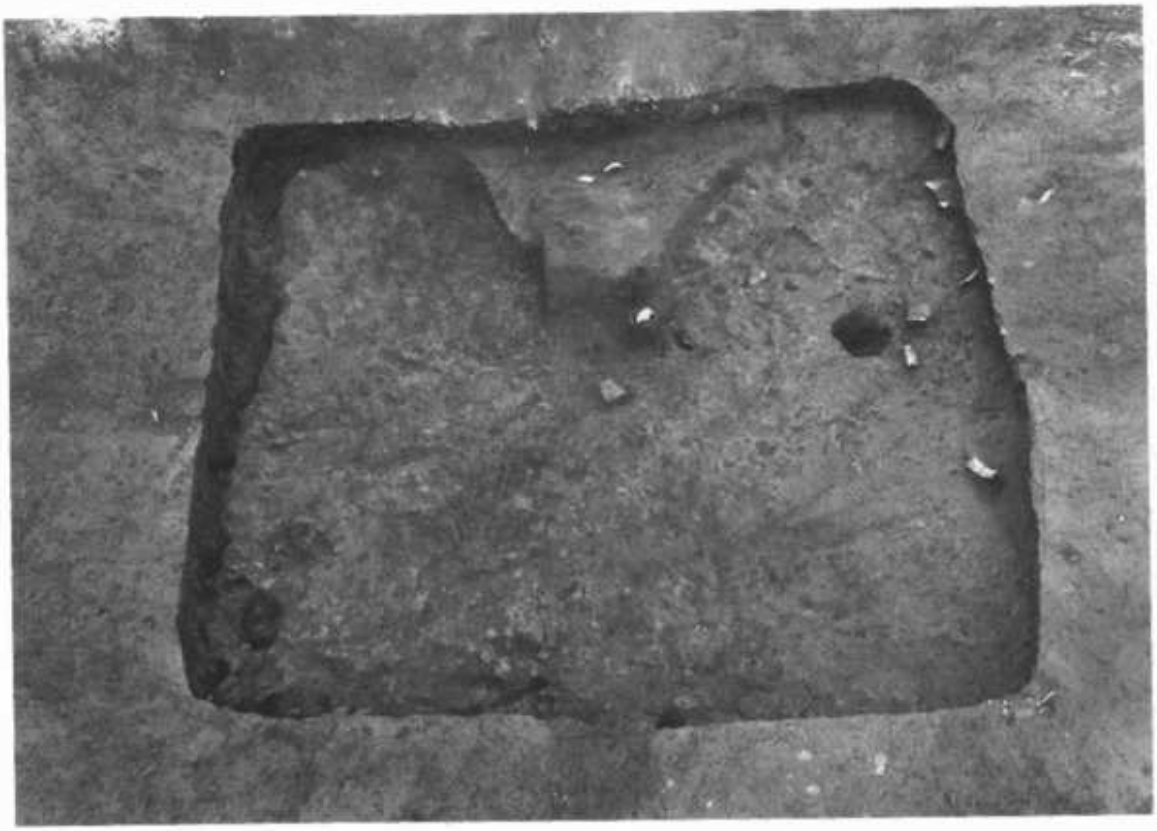
2．002号住居跡

1．003号住居跡

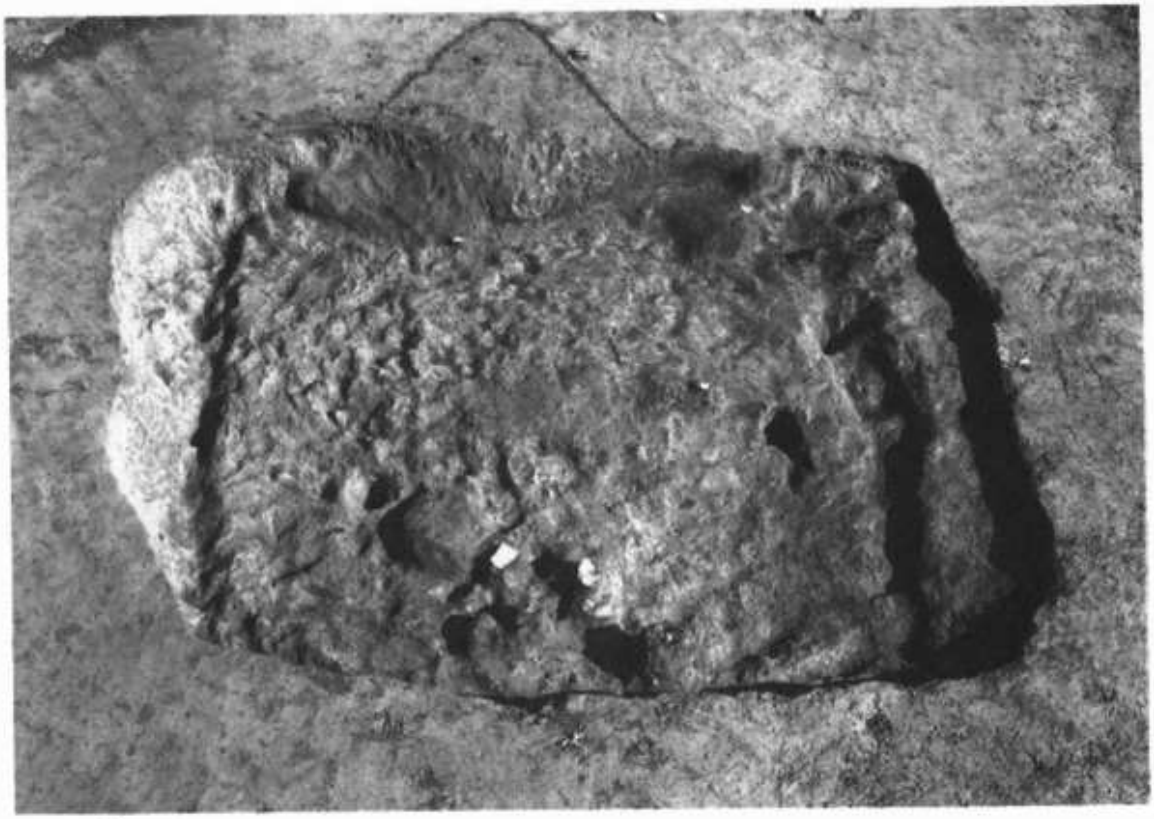
2．004号住居跡



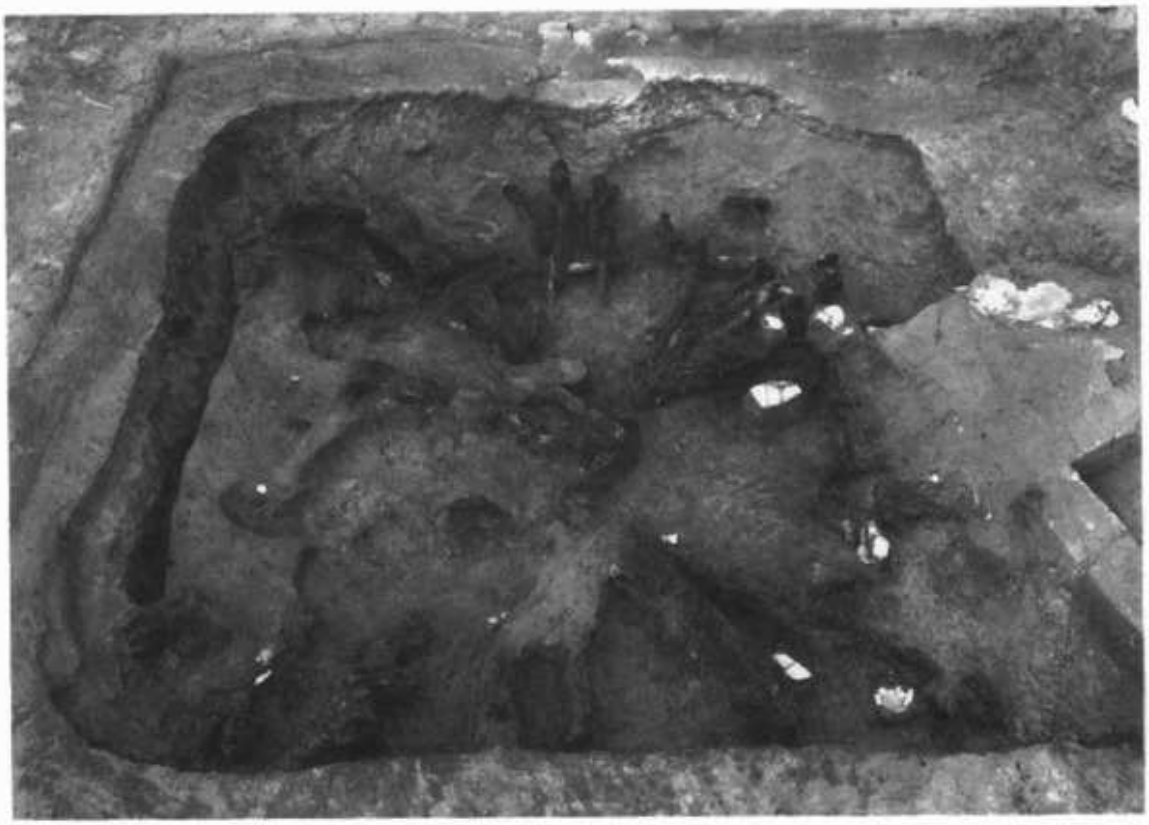
1．005号住居跡



2．006号住居跡



1．007号住居跡



2．008号住居跡遺物出土状況

1．008号住居跡

2．009号住居跡

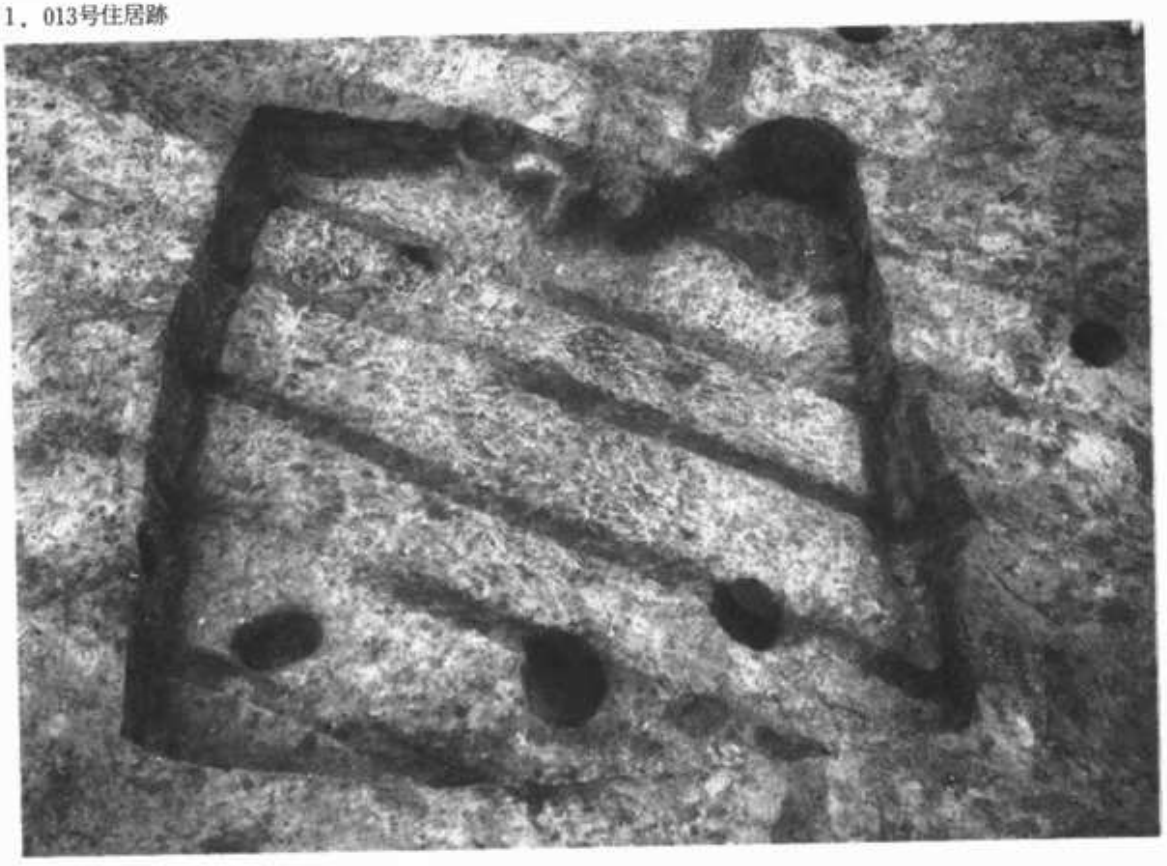
1．010号住居跡遺物出土状況

2．010号住居跡

1．011号住居跡

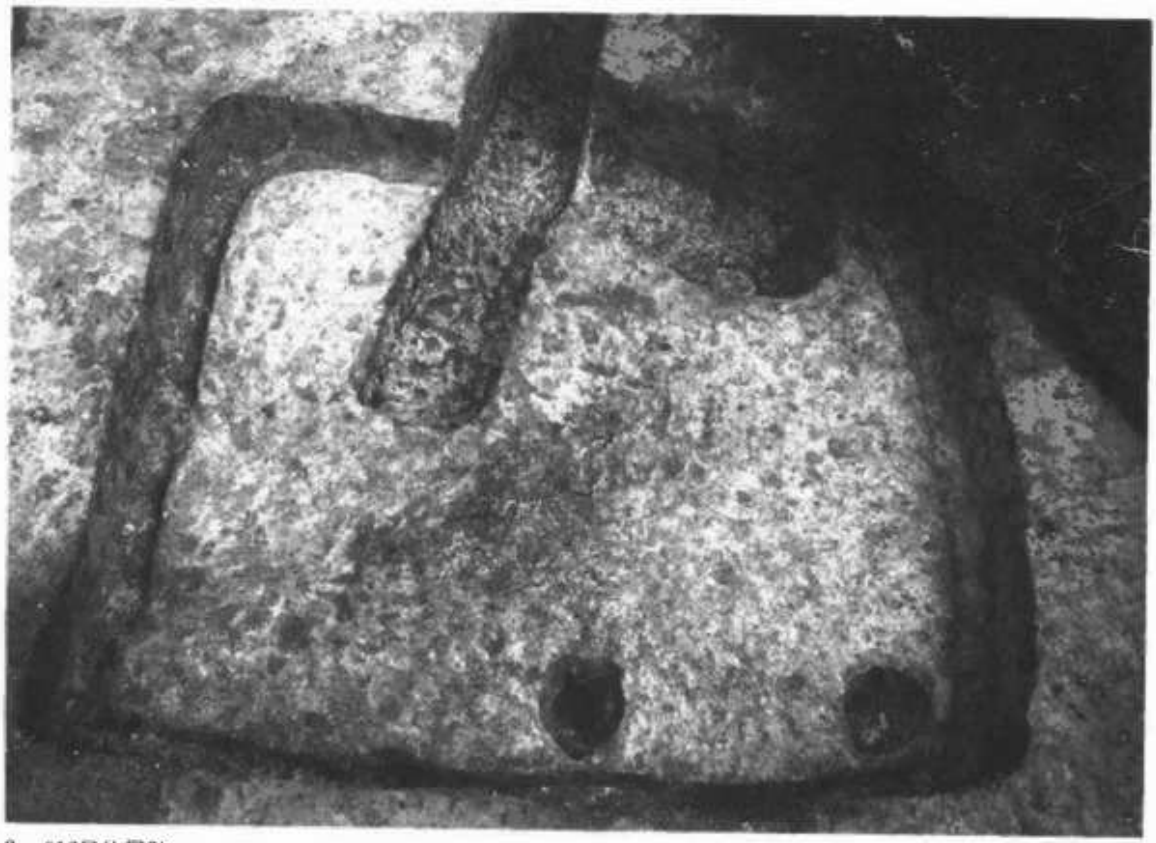
2．012号住居跡

1．013号住居跡

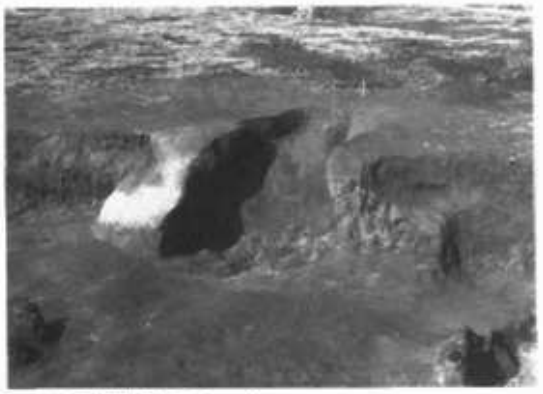


2．014号住居跡

1．015号住居跡



2．016号住居跡



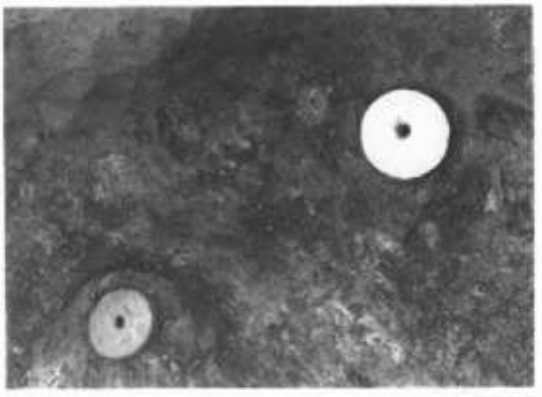
1．001号住居跡Bカマド

2．001号住居跡石製品出土状況

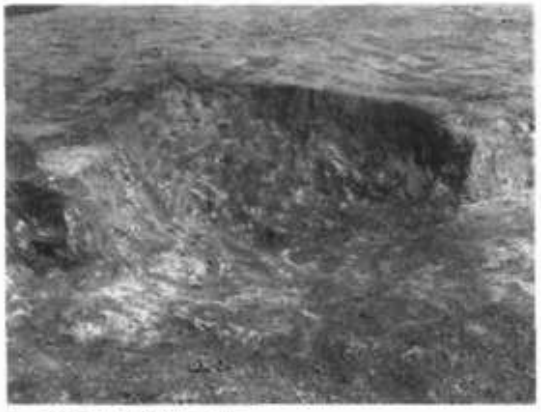
3．002号住居跡カマド

4．002号住居跡柱痕

5．003号住居跡カマド



6．003号住居跡紡錘車出土状況

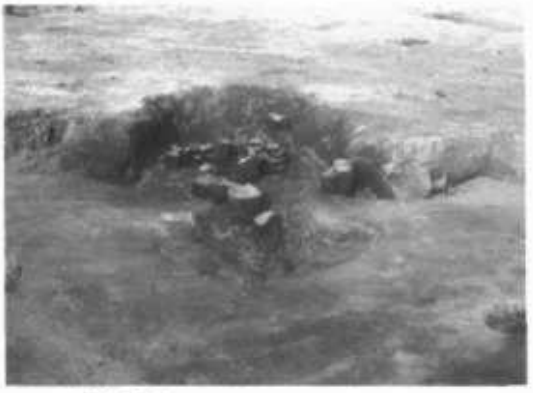


7．004号住居跡カマド

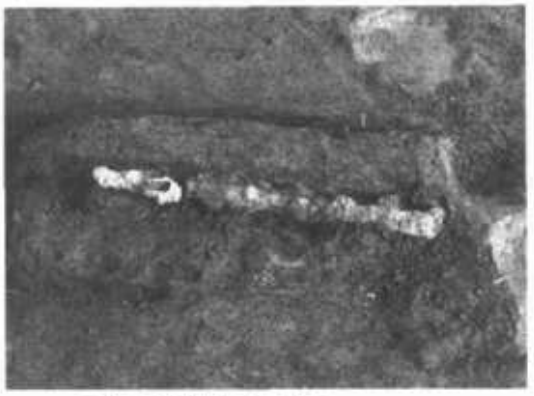
8．005号住居跡カマド

1．007号住居跡カマド

2．009号住居跡カマド



3．010号住居跡カマド

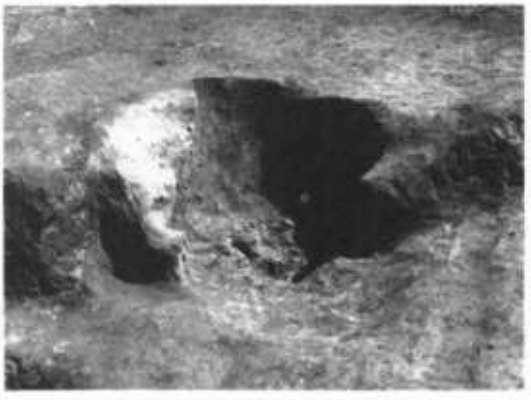


4．010号住居跡鉄製品出土状況

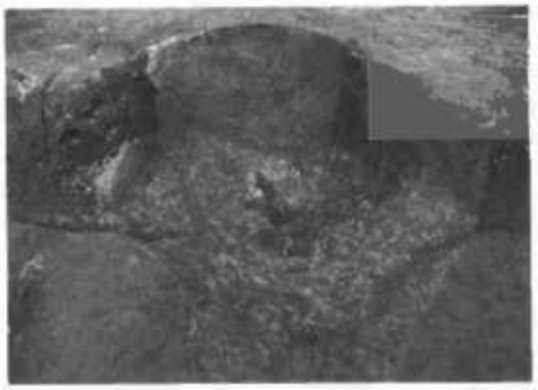
5．011号住居跡カマド

6．012号住居跡カマド

7．013号住居跡カマド遺物出土状況



8．013号住居跡カマド



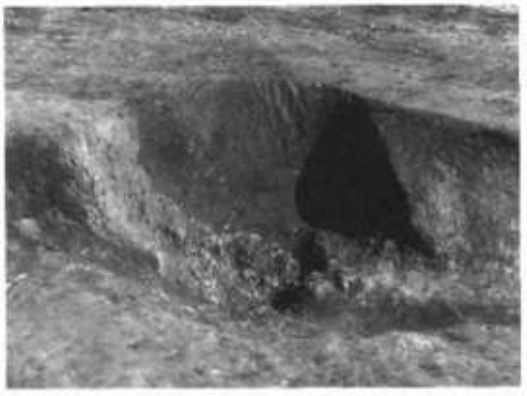
1．013号住居跡カマド掘り方

2．013号住居跡遺物出土状況(貯蔵穴)

3．013号住居跡炭化材出土状況

4．014号住居跡カマド

5．015号住居跡カマド遺物出土状況

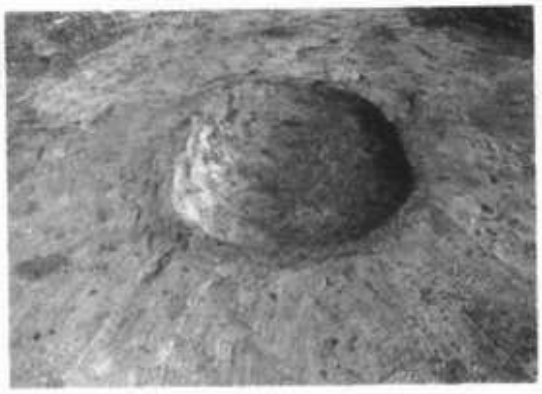


6．015号住居跡カマド

7．016号住居跡遺物出土状況

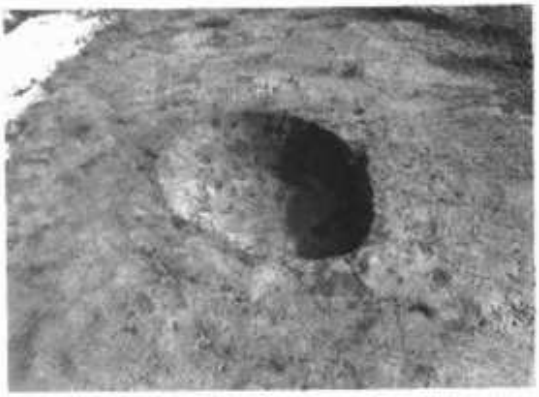
8．016号住居跡遺物出土状況

1．101

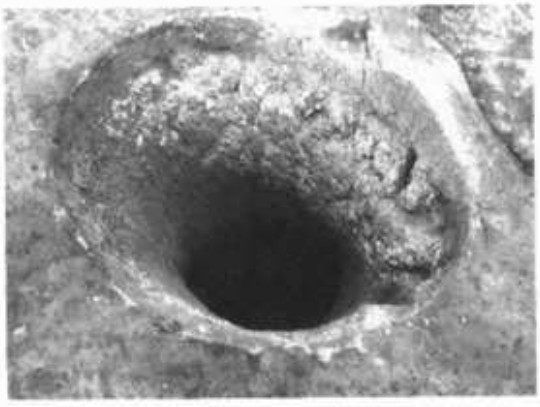


2．102

3．104号遺物出土状況



4．104

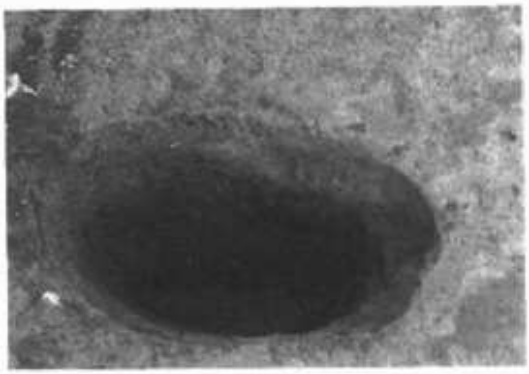


5．103

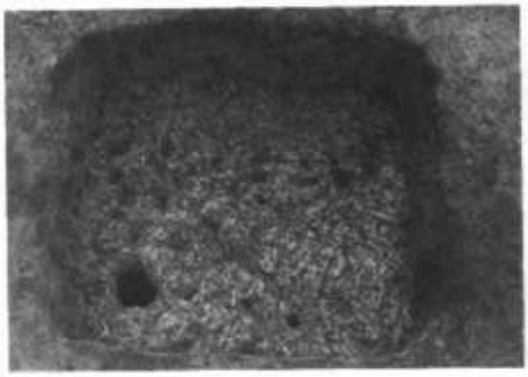
6．105

7．106

8．107・108



1．109



2．110

3．111

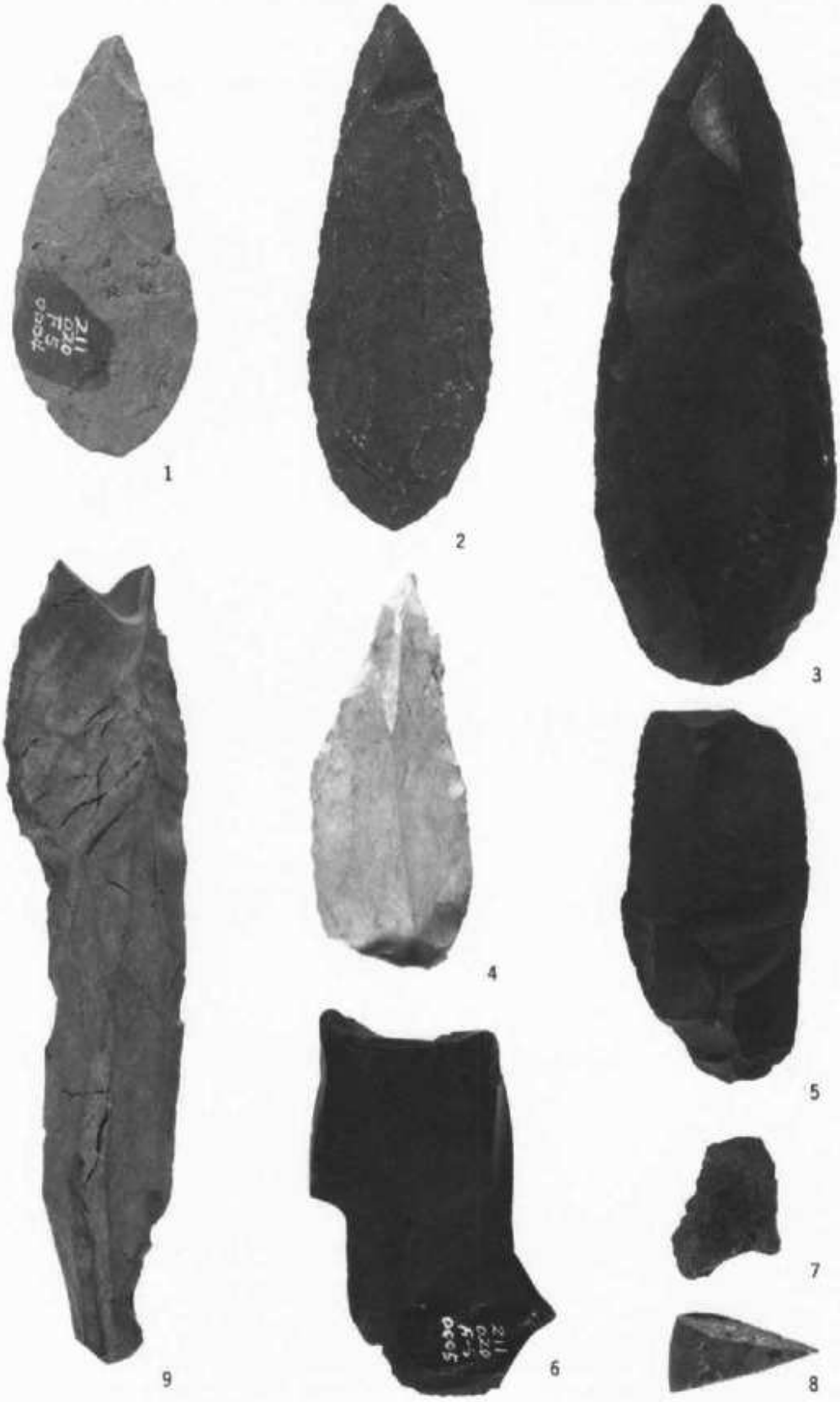
4．113

5．114

6．115

7．116

8．117



石器

2 (001)

3 (001)

18(001)

20(002)

22(002)

25(002)

31(002)

32(002)

34(002)

54(003)

48(002)

74(005)

出土土器(001・002・003・005号住居跡)

55(003)

77(007)

78(007)

82(008)

85(008)

91(008)

93(009)

94(009)

99(010)

105(010)

107(010)

109(010)

出土土器(003・007・008・009・010号住居跡)

110(010)

113(010)

116(010)

117(010)

119(010)

123(010)

138(010)

139(010)

140(010)

150(010)

出土土器(010号住居跡)

145(010)

148(010)

149(010)

151(010)

156(011)

165(013)

173(013)

出土土器(010・013号住居跡)

168(013)

177(014)

180(015)

183(015)

188(015)

189(015)

190(015)

191(016)

6 (106)

9 (111)

7 (106)

出土土器(013・014・015・016号住居跡，106・111号土坑)

6 (001)

7 (001)

9 (001)

8 (001)

10(001)

37(002)

39(002)

36(002)

66(004)

38(002)

42(002)

41(002)

43(002)

40(002)

44(002)

47(002)

45(002)

46(002)

58(003)

68(004)

住居跡出土墨書土器

126(010)

131(010)

130(010)

127(010)

129(010)

128(010)

134(010)

132(010)

133(010)

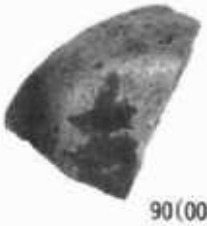
135(010)

136(010)

1 (102)

2 (102)

4 (105)


90(008)

87(008)

88(008)

89(008)

5 (106)

11(C2-00)

9 (C2-00)

10(C2-00)

12(C1-31)

7 (A4-04)

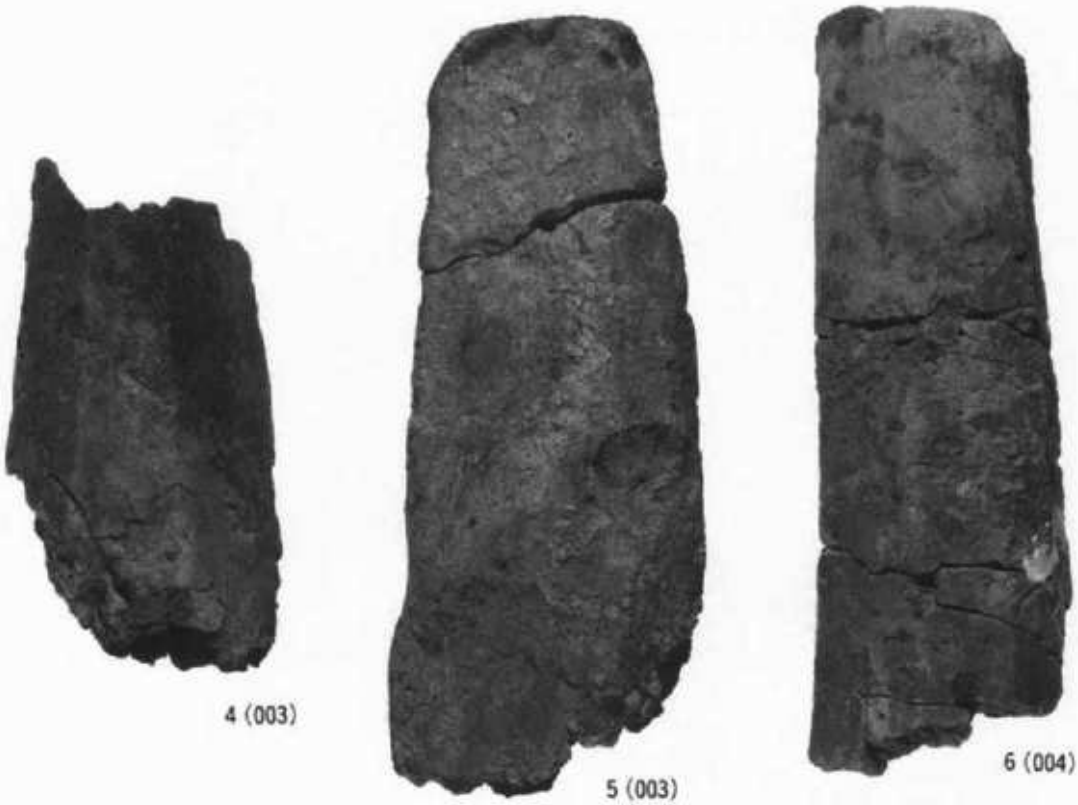
5 (A4-04)

6 (A4-04)

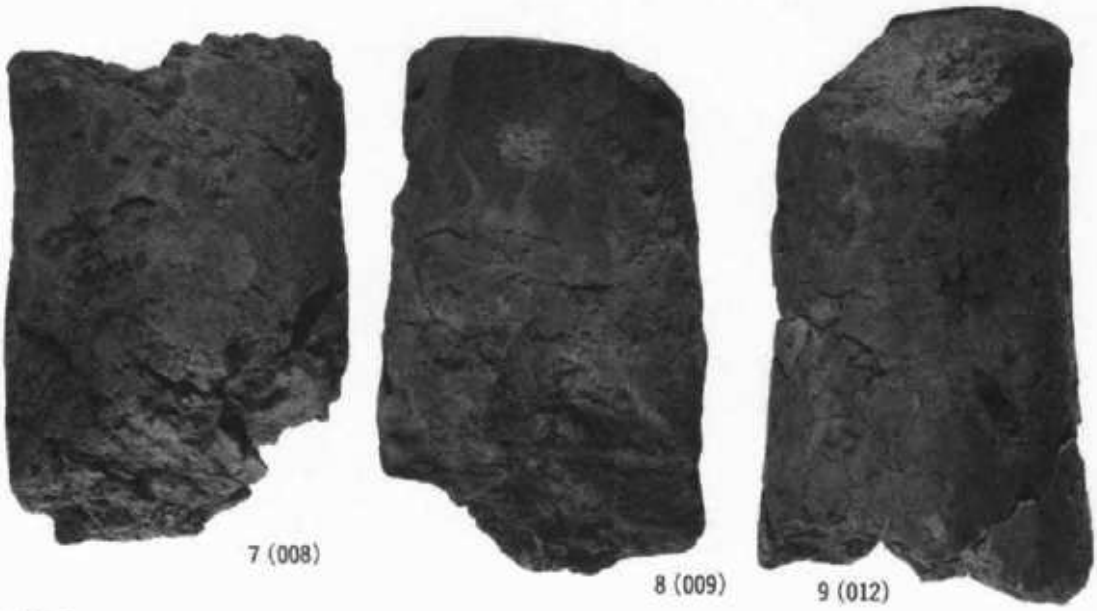
8 (A4-04)

住居跡・グリット出土墨書土器

1 (003)　2 (003)　3 (003)　4

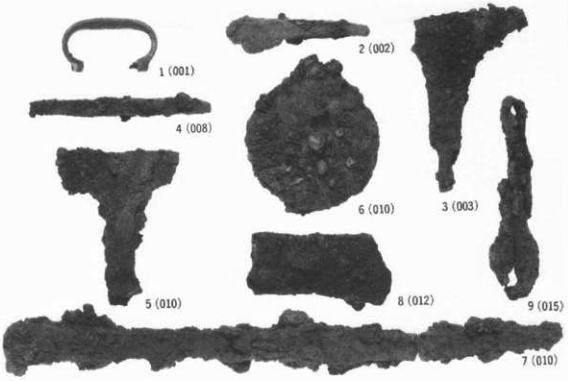


4 (003)　5 (003)　6 (004)

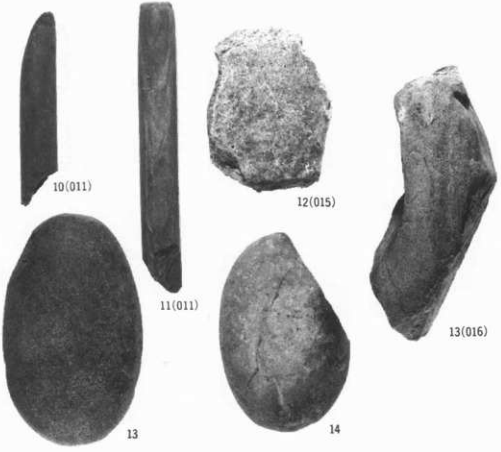


7 (008)　8 (009)　9 (012)

土製品



1．銅製品，鉄製品



2．石製品

1．遺跡遠景

2．遺跡近景

1．表土除去後全景

2．調査終了後全景

1．主体部確認状況

2．主体部全景

1．主体部遺物出土状況

2．主体部掘り方全景

3．墳丘断面(A-A′)

4．墳丘断面(A-A′)

5．墳丘断面(B-B′)

6．墳丘断面(B-B′)

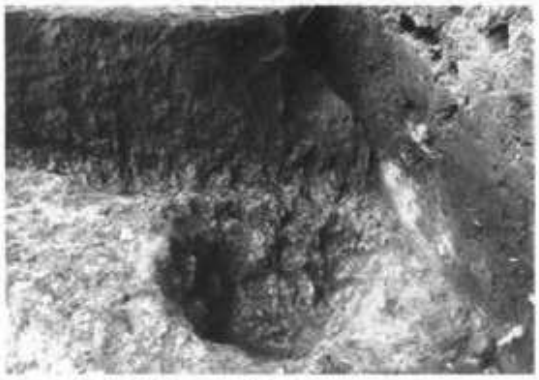
7．墳丘断面(C-C′)

8．墳丘断面(D-D′)

1．002号住居跡

2．003号住居跡

1．002号住居跡カマド



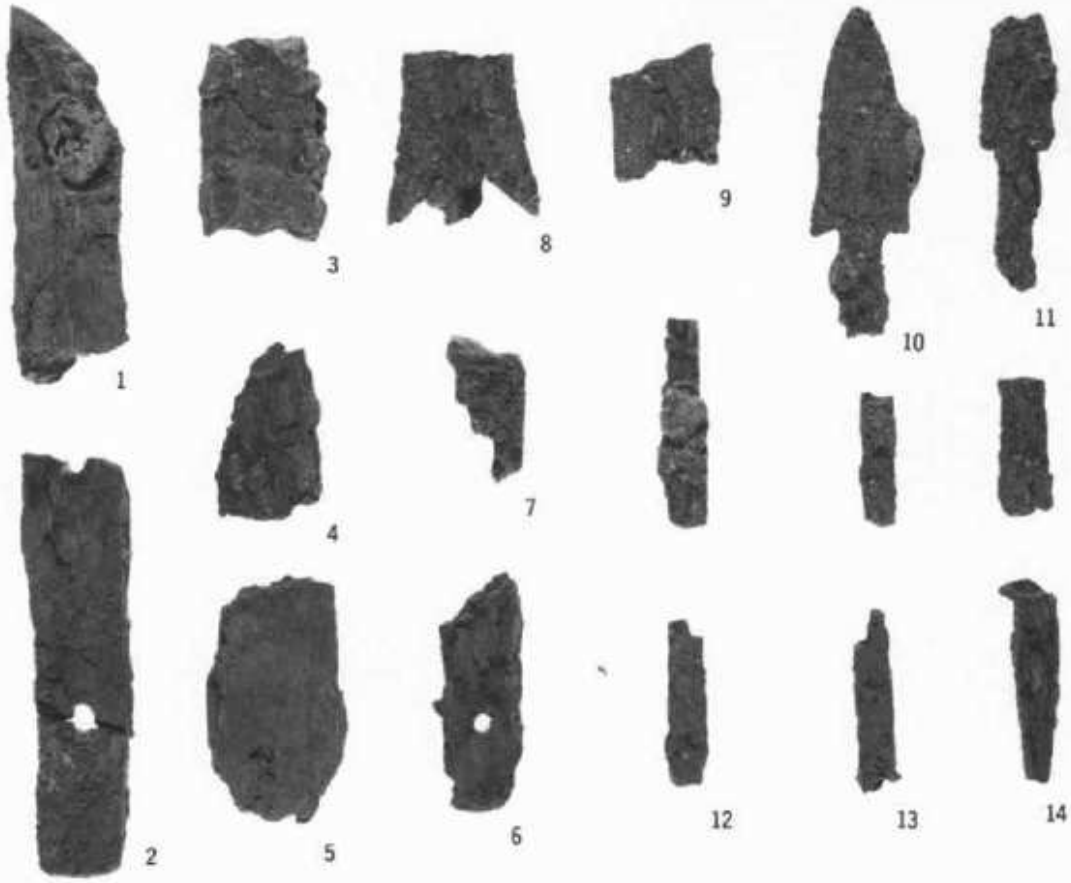
2．002号住居跡カマド掘り方

3．002号住居跡遺物出土状況

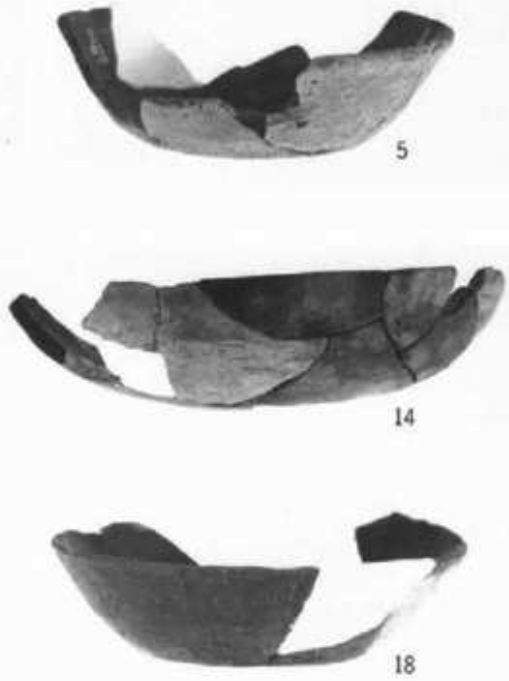
4．003号住居跡カマド

5．001号跡方形周溝遺構

推出し古墳



1．主体部出土鉄製品

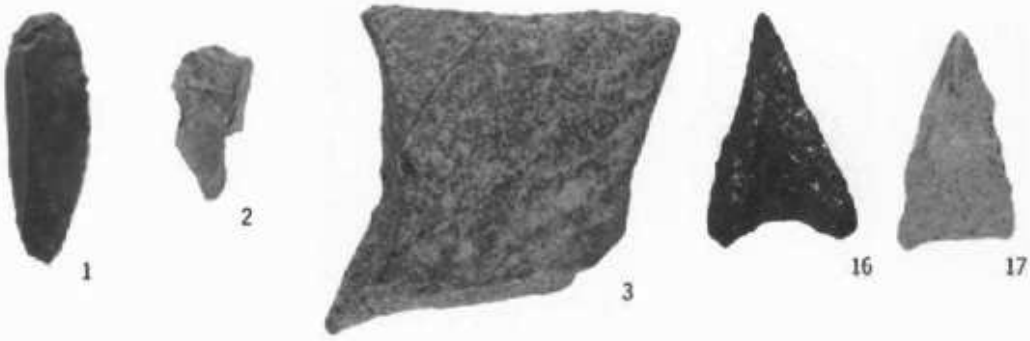


2．墳丘・周溝出土土器

1．002号住居跡出土土器

2．003号住居跡出土土器

3．方形周溝遺構出土土器



4．出土石器

1．遺跡近景

2．002号墳近景

1．トレンチ設定状況

2．完掘状況

1．E 3区断面

2．001号墳

1．002号墳北側周溝部遺物出土状況

2．002号墳南側周溝部遺物出土状況

1．002号墳北側周溝

2．002号，003号墳周溝

1．002号，003号墳発掘状況

2．002，003号墳全景

1．溝状遺構

2．溝状遺構

1．溝状遺構西側斜面

2．溝状遺構西側斜面

2 (002)

3 (002)

4 (002)

5 (002)

6 (002)

7 (002)

1 (001)

8 (002)

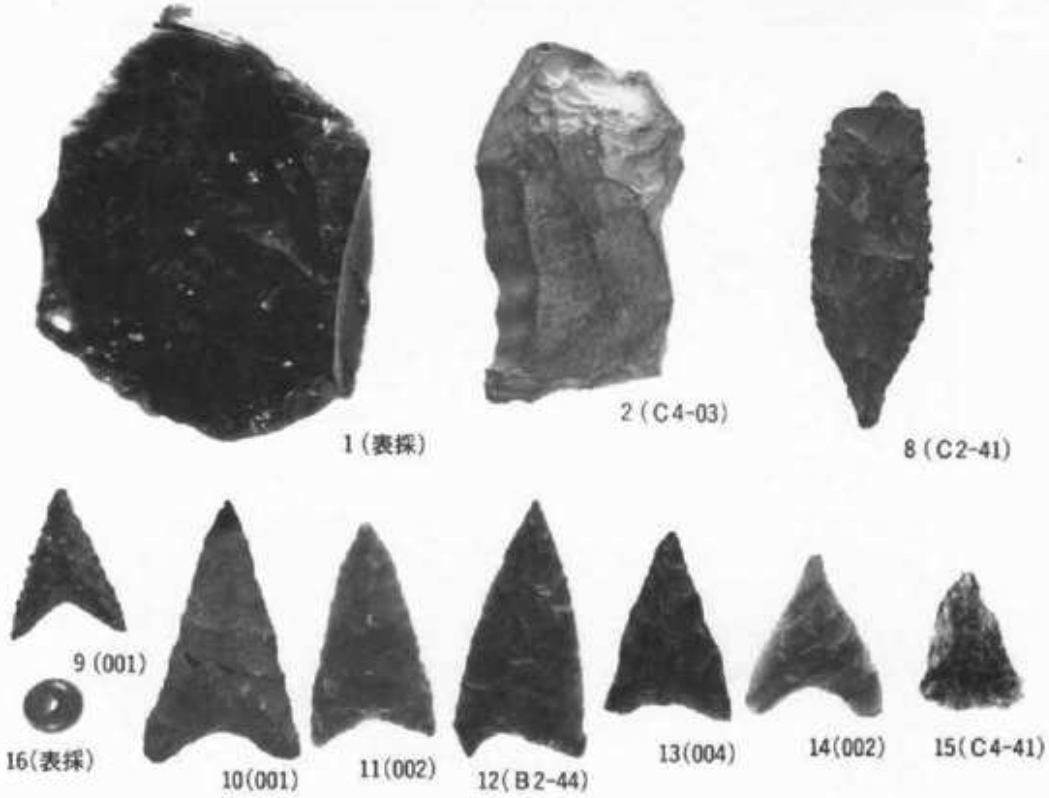
9 (003)

12(003)

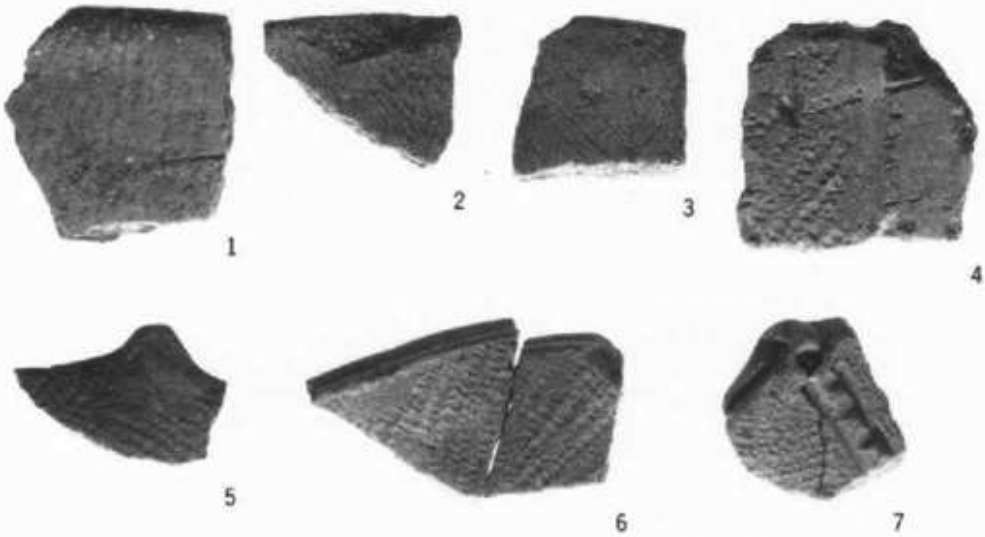
1 (004)

2 (004)

出土遺物


1（表採）
2（C4-03）
8（C2-41）
9（001）
16（表採）
10（001）
11（002）
12（B2-44）
13（004）
14（002）
15（C4-41）

1．石器群，他


1
2
3
4
5
6
7

2．土　器

1．遺跡近景

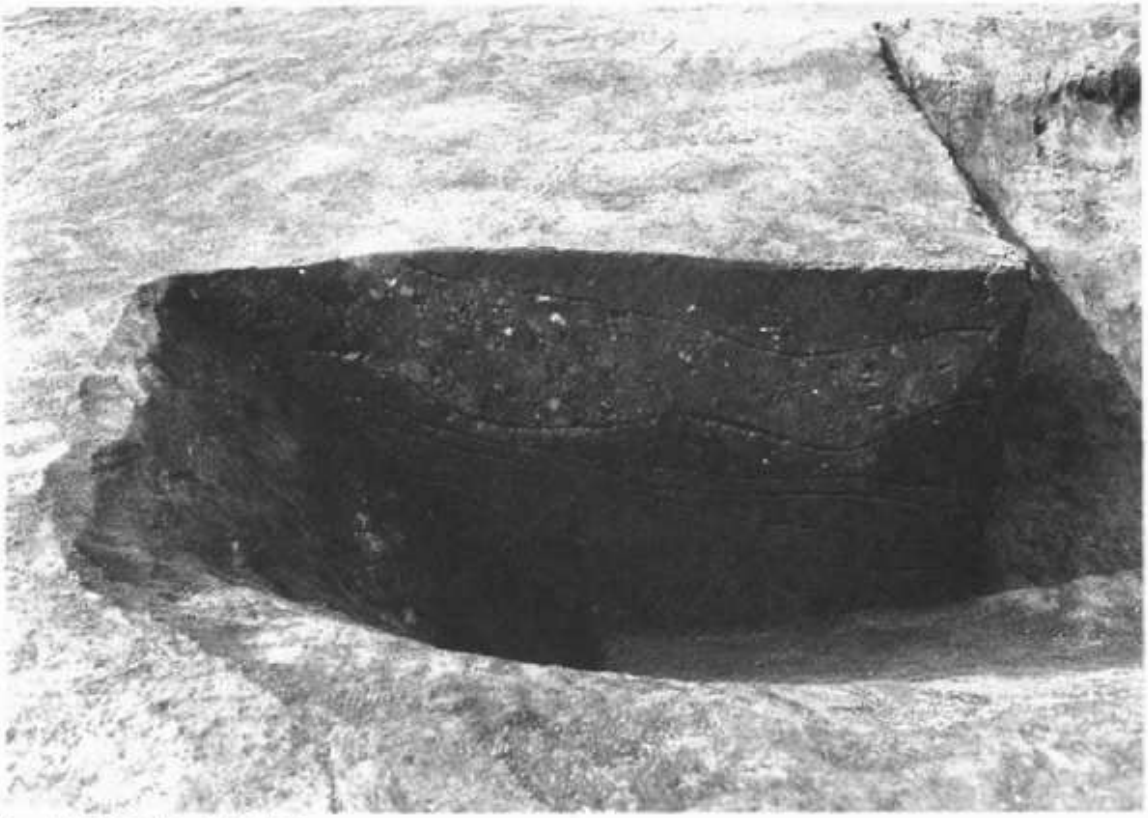
2．E 4 区断面

1．D６区先土器時代遺物出土状況

2．溝状遺構近景

1．001号部分

2．002号部分



1．002号Aポイント寄り断面

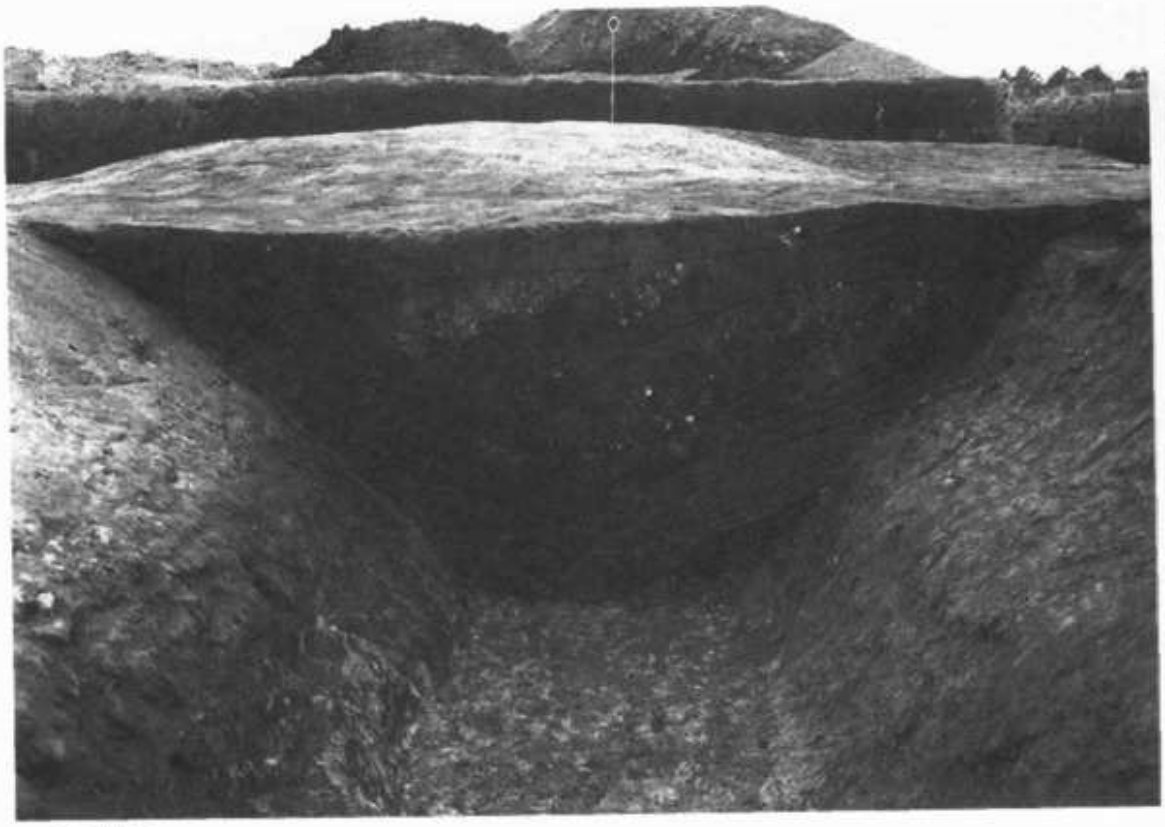
2．002号断面

1．003号断面

2．004号，E・F断面

1．004号部分

2．005号部分



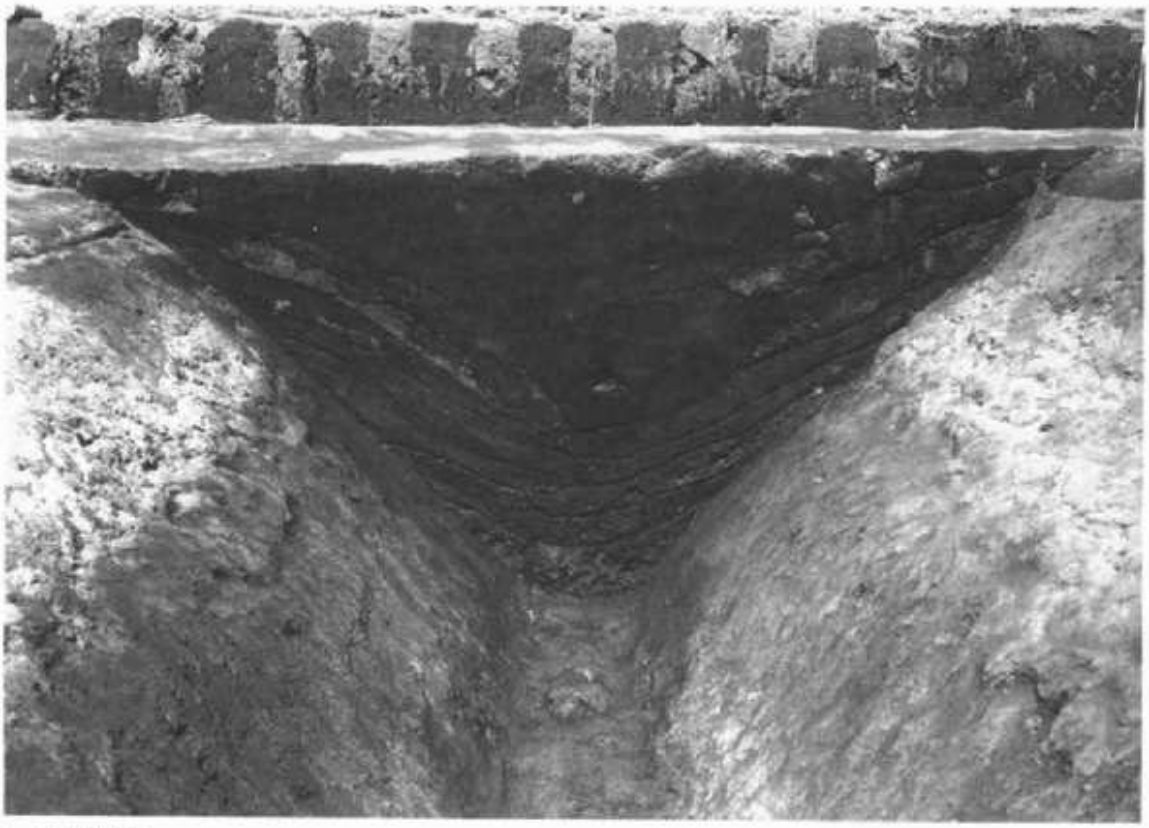
1．005号断面

2．005号断面

1．006号断面

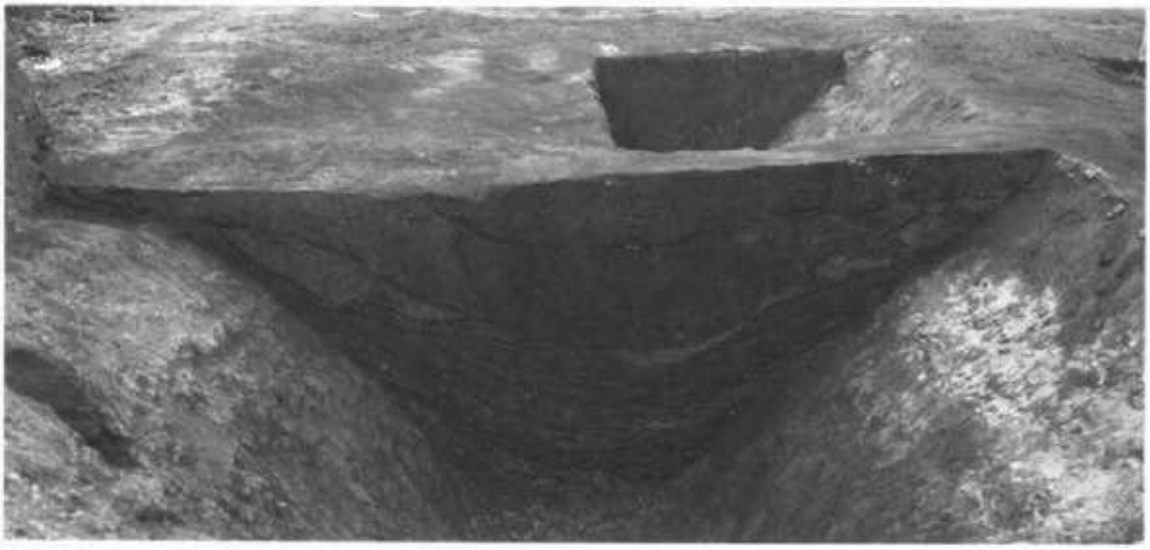
2．006号断面

1．007号断面



2．007号断面

1．008号断面



2．008号C・D断面

1（D6-02）

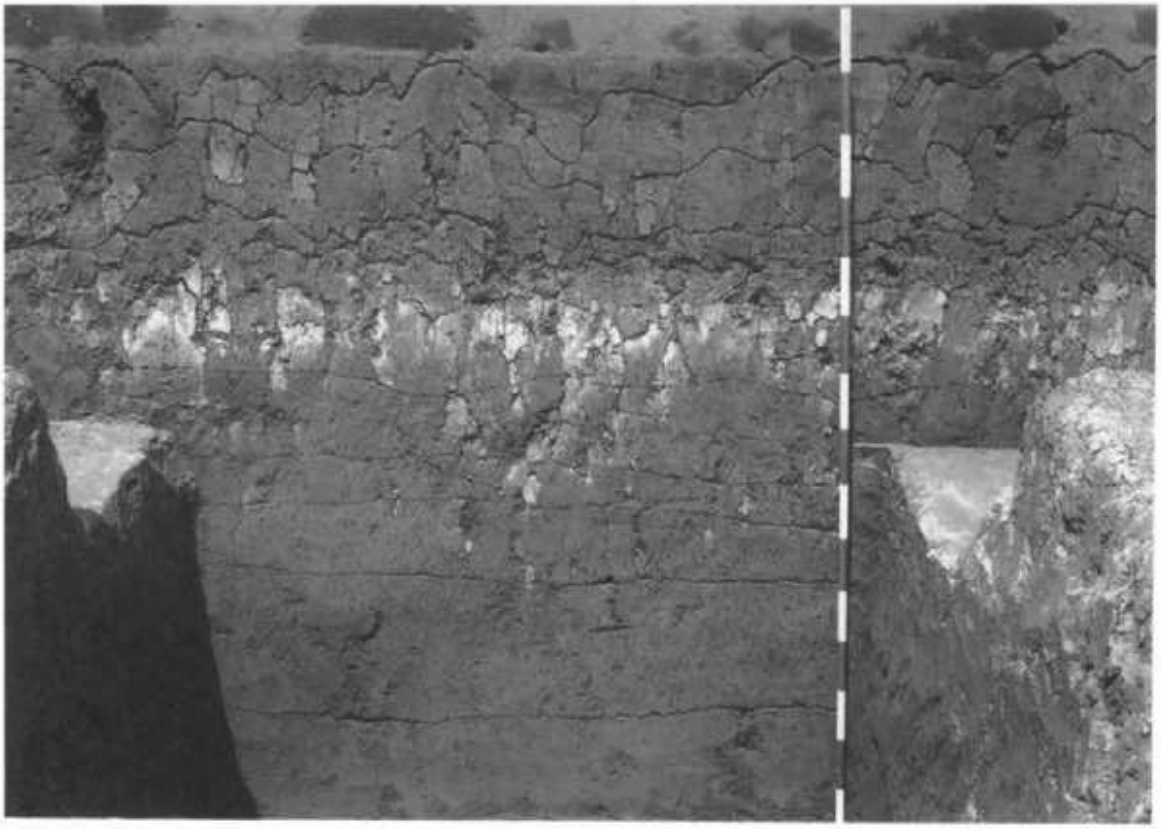
2（D6-02）

3（B7）

3．出土遺物

1．遺跡遠景

2．確認トレンチ



1．E2-32グリット断面

2．E２区先土器時代遺物出土状況

1．B３区先土器時代遺物出土状況

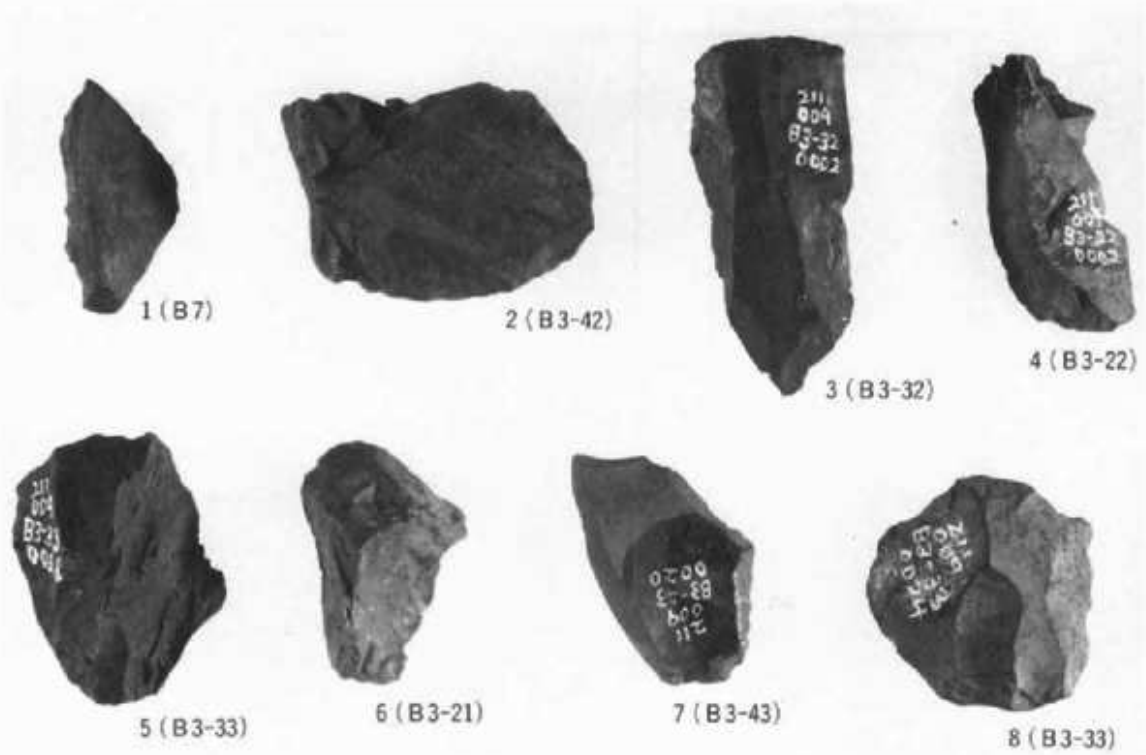
2．B３区先土器時代遺物出土状況

1．B３区先土器時代遺物出土状況

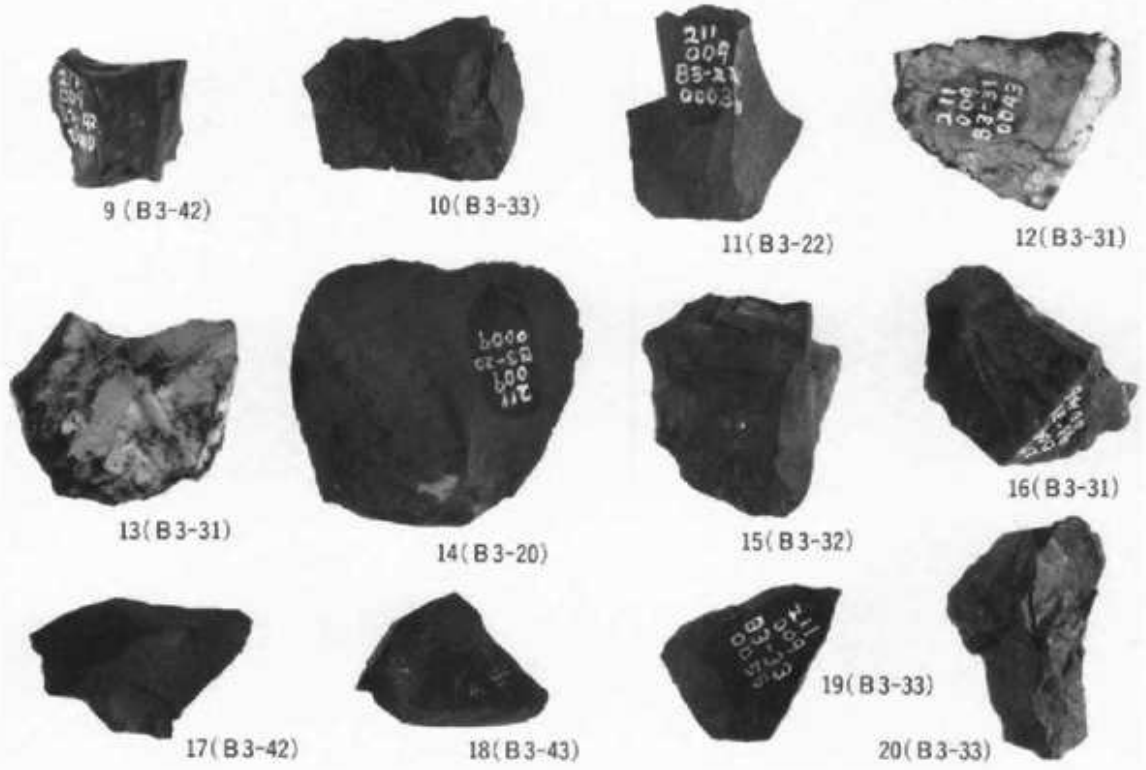
2．E２区先土器時代遺物出土状況

1．001号住居跡

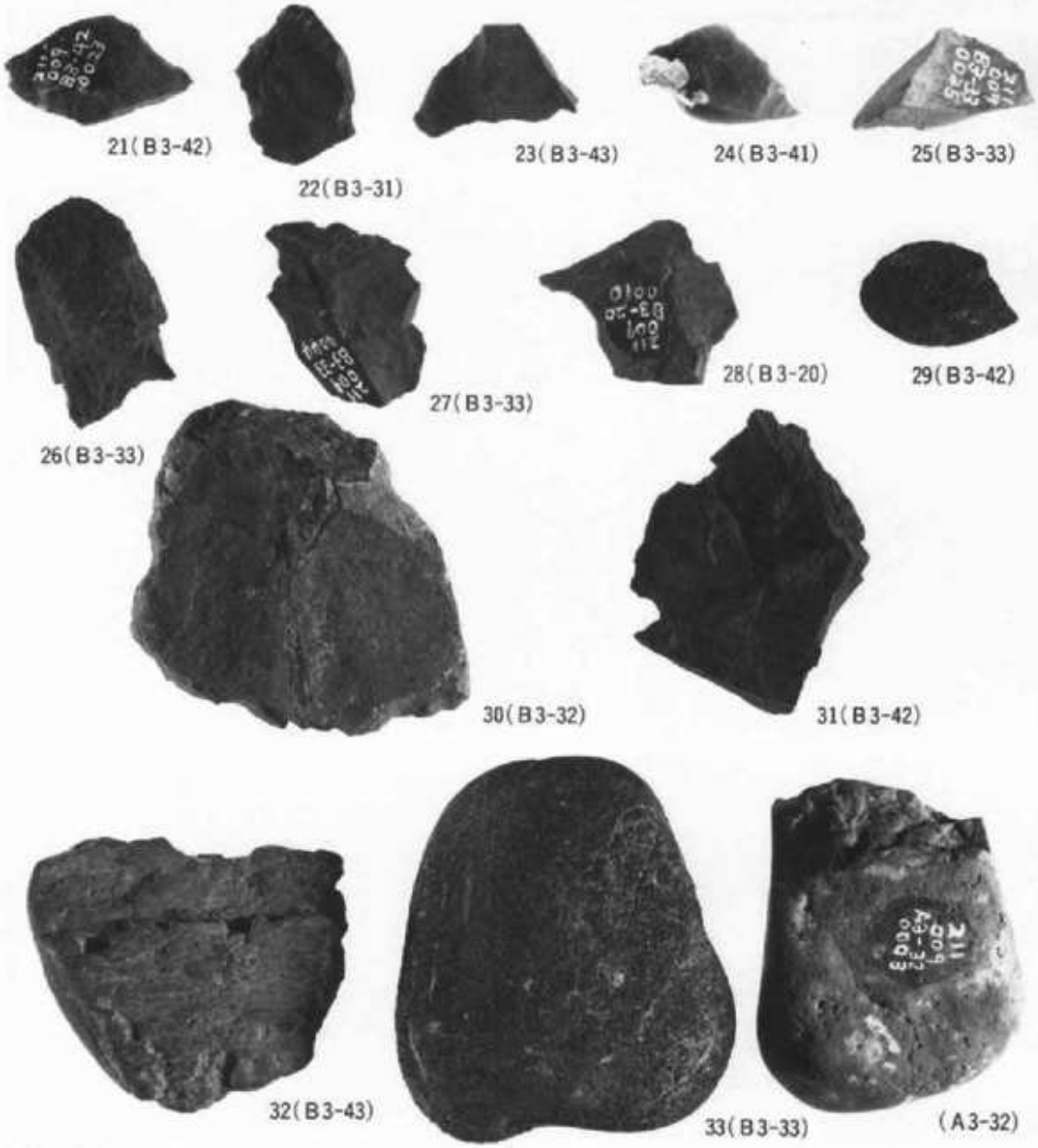
2．001号住居跡炭化材検出状況



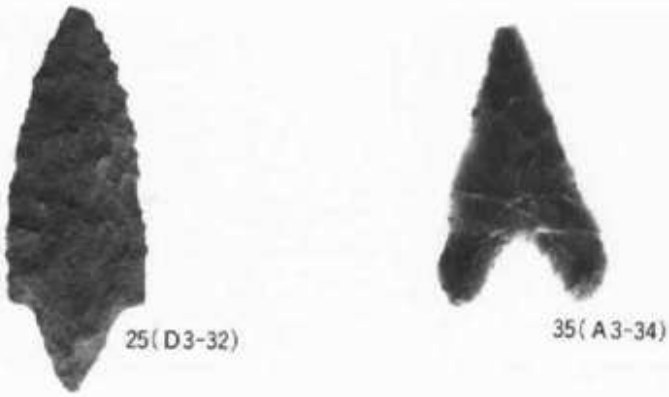
先土器時代出土石器



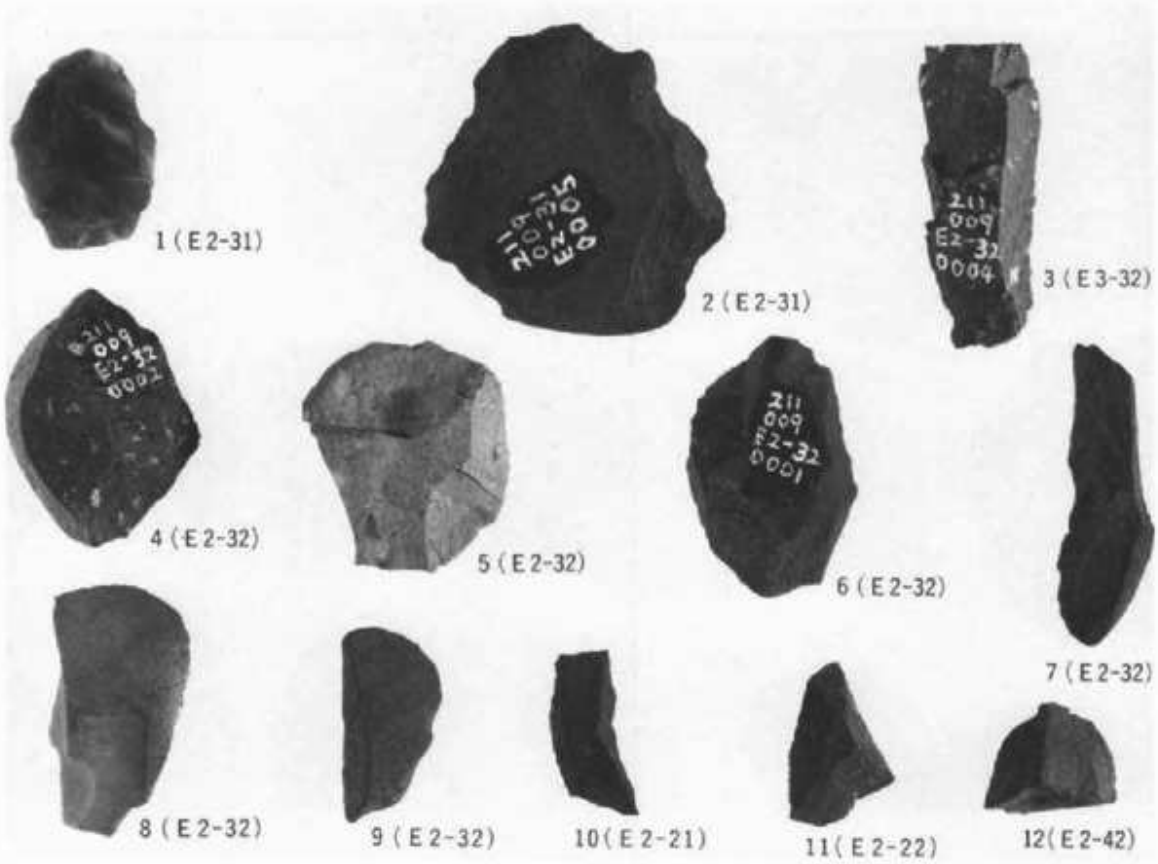
先土器時代出土石器



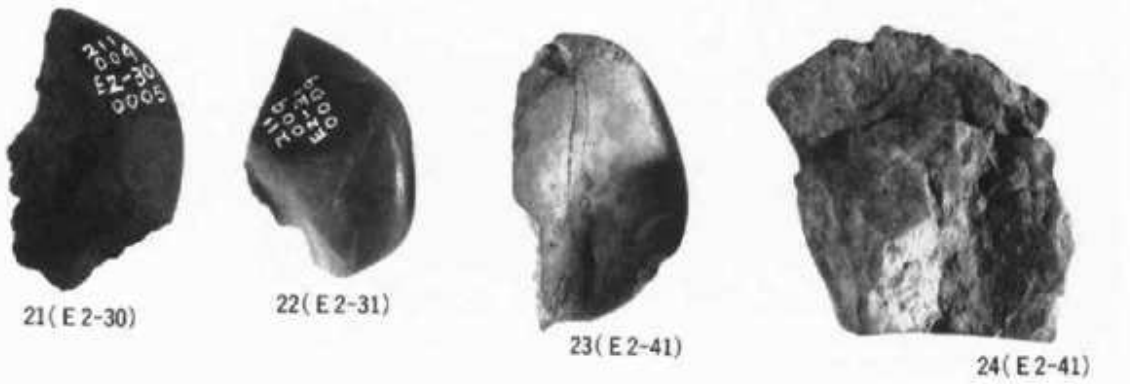
先土器時代出土石器



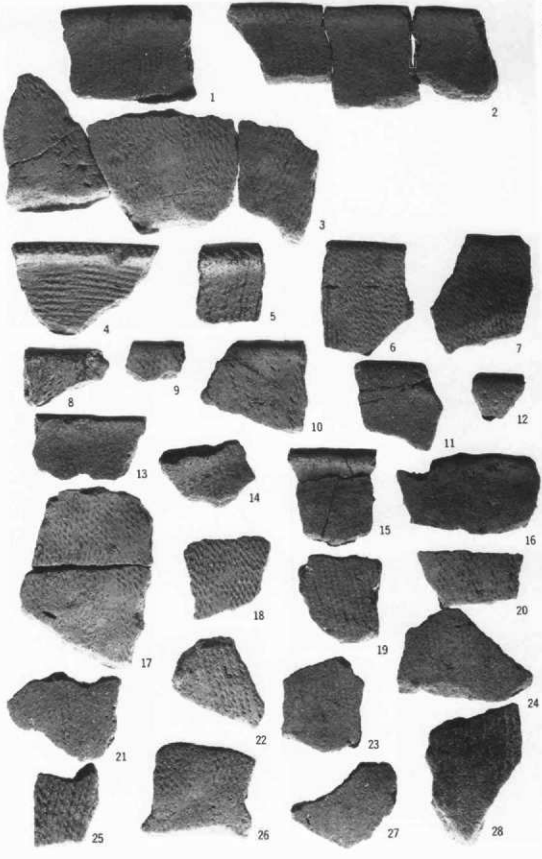
グリット出土石器


1（E2-31）
2（E2-31）
3（E3-32）
4（E2-32）
5（E2-32）
6（E2-32）
7（E2-32）
8（E2-32）
9（E2-32）
10（E2-21）
11（E2-22）
12（E2-42）

13（E2-22）
14（E2-32）
15（E2-22）
16（E2-41）
17（E2-41）
18（E2-41）
19（E2-31）
20（E2-21）


21（E2-30）
22（E2-31）
23（E2-41）
24（E2-41）

先土器時代出土石器



グリット出土縄文土器

1．遺跡近景

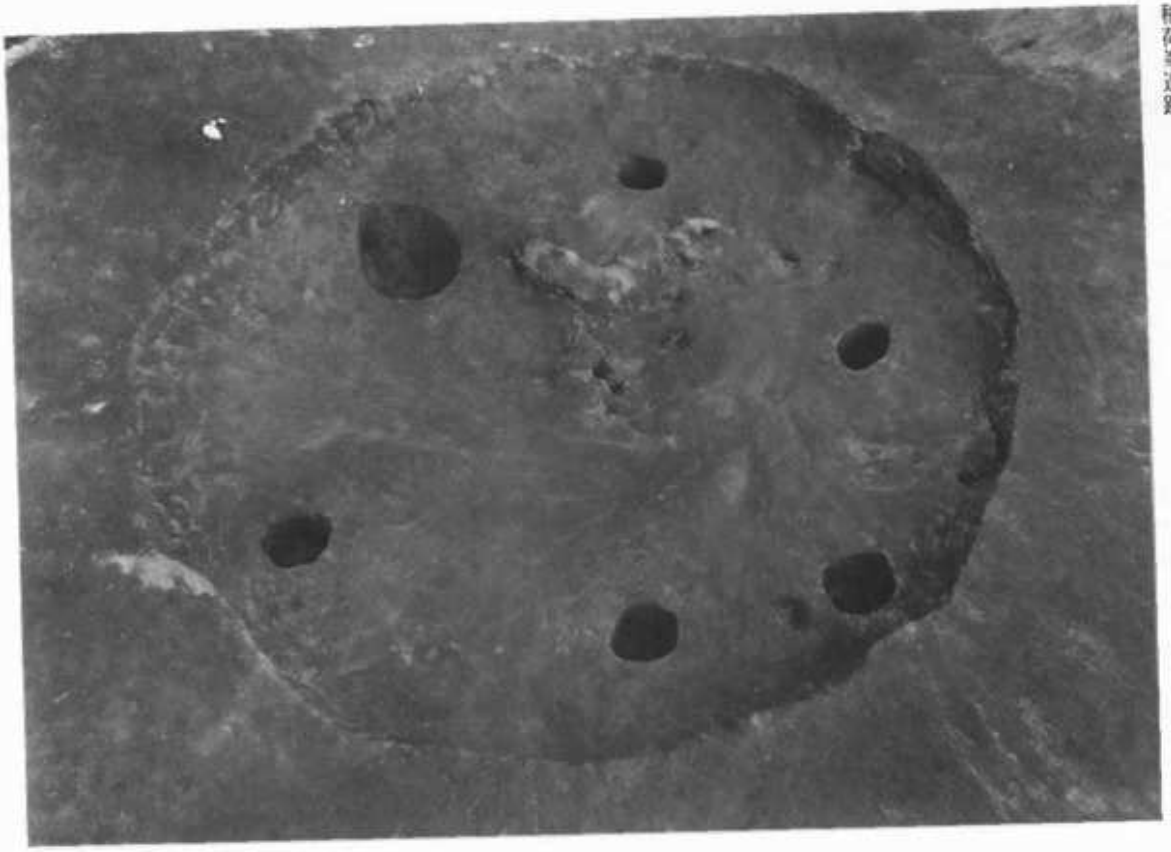
2．C３区断面

1．D 3 区住居跡群(001～005)

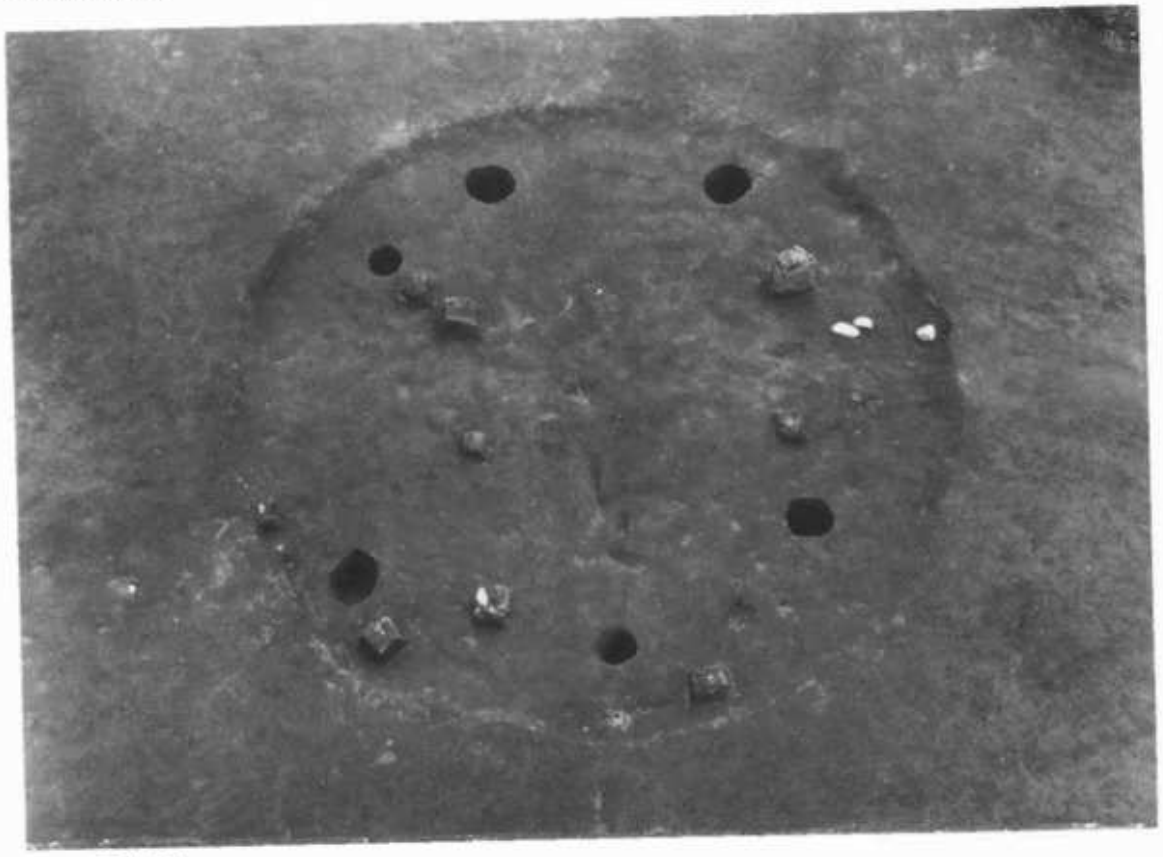
2．D 3 区住居跡群(001～005，008)

1．001A号住居跡

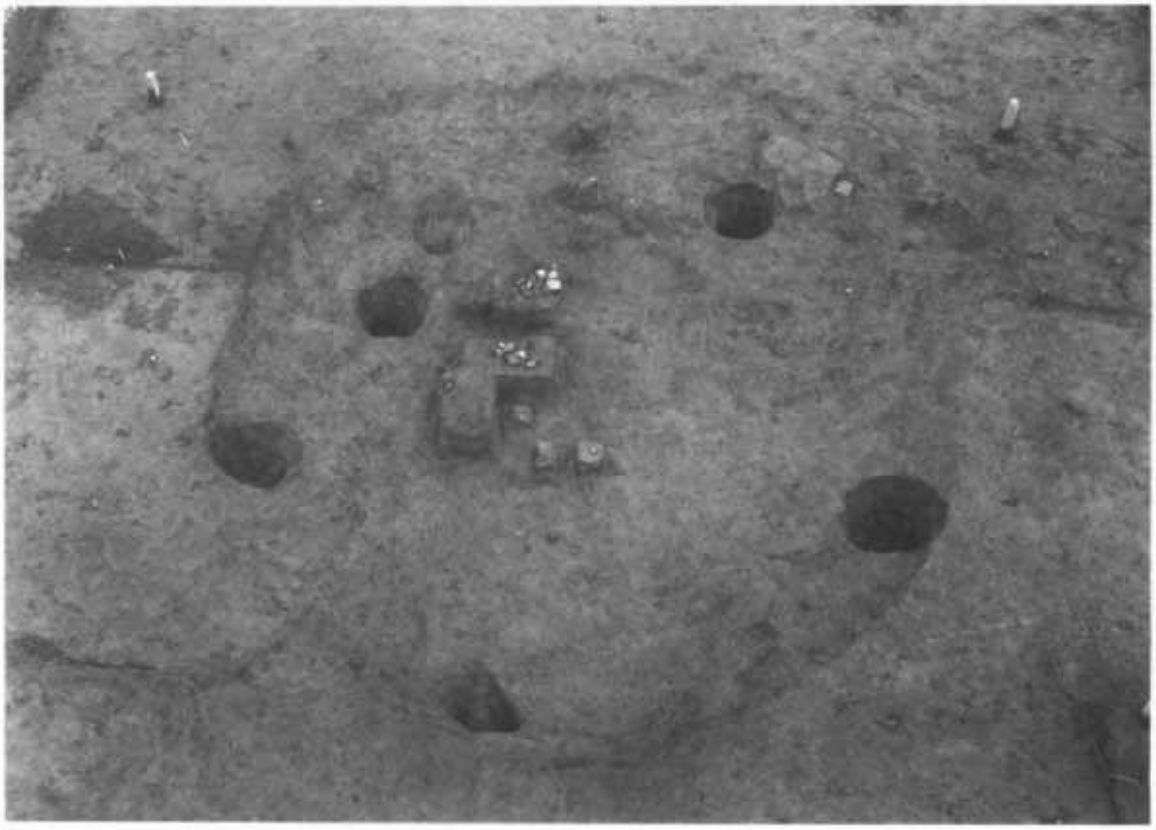
2．001A・B号住居跡



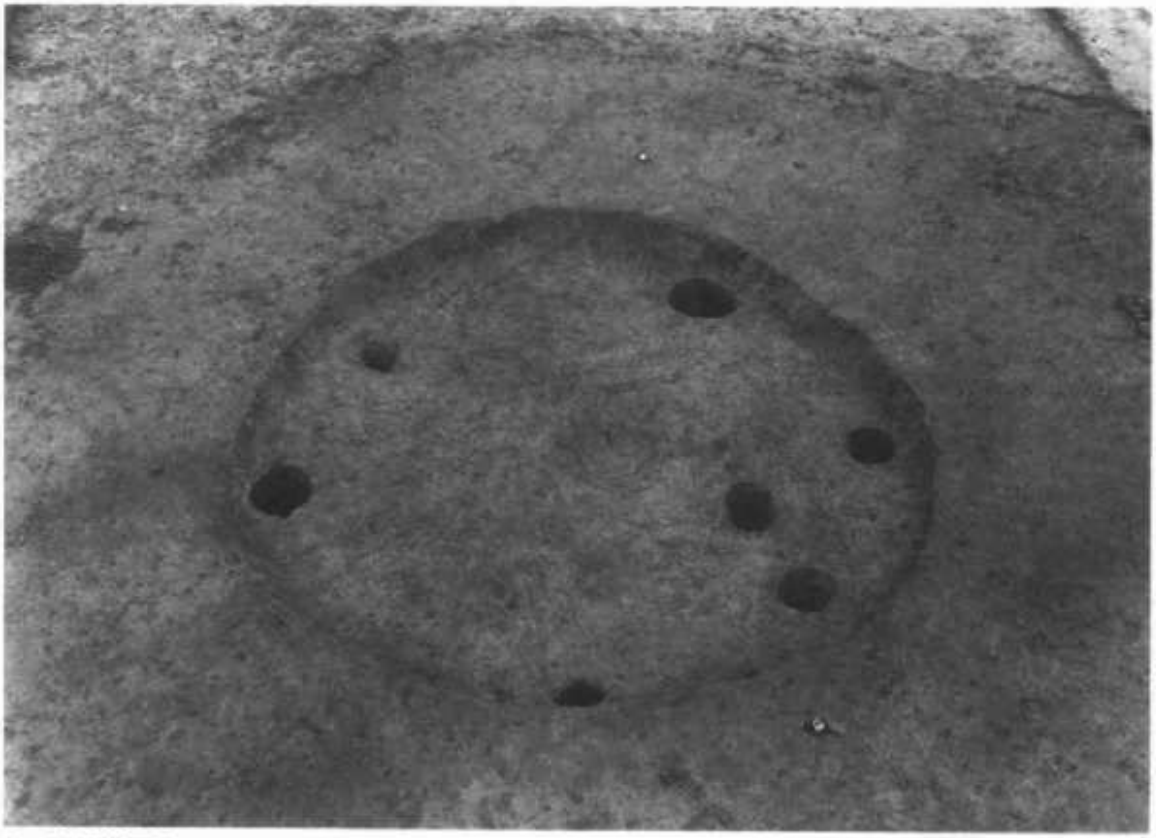
1．002号住居跡



2．003号住居跡



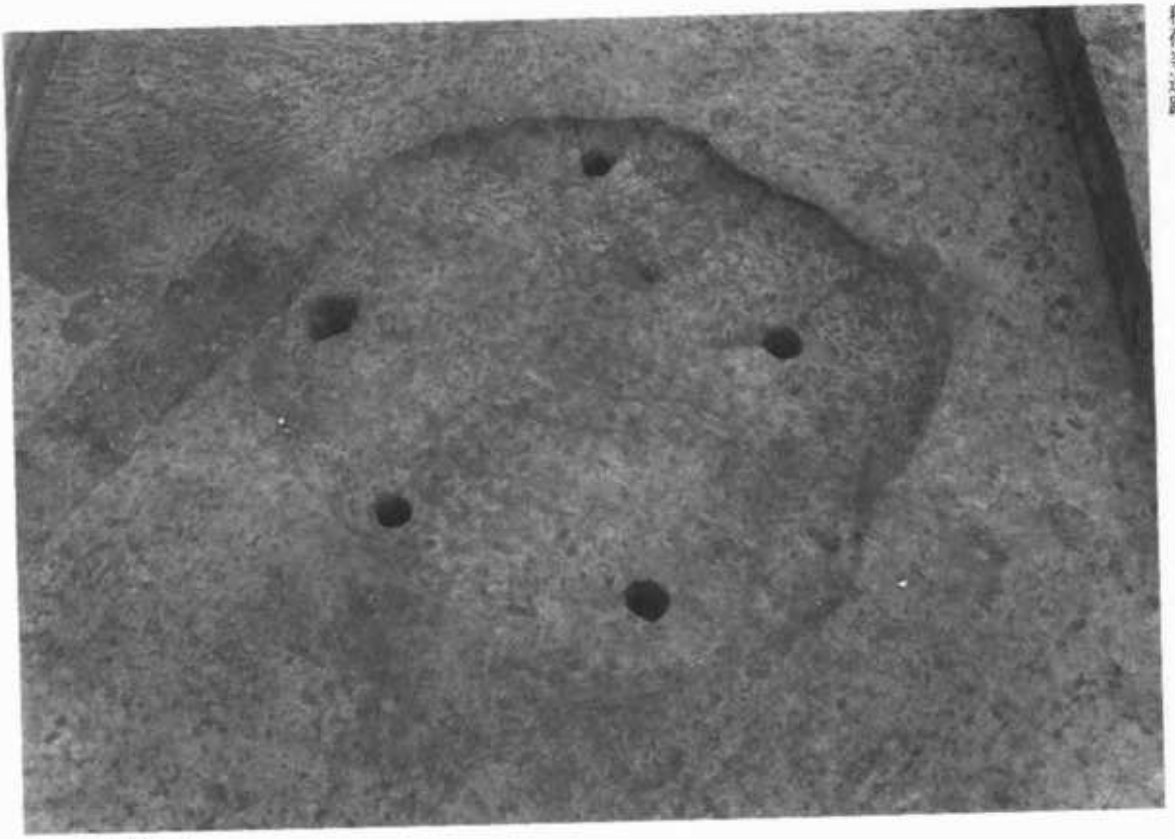
1．004号住居跡



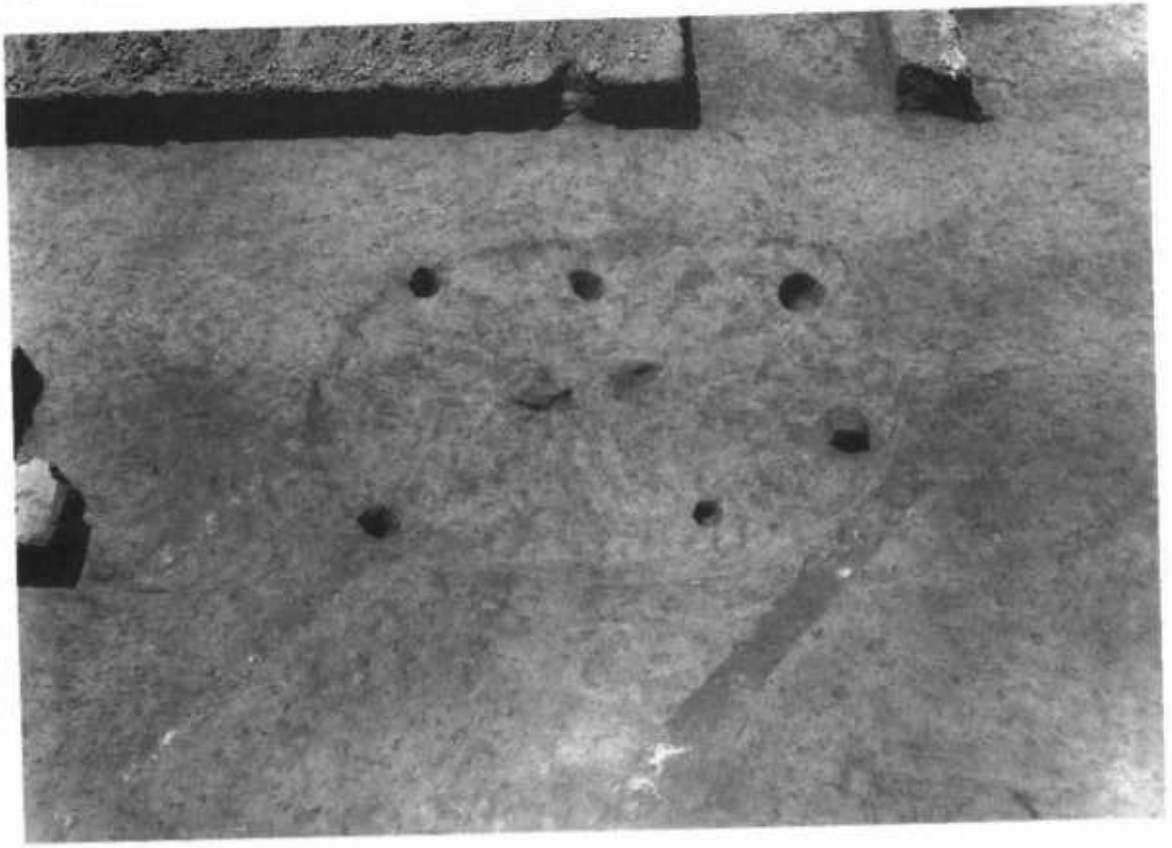
2．005号住居跡

1．005号住居跡断面

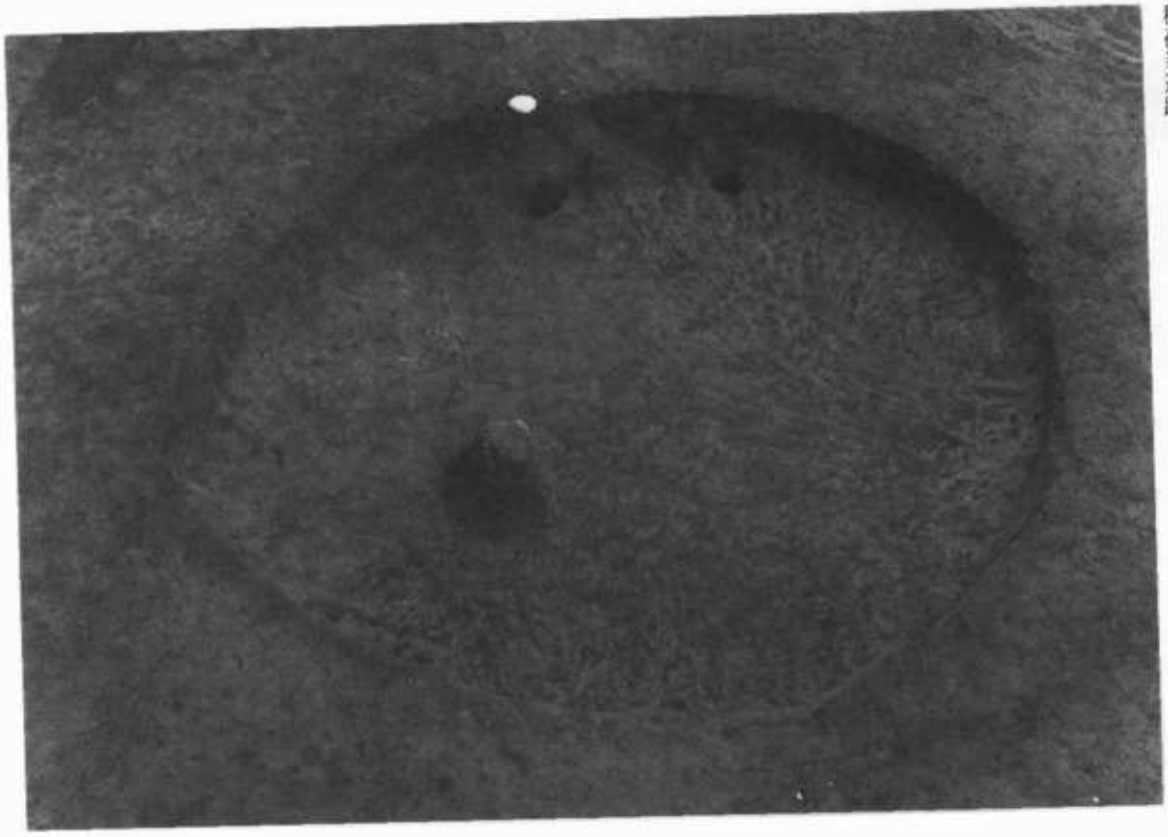
2．006号住居跡



1．007号住居跡



2．008号住居跡

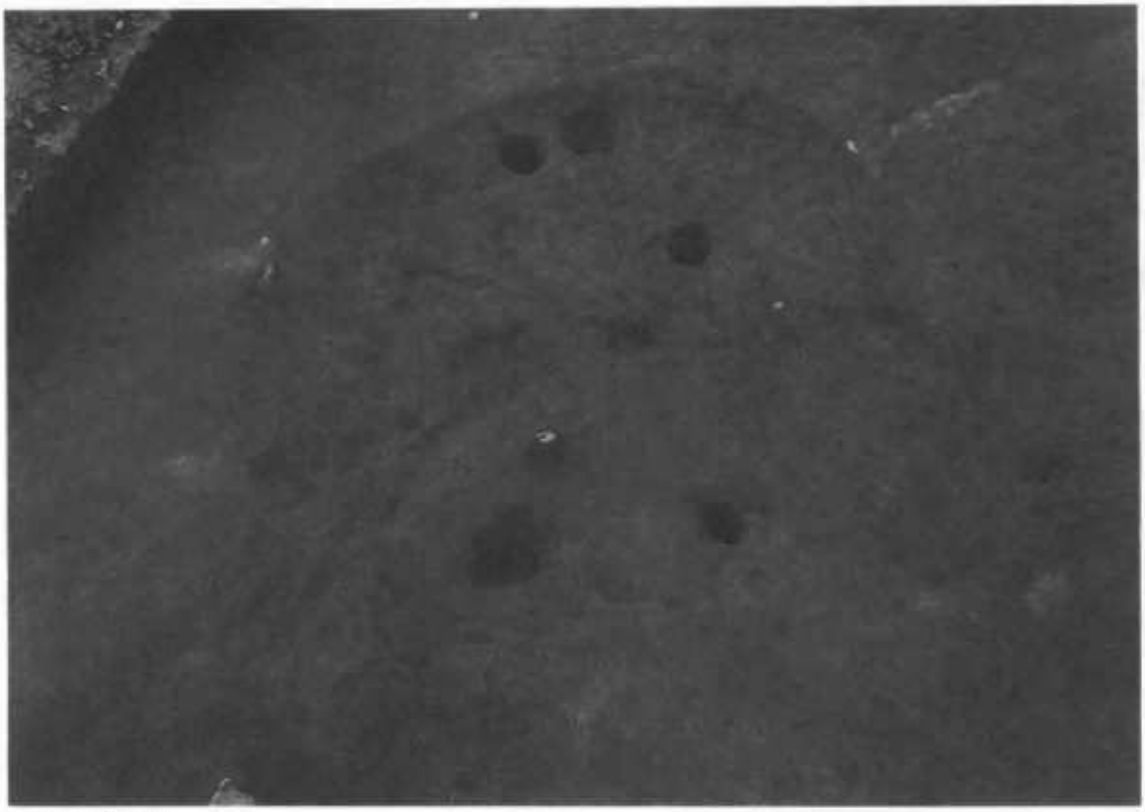


1．009号住居跡

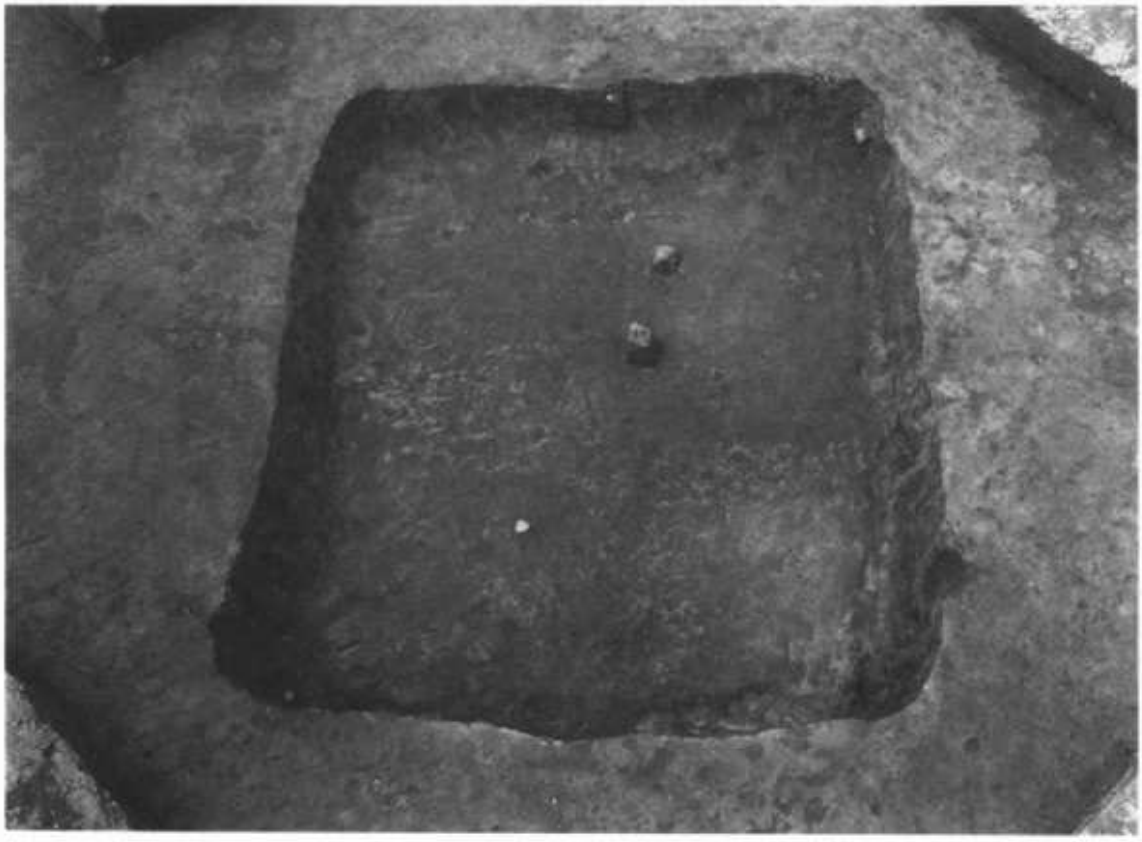
2．011号住居跡

1．012号住居跡

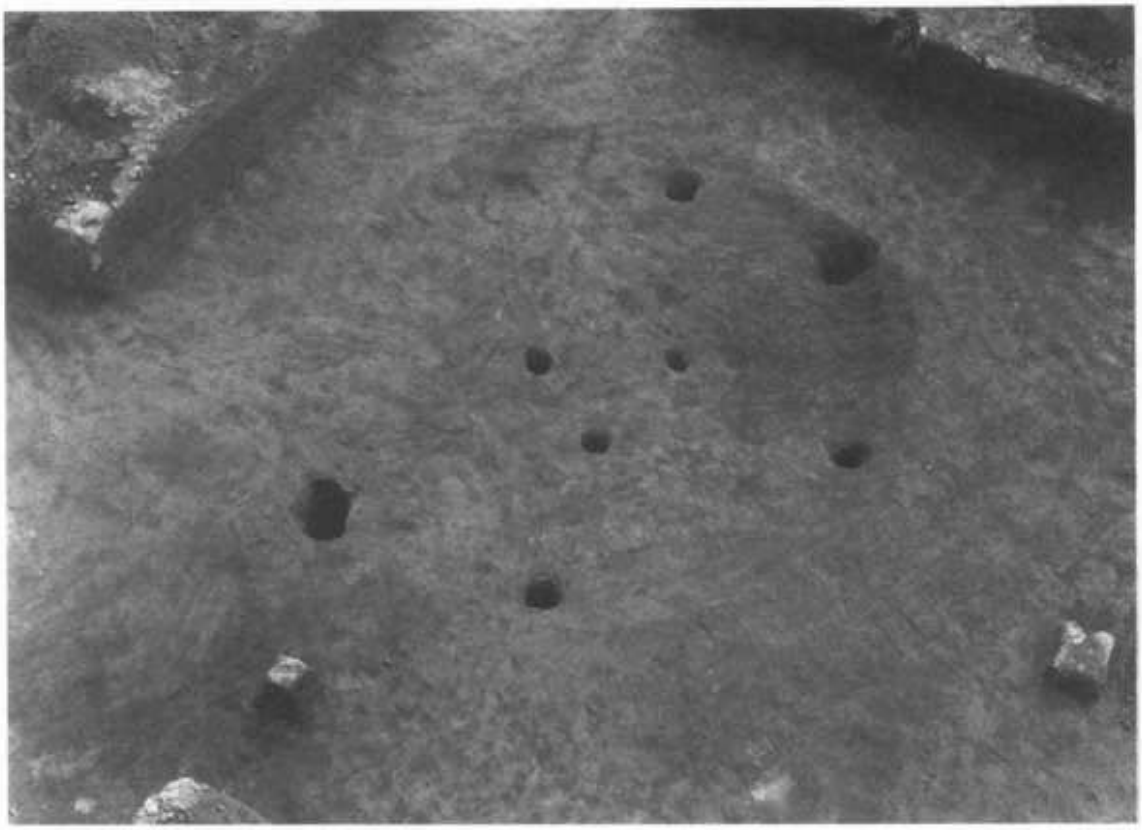
2．013号住居跡



1．014号住居跡



2．015号住居跡



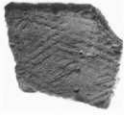
1．016号住居跡

2．J3-02グリット遺物出土状況

1．I4区遺物出土状況

2．M1，M2区遺物出土状況

1 (004)



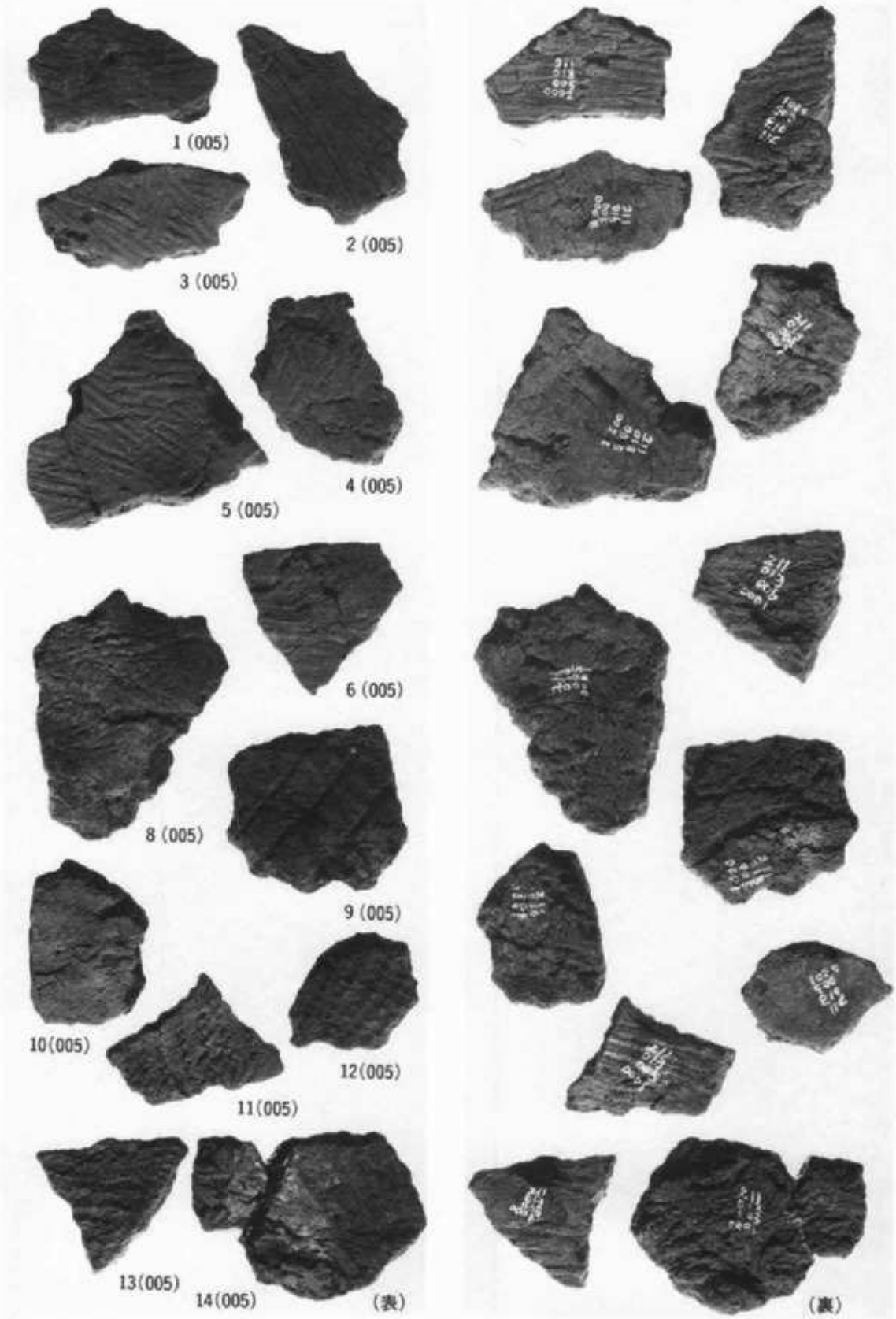
2 (004)

3 (004)

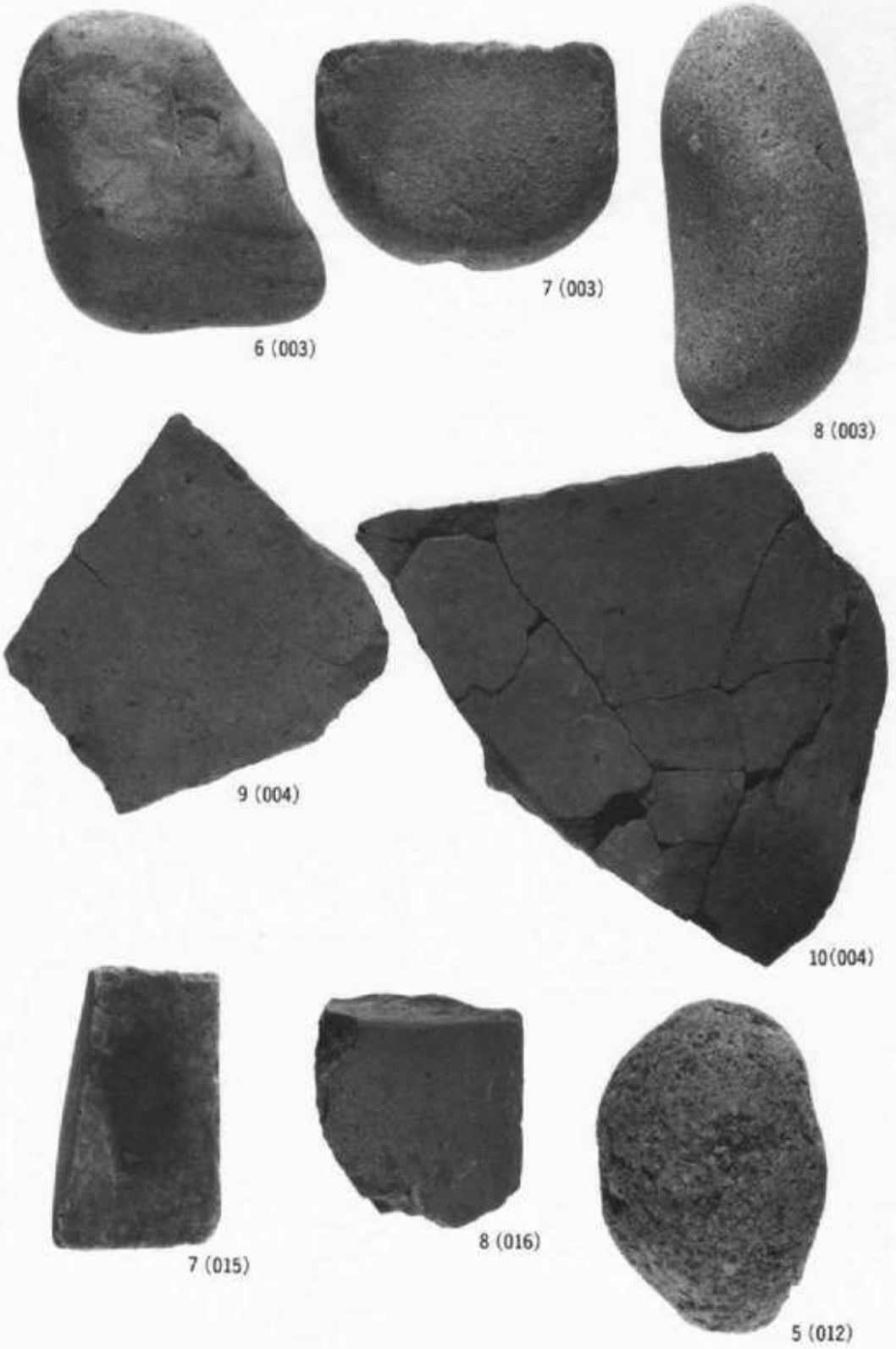
4 (004)

5 (004)

住居跡出土縄文土器


1 (005)
2 (005)
3 (005)
4 (005)
5 (005)
6 (005)
8 (005)
9 (005)
10(005)
11(005)
12(005)
13(005)
14(005)
(表)
(裏)

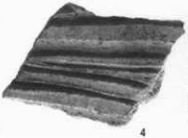
住居跡出土縄文土器



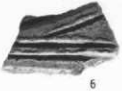
住居跡出土石器

1

3


4

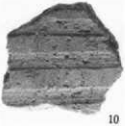
5


6

7

8

9


10

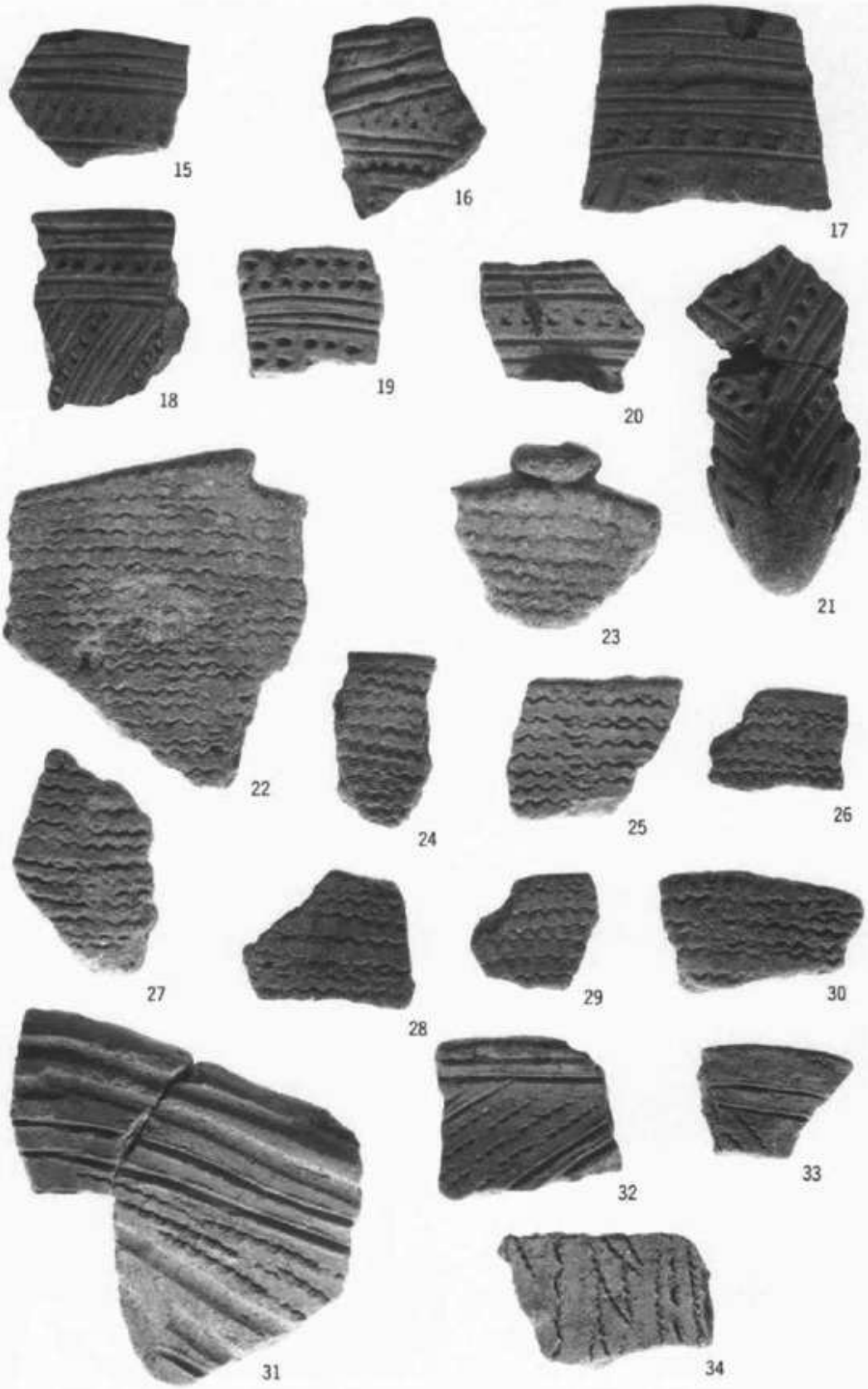
11

12

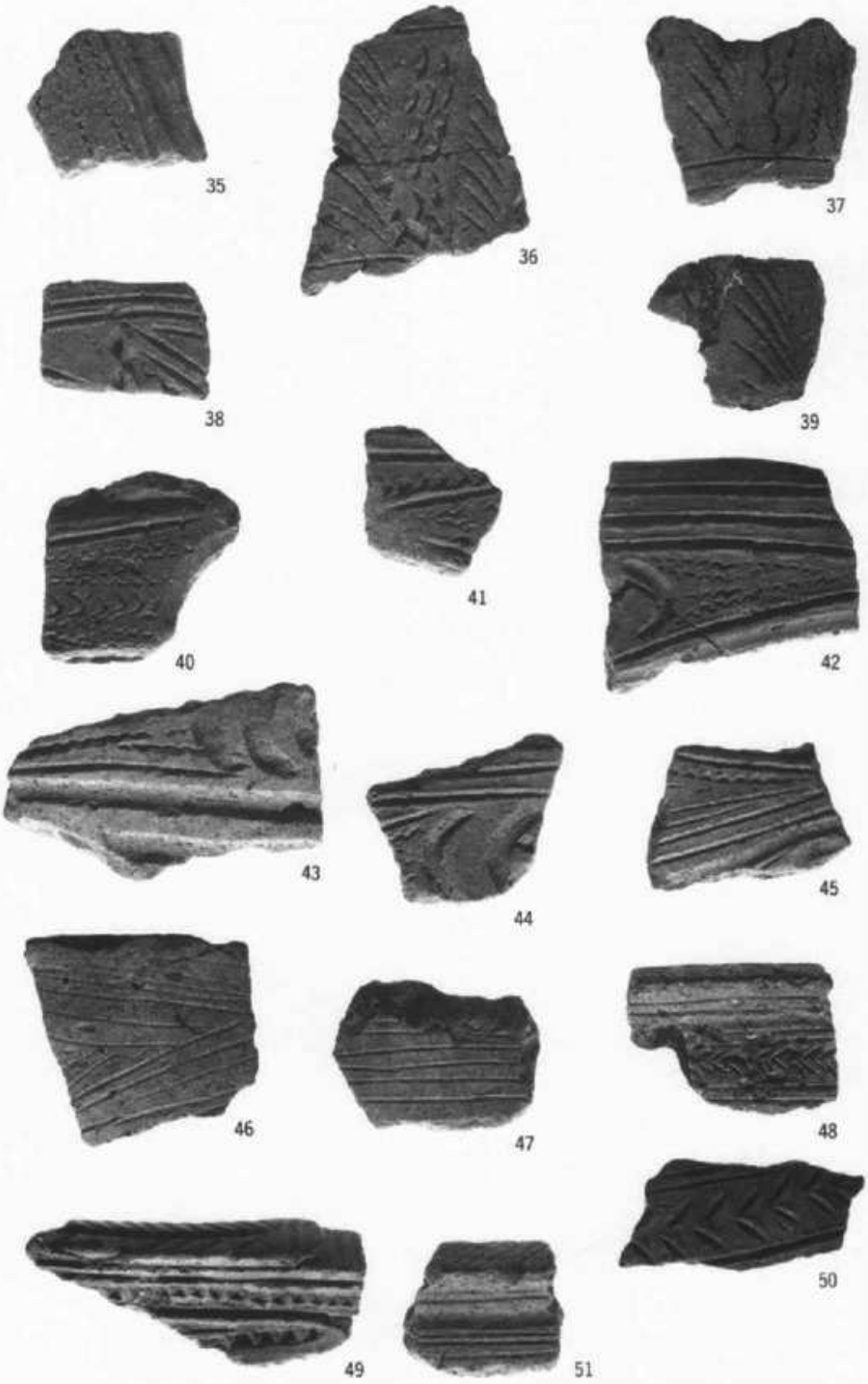
13

14

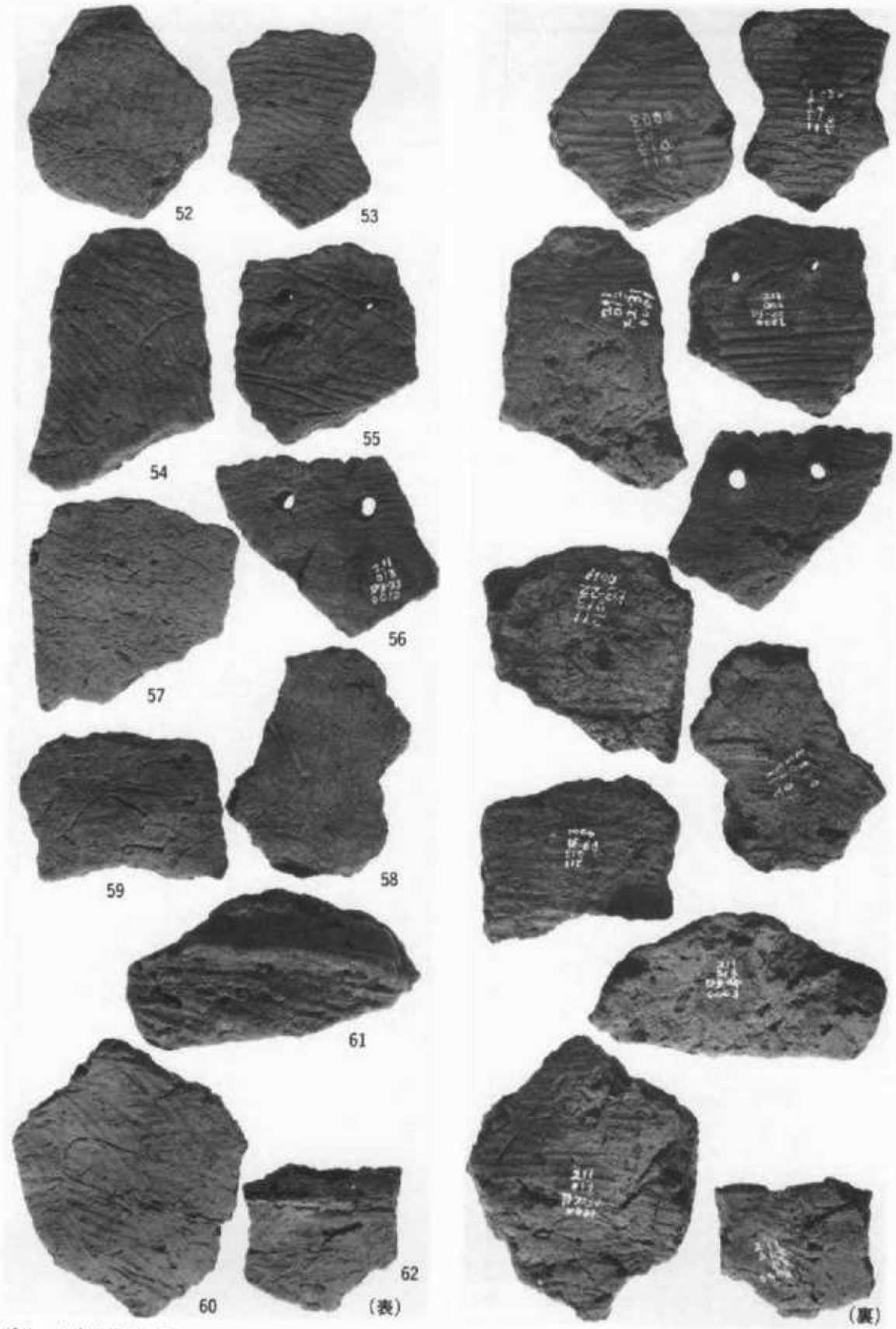
グリット出土縄文土器



グリット出土縄文土器



グリット出土縄文土器

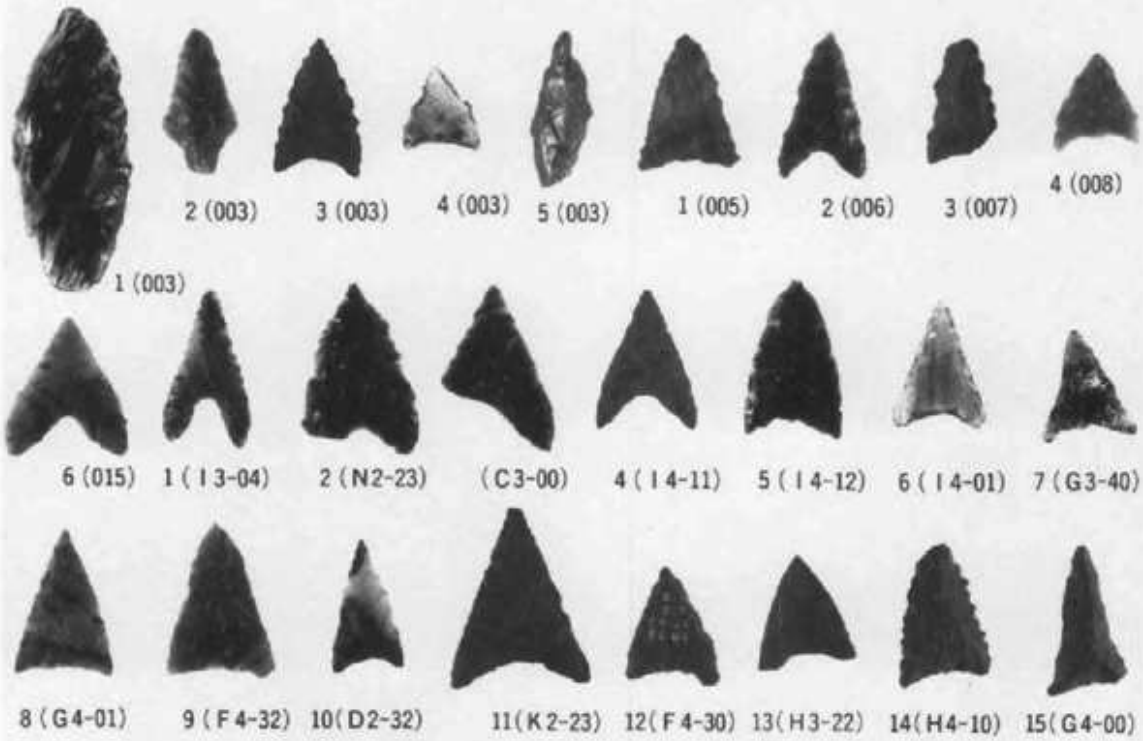


グリット出土縄文土器

67

68

グリット出土縄文土器



石器群

16(D4-14)

17(D4-14)

18(D3-13)

19(E3-30)

20(H3-22)

21(F4-00)

グリット出土石器

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書 I

印　刷　　昭和60年 3 月20日
発　行　　昭和60年 3 月30日

発　行　　日本道路公団東京第一建設局
　　東京都港区虎ノ門1－18－1　(03)502－7431
編　集　　財団法人　千葉県文化財センター
　　千葉市葛城2－10－1　(0472)25－6478
印　刷　　株式会社　太　陽　堂　印　刷　所
　　千葉市古市場474－266　(0472)22－1121(代)

東関東自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ　正誤表

頁	行	誤	正
挿図目次	第4図	～No. 52	～No. 53
5	第4図	～No. 52	～No. 53
10	5，6	網原古墳群	綱原古墳群
10	21	撚糸文系土器群	撚糸文系土器群
16	20	占部罪足	占部正足
17	7	主住調査研究員	主任調査研究員
83	9	…の東側に	…の西側に
149	5	大規模のものが	大規模のもので
165	19	東西から	南西から
175	第4表 005	91,960	41,960
206	16	銅製の把手	銅製の鉸具
206	31	加えた現形	加えて現形
213	3	多くの危検性	多くの危険性
221	26	この土提は	この土堤は
253	15	そのほかに	そのなかに
273		四本木遺跡(No. 4)	四本木遺跡(No. 5)
315	2	P1…, P2…, P3…	P6…, P7…, P8…
325	30，32	貝殻復縁文	貝殻腹縁文